

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

- 7 -

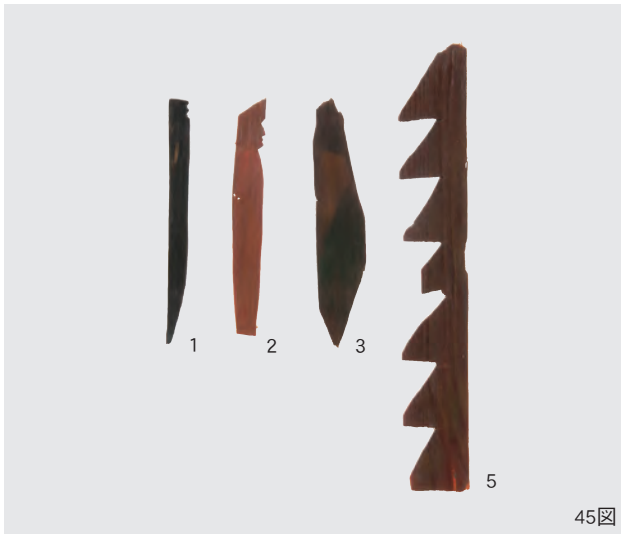
福岡県築上郡上毛町大字緒方・安雲所在遺跡の調査

ハカノ本遺跡 2・3次調査

安雲山田遺跡 1地点

2013

九州歴史資料館



1. 1区1号溝状遺構出土斎串・形代



2. 同漆椀



3. 同出土絵馬(表)



4. 同(裏)



ハカノ本遺跡2次調査2区全景(上空から)

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成20年度から23年度にかけて行った、築上郡上毛町緒方・安雲に所在するハカノ本遺跡2・3次調査、安雲山田遺跡1地点の調査の記録です。

ハカノ本遺跡と安雲山田遺跡は、上毛町南部の松尾山から延びる丘陵の先端に立地しています。今回の調査では、ハカノ本遺跡からは形代や絵馬が出土し、奈良時代から鎌倉時代にかけての建物群と、鎌倉時代から室町時代の土豪クラスの居館の一部と考えられる堀が発見されました。

安雲山田遺跡1地点からは、谷部分から弥生時代中期と飛鳥時代の土器と共に大量の木と建築部材などの木製品が出土し、貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

平成25年3月31日

九州歴史資料館
館長 西谷 正

例言

1. 本書は東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県築上郡上毛町大字緒方に所在するハカノ本遺跡2・3次調査と、大字安雲に所在する安雲山田遺跡1地点の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第7集にあたる。
2. 発掘調査は西日本高速株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。
3. ハカノ本遺跡2・3次調査は東九州自動車道中津工事事務所管内の第35地点、安雲山田遺跡1地点は第37地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は秦憲二・小川泰樹・宮田剛が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真撮影は九州航空株式会社・東亜航技研株式会社に委託した。なお、写真2と図版46-2・3は上毛町教育委員会から提供を受けた。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、秦・小川・荻・宮田が行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した路線図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「中津」を、分布図は1/25,000地形図「中津」「土佐井」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織変更のため、九州歴史資料館に移管された。
10. III 1(4)の獣骨の同定は株式会社パレオ・ラボに委託し、木製品の樹種鑑定については九州歴史資料館文化財調査室保存管理班小林啓が行った。
11. 本書のIII(2)⑤の石器の一部と2は宮田が、III 1(4)はパレオ・ラボ中村賢太郎が、III 3については小川が執筆した。その他の執筆・編集は秦憲二が行った。

目次

巻頭図版	
序	
例言	
目次	
図版目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	4
3. 調査・整理の組織	4
II. 位置と環境	6
III. 発掘調査の記録	9
1. ハカノ本遺跡2次調査	9
(1) 1区の遺構と遺物	10
①掘立柱建物跡	10
②柵跡	30
③土坑	33
④井戸	42
⑤溝状遺構	48
⑥その他の遺構と遺物	90
(2) 2区の遺構と遺物	93
①掘立柱建物跡	93
②柵跡	129
③土坑	140
④溝状遺構	144
⑤その他の遺構と遺物	146
(3) まとめ	151
(4) 自然科学系の分析	163
2. ハカノ本遺跡3次調査	165
(1) 調査の経過	165
(2) 調査の結果	165
3. 安雲山田遺跡	167
(1) 調査の経過	167
(2) 遺構と遺物	167
①掘立柱建物跡	167
②溝状遺構	168
③竪穴状遺構	184

④土坑	186
(3)小結	186

図版目次

巻頭図版 1	1. 1区1号溝状遺構出土斎串・形代	2. 同漆椀
	3. 同出土絵馬(表)	4. 同(裏)
巻頭図版 2	ハカノ本遺跡2次調査2区全景(上空から)	
図版 1	1. ハカノ本遺跡2次調査遠景(東から)	2. 同1区全景(上空から)
図版 2	1. 1～3号掘立柱建物跡、2・4・7号柵跡、9・22号土坑(上空から)	
	2. 8号掘立柱建物跡(南西から)	
図版 3	1. 4・5・9・14号掘立柱建物跡(西から)	
	2. 9・11～14号掘立柱建物跡、1号柵跡(南上空から)	
図版 4	1. 10号掘立柱建物跡(北東から)	2. 17号掘立柱建物跡(東から)
	3. 16・18号掘立柱建物跡、3a・3b号柵跡、4・5号溝状遺構(南上空から)	
	4. 1号掘立柱建物跡柱3土層(北から)	
	5. 2号掘立柱建物跡柱2土層(北から)	
図版 5	1. 1号土坑(南西から)	2. 2号土坑(西から)
	3. 3号土坑(西から)	4. 同左遺物出土状況(北西から)
	5. 同上土層1(南西から)	6. 同左2(北東から)
	7. 4号土坑(北から)	8. 同左土層(北から)
図版 6	1. 5号土坑(北東から)	2. 同左土層(北から)
	3. 6号土坑(南から)	4. 7号土坑(北西から)
	5. 8号土坑(南西から)	6. 同左土層(西から)
	7. 10号土坑(北西から)	8. 同左土層(南から)
図版 7	1. 11号土坑(北西から)	2. 12号土坑(南から)
	3. 13号土坑(南西から)	4. 同左土層(北東から)
	5. 14号土坑(上空から)	6. 15号土坑(南から)
	7. 15号土坑遺物出土状況(東から)	8. 同上土層(北東から)
図版 8	1. 16号土坑(南東から)	2. 17・27号土坑(北から)
	3. 19・20号土坑(北から)	4. 21号土坑(北東から)
	5. 21号土坑焼土・炭化物出土状況(東から)	6. 23号土坑(南から)
	7. 24号土坑(南西から)	8. 25・26号土坑(北西から)
図版 9	1. 1号井戸貼石検出状況(南西から)	2. 同左貼石除去状況(南から)
	3. 2号井戸(西から)	4. 同左土層(西から)
	5. 3号井戸(南東から)	6. 同左土層(西から)
	7. 同上遺物出土状況(東から)	
図版10	1. 4号井戸(北東から)	2. 同左遺物出土状況(北西から)
	3. 5号井戸(北から)	
	4. 1号溝状遺構東端遺物出土状況(東から)	
	5. 1号溝状遺構西端集石検出状況(西から)	6. 1号溝状遺構土層(東から)

- 図版11 1. 1号溝状遺構集石下の曲げ物等木製品出土状況(南東から)
 2. 同人形・カヤ・曲げ物底板等木製品出土状況(北西から)
 3. 同漆椀・杭・板材等木製品出土状況(南東から)
- 図版12 1. 1号溝状遺構西半部木製品出土状況(西から) 2. 同箱部材出土状況(北から)
 3. 同下駄・棒状部材出土状況(南東から)
 4. 同絵馬・形代・しゃもじ等木製品出土状況(南東から)
- 図版13 1区出土土器 1
- 図版14 1区出土土器 2
- 図版15 1区出土土器 3
- 図版16 1区出土土器 4
- 図版17 1区出土土器・陶磁器
- 図版18 1. 1区出土陶磁器・土製品 2. 同石製品
- 図版19 1区出土土製品 1
- 図版20 1区出土土製品 2
- 図版21 1区出土土製品 3
- 図版22 1区出土土製品 4
- 図版23 1区出土土製品 5
- 図版24 1区出土土製品 6
- 図版25 1区出土金属・ガラス・木製品
- 図版26 1区出土木製品 1
- 図版27 1区出土木製品 2
- 図版28 1区出土植物遺体・貝殻・鉄滓
- 図版29 1. 2区1号掘立柱建物跡・3号溝状遺構(上空から)
 2. 1号掘立柱建物跡柱1土層(北東から) 3. 同柱5土層(北東から)
 4. 同柱19(西から) 5. 同柱24土層(北東から)
- 図版30 1. 1～4・30号掘立柱建物跡、3・7・13・18・19号柵跡(上空から)
 2. 2号掘立柱建物跡(北西から) 3. 3号掘立柱建物跡(東から)
- 図版31 1. 5～7・10号掘立柱建物跡、5号柵跡(上空から)
 2. 6号掘立柱建物跡(南から)
- 図版32 1. 7・9・10・11号掘立柱建物跡、5号柵跡、5号土坑(上空から)
 2. 7・10号掘立柱建物跡(南から)
 3. 7号掘立柱建物跡柱4土層(東から) 4. 7号掘立柱建物跡(東から)
- 図版33 1. 9号掘立柱建物跡(東から) 2. 同左柱1土層(西から)
 3. 12・13・15・18・32号掘立柱建物跡、12・23号柵跡・2号溝状遺構(上空から)
- 図版34 1. 14号掘立柱建物跡(東から) 2. 同左柱2土層(北から)
 3. 15号掘立柱建物跡(南東から) 4. 同左柱1土層(北東から)
 5. 16号掘立柱建物跡(南から)
 6. 17a号掘立柱建物跡柱4土層(西から) 7. 18号掘立柱建物跡(東から)
 8. 同左柱7(東から)
- 図版35 1. 17・20～26号掘立柱建物跡、26・27号柵跡(上空から)
 2. 19号掘立柱建物跡(南から)
 3. 20号掘立柱建物跡柱5土層(北東から)

- 図版36 1. 22・27号掘立柱建物跡、21・22号柵跡(上空から)
2. 22号掘立柱建物跡柱10土層(南から) 3. 27号掘立柱建物跡(南から)
- 図版37 1. 28号掘立柱建物跡、16・17号柵跡(上空から)
2. 26号掘立柱建物跡柱4土層(南西から) 3. 29号掘立柱建物跡(南から)
4. 2・30号掘立柱建物跡、2・4・13号柵跡(上空から)
- 図版38 1. 1号柵跡柱4土層(西から) 2. 同左柱2土層(西から)
3. 5号柵跡柱1土層(西から) 4. 10号柵跡柱1土層(西から)
5. 10号柵跡(西から) 6. 11号柵跡(南から)
7. 14号柵跡(西から)
- 図版39 1. 21・22号柵跡(北西から) 2. 22号柵跡柱2土層(東から)
3. 18・19・20・24・28号柵跡(上空から) 4. 22号柵跡柱1土層(東から)
5. 23号柵跡・1号溝状遺構(上空から)
- 図版40 1. 1号土坑(西から) 2. 1号土坑土層(南から)
3. 2号土坑(南から) 4. 3号土坑(東から)
5. 4号土坑(東から) 6. 同左土層(東から)
7. 6号土坑(西から) 8. 同左土層(西から)
- 図版41 1. 7号土坑(北西から) 2. 同左土層(東から)
3. 8号土坑(西から) 4. 同左土層(北東から)
5. 10号土坑(西から) 6. 11号土坑(南から)
7. 7・11号土坑土層(南から) 8. 12号土坑(南西から)
- 図版42 1. 14号土坑(南から) 2. 同上土層(南から)
3. 15号土坑土層(南東から)
4. ピット1遺物出土状況(北東から)
5. ピット17遺物出土状況(北から)
- 図版43 2区出土遺物
- 図版44 1. 3次調査南東側調査区(北西から) 2. 同北西側調査区(北から)
- 図版45 1. 安雲山田遺跡全景(北西上空から) 2. 1～3区全景(上空から)
3. 3区全景(上空から)
- 図版46 1. 4区全景(上空から) 2. 3～5区全景(上空から)
3. 安雲山田遺跡全景(南東上空から)
- 図版47 1. 1号掘立柱建物跡(北東から) 2～7. 同柱掘形断面土層
- 図版48 1～4. 1号掘立柱建物跡柱掘形断面土層
5. 3区1号溝状遺構(南東から) 6. 同断面土層(南東から)
- 図版49 1. 1号溝状遺構木材出土状況(西から) 2. 同4区断面土層(南東から)
3～6. 同遺物出土状況
- 図版50 1～8. 1号溝状遺構遺物出土状況
- 図版51 1・2. 1号溝状遺構遺物出土状況 3. 1号竪穴遺構(南西から)
4. 同断面土層(北西から) 5. 同断面土層(南西から)
- 図版52 1. 2号竪穴状遺構(東から) 2. 同断面土層(北西から)
3. 同断面土層(西から) 4. 同断面土層(北から)
- 図版53 1. 1号土坑(南から) 2. 同断面土層(南から)
3. 2号土坑(南から) 4. 同断面土層(南から)

- 図版54 出土土器 1
- 図版55 出土土器 2
- 図版56 出土土器 3
- 図版57 出土土器 4
- 図版58 出土土器 5・瓦
- 図版59 出土木製品
- 図版60 出土石器・石製品・土製品

挿図目次

第1図	ハカノ本遺跡・安雲山田遺跡位置図	1
第2図	東九州道中津工事区調査地点位置図(1/10,000)	2
第3図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	7
第4図	周辺地形と調査範囲図(1/6,000)	9
第5図	ハカノ本遺跡2次調査1区遺構配置図(1/300)	11
第6図	1区1号掘立柱建物跡実測図(1/80)	13
第7図	1区1号掘立柱建物跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)	15
第8図	1区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)	16
第9図	1区3号掘立柱建物跡・7号柵跡実測図(1/60)	17
第10図	1区4号掘立柱建物跡実測図(1/60)	18
第11図	1区5号掘立柱建物跡実測図(1/60)	19
第12図	1区8・9号掘立柱建物跡実測図(1/60)	20
第13図	1区10号掘立柱建物跡実測図(1/60)	21
第14図	1区11～13号掘立柱建物跡・1号柵跡実測図(1/80)	23
第15図	1区14・15号掘立柱建物跡実測図(1/60)	24
第16図	1区2～5・8・13～15号掘立柱建物跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)	25
第17図	1区16号掘立柱建物跡実測図(1/80)	26
第18図	1区17・18号掘立柱建物跡実測図(1/60)	27
第19図	1区22・24号掘立柱建物跡実測図(1/80)	28
第20図	1区23号掘立柱建物跡・6号柵跡実測図(1/60)	29
第21図	1区16・18・23号掘立柱建物跡、2・3b・6号柵跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)	30
第22図	1区2～5号柵跡実測図(1/60)	32
第23図	1区1～9号土坑跡実測図(1/60)	35
第24図	1区10～15号土坑跡実測図(2は1/30、1/60)	37
第25図	1区1～5・8・10号土坑出土土器・陶磁器実測図(22は1/4、他は1/3)	39
第26図	1区16～27号土坑跡実測図(1/60)	41
第27図	1区15・17・21・22・27号土坑出土土器・陶磁器実測図(7は1/4、他は1/3)	43
第28図	1区1～5号井戸跡実測図(1は1/30、他は1/60)	44
第29図	1区2・3号井戸出土土器・陶磁器実測図(1/3)	46
第30図	1区4号井戸出土土器・陶磁器実測図(1/3)	47
第31図	1区1・4号溝状遺構土層断面、1号溝状遺構集石検出状況、 ピット101・172実測図(4・5は1/30、他は1/60)	48

第32図	1区1号溝状遺構出土土器実測図1(1/3)	50
第33図	1区1号溝状遺構出土土器実測図2(1/3)	52
第34図	1区1号溝状遺構出土土器実測図3(1/3)	54
第35図	1区1号溝状遺構出土土器実測図4(1/3)	55
第36図	1区1号溝状遺構出土土器実測図5(1~5・9は1/3、他は1/4)	56
第37図	1区1号溝状遺構出土土器実測図6(2・7~9・11は1/3、他は1/4)	57
第38図	1区1号溝状遺構出土磁器実測図(1/3)	58
第39図	1区4~7号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)	59
第40図	1区ピット出土土器・陶磁器実測図(11・12は1/6、13は1/4、他は1/3)	60
第41図	1区遺構検出面・出土地不明土器・陶磁器実測図(1/3)	61
第42図	1区出土石製品実測図(1~3は1/2、他は1/3)	62
第43図	1区出土土・金属・ガラス製品実測図(17・19・20は1/2、他は1/3)	63
第44図	1区出土土錘分類図(1/2)	63
第45図	1区出土木製品実測図1(1/3)	80
第46図	1区出土木製品実測図2(1/3)	81
第47図	1区出土木製品実測図3(1は1/4、他は1/3)	82
第48図	1区出土木製品実測図4(1/3)	83
第49図	1区出土木製品実測図5(1/3)	84
第50図	1区出土木製品実測図6(1/3)	85
第51図	1区出土木製品実測図7(1/6)	86
第52図	1区出土木製品実測図8(1・2は1/6、他は1/12)	88
第53図	2区遺構配置図(1/300)	折込
第54図	2区1号掘立柱建物跡実測図(1/120)	95
第55図	2区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)	96
第56図	2区3号掘立柱建物跡、4・13号柵跡実測図(1/80)	98
第57図	2区4号掘立柱建物跡実測図(1/80)	99
第58図	2区5号掘立柱建物跡実測図(1/80)	100
第59図	2区6号掘立柱建物跡実測図(1/80)	101
第60図	2区7号掘立柱建物跡実測図(1/80)	102
第61図	2区8・33号掘立柱建物跡実測図(1/80)	104
第62図	2区9号掘立柱建物跡実測図(1/80)	105
第63図	2区10・11号掘立柱建物跡実測図(1/60)	106
第64図	2区12号掘立柱建物跡実測図(1/80)	107
第65図	2区13号掘立柱建物跡実測図(1/60)	108
第66図	2区14号掘立柱建物跡実測図(1/80)	109
第67図	2区15号掘立柱建物跡実測図(1/80)	110
第68図	2区16号掘立柱建物跡実測図(1/60)	111
第69図	2区17a・b号掘立柱建物跡実測図(1/80)	折込
第70図	2区18号掘立柱建物跡実測図(1/80)	113
第71図	2区19号掘立柱建物跡実測図(1/40)	114
第72図	2区20号掘立柱建物跡実測図(1/80)	115
第73図	2区1~3・7・9・11・12・15・16・18・20号掘立柱建物跡出土土器・	

	陶磁器実測図(1/3)	116
第74図	2区21号掘立柱建物跡実測図(1/80)	117
第75図	2区22号掘立柱建物跡実測図(1/40・80)	118
第76図	2区23号掘立柱建物跡実測図(1/80)	119
第77図	2区24号掘立柱建物跡実測図(1/80)	121
第78図	2区25号掘立柱建物跡実測図(1/80)	122
第79図	2区26号a・b号掘立柱建物跡実測図(1/60)	123
第80図	2区27号掘立柱建物跡実測図(1/60)	124
第81図	2区28号掘立柱建物跡実測図(1/80)	125
第82図	2区29号掘立柱建物跡実測図(1/60)	126
第83図	2区30号掘立柱建物跡実測図(1/60)	127
第84図	2区31号掘立柱建物跡実測図(1/80)	128
第85図	2区32号掘立柱建物跡実測図(1/60)	129
第86図	2区1号柵跡実測図(1/60)	130
第87図	2区2・3・5・9～11号柵跡実測図(1/60)	133
第88図	2区12・14・16・17号柵跡実測図(1/60)	135
第89図	2区18・19・21～28号柵跡実測図(1/60)	137
第90図	2区21・22・24・27・28・30号掘立柱建物跡、5・11・27号柵跡出土土器・ 陶磁器実測図(1/3)	139
第91図	2区1～8・10号土坑実測図(3・4は1/60、他は1/30)	141
第92図	2区3・5・8・14・15号土坑、2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)	143
第93図	2区11～15号土坑・ピット1実測図(4は1/60、他は1/30)	145
第94図	2区ピット出土土器・陶磁器実測図1(1/3)	147
第95図	2区ピット出土土器・陶磁器実測図2(8・9は1/4、他は1/3)	148
第96図	2区出土土・石・鉄製品実測図(5・6は1/2、他は1/3)	149
第97図	ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図1(1/2,000)	152
第98図	豊前の長大な掘立柱建物跡(1/200)	154
第99図	ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図2(1/2,000)	155
第100図	ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図3(1/2,000)	157
第101図	荷鞍と首木の比較資料(1/10)(1は本書、2は引用文献1、3・4は引用文献 2、5・6は引用文献3)	158
第102図	岩手県の踏鋤の事例(引用文献4)	161
第103図	犁の発展過程(引用文献5)	161
第104図	奈良・平安時代の建物主軸方向と条里推定図(1/3,000)	162
第105図	ハカノ本遺跡3次調査区位置図(1/4,000)	166
第106図	3次調査区遺構配置図(1/100)	166
第107図	安雲山田遺跡遺構配置図(1/400)	折込
第108図	1号掘立柱建物跡実測図(1/60)	168
第109図	1号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)	168
第110図	1号溝状遺構実測図(1/80)	169
第111図	1号溝状遺構出土土器実測図1(1/3)	171
第112図	1号溝状遺構出土土器実測図2(1/3)	172

第113図	1号溝状遺構出土土器実測図3(1/3)	173
第114図	1号溝状遺構出土土器実測図4(1/3)	174
第115図	1号溝状遺構出土土器実測図5(1/3)	175
第116図	1号溝状遺構出土土器実測図6(1/3)	176
第117図	1号溝状遺構出土土器実測図7(1/3)	177
第118図	1号溝状遺構出土土器実測図8(1/3、147は1/4)	178
第119図	1号溝状遺構出土土器実測図9・瓦実測図(1/3)	180
第120図	1号溝状遺構出土木製品実測図1(1/4)	181
第121図	1号溝状遺構出土木製品実測図2(1/4)	182
第122図	1号溝状遺構出土石器・石製品・土製品実測図(1～9は1/2、その他は2/3)	183
第123図	1号竪穴状遺構実測図(1/40)	184
第124図	2号竪穴状遺構、1・2号土坑実測図(1は1/60、他は1/30)	185
第125図	2号竪穴状遺構出土土器実測図(1/3)	186

表目次

第1表	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	3
第2表	1号溝状遺構出土土錘計測表1	64
第3表	1号溝状遺構出土土錘計測表2	65
第4表	1号溝状遺構出土土錘計測表3	66
第5表	1号溝状遺構出土土錘計測表4	67
第6表	1号溝状遺構出土土錘計測表5	68
第7表	1号溝状遺構出土土錘計測表6	69
第8表	1号溝状遺構出土土錘計測表7	70
第9表	1号溝状遺構出土土錘計測表8	71
第10表	1号溝状遺構出土土錘計測表9	72
第11表	1号溝状遺構出土土錘計測表10	73
第12表	1号溝状遺構出土土錘計測表11	74
第13表	1号溝状遺構出土土錘計測表12	75
第14表	1号溝状遺構出土土錘計測表13	76
第15表	1号溝状遺構出土土錘計測表14	77
第16表	1号溝状遺構出土土錘計測表15	78

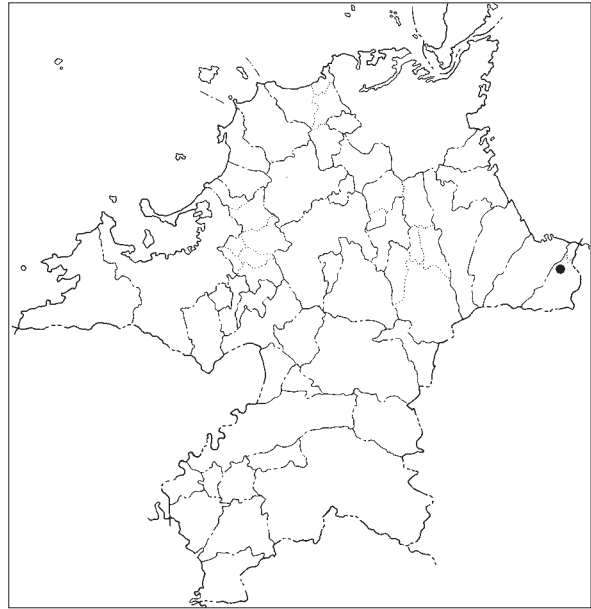
写真目次

写真1	調査中に観測された日食	10
写真2	下尻高遺跡空中写真(上毛町教育委員会提供)	157
写真3	絵馬 表面の赤外線写真	160
写真4	絵馬 裏面の拡大写真 牛頭部	160
写真5	絵馬 裏面の拡大写真 牛脚部	160
写真6	絵馬 裏面の赤外線写真	160
写真7	ハカノ本遺跡出土獣骨	164

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

九州内では、九州縦貫自動車道から始まり、大分道や長崎道、宮崎道と高速走路の建設が進められてきたが、東九州側では道路整備が停滞しており、南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。アクセス道路は、農産物・水産物の輸送の効率化や、工場の誘致や企業の進出、観光産業の振興のために欠かすことができず、東九州地域の期待がかけられている。このような中で計画された東九州自動車道は、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約436kmの建設が予定されている。このうち福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る49.4kmのうち、北九州JCT～苅田北九州空港IC区間については平成18(2006)年2月に開通している。



第1図 ハカノ本遺跡・安雲山田遺跡位置図

現在工事が進められている苅田北九州空港IC～県境については、平成19(2005)年10月1日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社(ネクスコ西日本)九州支社が事業にあっている。既存の椎田道路を利用するため、苅田町からみやこ町の椎田道路に接続する部分、ならびに築城IC、椎田ICの改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。東九州自動車道の整備計画については、報告済みの『東九州自動車道関係埋蔵文化財文化財調査報告－1－雨窪遺跡群』に詳しい。

中津工事事務所区間については、平成13年に椎田～宇佐間の埋蔵文化財文化財の分布調査の依頼を受け、49地点の調査対象地を選定し(後に1地点追加し50地点)、平成20年度より用地取得が進んだ箇所から順次試掘調査に入った。その後、遺跡の所在が確認された七ツ枝遺跡2次調査・ハカノ本遺跡2次調査・安雲山田遺跡から発掘調査にとりかかっている。それ以降は今年に至るまで、試掘調査を並行して多くの発掘調査を実施してきている。

また、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議範囲」として、調査対象から外すこととなった。苅田北九州空港IC～行橋IC間については平成18年、行橋IC～豊津I間ならびに築上～県境間については平成20年に協議文書を取り交わしている。(苅田北九州空港IC～豊津間は平成23年に再協議)。ただし、遺跡の内容を知る上で重要と考えられる部分については、協議の上で発掘調査を行っており、本書で報告を行うハカノ本遺跡の調査においても平成20年12月に「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得た。



第2図 東九州道中津工事区調査地点位置図(1/10,000)

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事 件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査 年度	報告 年度	既刊報告 書番号	備考	
2	中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21～23	200	H23				終了
3	中津	福岡菜切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21～23	1000	H22				
4	中津		築上郡築上町上ノ河内	19420	H22					遺跡なし	
5	中津		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21					遺跡なし	
6	中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・ 豊前市中村	26972	H22	15000	H23・24				
7	中津	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21・22	700	H22				
8	中津		豊前市中村・馬場	10354	H21					遺跡なし	
9	中津		豊前市中村・松江	42434	H24						
10	中津		豊前市松江	9905	H23					遺跡なし	
11	中津		豊前市松江	26570	H21・23					遺跡なし	
12	中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23				終了
13	中津		豊前市四郎丸	12986	H21・23					遺跡なし	
14	中津		豊前市四郎丸	2390	H21					遺跡なし	
15	中津		豊前市四郎丸	9735	H22					遺跡なし	
16	中津		豊前市四郎丸	10432	H22					遺跡なし	
17	中津	川内下野添遺跡2次調査	豊前市川内	15972	H21～23	3600	H22・23				終了
18	中津		豊前市川内	16040	H21～23					遺跡なし	
19	中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23・24	760	H24				
20	中津	大村湯福遺跡	豊前市鳥越	8762	H23・24		H24				
24	中津		豊前市大村	6777	H20・22					遺跡なし	
25	中津	大村上野地遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20・22・23	1100	H23				
26	中津	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21～24	1000	H22				
27	中津		豊前市荒堀	9823	H21・22					遺跡なし	
28	中津		豊前市大西	23122	H21～23					遺跡なし	
29	中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時未遺跡 永久笠田遺跡	豊前市大西・永久・塔田・ 久路土	63733	H21～24	19230	H23・24			H22一部豊前市による 調査	
30	中津		豊前市久路土	9463	H23					遺跡なし	
31	中津		豊前市鬼木	12636	H23					遺跡なし	
32	中津	鬼木鉢立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21・23	1200+	H24				
33	中津	緒方古墳群 七ツ枝遺跡	築上郡上毛町緒方	12456	H20～23	3500	H20～22	H24	10集	上毛町試掘	終了
34	中津	龍毛遺跡2～4地点	築上郡上毛町緒方	11732	H20・21・ 23・24	5000	H21・24	H24	10集	上毛町試掘	
35	中津	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡2・3次調査	築上郡上毛町緒方・尻高	11517	H20・21	7200	H20・21	H24	9集		終了
36	中津	安雲山田遺跡2地点	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			一部上毛町により調査	終了
37	中津	安雲山田遺跡1地点	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20・21		H20・21	H24	9集	”	終了
38	中津		築上郡上毛町土佐井	22252	H20					遺跡なし	
39	中津	土佐井西遺跡	築上郡上毛町土佐井	21860	H20～22	4400	H22～23				終了
40	中津	土佐井東遺跡	築上郡上毛町土佐井	13476	H20～22	600	H23			一部上毛町により調査	終了
41	中津	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井・下唐原	7887	H21・22・24	1500	H22・24				終了
42	中津	ガサメキ遺跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21・22・24	4000	H22			一部上毛町により調査	
43	中津		築上郡上毛町下唐原	25215	H21・22・23					遺跡なし	
44	中津	大久保橋迫遺跡	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22				終了
45	中津		築上郡上毛町下唐原	11997	H24						
46	中津	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22～24	12000	H23・24				
47	中津	四ツ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22・23	6600	H23				終了
48	中津		築上郡上毛町上唐原	4577							
49	中津	榎町遺跡3次調査3～5区	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24				
50	中津	榎町遺跡3次調査1・2区	築上郡上毛町上唐原	4735	H23・24	1050	H24			一部上毛町により調査	
					H24.8現在						

2. 調査の経過

ハカノ本遺跡は平成15年に新吉富村教育委員会がほ場整備に伴って調査を実施した周知の遺跡であり、東九州自動車道路線の北側には平成15年の同じほ場整備に伴い下尻高遺跡が調査されている。そのため、路線内での遺跡の存在が予測されたため調査対象地としていた。平成20年11月13・14日に、用地取得の進んだ範囲から試掘調査を実施し、その結果、西側の541-1～4番地には遺構が見られず、547-1番地は本調査が必要となったことから、これを1区として平成20年12月15日にハカノ本遺跡2次調査として発掘調査に着手した。平成15年度の調査区(以後「1次調査」とする)との関係を確認する必要があったため、限定協議範囲を調査するため調査着手の日付で「限定協議対象地の発掘調査」の依頼を行い、承諾を得て調査対象範囲を広げた。

その後、用地南側用地取得の進捗に従って、平成21年2月17～19日に隣接地の試掘調査を行い、その結果、前回の試掘調査で遺構の見られなかった範囲の北側に径30cmの柱穴群を確認した。また、東の548-1番地はほとんど遺構が残っていないことが明らかになり、東端には大きな段落ちが見られ、黒川の侵食を受けていたことがわかったので、調査しないものとした。協議の結果、遺跡の発見された範囲を2区として、1区に引き続き調査した。

3次調査については、路線南側の限定協議範囲内で、コンクリート水路の付け替え工事に伴って、削平される箇所が生じたため、平成23年5月10日に実施したものである。調査面積は57㎡である。

安雲山田遺跡の対象地は、照日遺跡群や山田1号墳、山田窯跡群が存在することから遺跡の所在が予測されていたことから調査対象地とされ、平成20年7月22～25日に試掘調査を行った。その結果、台地上に遺構が見られ、低い谷部分からも土器や木材が発見されたことから、8月22日から発掘調査に着手した。

3. 調査・整理の組織

平成20(2008)・21(2009)・24(2012)年度の調査・報告に関わる関係者は次の通りである。平成23年度以降は組織改革により、埋蔵文化財文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約・整理報告等を行っている。

西日本高速道路株式会社 九州支社

	平成20年度	平成21年度	平成23年度	平成24年度
支 社 長	久保 晶紀	久保 晶紀	本間 清輔	本間 清輔

西日本高速道路株式会社 九州支社 中津工事事務所

所 長	浜田 兼栄 上羽坪 勲(10.1～)	浜田 兼栄(～9.30)	上羽坪 勲(～6.30) 三瀬 博敬(7.1～)	三瀬 博敬
副所長(技術担当)	大串 久之	大串 久之	森田 忠敏(～9.30) 小島 二郎(7.1～)	小島 二郎
副所長(事務担当)	山本 弘一(～9.30) 平松 善司(12.1～)	平松 善司	中村 重俊	中村 重俊
総 務 課 長	江口 政秋 宇都 良典(10.1～)	江口 政秋(～9.30)	宇都 良典	宇都 良典
用地第一課長	戸上 正明	戸上 正明	藤江 正(4.1～)	藤江 正
工 務 課 長	窪 修(～5.31) 田中 満(6.1～)	田中 満	渡邊 浩延	渡邊 浩延
上 毛 工 事 長	渡久地政樹(～3.31)	當房 周三(4.1～)	當房 周三	荒平 裕次

福岡県教育委員会(平成23年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管)

	平成20年度 (発掘調査)	平成21年度 (発掘調査)	平成23年度 (発掘調査)	平成24年度 (整理報告)
総括				
教 育 長	森山 良一	森山 良一		
教 育 次 長	榑崎洋二郎	亀岡 靖		
総 務 部 長	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦		
総 務 部 副 理 事 兼	磯村 幸男			
文 化 財 保 護 課 長				
文 化 財 保 護 課 長		平川 昌弘		
副 課 長	池邊 元明	池邊 元明		
参事兼課長技術補佐		伊崎 俊秋		
	小池 史哲	小池 史哲		
参 事	新原 正典			
参 事 兼 課 長 補 佐	中蘭 宏			
課 長 補 佐	前原 俊史	前原 俊史		
庶務				
参事補佐兼管理係長				
管 理 係 長	富永 育夫	富永 育夫		
主 事	小宮 辰之	野田 雅		
調査・整理・報告				
参事補佐兼調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文		
参 事 補 佐	濱田 信也	新原 正典		
主 査	小川 靖樹	小川 靖樹		
	秦 憲二	秦 憲二		
主 任 技 師				

九州歴史資料館

館 長		西谷 正	西谷 正
副 館 長		南里 正美	篠田 隆行
企 画 主 管(総務室長)		圓城寺紀子	圓城寺紀子
企 画 主 管(文化財調査室長)		飛野 博文	飛野 博文
企 画 主 幹(文化財調査室長補佐)			吉村 靖徳
技 術 主 査(文化財調査班長)		小川 泰樹	小川 泰樹
庶務			
企 画 主 査		塩塚 孝憲	長野 吉博
事 務 主 査			青木 三保
主 任 主 事		近藤 一崇	近藤 一崇
主 事		谷川 賢治	谷川 賢治
調査			
技 術 主 査			秦 憲二
臨 時 職 員		宮田 剛	荻 幸二
			宮田 剛
整理報告			
技 術 主 査(保存管理班長)			加藤 和歳
参 事 補 佐			新原 正典
			池邊 元明
			小池 史哲

II. 位置と環境

地理的環境

上毛町は福岡県の東南端の築上郡東部に位置し、東は一級河川山国川を隔てて大分県中津市と接しており、西は佐井川を挟んで豊前市に、北は周防灘に面する吉富町に接し、南は耶馬日田英彦山国立公園を挟んで大分県中津市と接している。町域の大部分は標高807.1mの雁股山から延びる丘陵であり、丘陵先端には安雲(あくも)面と呼ばれる低位段丘が発達している。山国川・佐井川・友枝川は丘陵や段丘を開析し、その流域に沖積地や自然堤防を形成している。

歴史的環境

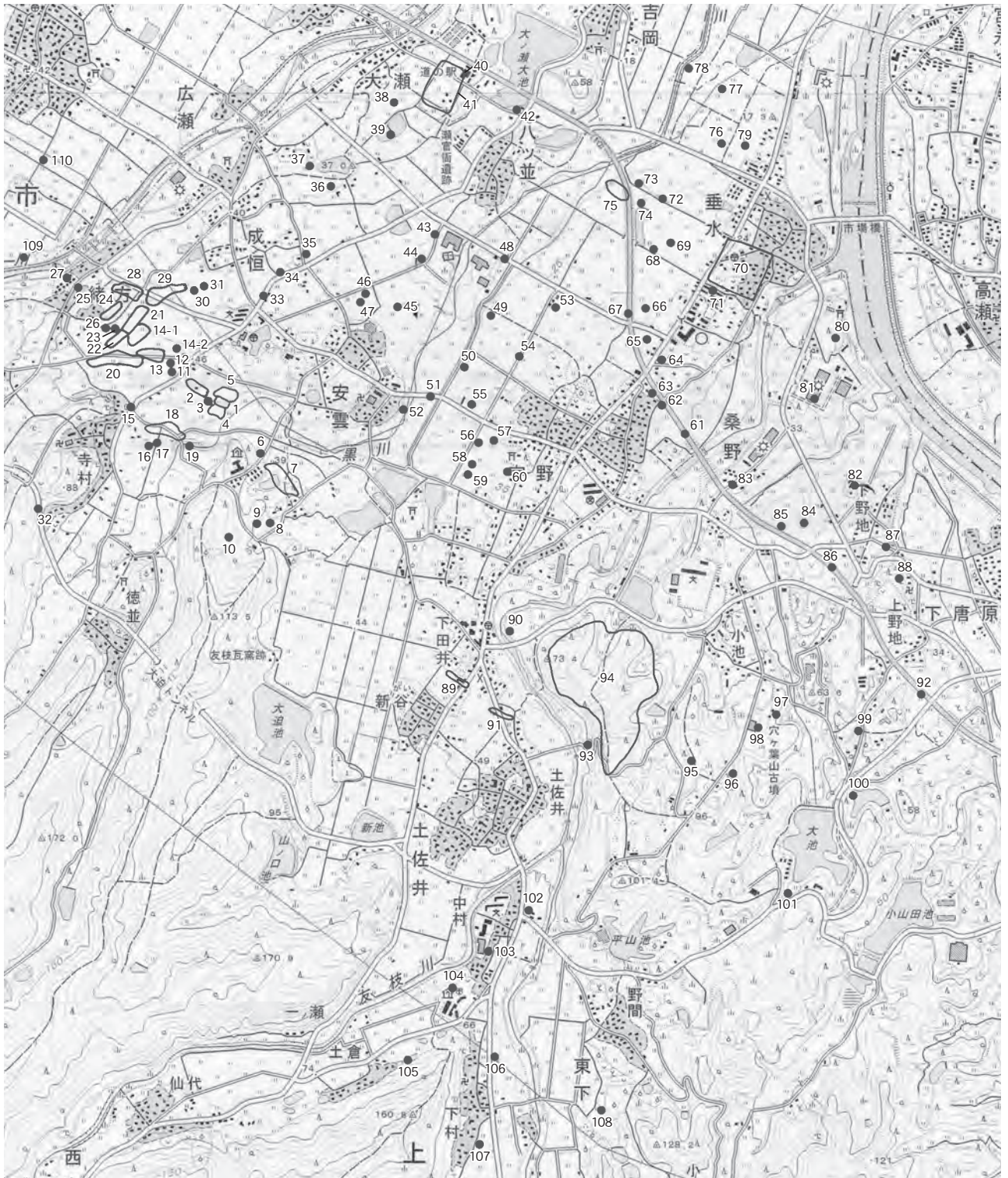
上毛町は、平成17(2005)年10月に新吉富村と太平村が合併してできた町である。昭和50年代から国道10号バイパスの建設やほ場整備事業に伴って発掘調査件数が増加し、近年考古学的資料が急速に蓄積されている。

旧石器時代では、比較的まとまった資料として桑野(かの)遺跡・上の熊遺跡でナイフ形石器や剥片尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡では、下唐原西方(しもとうばるさいほう)遺跡で前期の押形文土器が出土しているものの、中期以前のもの少ない。後期になると急速な増加を見せ、東友枝曾根遺跡では大量の土偶や石棒が出土し、30基を越す竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出された。下唐原十足遺跡からは100基近い土坑が検出されたほか、土佐井(つつさい)遺跡・垂水(たるみ)遺跡など著名な遺跡も所在している。

弥生時代の遺跡は、下唐原宮園遺跡で前期の集落が確認されており、これに続く前期後半から末では中桑野遺跡、牛頭天王(ごずてんのう)遺跡がある。この2遺跡は1つの大規模な集落遺跡とみられ、大型掘立柱建物跡に加え、中期後半の環濠も検出されていることから、拠点集落の1つであろう。この他、下唐原伊柳遺跡・下唐原石堂遺跡・下唐原桑野(しもとうばるかの)遺跡などの前期末から後期初頭の集落があり、下唐原伊柳遺跡で発見された前期末の土器焼成遺構が特筆される。金居塚遺跡では細形銅剣片が出土しており、墓地には列葬墓と方形墳丘墓が発見された大塚本遺跡がある。これらの集落群が立地する桑野原台地には特定集団が出現したことがうかがわれる。後期の遺跡は、山国川西岸の上唐原地区に環濠集落が展開するが、安雲面台地では城ヶ森遺跡や十二遺跡で集落遺跡が発見されている。この時期の墓地としては、穴ヶ葉山遺跡や金居塚遺跡に集団墓地があり、前者には鏡片が副葬された墓も見られた。

古墳時代の前期については、西方古墳と能満寺3号墳の2基の前方後円墳を中心とする古墳群が近年相次いで発見・調査された。中期古墳は、依然として不明だが、後期になると一変して群集墳と横穴墓が盛行する。山国川西岸の丘陵地帯に木の葉文の線刻絵画をもつ穴ヶ葉山古墳群があり、丘陵斜面には金居塚遺跡の横穴墓群がある。安雲面の台地にも中アサバル遺跡で群集墳が発見されているが、すでに削平されており玄室床面だけが残っていた。また、下唐原大久保遺跡では5世紀後半から6世紀前半の埴輪窯が発見されている。

古墳時代の集落としては、前期から中期の集落として池の口遺跡が挙げられる。ここでは「オンドル状カマド」と呼ばれる壁付き煙道を伴う竪穴住居跡が発見されている。このタイプの住居跡はコシノ木遺跡・唐ノ本遺跡・宇野田遺跡・道ノ本遺跡・柿ノ木田遺跡にも見られる。



- | | | | | | | | | | | | |
|----|--------------|----|-----------|----|----------|----|--------|----|----------|-----|-----------|
| 1 | ハカノ本遺跡2次調査1区 | 20 | 空遺跡 | 39 | 畔塚遺跡 | 58 | 宇野田遺跡 | 77 | 板敷遺跡 | 96 | 穴ヶ葉山南遺跡 |
| 2 | ハカノ本遺跡2次調査2区 | 21 | 道ノ本遺跡 | 40 | 堂ノ前遺跡 | 59 | 唐ノ本遺跡 | 78 | 溝添遺跡 | 97 | 穴ヶ葉山古墳群 |
| 3 | ハカノ本遺跡3次調査 | 22 | 原ノ前遺跡2次調査 | 41 | 大ノ瀬官衙遺跡 | 60 | 宮ノ後遺跡 | 79 | 新助田遺跡 | 98 | 穴ヶ葉山遺跡 |
| 4 | ハカノ本遺跡1次調査 | 23 | セツ枝遺跡2次調査 | 42 | ハツ並下ノ原遺跡 | 61 | 宇野代遺跡 | 80 | 牛頭天王遺跡 | 99 | 上唐原基吾久保遺跡 |
| 5 | 下尻高遺跡 | 24 | セツ枝遺跡1次調査 | 43 | 下島ヲカ遺跡 | 62 | 竹ノ下遺跡 | 81 | 中桑野遺跡 | 100 | 大久保楯迫遺跡 |
| 6 | 安雲山田遺跡2地点 | 25 | セツ枝遺跡3次調査 | 44 | 下島地区遺跡 | 63 | ウツヶ畑遺跡 | 82 | 下唐原下柳遺跡 | 101 | 恵良古墳群 |
| 7 | 安雲山田遺跡1地点 | 26 | 春屋敷遺跡 | 45 | 城ヶ森遺跡 | 64 | 馬々代遺跡 | 83 | 上桑野遺跡 | 102 | 東下井ノ上遺跡 |
| 8 | 山田竪跡 | 27 | 緒方古墳群 | 46 | コシノ木遺跡 | 65 | 長田遺跡 | 84 | 下唐原桑野遺跡 | 103 | 今蔵遺跡 |
| 9 | 山田1号墳 | 28 | 屋鋪田遺跡 | 47 | 小宮本遺跡 | 66 | 三ッ溝遺跡 | 85 | 桑野遺跡 | 104 | 今蔵遺跡B地点 |
| 10 | 照日遺跡 | 29 | 恒石遺跡 | 48 | 十二遺跡1次調査 | 67 | 正ノ坪遺跡 | 86 | 大塚本遺跡 | 105 | 今蔵遺跡C地点 |
| 11 | 龍毛遺跡4次調査 | 30 | 柿ノ木田遺跡 | 49 | 稲葉遺跡 | 68 | 阿高田遺跡 | 87 | 寺前遺跡 | 106 | 下村池ノ本遺跡 |
| 12 | 龍毛遺跡3次調査 | 31 | 中屋敷遺跡 | 50 | 安雲ハタガタ遺跡 | 69 | 石筆遺跡 | 88 | 能満寺遺跡 | 107 | 下村養生寺遺跡 |
| 13 | 龍毛遺跡2次調査 | 32 | 尻高後梳遺跡 | 51 | 南田遺跡 | 70 | 垂水廃寺 | 89 | 土佐井西遺跡 | 108 | 堂ヶ迫遺跡 |
| 14 | 龍毛遺跡1次調査 | 33 | 寺ノマエ遺跡 | 52 | 小戸遺跡 | 71 | 垂水高木遺跡 | 90 | 鳴水遺跡 | 109 | 鬼木鉾立遺跡 |
| 15 | インキウ遺跡 | 34 | シバラ遺跡 | 53 | 野内遺跡 | 72 | 一ノ坪遺跡 | 91 | 土佐井東遺跡 | 110 | 久路土鐘鐺田遺跡 |
| 16 | 尻高畑遺跡1次調査 | 35 | ハンダ遺跡 | 54 | 野ノ上遺跡 | 73 | 横道遺跡 | 92 | 土佐井ミンデ遺跡 | | |
| 17 | 尻高畑遺跡2次調査 | 36 | フルトノ遺跡 | 55 | 曲リ遺跡 | 74 | 池ノ本遺跡 | 93 | 土佐井小迫遺跡 | | |
| 18 | 八反田遺跡 | 37 | 中アサバ遺跡 | 56 | 太田遺跡 | 75 | 池ノ口遺跡 | 94 | 唐原神籠石 | | |
| 19 | 宮ノ上遺跡 | 38 | 中坪遺跡 | 57 | 松掛遺跡 | 76 | 小柳遺跡 | 95 | ガサメキ遺跡 | | |

第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

後期から奈良時代にかけての集落としては、下唐原石堂遺跡や四面庇建物跡を伴う上中遺跡があり、中坪遺跡では柱の掘り方のそばで地鎮遺構が見つかっている。

律令期の豊前国には「田河・企救・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐」の8郡がおかれ、上毛町は「上毛郡」にあたる。大宝2(702)年戸籍断簡に「豊前国上三毛郡塔里」、同「加自久也里」があり、『和妙類聚抄』によると上毛郡の郷は「山田・炊江・多布・上身」の4郷となっている。

上毛郡衙は大ノ瀬官衙遺跡に比定されており、発掘調査で全体像が確認されている。その北には古代官道と見られる道路状遺構を挟んで堂ノ前遺跡がある。古代官道ラインを東進すると、池ノ本遺跡・池の口遺跡・池の本遺跡・一ノ坪遺跡で2つの異なる角度の道路状遺構が発見されている。道路状遺構の東方延長上には垂水廃寺があることから、垂水廃寺の寺域や条里との関係について検討する必要がある。垂水廃寺の屋瓦の供給窯としては、友枝窯・山田窯がある。また、大ノ瀬官衙遺跡の南には大型建物群が次々と発見されている。フルトノ遺跡では大型建物跡が官衙的な配置でみられ、大ノ瀬遺跡の前身と考えられている。尾島池を挟んで対峙する阿古田遺跡では、2棟の大型掘立柱建物跡が発見され、下島ヲカ遺跡でも大型倉庫が2棟発見されている。下島遺跡も池のそばにあり4棟の大型掘立柱建物跡が発見されている。これらは郡倉や別院の可能性が指摘されている。

このほかにも、6世紀末から7世紀初頭と8世紀代の掘立柱建物群が発見された下唐原伊柳遺跡L地区では、SD 5からは石帯が出土している。豊前市久路土鐘鐘田(くろつちかねつきでん)遺跡・久路土幢(くろつちはたほこ)遺跡は奈良・平安時代の集落で、前者からは石帯が、後者からは馬具の金具が出土している。上毛町域の古代における最大の発見は唐原古代山城であり、土塁・石列が確認されている。

中世では、城ヶ森遺跡や今蔵遺跡・安雲山田遺跡2地点で中世居館が発見されているほか、下村池ノ本遺跡は平安時代末から中世の掘立柱建物群が検出され、そのうち2重の溝に囲まれた建物跡や門跡があり、寺院跡の可能性もある。

参考文献

- 新吉富村教育委員会2000『宇野地区遺跡群Ⅱ』新吉富村文化財調査報告書第13集
- 新吉富村教育委員会1994『牛頭天王遺跡・垂水高木遺跡』新吉富村文化財調査報告書第8集
- 豊前市教育委員会2005『鬼木四反田遺跡(遺構編)・鳥越今井野遺跡』豊前市文化財報告書第20集
- 上毛町教育委員会2008『垂水地区遺跡群Ⅰ』上毛町文化財調査報告書第8集
- 上毛町教育委員会2009『下唐原伊柳遺跡Ⅱ(遺物編)・下唐原石堂遺跡・下唐原桑野遺跡』上毛町文化財調査報告書第9集
- 上毛町教育委員会2009『垂水地区遺跡群Ⅱ』上毛町文化財調査報告書第10集
- 上毛町教育委員会2008『下唐原伊柳遺跡Ⅱ(遺構編)・下唐原雨色遺跡』上毛町文化財調査報告書第7集
- 太平村教育委員会2002『下唐原十足遺跡』太平村文化財調査報告書第12集
- 上毛町教育委員会2010『垂水地区遺跡群Ⅲ』上毛町文化財調査報告書第12集
- 福岡県教育委員会1996『金居塚遺跡Ⅰ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集
- 福岡県教育委員会1997『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集下巻
- 廣崎篤夫1995『福岡県の城』海鳥社

ハカノ本遺跡

2次調査

Ⅲ. 発掘調査の記録

1. ハカノ本遺跡 2次調査

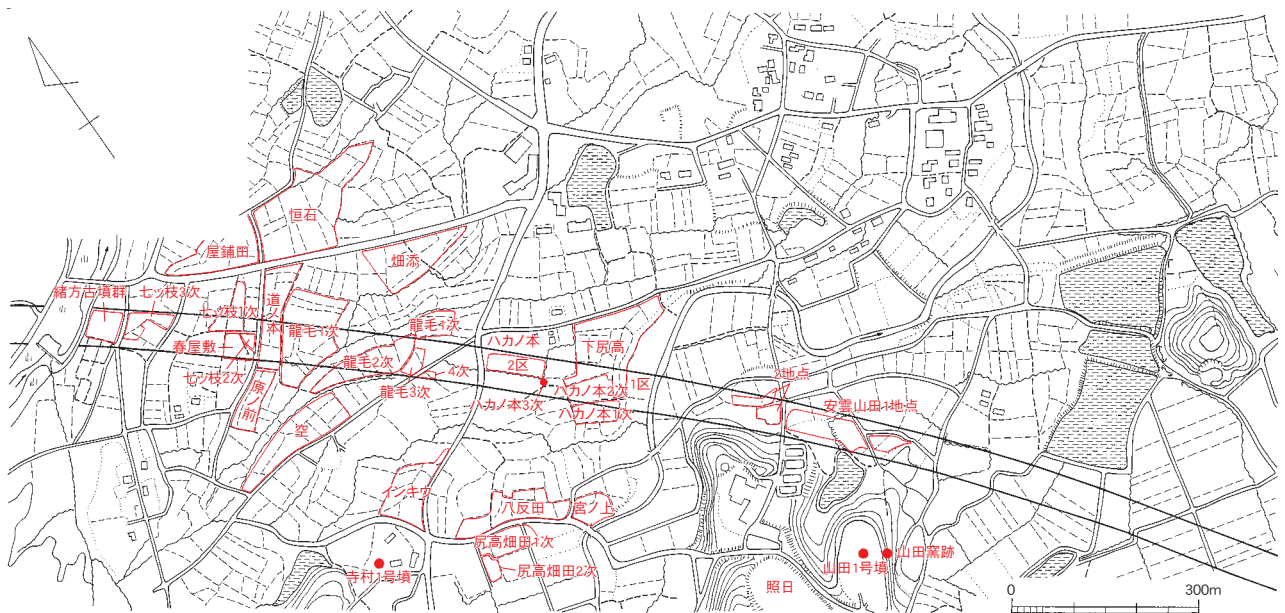
遺跡の概要

ハカノ本遺跡は、松尾山から派生する細長い尾根の先端部分に立地している。先端は二股に分かれており、県道松尾安雲線が尾根の北側で、遺跡の北側の旧道が尾根の南側である。旧道の北側と丘陵の南側は落ち地形になっており、水田可耕地となっている。丘陵先端部は黒川に向かって緩やかに傾斜しながら張り出しているため、黒川の水運が利用できる立地である。

しかしながら、尾根が細長かったことから、狩猟・採集を行うには適地ではなかったらしく、また、水利が困難なのか、弥生時代から古墳時代まで集落は形成されず、奈良時代以降になって遺跡が展開している。ハカノ本遺跡は平成15年度にほ場整備に伴って新吉富村教育委員会(現上毛町教育委員会)により発掘調査が行われており、中世前期の集落跡が確認されている。今回の調査区はその北に隣接しており、ハカノ本遺跡 2次調査とした。調査区は東西に長く、用地の取得順に東部を1区、西部を2区とし、順に調査した。

平成20年12月15日に1区の重機による表土剥ぎ開始し、12月19日にユニット等機材をを搬入し、作業員を投入し、遺構検出を開始した。1月8日には、1号溝状遺構から木製品が出土しはじめ、このころピットが多く掘立柱建物跡の復元が難航した。また、弥生土器が少量出土するため、下層遺構の有無や円形住居の可能性が生じたため、部分的にトレンチ調査を実施してみたが、弥生時代の遺構はないことが判明した。2月17日から19日にはネクスコ西日本中津工事事務所から1区の東西の用地の試掘調査を依頼され、調査と併行してこれを試掘した。その結果、東の用地にはピットがわずかに見られたのみで、大きく削平されており、遺構がほとんどないことが判明し、これは調査不要とした。西側については柱穴を中心とする遺構が検出された。

試掘の結果、東の用地に遺構がないことが判明したので、進入路を下の段に変えて、それまで調



第4図 周辺地形と調査範囲図(1/6,000)

査区内にあった進入路を付け替え、1区を全面表土剥ぎすることにし、2月18日ユニットを移設して表土剥ぎを行った。

さらに調査を進め、3月24日に1区の空中写真を撮影し、年度末を迎えたため一度作業を停止した。翌年度は4月13日に再開した。4月17日には1区の作業が終盤に入ったため、本調査の必要があると判断された西側の用地を2区として表土剥ぎを開始し、4月24日には、作業員を2区に移して、遺構検出を開始した。

4月28日には1区の1号溝で発見された鞍の取り上げを九州歴史資料館文化財調査室保存管理班の加藤氏に

依頼した。7月8日には安全パトールで、教育長・文化財保護課長らが来訪する。7月22日、ちょうど薄曇りだったため日食が観測できた。8月5日に臨時職員の萩が参加する。9月9日に2区の空中写真を撮影した。9月11日の午前中に近隣の西吉富小学校5・6年生の見学を受け、午後には記者発表を行った。9月13日には現地説明会を行い、65名の参加があった。9月16日に撤収した。

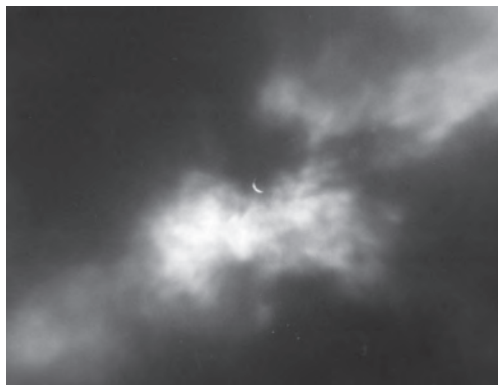


写真1 調査中に観測された日食

(1) 1区の遺構と遺物

1区からは、掘立柱建物跡19棟、柵跡8基、土坑27基、井戸5基、溝状遺構7条が検出された。

①掘立柱建物跡

調査区東北部には非常に多くの柱穴があり、中には掘立柱建物の柱穴を構成していたと思われる径30～50cm規模のものや、敷石のあるものがあり、多くの建物の建て替えがあったことが想定された。しかし、埋土に差異がなく、柱筋と柱穴の規模から復元することしかできなかったため、張り出し部や柱筋からずれる柱穴をもつ建物については判別できなかった。また、掘立柱建物跡に復元したもの以外にも多くの柱穴が存在しているため、確認できていない小規模な掘立柱建物跡が存在する可能性もある。調査時に復元したものの、整理段階で再検討した結果、6・7・19～21号については欠番となった。

1号掘立柱建物跡(図版2・4、第6図)

調査区北東部から検出された。北西隅を1号溝状遺構に切られている。1×5間の4面庇建物で、身舎部で梁行118cm、桁行400cm。庇は4×7間で、庇部で梁行600cm、桁行1,030cm。柱間は210cmだが、庇部は梁行が柱間が異なり、身舎対応部は180cm、庇部は庇の幅で120cmを測る。

柱穴は径40cm前後で、深さは40～50cmで、四隅の柱穴が他のものよりわずかに大きく、深くなっている。床面に石を敷くものと石が壁沿いに集まるものがあり、根締めも行っていったようだ。

建物内部には非常に多くの柱穴があるが、中心を通る床柱はなく、梁行の間仕切りも確実なものがない。北側の庇の柱列はほぼ等間隔で近接する柱があるが、他の辺では建て替えがなく、別の建物を復元しようと考えたが、対応する柱穴が見られなかった。したがって、北側の庇だけを建て替えた同じ建物の柱穴列と解釈した。主軸方向はN-67°30'-Wで、庇の建て替え部分も変化がない。

出土遺物には9のような胴部の張らず高台が高い瓦器碗や19のような口縁部が外反する鎬連弁文



第5図 ハカノ本遺跡2次調査1区遺構配置図(1/300)

碗、5の口縁部の肥厚の小さい東播系須恵器鉢などの12世紀後半のものから、10の胴下位が膨らむ瓦器碗や6の口縁部が肥厚した東播系須恵器鉢など13世紀後半代のものもあり、2・3号掘立柱建物跡と重複するので、新しい時期をとって13世紀後半代のものとする。

出土遺物(図版25、第7・43図)

第7図1は柱5から出土した土師器小皿で糸切り痕と板状圧痕が残る。橙色を基調としており、外面の一部に煤が付着する。2は柱19から出土した土師器小皿で、板状圧痕は観察できない。3は柱9から出土した土師器小皿で、外底には糸切り痕がわずかに残り、板状圧痕はほとんど残っていない。

4～6は東播系須恵器の鉢で、4は柱17出土で、外底の中央部には糸切り痕が残っている。外底周縁は剥離しており、焼成により付着した部分を剥がしたものであろう。5は柱3出土の瓦質に見えるもので、灰白色を基調としているが重ね焼きのため、口縁部がけ灰黒色を呈する。6は柱19から出土したもので、重ね焼きのため外面口縁部だけ黒灰色で、他は青灰色を呈する。

7～14は瓦器碗である。7は柱3出土で口縁部は灰黒色、口縁下は灰白色。8は柱8出土で7と同じ色調で内面にミガキが残る。11は柱3出土で、外面胴下位に板状のオサエ痕が見られる口縁部灰黒色、胴上半は灰白色、下半は灰黒色を呈する。9は柱15出土で、器面が摩滅しているが板状のオサエ痕が見られ、このため胴部に屈曲があるように見える。口縁部灰黒色、胴上半は灰白色、下半は暗灰色を呈する。10は柱21出土で外面はにぶい灰白褐色、内面は灰白色を呈する。外面胴中位はミガキ、下位は板状のオサエ痕が見られる。11は柱26出土で瓦器だが内外青灰色を呈する。高台の幅は不均一である。12は柱19出土で内面黒灰色、外面灰白色、13は柱7出土で内外灰黒色を呈する。14は柱4出土で、底部が土師器の色調である淡橙灰白色のため黒色土器のようだが、高台の形状から瓦器碗と考えた。

15は柱8出土の瓦質土鍋で、内外茶褐色～橙褐色で、外面の鏝下面以下が使用変色している。12世紀後半代。16は柱24出土の瓦質土鍋で、外面が暗橙灰褐色、内面は橙色を呈する。

17は柱1出土の龍泉窯系青磁碗片で、残存部には文様が残っていない。23は柱25出土で、龍泉窯系青磁の鎬連弁文碗片で、内外面に貫入あり。18は柱9、19は柱11出土の龍泉窯系青磁の鎬連弁文碗片は、釉が濃暗緑色を呈する。

第43図19は柱6出土の刀装具で、欠損部があるが、帯状のものを曲げて成型したのではなく、铸造品であろう。銅・鉛・錫が検出されたことから青銅製である。大きさから刀子のものだろう。

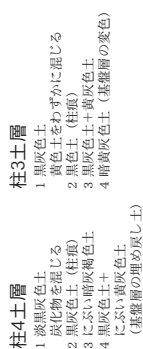
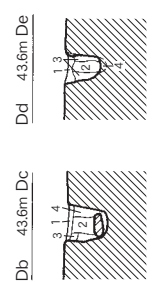
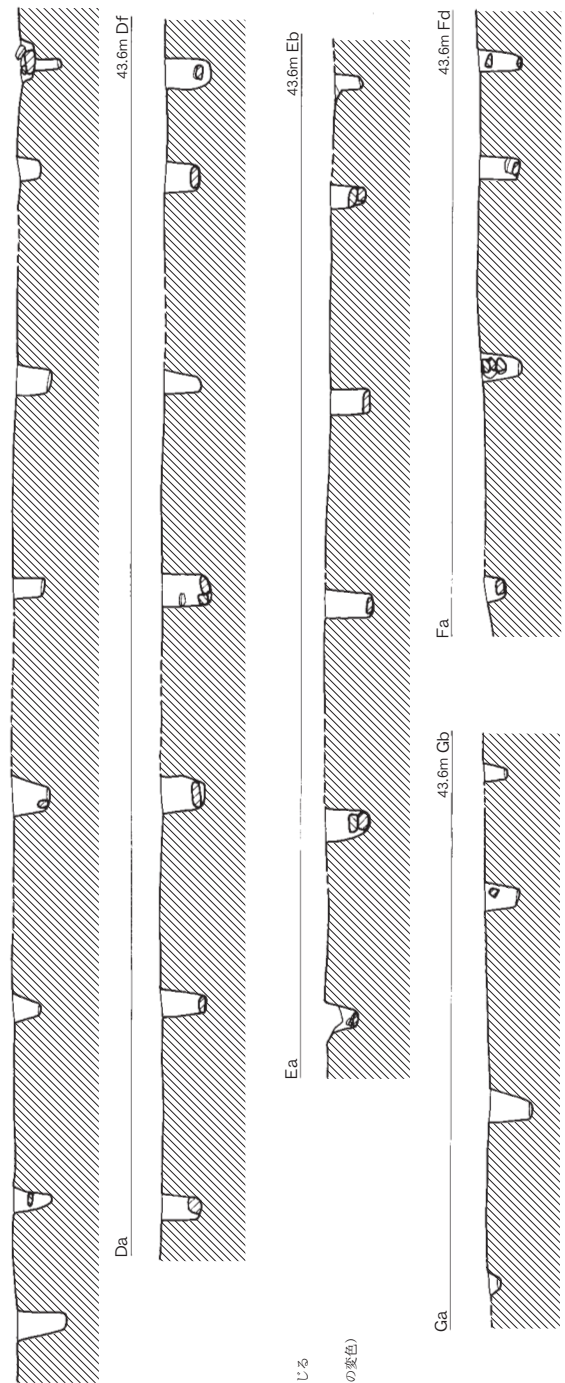
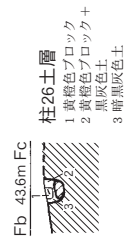
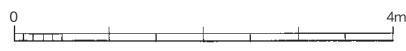
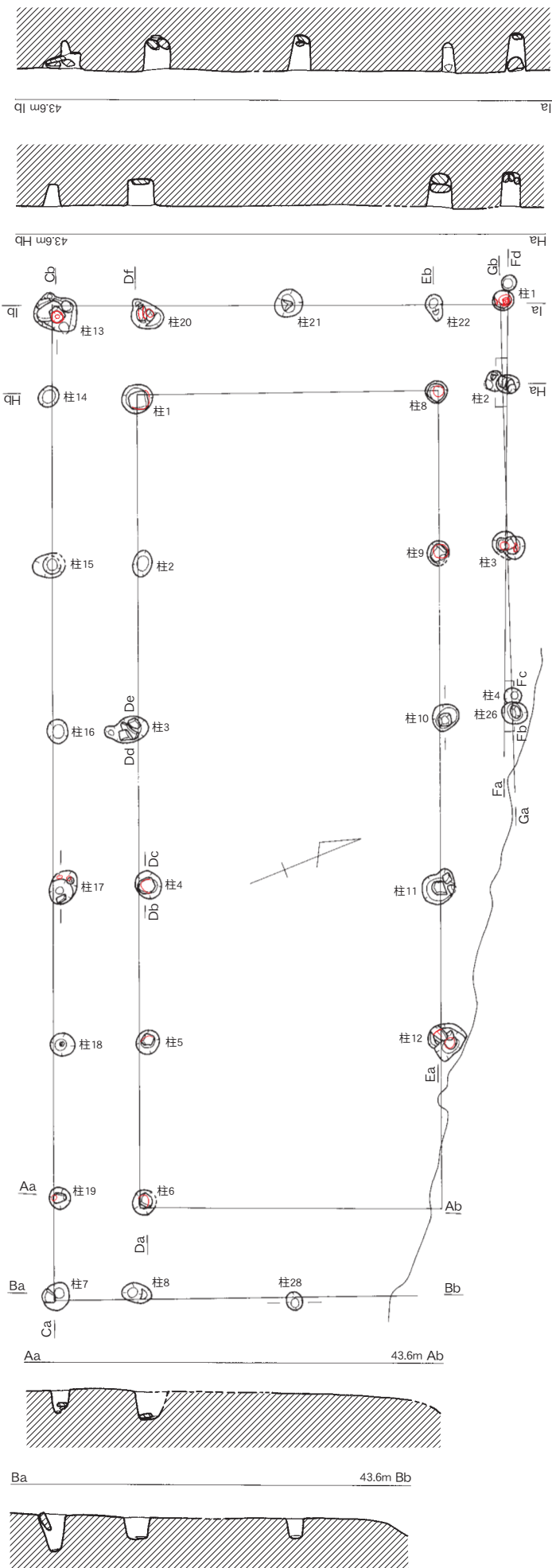
2号掘立柱建物跡(図版2・4、第8図)

調査区北東部から検出された、北西隅を1号溝状遺構に切られている2×3間の4面庇建物である。身舎部で梁行410cm、桁行715cm、庇は4×5間で、庇部で梁行590cm、桁行900cmを測る。柱間は梁行210cm、桁行220～250cmだが、庇部は150～220cmとばらつきがある。

柱穴は径30～35cmで、深さは60cm程ある。柱25は敷石と根締め石が見られたが、他の柱穴には敷石はなく、柱穴内の石は柱痕内落ち込んだものであった。四隅の柱穴が他のものよりわずかに大きく、深くなっている。柱6には柱根が残っていたが、表面が劣化して残りが悪かったため取り上げなかった。

建物内部には非常に多くの柱穴があるが、床柱や間仕切りとして確実なものはない。主軸方向はN-79°20'-Wである。

出土遺物の13・14の土鍋のように12世紀前半代のものもあり、1の器高の低い土師器小皿、3



第6図 1区1号掘立柱建物跡実測図(1/80)

のような口縁部の傾きが大きい土師器小皿も見られるので、1号掘立柱建物跡より古いとみてよい。宋銭の年代から見ても12世紀中葉と見てよいだろう。

出土遺物(図版25、第16・43図)

第16図1～4は土師器小皿で、1は柱28出土で、外底は糸切りのようだが摩滅で不鮮明。2は柱6出土で、外底は器面摩滅のため板状圧痕は残るが、糸切り痕はわずかしか見られない。3は柱3出土で、糸切り痕と板状圧痕の両方が見られる。5は柱7出土の土師器杯で、外底は糸切り後ナデ。

6～9は瓦器碗で、6は柱10出土の瓦器碗で、外底にへう記号らしい沈線が見られる。外面胴部は板状工具によるオサエ。7は柱11出土の瓦器碗で、内外灰色を呈する。器面は摩滅のため調整不明。8は柱21出土の弥生土器で、内外黄橙色で中央部は灰黒色。内外器面摩滅で調整は観察不能。

9～11は東播系須恵器の鉢片で、9は柱1出土、10は柱9出土で青灰色を基調とするが口縁部のみ灰黒色を呈する。11は柱2出土で、外底は糸切り痕が残る。

12～14は土鍋で、12は柱12出土、径を復元できないほどの小片だが、小型品と見られる。13は柱3出土、14は柱1出土で赤橙褐色を基調とし、外面口縁下は煤が付着する。15は瓦質土器と思われるもので、器種不明。黄灰白色を呈する。

16は龍泉窯系青磁碗で、内外無文。

第43図20は柱1出土の銅銭の大観通宝(北宋 初鑄1107年)で、銅質はやや悪いが摩滅していない。裏面は筭ずれがある。

3号掘立柱建物跡(図版2、第9図)

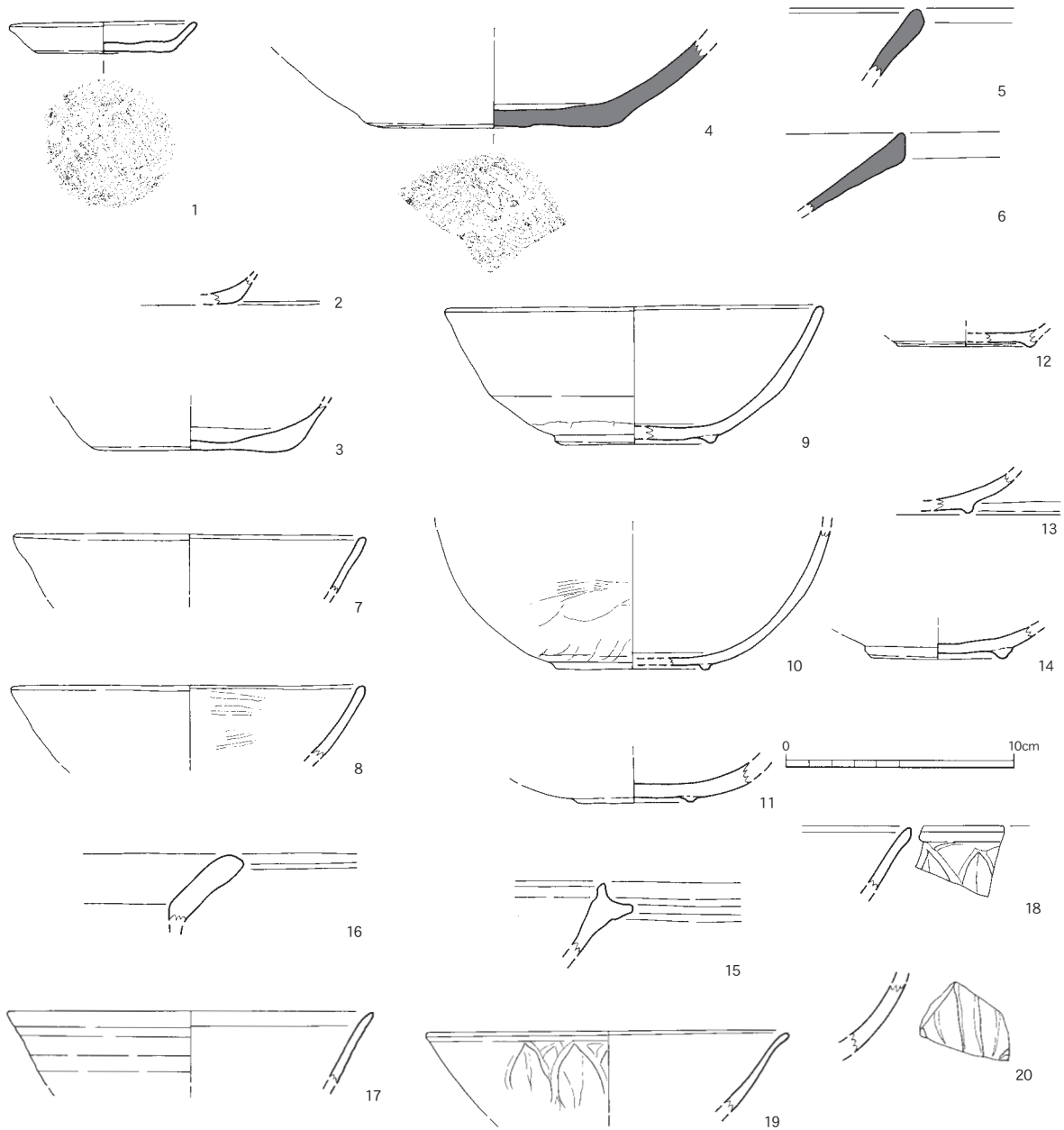
調査区北東部から検出された2×2間の建物だが、西辺に中央柱穴がないので確実性に欠ける。梁行340cm、桁行485cmで、柱間は梁行150・180cm、桁行240cmを測る。柱穴は径30～40cmで、深さは45cm程あり、多くの柱穴から扁平な川原石が出土したが、床面に敷いたものより、やや浮いたものが多く、柱の高さを調節したものであろう。柱6は南辺の直線上に位置しており、他の柱穴と同じ高さで敷石が出土したことから、本建物と関連するものと考えられる。主軸方向はN-93°0'-Wである。

出土遺物の8の常滑焼は口縁形態から12世紀後半代と考えられるものの、1・2の土師器小皿は13世紀前半代のもので、13世紀前半でも古段階の遺構だろう。

出土遺物(第16図)

第16図17は柱9、18は柱5から出土した土師器小皿で外底切り離し技法は器面摩滅のため不明。19は柱9出土で、外面黄白色、内面橙色を呈するが器壁の厚さから瓦器碗であろう。20は柱1出土の瓦器碗で、外面口縁部から内面は灰色、口縁下位は灰白色を呈する。

21・22は柱5出土の瓦器碗で、胴下位には押し出し技法のオサエ痕が残る。21は、外面口縁部から内面は灰黒色、外面口縁下は灰白色、胴中位以下は暗灰色を呈する。23は柱4出土の瓦質土器の羽釜で、外面は指をヨコにしたオサエ、内面は丁寧なヨコハケで、胎土は精良で搬入品である。外面は淡灰黒色、内面は灰黒褐色を呈する。24は柱9出土で、内外灰色を呈し須恵器に近い胎土だが、中世陶器の甕である。



第7図 1区1号掘立柱建物跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)

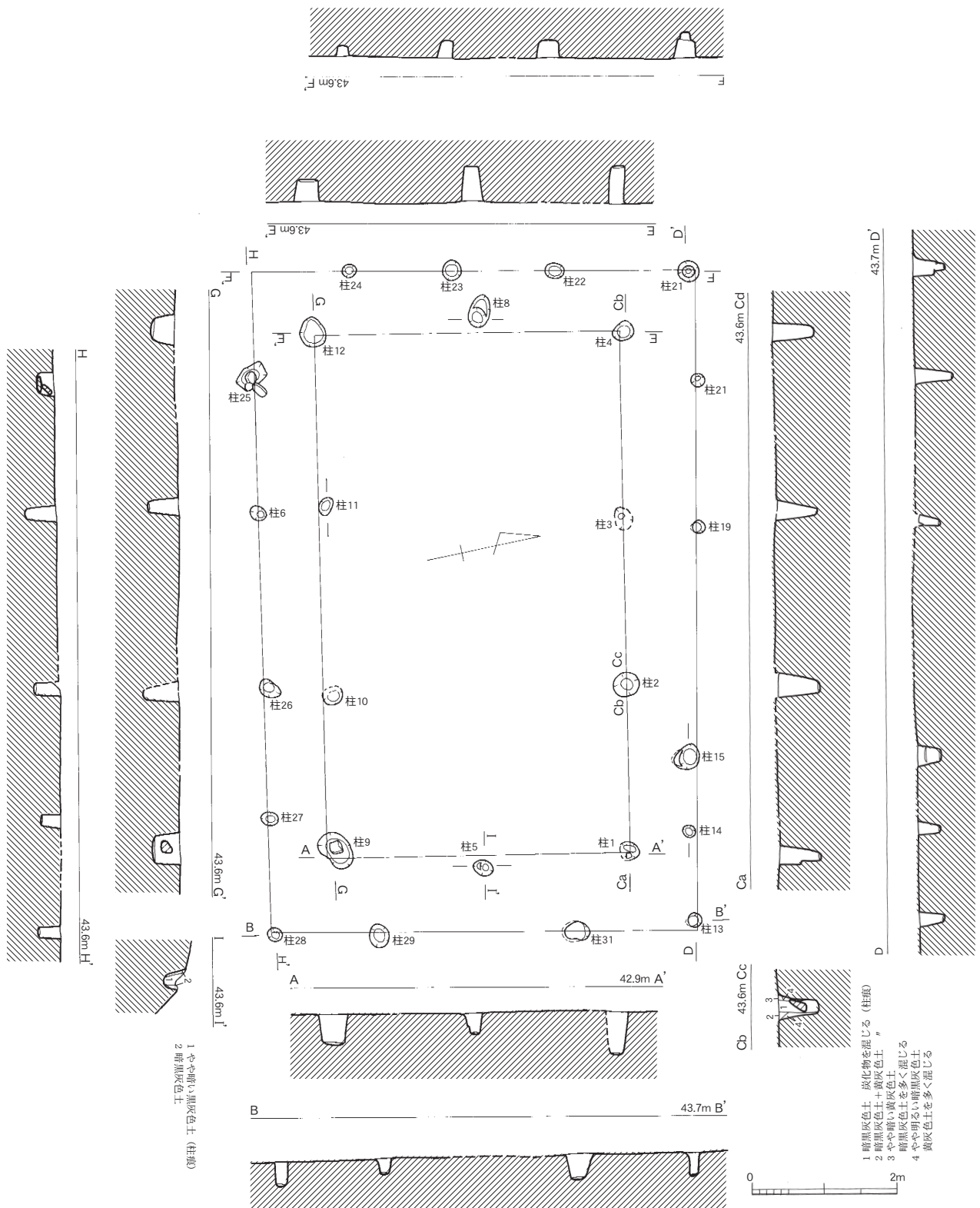
4号掘立柱建物跡(図版3、第10図)

調査区東部から検出された1×2間の建物で、梁行290・300cm、桁行400・410cm。柱間は桁行190cmと210cmを測る。柱穴は径50cm前後、深さは45cm程あり、桁行中央のものは小型で浅い。四隅の柱穴は他のものよりわずかに大きく、深くなっており、柱5には敷石が、柱3には根締め石がある。主軸方向はN-18°30'-Wで、4号掘立柱建物跡と一致する。14号掘立柱建物跡とは柱穴が切り合わないが重複している。

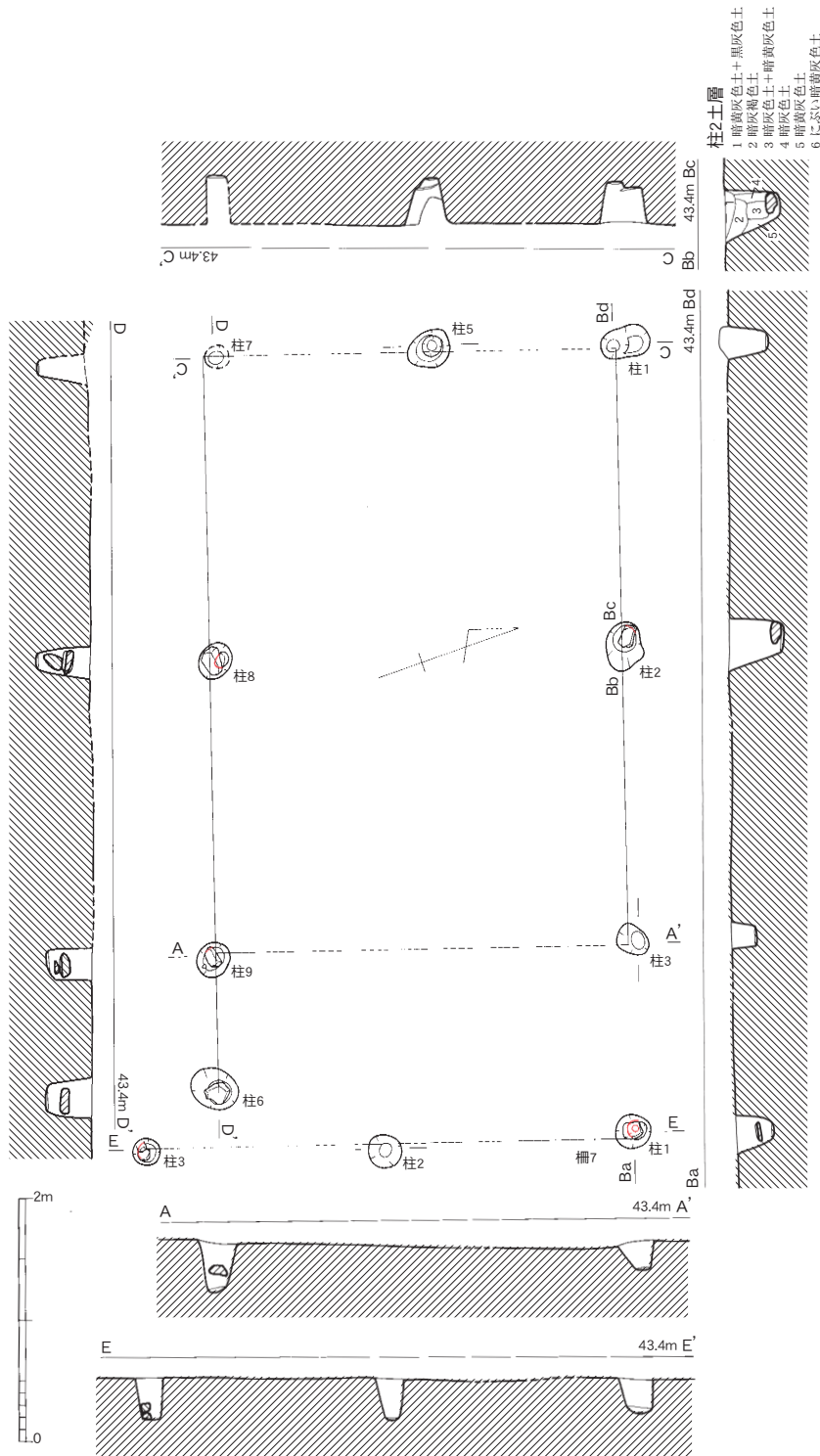
出土遺物が少ないが、9の瓦器碗の口縁部の傾きが小さいことと10の瓦器碗の高台が高いことから12世紀後半から13世紀前半代だろう。

出土遺物(第16図)

25は柱5、26は柱6出土の瓦器碗で、25は外面口縁部から内面は灰白色、外面口縁下は黒灰色



第8図 1区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第9図 1区3号掘立柱建物跡・7号柵跡実測図(1/60)

を呈する。26は内外ミガキが入っていたものと思われるが、器面が失われているため観察できない。内外灰色の色調も器面でなく胎の色調である。27は白磁で、貫入が見られる。

5号掘立柱建物跡(図版3、第11図)

調査区東部から検出された1×3間に南桁行に片庇のつく建物で、梁行340cm、桁行525cm。底まで含めると410cmで、柱間は桁行175cmを測る。柱穴は径20~35cmで、深さは40~60cm程あり、残りが良い。柱7の柱根部に礫が落ち込んで検出されたのみで、柱穴に敷石や根締石はなかったが、

土層から見ると柱根と壁との隙間が小さかった。

出土遺物が少ないが、31は12世紀中葉の土鍋で、32の四耳壺の口縁部は小さな平坦面を持つことから12世紀後半代のものだろう。主軸方向はN-69°30'-Wで、4・9号掘立柱建物跡や5号溝状遺構と一致しており、これらと共存していたものと思われる。

出土遺物(第16図)

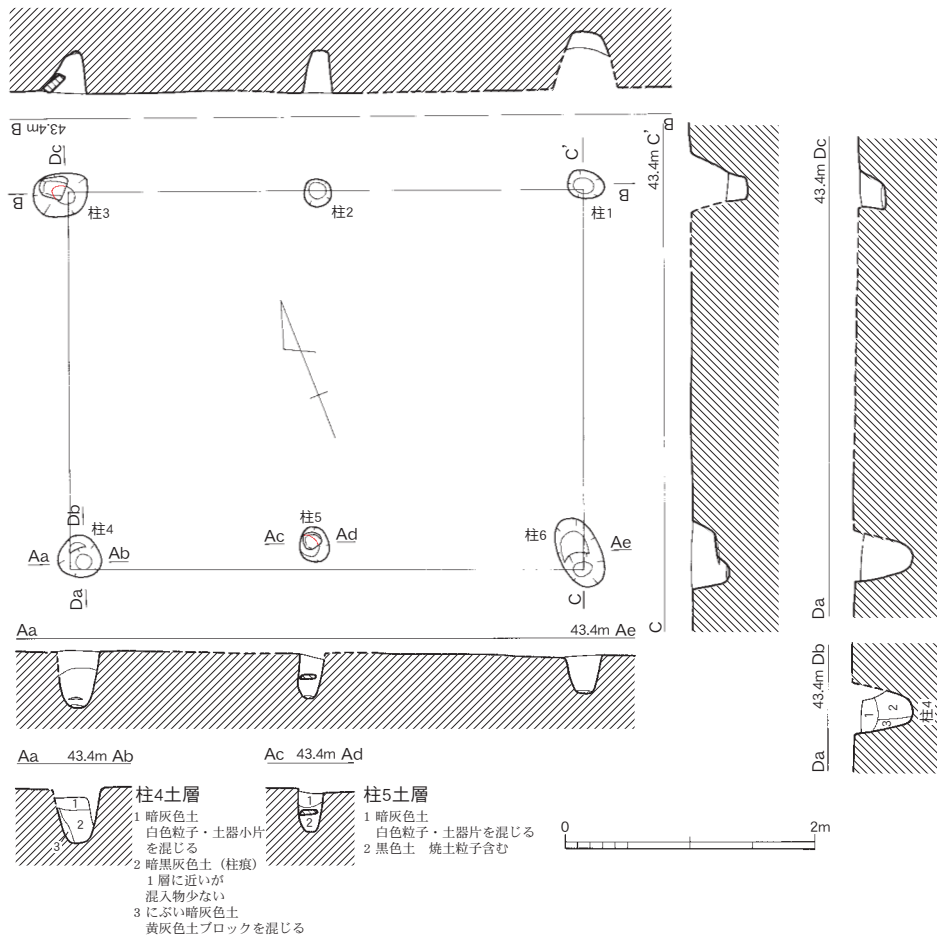
28は柱4出土の土鍋で、にぶい黄灰白色を基調とし、外面は使用変色のため黒灰色を呈する。29は、胎土は須恵質だが、無釉陶器の四耳壺で、肩部に灰被りが見られる。

8号掘立柱建物跡(図版20、第12図)

調査区南東端から検出された2×3間の建物で、梁行桁行共に375cmの平面正方形を呈すが、梁桁共に柱の足りない部分や柱筋からずれた部分がある。また、柱4・8のように、極端に浅い柱穴があり、確実性はあるものの、不均一で粗雑なつくりの建物である。東側は調査区外に延びていた可能性も残る。

柱間は120~160cmでばらつきがある。柱穴は径25~30cmで、深さは10~55cm程あり、残りが良い。柱9では掘形上位に礫が柱痕部を巡るように検出されたので根締石であろう。柱根はほとんどの柱穴で検出された。

出土遺物の32の羽釜は口縁部の鍔がやや短い断面三角形なので、12世紀後葉であり、30の瓦器碗口縁部の傾きの小ささと31の高台の高さからも妥当だろう。主軸方向はN-49°60'-Wで、6号



第10図 1区4号掘立柱建物跡実測図(1/60)

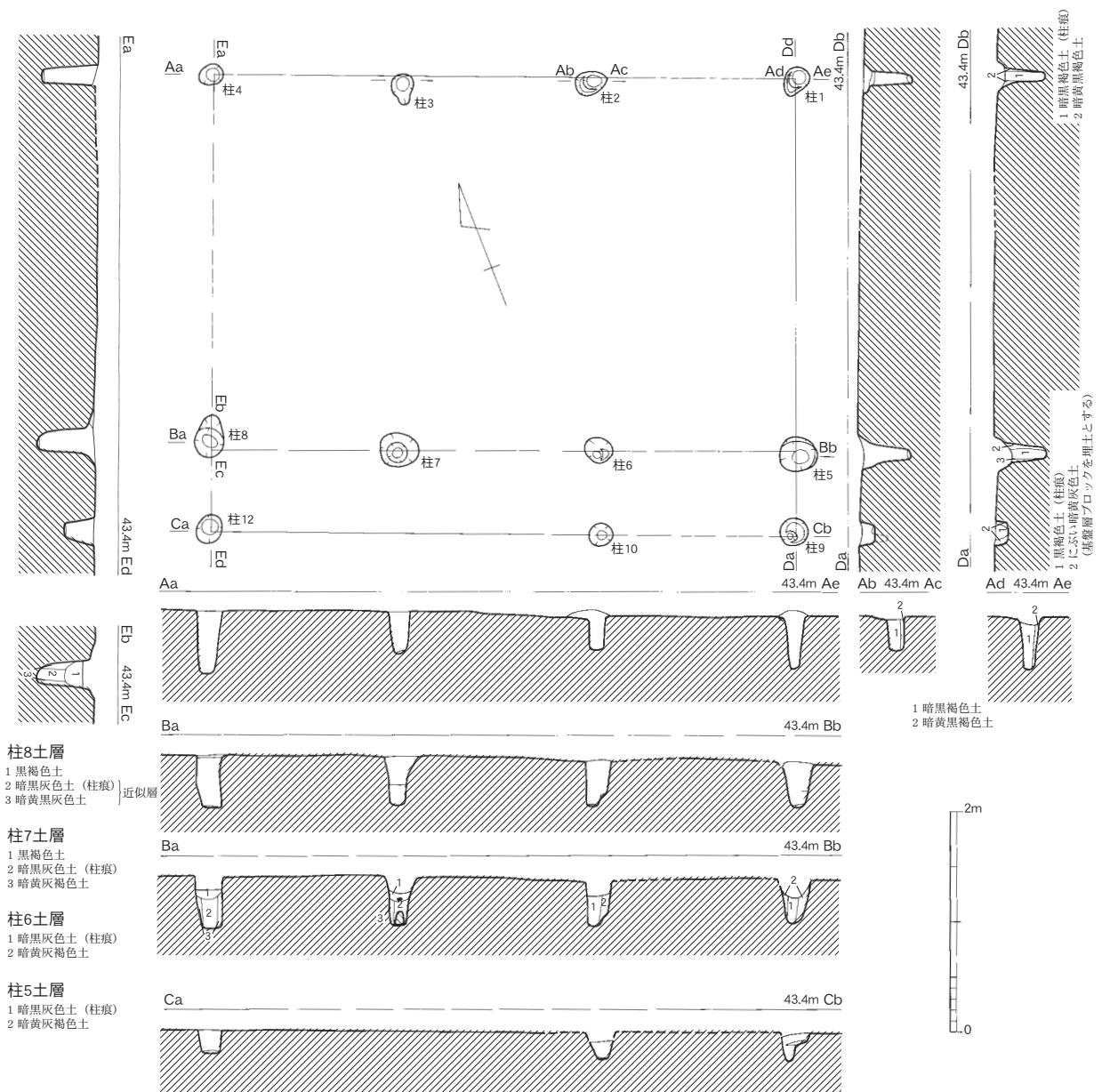
溝状遺構と一致するが、建物には一致するものがない。本建物東側は段丘の斜面であったと考えられるので地形に合わせた主軸方向になっていた可能性が高く、12世紀後葉の建物と共存していたとしても不自然ではない。

出土遺物(第16図)

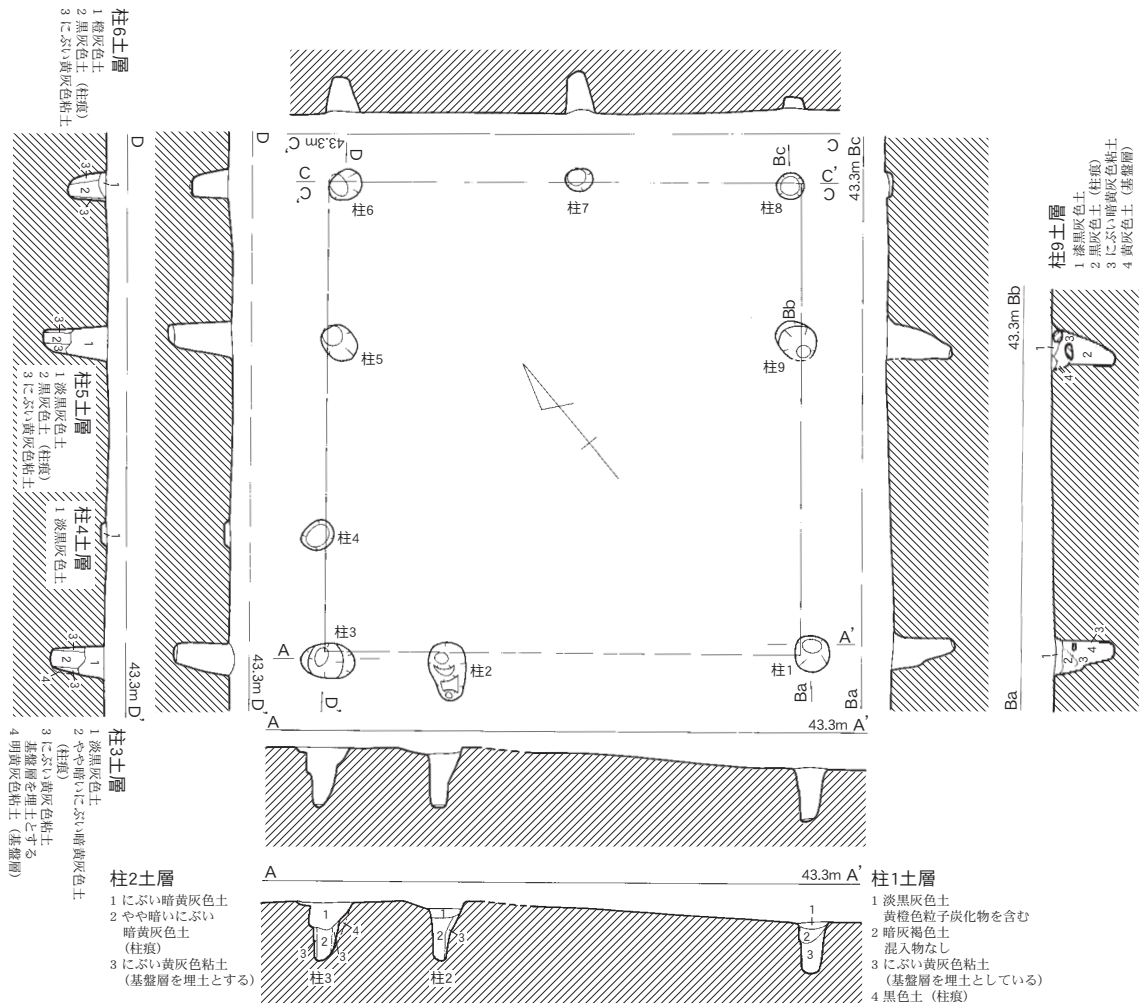
30・31は柱5出土の土師器椀で、30は内外黄灰白色を呈する。32は羽釜で、外面に煤付きはなく変色のみ。

9号掘立柱建物跡(図版3、第12図)

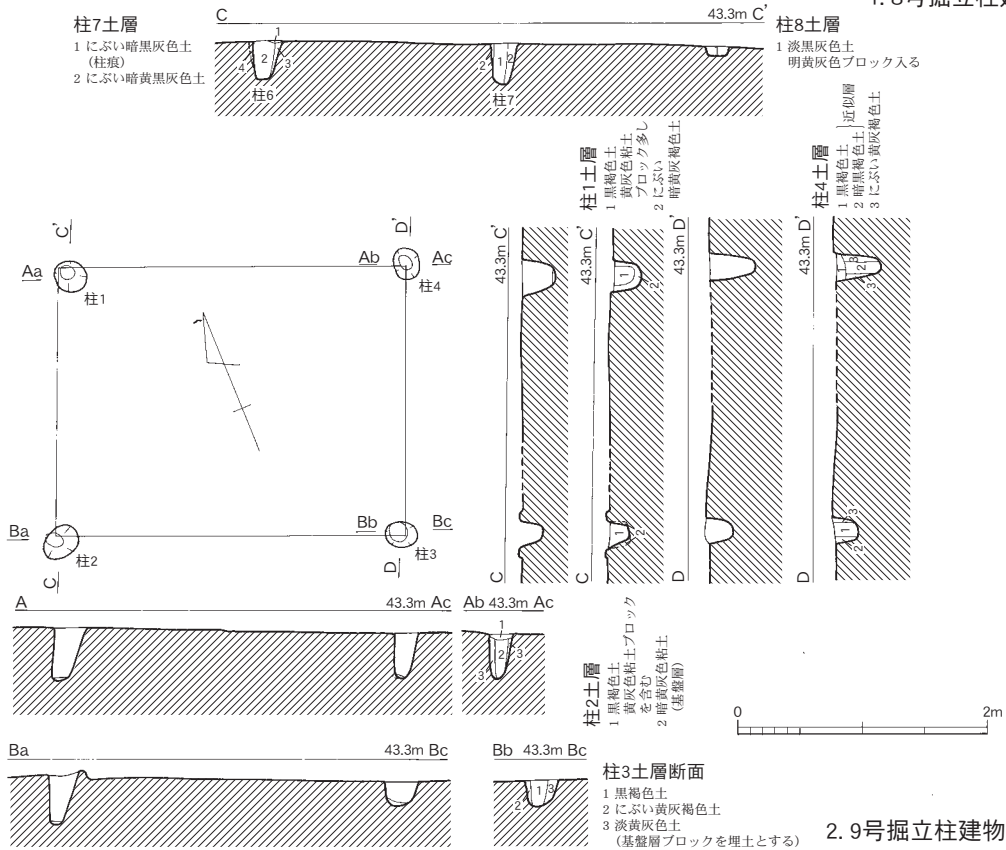
調査区東部から検出された1×1間の建物で、梁行215cm、桁行275cm。柱穴は径25cm前後で、深さは25~45cm程あり、西側の柱穴が浅いのは西側が大きく削平されたためである。柱根はほと



第11図 1区5号掘立柱建物跡実測図(1/60)



1.8号掘立柱建物跡



2.9号掘立柱建物跡

第12図 1区8・9号掘立柱建物跡実測図(1/60)

んどから検出された。

時期を特定できる出土遺物がないが、主軸方向はN-68° 20'-Wで、4号掘立柱建物跡や5号溝状遺構と一致しており、共存していたものと思われる。

10号掘立柱建物跡(図版4、第13図)

調査区南東部から検出された1×1間の建物で、梁行桁行共に250cmの正方形プランで、周辺の柱穴の規模との比較から明瞭に検出できた。柱穴は径25cm前後だが、柱2のみ径45cmと大きい。また、上位と下位に礫があり、下位の礫は石敷きの可能性をもつが、上位の礫は、他の柱穴に建て替えの痕跡がないので、柱を抜き取った痕跡と考えた。柱穴全体の深さは25~45cm程あり、西側の柱穴が浅いのは西側が大きく削平されたためである。

時期を特定できる出土遺物はなく、主

軸方向はN-57° 20'-Wで、一致する建物もないが、6号溝状遺構の西に派生する部分の方向と一致しているとも見ることのできるため、6号溝状遺構と共存していたものと思われる。

11号掘立柱建物跡(図版3・9、第14図)

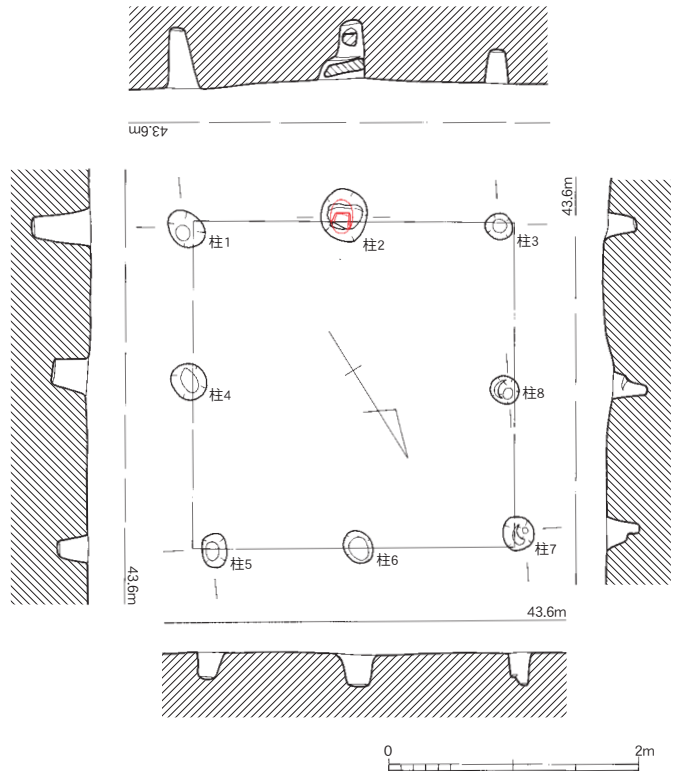
調査区南東部から検出された1間以上×3間の建物で、梁行315cm以上、桁行575cmを測る。周辺の柱穴の規模との比較から明瞭に検出できたが、柱5は斜面からかろうじて検出できた程度なので確実性に欠ける。柱穴は径35~50cm、深さ30~50cm、柱間195cmを測る。柱2は底面に礫があり、柱根がその上にあることから、敷石と見られる。

12号掘立柱建物跡の建て替えと考えられ、柱穴の切り合いは明瞭だった。時期を特定できる出土遺物がないが、主軸方向はN-40° 30'-Eで、重複する8号掘立柱建物跡に近いので、時期的にも8号掘立柱建物跡に近いだろう。24号土坑との切り合い関係は明らかでない。

12号掘立柱建物跡(図版9、第14図)

調査区南東部から検出された1間以上×3間の建物で、11号掘立柱建物と同じく梁行315cm以上、桁行575cmで、周辺の柱穴の規模との比較から明瞭に検出できた。柱5は斜面からかろうじて検出できた程度なので確実性に欠ける。柱穴は径35~50cm、深さ15cmで、柱間195cmを測る。

11号掘立柱建物跡を建て替えたもので、柱穴の切り合いは明瞭だった。時期を特定できる出土遺物がなく、主軸方向はN-40° 10'-Eで、11号掘立柱建物跡を除いて一致する建物がないが、重複する8号掘立柱建物跡に近いので、近い時期のものであろう。1号柵跡は主軸方向が一致するが、建物内部になるので、伴うものではない。24号土坑との切り合い関係は明らかでない。



第13図 1区10号掘立柱建物跡実測図(1/60)

13号掘立柱建物跡(図版9、第14図)

調査区南東部から検出された1間以上×4間の建物で、梁行125cm以上、桁行730cmを測り、周辺の柱穴の規模との比較から明瞭に検出できたが、柱5・6は斜面からかろうじて検出できた程度なので確実性に欠ける。柱穴は径35cm前後で、深さ18~40cm前後で、柱間は桁行195cm、梁行は160cmと短いので、2間以上になる可能性が高い。柱根はほとんどの柱で見つっている。

出土遺物の37の同安窯系青磁碗は傾きから12世紀中葉であるが、36は12世紀前葉の土鍋なので、12世紀中葉の所産と考えられる。12・13号掘立柱建物跡、1号柵跡と重複するが切り合い関係がなく、3号井戸との切り合い関係は不明。主軸方向はN-13°10'-Eである。

出土遺物(第16図)

33は柱1出土の瓦質土器の土鍋で、外面は暗灰褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。34は柱3出土の同安窯系青磁碗で、外面櫛歯文、内面櫛歯による花文で、内面口縁部に釉の発色の差異が見られる。

14号掘立柱建物跡(図版3、第15図)

調査区東部から検出された2×2間の建物で、梁行380cm、桁行400cm。柱穴は径30cm~40cmで、深さは25~45cm程ある。柱根は検出されず、柱5の土層では柱の切り取りが見られ、他にも南西側に抜き取り穴が付随するものがほとんどなので、廃絶後柱は抜き取られたと考えられる。

遺構の時期は、39が混入品であるため38から時期を判断するほかないが、主軸方向はN-24°0'-Eで、4・9号掘立柱建物跡や5号溝状遺構と一致しており、12世紀後半から13世紀前半と思われる。

出土遺物(第16図)

35は柱2出土の瓦器碗で、器面摩滅のため調整不明。36は須恵器の小型瓶で、内外青灰色。

15号掘立柱建物跡(図版1、第14図)

調査区北東部の掘立柱建物跡の集中部から検出された1×1間の建物で、梁行190cm、桁行220cmを測る。柱穴は径23cm~55cmで、深さは12~60cm程あり、柱2だけが極端に浅いが、ほかの3基は周辺の柱穴の中でも顕著に深いことから、1×1間の建物を復元した。柱根は検出されており、抜き取りはない。

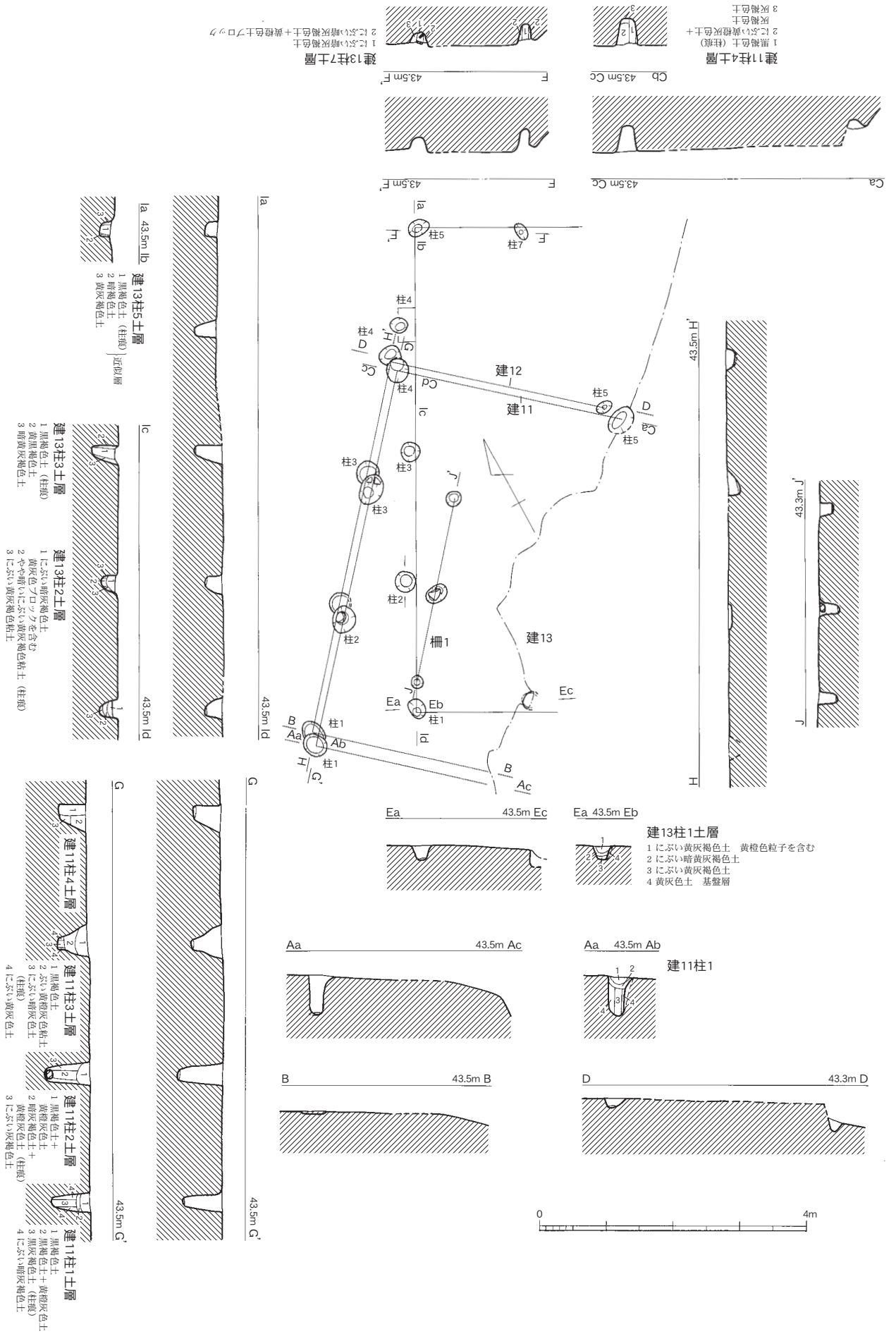
37の土師器小皿の器高の低いことや、38の瓦器碗が傾きが小さく外面口縁部にもミガキが残ること、39の土鍋が12世紀前半代であることから、12世紀中葉の所産だろう。主軸方向はN-30°0'-Eで2号掘立柱建物跡に近い。規模は重複する22号掘立柱建物跡の身舎部に近いので、建て替えの可能性はある。

出土遺物(第16図)

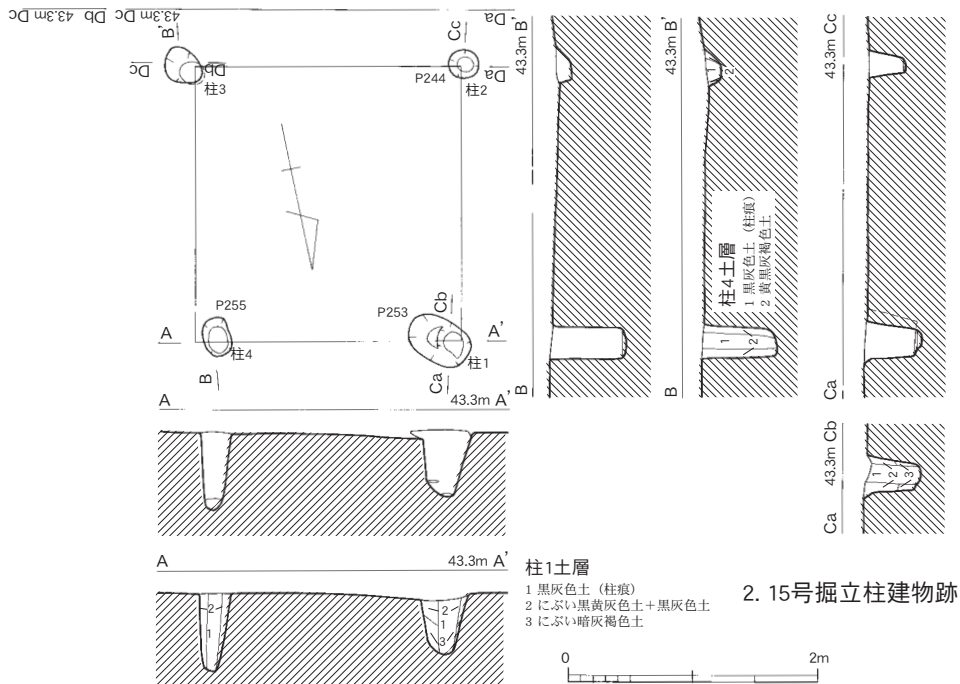
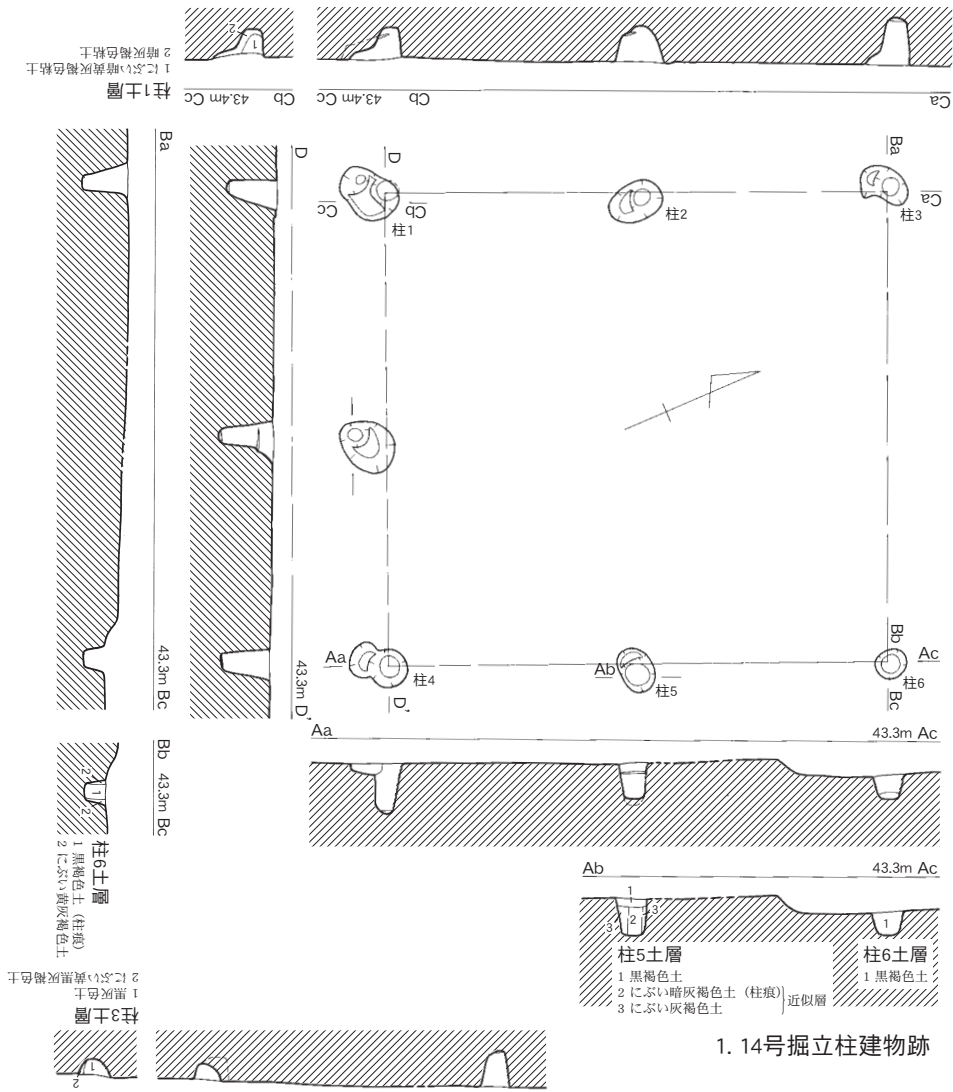
37は柱1出土の土師器小皿で、外底は糸切り。38は柱1出土の瓦器碗で、内外ミガキが残る。径を復元できない小片だが、径は18cm前後であろう。39は柱2出土の瓦質土器の土鍋で、外面は暗黒褐色、内面は橙灰褐色を呈する。

16号掘立柱建物跡(図版4、第17図)

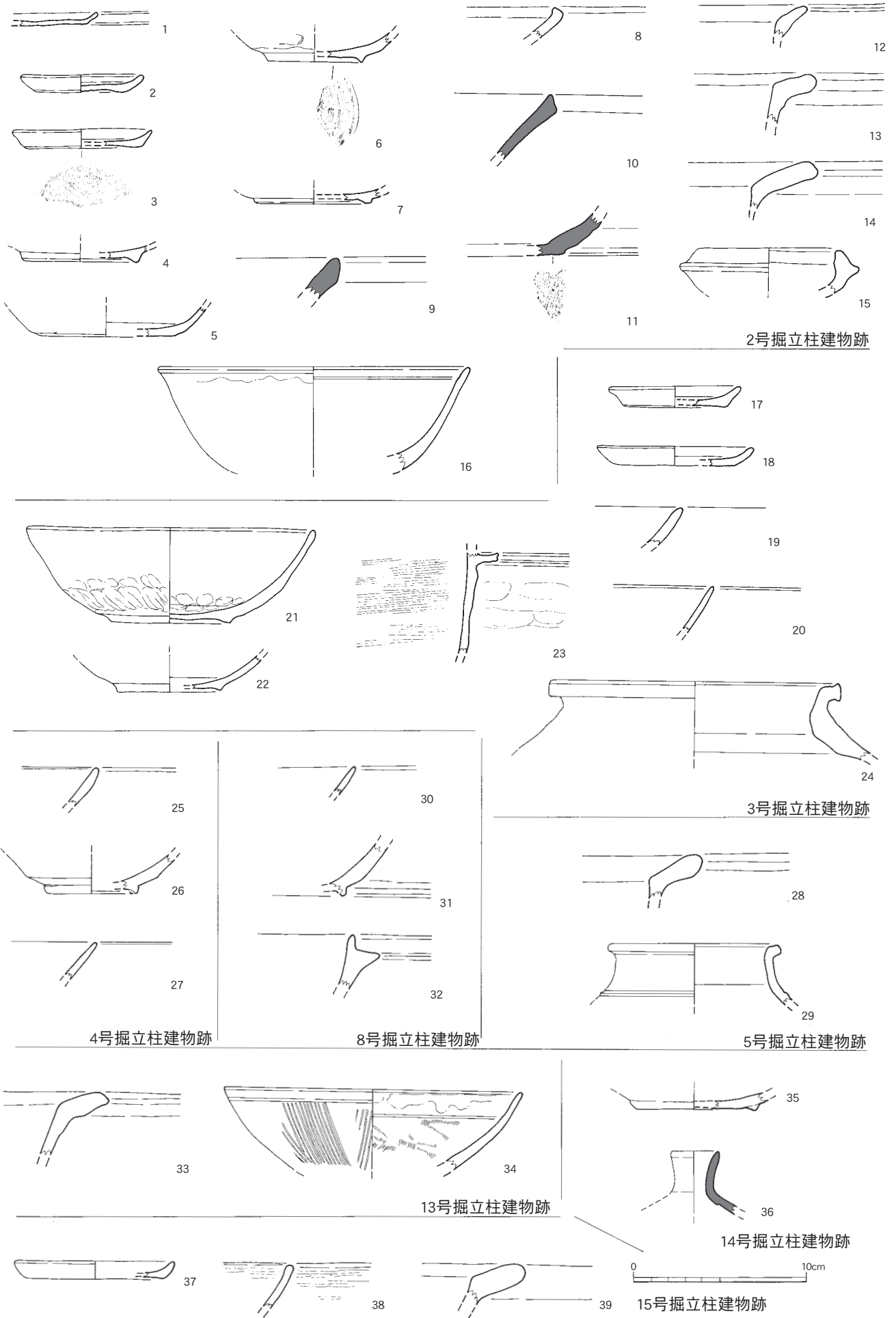
調査区中央部の柱穴集中部から検出された1×4間の建物で、梁行330cm、桁行610cm。桁行の柱間は135~180cmとばらつきがある。柱穴は径25cm~30cmで、深さは25~35cm程あり、根締石が



第14図 1区11~13号掘立柱建物跡・1号柵跡実測図(1/80)



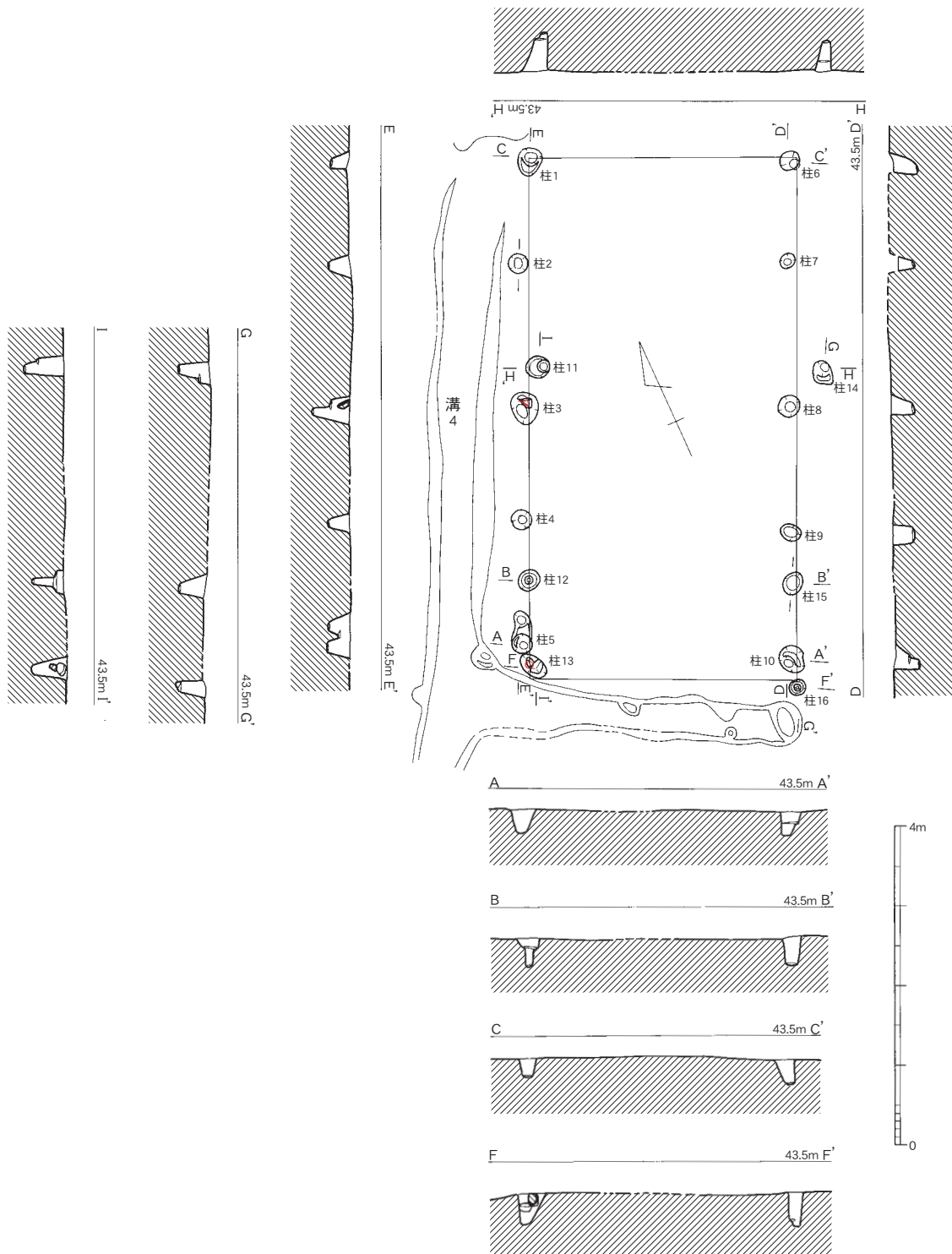
第15図 1区14・15号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第16图 1区2~5·8·13~15号掘立柱建物跡出土土器·陶磁器实测图(1/3)

入るものも見られた。柱穴が小さく、柱根は確認できていない。南半分には同一直線上に並ぶ柱穴が多く存在しているが、重複する建て替えの建物を復元することができなかった。しかしながら、南側の柱穴は建て替えの可能性が高く、南側だけを修理したと考えた。

建物の南北西辺に沿って4号溝状遺構が近接しているが、位置関係から区画溝ではなく本建物の雨落ち溝であろう。主軸方向はN-26°10'-Eで1号掘立柱建物跡に近く、出土した瓦器碗の傾きが大きく、2の高台の小さいことから13世紀後半から14世紀前半の所産と見られ、1号掘立柱建



第17図 1区16号掘立柱建物跡実測図(1/80)

物跡と時期が符合する。

また、建物中央に焼土と炭化物を多く含む21号土坑があるが、建物より古い時期のものである。25・26号土坑とも切り合うが、先後関係はわからなかった。

出土遺物(第21図)

1は柱2出土の瓦器椀で、外面口縁部から内面は灰黒色、胴中位は灰白色を呈する。2は柱5出土の瓦器椀で、内外黒灰色を呈する。

17号掘立柱建物跡(図版4、第18図)

調査区中央南部の柱穴集中部から検出された1×1間の建物で、梁行は220・240cm、桁行は250・270cmでばらつきがある。柱穴は径25cm～55cmで、深さは25～40cm前後を測り、柱1に根締石が入っていた。柱穴が小さく、柱根は確認できていない。柱穴の深いものから復元したので、不確実な建物である。時期を特定できる遺物がなく、主軸方向もN-82°20'-Wで一致するものがないため、時期不明である。

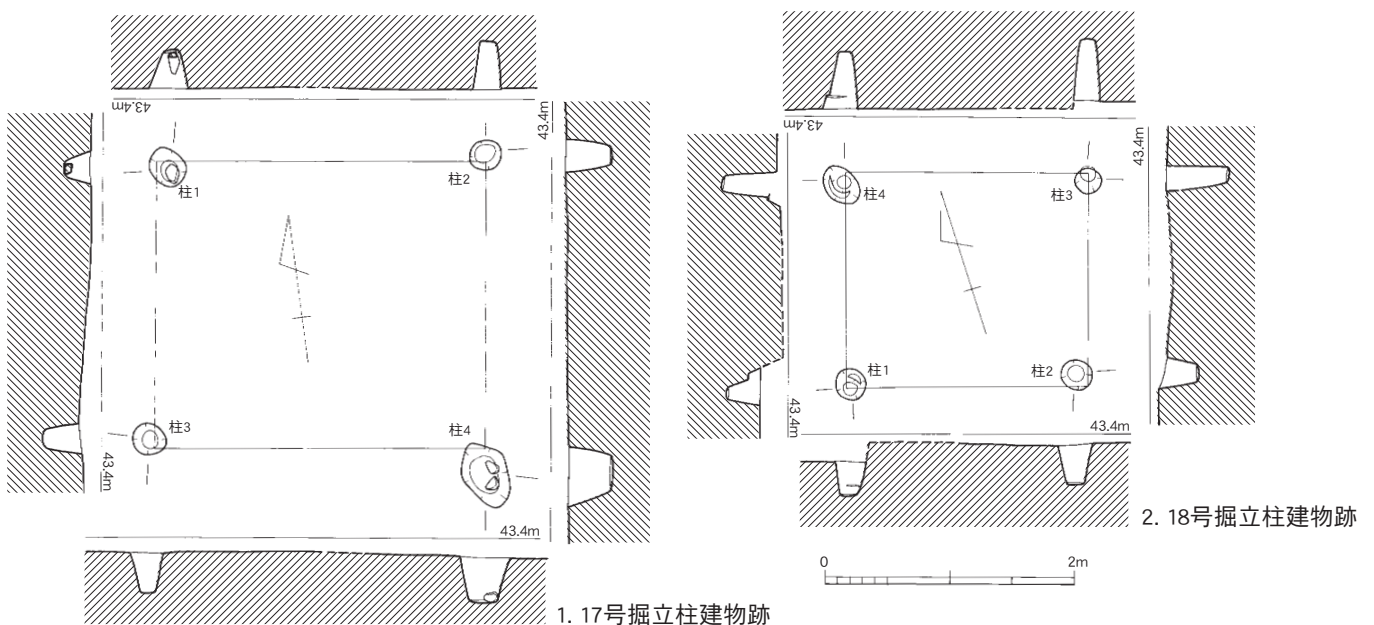
18号掘立柱建物跡(図版4、第18図)

調査区中央部から検出された1×1間の建物で、梁行110cm、桁行185cmを測る。柱穴は径20cm～35cmで、深さは40～55cm程残っており、周辺の柱穴より深いものなので、復元できた。柱穴が小さく、柱痕は確認できていない。柱4は14号土坑と、柱2は5号溝状遺構と切り合うが、先後関係は不明瞭だったが、柱1は8号土坑を切っていた。

出土遺物が少ないが、3の瓦器椀の高台の高さと、4の土鍋の口縁の傾きの大きさ、長さから12世紀後半代と見られる。12世紀中葉の8号土坑より新しく、5号溝状遺構より古いので、時期的には符合する。主軸方向はN-71°20'-Wである。

出土遺物(第21図)

3は柱2出土で、内面は黒色、外面は黄白褐色を呈することと高台の形状から黒色土器か。4は柱3出土の土鍋で外面黒灰色、内面茶灰褐色を呈し、外面口縁部は煤が付着する。

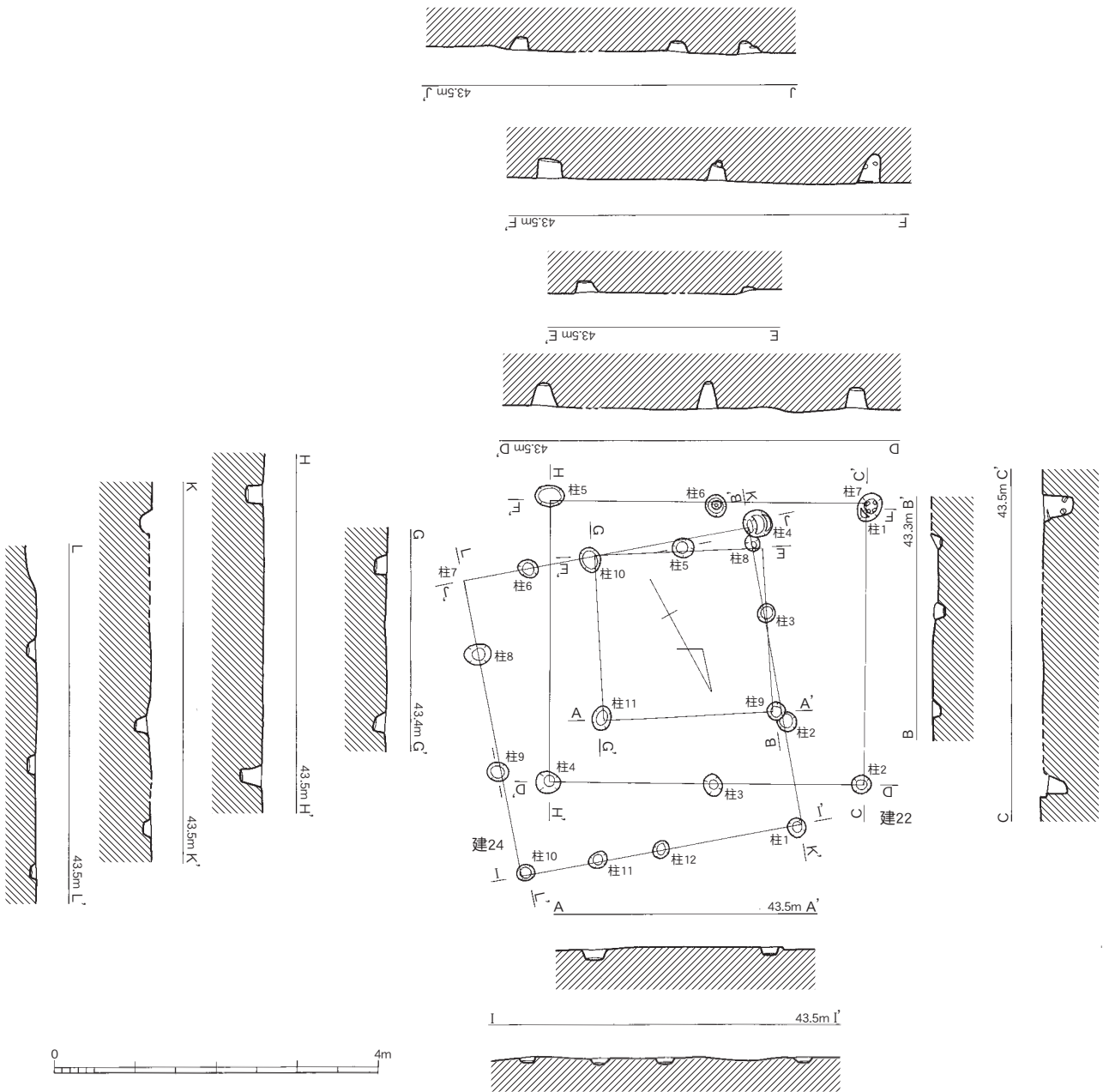


第18図 1区17・18号掘立柱建物跡実測図(1/60)

22号掘立柱建物跡(図版1、第19図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された1×2間の内部に1×1間の身舎部をもつ建物で、梁行350cm、桁行390cmを測る。桁行の柱間180・200cm、身舎部は梁桁共に200cmである。柱穴は径25cm前後で、深さは20~30cm程だが、身舎部は15~20cmと浅い。整然と並ぶことから明瞭に復元できた。柱痕は検出されており、抜き取りはない。

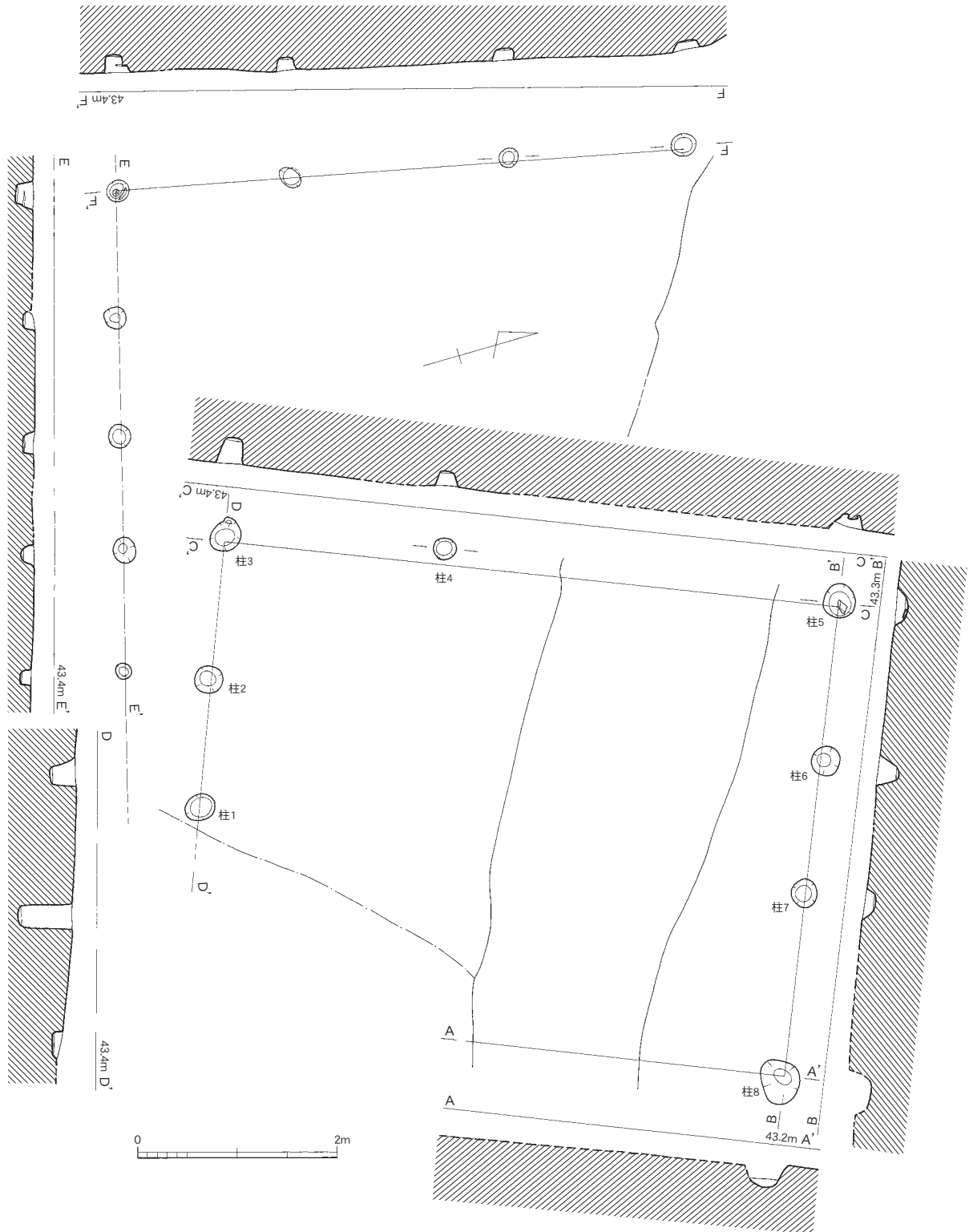
出土遺物がなく時期を特定できず、建物全体は24号掘立柱建物跡とは重複し、柱8は18号土坑と、柱9は25号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。柱9は24号掘立柱建物跡柱2を切る。14号掘立柱建物跡とは重複しており、主軸方向はN-60°50'-Wで8号掘立柱建物跡に近いので、時期的にも近いだろう。



第19図 1区22・24号掘立柱建物跡実測図(1/80)

23号掘立柱建物跡(図版1、第20図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された3×3間以上の建物で、中央を1号溝状遺構に切られる。梁行630cm、桁行480cm以上である。柱間は270~360cmとばらつく。柱穴は径35cm前後で、深さは10~30cm程である。周囲に規模の等しい柱穴が多く、1号溝状遺構に切られている



第20図 1区23号掘立柱建物跡・6号柵跡実測図(1/60)

部分が多いので、明瞭には検出できなかった。柱痕は検出されていない。

出土遺物の5の瓦器碗の内面にミガキが残り、高台が高く、6の土鍋の口縁の傾き、長さから、12世紀後半代の所産であろう。15号掘立柱建物跡とは近接しており、主軸方向はN-20°20'-Eで22号掘立柱建物跡に近いので、時期的にも近いだろう。

出土遺物(第21図)

5は柱2から出土した小型の瓦器碗で、内面の一部にミガキが残り、外面にオサエは見られない。内外青灰色を呈する。6は柱2から出土した土鍋で、色調が橙褐色を基調とするが、内面は使用のため灰茶褐色に変色している。

24号掘立柱建物跡(第19図)

調査区北東部の掘立柱建物跡の集中部から検出された3×3間の建物で、梁行350cm、桁行370cm、柱間は100~190cmとばらつきが多く、不均一な建物だが、整然と並ぶことから明瞭に復元できた。柱痕は検出できなかった。

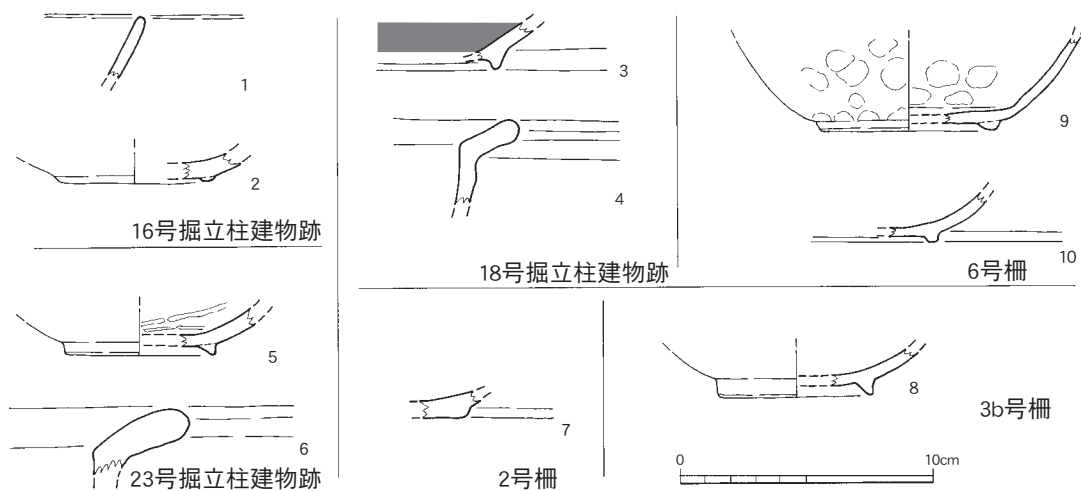
出土遺物がなく時期を特定できない。柱2は22号掘立柱建物跡柱9に切られ、柱9は25号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。23号掘立柱建物跡とは近接していることから共伴しない。主軸方向はN-71°10'-Wで1号掘立柱建物跡に近く、これと近い時期であろう

② 柵跡

掘立柱建物跡同様、多くの柱穴の中から復元したもので、8基の柵跡を検出した。

1号柵跡(図版3、第14図)

調査区南東部から検出された柱穴3基で構成される柵跡で、芯々で280cmを測る。周辺の柱穴の規模との比較から明瞭に検出できたが、東側の調査区外に展開する掘立柱建物跡の東辺という可能性もある。柱穴は径25cm前後、深さ30cm前後で、柱間は130・150cmを測る。柱2検出の川原石は



第21図 1区16・18・23号掘立柱建物跡、2・3b・6号柵跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)

埋土の上にあるもので、敷石や根締石ではない。

出土遺物がなく時期が特定できない。主軸方向はN-39° 40'-Eで11・12号掘立柱建物跡に近く、
時期的にも近いだろう。13号掘立柱建物跡とは重複する。

2号柵跡(図版2、第22図)

調査区東部から検出された柱穴2基で構成される柵跡で、芯々で245cmを測る。柱穴は径40cmだが、抜き取り穴が付き、柱痕は確認できなかった。深さ60cmで、周辺の柱穴の規模とは明らかに異なるので明瞭に検出できた。

出土遺物は7の土師器小皿しかなく時期が特定できないが、主軸方向はN-67° 30'-Wで4・5号掘立柱建物跡に近いので、時期的にも近いだろう。13号掘立柱建物跡とは重複する。

出土遺物(第21図)

7は柱2出土の土師器小皿で底部が肥厚するタイプであろう。内外黄灰白色を呈する。

3a号柵跡(図版4、第22図)

調査区中央部から検出された柱穴3基で構成される柵跡で、芯々で520cmを測る。柱間は200・300cmと不均一なので確実性に欠けるものの、径20~30cm、深さ30~50cmで周辺の柱穴より深いもので復元した。柱痕は確認できなかった。

出土遺物がなく時期がわからないが、主軸方向はN-28° 20'-Eで16号掘立柱建物跡と一致しており、16号掘立柱建物跡に付随していたと考えられる。

3b号柵跡(図版4、第22図)

調査区中央部から検出された柱穴2基で構成される柵跡で、芯々で290cm、柱穴は径45~60cm、深さ30~50cmで周辺の柱穴より深いもので復元した。柱痕は確認できなかった。主軸方向はN-27° 30'-Eで16号掘立柱建物跡と一致しており、16号掘立柱建物跡の門と考えられる。

出土遺物(第21図)

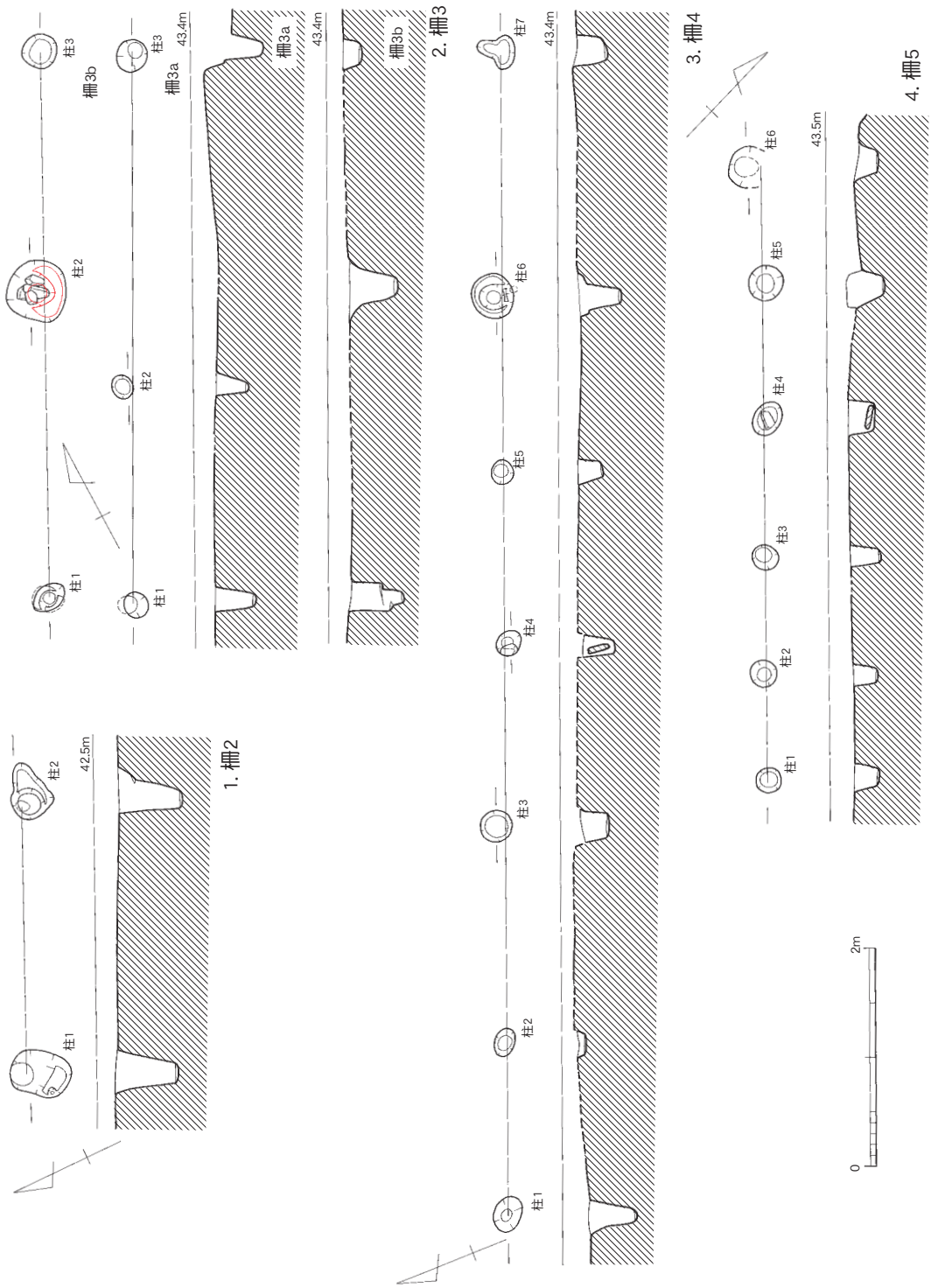
8は瓦器碗で、器面は摩滅と鉄分の付着のため調整不明。内外青灰白色を呈する。

4号柵跡(図版2、第22図)

調査区中央部から検出された柱穴6基で構成される柵跡で、芯々で850cm、柱穴は径20~45cm、深さ30~50cmで柱間は155cmで均一である。周辺の柱穴より深いもので復元した。柱痕は確認できなかった。主軸方向はN-68° 40'-Wで1号掘立柱建物跡と一致しており、1号掘立柱建物跡の目隠し塀と考えられる。

5号柵跡(図版1、第22図)

調査区中央北部から検出された柱穴5基で構成される柵跡で、芯々で455cm、柱穴は径25~35cm、深さ25cmを測る。柱間は95~125cmで不均一だが、柱穴の大きさは均一である。北西端は1号溝状遺構に切られており、全長はわからない。1号溝状遺構に切られた掘立柱建物跡の南辺のみという可能性もある。柱痕は確認できず、柱4の底面には敷石が見られた。主軸方向はN-40° 30'-Wで1号掘立柱建物跡と一致する遺構がないので、北に隣接する下尻高遺跡の遺構と一致するのかもしれない。



第22图 1区2~5号栅迹实测图(1/60)

6号柵跡(図版1、第20図)

調査区北東部から検出されたL字形の柱列で、南北軸柱穴4基以上、東西軸5基以上で構成される柵跡である。北は1号溝状遺構に切られ、東は調査区外に延びるが、柱穴の集中地帯なので、規模の近い柱穴から復元しているため、不確実である。また、掘立柱建物跡の一部の可能性もある。

芯々で南北軸570cm以上、東西軸480cm以上、柱穴は径20~25cm、深さ20~40cmを測り、柱間は180~220cmで不均一である。南北軸方向はN-12°10'-Eで2号掘立柱建物跡と一致し、東西軸はN-74°0'-Wで14号掘立柱建物跡と一致するので、角にあたる柱穴がどちらかに所属する別々の柵跡かもしれない。出土遺物から13世紀後半か。

出土遺物(第21図)

9・10は柱5から出土した瓦器碗で、9は外面が黄灰白色、内面が暗黄灰白色を呈しており、瓦器の色調ではないが、胴下半が内外オサエなので土師器ではなく、焼成不良の瓦器であろう。10は内外器面摩滅のため調整不明だが、オサエは見られない。

7号柵跡(図版2、第9図)

調査区北東部から検出された柱穴3基で構成される柵跡で、芯々で405cm、柱穴は径28~35cm、深さ30~35cmで、柱間は200cmを測る。柱穴の大きさと柱間が均一なので、柵として復元した。柱3には根締石が見られた。

主軸方向はN-17°10'-Eで3号掘立柱建物跡と一致するので、3号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。また、柱の規模は掘立柱建物跡のものに近いので、3号掘立柱建物跡の庇になる可能性もある。

③土坑

1号土坑(図版5、第23図)

調査区北東部の2号掘立柱建物跡の南から検出された平面略楕円形の土坑である。北西部は西に延びていた可能性もある。長軸186cm、短軸153cm、深さ8cmを測る。床面はほぼ平坦で、4号柵跡柱6との切り合い関係は不明である。

出土した2の瓦器碗の胴下位が張り出しており、3・4の土鍋の口縁の傾き、長さから12世紀後半代であろう。

出土遺物(第25図)

1は土師器小皿で、外底は糸切り痕が残る。内面は煤が付着することから灯明皿として使用されたことがわかる。2は瓦器碗で、外面は板状工具のオサエが見られ、内外黒灰色を呈する。3・4は土鍋で、3は外面灰褐色、内面黄橙色を呈し、外面口縁部は煤付着。4は内面にヨコハケがあることから搬入品であろう。

2号土坑(図版5、第23図)

調査区中央から検出された平面長方形の土坑である。長軸130cm、短軸72cm、深さ5cm程の小型土坑で、ピットといってもよいものであるが、遺物の出土状態が目目されたので土坑とした。1号掘立柱建物跡柱8との切り合い関係は不明である。

出土した6・7の土師器小皿の器高の低いことや、9の土師器皿の傾きが小さいことから12世紀

後半代であろう。

出土遺物(第25図)

5～8は土師器小皿で、5は外底に糸切り痕が残り、外面は橙色だが内面は黄灰褐色なので、使用変色の可能性がある。6・7は外底に糸切り後板状圧痕があり、変色はない。8が黄灰白色なのは焼成不良と考えられる。外底糸切り痕あり。9は土師器皿で、外底は糸切り後板状圧痕、外面胴部は2段のヨコナデ。

3号土坑(図版5、第23図)

調査区中央の2号掘立柱建物跡の南から検出された平面方形の土坑である。長軸148cm、短軸120cm、深さ12cmを測る。整った方形であるが、墓らしい痕跡はなかった。

出土遺物の10・11の土師器小皿の器高が低いことや、15の羽釜の鏝が断面方形に近い形態であり、17の玉縁口縁の白磁碗と思われる底部があることから12世紀後半代であろう。

出土遺物(図版13、第25図)

10は土師器小皿で、外底は糸切り後板状圧痕、内面から外面口縁部は黄橙色で、外面が淡暗橙灰色なのは焼成不良のためだろう。2次変色はなし。11は土師器皿で、内外黄橙色。外底は糸切り後の板状圧痕があったと思われるが摩滅している。12は土師器碗で、外面は黄灰白色から淡黄灰白色。内面は淡灰色。内面は板状工具のオサエ、外面はオサエの上にミガキ。

13・14は瓦器碗で、13は外面胴下位に板状のナデ。内面はミガキが入る。外面口縁部より下は黄灰白色で土師器のようだが、外面口縁部から内面口縁部は灰黒色、内面胴部は灰白色と灰黒色が斑に入り、内面底部は灰黒色を呈する。外底にはへう記号が残る。14は内外底が黒色なのは重ね焼きのための焼成不良のためだろう。外面灰白色、内面暗灰白色から黒灰色を呈する。15は土鍋で鏝下面から下に煤が付着する。器壁が薄い器面は残っている。

16・17は白磁碗で、16は見込みに蛇ノ目釉剥ぎと砂目が付着する。外面高台部分は露胎。17は、外面高台部分は露胎。畳付は内傾する。乳白色の白磁釉。

4号土坑(図版5、第23図)

調査区北東部の2号掘立柱建物跡の南から検出された平面略方形の土坑である。長軸198cm、短軸145cm、深さ40cmである。3号掘立柱建物跡柱7との切り合い関係は不明である。

出土した19の羽釜は13世紀初頭のものだが、18の瓦器碗は13世紀中葉から後葉のものなので、13世紀中葉だろう。

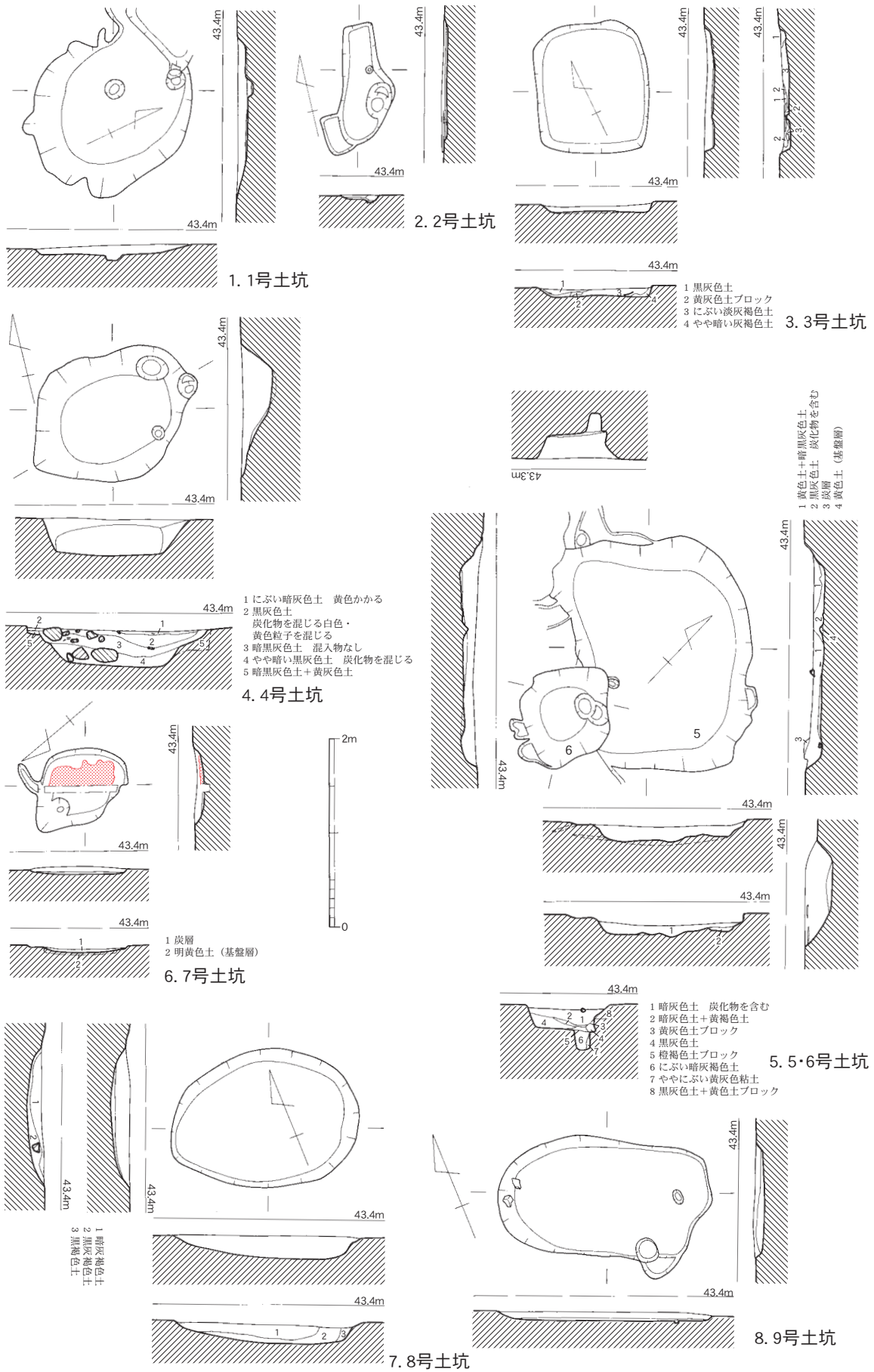
出土遺物(図版13・18、第25・42図)

18は瓦器碗で、外面胴下半は板状のオサエ。内面は板状オサエの端部が残る。外面口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。19は土鍋で、外面は指オサエ、内面は目の細かいヨコハケ。外面は煤付き、内面は橙灰色を呈する。

5号土坑(図版6、第23図)

調査区中央東部の14号掘立柱建物跡の北から検出された方形の土坑である。長軸250m、短軸185cm、深さ20cmと浅く、床面の凹凸が大きい。6号土坑に切られている。

出土遺物の20の土鍋の口縁部の傾きと長さ、21の羽釜の鏝の長さから12世紀前から中葉であろう。



第23図 1区1～9号土坑跡実測図(1/60)

出土遺物(第25図)

20・21は土鍋で、20は内外面ナデ。口縁下は使用変色のため暗灰褐色を呈する。21は内外ヨコナデで、外面鍔下からは使用変色のためにぶい暗橙灰褐色に変色している。

6号土坑(図版6、第23図)

調査区中央東部の14号掘立柱建物跡の北から検出された略方形の小型土坑である。長軸98cm、短軸97cm、深さ20cmと浅く、4号掘立柱建物跡柱1は土層断面から切っているとわかった。あるいは抜き取り穴であった可能性もある。出土遺物がなく時期不明だが、12世紀前～中葉の5号土坑を切っている。

7号土坑(図版6、第23図)

調査区中央南部の5号溝状遺構の北から検出された略方形の小型土坑である。長軸95cm、短軸85cm、深さ8cmと浅く、床面は焼けておらず炭化物が広がるのみだった。出土遺物がなく時期不明。

8号土坑(図版6、第23図)

調査区中央南部の5号溝状遺構の北から検出された楕円形の土坑である。長軸205cm、短軸150cm、深さ23cmで、5号溝状遺構と接するが切り合いはわからなかった。床面は中央部が窪む。出土遺物の羽釜の鍔の長さ、土鍋の口縁部の傾きと長さから、12世紀中葉である。

出土遺物(第25図)

22・23は土鍋で、22は内外面とも器面摩滅。外面は鍔下面から使用変色のため暗灰褐色に変色している。23は内外ヨコナデで、外面は使用変色のためにぶい暗灰褐色に変色している。

9号土坑(図版2、第23図)

調査区中央の2号掘立柱建物跡の南から検出された平面小判形の土坑である。長軸225cm、短軸125cm、深さ12cmを測る。2号掘立柱建物跡柱19と重複するが、先後関係は不明である。出土遺物がなく、時期を特定できないが、2号掘立柱建物跡に伴わないことだけはいえる。

10号土坑(図版6、第24図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の南から検出された平面不整形の土坑である。長軸210cm、短軸150cm、深さ25cmで、4・5号溝状遺構を切る。南側に最深部をもつ。出土遺物は24の土鍋の口縁部の傾きと長さから、13世紀前半代だが、4・5号溝状遺構を切るなので、13世紀後半代か。

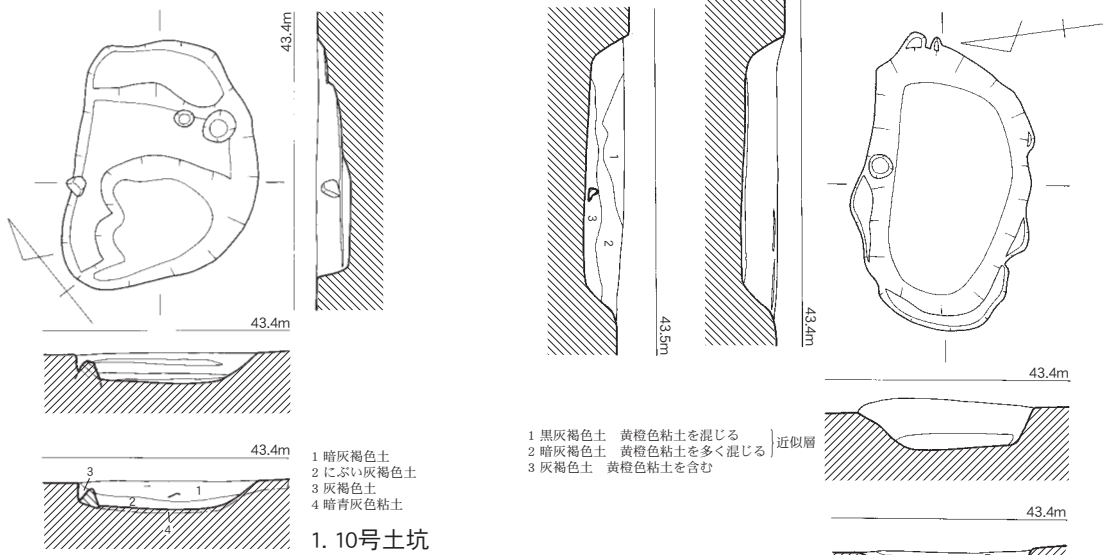
出土遺物(図版24、第25・43図)

24は土鍋で、外面は口縁部ヨコナデ、頸部はタテハケで、外面口縁下は使用変色のため暗黒灰色に変色している。

第43図15は管状土錘で橙褐色を呈し、6.0gを測る。

11号土坑(図版7、第24図)

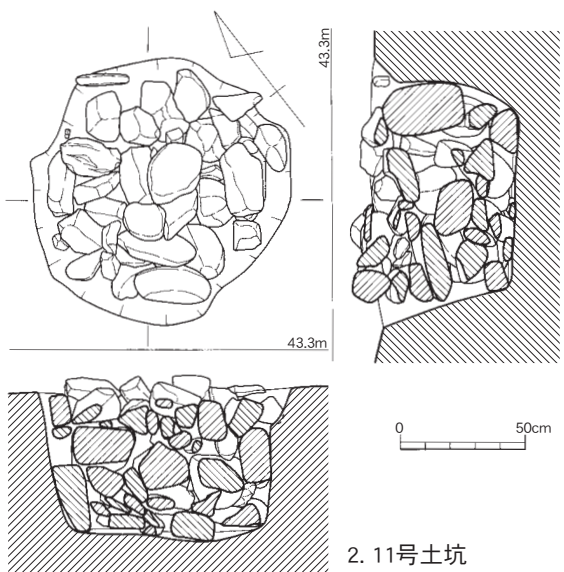
調査区東部の22号土坑の北東から検出された隅丸方形の土坑である。ほぼ大きさが等しい人頭大の礫が充填されていたが、床に敷いたり、壁沿いに組んだりしていない。長軸108cm、短軸105cm、深さ60cmを測る。出土遺物がなく時期不明だが、23号掘立柱建物跡に近接するので、共存しない



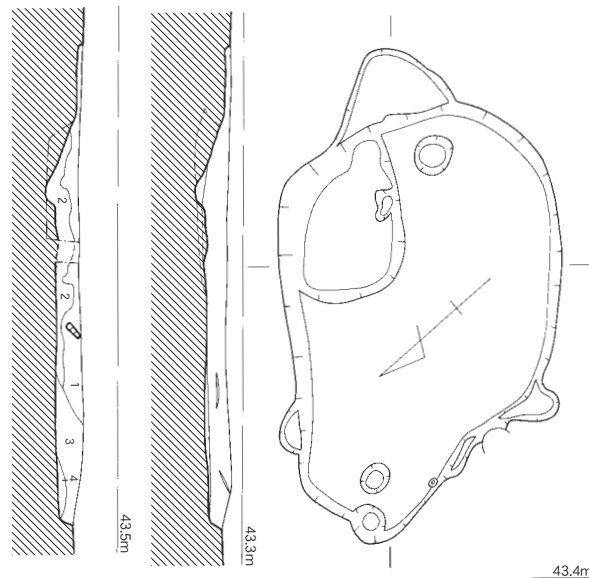
- 1 黒灰褐色土 黄橙色粘土を混じる
- 2 暗灰褐色土 黄橙色粘土を多く混じる
- 3 灰褐色土 黄橙色粘土を含む

近似層

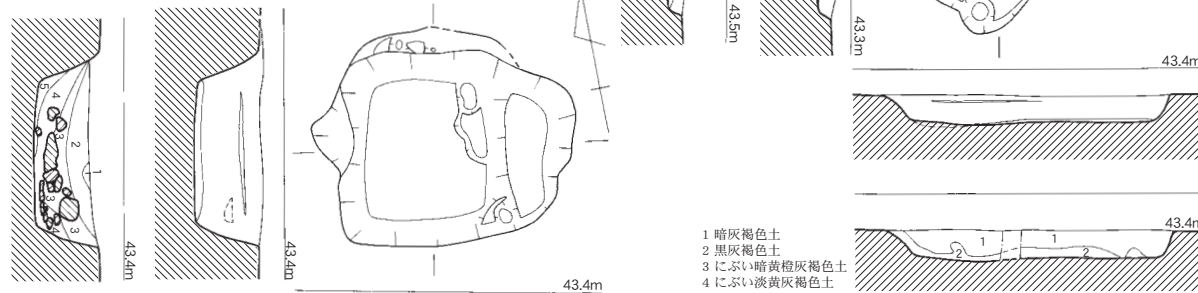
1. 10号土坑



2. 11号土坑

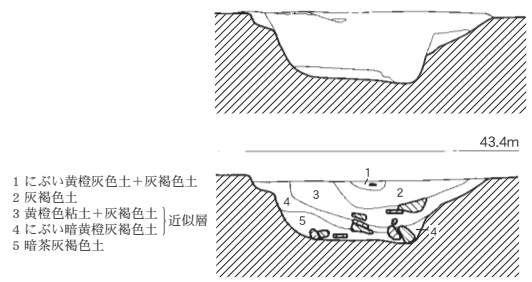


3. 12号土坑



- 1 暗灰褐色土
- 2 黒灰褐色土
- 3 にぶい暗黄橙灰褐色土
- 4 にぶい淡黄橙灰褐色土

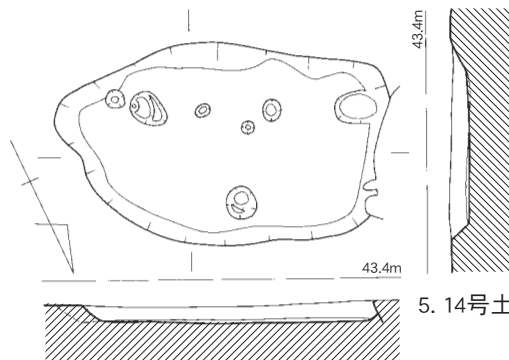
4. 13号土坑



- 1 にぶい黄橙灰色土+灰褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 黄橙色粘土+灰褐色土
- 4 にぶい暗黄橙灰褐色土
- 5 暗茶灰褐色土

近似層

6. 15号土坑



5. 14号土坑

ということがいえるのみである。

12号土坑(図版7、第24図)

調査区中央南部の10号土坑の南東から検出された小判形の土坑である。長軸222cm、短軸147cm、深さ35cmで、5号溝状遺構に切られる。14号土坑と近接するが、切り合いは不明である。出土遺物がなく時期不明だが、5号溝状遺構より古いとはいえる。

13号土坑(図版7、第24図)

調査区東部の10号掘立柱建物跡の東の遺構の希薄な空間から検出されたもので、不整形だが、方形の片端にテラスがついたと見ることもできる。長軸350cm、短軸270cm、深さ25cmと大型で、埋土は他の土坑の埋土より茶色が強く、時期が異なる可能性がある。

14号土坑(図版7、第24図)

調査区中央南部の12号土坑の東から検出された不整形の土坑である。長軸270cm、短軸163cm、深さ15cmを測る。5号溝状遺構と接するが切り合いがわからず、12号土坑と近接するが、切り合いは不明である。床面は平坦である。出土遺物がなく時期不明。

15号土坑(図版7、第24図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の内部から検出された方形の土坑で、東辺にテラスがある。長軸210cm、短軸175cm、深さ60cmで、16号掘立柱建物跡柱9と切り合うが、先後関係はわからなかった。出土遺物の土鍋から12世紀後半から13世紀前半代であろう。

出土遺物(図版24、第27・43図)

1は土鍋で、内外面は口縁部ヨコナデ、使用変色のため内外面口縁下は暗黒灰色に変色している。2は羽釜で、外面は鏝の下面以下が灰褐色に変色しているが、内面には変色が見られない。3・4は白磁碗で、形態に近いが同一個体にはならない。

第43図7は管状土錘で、灰白色を呈し混入物の少ない胎土である。3.6gを測る。

16号土坑(図版8、第26図)

調査区東部の14号掘立柱建物跡の内部から検出された楕円形の土坑で、南側にテラスがある。長軸143cm、短軸122cm、深さ25cmで、出土遺物がなく、時期については14号掘立柱建物跡と共存しないということしかわからない。

17号土坑(図版8、第26図)

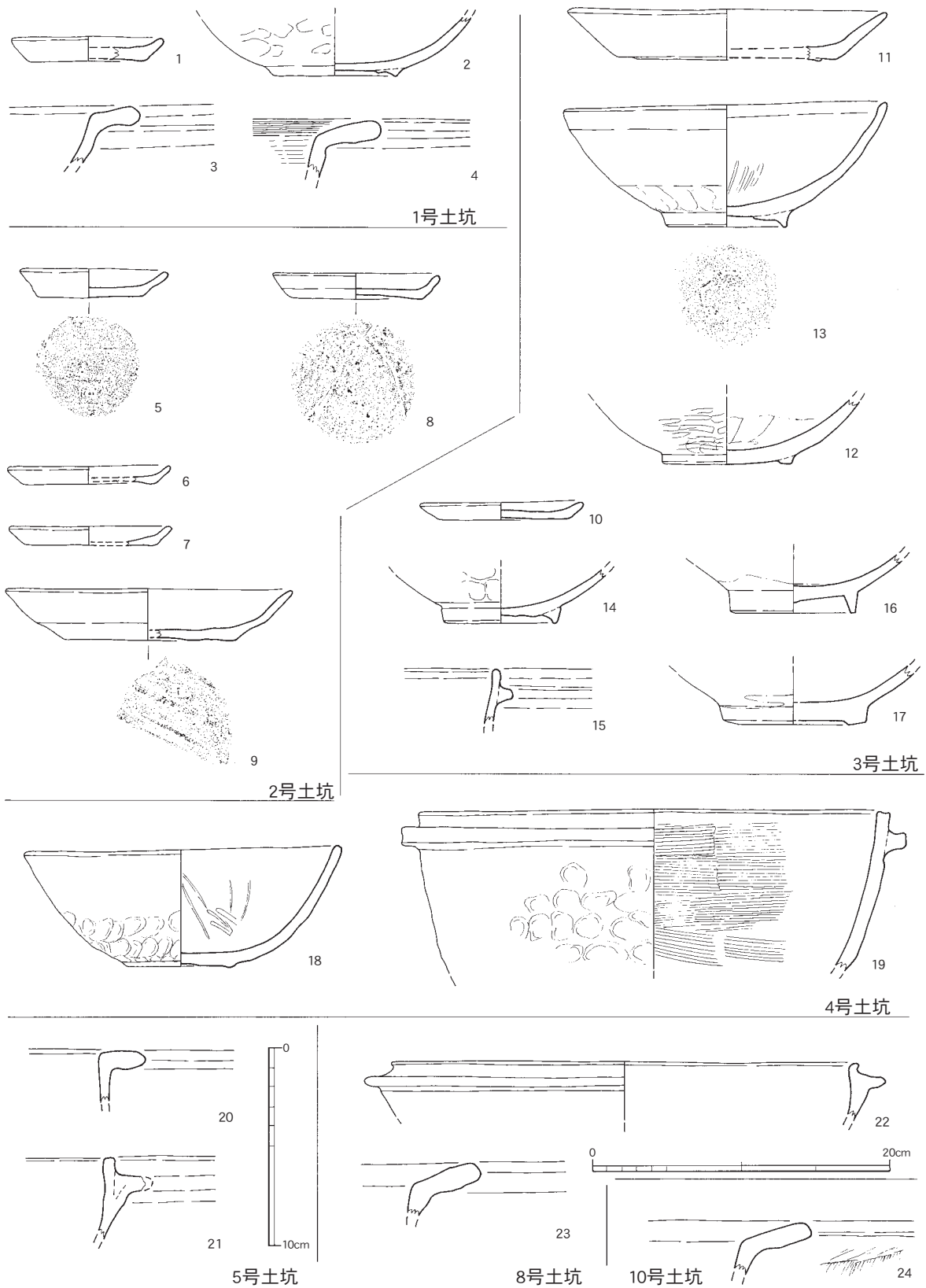
調査区中央南部の6号掘立柱建物跡の北側から検出された方形の土坑である。長軸220cm、短軸170cm、深さ35cmで、北西部に円形の最深部があり、本来別の土坑であった可能性もある。

出土遺物から12世紀後半から13世紀前半である。27号土坑と切り合うが、先後関係はわからなかった。

出土遺物(第27図)

5は瓦器碗で、底部の丸みは押し出し技法によるものである。内面底部には重ね焼き痕がある。6は羽釜で、外面は鏝の下面以下に煤が付着して灰黒褐色に変色しているが、内面は口縁下から変

色している。7・8は土鍋で、7の外側は肩部から煤の付着がなくなっている。8は使用変色のため外面口縁部は暗黒灰色に変色している。



第25図 1区1～5・8・10号土坑出土土器・陶磁器実測図(22は1/4、他は1/3)

18号土坑(図版 8、第26図)

調査区東部の22号掘立柱建物跡の西側から検出された平面略方形の土坑である。長軸180cm、短軸140cm、深さ15cmで、床面はほぼ平坦だが、不整形な北辺に向かって浅くなる。22号掘立柱建物跡柱8・9と切り合うが、先後関係はわからなかった。

19号土坑(図版 8、第26図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の北東部から検出された隅丸方形の土坑で、東辺にテラスがある。長軸140cm、短軸118cm、深さ13cmで、時期は特定できないが、20号土坑に切られていた。扁平な川原石が床面に接地して出土している。

20号土坑(図版 8、第26図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の北東部から検出された隅丸方形の土坑で、東辺にテラスがある。長軸172cm、短軸133cm、深さ23cmで、周囲にさらに大きく窪む範囲があり、そこも含めると規模が倍増する。時期は特定できないが、19号土坑を切っていた。4号柵との切り合い関係は不明だが、4号柵の直線上に本土坑とともに1・19・26号土坑があるので何らかの関係があるかもしれない。

21号土坑(図版 8、第26図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の内部から検出された長方形の土坑である。長軸208cm、短軸72cm、深さ15cmで、南側が最深部になる。炭化物と焼土が多く出土したが、床面は焼けていなかった。出土遺物から13世紀前半か。

出土遺物(第27図)

9・10は瓦器碗で、9は内外にミガキが残る。10は内面が灰黒色で、外面は黄灰色で一見すると黒色土器のようだが、胎土は瓦器である。

22号土坑(図版 2、第26図)

調査区中央の2号掘立柱建物跡の南東から検出された平面略小判形の土坑である。長軸203cm、短軸174cm、深さ25cmを測る。1号掘立柱建物跡柱7に切られる。弥生中期か。

出土遺物(第27図)

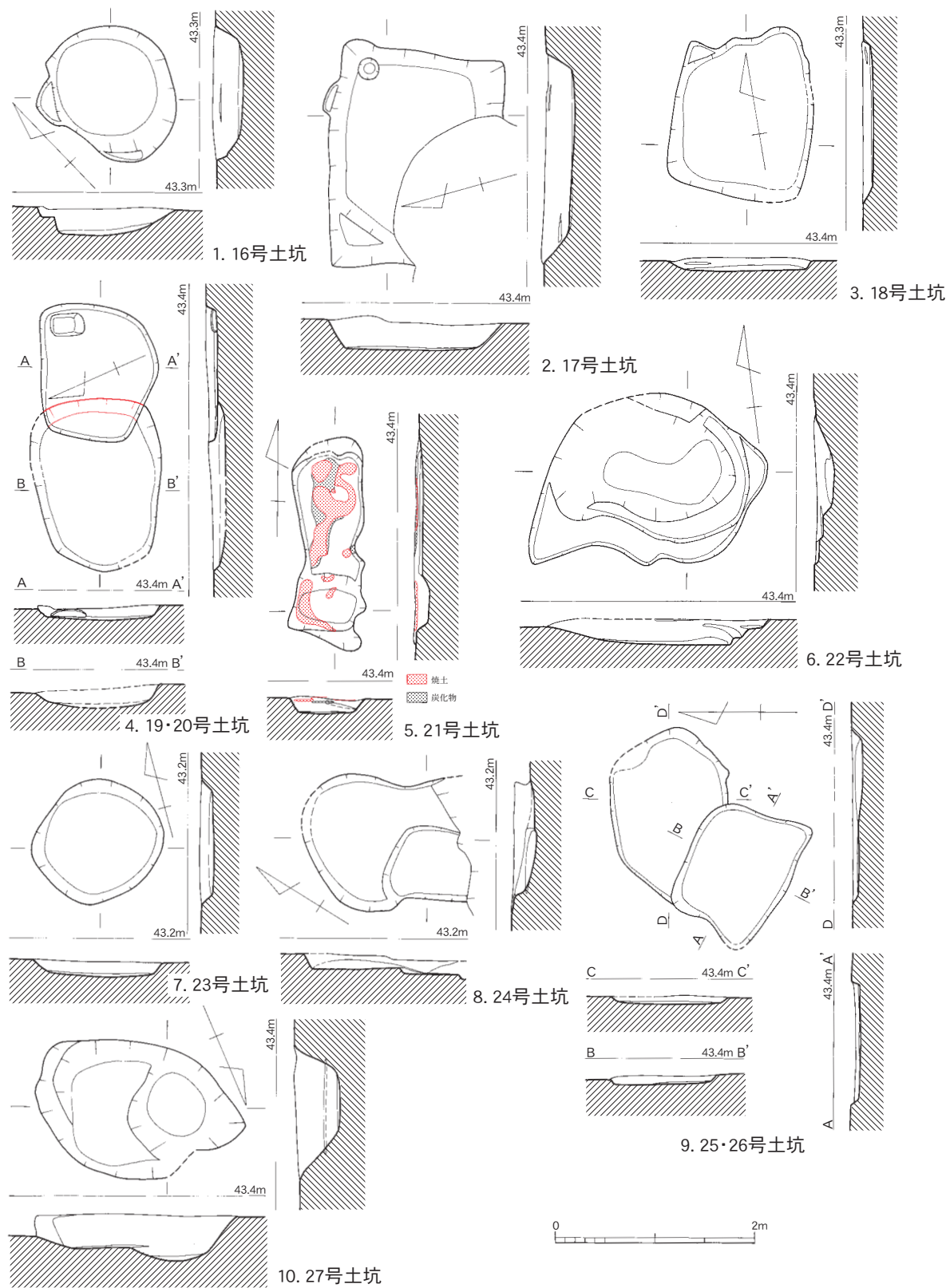
11は弥生土器の器台であろう。器面が摩滅して、ハケが見られない。

23号土坑(図版 8、第26図)

調査区南東部の11・12号掘立柱建物跡の北側内部から検出された円形の土坑である。径135cm、深さ15cmで、中央のピットは土坑に切られていた。出土遺物がなく時期は特定できず、11～13号掘立柱建物跡と重複しているので伴わないということがわかるのみである。

24号土坑(図版 8、第26図)

調査区南東部の11・12号掘立柱建物跡の北側内部から検出された小判形の土坑で、東半分が調査区外に出て、段落ちで削られている。長軸170cm以上、短軸140cm、深さ22cmで、出土遺物がなく時期は特定できず、11～13号掘立柱建物跡と重複しているので伴わないということがわかるの



第26图 1区16~27号土坑迹实测图(1/60)

みである。

25号土坑(図版8、第26図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の内部北東側から検出された方形の土坑である。長軸145cm、短軸155cm、深さ9cmで、床面はほぼ平坦だった。出土遺物がなく時期は特定できず、16号掘立柱建物跡柱7・26号土坑と切り合うが、先後関係はわからなかった。

26号土坑(図版8、第26図)

調査区中央南部の16号掘立柱建物跡の内部北東側から検出された小判形の土坑である。長軸180cm、短軸116cm、深さ10cmで、床面はほぼ平坦だった。

出土遺物がなく時期は特定できず、16号掘立柱建物跡柱6・25号土坑と切り合うが、切り合い関係はわからなかった。

27号土坑(図版8、第26図)

調査区中央南部の6号掘立柱建物跡の北側から検出された楕円形の土坑である。長軸210cm、短軸140cm、深さ45cmで、北西部に円形の最深部があり、本来別の土坑であった可能性もある。

出土遺物がなく時期は特定できず、17号土坑と切り合うが、先後関係はわからなかった。

出土遺物(第27図)

12は土鍋で、外面は口縁下から煤の付着。内面は摩滅のため調整不明。

④井戸

1号井戸(図版9、第28図)

調査区中央北部の1号溝状遺構西端の北から検出された平面楕円形の井戸である。長軸114cm、短軸92cm、深さ67cmを測る。壁と底面に川原石を貼ったもので、石を積み上げた状態ではなかった。床面には大きな川原石を置き、そこから壁に連続して石を重ねていくため、床面が丸みを帯びる。積み重ねていないため石と石の隙間は大きく裏込土が入っていた。出土遺物がなく、時期を特定できない。

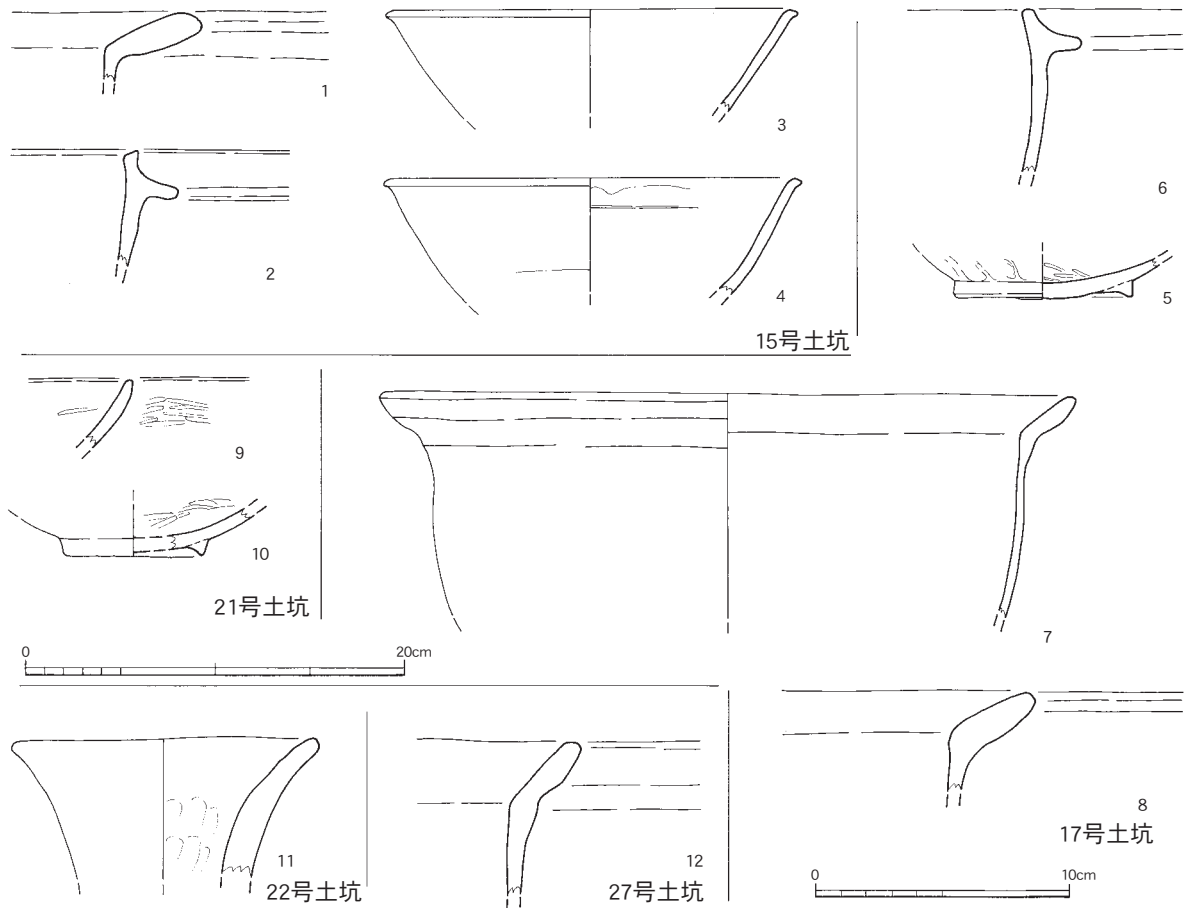
2号井戸(図版9、第28図)

調査区中央南端から検出された平面楕円形の素掘りの井戸で、径65cm、深さは70cmを測る。底面に基盤層内の石が露出していた。下層はグライ化しており、木製品が残っていた。5号溝状遺構を切っており、出土遺物は12世紀後半の所産だが、埋土に混入した可能性もある。

出土遺物(図版13・18・24・25、第29・42・43・46図)

1は瓦器碗で、残りがよく、内外ミガキが残る。底部は押し出し技法により丸みをもつが、板状工具のオサエ痕は残っていない。

第42図1は黒曜石製の剥片の長い側縁を横にし、下辺に刃をつけた剥片石器で、上辺には微細剥離がなく、小さいものなので、組み合わせて使用するものだろうか。第42図10・11は砥石片で、天草石製。10の使用面は上面のみで、下面は整形面。欠損面のうち1面は整形していることから、再利用している。11は上下に欠損面があり、それ以外は使用している。



第27図 1区15・17・21・22・27号土坑出土土器・陶磁器実測図(7は1/4、他は1/3)

第43図11は管状土錘で、灰白色を呈し混入物の少ない胎土である。7.6gを測る。

第46図6は杭で、木の枝を利用したもので、樹皮が残っている。2面を削って尖らせ、先端だけさらにケズリ面を増やして尖らせている。材質はサカキである。

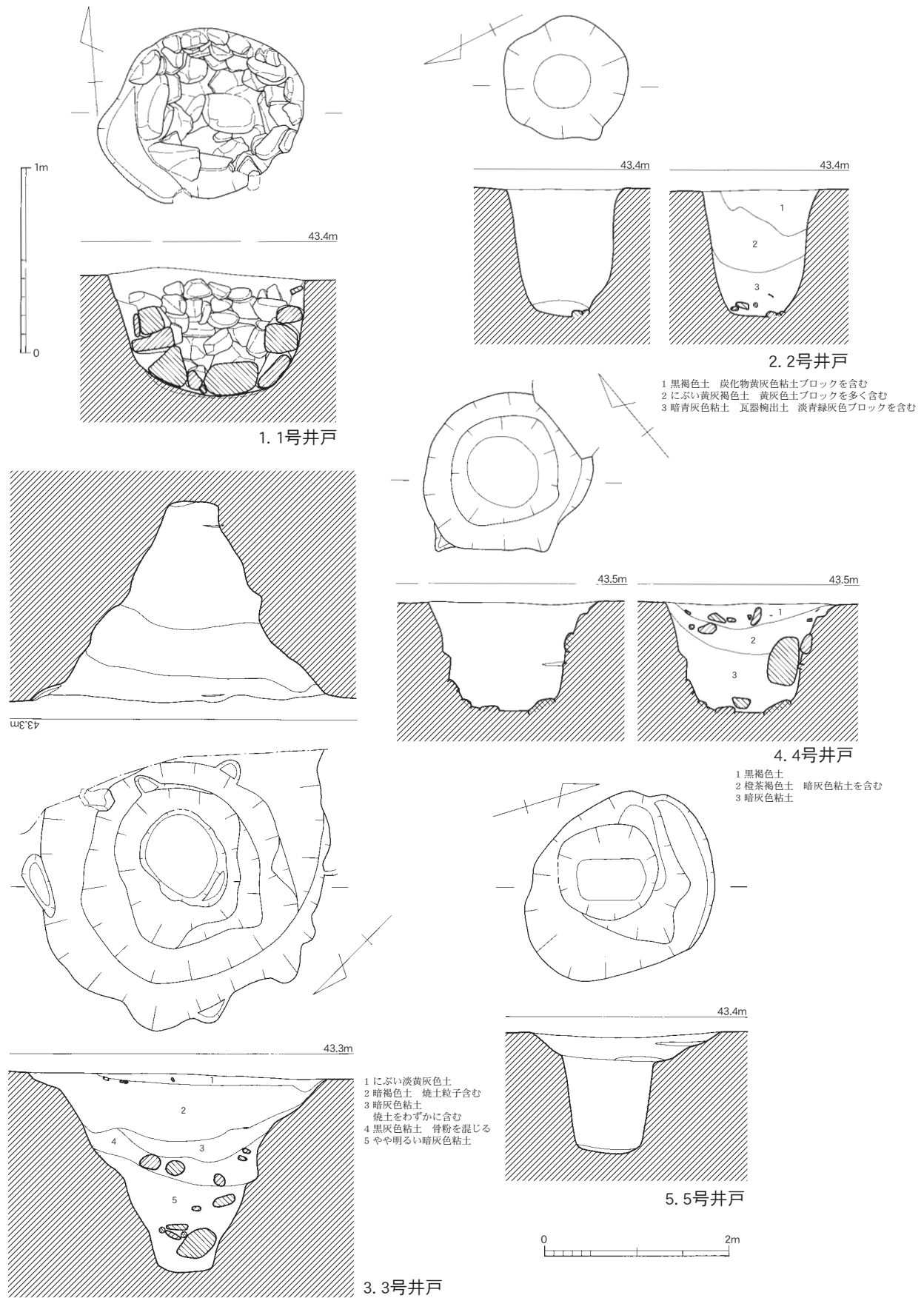
3号井戸(図版9、第28図)

調査区東端から検出された平面略円形の井戸で、東側が段落ちで失われているため不明確だが、径350cm、深さ215cmを測る。素掘りで、壁は緩やかな傾斜で、礫は入っていたものの壁面に石が積まれていた痕跡はない。底面は壁が直立し、中位では壁が平面方形になる部分もあったため、木の井戸枠が存在した可能性はある。

土層断面でみると、4層段階で掘り直しがあつたようで、壁に抉り込みがあつたが、それ以下はグライ化しており、木製品が残っていた。石に押し潰された竹籠状の編み物もあつたが端部が残っておらず取り上げられなかった。遺物量はやや多く、中央部から完形の瓦器椀が出土し、南側には青磁が集まっていた。時期幅があるものの、13世紀後半代であろう。

出土遺物(図版13・25・26、第29・42・44・47・49・50図)

第29図2は土師器皿で板状圧痕が明瞭に残る。3は瓦質の小皿で、底部は糸切り。4～7は瓦器椀で、いずれも残りよい。7の高台内にある凹線は板状圧痕だろう。内面口縁部の傷は箸痕か、8～10は土鍋で、8は防長産である。9は12のように弥生土器の可能性も考えたが、口縁下のみが変色する特徴から土鍋と考えた。11は弥生土器の小壺、12は弥生中期の甕であろう。13・14は東播系の須恵器である。16・18は同安窯系の青磁小皿で、17は口縁下に段をもつ青磁小皿である。



第28図 1区1～5号井戸跡実測図(1は1/30、他は1/60)

19～21は口縁部が小さく外傾する白磁碗。22・25は内面に片切り彫の花文が入る龍泉窯青磁碗。25の見込み文様は毛彫り状の細さでモチーフは不明。23は器壁が薄く特徴的な青磁碗で、淡明緑灰色を呈する。24は龍泉窯青磁碗の底部で、文様のない部分の破片の可能性もある。26は青磁の水注だろうか。27は白磁碗を転用した円盤状製品で、周縁を丁寧に打ち欠いている。

第42図1は黒曜石製の使用剥片で、1.9gを測る。10・11は天草石の砥石片で、10は174.4g、11は597.1gを測る。

第45図11は蓋の把手の部材である。側面は丁寧に面取りされている。第48図1・2・5・6は箱の部材で、1・2は短辺の側板で両側面に臍があると同時に、目釘で固定されている。長辺に入る方形の切り込みは仕切り板を挿し込むためのものか。2は折れた部分が元に戻らない。3は箱の長い側板で、方形の臍穴と目釘穴がある。長辺側の面には底板を固定するための目釘がある。5は底板で、周囲に目釘穴がある。6は欠損しているが長辺の長さが等しいのでこれらの箱の蓋であろう。表面側は平滑だが、裏面は加工時の凹凸が残る。第50図7は曲げ物のへぎ板のみである。第50図10は折敷とみられる薄い板材で、刃傷が多くみられ、まな板に転用されているか、本来まな板であったもの。13はえぶりで、柄の先端部分が残っている。材質はアカガシ亜属。第51図3は唐鋤で、柄と先端部が欠損している。下面には丸みがあり、中央に方形の穿孔があり、前側の柄が挿入されていたものと思われる。後ろ側の柄は残っていない。材質はアカガシ亜属。第51図3は唐鋤で、柄と先端部が欠損している。下面には丸みがあり、中央に方形の穿孔があり、前側の柄が挿入されていたものと思われる。後ろ側の柄は残っていない。材質はクリ。

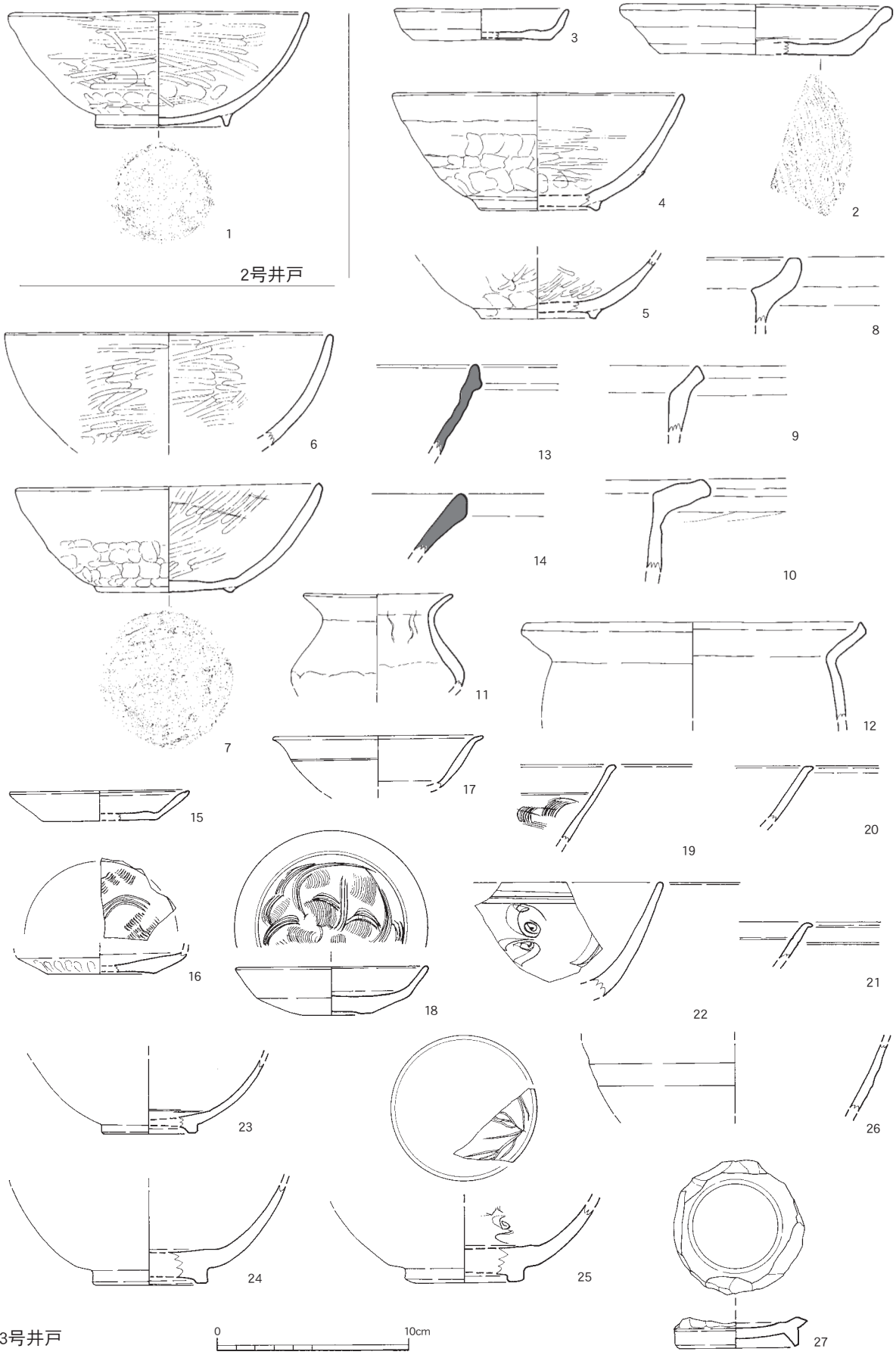
4号井戸(図版10、第28図)

調査区西部で検出された平面略円形の井戸で、径190cm、深さ115cmを測る。素掘りで、埋土に礫が入っていたものの、壁面に石が積まれていた痕跡はなかった。床面中央に大型の扁平な川原石が入っていたが、据えたものではないと考えて図化していない。出土遺物から13世紀前半代であろう。出土遺物(図版13・25、第30・42・47図)

第30図1・2は土師器小皿で、1は器面の摩滅が著しく、調整の観察不能。2は外面口縁部がナゲで屈曲し、内底に縦方向の幅の広いナゲが入り、精良な胎土をもつ。特徴があるので搬入品だろう。底部は糸切りで、板状圧痕あり。3は器壁の厚いもので、底部のみ黄灰白色なのは重ね焼きのためであろう。器面摩滅で調整不明。

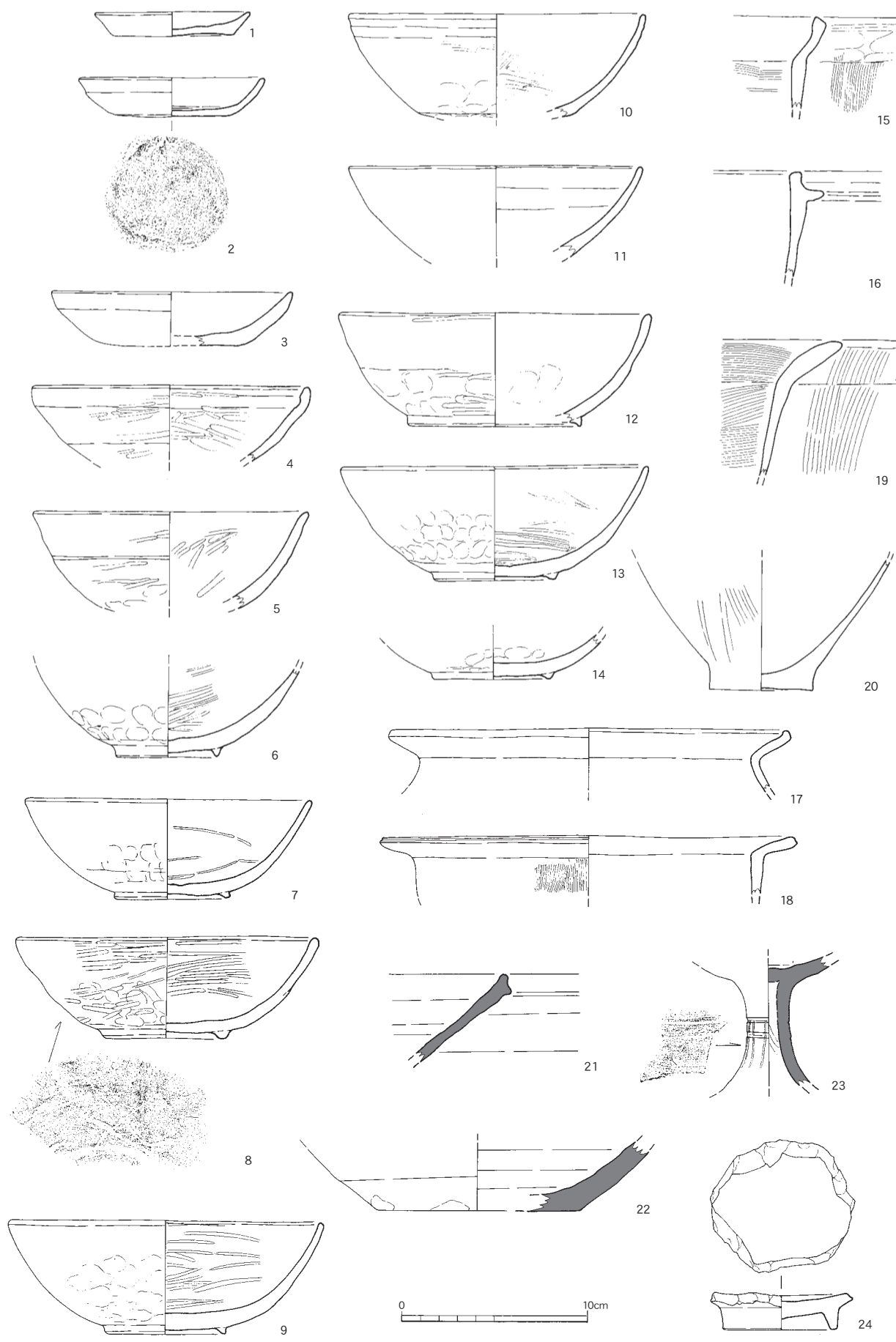
4～14は瓦器碗で、4は口縁部を明瞭に意図的に屈曲させたもので、特徴的である。5は器壁が厚く、外面胴部に沈線状の深い工具痕が入り、外面口縁部だけが黒化している。6は5と同様に横方向のケズリのような工具痕がある。外面の高台との接合部は稜をもつナゲの面がある。外面口縁部だけが黒化している。7はほぼ完形で、内面にミガキが残るが、底の中央は工具痕が残っていて未調整。8は9割残っており、外面胴下半の器面は押し出しによるヒビが多く入るが、ヒビとは異なる「×」か「キ」のへう記号が見られた。9は内外丁寧に仕上げられており、内面上半に箸痕らしい小さな傷が残る。10は胴下位に稜をもつ。11は器面摩滅で観察不能。12は8分の1ほどの小片で、やや歪みがあるので復元径と傾きは不正確。13は7と同様に、内面にミガキが残るが、底の中央は工具が残っていて未調整。14は器面摩滅で観察不能。

15は土師質の土鍋で、外面に煤が付着する。16は土師質の羽釜で、雲母を多く混入する。鏝下に煤が付着する。17から20は弥生土器の甕で、19は中世前期の土鍋の可能性もあるが、器壁が厚く、頸部の屈曲が滑らかなことから、弥生後期の鉢と考えた。20は器面摩滅で観察不能。21・22



3号井戸

第29図 1区2・3号井戸出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第30图 1区4号井戸出土土器・陶磁器实测图(1/3)

は東播系須恵器の鉢で、重ね焼きのため外面口縁部のみ灰黒色を呈する。22は底部糸切りだが、端部はナデが入る。23は古墳時代後期の須恵器の高杯で、脚部に縦に3本の沈線が入るのはへラ記号だろう。24は白磁の底部を再利用した円盤状製品で内面側から周縁を打ち欠いており、斜めに面取りしているので縁が尖っている。

第42図9は滑石製石鍋片で、暗緑灰色の滑石を石材としている。口縁は歪みがあるので、復元径は不正確。内面の2から3本単位の沈線はノミ痕の上についているので、研磨段階についてたものか、使用時あるいは使用後の洗浄時のものだろう。再利用しようとした痕跡はない。454.1g。

第48図4は箱の長い側板で、方形の臍穴と目釘穴がある。長辺側の面には底板を固定するための目釘ある。

5号井戸(図版10、第28図)

調査区東部で検出された平面楕円形の井戸で、上位は浅い掘り込みで長軸225cm、短軸190cmだが、井戸本体は上位で1辺11mの隅丸方形プランで、底面は方形を呈する。深さ130cmで、素掘りだが、方形を呈するので、木枠が存在した可能性もある。

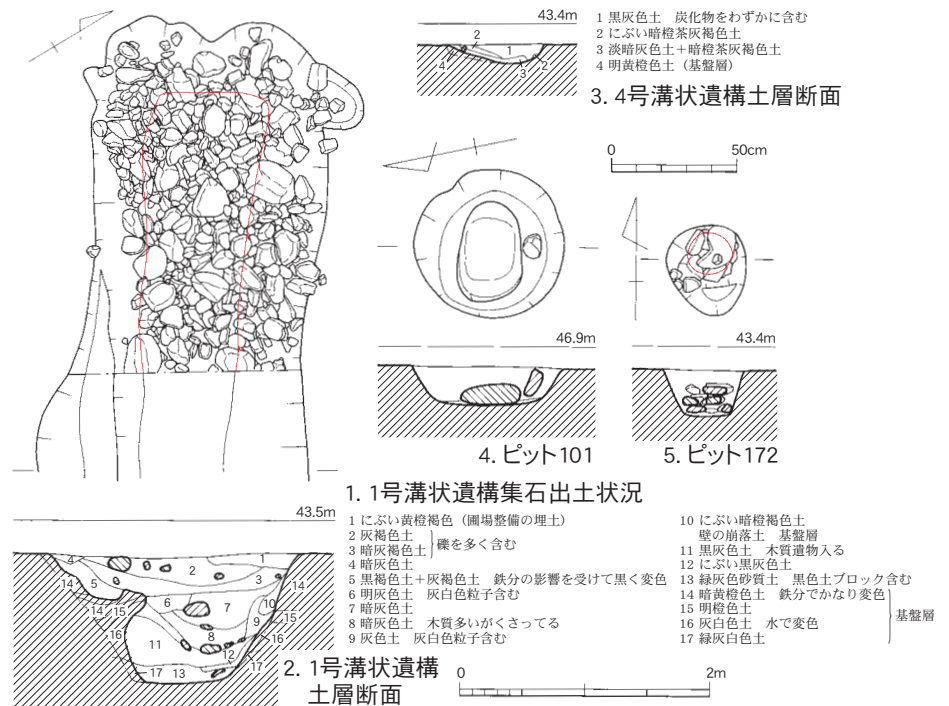
出土遺物がなく、時期はわからない。4号掘立柱建物跡柱4に切られていることがわかるだけだが、埋土は他の遺構より褐色が強く、検出も難しかったことから古い様相を呈する。

⑤溝状遺構

2・3号溝状遺構は下尻高遺跡で調査されたものと思われ、埋土は客土であったので、ここでは報告せず欠番とする。

1号溝状遺構(巻頭図版2・図版10~12、第5・31図)

調査区北部中央から東に検出された溝状遺構で、壁の立ち上がりは急で、幅約220cm、深さ約110cmあり、上位が削られていたことを考えると、防御性の高い堀と見てよい。東西両端も壁が立ち上がっており、水が流れる構造になっておらず、一定水量が溜まることが多かったものと思われる。壁が抉れる部分があるのは常に溜まる水位で壁が崩れるためで、そこから下位はグライ化している。それより上は意図的に埋め戻



第31図 1区1・4号溝状遺構土層断面、1号溝状遺構集石検出状況、ピット101・172実測図(4・5は1/30、他は1/60)

された土層と見られ、東西端部では埋め戻し土に伴って川原石が多量に検出された。川原石は敷かれたように検出されたが、面も石の大きさも揃っておらず、意図的に敷いたものではないと判断したが、端部に集中的に入れたことには何らかの意味があるのかもしれない。

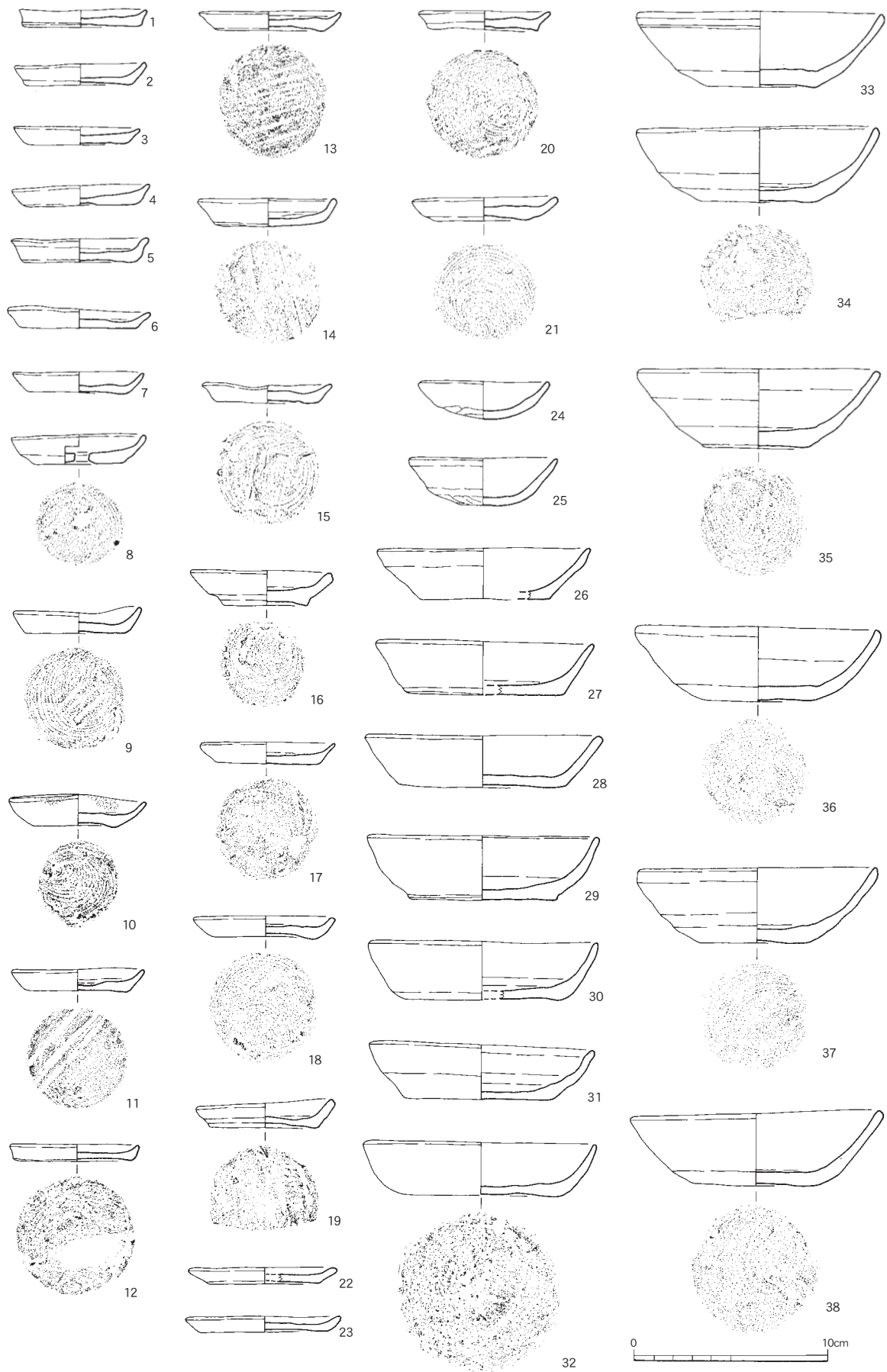
グライ化した下位層からは、多量の土器・陶磁器類と土製品、木製品、鉄滓(図版28-5)などが出土した。多数の土錘がまとまって出土しているが、すべては図化せずに表2に法量を掲載した。また、わずかながらイヌ、ウマの骨やハマグリ(図版28-4)が2点出土している。

木製品は鋤や鳴子、鞍と見られる多様な農具とともに祭祀具が出土している。取り上げることができなかったが、厚さ1ミリほどの薄い正方形の板も数枚見られた。写真のみ掲載したが、カヤ(図版28-1)や桜の樹皮(図版28-2)、葉(図版28-3)が粘土中にパックされた状態で残っていた。また、鑑定していないが、種子や松ぼっくり、玉虫の羽なども出土した。

出土遺物は古いものでは12世紀中葉から存在しているが、12世紀後半の遺構を切っているのも、それ以降の溝である。瓦器碗は胴下位が張り、高台がわずかに残る程度のもので多いことから、13世紀後半代のものであろう。13世紀後半から埋没が始まるが、14世紀前半代まで機能し続けていたようだ。完全に埋没するのは第37図1・3～6のような瓦質土器から15世紀後半代であろう。

出土遺物(巻頭図版2・3、図版13～28、第32～38・42～52図)

第32図1～25は土師器小皿、第32図26～第34図4は土師器皿で、1は口縁部がやや肥厚して内湾する小皿で、内外面は3段のナデで、外底は糸切り。内外黄白色で変色なし。2は口縁部をナデにより尖らせて、胴中位はナデ窪ませ、直線的に外傾する。外底は糸切り後板状圧痕。2次的変色あり。3は胴中位をナデ窪ませ、直線的に外傾する。外底は糸切り後板状圧痕。内外黄橙色で変色なし。4は内面胴以下はナデの窪みが大きい。外底は糸切り後板状圧痕である。板状圧痕には偏りが見られ、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。5は内外平滑にナデられており、外底は糸切り後板状圧痕である。6は外底糸切り後板状圧痕だが、板状圧痕には偏りが見られ、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。内面は平滑で、外面は3段のヨコナデ。7は外底糸切り後板状圧痕で、糸切りのため底部が偏っている。底部は器壁が厚く高台状になっている。外面は3段ヨコナデ、内面は平滑。灰黒色で、一部だけ灰白色を呈する。板状圧痕には偏りが見られ、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。8は傾きが直線的で器壁が厚い。器面が摩滅しているため調整不明で、外底も板状圧痕しか残っていない。9は口縁部が肥厚して内湾するもので、口縁部の肥厚部分の貼り付け痕が残る。10は内面に屈曲があるもので、外底は糸切りが見られたが板状圧痕は確認できない。内外暗黄灰色だが見込みだけ暗黄灰褐色を呈する。11は口縁部がやや外反するもので、外底は糸切り後板状圧痕。12は外底は糸切り後板状圧痕で、糸切りのため底部が偏っている。底部は器壁が厚く高台状になっている。内外面は3段ヨコナデ。13は口縁部がやや内湾しており、胴部がナデにより窪んでいる。直線的に外傾する。外底は糸切り後板状圧痕。14は胴部がナデにより窪んでおり、底部と胴部の接合部は丸みを持つ。外底は糸切り後板状圧痕で、板状圧痕は中央部に偏っている。15は外底部が上底のため輪高台状になっている。糸切り後板状圧痕で、板状圧痕は偏っており、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。口縁部に歪みあり。16は口縁部がやや内湾しており、胴部がナデにより窪んでいる。外底は糸切り後板状圧痕。板状圧痕は偏っており、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。17は底部と胴部の接合部は丸みを持つ。外底は摩滅のため切り離し技法不明。18はカクセン石の混入物の多い特徴的な胎土で搬入品であろう。19は黄灰白色を呈するのが特徴で、外底に目幅の広いハケのようなものが見られる。20は体部が屈曲しており、赤変あり。21は混入物が少なく精良な胎土が特徴である。22・23は扁平なタイプで、22には板状圧



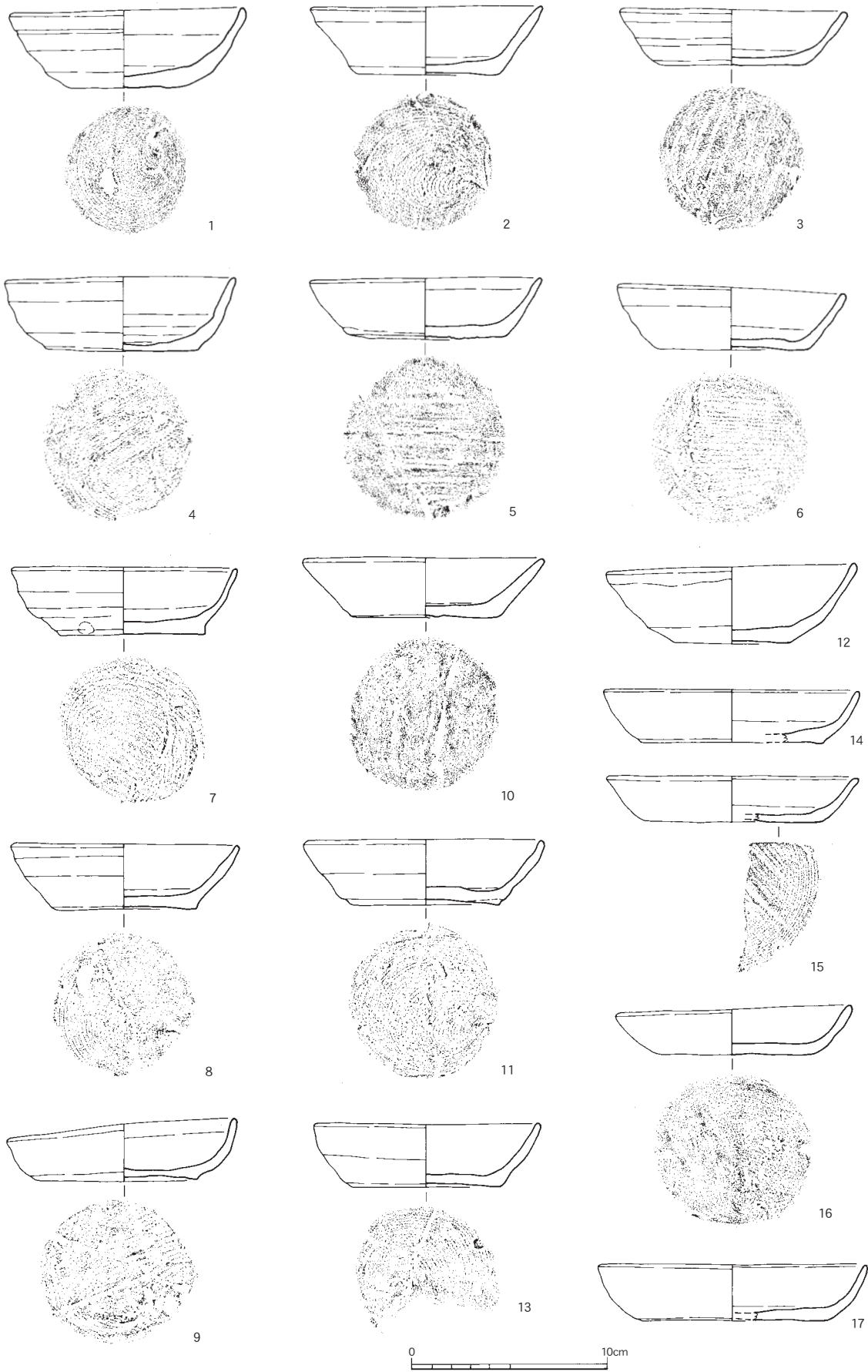
第32图 1区1号沟状遺構出土土器実測図1(1/3)

痕が残る。24・25は丸底の小型杯で外底はケズリ。24の口縁部の一部に煤が付着しているのが、灯明皿として使用されているが、25には見られない。26～32は皿で、26は底部が小さいもので、灰白色系の胎土である。28は外面の焼成による色調差が偏りを見せる。32は器面が摩滅しているが板状圧痕が残る。33～38と第33図1・9は体部に丸みがあり、口縁がやや内湾するもので、いずれも外底糸切り。内面は水引きの凹凸が残る。内面底部の縁に工具痕の沈線が入る特徴をもつので、同じ工人による製品かもしれない。

第33図1はほぼ完形で、外底は糸切りのみ。2は口縁が直線的に大きく開くもので、内外面に炭化物が付着するが2次的な影響だろう。橙褐色を呈し、搬入品の可能性がある。3～6は外底に板状圧痕と糸切りが残るもので、3は底面中央部にのみ板状圧痕が残る。4は内底中央の器壁が薄く胴下位内面に屈曲があるなど異質な器形なので、搬入品だろう。5は底部の4分の3に板状圧痕が見られる。6の外底には方形に焼成不良な範囲があり、そこに焼き台があった可能性がある。7～9は底部に向けて胴下位が湾曲するもので、口縁の一部に歪みがあり、外底は板状圧痕が半分だけに残る。10・11は口縁が直線的に開くもので、外底は摩滅しており、板状圧痕のみが残っている。10は内底に指状のナデによる凹凸がある。11は底部の一部だけが板状圧痕のため窪んでいる。12は外面に口縁部を肥厚させた痕跡が残る。13は胴下位が窪むところは7～9の特徴だが、口縁は湾曲するもの。14～17は口径の広い皿で、14はにぶい黄灰褐色に変色しているが、灯明皿にしては煤が付着していないので、2次的な影響を受けたものだろう。

第34図1は完形で、外底は糸切り後板状圧痕で、板状圧痕は偏っており、幅の狭い2枚の板の端部を使用したことがわかる。外面には部分的に煤が付着するが使用によるものではない。2は完形で、外底は糸切り後板状圧痕で、板状圧痕は筋の一部だけが残っている。口縁部に小さな窪みがあるが偶発的なものか。3は器高の低い皿であろう。外底は糸切り後板状圧痕で、板状圧痕は中央部分に残る。4は胴下位に丸みがある。外底は糸切り後板状圧痕。

5～17は瓦器碗で、5は外面胴中位以下は板状のオサエ痕が見られる。内面はミガキ、外面口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。6の外面胴中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面は摩滅しているがミガキだろう。外面口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。7の外面胴中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面上半はミガキ、下半は押し出し技法のオサエ痕があり、ヒビが入る。外面口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。8は外面胴中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面は摩滅している下半にはオサエ痕が残る。口縁部は灰白色、口縁下は灰黒色を呈する。9は外面上半にはミガキ、胴中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面は摩滅しており、箸痕らしい傷が残る。10は外面胴中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。オサエ痕には、ヒビが入る。内面は摩滅で調整は見られない。外面口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。11は外面胴上半はナデ、中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面上半はミガキ、下半にはオサエ痕が残る。口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。12は外面胴上半はナデ、中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面上半はミガキ、口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。13は外面胴上半はナデ、中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面上半はミガキ、下半はオサエ痕。縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。14は内外器面摩滅しているが外面中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面上半はミガキ、口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。15は

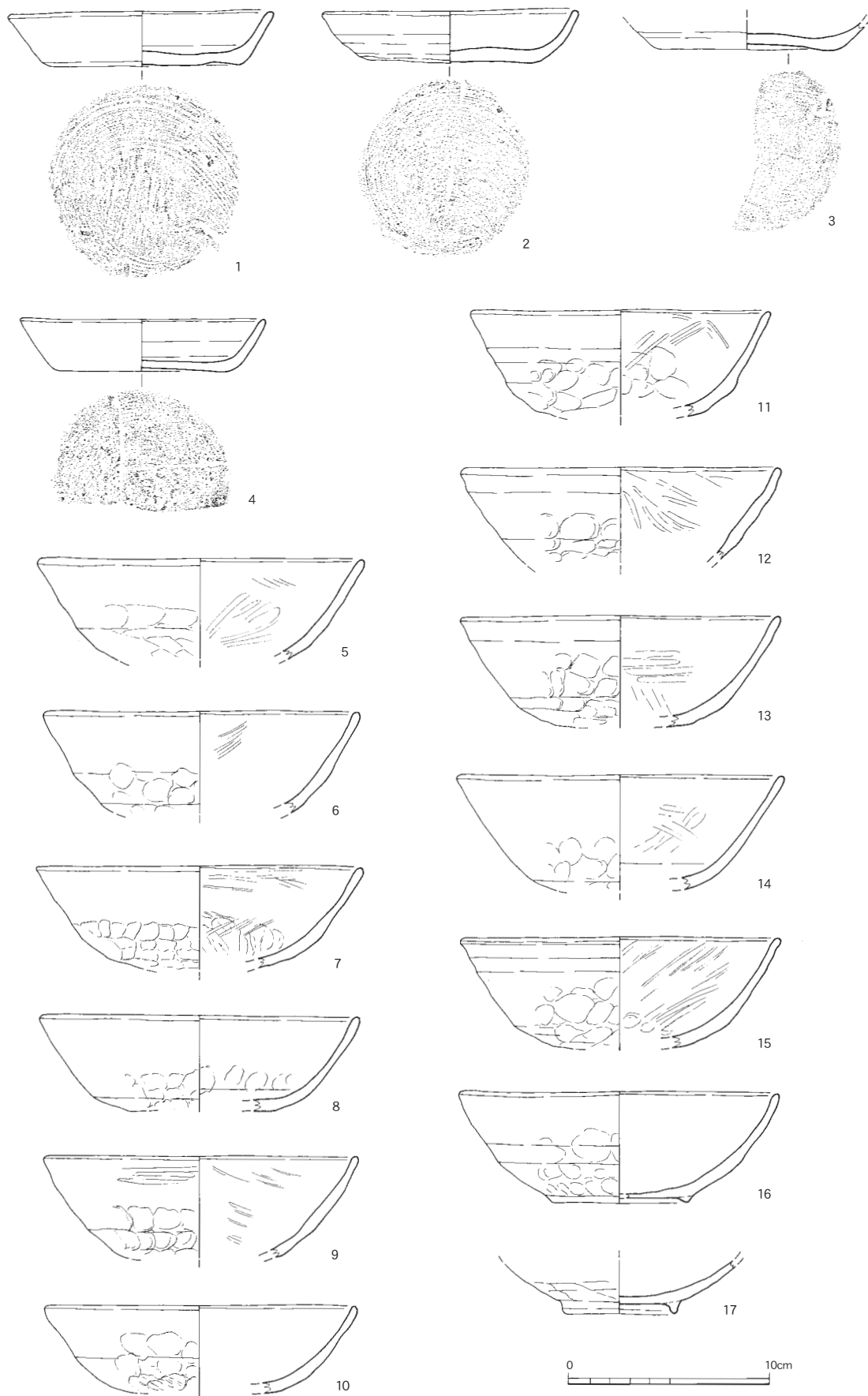


第33图 1区1号沟状遺構出土土器実測図2(1/3)

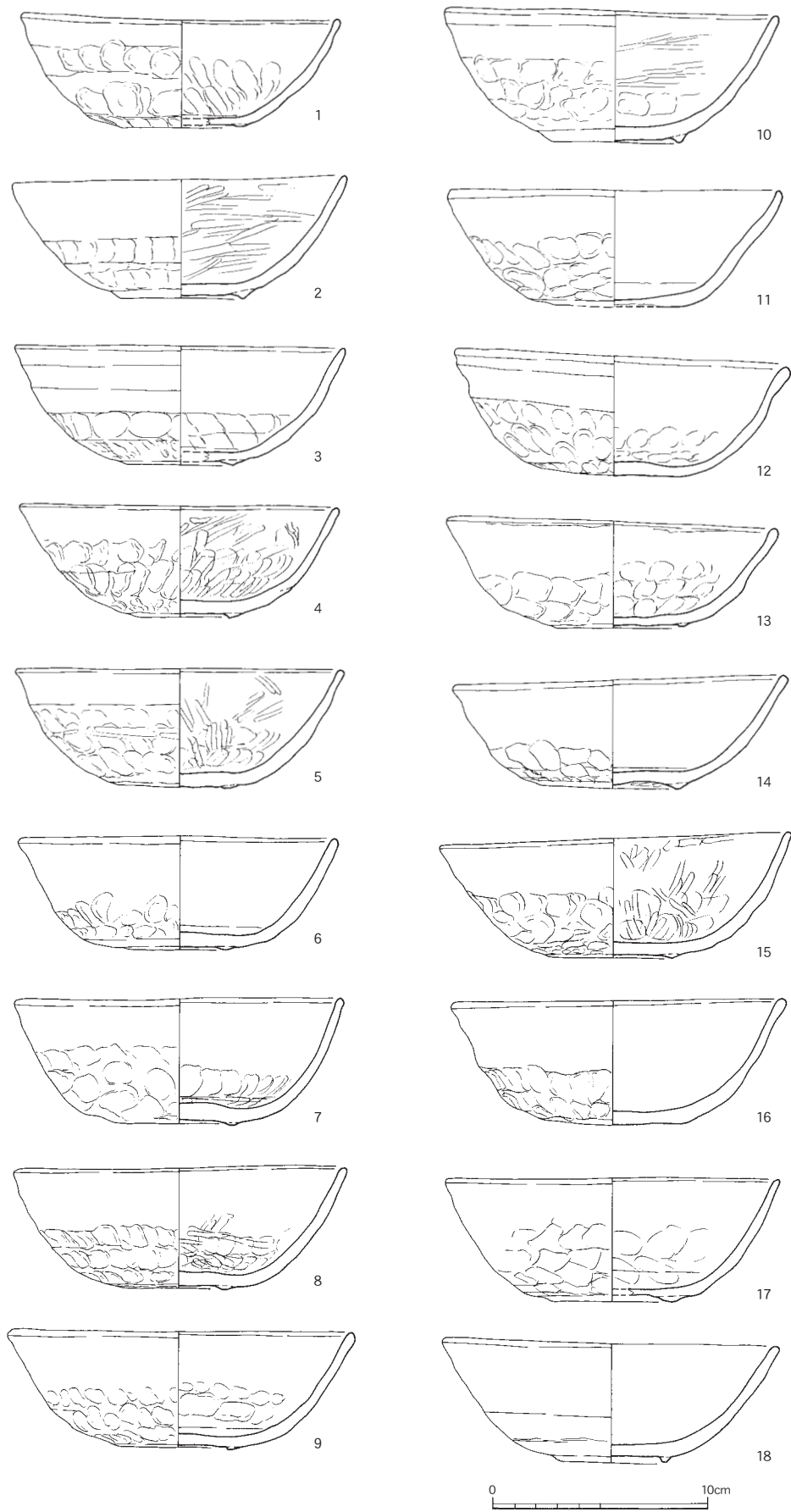
外面口縁部は2段ヨコナデ、中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面中位まではミガキ、下位はオサエ痕。口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。16は外面中位以下はケズリ状のオサエ痕が見られる。内面は器面摩滅のため観察できない。底部は器壁が薄く、押し出し技法であろう。胴中位には指オサエ列がある。17は外面淡橙色で土師器のようだが瓦質で、内面はにぶい暗橙黒灰色を呈する。黒色土器にしては外面胴下位に板状工具によるオサエが見られることから、瓦器碗であろう。

第35図1は内外面の胴中位と下位に指オサエ列があり、そこが窪んでいる。底部にはわずかだが高台が付いている。口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰色を呈する。2は外面胴下位に板状工具によるオサエ列が見られ内面はミガキ。口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位以下は黄橙色を呈する。底部は器壁が厚い。3は胴下位のオサエ列の下に工具痕が見られ、内面は胴下位以下に工具痕があることから押し出し技法である。高台内にもオサエあり。口縁下は2段のヨコナデ。縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰色を呈する。4は胴下位のオサエ列の下に工具痕が見られ、内面は胴下位以下に工具痕があることから押し出し技法である。内面にはミガキ、見込みには箸痕と考えられる傷がある。口縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。5は外面胴中位以下と内面胴下位に指オサエ列があり、そこが窪んでいる。内面はミガキ、外見口縁部はヨコナデ。わずかだが高台が付いている。高台内には板状圧痕あり。縁部から胴上位は灰黒色、胴中位は灰白色、胴下位と内面は灰黒色を呈する。6・7はわずかだが高台が付いている。6は外面胴下位に、7は胴中位以下に指オサエ列があり、底部は器壁が厚い。6は口縁部から胴下位は灰黒色、胴下位以下は黄橙色を呈する。内面口縁部は灰白色、胴部は黒灰色、底部は暗緑灰白色を呈する。7は口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。8は外面胴中位以下と内面胴下位に板状工具によるオサエ列があり、内面はミガキ。わずかだが高台が付いている。高台内には板状圧痕あり。9は外面胴中位以下と内面胴下位に指オサエ列があり、わずかだが高台が付いている。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。10は外面胴中位以下と内面胴下位に指オサエ列があり、内面上半はミガキ、外面口縁下はヨコナデ。高台は断面逆台形を呈する。外面は口縁部灰白色、胴中位は黒色、胴下位は黒灰色。11は外面胴中位以下と内面胴下位に指オサエ列があり、内面はナデ。底部には高台が見られず、オサエ後未調整。器壁は底部が薄くなっており、押し出し技法があつたものと思われる。12・13は内外胴下半は指オサエ、外面口縁部はヨコナデで窪んでいる。12は高台が見られず、オサエ後未調整。13は高台がわずかにある。器壁は底部が厚い。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。14は外面胴下位に板状工具によるオサエ、高台の接合部は指オサエ。内面はナデ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰色。15は内外面胴中位以下とは板状工具によるオサエ、高台の接合部は指オサエ。内面はミガキ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。16は外面胴中位以下に指オサエ列があり、内面は摩滅。高台は見られず、切り離し技法はナデのため不明。底部の器壁は厚い。17は内外面胴中位以下とは板状工具によるオサエ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は黒灰色。底部は器壁が薄く、押し出し技法である。18は内外面ナデ。口縁部灰黒色、口縁下は橙灰白色。搬入品か。

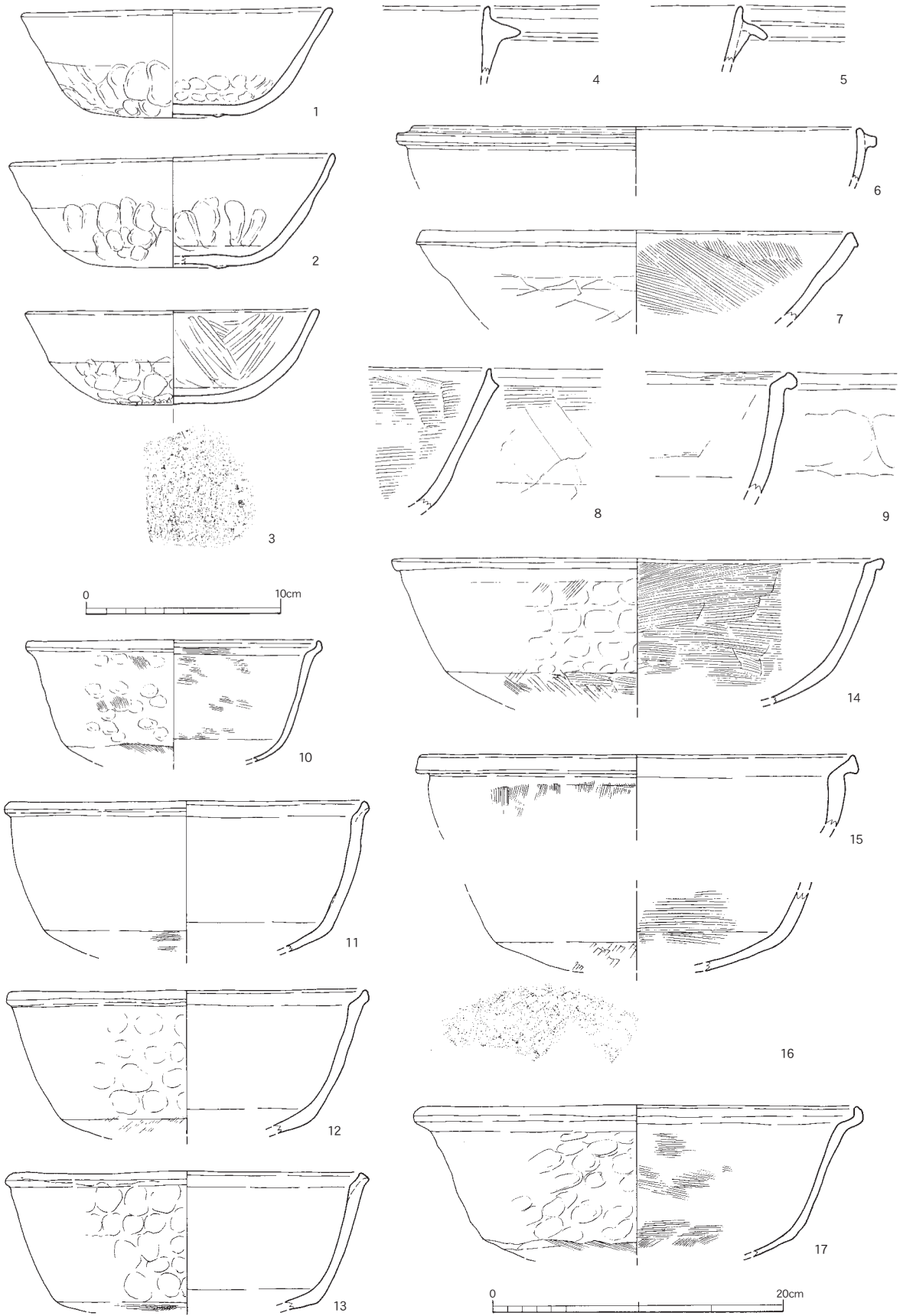
第36図1は外面胴中位以下と内面胴下位に指オサエ列があり、わずかだが高台が付いている。外面口縁部はヨコナデ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰色。2は内外面胴中位以下に指オサエ列があり、内面のオサエは縦長。わずかだが高台が付いている。外面口縁部はヨコナデ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。3は高台がなく、外底には板状圧痕がつく。



第34图 1区1号沟状遺構出土土器実測図3(1/3)



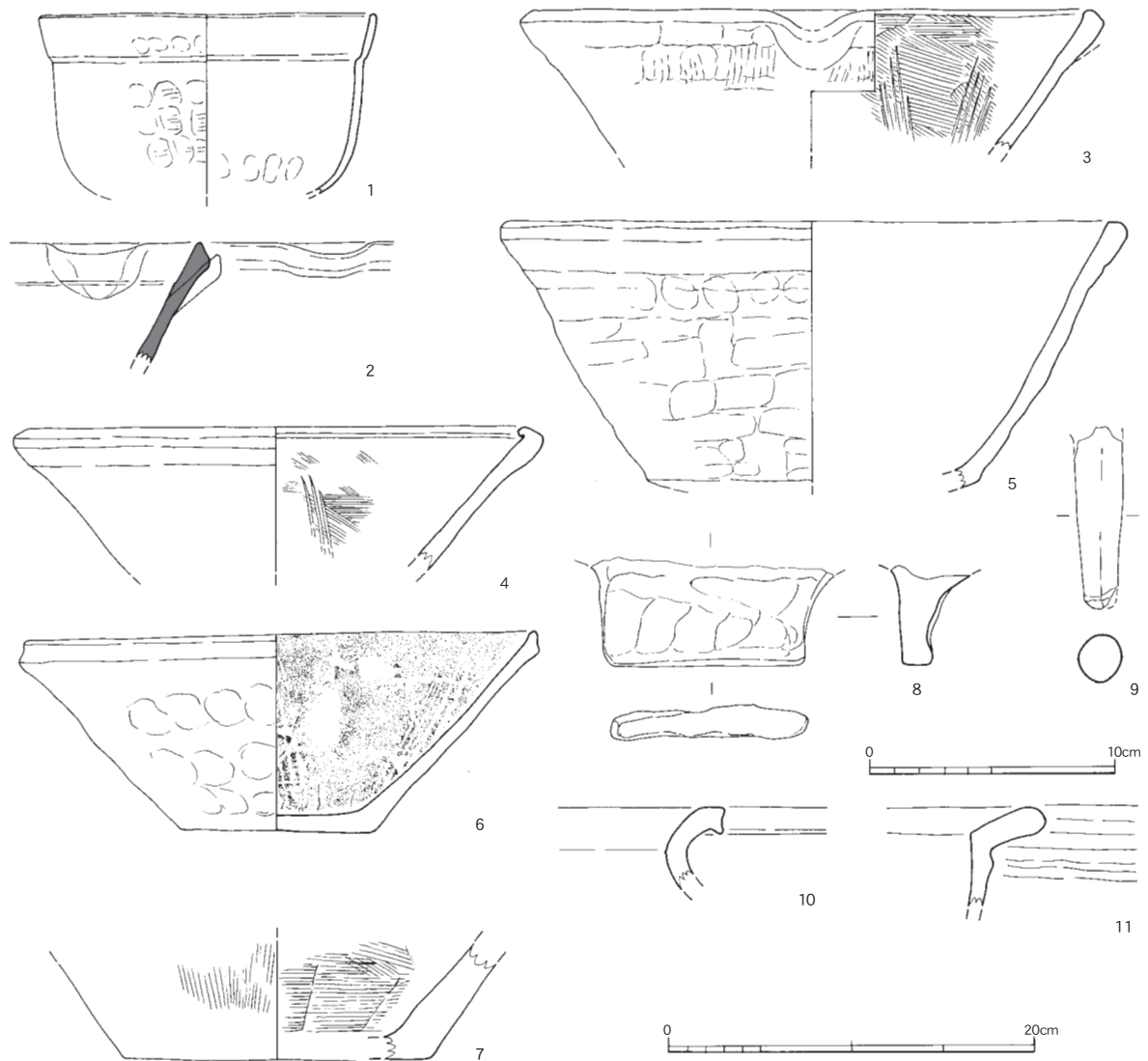
第35图 1区1号溝状遺構出土土器実測図4(1/3)



第36図 1区1号溝状遺構出土土器実測図5(1~5・9は1/3、他は1/4)

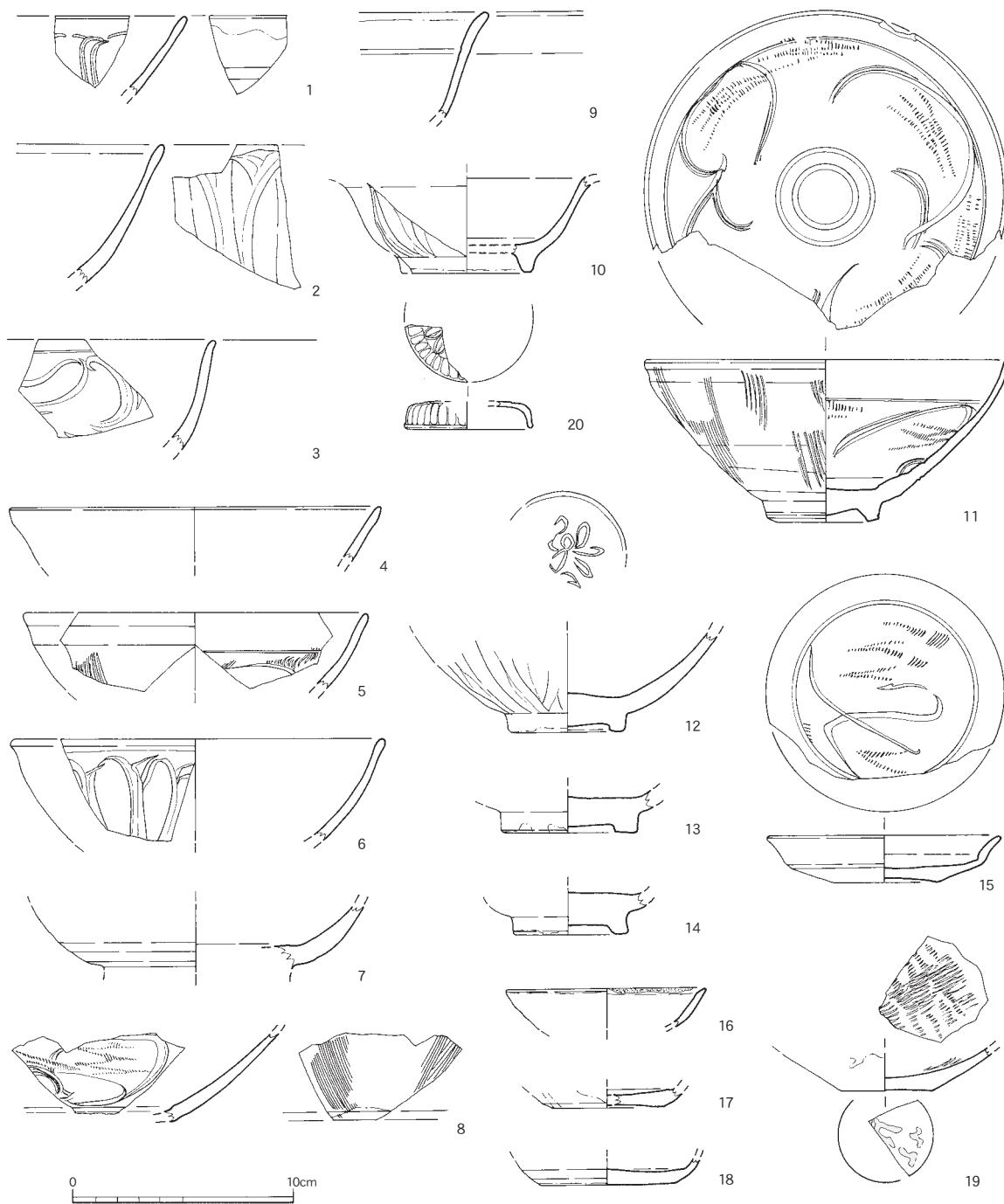
外面胴中位以下は板状工具によるオサエ。胴上半はヨコナデ、内面はミガキ。口縁部灰黒色、口縁下は灰白色、胴中位以下は灰黒色。

4～17は土鍋である。4・5は器面摩滅のため器壁が薄くなっている。4は黄灰色を基調とする。5は反転復元できない小片だが、径約33cmほどだろう。使用変色あり。雲母とカクセン石の混入が著しく特徴的。6は黄灰白色を基調とし、部分的に赤変が見られる。7は口縁下ヨコナデ、外面胴部が板状工具によるオサエ、内面は目の細かいハケ。外面が灰色で、内面が灰白色なのは重ね焼きのためであろう。15世紀代のものだろう。8は口縁下ヨコハケ、外面胴部が板状工具によるオサエ、内面は目の細かいハケ。外面は煤が付着する。反転復元できない小片だが、約31cmほどだろう。9は内面はヨコハケだが摩滅している。外面胴部が板状工具によるオサエ、内面は目の細かいハケ。外面は煤が付着する。反転復元できない小片だが、約35cmほどだろう。胎土は精良で、混入物がないのが特徴的。外面はやや暗灰褐色に変色しているが、内面は明灰白色なので、煮沸使用していない可能性がある。10は外面はハケ後指オサエ、内面はヨコハケ。外面口縁部は暗橙黒褐色、内面は橙色で、胴下位が使用のため暗灰褐色に変色している。11は外面煤付着のため暗黒灰褐色、



第37図 1区1号溝状遺構出土土器実測図6(2・7～9・11は1/3、他は1/4)

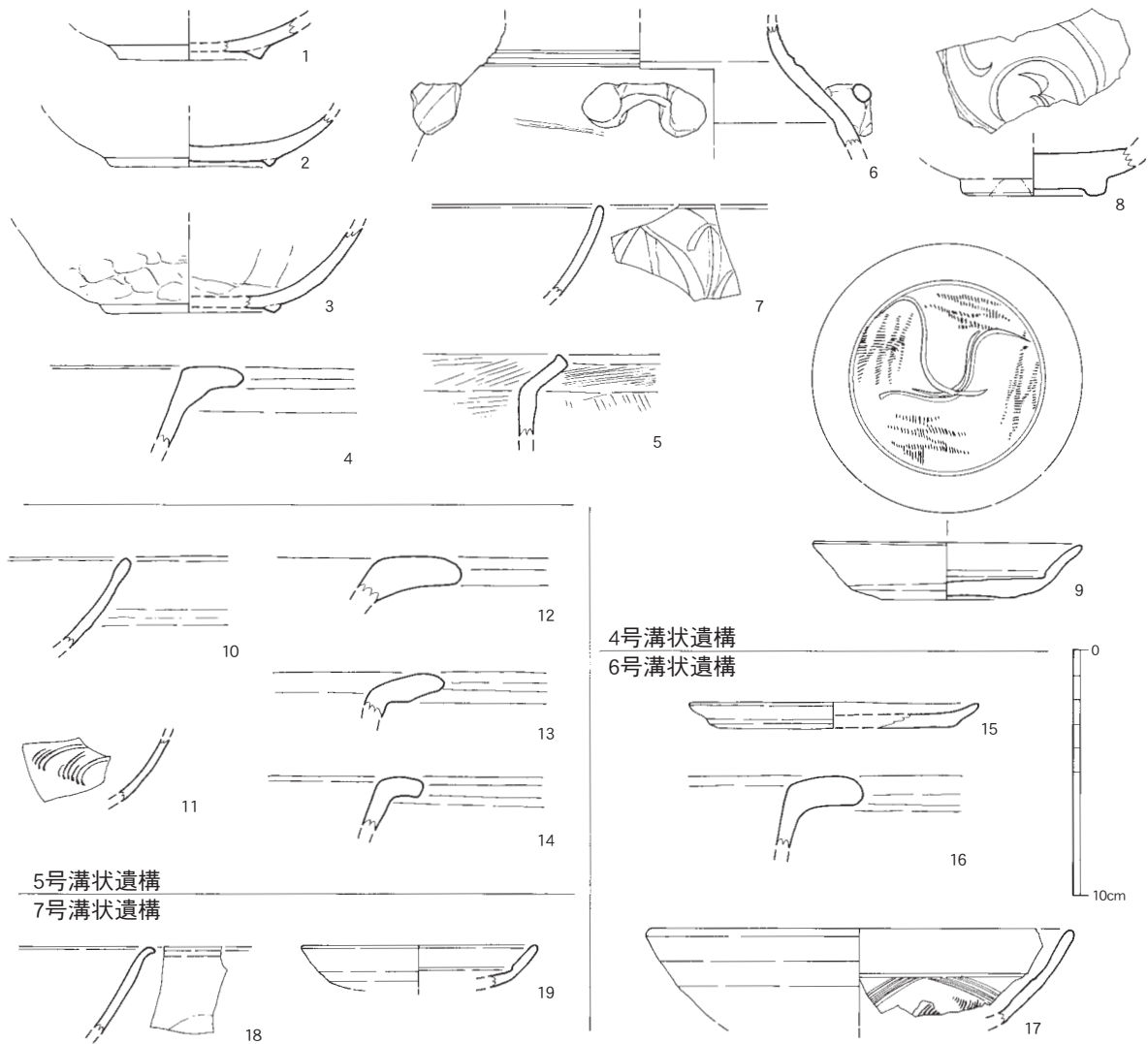
内面は黄橙色で変色なし。外面胴下位にハケが見られる。12・13は外面胴上半は指オサエ、下半はハケ。内面にもハケがあったと思われが摩滅している。外面は煤付着で暗黒灰褐色、内面は黄橙色で変色なし。14は口縁下に抉り状のナデが入る。外面胴上半はハケ後指オサエで、下半はタタキの上にハケ。内面は丁寧なヨコハケ。外面は煤が付着しているが、部分的に内面上半と同じ基調の暗黄灰褐色が見られる。内面は胴下位が使用変色のためにぶい暗黄灰色を呈する。15は口縁下に抉り状のナデが入る。外面口縁下がハケ、内面はナデ、外面は煤付着。16は胴下半部分で、外面は格子目タタキ、内面はハケ。外面は煤付着で暗黒灰褐色、内面は黄橙色を呈する。17は外面は上半が



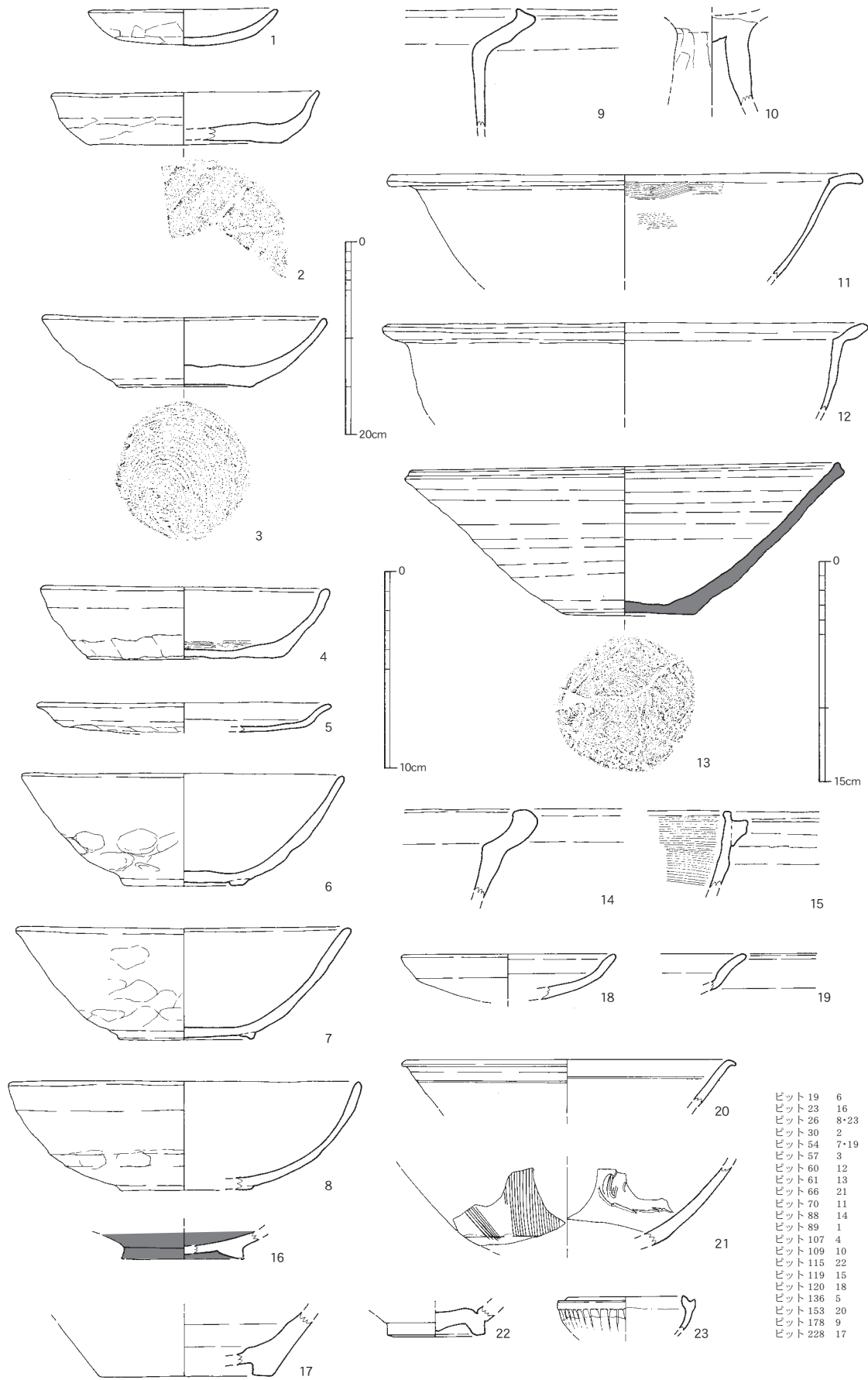
第38図 1区1号溝状遺構出土磁器実測図(1/3)

指オサエ、下半はハケ、内面はヨコハケ。外面は煤付着著しい、内面は上半が黄灰白色、下半は使用のため暗灰褐色を呈する。

第37図1は土鍋で、外見は煤付着で黒灰色だが、橙褐色を基調とする。内面はにぶい暗灰黄色。外面は板状工具によるケズリ状ナデ、内面胴下位はオサエ。2は東播系須恵器の鉢で、口縁部に注口部あり、重ね焼きのため口縁部だけ暗青灰色を呈する。3・4は摺鉢で、3は口縁部がタテハケ、胴部は摩滅しているが部分的にハケが見られる。内面は丁寧なハケ。摺目あるが単位不明。瓦器碗と同じ色調。4は外面口縁部ヨコナデ、胴部摩滅。内面胴部は目の細かいハケ。5は大型の鉢で、器壁が厚い。外面はケズリ状のナデで、凹凸多く、内面は器面摩滅しているが摺目跡はないようだ。外面は淡い灰黒色、内面は黄灰色を呈する。6は摺鉢で、外面胴上半から内面は灰黒色、外面胴下半は灰白色、内面は摺目は4本単位で5単位が放射状に施されている。7は外面がタテハケ、内面はヨコハケ、底部には黒斑があるので正置して焼成している。外面はにぶい黄灰色、内面はにぶい暗黄灰色で、変色がないことから土鍋ではない。8は土鍋の把手で、側面は平坦にナデられており、上面と見られる面はオサエで窪んでいる。単口縁の鉢形の土鍋で対面に短冊形の把手がつき、把手



第39図 1区4～7号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

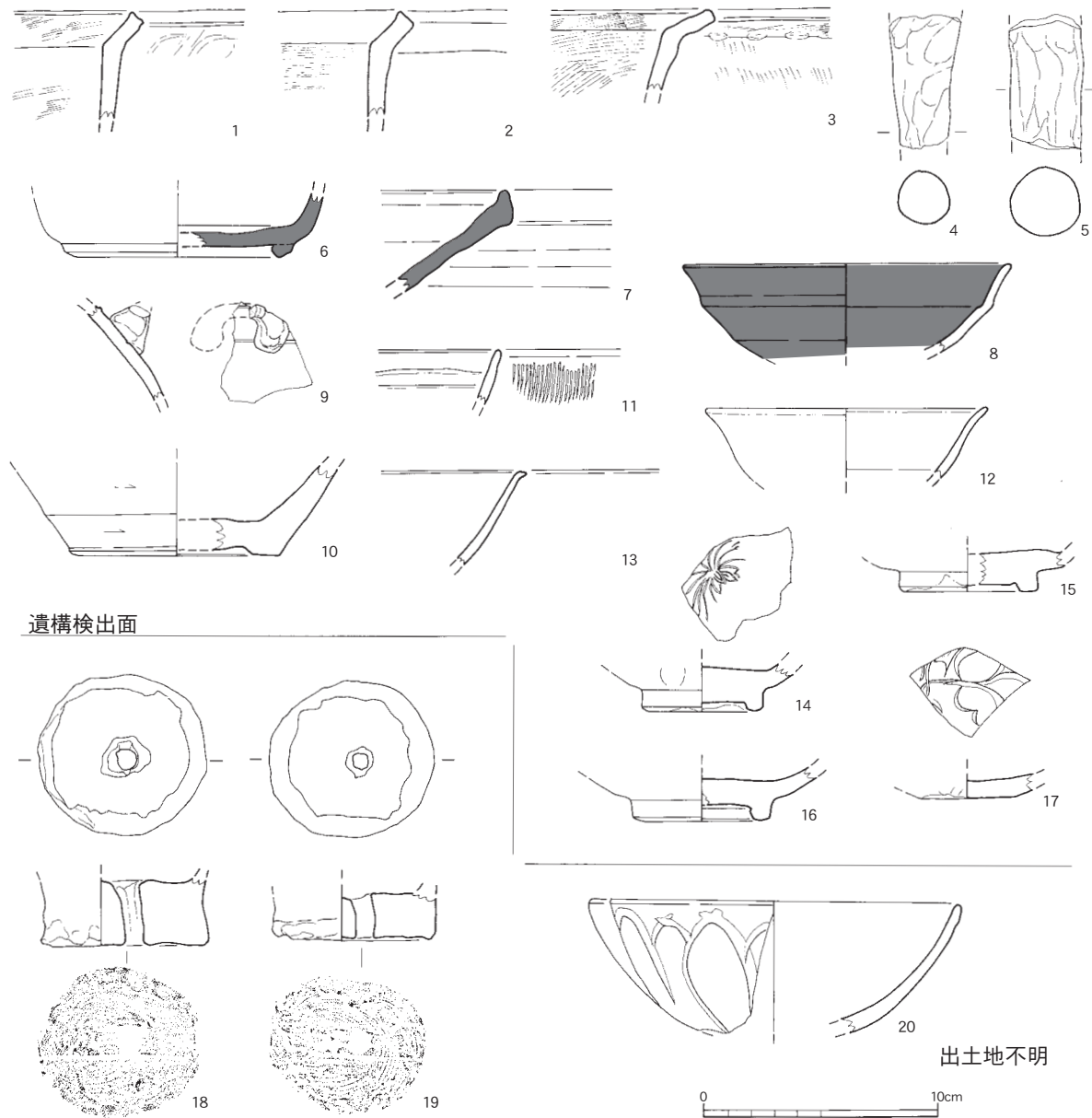


ピット 19	6
ピット 23	16
ピット 26	8・23
ピット 30	2
ピット 54	7・19
ピット 57	3
ピット 60	12
ピット 61	13
ピット 66	21
ピット 70	11
ピット 88	14
ピット 89	1
ピット 107	4
ピット 109	10
ピット 115	22
ピット 119	15
ピット 120	18
ピット 136	5
ピット 153	20
ピット 178	9
ピット 228	17

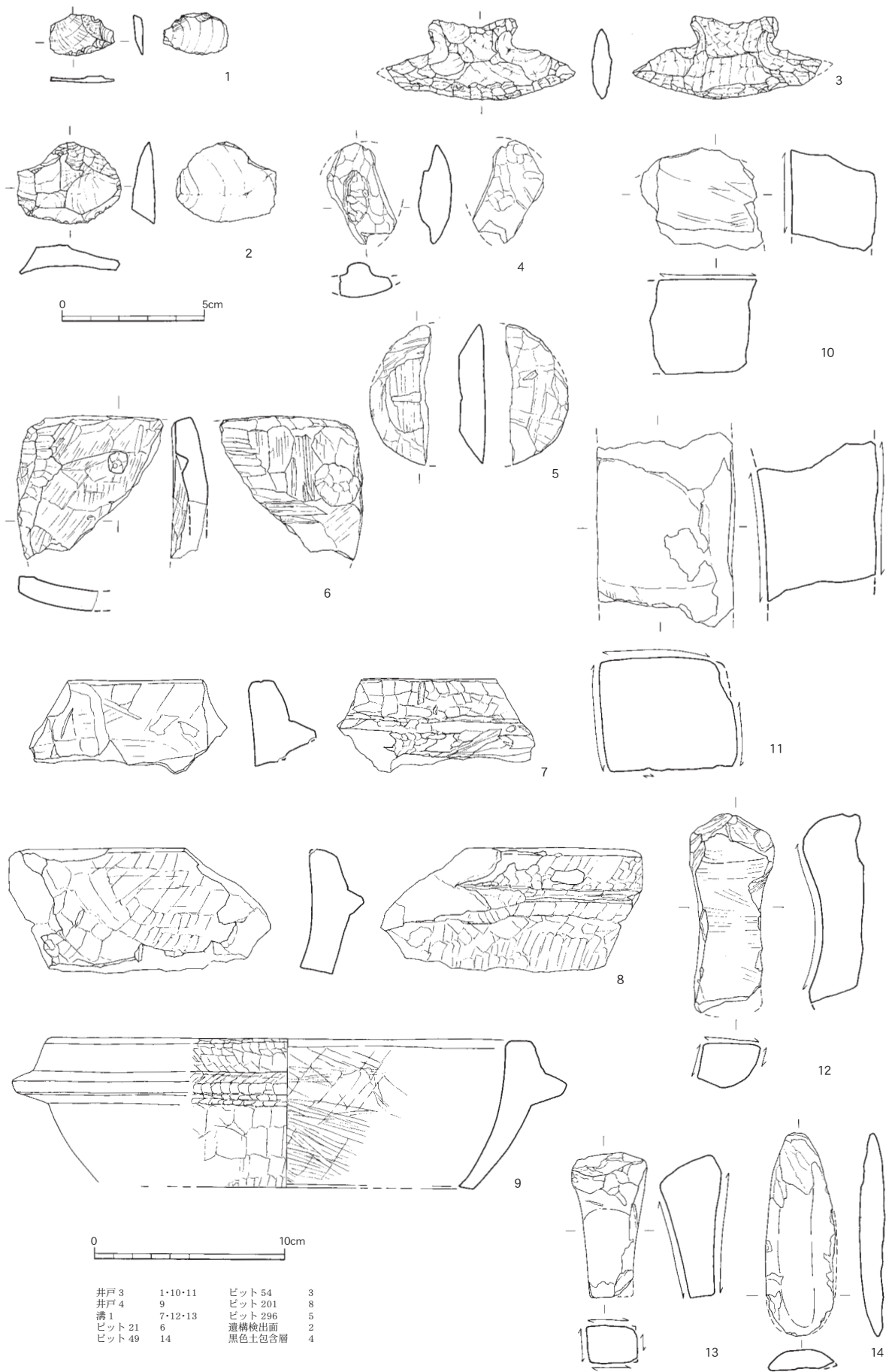
第40図 1区ピット出土土器・陶磁器実測図(11・12は1/6、13は1/4、他は1/3)

のつく位置の口縁部に穿孔が2つ入るタイプで15世紀後半代。9は足鍋の足部で、器面摩擦で調整不明・煤の付着も見られない。10は陶器の甕で、反転復元できない小片だが、口径37cmほどだろう。胎は軟質で、外面にぶい暗灰褐色、内面にぶい灰白色。内面は器面が剥落しているのは使用のためだろう。11は弥生土器の可能性を残す。反転復元できない小片だが、口径32cmほどだろう。内外黄橙色を呈する。

第38図1は同安窯系の青磁碗で、内面に沈線文が入る。外面口縁部には釉溜りがある。2は龍泉窯系鎬連弁文青磁碗で、連弁の縁は片切り彫り12と同一個体の可能性あり。3は青磁碗で、同安窯系の櫛書き文と思われる。濃緑灰色を呈する。4は龍泉窯系青磁碗で、連弁文の無文部分であろう。5は同安窯系碗で、内外櫛書き文8と同じ釉調。6は同安窯系青磁碗で、片切り彫りの花卉文が入る。黄緑灰色の青磁釉。貫入あり。7は龍泉窯系青磁碗で、無文部分であろう。8は同安窯系碗で、内外櫛書き文、やや焼成強く暗緑灰色に発色する。9は白磁碗で、口縁下に段がある。反転復元で



第41図 1区遺構検出面・出土地不明土器・陶磁器実測図(1/3)

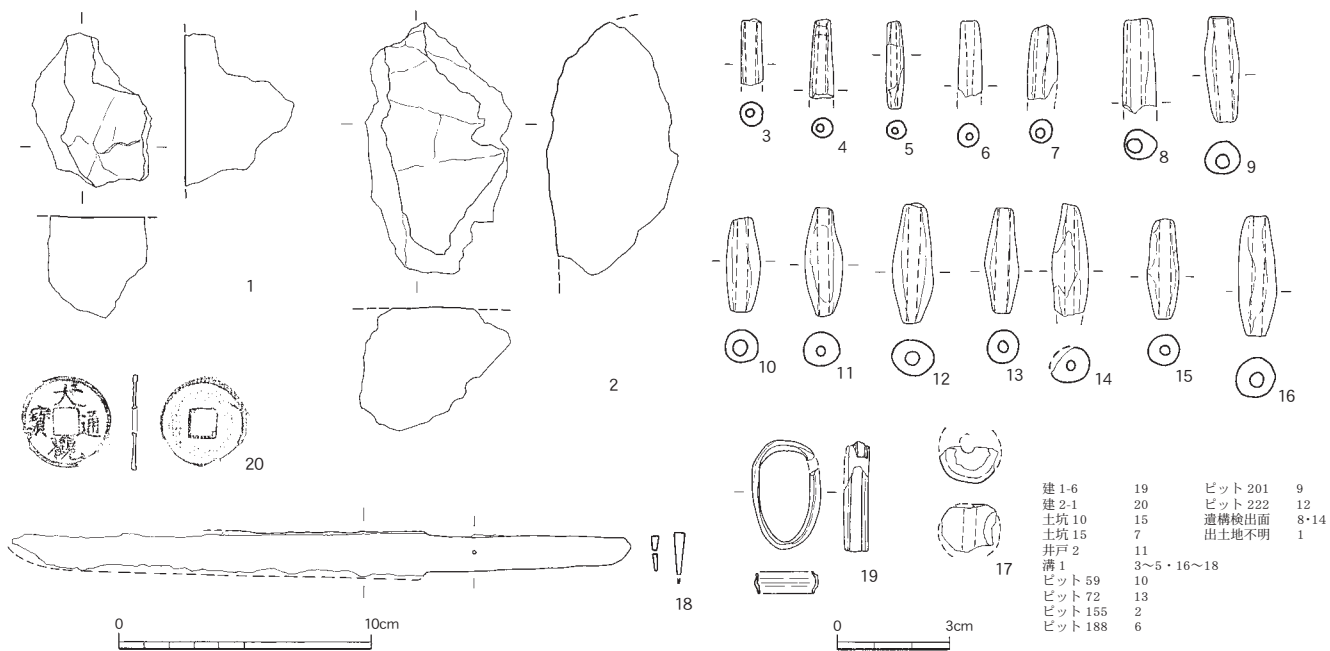


井戸 3	1・10・11	ビット 54	3
井戸 4	9	ビット 201	8
溝 1	7・12・13	ビット 296	5
ビット 21	6	遺構検出面	2
ビット 49	14	黒色土包含層	4

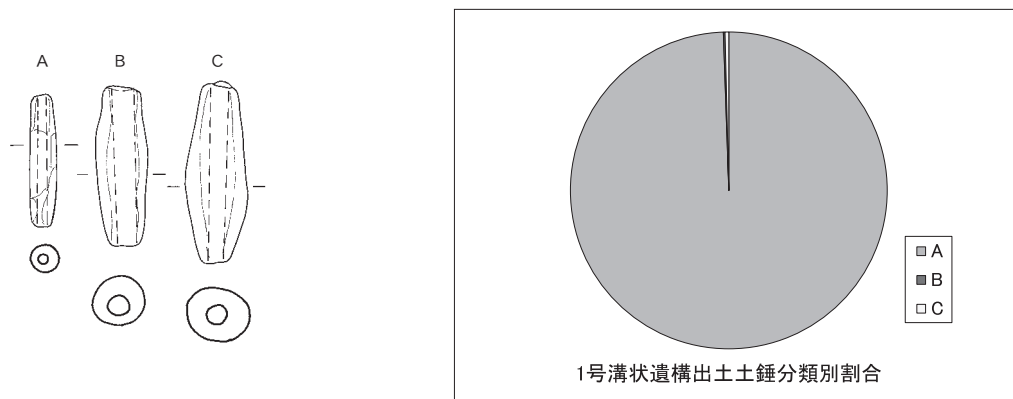
第42図 1区出土石製品実測図(1~3は1/2、他は1/3)

きない小片だが、口径15cmほどだろう。10は龍泉窯系鎬連弁文青磁小皿で、淡緑灰色に発色する。11は同安窯系碗で、内外櫛書き文、淡緑灰色に発色する。12は龍泉窯系鎬連弁文青磁碗で、淡緑灰色に発色する。連弁は片切り彫りはなく、見込みに花文の刻印あり。2と同一個体の可能性あり。13は龍泉窯系青磁碗で、淡緑灰色に発色する。高台は焼成が強くやや黄橙色を呈する。欠損部の角が取れていないので円盤形製品に転用されていないものと考えられる。14は龍泉窯系青磁碗で、畳付にまで釉がかかる部分がある。欠損部の角が取れていないので円盤形製品に転用されていないものと考えられる。15は同安窯系小皿で、内面に櫛書き文。暗緑灰色に発色する。外底は上底で釉剥ぎ。16は白磁小皿で口禿。口縁部には口禿部分には煤が付着する。17・18は白磁小皿で、17は胴下位から底部は露胎。18は底部が釉剥ぎ。19は同安窯系小皿で、内面に櫛書き文、胴下位から底部は露胎。外底には墨書らしいものがあるが判読できない。黄緑灰色に発色する。20は青白磁の合子の蓋で、型押し成形で天井部に花文が陽刻されている。口唇部釉剥ぎ。内面露胎。

第42図7は滑石製石鍋片で、再利用しようとした痕跡はない。赤い変色と煤の付着は石鍋として使用した際のもの。171.3gの第42図12・13は砥石片で、12は白色の凝灰岩製。3面使用してお



第43図 1区出土 土・金属・ガラス製品実測図(17・19・20は1/2、他は1/3)



第44図 1区出土 土錘分類図(1/2)

第2表 1号溝状遺構出土土錘計測表1

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1	46.1	8.8	3.9	3.5	完形	A	61	47.6	9.4	3.7	3.9	完形	A
2	46.5	11.4	2.6	7.3	完形	A	62	47.5	11.0	3.5	6.6	完形	A
3	49.3	9.6	3.6	5.3	完形	A	63	44.1	9.7	3.3	4.2	完形	A
4	47.4	10.1	4.2	6.1	完形	A	64	49.0	11.7	3.5	7.3	完形	A
5	48.5	11.0	2.4	5.7	完形	A	65	53.1	10.5	2.9	6.2	完形	A
6	49.4	8.6	3.5	3.6	完形	A	66	55.3	9.5	4.0	4.6	完形	A
7	46.6	10.5	3.3	5.9	完形	A	67	52.9	9.5	2.7	4.7	完形	A
8	48.4	8.6	3.8	3.7	完形	A	68	49.3	10.0	3.9	5.2	完形	A
9	47.6	9.2	3.1	3.8	完形	A	69	47.7	10.2	3.2	6.1	完形	A
10	52.9	9.2	30.	4.4	完形	A	70	49.3	10.0	3.7	4.9	完形	A
11	49.9	9.2	3.3	4.3	完形	A	71	46.7	9.8	4.3	4.8	完形	A
12	5.06	10.0	4.0	5.2	完形	A	72	45.5	11.7	3.1	6.7	完形	A
13	50.4	8.5	3.7	3.6	完形	A	73	50.6	9.2	3.5	4.5	完形	A
14	49.4	9.1	2.6	4.1	完形	A	74	44.9	10.5	3.6	5.1	完形	A
15	46.9	9.7	4.1	3.9	完形	A	75	51.4	8.8	3.9	3.6	完形	A
16	51.4	10.0	3.8	5.5	完形	A	76	48.4	9.8	3.4	4.9	完形	A
17	49.2	9.2	4.2	4.1	完形	A	77	51.7	9.6	3.9	4.5	完形	A
18	47.8	8.7	3.4	3.4	完形	A	78	54.2	9.6	3.8	5.4	完形	A
19	47.7	9.4	4.1	4.1	完形	A	79	51.9	8.2	3.0	3.6	完形	A
20	49.6	8.8	2.5	4.2	完形	A	80	46.3	11.6	2.8	8.1	完形	A
21	44.7	10.1	3.5	4.9	完形	A	81	52.9	9.8	3.5	5.3	完形	A
22	51.3	11.2	2.8	7.7	完形	A	82	48.8	9.2	4.3	3.6	完形	A
23	50.2	8.4	3.4	3.7	完形	A	83	48.3	9.5	4.6	4.2	完形	A
24	56.6	9.4	3.2	4.8	完形	A	84	52.0	4.9	2.8	3.8	完形	A
25	45.9	11.8	3.1	6.8	完形	A	85	51.2	9.9	2.9	5.0	完形	A
26	53.2	10.0	3.8	4.4	完形	A	86	48.7	8.6	2.7	4.3	完形	A
27	49.6	9.2	3.4	4.4	完形	A	87	47.6	8.4	3.3	3.3	完形	A
28	53.5	9.7	3.6	5.1	完形	A	88	49.5	10.6	3.2	5.9	完形	A
29	54.2	9.5	3.5	5.5	完形	A	89	46.9	10.7	3.4	5.9	完形	A
30	53.4	9.2	3.5	4.4	完形	A	90	45.4	11.5	3.3	7.3	完形	A
31	52.4	9.6	3.7	4.6	完形	A	91	45.9	10.4	2.3	6.1	完形	A
32	47.7	10.2	3.4	5.4	完形	A	92	48.9	9.7	3.9	4.3	完形	A
33	46.4	10.1	3.7	5.4	完形	A	93	47.1	10.7	2.8	5.8	完形	A
34	50.2	8.7	4.1	3.0	完形	A	94	49.3	10.2	2.5	5.2	完形	A
35	47.0	10.2	2.9	5.1	完形	A	95	50.5	10.6	4.1	5.9	完形	A
36	54.9	9.2	3.3	4.3	完形	A	96	48.3	9.3	3.1	4.1	完形	A
37	50.5	10.0	3.8	4.7	完形	A	97	46.9	8.8	3.6	3.4	完形	A
38	48.5	11.0	2.3	7.0	完形	A	98	50.9	9.3	3.4	4.2	完形	A
39	46.9	11.5	3.0	6.1	完形	A	99	46.8	9.7	3.1	4.8	完形	A
40	52.4	9.5	3.4	4.9	完形	A	100	46.0	8.8	3.5	3.3	完形	A
41	51.3	9.3	3.6	4.0	完形	A	101	43.5	10.5	3.7	4.8	完形	A
42	48.8	9.4	4.1	4.0	完形	A	102	43.8	10.3	3.9	5.2	完形	A
43	45.5	10.2	3.3	5.6	完形	A	103	49.9	9.5	3.6	4.9	完形	A
44	46.1	10.1	2.7	6.0	完形	A	104	48.2	10.2	3.5	5.2	完形	A
45	46.0	12.0	2.5	8.0	完形	A	105	47.1	9.3	3.6	3.9	完形	A
46	51.0	9.8	3.6	5.2	完形	A	106	45.3	8.7	2.9	3.7	完形	A
47	50.1	9.7	4.0	4.9	完形	A	107	49.2	9.4	2.8	4.2	完形	A
48	51.1	9.1	2.8	4.0	完形	A	108	51.6	9.3	3.6	4.6	完形	A
49	48.9	12.6	3.3	9.3	完形	A	109	48.8	9.2	2.8	4.2	完形	A
50	51.2	10.2	3.7	4.4	完形	A	110	48.0	8.9	3.3	3.5	完形	A
51	49.6	9.4	2.9	4.6	完形	A	111	51.6	10.3	2.8	5.9	完形	A
52	54.0	10.6	3.3	6.0	完形	A	112	48.4	10.3	3.5	5.4	完形	A
53	51.8	10.3	3.8	5.0	完形	A	113	46.9	10.9	3.5	5.5	完形	A
54	53.0	9.1	3.4	4.6	完形	A	114	45.5	10.3	3.7	4.9	完形	A
55	55.9	9.7	3.3	5.4	完形	A	115	47.1	8.4	3.3	3.0	完形	A
56	48.4	10.5	3.2	5.4	完形	A	116	50.2	9.1	3.3	4.5	完形	A
57	52.7	8.7	3.6	4.6	完形	A	117	49.4	9.5	3.9	4.2	完形	A
58	53.5	9.9	4.2	5.8	完形	A	118	44.2	9.2	2.9	4.5	完形	A
59	50.3	9.3	4.2	3.8	完形	A	119	52.0	10.0	3.4	4.9	完形	A
60	43.8	9.8	2.9	5.0	完形	A	120	47.5	11.1	4.6	5.6	完形	A

第3表 1号溝状遺構出土土錘計測表2

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
121	48.6	10.2	4.3	5.4	完形	A	181	47.8	11.0	3.5	5.5	完形	A
122	48.2	11.1	3.0	6.3	完形	A	182	48.4	9.4	3.2	5.1	完形	A
123	46.5	12.4	2.6	7.9	完形	A	183	49.1	9.3	3.0	4.1	完形	A
124	45.8	10.8	3.3	5.6	完形	A	184	41.8	10.1	3.2	4.4	完形	A
125	49.5	10.3	2.4	4.8	完形	A	185	53.0	9.9	2.5	5.1	完形	A
126	46.4	10.8	3.1	6.4	完形	A	186	44.1	10.1	3.2	4.9	完形	A
127	42.8	10.1	3.7	4.7	完形	A	187	50.1	11.5	4.3	6.6	完形	A
128	51.3	9.8	3.3	4.7	完形	A	188	47.9	10.4	2.9	6.4	完形	A
129	49.2	8.6	2.6	3.7	完形	A	189	49.9	9.2	3.3	4.3	完形	A
130	48.2	10.4	3.9	4.9	完形	A	190	44.1	10.0	3.7	4.9	完形	A
131	51.5	9.1	2.7	4.5	完形	A	191	45.8	10.9	3.3	5.8	完形	A
132	46.4	11.1	2.8	5.7	完形	A	192	48.3	8.5	3.1	3.6	完形	A
133	47.3	11.2	2.9	6.5	完形	A	193	46.9	9.1	3.9	3.3	完形	A
134	48.9	9.9	2.7	4.8	完形	A	194	45.2	9.8	3.8	4.4	完形	A
135	47.5	9.2	3.0	4.5	完形	A	195	50.9	8.9	3.5	4.1	完形	A
136	47.1	10.3	2.7	5.6	完形	A	196	53.6	10.0	3.3	6.1	完形	A
137	47.9	8.5	2.8	3.4	完形	A	197	47.6	9.4	3.4	4.1	完形	A
138	46.1	8.7	2.9	4.0	完形	A	198	46.7	9.3	3.9	4.0	完形	A
139	44.8	11.1	3.8	5.6	完形	A	199	46.0	10.3	2.9	5.0	完形	A
140	50.1	8.6	3.5	3.5	完形	A	200	47.1	9.9	3.4	5.3	完形	A
141	42.8	10.8	3.9	5.1	完形	A	201	47.2	9.4	4.7	3.9	完形	A
142	48.7	9.2	2.9	4.2	完形	A	202	48.0	10.3	3.9	4.8	完形	A
143	51.4	9.1	2.9	4.2	完形	A	203	50.7	9.8	3.0	4.9	完形	A
144	45.9	11.1	2.8	6.1	完形	A	204	51.8	10.9	2.6	6.4	完形	A
145	49.2	9.2	2.9	4.2	完形	A	205	49.3	9.4	3.8	3.6	完形	A
146	50.0	9.8	3.6	4.2	完形	A	206	49.4	10.1	3.4	4.3	完形	A
147	48.8	8.5	2.8	4.0	完形	A	207	49.1	9.2	3.8	3.8	完形	A
148	49.0	8.2	3.2	3.7	完形	A	208	45.0	9.9	3.6	4.6	完形	A
149	49.1	9.2	3.0	4.0	完形	A	209	47.6	9.9	3.2	5.2	完形	A
150	48.3	8.9	3.6	3.8	完形	A	210	45.7	9.0	3.5	3.5	完形	A
151	46.5	8.9	3.4	4.1	完形	A	211	49.7	8.7	3.4	4.0	完形	A
152	49.3	9.6	3.3	4.8	完形	A	212	47.9	9.7	3.9	4.0	完形	A
153	48.4	9.5	3.1	4.9	完形	A	213	47.4	11.4	2.4	6.5	完形	A
154	48.1	9.3	3.1	3.9	完形	A	214	50.7	10.9	4.3	5.5	完形	A
155	47.0	9.1	3.7	4.4	完形	A	215	50.4	9.3	4.2	4.0	完形	A
156	48.1	9.6	3.3	4.6	完形	A	216	51.0	9.2	3.0	3.6	完形	A
157	48.8	10.6	3.7	6.1	完形	A	217	48.5	10.8	2.6	5.5	完形	A
158	47.6	9.3	2.7	4.1	完形	A	218	49.2	9.5	3.1	4.4	完形	A
159	48.8	9.7	2.7	4.6	完形	A	219	46.8	9.8	3.4	4.7	完形	A
160	47.7	10.4	3.3	5.1	完形	A	220	45.9	9.8	3.3	4.0	完形	A
161	49.3	8.7	3.3	4.0	完形	A	221	47.8	9.6	3.0	3.9	完形	A
162	49.0	10.0	3.4	4.8	完形	A	222	47.7	9.6	3.7	4.8	完形	A
163	49.3	8.7	3.0	3.8	完形	A	223	47.6	9.5	4.5	4.1	完形	A
164	46.3	9.1	3.3	3.8	完形	A	224	47.5	9.3	4.1	3.7	完形	A
165	46.8	8.7	3.3	3.7	完形	A	225	46.0	8.8	2.8	3.2	完形	A
166	50.0	9.4	3.3	4.4	完形	A	226	49.7	9.7	3.5	4.6	完形	A
167	49.9	9.3	3.3	4.3	完形	A	227	48.4	8.8	3.0	3.9	完形	A
168	47.0	11.0	3.5	5.6	完形	A	228	46.2	10.7	3.2	5.7	完形	A
169	44.1	10.5	3.8	5.3	完形	A	229	51.8	8.7	3.5	3.8	完形	A
170	47.2	11.9	4.1	7.0	完形	A	230	50.2	9.7	3.6	5.1	完形	A
171	49.6	10.0	3.8	4.3	完形	A	231	45.0	10.4	3.8	5.3	完形	A
172	47.4	8.6	3.6	3.2	完形	A	232	47.2	10.1	4.1	4.7	完形	A
173	49.2	9.2	3.2	4.4	完形	A	233	47.4	8.4	4.3	3.2	完形	A
174	41.1	11.2	4.0	5.4	完形	A	234	52.5	9.0	3.0	4.5	完形	A
175	50.5	9.8	4.1	4.3	完形	A	235	46.3	8.8	3.2	3.8	完形	A
176	50.7	9.9	3.6	5.2	完形	A	236	48.2	8.8	3.6	3.8	完形	A
177	45.0	8.9	3.7	3.3	完形	A	237	45.2	10.8	3.1	6.3	完形	A
178	48.6	9.5	3.5	4.4	完形	A	238	48.9	11.2	3.5	6.1	完形	A
179	47.4	10.1	3.6	5.0	完形	A	239	47.1	9.9	5.3	4.1	完形	A
180	49.5	9.5	2.6	4.0	完形	A	240	52.3	10.1	4.0	5.0	完形	A

第4表 1号溝状遺構出土土錘計測表3

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
241	53.5	9.9	3.4	5.1	完形	A	301	46.1	9.1	3.5	3.7	完形	A
242	42.2	10.0	3.8	4.5	完形	A	302	40.3	10.1	2.9	4.6	完形	A
243	49.9	8.9	3.4	4.0	完形	A	303	41.9	9.2	3.6	3.4	完形	A
244	52.1	9.4	3.4	4.0	完形	A	304	42.2	8.8	2.6	3.5	完形	A
245	52.6	9.4	3.0	4.3	完形	A	305	48.5	8.3	3.2	3.1	完形	A
246	51.6	9.2	3.7	4.3	完形	A	306	41.7	9.4	3.4	3.6	完形	A
247	51.2	8.9	3.5	3.9	完形	A	307	47.8	9.6	2.4	4.3	完形	A
248	45.3	9.5	3.5	4.7	完形	A	308	44.7	9.0	2.6	4.2	完形	A
249	44.8	11.2	2.9	6.1	完形	A	309	40.3	9.9	2.9	4.3	完形	A
250	51.5	9.3	3.7	3.8	完形	A	310	46.0	9.3	1.8	4.6	完形	A
251	50.1	8.3	3.0	3.7	完形	A	311	39.7	8.9	2.9	3.5	完形	A
252	47.2	10.4	3.1	5.7	完形	A	312	46.5	11.4	3.0	6.3	完形	A
253	50.5	9.4	4.3	4.1	完形	A	313	39.9	10.3	3.3	4.4	完形	A
254	47.9	9.6	3.2	4.4	完形	A	314	42.7	8.9	3.4	3.1	完形	A
255	50.5	10.3	3.4	5.2	完形	A	315	39.5	8.9	4.2	2.9	完形	A
256	50.2	10.6	3.5	5.9	完形	A	316	40.0	9.2	3.5	3.6	完形	A
257	46.2	11.8	2.4	7.0	完形	A	317	46.2	8.9	2.8	3.4	完形	A
258	51.0	8.7	3.7	3.9	完形	A	318	38.5	10.1	3.1	4.1	完形	A
259	47.4	10.5	3.3	4.8	完形	A	319	44.0	7.6	2.9	2.4	完形	A
260	38.7	9.8	3.4	4.1	完形	A	320	41.7	9.0	3.3	3.0	完形	A
261	45.1	9.2	3.5	3.6	完形	A	321	46.4	8.4	2.6	3.5	完形	A
262	40.0	9.4	4.4	3.1	完形	A	322	39.9	9.0	3.6	3.1	完形	A
263	41.9	9.2	3.8	3.4	完形	A	323	43.0	10.1	3.8	4.1	完形	A
264	43.2	9.8	3.1	4.5	完形	A	324	42.0	8.1	2.7	3.6	完形	A
265	42.3	9.9	3.9	4.6	完形	A	325	39.0	8.7	2.5	3.3	完形	A
266	39.3	10.0	2.8	4.3	完形	A	326	40.8	8.8	2.7	3.7	完形	A
267	37.7	9.1	2.7	2.7	完形	A	327	40.2	9.1	3.8	3.7	完形	A
268	39.5	9.9	3.9	4.0	完形	A	328	40.8	8.9	2.5	3.7	完形	A
269	39.1	8.1	3.1	2.6	完形	A	329	37.0	7.8	2.8	2.3	完形	A
270	42.0	9.1	3.2	3.6	完形	A	330	38.0	8.3	3.3	2.6	完形	A
271	48.0	9.4	3.9	4.0	完形	A	331	40.5	9.6	4.2	4.3	完形	A
272	43.5	8.6	3.6	2.5	完形	A	332	45.8	10.3	3.5	5.2	完形	A
273	43.9	9.1	3.2	3.7	完形	A	333	43.6	9.3	3.1	4.0	完形	A
274	42.1	9.5	4.0	4.3	完形	A	334	42.8	9.0	4.0	3.2	完形	A
275	41.7	10.0	3.2	3.0	完形	A	335	43.7	10.4	3.2	4.9	完形	A
276	43.9	9.9	3.2	4.8	完形	A	336	45.1	10.1	3.7	4.3	完形	A
277	46.9	9.0	3.6	4.0	完形	A	337	41.4	10.7	3.4	5.1	完形	A
278	44.2	7.4	3.4	2.7	完形	A	338	39.0	10.3	3.3	4.4	完形	A
279	42.3	8.5	3.8	2.7	完形	A	339	43.1	9.8	3.5	3.8	完形	A
280	46.6	8.8	3.5	3.7	完形	A	340	41.4	10.3	3.3	4.8	完形	A
281	42.1	10.6	3.3	5.2	完形	A	341	41.5	9.3	3.0	4.2	完形	A
282	42.4	10.1	3.6	4.5	完形	A	342	36.0	9.1	3.9	3.1	完形	A
283	40.0	11.0	3.6	4.8	完形	A	343	42.1	9.5	3.3	3.9	完形	A
284	45.0	11.9	3.0	6.8	完形	A	344	41.8	8.9	3.2	3.3	完形	A
285	43.1	9.8	3.5	4.1	完形	A	345	42.8	9.8	3.3	4.6	完形	A
286	44.2	10.2	4.2	4.8	完形	A	346	43.2	10.2	4.3	4.5	完形	A
287	44.4	9.9	4.2	4.5	完形	A	347	38.0	10.1	3.9	3.8	完形	A
288	43.3	10.1	4.3	4.4	完形	A	348	39.9	9.0	3.1	4.0	完形	A
289	44.9	8.5	2.7	3.5	完形	A	349	40.9	10.6	3.5	4.8	完形	A
290	49.5	10.3	3.5	5.3	完形	A	350	41.1	8.3	2.7	2.8	完形	A
291	40.9	8.2	2.5	3.6	完形	A	351	42.4	7.7	2.5	2.4	完形	A
292	35.4	9.6	4.6	2.7	完形	A	352	47.2	9.7	3.2	4.3	完形	A
293	43.2	8.4	3.3	3.4	完形	A	353	45.0	9.1	3.5	3.6	完形	A
294	38.7	8.9	3.0	3.4	完形	A	354	43.9	9.8	4.3	4.5	完形	A
295	41.3	9.9	3.5	4.1	完形	A	355	42.2	10.0	3.9	4.4	完形	A
296	45.4	8.8	3.4	3.3	完形	A	356	38.8	9.5	3.4	4.0	完形	A
297	41.1	10.2	3.7	4.6	完形	A	357	41.2	8.7	4.2	3.0	完形	A
298	41.7	8.7	3.0	3.0	完形	A	358	41.6	9.7	3.9	4.3	完形	A
299	41.5	9.3	3.8	4.1	完形	A	359	39.7	9.4	2.8	4.0	完形	A
300	38.6	9.8	3.5	3.9	完形	A	360	38.0	8.2	3.2	2.6	完形	A

第5表 1号溝状遺構出土土錘計測表4

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
361	39.1	8.7	3.8	3.2	完形	A	421	36.9	9.9	3.8	3.6	完形	A
362	41.6	9.2	3.9	3.4	完形	A	422	41.2	9.3	2.8	4.1	完形	A
363	37.3	9.1	3.0	3.5	完形	A	423	40.4	9.1	2.6	3.8	完形	A
364	42.3	8.9	3.8	3.6	完形	A	424	44.6	8.8	4.0	3.4	完形	A
365	42.5	8.6	2.8	3.4	完形	A	425	42.7	9.0	3.8	3.3	完形	A
366	43.5	9.4	3.3	3.5	完形	A	426	40.8	9.9	3.5	4.1	完形	A
367	37.6	8.9	3.1	3.2	完形	A	427	39.3	9.6	3.0	4.0	完形	A
368	42.4	8.4	3.1	3.1	完形	A	428	41.0	9.2	2.4	4.3	完形	A
369	40.5	10.7	4.4	4.8	完形	A	429	41.8	9.6	3.2	4.6	完形	A
370	36.2	9.1	3.6	2.9	完形	A	430	40.5	8.8	2.8	3.7	完形	A
371	36.6	9.1	3.2	3.6	完形	A	431	42.6	9.3	3.4	3.6	完形	A
372	43.0	9.7	4.2	4.0	完形	A	432	44.6	10.1	3.0	4.6	完形	A
373	42.2	10.0	3.8	4.4	完形	A	433	43.0	9.1	3.5	3.1	完形	A
374	39.9	10.0	3.3	4.3	完形	A	434	46.8	9.2	3.2	3.9	完形	A
375	41.6	10.1	3.7	4.4	完形	A	435	43.5	9.7	3.5	4.2	完形	A
376	42.5	10.5	3.6	4.8	完形	A	436	41.4	9.1	3.3	3.2	完形	A
377	42.0	8.6	2.8	3.2	完形	A	437	41.3	8.9	3.2	3.9	完形	A
378	43.4	9.9	4.0	4.4	完形	A	438	43.0	8.7	3.3	2.8	完形	A
379	38.2	9.4	3.2	4.1	完形	A	439	40.0	10.5	4.3	3.4	完形	A
380	37.4	8.3	3.5	3.1	完形	A	440	39.7	9.0	4.0	3.3	完形	A
381	39.6	10.3	3.7	4.4	完形	A	441	38.9	9.3	3.0	3.7	完形	A
382	41.4	9.7	3.4	3.9	完形	A	442	39.8	10.0	3.8	4.2	完形	A
383	46.0	9.4	3.6	3.8	完形	A	443	42.1	9.1	3.0	3.6	完形	A
384	42.8	10.6	3.6	4.7	完形	A	444	44.3	9.2	3.3	3.6	完形	A
385	41.9	9.2	3.3	3.6	完形	A	445	41.9	9.8	3.7	4.6	完形	A
386	45.9	10.2	3.7	5.1	完形	A	446	39.2	8.7	3.4	3.1	完形	A
387	39.8	10.6	4.0	4.6	完形	A	447	40.1	9.3	4.0	2.8	完形	A
388	42.5	9.6	3.6	4.1	完形	A	448	44.6	8.7	3.3	3.0	完形	A
389	37.8	9.3	3.8	3.3	完形	A	449	42.3	9.7	3.2	4.3	完形	A
390	43.1	9.3	4.0	3.3	完形	A	450	40.8	10.0	2.8	4.4	完形	A
391	36.7	8.4	3.9	3.5	完形	A	451	40.1	9.8	3.5	4.0	完形	A
392	39.5	9.8	3.3	4.0	完形	A	452	41.6	9.9	3.9	4.2	完形	A
393	40.0	10.0	3.7	4.3	完形	A	453	41.6	8.5	3.2	3.0	完形	A
394	38.5	10.5	3.9	4.3	完形	A	454	40.2	10.1	3.8	4.4	完形	A
395	44.4	9.8	3.5	4.6	完形	A	455	44.6	8.7	3.0	3.6	完形	A
396	41.7	8.8	3.7	3.0	完形	A	456	44.1	9.3	3.8	3.5	完形	A
397	37.6	9.2	3.1	3.5	完形	A	457	42.2	10.5	3.6	4.9	完形	A
398	40.7	10.2	3.6	4.3	完形	A	458	40.8	8.7	3.0	3.2	完形	A
399	42.5	9.5	3.6	4.2	完形	A	459	43.0	10.5	3.1	4.6	完形	A
400	42.8	9.9	3.6	4.6	完形	A	460	35.8	10.1	4.0	3.8	完形	A
401	40.3	8.5	3.2	2.8	完形	A	461	40.2	10.0	3.3	4.6	完形	A
402	40.8	9.1	3.9	3.7	完形	A	462	44.7	9.2	3.7	3.2	完形	A
403	37.5	8.6	3.5	2.8	完形	A	463	37.6	10.1	4.0	3.5	完形	A
404	41.9	9.1	3.4	3.5	完形	A	464	43.9	10.2	3.0	4.6	完形	A
405	40.8	10.2	4.4	4.4	完形	A	465	42.4	10.2	3.2	4.8	完形	A
406	47.6	8.9	3.3	3.8	完形	A	466	40.9	8.7	3.6	2.9	完形	A
407	41.3	9.9	3.5	4.5	完形	A	467	42.8	8.9	2.8	3.1	完形	A
408	42.6	8.5	3.5	2.9	完形	A	468	39.1	9.2	4.0	3.4	完形	A
409	39.4	9.9	3.8	4.2	完形	A	469	39.8	8.9	3.5	3.4	完形	A
410	46.6	8.8	3.0	3.6	完形	A	470	38.9	9.7	3.6	4.0	完形	A
411	39.6	10.6	4.1	4.5	完形	A	471	46.3	10.5	3.6	5.5	完形	A
412	45.7	11.5	3.5	6.1	完形	A	472	42.5	10.4	3.5	4.9	完形	A
413	41.7	9.1	2.9	3.8	完形	A	473	43.7	10.0	3.0	4.6	完形	A
414	38.1	9.3	2.0	3.6	完形	A	474	37.4	9.1	3.0	3.4	完形	A
415	43.4	10.0	3.1	4.8	完形	A	475	42.4	10.2	3.3	4.7	完形	A
416	39.2	9.6	3.4	4.0	完形	A	476	36.8	8.9	4.0	3.2	完形	A
417	41.8	10.4	3.5	4.8	完形	A	477	46.9	9.4	3.2	4.1	完形	A
418	40.0	10.0	4.1	3.9	完形	A	478	36.9	7.4	3.7	2.2	完形	A
419	40.8	8.2	2.9	3.3	完形	A	479	40.4	9.8	3.7	4.3	完形	A
420	36.0	8.8	3.8	2.7	完形	A	480	40.5	8.9	2.9	3.0	完形	A

第6表 1号溝状遺構出土土錘計測表5

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
481	40.5	9.0	3.2	3.9	完形	A	541	44.5	9.3	3.8	3.6	完形	A
482	40.1	8.3	3.0	2.7	完形	A	542	46.2	9.2	4.1	3.2	完形	A
483	34.4	9.4	3.0	3.2	完形	A	543	47.1	8.6	3.3	3.5	完形	A
484	43.1	8.8	3.7	3.1	完形	A	544	45.8	9.2	3.0	4.0	完形	A
485	42.3	9.0	3.0	3.3	完形	A	545	38.0	9.7	3.5	3.9	完形	A
486	39.3	10.2	4.2	3.8	完形	A	546	44.0	8.4	2.6	3.2	完形	A
487	46.6	9.1	3.8	3.6	完形	A	547	37.2	8.7	3.9	2.8	完形	A
488	42.5	9.1	4.1	3.0	完形	A	548	43.7	9.3	3.7	3.8	完形	A
489	37.3	9.6	3.1	4.0	完形	A	549	40.2	10.0	3.2	4.4	完形	A
490	35.7	8.8	3.2	3.2	完形	A	550	39.1	8.4	3.3	2.7	完形	A
491	40.1	8.9	3.5	3.3	完形	A	551	47.8	9.2	3.7	3.9	完形	A
492	47.1	8.5	3.0	3.4	完形	A	552	42.2	10.2	3.8	4.8	完形	A
493	46.8	9.3	3.0	3.6	完形	A	553	41.5	8.6	3.2	2.9	完形	A
494	42.9	9.1	2.9	3.7	完形	A	554	47.7	9.8	4.4	4.8	完形	A
495	45.1	9.1	3.0	4.0	完形	A	555	44.3	8.7	3.4	3.1	完形	A
496	42.0	10.0	4.0	4.4	完形	A	556	45.0	8.7	2.8	3.4	完形	A
497	44.9	8.8	4.2	3.5	完形	A	557	46.1	9.2	3.7	3.8	完形	A
498	44.2	8.5	3.6	3.4	完形	A	558	45.2	8.2	3.6	2.9	完形	A
499	41.9	10.3	3.3	4.5	完形	A	559	45.5	8.6	3.0	3.3	完形	A
500	44.5	9.0	3.4	3.3	完形	A	560	40.1	9.1	3.1	3.6	完形	A
501	43.5	8.1	3.3	2.9	完形	A	561	37.9	10.3	3.7	4.2	完形	A
502	38.0	9.9	3.2	4.1	完形	A	562	46.1	9.9	3.3	4.7	完形	A
503	39.3	8.9	2.5	4.0	完形	A	563	40.9	9.6	3.2	3.9	完形	A
504	33.8	8.0	3.0	2.0	完形	A	564	44.3	11.7	2.5	6.8	完形	A
505	37.9	8.8	3.3	2.7	完形	A	565	46.8	11.0	3.0	5.8	完形	A
506	40.2	10.0	3.6	4.2	完形	A	566	41.8	10.6	4.4	5.3	完形	A
507	45.2	9.7	3.5	3.6	完形	A	567	43.0	10.0	3.2	4.5	完形	A
508	46.5	9.2	3.4	3.7	完形	A	568	43.9	9.7	3.7	4.5	完形	A
509	45.3	9.0	4.5	3.3	完形	A	569	44.5	9.2	3.6	3.6	完形	A
510	41.9	9.4	4.3	3.5	完形	A	570	42.0	10.4	4.0	5.0	完形	A
511	40.7	9.8	3.7	3.3	完形	A	571	37.6	9.0	3.0	3.7	完形	A
512	47.6	9.7	3.2	4.6	完形	A	572	41.1	10.3	3.4	4.7	完形	A
513	43.3	8.4	2.8	3.8	完形	A	573	41.9	8.6	2.8	3.2	完形	A
514	45.6	8.6	2.9	4.2	完形	A	574	41.4	9.8	4.2	3.9	完形	A
515	40.3	10.1	3.9	4.4	完形	A	575	38.2	9.6	3.5	3.7	完形	A
516	42.2	8.8	3.4	3.3	完形	A	576	43.5	10.6	3.5	4.4	完形	A
517	42.4	10.6	3.6	4.4	完形	A	577	42.4	10.0	3.5	5.0	完形	A
518	45.6	9.6	3.8	3.6	完形	A	578	40.6	10.3	3.2	4.1	完形	A
519	46.8	9.5	3.9	4.5	完形	A	579	42.5	9.0	3.0	3.3	完形	A
520	47.8	9.8	3.6	4.7	完形	A	580	46.1	9.8	4.0	5.0	完形	A
521	44.2	10.3	4.4	4.7	完形	A	581	44.1	9.9	4.4	4.5	完形	A
522	45.0	9.6	3.6	4.2	完形	A	582	42.7	7.7	2.5	3.4	完形	A
523	43.6	9.8	4.4	3.5	完形	A	583	45.7	10.6	2.7	5.6	完形	A
524	45.4	10.5	3.7	5.1	完形	A	584	40.0	9.1	3.0	3.3	完形	A
525	45.0	8.7	3.3	3.4	完形	A	585	44.4	8.9	3.8	3.6	完形	A
526	44.8	8.9	3.8	3.6	完形	A	586	43.2	9.8	2.9	4.7	完形	A
527	41.9	8.5	2.6	3.5	完形	A	587	43.8	8.6	3.8	3.0	完形	A
528	43.9	8.8	2.9	3.9	完形	A	588	32.6	8.7	3.3	2.9	完形	A
529	43.4	8.4	3.8	2.9	完形	A	589	42.9	9.6	3.7	4.4	完形	A
530	42.2	8.1	2.5	2.6	完形	A	590	44.2	10.4	3.3	5.2	完形	A
531	43.1	10.5	4.2	5.0	完形	A	591	37.4	10.3	4.4	3.9	完形	A
532	41.4	8.7	3.5	4.0	完形	A	592	40.8	8.8	3.6	3.0	完形	A
533	41.9	9.7	4.1	4.2	完形	A	593	44.3	9.1	3.8	3.4	完形	A
534	45.5	9.8	4.5	4.3	完形	A	594	45.8	9.9	4.3	5.0	完形	A
535	40.3	9.3	3.9	3.2	完形	A	595	39.9	10.1	3.5	4.5	完形	A
536	45.3	9.3	3.4	4.0	完形	A	596	41.7	8.5	3.5	2.9	完形	A
537	41.6	10.3	3.3	4.8	完形	A	597	48.3	8.7	3.0	3.8	完形	A
538	42.6	10.0	3.5	4.5	完形	A	598	41.0	9.7	4.1	4.0	完形	A
539	44.8	9.9	3.7	4.7	完形	A	599	36.4	8.7	2.6	3.1	完形	A
540	43.3	9.1	3.6	3.9	完形	A	600	44.3	10.2	4.1	4.8	完形	A

第7表 1号溝状遺構出土土錘計測表6

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
601	39.5	9.5	3.0	4.0	完形	A	661	47.3	10.9	3.3	5.8	完形	A
602	33.5	9.1	3.9	2.8	完形	A	662	40.2	8.3	2.6	2.9	完形	A
603	37.3	8.6	2.6	3.2	完形	A	663	40.2	9.3	2.9	3.9	完形	A
604	40.4	9.4	3.4	4.0	完形	A	664	42.9	10.0	4.2	4.6	完形	A
605	45.9	9.6	4.1	3.9	完形	A	665	42.8	9.4	3.8	3.4	完形	A
606	39.8	10.1	3.9	4.3	完形	A	666	46.1	9.2	3.7	3.2	完形	A
607	41.9	8.8	3.2	3.9	完形	A	667	39.4	10.0	2.6	4.0	完形	A
608	42.7	10.0	3.2	4.3	完形	A	668	42.0	10.1	2.5	5.0	完形	A
609	40.1	9.1	3.2	3.9	完形	A	669	42.6	9.3	3.0	3.5	完形	A
610	37.7	9.7	3.5	3.4	完形	A	670	47.9	9.3	4.1	4.0	完形	A
611	40.1	9.7	3.3	4.3	完形	A	671	44.7	9.1	3.6	4.1	完形	A
612	37.9	8.9	3.8	2.5	完形	A	672	39.7	9.6	3.8	4.1	完形	A
613	37.3	10.5	4.0	4.2	完形	A	673	44.1	8.8	2.9	3.6	完形	A
614	42.8	8.8	3.0	3.7	完形	A	674	43.1	10.0	3.4	4.9	完形	A
615	42.8	9.4	3.1	3.8	完形	A	675	44.2	9.3	4.0	3.6	完形	A
616	38.9	8.0	3.0	2.9	完形	A	676	38.8	8.8	3.1	2.6	完形	A
617	41.9	9.5	3.1	4.0	完形	A	677	36.0	9.2	4.1	3.0	完形	A
618	40.9	8.4	2.8	2.9	完形	A	678	46.3	9.6	2.8	4.1	完形	A
619	43.8	9.2	3.5	3.9	完形	A	679	41.7	9.6	2.9	4.0	完形	A
620	45.6	8.3	3.2	3.4	完形	A	680	40.8	8.6	3.3	2.6	完形	A
621	46.7	10.1	2.8	5.3	完形	A	681	44.1	11.0	4.3	5.4	完形	A
622	42.0	10.6	3.6	4.8	完形	A	682	47.8	8.8	3.1	3.5	完形	A
623	44.9	9.9	3.5	4.3	完形	A	683	43.3	9.8	3.1	4.5	完形	A
624	44.4	9.2	2.8	4.5	完形	A	684	42.6	10.6	3.8	5.0	完形	A
625	45.5	9.4	3.6	3.9	完形	A	685	46.0	8.7	3.0	3.8	完形	A
626	39.5	8.6	3.0	3.3	完形	A	686	45.8	8.9	3.4	3.6	完形	A
627	40.5	9.0	3.4	3.3	完形	A	687	45.1	9.9	3.4	4.5	完形	A
628	43.9	9.4	4.1	3.9	完形	A	688	47.1	8.8	3.1	3.8	完形	A
629	43.8	10.0	4.0	4.8	完形	A	689	39.8	10.5	3.4	4.8	完形	A
630	41.2	9.0	3.7	3.4	完形	A	690	38.9	8.7	3.0	3.4	完形	A
631	43.6	10.4	4.5	4.8	完形	A	691	44.2	10.8	3.3	4.9	完形	A
632	45.2	9.6	3.8	4.5	完形	A	692	42.1	9.8	3.3	4.4	完形	A
633	42.5	10.3	4.2	4.8	完形	A	693	46.9	9.7	2.7	4.5	完形	A
634	43.4	9.0	4.0	3.3	完形	A	694	40.4	9.1	3.5	3.7	完形	A
635	40.2	9.1	2.8	3.8	完形	A	695	39.0	10.2	3.2	4.7	完形	A
636	43.3	9.9	3.9	4.1	完形	A	696	46.0	9.2	3.1	3.9	完形	A
637	42.3	9.8	4.4	3.7	完形	A	697	36.8	8.8	2.6	3.4	完形	A
638	36.5	8.3	3.8	2.6	完形	A	698	47.3	10.3	3.0	5.2	完形	A
639	43.5	8.7	3.7	3.2	完形	A	699	43.6	9.2	3.1	3.8	完形	A
640	46.1	10.9	3.6	5.2	完形	A	700	44.5	9.3	3.1	4.2	完形	A
641	40.1	8.3	3.2	2.8	完形	A	701	44.1	8.8	3.0	3.1	完形	A
642	43.9	10.1	3.0	5.0	完形	A	702	40.6	9.6	4.8	3.1	完形	A
643	41.9	9.3	3.0	4.4	完形	A	703	41.3	9.9	3.5	4.5	完形	A
644	38.6	8.3	3.1	3.2	完形	A	704	43.7	8.3	3.0	3.1	完形	A
645	43.3	8.9	3.6	3.6	完形	A	705	46.1	9.2	4.1	4.2	完形	A
646	43.9	10.3	3.6	5.4	完形	A	706	37.0	9.3	3.7	2.8	完形	A
647	42.9	9.2	3.8	3.7	完形	A	707	40.7	8.5	3.8	2.5	完形	A
648	38.4	9.8	3.0	3.6	完形	A	708	37.9	10.0	3.0	4.2	完形	A
649	39.8	9.9	3.6	3.5	完形	A	709	45.5	8.8	2.9	3.8	完形	A
650	43.3	9.1	3.2	3.3	完形	A	710	39.7	8.0	3.0	2.6	完形	A
651	40.4	10.1	3.4	4.4	完形	A	711	46.7	10.9	3.0	5.2	完形	A
652	37.8	8.9	3.3	3.5	完形	A	712	42.8	10.2	4.0	5.0	完形	A
653	42.6	8.6	3.7	3.1	完形	A	713	43.6	10.0	3.1	4.7	完形	A
654	45.2	9.0	3.8	3.3	完形	A	714	39.8	8.4	2.9	2.8	完形	A
655	39.4	3.0	2.9	2.8	完形	A	715	42.8	10.2	3.4	5.0	完形	A
656	44.4	8.8	2.8	3.7	完形	A	716	36.6	8.9	3.1	3.4	完形	A
657	44.6	9.1	3.5	3.5	完形	A	717	40.3	8.2	3.5	3.1	完形	A
658	40.0	9.4	3.0	3.9	完形	A	718	39.8	8.4	3.6	2.6	完形	A
659	46.2	9.5	3.6	4.1	完形	A	719	42.2	9.0	3.6	3.1	完形	A
660	40.9	9.8	3.0	4.2	完形	A	720	43.3	10.1	4.0	4.2	完形	A

第8表 1号溝状遺構出土土錘計測表7

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
721	44.4	9.2	3.1	4.0	完形	A	781	40.4	8.7	2.7	3.9	完形	A
722	38.8	9.3	3.4	3.4	完形	A	782	44.3	9.1	3.7	3.3	完形	A
723	37.7	9.3	4.5	2.8	完形	A	783	43.8	10.1	5.1	4.0	完形	A
724	43.0	9.3	3.5	3.3	完形	A	784	44.9	10.7	4.6	5.4	完形	A
725	43.8	8.3	3.0	3.0	完形	A	785	42.9	8.7	3.4	3.0	完形	A
726	40.9	8.8	3.0	2.5	完形	A	786	43.0	9.6	4.3	4.2	完形	A
727	40.9	8.8	3.8	3.1	完形	A	787	40.9	8.2	3.6	2.6	完形	A
728	48.1	9.3	3.3	4.3	完形	A	788	38.4	8.7	4.1	3.4	完形	A
729	45.7	9.5	2.8	4.0	完形	A	789	44.1	8.7	3.6	3.3	完形	A
730	39.8	8.2	2.4	2.7	完形	A	790	45.7	9.4	3.7	3.9	完形	A
731	42.0	8.5	3.1	3.2	完形	A	791	42.2	10.1	3.6	4.6	完形	A
732	40.5	10.3	4.0	4.6	完形	A	792	44.5	9.0	3.9	3.7	完形	A
733	44.4	9.1	3.5	3.5	完形	A	793	43.1	10.0	3.7	4.5	完形	A
734	41.1	9.8	3.2	4.4	完形	A	794	38.1	8.5	3.9	3.2	完形	A
735	43.1	8.2	3.4	2.9	完形	A	795	39.9	9.6	3.4	4.2	完形	A
736	42.2	9.5	4.1	4.6	完形	A	796	44.5	9.1	3.8	3.6	完形	A
737	44.7	10.2	3.5	5.0	完形	A	797	43.3	9.5	3.3	4.3	完形	A
738	45.2	9.6	3.5	3.5	完形	A	798	43.4	8.9	3.3	3.3	完形	A
739	39.4	10.7	3.4	4.4	完形	A	799	41.4	9.2	3.3	4.0	完形	A
740	40.4	9.6	5.1	3.8	完形	A	800	44.1	10.3	3.7	5.1	完形	A
741	45.5	8.6	2.7	3.4	完形	A	801	43.5	9.3	3.6	3.8	完形	A
742	41.4	8.3	3.1	2.9	完形	A	802	42.7	10.5	3.5	5.0	完形	A
743	37.3	9.2	3.2	3.4	完形	A	803	45.0	8.6	3.8	3.2	完形	A
744	43.3	10.4	3.6	4.3	完形	A	804	41.2	9.7	4.1	3.4	完形	A
745	42.5	9.0	3.2	3.4	完形	A	805	40.5	8.5	3.9	2.6	完形	A
746	43.2	9.3	3.4	3.2	完形	A	806	41.1	8.8	4.0	3.0	完形	A
747	44.6	9.4	3.2	4.1	完形	A	807	44.2	8.6	4.3	3.5	完形	A
748	43.1	10.0	3.4	4.9	完形	A	808	44.1	10.5	3.1	5.4	完形	A
749	40.7	8.7	2.7	3.7	完形	A	809	47.3	9.2	3.6	4.2	完形	A
750	42.5	8.8	3.3	3.9	完形	A	810	42.7	8.7	4.0	3.2	完形	A
751	45.2	9.3	3.0	3.6	完形	A	811	44.0	9.8	3.9	4.4	完形	A
752	39.9	9.3	3.3	3.6	完形	A	812	43.1	8.7	3.3	3.0	完形	A
753	46.7	9.7	2.8	3.8	完形	A	813	45.6	9.2	3.3	3.4	完形	A
754	42.0	8.7	3.4	3.0	完形	A	814	48.7	9.7	3.5	4.8	完形	A
755	47.7	10.2	4.3	4.8	完形	A	815	46.9	9.2	3.4	3.9	完形	A
756	44.2	10.5	2.7	5.6	完形	A	816	44.2	9.4	3.9	4.0	完形	A
757	43.4	8.6	3.9	2.8	完形	A	817	42.0	9.1	3.2	3.6	完形	A
758	40.4	10.3	3.3	4.8	完形	A	818	42.2	8.9	3.2	3.4	完形	A
759	42.7	8.4	3.0	3.3	完形	A	819	43.1	9.2	2.8	3.6	完形	A
760	45.6	9.1	3.8	3.6	完形	A	820	39.0	9.1	2.9	3.5	完形	A
761	41.5	9.7	3.6	4.0	完形	A	821	37.3	8.6	4.1	2.2	完形	A
762	40.3	8.4	3.1	3.5	完形	A	822	45.7	9.7	3.6	4.2	完形	A
763	37.0	8.8	3.2	3.0	完形	A	823	41.0	10.3	3.5	4.4	完形	A
764	42.0	10.5	3.6	4.7	完形	A	824	45.1	9.6	3.5	4.6	完形	A
765	40.1	9.1	3.6	3.2	完形	A	825	41.4	9.1	4.1	3.2	完形	A
766	42.7	9.0	4.0	3.2	完形	A	826	44.5	9.6	3.3	4.0	完形	A
767	46.5	10.1	4.0	4.8	完形	A	827	45.9	10.3	2.7	6.5	完形	A
768	44.1	9.2	2.8	4.3	完形	A	828	47.1	8.6	2.9	3.0	完形	A
769	43.2	9.5	2.7	3.9	完形	A	829	43.9	8.3	3.2	3.4	完形	A
770	43.6	10.1	3.2	4.9	完形	A	830	44.9	8.3	3.0	3.2	完形	A
771	39.0	10.3	3.5	4.2	完形	A	831	45.8	8.6	4.4	3.1	完形	A
772	38.2	8.3	2.4	2.8	完形	A	832	41.7	9.8	3.9	3.7	完形	A
773	44.5	8.7	3.5	3.5	完形	A	833	45.5	9.6	3.9	4.0	完形	A
774	43.3	10.2	3.4	4.6	完形	A	834	43.3	9.2	5.1	3.3	完形	A
775	42.4	9.3	3.1	3.6	完形	A	835	42.6	9.8	4.1	3.8	完形	A
776	40.7	9.6	3.5	4.0	完形	A	836	42.7	9.0	3.2	3.4	完形	A
777	40.5	7.9	3.5	3.3	完形	A	837	47.2	9.4	2.7	4.1	完形	A
778	43.6	10.0	4.2	4.6	完形	A	838	43.7	9.1	3.0	3.6	完形	A
779	44.6	8.7	3.1	3.5	完形	A	839	44.3	10.2	3.8	4.0	完形	A
780	37.9	10.2	4.2	4.2	完形	A	840	42.5	8.5	2.9	3.1	完形	A

第9表 1号溝状遺構出土土錘計測表8

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
841	43.1	10.1	4.2	4.9	完形	A	901	42.7	10.4	3.6	4.8	完形	A
842	44.2	10.3	3.3	5.0	完形	A	902	41.9	9.6	3.7	4.1	完形	A
843	40.0	10.6	4.7	4.3	完形	A	903	42.6	9.5	4.7	3.5	完形	A
844	42.0	9.6	3.5	4.1	完形	A	904	46.5	9.1	3.6	3.8	完形	A
845	42.6	9.0	4.2	3.2	完形	A	905	40.6	8.9	3.5	3.4	完形	A
846	47.2	10.3	2.8	5.6	完形	A	906	44.5	9.3	4.1	3.5	完形	A
847	42.8	10.1	3.5	4.4	完形	A	907	45.4	8.9	2.9	3.0	完形	A
848	42.5	10.2	4.2	4.6	完形	A	908	44.4	9.9	3.8	4.6	完形	A
849	42.8	10.4	3.5	4.8	完形	A	909	40.0	8.0	3.1	2.6	完形	A
850	41.6	10.0	3.8	4.0	完形	A	910	44.0	8.5	2.7	2.8	完形	A
851	44.6	8.7	3.5	3.1	完形	A	911	45.3	10.1	4.1	5.0	完形	A
852	45.2	8.8	2.9	3.9	完形	A	912	47.6	9.6	3.5	4.6	完形	A
853	45.9	9.4	4.4	3.8	完形	A	913	42.3	11.1	4.7	4.8	完形	A
854	41.7	10.7	4.6	4.8	完形	A	914	46.6	10.4	3.4	5.6	完形	A
855	43.1	9.8	3.4	4.2	完形	A	915	45.6	8.9	3.2	3.8	完形	A
856	45.6	8.6	3.4	3.2	完形	A	916	43.7	10.1	4.4	4.2	完形	A
857	45.9	11.3	2.5	6.8	完形	A	917	44.1	10.3	3.9	4.1	完形	A
858	43.7	8.9	3.2	4.1	完形	A	918	43.1	9.0	2.9	3.1	完形	A
859	42.0	10.5	3.6	4.4	完形	A	919	40.0	10.1	4.0	4.6	完形	A
860	46.4	10.2	3.3	5.2	完形	A	920	41.6	10.5	3.9	5.2	完形	A
861	40.8	9.8	4.5	3.8	完形	A	921	47.9	9.3	4.8	4.3	完形	A
862	38.7	9.0	3.8	2.9	完形	A	922	40.5	10.0	4.5	4.2	完形	A
863	42.6	8.1	2.8	2.8	完形	A	923	49.0	9.3	3.1	4.1	完形	A
864	42.6	10.4	2.9	4.6	完形	A	924	48.6	8.9	3.3	4.0	完形	A
865	39.8	9.3	3.1	4.2	完形	A	925	38.4	10.6	3.4	4.4	完形	A
866	45.6	9.5	3.8	3.8	完形	A	926	44.6	9.4	3.2	3.6	完形	A
867	46.3	8.8	3.4	4.1	完形	A	927	42.0	8.7	3.6	3.2	完形	A
868	41.7	10.6	3.6	4.9	完形	A	928	46.7	8.9	4.4	3.0	完形	A
869	38.7	10.6	4.2	4.5	完形	A	929	40.8	8.7	3.4	3.0	完形	A
870	39.8	9.3	3.8	3.2	完形	A	930	40.8	8.7	3.3	2.7	完形	A
871	39.7	10.2	3.5	4.5	完形	A	931	44.7	8.7	3.3	3.8	完形	A
872	43.4	10.3	3.8	4.8	完形	A	932	43.1	9.2	3.7	3.1	完形	A
873	44.2	10.4	3.1	5.0	完形	A	933	37.7	8.9	3.7	3.6	完形	A
874	40.7	10.1	4.0	4.3	完形	A	934	47.3	10.3	3.6	5.7	完形	A
875	38.7	9.4	3.3	3.5	完形	A	935	42.3	8.4	2.9	3.6	完形	A
876	40.1	8.6	3.9	3.1	完形	A	936	42.8	8.8	3.4	3.7	完形	A
877	47.0	9.9	2.7	4.1	完形	A	937	44.6	9.8	3.8	5.2	完形	A
878	43.7	8.4	3.1	3.2	完形	A	938	40.4	10.0	3.7	4.3	完形	A
879	42.8	8.9	3.0	2.9	完形	A	939	42.0	8.2	2.6	3.3	完形	A
880	42.4	11.0	4.0	5.2	完形	A	940	47.0	9.6	3.3	4.6	完形	A
881	42.5	10.4	3.6	4.6	完形	A	941	47.0	10.6	4.3	5.0	完形	A
882	43.5	8.6	2.6	3.5	完形	A	942	41.3	10.3	3.3	4.7	完形	A
883	39.5	9.7	3.7	4.0	完形	A	943	46.1	10.3	2.6	5.0	完形	A
884	43.2	9.2	3.8	3.6	完形	A	944	37.6	9.0	2.5	3.5	完形	A
885	42.4	9.6	3.6	4.4	完形	A	945	42.1	9.9	3.3	4.6	完形	A
886	44.9	9.3	3.6	3.9	完形	A	946	40.5	9.3	3.6	3.2	完形	A
887	44.1	8.2	2.9	3.2	完形	A	947	45.5	9.6	3.9	3.8	完形	A
888	45.0	9.1	3.4	3.6	完形	A	948	43.0	9.1	2.5	4.2	完形	A
889	39.6	10.0	4.0	4.1	完形	A	949	41.8	9.1	4.1	3.6	完形	A
890	42.7	8.4	3.4	3.2	完形	A	950	40.0	8.8	3.0	3.3	完形	A
891	45.5	8.8	3.4	3.4	完形	A	951	41.2	9.2	3.6	3.9	完形	A
892	47.5	8.5	3.0	3.1	完形	A	952	46.5	9.9	3.1	4.9	完形	A
893	39.1	8.2	3.0	2.5	完形	A	953	43.3	9.3	3.8	3.5	完形	A
894	42.7	9.0	3.6	2.7	完形	A	954	48.1	9.1	3.5	4.0	完形	A
895	45.5	8.9	2.9	3.2	完形	A	955	44.6	9.4	4.3	3.6	完形	A
896	44.9	8.7	3.8	3.2	完形	A	956	41.6	10.6	4.1	4.8	完形	A
897	41.8	8.9	3.1	2.8	完形	A	957	44.9	8.9	2.9	3.8	完形	A
898	43.7	9.7	3.2	3.8	完形	A	958	37.2	9.4	3.0	3.6	完形	A
899	44.0	8.5	3.1	3.0	完形	A	959	42.7	10.0	3.4	4.7	完形	A
900	38.6	9.6	4.1	2.9	完形	A	960	45.0	8.4	3.2	3.4	完形	A

第10表 1号溝状遺構出土土錘計測表9

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
961	46.1	10.0	3.6	4.8	完形	A	1021	41.8	8.4	3.5	3.5	完形	A
962	42.1	10.0	3.3	4.7	完形	A	1022	43.1	9.1	3.7	3.8	完形	A
963	40.4	9.0	3.8	3.2	完形	A	1023	40.8	9.1	3.4	3.3	完形	A
964	43.1	10.0	3.4	5.0	完形	A	1024	44.8	9.9	3.0	4.7	完形	A
965	42.0	8.9	3.7	3.7	完形	A	1025	45.5	11.1	3.4	5.5	完形	A
966	40.0	10.1	3.3	4.4	完形	A	1026	38.6	10.0	3.8	3.9	完形	A
967	42.3	9.9	3.8	4.2	完形	A	1027	41.6	10.3	4.3	5.0	完形	A
968	41.7	9.2	3.1	3.8	完形	A	1028	36.1	8.2	3.3	2.9	完形	A
969	39.1	10.1	3.8	4.4	完形	A	1029	42.7	9.8	3.3	4.3	完形	A
970	39.5	9.2	3.4	3.1	完形	A	1030	45.8	9.0	3.7	4.7	完形	A
971	42.9	8.9	3.8	3.6	完形	A	1031	43.8	10.0	3.4	4.9	完形	A
972	40.4	8.6	3.0	2.7	完形	A	1032	46.2	10.0	3.6	5.2	完形	A
973	45.9	10.4	4.0	5.8	完形	A	1033	41.9	9.9	3.6	4.3	完形	A
974	45.5	9.6	3.0	4.1	完形	A	1034	40.0	10.0	3.4	4.2	完形	A
975	46.7	10.0	3.1	5.6	完形	A	1035	44.5	8.5	3.6	2.8	完形	A
976	46.1	10.5	4.1	4.8	完形	A	1036	41.3	9.8	3.8	4.4	完形	A
977	48.0	9.2	3.8	3.9	完形	A	1037	40.8	9.1	3.6	4.0	完形	A
978	37.9	9.2	4.5	2.7	完形	A	1038	42.2	8.1	3.1	3.5	完形	A
979	41.7	10.3	3.5	4.5	完形	A	1039	43.7	9.4	4.0	3.3	完形	A
980	40.3	8.7	2.8	3.2	完形	A	1040	39.4	9.5	4.1	3.4	完形	A
981	45.1	8.6	3.7	3.8	完形	A	1041	37.1	8.9	4.4	2.8	完形	A
982	41.4	10.7	3.8	4.5	完形	A	1042	40.0	8.9	3.2	3.7	完形	A
983	37.7	9.1	2.8	3.7	完形	A	1043	43.4	8.8	3.8	3.2	完形	A
984	45.9	8.9	3.6	4.1	完形	A	1044	48.0	9.1	3.8	3.6	完形	A
985	45.5	10.5	3.8	5.0	完形	A	1045	41.8	9.2	3.9	3.4	完形	A
986	43.4	9.7	3.5	4.6	完形	A	1046	39.2	9.2	4.1	3.3	完形	A
987	44.0	10.1	3.8	5.1	完形	A	1047	41.3	10.2	4.0	4.6	完形	A
988	42.6	8.9	3.8	2.9	完形	A	1048	43.5	9.0	2.9	3.6	完形	A
989	46.1	9.4	4.1	3.9	完形	A	1049	48.1	9.4	3.9	4.2	完形	A
990	43.6	10.1	3.9	4.9	完形	A	1050	41.1	8.2	2.4	3.5	完形	A
991	46.8	10.6	2.4	6.3	完形	A	1051	42.4	9.5	4.2	3.9	完形	A
992	44.0	9.0	3.2	3.8	完形	A	1052	47.1	9.3	3.5	3.9	完形	A
993	46.7	10.3	3.1	5.3	完形	A	1053	42.6	9.9	4.5	3.8	完形	A
994	42.8	10.2	4.0	4.6	完形	A	1054	43.4	10.2	4.1	5.0	完形	A
995	46.7	9.3	4.2	4.0	完形	A	1055	43.6	10.1	3.8	4.7	完形	A
996	39.8	9.8	3.4	4.3	完形	A	1056	42.2	10.2	3.7	5.4	完形	A
997	45.6	8.2	3.1	3.3	完形	A	1057	42.1	8.2	3.2	2.5	完形	A
998	40.6	8.7	3.5	3.4	完形	A	1058	43.4	8.7	3.5	3.3	完形	A
999	43.7	8.6	3.3	3.0	完形	A	1059	48.4	8.9	3.3	3.7	完形	A
1000	44.7	10.2	3.0	4.6	完形	A	1060	42.5	9.3	3.5	3.4	完形	A
1001	47.3	9.7	3.6	4.7	完形	A	1061	41.0	9.9	4.5	3.3	完形	A
1002	46.5	10.4	3.6	5.1	完形	A	1062	43.9	11.0	2.8	5.2	完形	A
1003	37.8	10.5	3.2	3.9	完形	A	1063	40.5	9.1	3.6	3.2	完形	A
1004	43.0	10.3	3.4	4.9	完形	A	1064	42.9	8.9	2.8	3.1	完形	A
1005	45.8	9.8	3.3	5.3	完形	A	1065	44.6	9.9	3.9	4.4	完形	A
1006	38.9	9.1	3.7	3.4	完形	A	1066	43.8	11.7	2.7	6.6	完形	A
1007	45.2	9.8	2.7	4.8	完形	A	1067	45.4	10.8	3.3	6.1	完形	A
1008	38.8	9.1	3.1	3.4	完形	A	1068	45.9	8.7	3.6	3.7	完形	A
1009	39.6	8.9	3.9	2.6	完形	A	1069	46.7	8.8	3.0	3.6	完形	A
1010	43.2	10.0	3.7	4.8	完形	A	1070	40.8	9.3	4.1	3.0	完形	A
1011	47.2	9.8	3.4	4.1	完形	A	1071	42.5	9.7	3.3	4.8	完形	A
1012	42.5	8.6	3.3	3.1	完形	A	1072	41.9	9.9	3.5	4.4	完形	A
1013	42.4	10.2	4.1	4.8	完形	A	1073	42.7	10.5	4.5	4.9	完形	A
1014	48.0	10.3	3.4	5.1	完形	A	1074	44.6	8.8	3.0	3.3	完形	A
1015	44.9	9.4	4.1	3.4	完形	A	1075	48.7	10.7	3.4	5.3	完形	A
1016	46.4	11.9	3.2	6.4	完形	A	1076	47.4	10.2	3.4	5.5	完形	A
1017	45.0	8.5	3.0	3.7	完形	A	1077	46.8	9.4	2.8	4.3	完形	A
1018	44.4	10.8	3.4	5.0	完形	A	1078	40.4	9.5	2.7	4.4	完形	A
1019	40.9	8.4	2.7	2.8	完形	A	1079	40.8	8.7	3.3	3.3	完形	A
1020	43.6	10.2	4.0	4.8	完形	A	1080	46.4	10.1	3.2	4.8	完形	A

第11表 1号溝状遺構出土土錘計測表10

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1081	45.7	9.0	4.1	3.5	完形	A	1141	41.4	9.5	2.1	4.2	完形	A
1082	45.9	8.6	4.0	3.3	完形	A	1142	45.7	9.1	3.3	4.0	完形	A
1083	44.2	10.7	3.6	4.6	完形	A	1143	38.5	9.1	2.8	3.4	完形	A
1084	45.5	9.8	4.6	3.8	完形	A	1144	41.0	8.6	2.9	3.3	完形	A
1085	47.3	10.3	3.2	5.4	完形	A	1145	38.3	9.3	3.0	3.8	完形	A
1086	39.5	10.2	3.8	3.7	完形	A	1146	37.0	8.3	2.6	3.0	完形	A
1087	38.4	9.3	3.6	3.5	完形	A	1147	38.6	9.7	2.9	4.4	完形	A
1088	40.6	8.7	3.4	3.1	完形	A	1148	43.6	8.6	2.7	3.7	完形	A
1089	45.1	8.1	3.2	3.1	完形	A	1149	46.9	10.5	2.6	5.6	完形	A
1090	42.6	10.2	4.0	4.8	完形	A	1150	42.6	8.7	2.6	4.2	完形	A
1091	40.1	8.8	3.1	3.9	完形	A	1151	34.8	9.0	4.1	2.8	完形	A
1092	38.9	9.2	3.1	3.7	完形	A	1152	36.4	10.1	3.8	4.0	完形	A
1093	45.9	9.2	3.9	3.8	完形	A	1153	38.3	8.4	3.6	3.3	完形	A
1094	47.8	9.9	3.9	4.4	完形	A	1154	34.6	8.8	3.2	3.2	完形	A
1095	45.5	10.0	4.2	5.1	完形	A	1155	32.9	8.8	3.1	2.6	完形	A
1096	45.3	9.5	3.6	4.4	完形	A	1156	37.3	9.1	3.6	3.6	完形	A
1097	40.2	8.7	3.3	2.8	完形	A	1157	37.7	8.7	3.9	3.0	完形	A
1098	40.2	9.1	4.2	3.7	完形	A	1158	36.1	8.9	3.3	3.2	完形	A
1099	44.5	8.4	3.4	3.2	完形	A	1159	35.0	8.4	3.0	2.9	完形	A
1100	38.5	9.1	3.3	3.4	完形	A	1160	34.1	9.4	3.2	3.5	完形	A
1101	44.7	10.2	3.0	4.8	完形	A	1161	35.5	8.2	2.7	2.6	完形	A
1102	38.2	9.2	3.8	3.1	完形	A	1162	31.8	9.2	4.1	2.8	完形	A
1103	44.2	10.7	3.7	5.0	完形	A	1163	33.9	8.3	2.8	2.6	完形	A
1104	46.9	10.0	3.3	5.1	完形	A	1164	33.9	9.2	3.5	2.7	完形	A
1105	41.9	10.1	3.3	4.7	完形	A	1165	31.9	8.3	3.1	2.2	完形	A
1106	43.4	10.0	3.2	4.8	完形	A	1166	34.9	9.5	3.4	3.6	完形	A
1107	47.8	8.8	3.1	3.4	完形	A	1167	34.6	9.4	3.8	2.7	完形	A
1108	45.3	9.1	3.9	3.3	完形	A	1168	37.5	8.7	4.5	3.4	完形	A
1109	41.7	8.7	2.9	3.7	完形	A	1169	33.5	8.6	3.4	2.7	完形	A
1110	43.2	8.7	3.0	3.6	完形	A	1170	33.7	8.8	4.0	2.8	完形	A
1111	42.9	10.3	3.2	4.8	完形	A	1171	35.2	8.8	3.9	2.8	完形	A
1112	40.9	10.6	3.6	4.9	完形	A	1172	36.5	8.5	3.5	3.2	完形	A
1113	43.0	10.0	2.8	4.1	完形	A	1173	35.4	8.9	3.9	2.8	完形	A
1114	42.3	10.1	3.2	4.4	完形	A	1174	37.6	9.4	2.7	3.6	完形	A
1115	43.0	9.4	3.7	3.4	完形	A	1175	36.3	8.7	3.4	3.1	完形	A
1116	43.3	9.1	3.3	3.4	完形	A	1176	35.6	8.7	3.7	3.1	完形	A
1117	38.4	9.8	3.1	4.0	完形	A	1177	37.7	8.7	2.3	3.5	完形	A
1118	44.2	10.9	3.8	5.6	完形	A	1178	32.9	8.0	3.2	2.4	完形	A
1119	44.9	9.3	3.9	3.2	完形	A	1179	36.6	10.6	3.0	3.9	完形	A
1120	48.0	10.0	2.7	5.4	完形	A	1180	36.8	8.2	2.8	2.9	完形	A
1121	44.2	8.9	3.1	3.5	完形	A	1181	38.4	8.7	2.8	2.8	完形	A
1122	41.5	8.8	2.4	3.6	完形	A	1182	37.1	8.4	2.8	3.1	完形	A
1123	44.0	9.7	3.9	4.3	完形	A	1183	35.3	8.7	3.7	2.3	完形	A
1124	44.6	8.3	3.6	3.6	完形	A	1184	37.5	8.7	3.4	3.1	完形	A
1125	40.7	10.0	3.9	4.4	完形	A	1185	36.2	8.4	3.2	2.4	完形	A
1126	42.2	9.8	3.1	4.2	完形	A	1186	33.2	9.3	3.1	3.5	完形	A
1127	41.5	9.1	3.3	3.1	完形	A	1187	36.4	8.8	3.2	2.5	完形	A
1128	37.9	8.6	3.2	3.5	完形	A	1188	37.8	8.1	3.1	2.2	完形	A
1129	44.7	9.9	4.1	4.9	完形	A	1189	37.2	8.6	3.3	3.1	完形	A
1130	46.6	10.2	3.6	5.5	完形	A	1190	34.4	7.9	3.3	1.8	完形	A
1131	42.2	9.5	3.5	3.2	完形	A	1191	40.7	8.8	2.6	3.8	完形	A
1132	38.0	9.5	2.5	3.8	完形	A	1192	32.2	8.7	3.0	2.7	完形	A
1133	39.6	9.4	3.7	3.9	完形	A	1193	37.4	9.1	3.8	2.7	完形	A
1134	45.8	9.9	4.3	3.9	完形	A	1194	35.6	8.9	3.2	3.0	完形	A
1135	44.7	8.3	3.1	3.5	完形	A	1195	39.9	10.1	3.5	4.0	完形	A
1136	46.1	8.3	3.0	3.1	完形	A	1196	41.3	10.5	2.9	5.0	完形	A
1137	45.7	10.2	2.5	5.0	完形	A	1197	38.1	9.7	3.2	4.0	完形	A
1138	41.9	8.2	2.9	3.8	完形	A	1198	38.9	9.9	3.4	3.8	完形	A
1139	44.8	9.4	3.1	3.8	完形	A	1199	36.4	8.3	2.4	2.1	完形	A
1140	38.7	8.8	3.4	3.2	完形	A	1200	36.9	9.3	3.7	3.4	完形	A

第12表 1号溝状遺構出土土錘計測表11

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1201	38.5	9.2	3.1	3.1	完形	A	1261	35.0	8.7	3.6	2.7	完形	A
1202	34.0	8.7	2.9	2.8	完形	A	1262	34.4	9.9	3.8	3.2	完形	A
1203	35.4	8.4	2.4	2.6	完形	A	1263	37.4	9.0	3.3	3.3	完形	A
1204	35.4	8.9	3.7	3.4	完形	A	1264	35.9	7.9	3.0	2.7	完形	A
1205	38.0	9.3	3.4	3.9	完形	A	1265	36.0	7.9	3.0	2.7	完形	A
1206	38.5	8.9	2.8	3.6	完形	A	1266	35.6	8.0	3.7	2.7	完形	A
1207	37.2	9.5	3.0	3.5	完形	A	1267	34.9	9.3	3.3	2.8	完形	A
1208	39.7	8.7	3.3	3.2	完形	A	1268	34.5	9.2	3.3	2.7	完形	A
1209	33.3	8.4	3.1	2.9	完形	A	1269	35.3	8.8	3.3	2.6	完形	A
1210	35.5	8.4	3.5	2.9	完形	A	1270	38.7	9.0	4.3	3.1	完形	A
1211	37.9	8.7	3.6	3.3	完形	A	1271	35.0	9.2	3.2	3.1	完形	A
1212	34.7	8.8	3.0	2.9	完形	A	1272	33.9	8.6	3.1	2.8	完形	A
1213	39.6	8.1	2.9	3.3	完形	A	1273	31.8	8.1	3.5	2.2	完形	A
1214	35.3	8.3	2.9	2.7	完形	A	1274	35.8	9.7	3.2	3.6	完形	A
1215	37.2	10.1	3.6	3.8	完形	A	1275	37.8	8.6	2.5	3.2	完形	A
1216	36.7	8.8	3.4	3.2	完形	A	1276	35.5	8.7	3.3	2.7	完形	A
1217	32.9	8.5	3.1	2.5	完形	A	1277	32.6	8.5	3.6	2.2	完形	A
1218	37.7	9.0	3.7	3.0	完形	A	1278	38.6	8.7	3.1	3.7	完形	A
1219	32.5	9.4	3.8	2.5	完形	A	1279	32.2	9.5	3.8	2.7	完形	A
1220	34.5	8.6	3.3	2.5	完形	A	1280	35.3	9.8	2.9	3.1	完形	A
1221	40.7	9.9	3.2	4.3	完形	A	1281	37.4	9.1	3.2	3.0	完形	A
1222	39.0	8.9	2.9	3.5	完形	A	1282	35.4	9.0	4.0	2.3	完形	A
1223	35.2	9.2	2.8	3.5	完形	A	1283	36.5	8.4	2.2	3.1	完形	A
1224	39.9	8.7	3.2	3.0	完形	A	1284	36.9	7.6	4.0	1.7	完形	A
1225	28.3	8.6	3.6	2.2	完形	A	1285	37.6	8.4	2.6	3.1	完形	A
1226	39.7	9.7	3.6	4.0	完形	A	1286	35.5	9.0	3.0	2.5	完形	A
1227	36.4	8.9	2.8	2.8	完形	A	1287	35.1	8.9	2.5	3.2	完形	A
1228	34.3	8.3	3.4	2.8	完形	A	1288	36.1	8.0	2.9	2.7	完形	A
1229	29.8	9.3	2.8	2.9	完形	A	1289	36.9	8.7	3.0	3.2	完形	A
1230	29.6	8.2	3.4	2.3	完形	A	1290	33.4	8.6	3.0	2.7	完形	A
1231	32.8	8.9	3.7	2.7	完形	A	1291	41.8	8.9	3.1	3.5	完形	A
1232	37.8	8.9	3.7	2.8	完形	A	1292	41.3	9.1	4.0	4.0	完形	A
1233	35.4	8.8	2.6	3.1	完形	A	1293	37.8	8.8	3.7	3.0	完形	A
1234	36.7	8.4	3.6	3.0	完形	A	1294	40.2	10.0	3.4	4.1	完形	A
1235	39.8	10.1	3.3	4.1	完形	A	1295	31.6	8.7	3.5	2.4	完形	A
1236	36.2	8.8	3.8	3.3	完形	A	1296	32.8	8.6	2.9	2.1	完形	A
1237	34.8	8.2	3.4	2.3	完形	A	1297	38.0	8.1	2.5	3.2	完形	A
1238	37.2	8.1	3.0	3.0	完形	A	1298	32.9	8.2	2.6	2.4	完形	A
1239	39.3	8.3	2.7	2.8	完形	A	1299	37.2	8.9	3.5	3.3	完形	A
1240	39.3	9.5	3.8	3.4	完形	A	1300	38.4	9.1	3.1	3.1	完形	A
1241	32.6	8.6	3.0	2.3	完形	A	1301	37.3	10.2	4.6	4.0	完形	A
1242	35.6	8.9	3.2	3.0	完形	A	1302	36.3	8.4	3.7	2.3	完形	A
1243	33.8	8.7	3.0	2.9	完形	A	1303	33.1	9.7	3.0	2.6	完形	A
1244	36.4	8.5	3.1	3.0	完形	A	1304	34.5	8.8	3.8	2.9	完形	A
1245	36.0	7.9	2.9	2.7	完形	A	1305	35.2	8.2	2.9	2.7	完形	A
1246	33.8	8.3	3.1	2.4	完形	A	1306	39.8	9.1	2.8	3.8	完形	A
1247	36.9	7.6	2.5	2.7	完形	A	1307	42.6	9.4	2.3	4.2	完形	A
1248	34.9	8.2	2.6	2.7	完形	A	1308	31.8	8.1	3.0	2.4	完形	A
1249	33.9	8.7	3.3	2.7	完形	A	1309	35.5	8.4	3.0	2.4	完形	A
1250	33.6	8.7	3.2	2.6	完形	A	1310	36.1	9.0	3.2	2.6	完形	A
1251	30.7	8.7	3.9	2.6	完形	A	1311	33.2	8.2	3.0	2.2	完形	A
1252	35.4	8.4	3.0	2.7	完形	A	1312	36.9	9.7	3.0	4.2	完形	A
1253	32.8	8.4	2.5	2.8	完形	A	1313	40.5	9.3	3.7	2.8	完形	A
1254	35.0	8.1	3.4	2.6	完形	A	1314	36.3	8.0	2.6	2.5	完形	A
1255	36.9	8.8	3.6	3.2	完形	A	1315	36.0	9.1	3.3	3.1	完形	A
1256	35.5	8.6	3.0	3.2	完形	A	1316	37.6	8.5	2.5	3.4	完形	A
1257	33.6	7.7	3.0	2.2	完形	A	1317	37.6	9.1	3.0	3.6	完形	A
1258	31.6	9.1	4.7	2.5	完形	A	1318	34.3	8.8	2.4	3.1	完形	A
1259	34.7	8.2	3.0	3.1	完形	A	1319	38.7	7.9	3.1	3.1	完形	A
1260	37.5	8.4	3.3	3.1	完形	A	1320	39.0	9.6	2.6	3.9	完形	A

第13表 1号溝状遺構出土土錘計測表12

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1321	36.9	9.2	3.4	3.6	完形	A	1381	35.9	9.1	3.5	3.0	完形	A
1322	33.4	8.6	2.4	2.7	完形	A	1382	35.1	9.3	2.5	3.1	完形	A
1323	31.0	9.0	3.3	2.7	完形	A	1383	32.3	9.0	2.7	2.9	完形	A
1324	37.5	8.2	2.5	3.0	完形	A	1384	34.9	8.2	3.0	2.8	完形	A
1325	29.2	8.9	3.0	2.2	完形	A	1385	32.4	8.8	3.0	3.0	完形	A
1326	37.0	7.8	2.6	2.6	完形	A	1386	38.5	11.0	4.1	4.3	完形	A
1327	33.5	9.0	2.6	2.9	完形	A	1387	38.9	9.0	3.0	3.1	完形	A
1328	37.0	8.1	2.6	2.8	完形	A	1388	27.6	8.2	2.9	1.6	完形	A
1329	36.3	8.9	3.2	3.0	完形	A	1389	37.1	8.8	2.6	3.0	完形	A
1330	39.8	8.5	3.5	2.8	完形	A	1390	36.6	9.7	3.6	3.4	完形	A
1331	32.3	7.9	2.6	2.5	完形	A	1391	39.0	9.1	3.4	3.5	完形	A
1332	33.7	9.0	3.6	3.1	完形	A	1392	33.8	8.4	2.9	2.6	完形	A
1333	36.7	8.4	3.0	3.1	完形	A	1393	38.9	9.7	3.6	4.1	完形	A
1334	37.2	8.8	3.6	2.6	完形	A	1394	40.3	8.6	2.6	3.5	完形	A
1335	36.0	9.5	3.5	2.9	完形	A	1395	34.3	8.7	3.3	2.8	完形	A
1336	38.4	8.3	3.5	3.2	完形	A	1396	35.4	8.4	3.8	2.6	完形	A
1337	36.3	8.7	3.0	3.2	完形	A	1397	39.6	9.1	2.9	4.0	完形	A
1338	37.0	9.0	3.4	3.2	完形	A	1398	35.4	9.9	3.7	3.7	完形	A
1339	31.4	8.2	2.7	2.6	完形	A	1399	31.5	9.0	3.0	3.0	完形	A
1340	39.7	9.8	3.6	3.8	完形	A	1400	37.1	9.0	3.0	3.5	完形	A
1341	39.0	8.7	3.4	3.2	完形	A	1401	32.8	8.1	3.0	2.2	完形	A
1342	33.2	8.7	3.0	3.2	完形	A	1402	37.0	10.6	3.7	4.5	完形	A
1343	36.1	8.3	3.6	2.1	完形	A	1403	35.7	9.3	3.3	3.1	完形	A
1344	36.3	8.3	3.0	3.1	完形	A	1404	29.4	8.2	2.9	2.4	完形	A
1345	37.5	9.1	3.9	3.2	完形	A	1405	38.5	8.9	3.3	3.6	完形	A
1346	33.1	8.5	3.0	2.9	完形	A	1406	35.3	8.3	2.4	2.9	完形	A
1347	39.9	8.6	2.5	3.3	完形	A	1407	40.1	8.5	3.9	3.0	完形	A
1348	38.0	9.0	4.6	3.6	完形	A	1408	37.5	7.8	2.4	2.8	完形	A
1349	34.2	8.5	3.2	2.7	完形	A	1409	38.4	8.7	4.2	2.6	完形	A
1350	40.1	8.5	3.2	2.9	完形	A	1410	35.2	9.1	3.1	3.3	完形	A
1351	37.0	8.1	2.4	3.1	完形	A	1411	34.6	8.9	3.5	2.8	完形	A
1352	34.0	9.5	4.4	2.9	完形	A	1412	37.9	10.0	3.0	4.0	完形	A
1353	38.1	8.7	2.6	3.4	完形	A	1413	35.1	9.1	3.4	3.2	完形	A
1354	32.7	9.7	3.9	3.7	完形	A	1414	39.9	8.4	3.7	2.7	完形	A
1355	29.2	8.9	3.1	2.5	完形	A	1415	34.6	8.8	2.8	2.9	完形	A
1356	37.1	9.2	3.8	3.7	完形	A	1416	34.2	8.1	2.8	2.7	完形	A
1357	34.7	8.4	2.8	3.0	完形	A	1417	35.9	7.9	3.0	2.8	完形	A
1358	35.5	7.9	2.7	2.6	完形	A	1418	36.2	8.0	2.2	2.6	完形	A
1359	39.4	8.1	2.9	2.5	完形	A	1419	33.5	9.9	2.6	3.1	完形	A
1360	31.1	8.7	3.4	2.8	完形	A	1420	36.0	8.6	2.9	2.5	完形	A
1361	35.8	8.4	2.9	3.0	完形	A	1421	32.2	8.0	3.0	2.2	完形	A
1362	34.3	8.7	2.4	3.2	完形	A	1422	34.3	8.8	2.5	3.0	完形	A
1363	37.1	9.5	3.7	3.5	完形	A	1423	32.5	8.5	2.4	2.7	完形	A
1364	38.4	9.9	2.4	4.0	完形	A	1424	37.2	8.9	2.6	3.3	完形	A
1365	37.2	8.3	2.8	3.0	完形	A	1425	37.7	8.7	2.5	3.2	完形	A
1366	33.1	9.1	2.7	2.7	完形	A	1426	35.6	8.5	2.8	2.9	完形	A
1367	36.7	8.0	2.9	2.6	完形	A	1427	36.5	9.0	3.3	3.4	完形	A
1368	37.2	8.2	3.0	2.7	完形	A	1428	35.0	8.3	3.4	2.9	完形	A
1369	37.6	7.9	3.1	3.0	完形	A	1429	34.0	8.6	3.1	2.6	完形	A
1370	33.8	9.1	2.8	3.2	完形	A	1430	36.9	8.9	3.5	3.4	完形	A
1371	41.3	8.9	3.2	3.8	完形	A	1431	33.3	8.7	2.8	2.8	完形	A
1372	39.3	8.6	3.0	3.2	完形	A	1432	36.7	9.0	3.9	2.8	完形	A
1373	38.4	9.0	3.6	2.6	完形	A	1433	35.9	8.9	3.8	2.9	完形	A
1374	36.9	9.9	4.3	3.9	完形	A	1434	37.3	8.6	3.2	2.6	完形	A
1375	34.7	8.6	3.1	2.7	完形	A	1435	37.1	9.4	2.9	3.6	完形	A
1376	39.0	8.3	3.6	2.4	完形	A	1436	34.9	8.6	3.2	3.0	完形	A
1377	35.4	8.6	3.6	2.4	完形	A	1437	37.6	8.3	1.9	3.5	完形	A
1378	40.0	9.4	3.4	3.2	完形	A	1438	37.5	8.8	3.0	3.2	完形	A
1379	40.5	9.0	3.4	3.2	完形	A	1439	33.7	8.9	2.5	3.1	完形	A
1380	36.8	8.6	3.7	2.7	完形	A	1440	33.6	7.9	2.7	2.4	完形	A

第14表 1号溝状遺構出土土錘計測表13

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1441	35.9	8.7	2.8	3.3	完形	A	1501	34.7	9.0	2.0	3.4	完形	A
1442	37.1	8.6	1.9	3.4	完形	A	1502	35.9	7.8	2.3	2.6	完形	A
1443	33.0	7.8	2.8	2.4	完形	A	1503	36.5	9.3	3.1	3.4	完形	A
1444	34.2	7.6	2.2	2.6	完形	A	1504	33.4	8.4	3.1	2.8	完形	A
1445	35.7	8.6	3.0	2.6	完形	A	1505	33.3	8.7	3.0	2.8	完形	A
1446	40.5	8.4	3.4	3.4	完形	A	1506	31.5	8.8	2.8	2.8	完形	A
1447	40.5	9.1	4.4	3.1	完形	A	1507	34.6	8.1	3.2	2.4	完形	A
1448	34.9	9.1	3.0	3.1	完形	A	1508	31.9	8.7	3.2	2.6	完形	A
1449	33.3	8.4	3.3	2.6	完形	A	1509	34.7	8.5	3.3	2.8	完形	A
1450	34.4	7.7	2.6	2.4	完形	A	1510	35.5	8.3	3.7	3.1	完形	A
1451	32.9	8.6	2.6	2.7	完形	A	1511	34.3	7.7	3.0	2.5	完形	A
1452	33.1	7.8	3.0	2.3	完形	A	1512	33.6	8.7	3.4	2.9	完形	A
1453	37.9	8.7	3.2	2.9	完形	A	1513	33.2	8.3	2.5	2.9	完形	A
1454	35.0	8.5	3.4	2.9	完形	A	1514	36.0	9.4	3.3	3.6	完形	A
1455	36.6	9.0	3.0	3.3	完形	A	1515	32.7	8.6	3.3	2.7	完形	A
1456	36.9	9.7	3.2	3.7	完形	A	1516	32.9	8.8	2.9	2.7	完形	A
1457	37.7	8.8	3.0	3.3	完形	A	1517	36.3	8.8	3.4	3.1	完形	A
1458	35.2	8.2	2.7	2.8	完形	A	1518	34.6	8.3	2.8	2.9	完形	A
1459	35.5	8.5	2.3	3.0	完形	A	1519	32.0	7.4	2.7	2.0	完形	A
1460	34.5	8.8	3.3	2.5	完形	A	1520	34.2	9.0	3.4	2.5	完形	A
1461	34.5	8.8	3.7	2.7	完形	A	1521	34.6	8.3	2.9	2.9	完形	A
1462	33.9	8.7	2.4	3.1	完形	A	1522	34.3	8.4	2.7	2.4	完形	A
1463	35.1	8.1	3.4	2.6	完形	A	1523	35.7	9.2	3.7	2.9	完形	A
1464	34.2	9.0	3.1	3.3	完形	A	1524	34.8	8.9	2.4	3.3	完形	A
1465	29.5	8.0	3.3	2.0	完形	A	1525	39.1	8.3	3.0	3.3	完形	A
1466	34.1	9.1	3.3	3.4	完形	A	1526	30.3	8.7	2.2	3.7	完形	A
1467	31.6	8.6	2.9	2.6	完形	A	1527	33.7	8.7	3.0	2.9	完形	A
1468	35.2	8.8	2.5	3.3	完形	A	1528	31.8	8.7	3.1	2.5	完形	A
1469	41.4	9.1	3.4	3.8	完形	A	1529	36.3	9.0	2.9	3.6	完形	A
1470	33.0	7.9	2.5	2.2	完形	A	1530	31.3	7.9	2.5	2.4	完形	A
1471	38.7	8.2	3.4	2.6	完形	A	1531	31.5	9.4	2.9	3.1	完形	A
1472	37.5	8.6	3.3	2.6	完形	A	1532	35.5	8.3	3.3	2.8	完形	A
1473	34.7	8.1	2.9	2.7	完形	A	1533	32.9	9.3	2.5	3.1	完形	A
1474	35.4	2.3	3.5	3.2	完形	A	1534	33.3	9.0	3.0	3.2	完形	A
1475	34.0	8.6	3.2	2.6	完形	A	1535	34.4	9.2	3.3	3.4	完形	A
1476	33.5	8.8	3.1	2.6	完形	A	1536	38.2	9.7	3.0	4.4	完形	A
1477	34.9	8.4	3.4	2.7	完形	A	1537	30.3	7.8	3.4	2.2	完形	A
1478	33.1	8.2	2.8	2.7	完形	A	1538	28.9	8.4	2.6	2.5	完形	A
1479	34.7	8.7	3.4	3.0	完形	A	1539	33.7	8.1	3.7	2.5	完形	A
1480	37.0	8.6	3.1	3.1	完形	A	1540	36.6	8.9	3.7	3.1	完形	A
1481	34.3	8.6	2.7	2.9	完形	A	1541	30.3	8.2	2.1	2.4	完形	A
1482	36.3	8.5	3.6	2.4	完形	A	1542	33.0	8.4	2.8	2.5	完形	A
1483	32.9	8.6	3.3	2.9	完形	A	1543	34.9	9.6	3.2	3.5	完形	A
1484	34.6	8.2	2.6	2.8	完形	A	1544	32.0	8.5	2.6	2.4	完形	A
1485	37.6	9.2	2.6	3.6	完形	A	1545	34.5	8.6	3.0	3.0	完形	A
1486	37.9	8.4	2.7	2.6	完形	A	1546	32.2	8.2	2.5	2.5	完形	A
1487	33.7	7.5	2.3	2.3	完形	A	1547	31.9	9.4	3.1	3.3	完形	A
1488	37.8	10.4	4.1	4.0	完形	A	1548	31.3	8.5	2.1	2.6	完形	A
1489	38.2	9.0	4.0	2.6	完形	A	1549	35.7	9.0	2.1	3.2	完形	A
1490	35.0	8.1	3.1	2.5	完形	A	1550	34.0	8.3	3.0	3.0	完形	A
1491	33.2	7.7	2.5	2.5	完形	A	1551	33.1	8.6	2.6	2.9	完形	A
1492	37.0	8.4	2.6	3.4	完形	A	1552	34.2	8.4	2.6	2.7	完形	A
1493	37.6	7.9	2.3	2.6	完形	A	1553	32.0	8.4	2.7	2.5	完形	A
1494	32.8	8.6	3.0	2.8	完形	A	1554	32.5	8.7	2.8	2.8	完形	A
1495	34.6	8.6	3.5	2.8	完形	A	1555	31.3	8.6	2.9	2.7	完形	A
1496	33.8	8.2	3.3	2.7	完形	A	1556	33.8	8.2	2.9	2.9	完形	A
1497	32.1	8.8	2.6	2.8	完形	A	1557	32.9	9.5	2.9	3.2	完形	A
1498	35.4	7.7	2.6	2.8	完形	A	1558	43.3	8.8	3.3	3.9	完形	A
1499	35.1	8.2	2.5	2.6	完形	A	1559	53.8	9.7	4.4	4.0	完形	A
1500	35.1	8.5	2.5	3.0	完形	A	1560	39.9	9.3	2.9	4.1	(一部欠損ここから)	A

第15表 1号溝状遺構出土土錘計測表14

No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類	No	長さ(mm)	最大径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	欠損状況	分類
1561	48.5	9.4	3.6	3.7	一部欠損	A	1621	31.4	8.8	3.3	2.4	1/3欠損	A
1562	38.8	9.0	3.5	3.0	〃	A	1622	30.6	9.1	3.4	2.6	〃	A
1563	44.9	8.7	3.3	3.0	〃	A	1623	36.5	9.1	3.6	2.9	〃	A
1564	45.7	9.4	3.6	3.9	〃	A	1624	34.7	9.4	2.2	3.3	〃	A
1565	42.5	10.0	3.0	4.3	〃	A	1625	29.6	8.2	3.7	1.9	〃	A
1566	51.4	9.6	3.3	5.2	〃	A	1626	32.9	9.0	3.2	2.4	〃	A
1567	48.2	9.7	2.6	4.2	〃	A	1627	34.0	8.7	3.4	2.7	〃	A
1568	38.8	8.1	2.4	3.2	〃	A	1628	36.2	9.4	4.5	2.5	〃	A
1569	44.2	8.9	4.0	3.4	〃	A	1629	31.3	8.6	3.4	2.4	〃	A
1570	42.5	8.8	3.3	3.1	〃	A	1630	31.3	9.7	2.8	3.3	〃	A
1571	43.4	10.3	3.3	4.7	〃	A	1631	30.0	9.0	3.1	2.3	〃	A
1572	43.8	10.1	3.8	4.1	〃	A	1632	25.6	9.4	3.8	2.3	〃	A
1573	42.9	9.6	4.5	3.4	〃	A	1633	30.3	9.3	2.8	2.4	〃	A
1574	44.9	9.2	3.7	2.8	〃	A	1634	35.9	10.3	4.9	3.4	〃	A
1575	54.0	9.6	3.4	4.5	〃	A	1635	28.1	8.0	3.6	2.1	〃	A
1576	44.1	9.4	2.9	3.8	〃	A	1636	32.5	8.7	2.6	2.9	〃	A
1577	40.3	9.3	3.6	3.0	〃	A	1637	33.8	9.8	2.7	3.1	〃	A
1578	41.2	9.2	3.7	3.3	〃	A	1638	30.0	8.3	3.5	2.2	〃	A
1579	41.1	9.1	3.6	3.0	〃	A	1639	30.0	9.7	3.6	2.7	〃	A
1580	31.8	9.3	3.3	2.6	〃	A	1640	33.4	9.4	2.5	3.5	〃	A
1581	37.3	8.7	3.6	2.4	〃	A	1641	25.5	8.8	2.9	1.8	1/2欠損	A
1582	44.4	8.8	3.9	2.8	〃	A	1642	21.2	8.7	4.0	1.4	〃	A
1583	41.2	9.1	4.2	2.7	〃	A	1643	24.6	9.1	2.6	2.5	〃	A
1584	36.3	9.7	3.8	3.0	〃	A	1644	32.2	10.0	3.6	2.9	1/3欠損	A
1585	38.2	8.3	3.4	2.5	〃	A	1645	22.0	8.5	3.4	1.7	1/2欠損	A
1586	36.6	8.9	3.0	3.2	〃	A	1646	27.7	8.1	2.7	2.1	〃	A
1587	38.6	11.0	4.5	4.8	〃	A	1647	25.4	8.8	3.1	2.0	〃	A
1588	40.2	8.3	2.6	3.2	〃	A	1648	33.6	9.7	3.2	2.8	1/3欠損	A
1589	45.0	11.5	3.7	4.8	〃	A	1649	27.3	9.9	3.0	2.6	1/2欠損	A
1590	40.7	9.1	3.0	3.1	〃	A	1650	27.8	9.4	3.1	2.8	〃	A
1591	42.4	8.5	3.0	3.1	〃	A	1651	32.1	9.5	2.4	3.0	1/3欠損	A
1592	41.0	9.2	3.6	3.2	〃	A	1652	30.4	9.1	3.2	2.8	〃	A
1593	39.8	9.5	3.5	3.9	〃	A	1653	39.3	10.0	3.9	3.7	〃	A
1594	43.6	8.8	3.5	3.2	〃	A	1654	29.5	9.8	4.1	2.9	〃	A
1595	43.2	8.7	3.5	3.0	〃	A	1655	32.1	8.3	2.4	2.3	〃	A
1596	37.6	8.6	4.1	3.0	〃	A	1656	29.9	10.8	3.4	3.3	〃	A
1597	40.9	9.6	3.7	3.4	〃	A	1657	32.0	8.2	2.5	2.2	〃	A
1598	43.4	9.1	3.4	3.3	〃	A	1658	28.8	9.5	2.9	2.8	1/2欠損	A
1599	47.1	8.8	3.3	3.6	〃	A	1659	26.0	7.8	3.0	1.6	〃	A
1600	41.3	8.7	3.8	3.2	(ここまで一部欠損)	A	1660	33.7	9.1	2.6	2.8	1/3欠損	A
1601	31.9	10.1	3.3	3.1	1/4欠損	A	1661	27.7	8.6	3.4	2.0	〃	A
1602	31.8	8.5	3.9	2.3	〃	A	1662	28.0	9.2	3.8	2.0	〃	A
1603	34.1	9.2	2.7	2.9	〃	A	1663	28.1	8.2	2.9	2.1	〃	A
1604	31.2	9.4	3.4	2.8	〃	A	1664	24.0	8.1	2.2	2.1	1/2欠損	A
1605	31.1	8.2	4.2	2.3	〃	A	1665	31.7	9.7	3.3	2.9	〃	A
1606	26.5	8.6	3.4	1.7	〃	A	1666	28.2	8.2	2.5	2.0	1/3欠損	A
1607	30.2	9.1	3.8	2.2	〃	A	1667	27.7	9.0	2.4	2.2	1/2欠損	A
1608	26.7	9.1	3.4	2.0	〃	A	1668	25.9	8.8	3.6	2.2	〃	A
1609	31.0	9.3	3.0	2.6	〃	A	1669	31.2	9.7	4.1	3.4	〃	A
1610	37.1	8.9	3.4	2.3	〃	A	1670	32.1	9.3	3.2	3.1	(完形?)	A
1611	36.0	9.7	3.5	3.3	〃	A	1671	37.9	8.8	3.7	2.5	一部欠損	A
1612	29.1	9.7	4.0	2.7	1/3欠損	A	1672	32.4	8.9	3.1	2.9	(完形?)	A
1613	30.2	9.0	2.7	2.5	〃	A	1673	31.8	9.4	3.0	3.2	1/4欠損	A
1614	30.6	9.4	4.4	3.0	〃	A	1674	32.8	8.5	2.9	2.5	一部欠損	A
1615	25.9	9.9	3.4	2.6	〃	A	1675	36.8	7.9	2.9	2.6	〃	A
1616	27.4	8.3	3.6	2.0	〃	A	1676	20.6	9.1	2.4	1.7	2/3欠損	A
1617	31.4	8.8	3.2	2.2	〃	A	1677	17.4	9.2	4.6	1.0	〃	A
1618	27.7	9.0	4.4	2.1	〃	A	1678	30.2	8.9	3.3	2.3	1/3欠損	A
1619	32.4	10.3	3.8	3.3	〃	A	1679	24.9	8.3	3.2	1.8	半分欠損	A
1620	31.7	10.0	3.5	3.4	〃	A	1680	25.8	9.5	2.9	2.3	〃	A

り、下面は粗い整形面。98.7gの13は天草石だろうが酸化鉄の付着による変色が著しく不明確。同じ理由で研磨痕も観察できない。93.4gを測る。

第43図3～5・16は管状土錘で1,819点出土しており、このうち第43図3～5・16を図化し、その他の土錘は計測表(第2～16表)と写真(図版19～24)のみ掲載している。3は橙褐色、4は灰白色で混入物少ない。5は灰黒色、16は黄橙色を呈する。

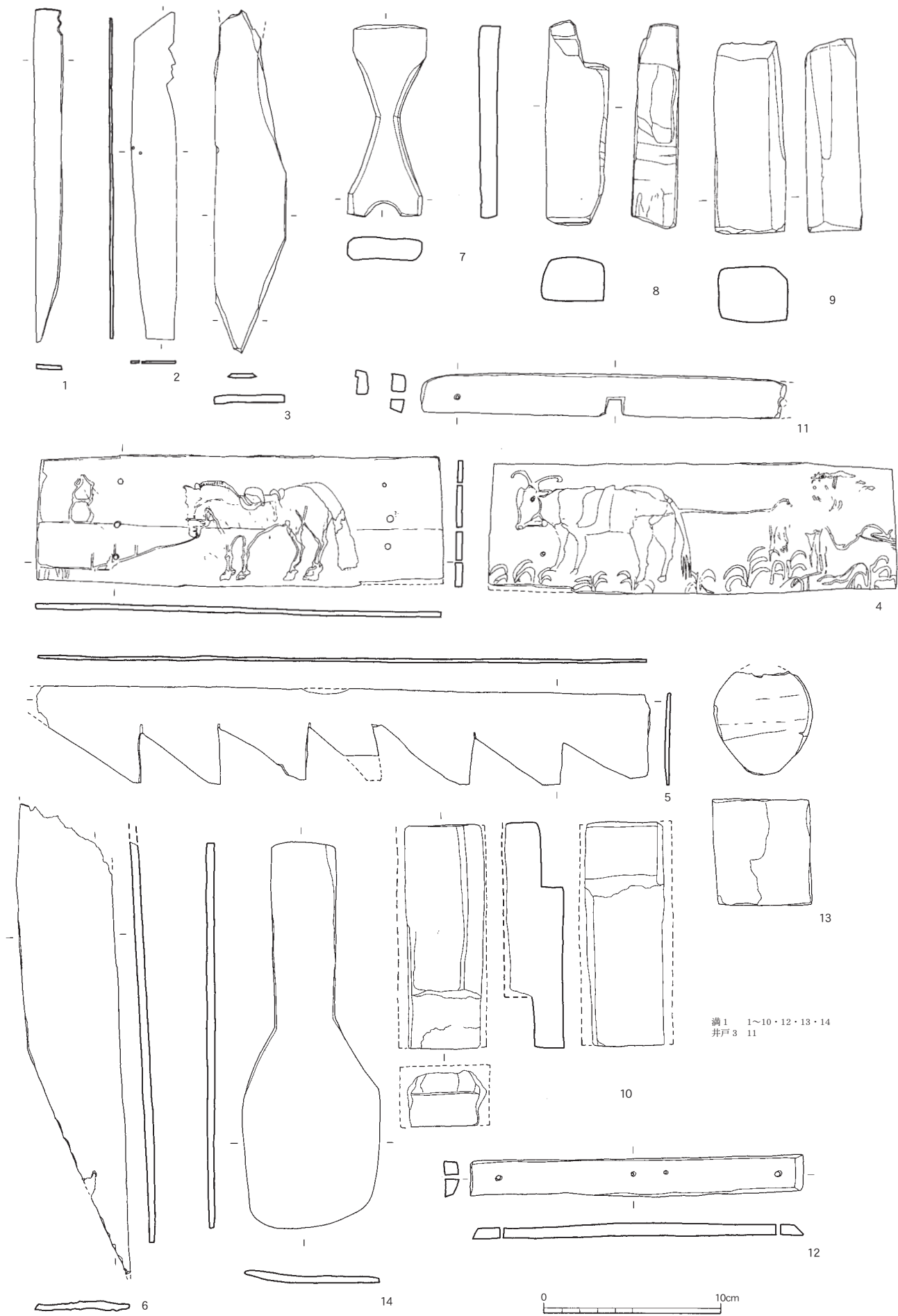
第43図17は紺ガラスの丸玉で、巻き技法による。第43図18は鉄刀子で、刃部は残っていない。柄に目釘孔がある。

第45～51図は木製品である。1は齋串か簡略化した人形で、切り込みのない方は欠損している。墨書はなかったので木簡ではない。2は人形で、中位の背面側に穿孔があるが、手足を取り付けるためのものにしては穿孔位置が高すぎるので、打ちつけるためのものであろう。3は齋串で下端は両側を削って尖らせているが、削る面の長さが異なる。表裏両面から斜めに削っている。上端は欠損しているが両側面から削り込んだ抉りが入っている。4は絵馬で、表裏に絵が描かれている。釘穴が3つずつ両端に入っており、板に打ち付けたものとわかる。馬の描かれている面を表とすると、裏面には牛が描かれている。再利用かと思われるが両面とも特に劣化しておらず、新旧は不明。彩色はなく、墨のみで描かれている。裏面の牛は画面の左手に寄っており、右手には何か描かれていることがわかるが、判別できない。5は大鋸の形代であろう。薄い長方形の板材に三角の切り込みを垂直に入れる際に、切りすぎている部分があることから、小型の鋸のようなもので加工したものである。6は大型の齋串の可能性はある。板材の片側だけを切り、先端をとがらせたものである。7は琴柱にも似ているが、小型の組紐など小型の編み物用の木錘だろう。側面は丸く面取りされている。8から10は留め具であろう。ほぼ同じ大きさだが、8は先端に段をもち、9は斜めに削られている。10は留め具で、表裏が互い違いに段を持つ。12は蓋の部材だろう。上面は端部を面取りしており、蓋部材に貼り付けるものである。13は栓で、木の樹皮が残っているので、枝を切断したものをほとんど加工しないで使用している。14はしゃもじで、完形品である。左右対称ではなく、先端も尖っていない。

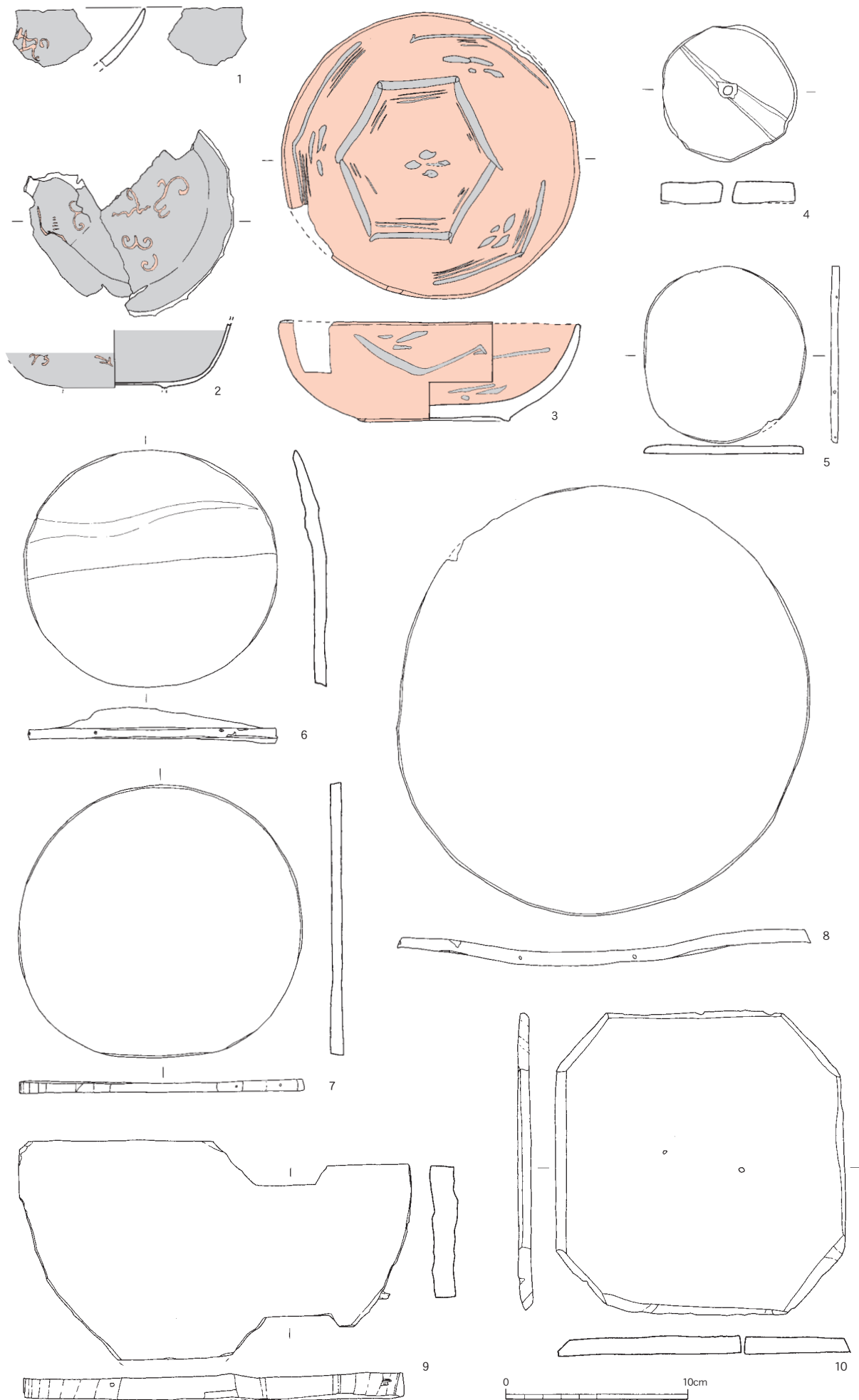
第46図1～3は漆碗で、1は小片で反転復元できないが、径は18cmほどであろう。黒漆の上に赤漆で上絵付けしているがモチーフは不明である。2は黒漆の上に赤漆で上絵付けされている。残りが悪くモチーフは不明。3はほぼ完形で、赤漆の上に黒漆で上絵付けされている。内面は、山形の両辺の下にそれぞれ3本線があり、中央に四菱文が入るものを1セットとし、これが3ヵ所に均等に配置されている。見込みにはこの3セットを組み合わせ、六角形の各辺の下に3本線を入れ、中央は1つの四菱文にまとめているため八卦文のように見える。外面は逆山形文に三菱文が入っている。口径16.8cm。4は上面に浅い凹線が中心を通ることから、紡錘車であろう。

第47図1と第46図5～8は曲げ物の底板で、いずれも側縁は斜めに面取りされており、側面に目釘孔がある。第46図1は大型の曲げ物の底板で、側面は斜めに面取りされ、目釘孔が入る。表面はカンナ痕が残る。9は半円形の円盤の頂部を水平に切り、一端に上下両辺から台形の削り込みを施す。削り込みのある側面は面取りしているので、欠損面ではなく、何らかの側板の可能性はある。器壁が厚く、加工痕跡が残っているので、曲げ物の底板を再利用したものではない。10は六角形の扁平な板で、中央に2つの目釘孔があり、側面には目釘孔がないので、つまみがつく蓋であろう。側縁は斜めに面取りされているので、側壁にちょうど収まるサイズの蓋であろう。

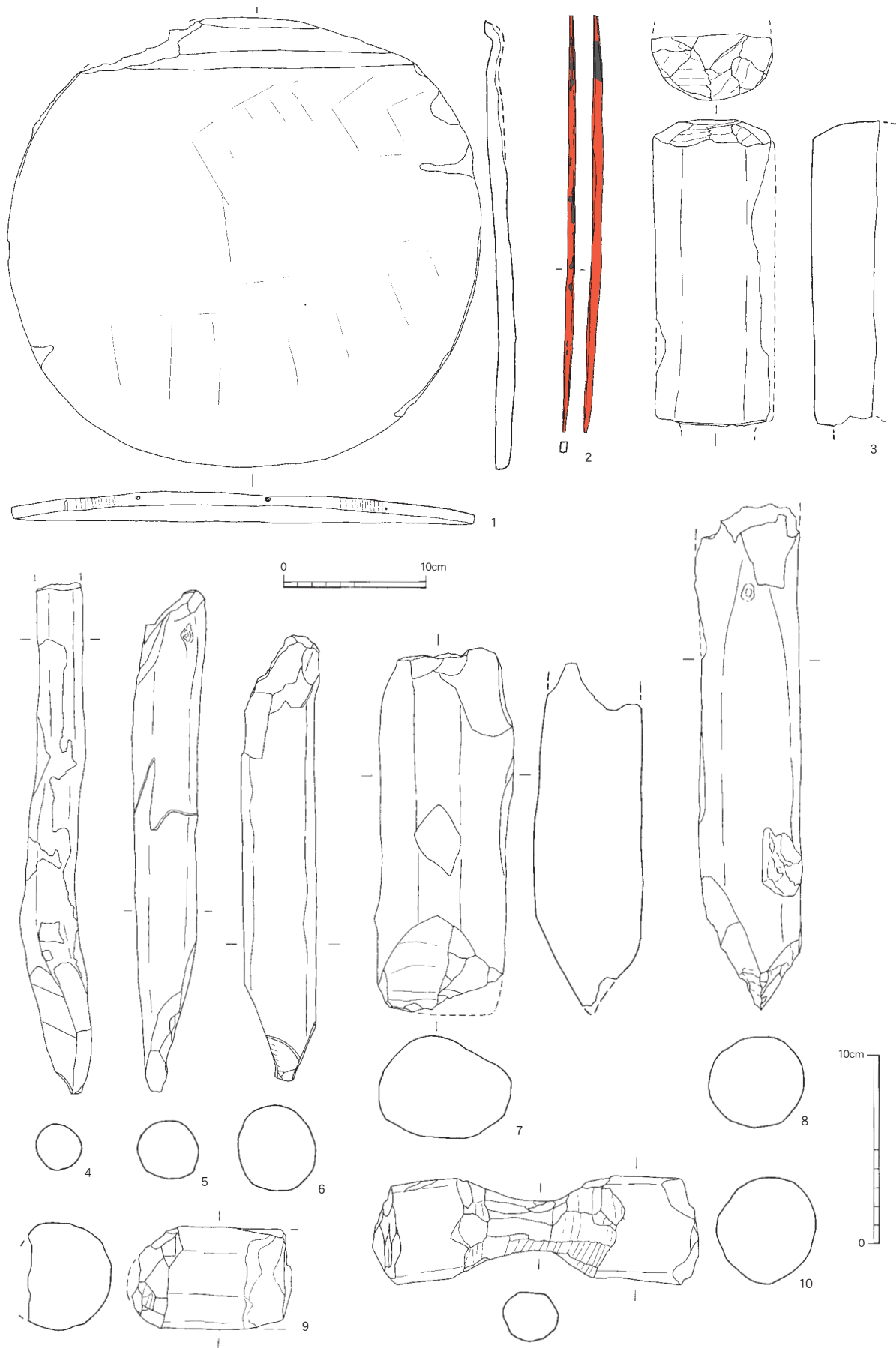
第47図2は完形の箸で、断面方形で上下が細くなっている。黒漆の下塗りの上に赤漆が塗られている。3は横槌で、身部の半欠品で、柄の痕跡が残っている。上端面は曲面になるように荒く面取



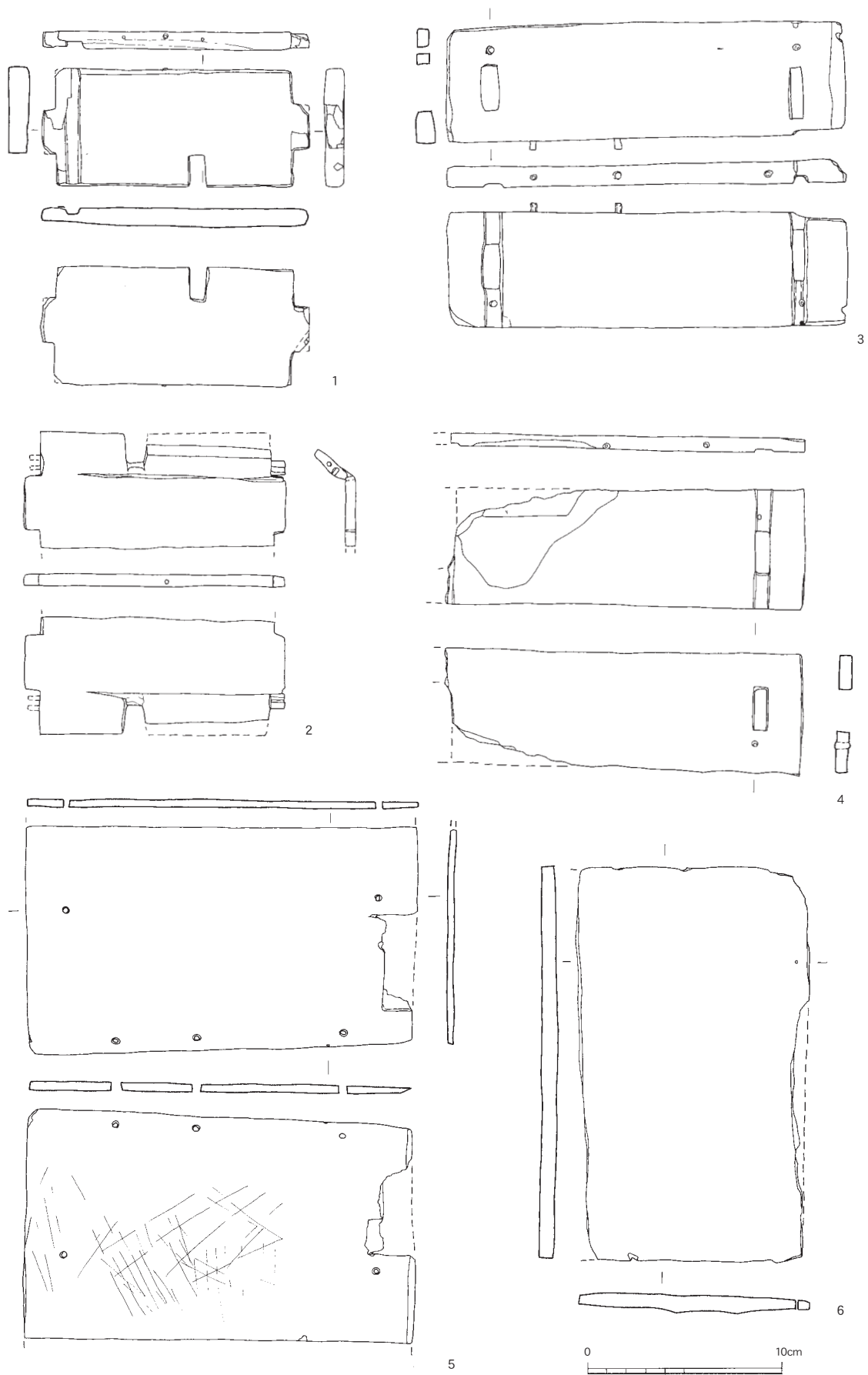
第45図 1区出土木製品実測図1 (1/3)



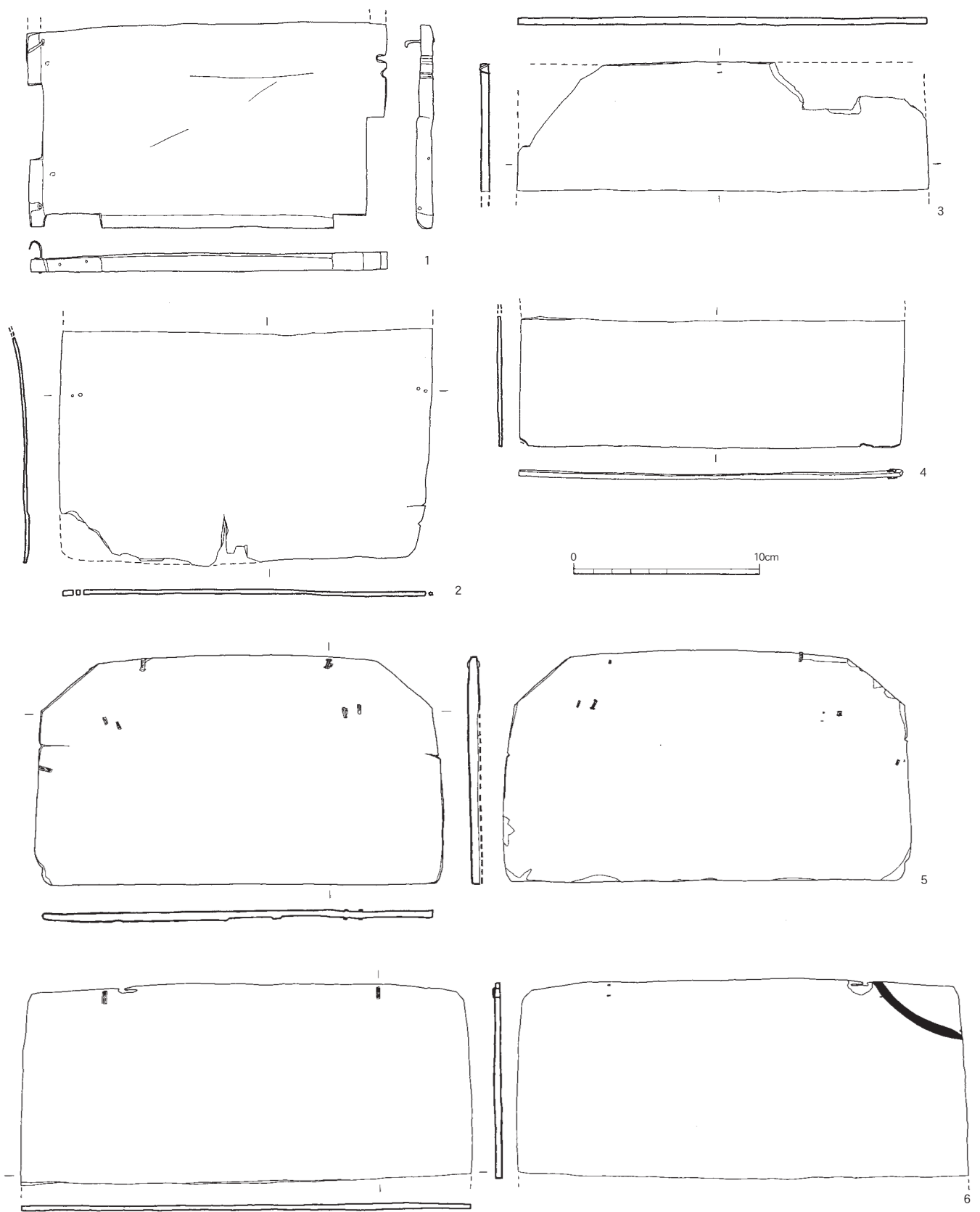
第46图 1区出土木製品実測图2 (1/3)



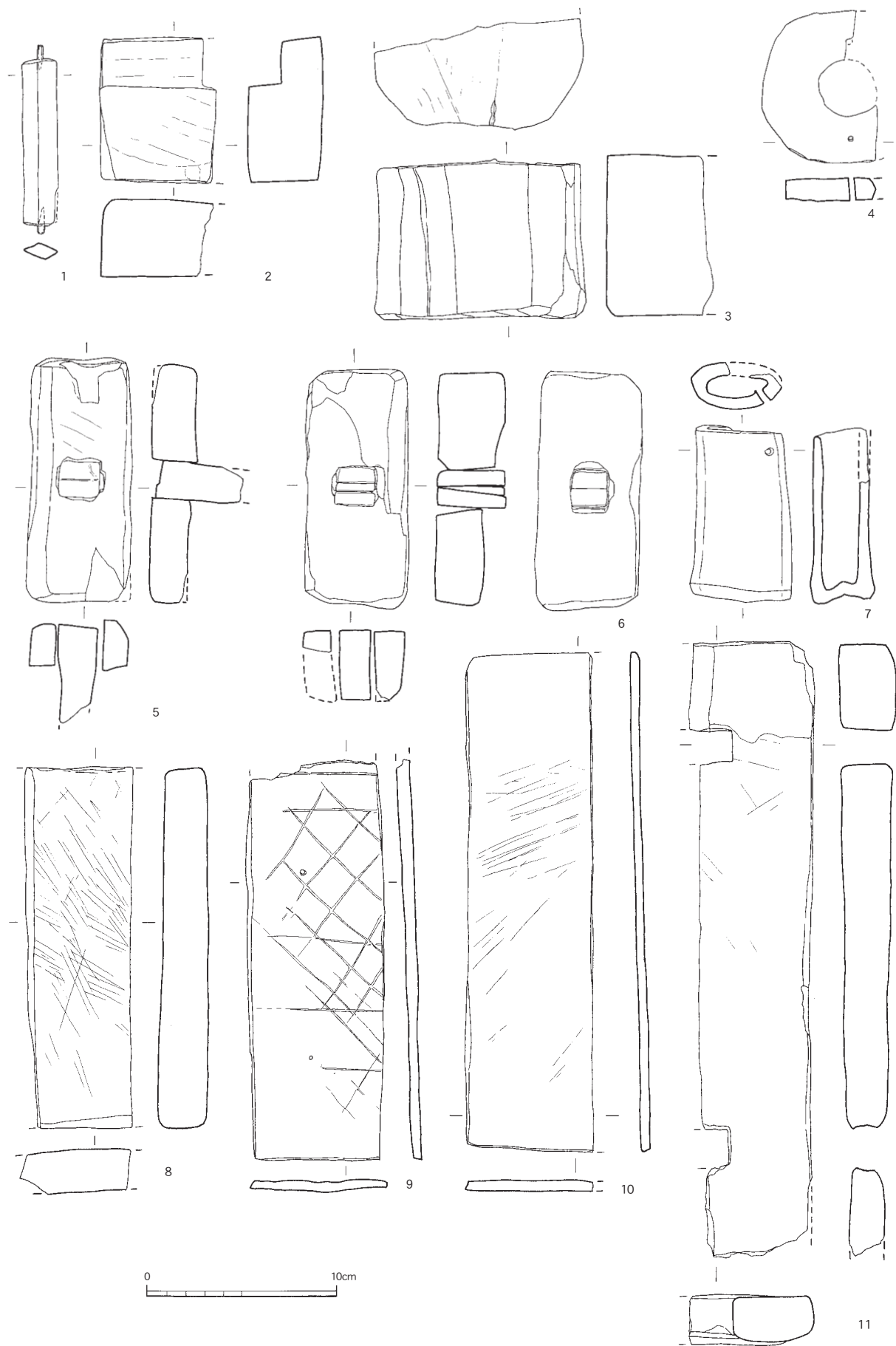
第47図 1区出土木製品実測図3(1は1/4、他は1/3)



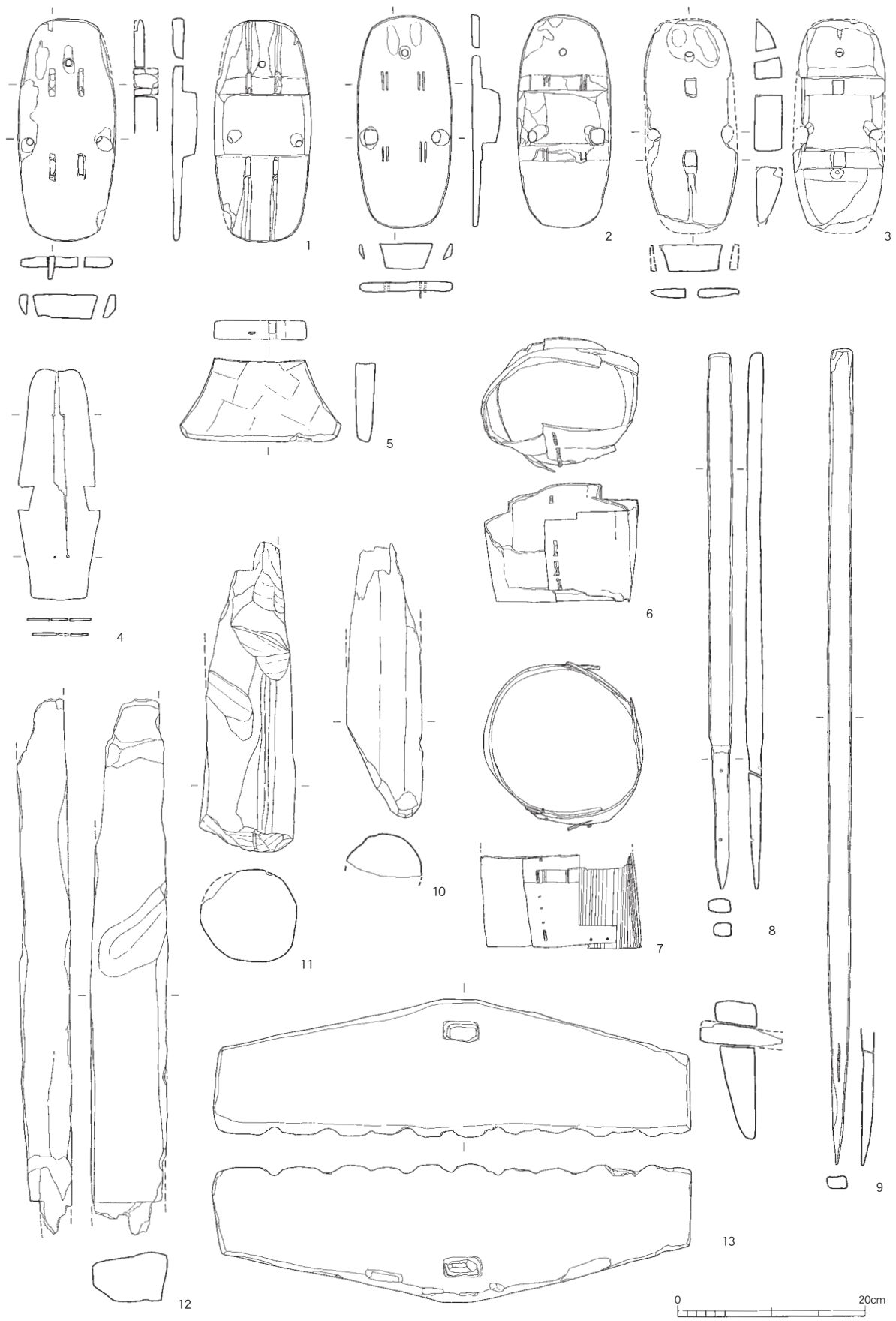
第48図 1区出土木製品実測図4(1/3)



第49图 1区出土木製品実測图5(1/3)



第50图 1区出土木製品実測图6 (1/3)



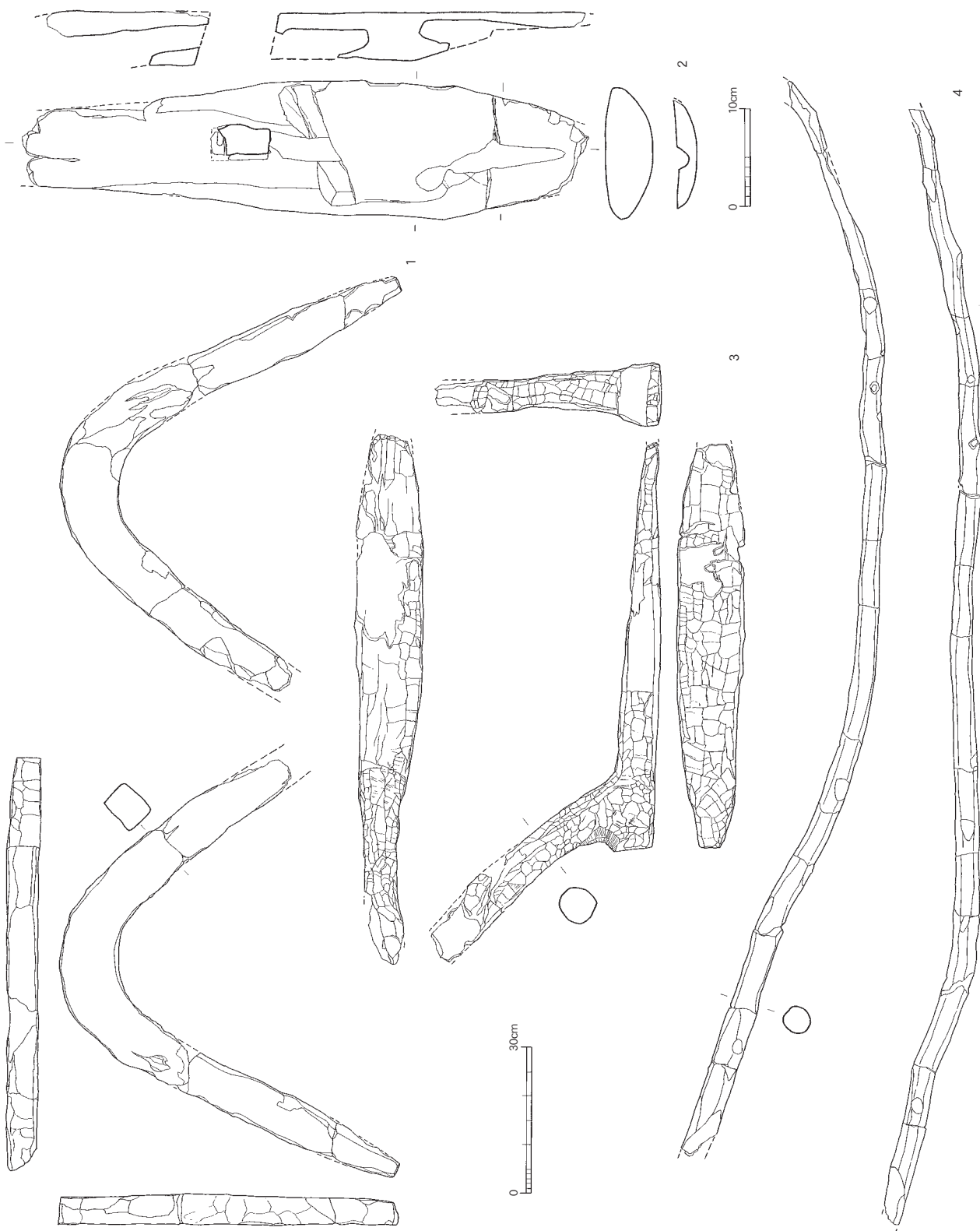
第51图 1区出土木製品実測图7(1/6)

りされている。側面が使用のため窪んだ痕跡はない。4・5・7・8は杭で、木の枝を利用したもので、樹皮が残っている。4・5は小型の杭で、4は4面の削り面があり、材質はツガキ属。5は偏って尖らせたもので、材質はマツ属複雑管束亜属。7・8は2面の削り面で尖らせているため、先端は稜線になる。9・10は槌の子で、10はほぼ完形品、9は先端部である。端面は円錐形に粗く面取りされている。10の材質はツバキ属。

第49図1は箱の側板で、左右側面は削り込み位置が異なっているので、互い違いに側板と組み合うものだろう。下面も同様に繰り込みで底板と組み合わさり、それぞれの面を木釘で固定している。2は薄い板材なので折敷だろうか。側面には2つの緊縛用の穿孔が残っている。3～6は鳴子で、3は上半分の破片で、角部分が欠損しており、緊縛部が欠けたものと思われる。4は下半部だが、側面には5と同様に緊縛紐が片側だけ残っている。5は完形品で、上端に吊り下げのための緊縛紐があり、その下に棒を下げるための緊縛紐がある。側面の片側にしかに緊縛紐は音を鳴らしやすくするため、別方向にも繫いだ工夫であろう。6は上半部片で、棒を提げるための緊縛紐はない。裏面の角に墨書のような曲線があるので、転用の可能性もある。

第50図1はなんらかの部材で、断面菱形で上下端面には木釘が入っている。上下の板材に固定していたと考えられるが、釘が折れずに板材だけが脱落したものか。2は留め具であろう。半欠品である。3は平面六角形に面取りするという部材か、残欠であろう。4は環状の板材で、固定用の目釘孔がある。5・6は留め具で、蒲鉾状の板材の中央に方形の孔があり、そこに方柱状の杭を挿入し、中央に割れ目を入れ楔を打って固定している。対になるものだろう。11と組み合わせるものかもしれない。7は竹の節の部分をして、口縁部に2つの孔があるので、ここに紐を通して呼子に結びつけたものであろう。8は表面が丁寧に平滑にされた板材で、表裏ともに刃傷が入る。まな板として使用したものか。9は箱の側板で、端部に長方形の臍がある。中央部に格子目に刃傷があり、まな板に転用されている。11は厚い方形板の両端に方形孔があり、表面は平滑に加工されている。5・6と組み合わせるものだろうか。

第51図1～3は差歯下駄で、1は2単位の方形臍で歯を固定した露卵下駄で、材質はスギ。2は2単位の楔で固定している。溝はないが、陰卵下駄で、台表の前壺周辺には足の指の痕跡が残る。材質はスギ。3は方形の臍孔1つで歯を固定した露卵下駄で、台表の前壺周辺には足の指の痕跡が残る。材質はホノキ。4は板草履で、中央に上下2か所に穿孔がある。5は下駄の歯で、平滑に加工されている。上端面には2か所の臍があるが、出土した下駄とは組み合わせない。6・7は曲げ物で、6は横倒して出土したため変形している。8・9は柄杓の柄で、8の先端に付く曲げ物は小さいものである。材質はどちらもヒノキ。10は柱材で、先端は斜めに切られているが、尖ってはいないので杭ではない。11は柱材で、先端は丸く面取りされている。材質はコナラ節。12は何らかの部材で、下端部には挿し込む段がある。材質はスタジイである。第51図1は荷鞍で、断面方形で細いつくりであることから、臍穴による連結ではなく、縄で結びつけたものである。材質はアカガシ亜属。3は踏み鋤で、先端が若干失われているが、それ以外は柄の一部まで残っている。断面扁平な方形で、先端に金属の刃を取り付けた痕跡は残っていない。また、中央に前側の柄を取り付けるための臍穴もない。材質はイスノキ。4は長い木の枝の先端を加工したもので、小枝を落としているが樹皮は残っている。大きく湾曲しているが、原材料からすでに湾曲していたもので、湾曲を利用する部材だろうか。材質はスタジイ。



第52図 1区出土木製品実測図8(1・2は1/6、他は1/12)

4号溝状遺構(図版1・4、第5・31図)

調査区中央南部に位置し、F字形に検出された溝状遺構である。16号建物の南北西辺に沿っているが柱穴に近接しているので、区画溝ではなく16号掘立柱建物跡の雨落ち溝であろう。北端部は浅くなっており、明瞭には検出できなかった。5号溝状遺構とは切り合いがなかったことから、1つの溝状遺構として機能していた可能性がある。最大幅でも140cm、深いところでも15cmほどで、ほぼ平坦だが南に向かって深くなる。

出土遺物の4の土鍋の口縁形態は12世紀前葉のものだが、1～3の瓦器碗の高台が低いものの残っていること、8の龍泉窯系青磁碗と9の同安窯系青磁小皿のモチーフ、8の劃花文から12世紀前葉から13世紀後半代のもものが混在しているとみてよい。16号掘立柱建物跡に伴い、2号井戸と13世紀代の10号土坑に切られることから、13世紀後半と考えられる。

出土遺物(図版17、第39図)

1から3は瓦器碗で、1・2は器面摩滅のため調整不明。3は外面板状工具によるオサエ。内外変色なし。

4は土鍋で、口縁下に煤付着。外面暗黒褐色、内面赤褐色を呈する。5は土鍋で内外口縁部と内面頸部はヨコハケ、外面頸部はタテハケ。外面茶褐色、内面黄橙色だが、断面は中央部が焼成不良で黒色。

6は中国製陶器壺で、釉は掛からない。耳部の下に沈線がある。7・8は龍泉窯系鎬連弁文青磁碗で、7は緑灰色に発色する。連弁は片切り彫り。8はオリーブ色に発色し、見込みに片切彫の劃花文が入る。畳み付けは釉剥ぎ。9は同安窯系小皿で、内面に櫛書き文、底部は釉剥ぎ。

5号溝状遺構(図版4、第5図)

調査区中央南部から南東部に位置し、湾曲しながら東西方向に走る溝状遺構である。西端は4号溝状遺構に近接しているので、4号溝状遺構と繋がって1つの溝として機能していたものであろう。東端部は浅くなっており、明瞭には検出できなかったため、まだ東に延びていた可能性が高い。最大幅でも80cm、深いところでも5cmほどで、ほぼ平坦だが南に向かって深くなる。

東端の延長上には5・9号掘立柱建物跡があり、その南辺に近接する位置に達することが想定されるので、5・9号掘立柱建物跡の雨落ち溝であっただろう。

出土遺物の土鍋の口縁形態は12世紀前葉から中葉のものだが、5号溝状遺構と一緒に機能していたとすると13世紀後半まで存続していただろう。

出土遺物(第39図)

10は土師器碗で、外面にナデの段をもつ。器面摩滅のため調整不明。11は同安窯系碗で、内面に櫛書き文、緑灰色に発色する。12から14は土鍋で、口縁下に煤付着。12は外面暗灰褐色、内面黄橙色を呈する。13は外面黒褐色、内面茶褐色14は外面黒褐、内面橙褐色。弥生土器の広口壺の可能性も残る。

6号溝状遺構(図版1、第5図)

調査区南東端に位置し、南北方向と東西方向にT字形に検出された溝状遺構である。最大幅でも85cm、深いところでも18cmほどで、北に向かって深くなるので、北端は削平されたのではなく途切れている。南北の軸方向が8号掘立柱建物跡に一致しているので、8号掘立柱建物跡の雨落ち溝であっただろう。また、東西軸は5号溝状遺構に併走しているので、共存した可能性もある。

出土遺物の16の土鍋の口縁形態と、15の土師器の器高の低さ、径の大きさ、17の同安窯系碗の傾きが小さいことから12世紀前葉から中葉のものともみてよい。

出土遺物(第39図)

15は土師器小皿で外底は磨滅しているが糸切りの痕跡が残る。内外黄橙色を呈する。16は土鍋で外面煤付着外面暗灰褐色、内面にぶい黄灰色。17は同安窯系青磁碗で、内面に櫛書き文、暗緑灰色に発色する。外面は無文部分か。

7号溝状遺構(図版1、第5図)

調査区中央北部に位置し、1号溝状遺構と直交して北に走る溝状遺構で、1号溝状遺構に切られるものと考えられる。ほぼ均一だが最大幅で120cm、深いところでも19cmほどで、調査区北の下尻高遺跡の調査範囲の溝に繋がっている。溝の規模や深さは2号溝状遺構に近い。

遺物量が少ないため13世紀代という推測しかできない。

出土遺物(第39図)

18は白磁碗で、暗灰白色に発色している。19は同安窯系小皿で、内外面無文、底部は釉剥ぎ。緑灰色に発色する。

⑥その他の遺構と遺物

ピット

ピット101(第31図)

調査区中央南部の10号掘立柱建物跡の東側で遺構の希薄な範囲から検出されたもので、径60cm、深さ15cmの底面中央に川原石が正置されていた。礎石や敷石状だが、対応する柱穴はなく、遺構の空闲地であり、6号溝状遺構の西辺と5号溝状遺構との中間に位置することから、地鎮的祭祀に関連する遺構だろうか。

ピット172(第31図)

調査区中央南部の10号掘立柱建物跡の東側で遺構の希薄な空間から検出されたもので、長軸37cm、短軸30cm、深さ15cmを測る。底面中央から川原石が積み上げられて検出され、一見すると掘立柱建物跡の柱穴に見られる敷石だが、遺構の空闲地でもあるので対応する柱穴はないといっている。地鎮的祭祀に関連する遺構だろうか。

その他のピット出土遺物(巻頭図版3、図版17、第40・42・43図)

第40図はピット出土遺物である。5の土師器皿と16の緑釉陶器は2区の遺構に関連する遺物の混入品であろう。

1はピット89出土で、瓦器杯で外面口縁部はヨコナデ、胴以下はケズリ後ナデ。口縁部は淡青灰色、内面は灰白色を呈する。2はピット30出土で、土師器杯で口縁部はヨコナデで尖っており、胴下位はケズリ状ナデ。外底は糸切り後板状圧痕。底部は高台状に肥厚している。内外黄灰白色を呈する。3はピット57出土で、土師器杯で口縁部がやや内湾しており、外底は糸切り後板状圧痕。板状圧痕は偏っており、幅の狭い板の端部を使用したことがわかる。底部は高台状に肥厚している内

外黄白色を呈する。4はピット107出土の土師器皿で外面胴下位は板状工具によるナデ。内面見込みはカキ目状のハケ。9世紀前葉。5はピット136出土の土師器皿で口縁部ヨコナデ、外底は静止ヘラ削り。橙色から黄灰色を呈する。6はピット19出土の瓦器碗で外面胴下位は板状オサエ高台はへたれて幅広いところと狭いところがある。外面胴上半から内面は灰白色、外面下半は黒灰色。7はピット54出土の瓦器碗で、外面指オサエ列は2段あり、高台はへたれて平坦になった部分もある。外面口縁部は灰色、胴中位は灰白色、外面下半と内面口縁下は黒灰色。8はピット26出土の瓦器碗で、外面胴下位に指オサエ列が1列ある。外面は高台がなく底部が肥厚している。内面摩滅。にぶい黄灰白色を呈する。搬入品であろう。9はピット178出土の弥生中期後半の甕で口縁部は跳ね上げ口縁、内外器麴摩滅。土鍋でないのは、ヨコハケがないことから判別できる。10はピット109出土の弥生土器の高杯の脚部で、外面は削り状ナデ。内外橙褐色を呈する。筒状の脚の可能性もある。11はピット70出土の土鍋で、内面口縁部はケズリ状ナデで、凹凸がある。内面は目の細かいハケ外面口縁下は煤付着。12世紀前葉。12はピット60出土の土鍋で、内面口縁部は2段ヨコナデで、器面は摩滅のため調整不明。外面暗灰褐色、内面橙褐色。12世紀中葉から後葉代。13はピット61出土の東播系須恵器鉢で、外底は糸切り後板状圧痕がつく。重ね焼きのため口縁部のみ暗灰色を呈する。12世紀後半代。14はピット88出土の土鍋で、内外ナデで、反転復元できない小片で径40cm程度であろう。内外面灰褐色を呈する。防長産で15世紀中葉。15はピット119出土の土鍋で、外面ナデで、内面は目の細かいヨコハケ。外面は変色して暗灰橙色化している。内面橙褐色を呈する。12世紀末から13世紀初頭。16はピット23出土の緑釉陶器片で、釉の残りがよい。蛇の目高台であることから畿内産か。7はピット228出土の陶器の壺底部で、外面ケズリ。外面には灰被り。高台の形態から12世紀後半代のものだろう。18はピット120出土の同安窯系小皿で、内面は無文部分か。内面の底部と胴部の接合部の段がないことから12世紀後葉か。19はピット54出土の同安窯系小皿で、内面は無文部分か。貫入あり。20はピット153出土の白磁碗。口縁部の外への張り出しが小さいことから12世紀後半～13世紀前半。21は同安窯系の碗で内外櫛書き文と思われる。濃緑灰色を呈する。胴部の傾きが小さいことから12世紀後半～13世紀前半代。22はピット115出土のは同安窯系の碗で外面露胎、円盤形に加工した可能性もある。高台が断面略方形であることから12世紀後半～13世紀前半代。23はピット26出土の型押し成形で、外面は菊花文の花弁が陽刻されている。内外面口縁部と。外面胴部は露胎。

第42図3はピット54出土の石匙で、風化したサヌカイト製で、本来は黒灰色を呈する。両面加工のため不明瞭だが、横長の剥片を利用している。12.0g。5はピット296出土の滑石製紡錘車で38.5gを測る。6はピット21出土の滑石製石鍋片を加工した温石で、表裏面の湾曲は石鍋の面を残したもの。方形に加工して上辺の中央に穿孔しようとしているが、途中で止まっている。再加工した面が赤く変色しているので未製品ではない。123.4g。8はピット201出土の滑石製石鍋片を転用した温石で、石鍋の口縁に歪みがあるため石鍋としては反転復元できない。欠損面を面取りして整形したものだが、赤変が見られるので使用している。330.9g。14はピット49出土の磨製石斧で、凝灰岩製。小型で、片刃状なので手斧であろう。表面は丁寧に研磨されているが、裏面はほとんど粗く研磨されたのみ。68.1g。

第43図6はピット188、9はピット201、10はピット59、12はピット222、13はピット72出土の管状土錘で、10は橙褐色を呈し4.7gを測る。9・12・13は白色粒子を多く含む暗灰白色を呈し、4.7g、8.6g、7.1gを測る。6は灰黒色を呈する。4.5gを測る。2はピット155出土の土壁で、端部が湾曲しているので角の部部であろう。

遺構検出面出土遺物(図版18・24、第41～43図)

第41図1～17は遺構検出面出土である。

1～3は土鍋で、1は外面は口縁部ヨコナデ、頸部はタテハケで、内面はヨコハケ。外面淡灰褐色、内面暗黄灰色で、断面は黒灰色。2は外面煤付着で暗灰褐色、内面暗黄灰褐色で、断面は黒灰色。外面はナデ、内面は口縁部ナデ、頸部ヨコハケ。1・2は14世紀中葉、3は内面ヨコハケ、外面は口縁部ヨコハケ、頸部タテハケ。13世紀前半代。4・5は足鍋の足部片で、手捏ね成形。4は胎は黒灰色で、5は外面に煤が付着する。6は須恵器高台付杯で、器壁が厚いのが特徴的。8世紀後半。7は東播系須恵器鉢で、青灰色を基調とし重ね焼きのため口縁部のみ灰黒色を呈する。14世紀中葉。8は緑釉陶器の皿で、内外面は光沢のある緑灰色を呈する。胎は土師質で黄灰白色。東海系か。9は中国製陶器壺で、釉は掛からない。耳は沈線も上に貼り付けられている。10は陶器の壺底部で、外底は削り出し高台。外面ケズリ。外面には焼成不良で、底部は黄橙色。高台の形態から12世紀後半代のものであろう。11は同安窯系の碗で外面に櫛書き文、内面は沈線が入る。濃緑灰色を呈する。外面の櫛書文が口縁まで残っていることから12世紀中葉か。12は白磁小碗で口縁部は口禿。14世紀中葉。13は白磁碗で、内面口縁下は沈線あり。口縁部の傾きが大きいことから13世紀前半代のものであろう。14～16は龍泉窯系青磁碗で、14は見込みに花文の刻印あり、淡緑灰色に発色する。13世紀中葉であろう15は発色不良でオリブ色を呈する。16は外面に崩れた連弁があり、高台暈付外縁まで緑釉がかかる。17は枢府院系白磁小皿で、内面に片切彫の花文があり、外底は釉剥ぎ。14世紀中葉から後葉だろう。

第42図2はスクレーパーで、サヌカイト状に風化した黒曜石製。内湾する剥片を利用して搔器にしたもので、剥片の長い側縁を横にし、下辺に刃をつけ、上辺を微細剥離して刃つぶしと整形している。側縁は粗く剥離して整形している。9.2gを測る。

第43図8・14は管状土錘で、9は黄橙色を呈し、15は橙褐色を呈する。それぞれ6.9g・8.5gを測る。

黒色土包含層出土遺物(図版18、第42図)

第42図4は滑石製品で、楕円形につまみがつくものと思われ、模造鏡の可能性を残す。つまみの対面は曲面で、滑石製石鍋を転用した可能性もあるが、石鍋の面を残していないので断定できない。29.3g。

出土地不明・表採(図版18、第41・43図)

第41図18～20、第43図1は整理段階の混乱で出土地不明になったもので、土師器皿の底部で、穿孔は焼成前に施されている。外底は糸切り後板状圧痕があり、欠損部はい意図的に打ち欠いた円盤形土製品である。内外器白色で、変色なし。灯明皿受け台であろうか。20は龍泉窯系連弁文青磁小皿で、焼成が強すぎて胎が黄橙灰色に発色する。連弁文は鐏がなく、片切彫で描かれている。12世紀中葉～13世紀後葉。

第43図1は出土地不明の土壁で、1は平坦面が黄白灰色なので表面に漆喰を塗った壁であろう。

(2) 2区の遺構と遺物

2区の現況は、旧状が水田であったこともありほぼ平坦地だが、本来は西側と南側が高い緩斜面である。南側には東西に水路が走っており、その水路の前身である近世の溝が現代の水路の両側に検出されたが、これについては報告しないものとした。南東には段落ち部があるが、多くの攪乱穴があったものの、遺構が残っているので本来段落ちが存在していたようだ。調査区中央部には、ビニールハウスの基礎坑が直線的に掘立柱建物跡に近い主軸方向に並んでおり、本遺跡から発見された長大な建物跡と規模も近いが、埋土がまったく異なるので、明瞭に判別できた。

2区からは掘立柱建物跡33棟、柵跡23基、土坑14基、溝状遺構5条などが検出された。南端には限定協議範囲があり、本調査区の重要な遺構である1号柵のコーナー部分がわずかに限定協議範囲にかかることから、1号柵にかかる範囲については1mほど限定協議範囲を掘削し、1号柵跡のコーナー部分である柱10を検出するとともに、門の有無を確かめた。その際に多くのピットと横穴式石室の玄室敷石と考えられる礫群が検出されたが、限定協議範囲に入っていたことから、これについては掘り下げなかった。

①掘立柱建物跡

調査区北東部は掘立柱建物跡の集中部であり、柱穴数が多いだけでなく、調査区の北側に展開する建物が多く、柱穴の規模と並びから可能な限り復元したが、掘立柱建物を構成する規模の柱穴でありながら建物に復元できなかった柱穴もある。26号掘立柱建物跡のように、柱穴の大きさ・深さ・柱間が不均一で、確実性に欠けるものもあるが、建て替えのある17・26号掘立柱建物跡をそれぞれ2棟として、計33棟の掘立柱建物跡が検出された。

1号掘立柱建物跡(図版29・30、第54図)

調査区中央部北部から検出された。2×3間の4面庇建物で、身舎部で梁行420cm、桁行510cmを測る。調査時は柱1～4を建物東辺の建て替えと考えており、ほかの柱穴の建て替えを精査したが、明瞭な建て替え柱穴が他の辺にはないことから部分的な建て替えと解釈していた。しかし、柱1～4の主軸方向は他の主軸とは大きくずれており、柱筋も通らず、柱間も不均一であったことから、建て替えではないと判断した。

庇は4×6間で、庇部で梁行760cm、桁行810～820cmを測る。柱穴は径50～60cm前後で、いずれも浅いが、四隅の柱穴が他のものよりわずかに大きく、深くなっている。また、現表面はほぼ水平なのに東に行くほど柱の残りがよいので、旧地形の傾斜が現在より大きかったことを示している。

基盤層に礫が多く含まれるため、柱穴壁には石が露出しているものが多い。ほとんどの柱穴から柱痕が検出された。柱24は石を積み重ねて高さを調整しているので、柱17の底面に据えている扁平な石も礎石としてではなく、高さを揃えるためのものであろう。

柱2・3・4列は主軸方向が建物本体と一致しており、1号掘立柱建物跡の東西軸の中心線に沿って、柱7・8・9を均等に縮小した形で、柱穴が径40cmでやや小さい。この庇柱に近接する柱列の機能については、その東にある不整形な土坑と関連させて考えた。この土坑東側の床面には柱穴の底面らしい窪みがあり、その位置が1号掘立柱建物跡の東西軸の中心線に沿って、柱2～4を均等に縮小した位置にある。不整形土坑は遺物は出土していないが、掘形の埋土は炭化物を含み、

ほかの遺構とほとんど変わらず、ほぼ同時期のものと考えられ、主軸方向も1号掘立柱建物跡と一致している。調査時には遺構に近い時期の風倒木痕と考えていたため注視しておらず記録が十分でなかったが、平面略台形に見ることができ、柱2～4と繋がる1号掘立柱建物跡の階段を抜き取った痕跡ではないかと考えた。したがって、柱2～4は柱穴が小さいことから階段の床柱であり、その上に庇が張り出す形式に復元した。この張り出した庇の雨落ち溝が3号溝状遺構と考えられる。3号溝状遺構の長さが柱2～4と一致するのはそのためであろう。

N-2°0'-Eを主軸方向とし、南の19号柵跡と、西に離れているが1号柵跡の南北軸も主軸方向が揃う。いずれも出土遺物がないが、1号柵跡の調査区壁に龍泉窯青磁碗片がかかっていた。8世紀後葉の15号土坑が重複しているが、柱穴との切り合いはない。

出土遺物はわずかだが12世紀代であろう。

出土遺物(図版43、第73・96図)

第73図1は柱25から出土した瓦器碗で、外面は器面が摩滅しているが、内面にはミガキが残る。口縁部が灰色、口縁下が灰白色、胴部が黒色を呈する。口縁部の傾きが小さいことから12世紀代であろう。

第96図7は1号掘立柱建物跡柱3出土の磨製石斧で、表面が剥離しているため研磨痕は観察できない。刃部の刃こぼれは多い。千枚岩製。132.0gを測る。

2号掘立柱建物跡(図版30・37、第55図)

調査区中央北部から検出された。2×2間の建物で、1号掘立柱建物跡の北西に位置する。3号柵跡の西に隣接する。東に隣接する13号柵跡は一見すると同じ建物を構成する柱列に見えるが、柱穴は2号掘立柱建物跡の柱穴より深く、柱間がやや広く、主軸方向はわずかながら異なっているので、別の建物と判断した。4号土坑との切り合い関係は不明。

芯々で梁行250cm、桁行280cm。柱間は梁行125cm、桁行140～160cm。柱穴は径45～60cm、深さ30～45cm前後で、四隅の柱穴が大きく、深い。柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。主軸方向はN-6°0'-Eで、1号掘立柱建物跡と一致する。出土遺物から12世紀後半から13世紀初頭であろう。

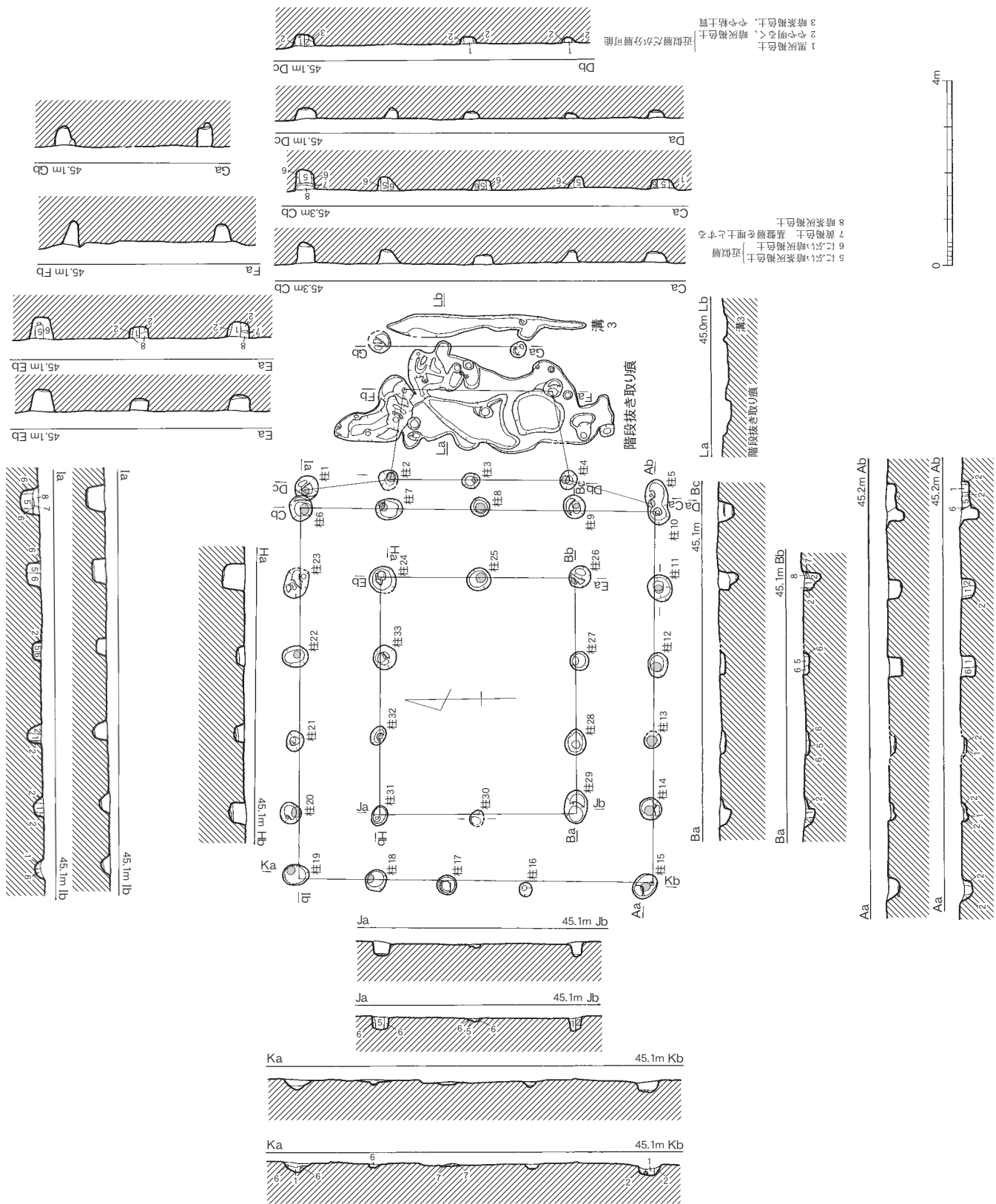
出土遺物(第73図)

2は柱2から出土した土師器小皿片で、内外橙色で使用変色はない。口縁部は欠損ではなく、非常に浅い。3は柱1から出土した土師器碗の底部で、器面は全面摩滅しており、底部切り離し技法や調整は観察できない。内外黄橙色で使用変色なし。4は柱9出土の瓦器碗で、底部を欠損している以外反転復元でほぼ完形に復元できる。器面の残りが良く、胴下位は内外にオサエがある。内外丁寧なミガキが入る。口縁部の傾きが大きく、高台径が大きいことから12世紀後半から13世紀初頭。

3号掘立柱建物跡(図版30、第56図)

調査区中央部から検出された。1×6間の建物で、1号掘立柱建物跡の西、4号掘立柱建物跡の北に位置する。芯々で梁行345cm、桁行1085cm、桁行の柱間は140～200cmを測り、ばらつきがある。径40～55cm、深さ30～40cm前後の柱穴で、柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。

主軸方向はN-4°20'-Eで、4号掘立柱建物跡とは一直線上に揃うように見えるが、間の柱穴が径28・35cm、深さ11・18cmと明らかに小さい。また、北に隣接する4号柵跡も柱穴が小さく、

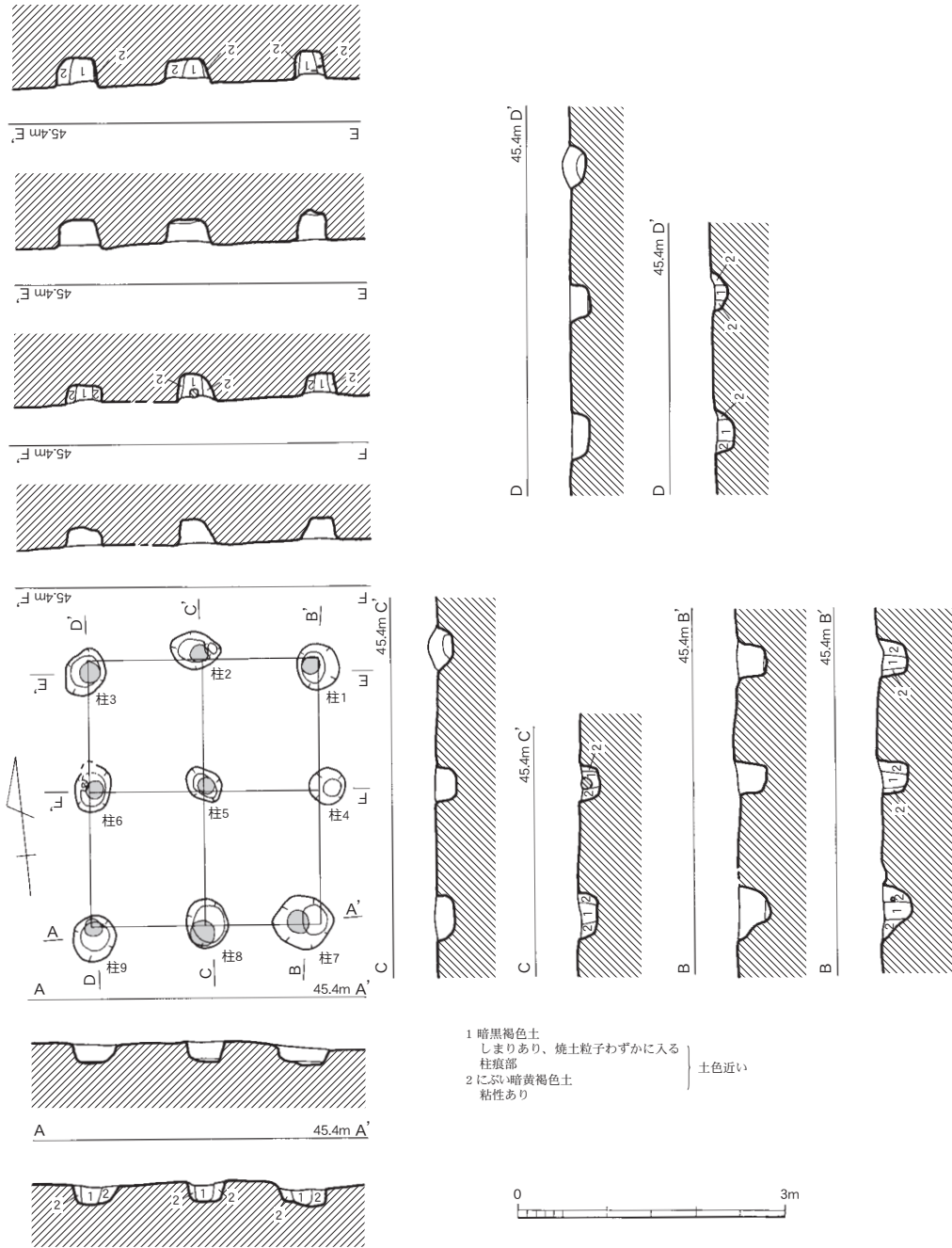


第54図 2区1号掘立柱建物跡実測図(1/120)

13号柵跡は主軸方向が揃わない。したがって、計画的に直線的に配置されたもので、4号掘立柱建物跡との間に小さい柱が入っているのを屋根で繋がっていたとみるべきだろう。

出土遺物に外反口縁と回転ヘラ切り後未調整の底部片の土師器があり、須恵器蓋の返り部が短いことから、8世紀後半から9世紀代であろう。

出土遺物(第73図)



第55図 2区2号掘立柱建物跡実測図(1/80)

5～7は柱2から出土した土師器で、器面摩滅のため器壁が薄く、調整は不明。5は直線的な口縁部で、口径が小さいことから杯で、6は口縁部が外反することから椀であろう。7は底部切り離し技法不明。8は柱5から出土した須恵器蓋で、器高の高いものであろう。このほか図化できないが、柱11に土師器の底部片があったが、回転ヘラ切り後未調整によりできる螺旋状の沈線が見られた。

4号掘立柱建物跡(図版30、第57図)

調査区中央部から検出された。1×3間の建物で、3号掘立柱建物跡の南に位置する。南辺の柱穴は残りが悪いため小さく、柱間が合わず、柱筋もやや通らないのは基盤層が礫原なので、柱穴を掘る位置をずらした可能性を考えた。南辺の柱穴2基が建物を繋ぐ柱穴と考えれば、1×2間の建物と見ることもできる。しかし、削平された可能性も否定できないが、現状で南に建物が存在しないので、1×3間の建物を復元した。芯々で梁行310～330cm、桁行690・720cmで、柱穴は径35～50cmだが、深さは10～20cmと残りが悪く、南に行くにしたがって浅くなり、柱6は底面が検出できたのみである。南に延びていた可能性があるが、水路のため確認できない。これより南に同じ主軸方向の柱列はない。柱痕はいずれも残っていたと思われるが、多くは確認できなかったものもある。

主軸方向はN-1°20'-Eで、3号掘立柱建物跡と一致する。遺物が出土しておらず、時期の確定ができないが、3号掘立柱建物跡に伴うと考えられる。3号掘立柱建物跡の項で説明したように、3・4号掘立柱建物跡は小さい柱穴を間に挟んで屋根が繋がっていたものと思われる。

5号掘立柱建物跡(図版31、第58図)

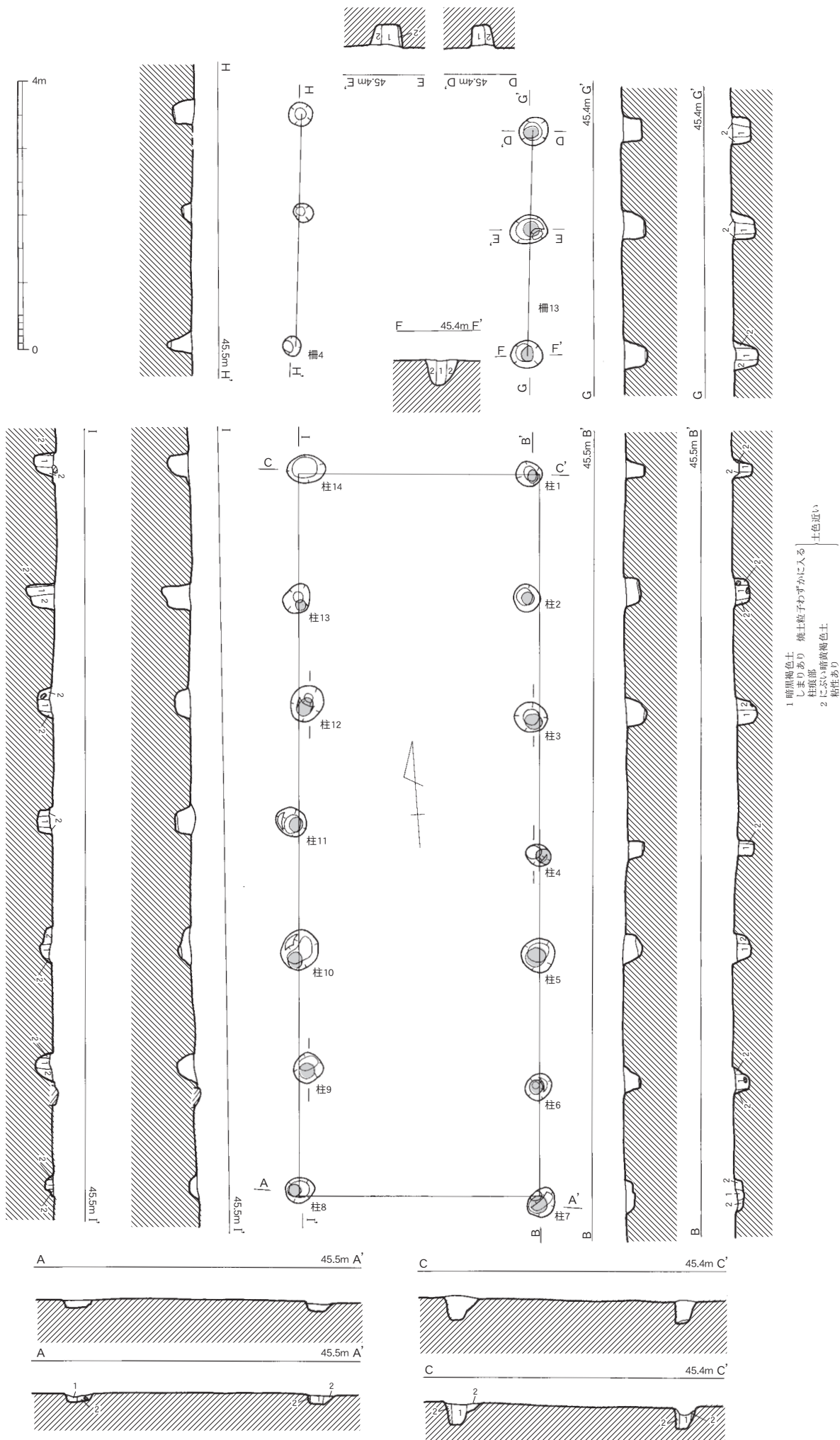
調査区中央北部の6号掘立柱建物跡の西から検出された。柱3・11の柱筋が通らないが、周囲の柱穴の大きさからは隔絶していることから伴う柱穴とみて、2×3間の建物と考えた。しかし、調査区外に延びる部分があり、特に柱3と11は大型の柱穴で、柱筋からずれていることから確実性に欠ける。

6号掘立柱建物跡の北西に位置し、芯々で梁行425cm、桁行700cmで、柱間梁行190～220cm、桁行220～230cmを測る。南北辺は径40cm前後、深さ30～60cm前後の柱穴で、中央列には径25cm、深さ15～20cmの柱があり、特に中央の2つの柱穴は径が小さいので床柱であろう。柱痕はいずれも残っていたと思われるが、柱5は確認できなかった。主軸方向はN-86°0'-Wである。東南部に溝状の掘り込みがあるが、これは木の根跡と見られ、雨落ち溝ではない。

出土遺物は図化できないが、柱1から黄橙色系土師器の小片があるのみで、時期は不明。6・10号掘立柱建物跡と主軸方向が揃うことから、同時期のものと思われ、6号掘立柱建物跡の9～12世紀代と想定した。

6号掘立柱建物跡(図版31、第59図)

調査区中央北部から検出された。5号掘立柱建物跡の東に位置する。南の柱7～11の柱列は庇の可能性もあるが、柱6・5・1・7の柱間が等間隔であることから、庇でなく、柱1～4は間仕切りと考え、柱間が3間以上×4間以上の建物とする。芯々で梁行680cm以上、桁行810cm以上で、柱間は梁行210～230cm、桁行190～200cmである。柱5を中心として北に反転復元すると、柱間が4×4間で梁行900cm、桁行810cm以上となる。柱穴は径30～50cm、深さ30～40cm前後である。柱痕は残っているものと抜き取られているものがあった。

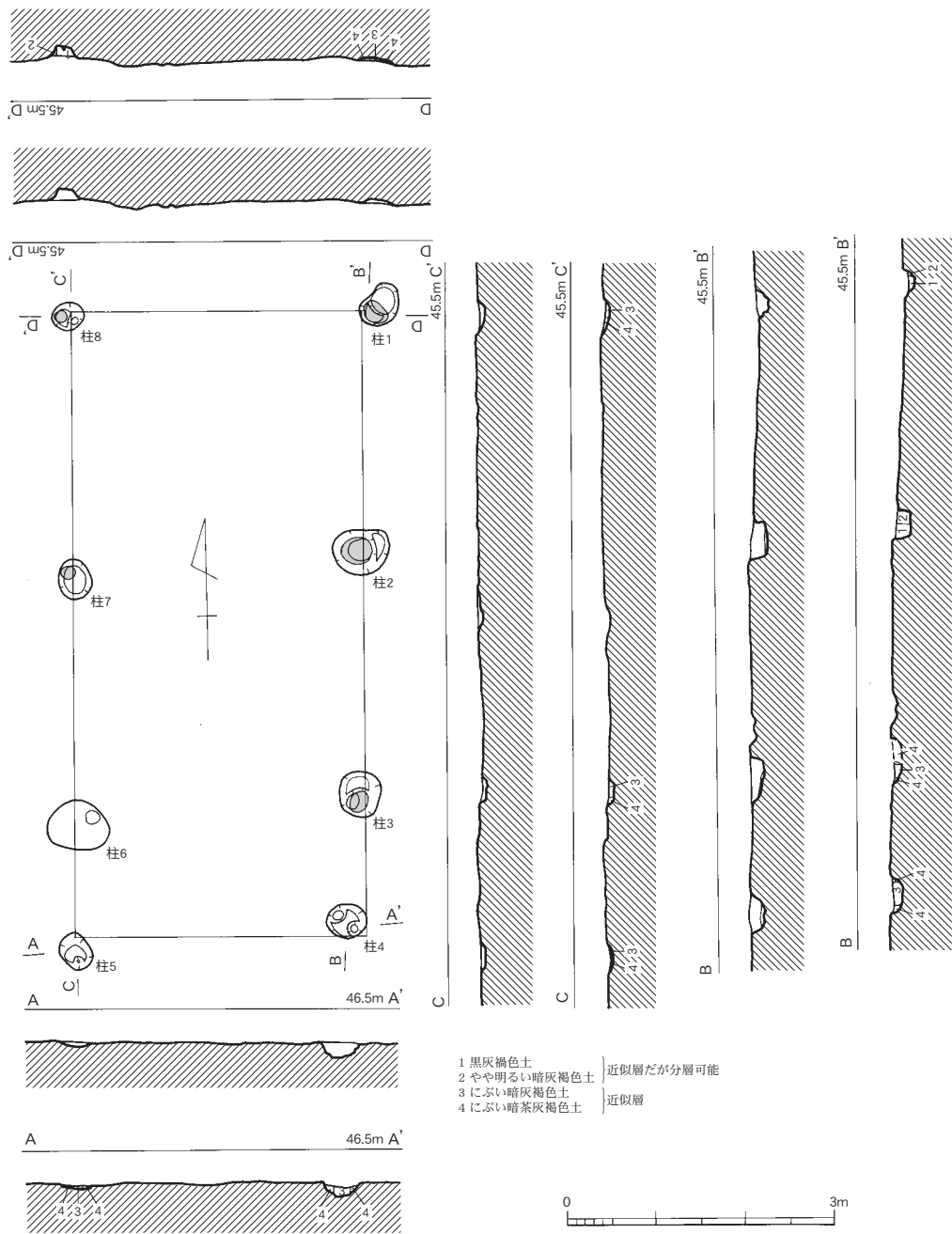


第56図 2区3号掘立柱建物跡、4・13号柵跡実測図(1/80)

遺物は柱5から黄橙色系の土師器の小片が出土するのみだが、扁平な薄い器壁で、1面は平滑にナデられており、反対面は水引き痕跡があることから、土師器碗の底部片と考えた。底部が薄く、外底を平滑にナデ仕上げしていることから高台付であり、黄橙色化していることから9～12世紀代であろう。主軸方向はN-85°40'-Wで、5号掘立柱建物跡と一致するので、併存する可能性が高い。

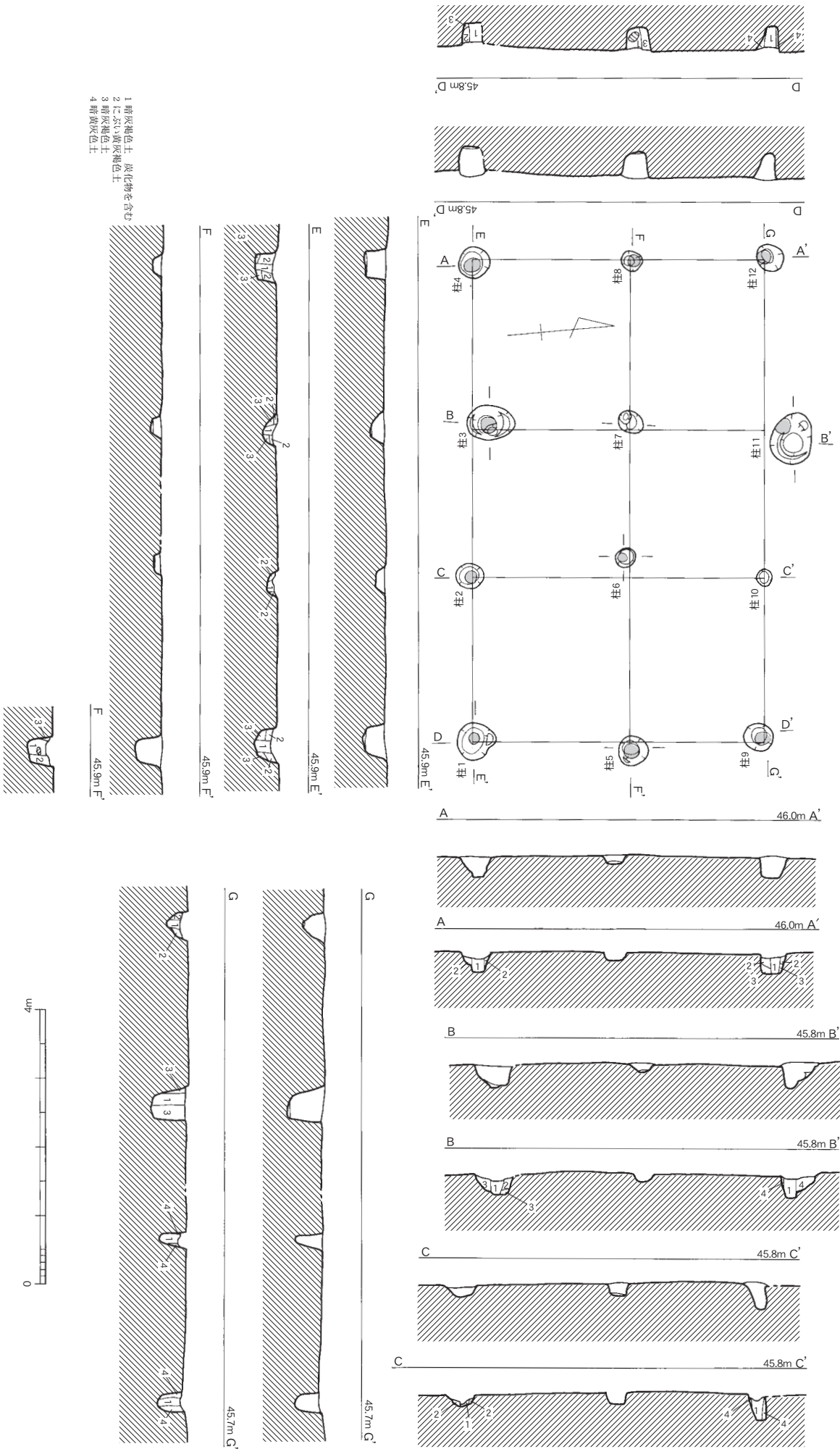
7号掘立柱建物跡(図版32、第60図)

調査区西部から検出された。2×5間の建物で、9号掘立柱建物跡の北に位置する。芯々で梁行



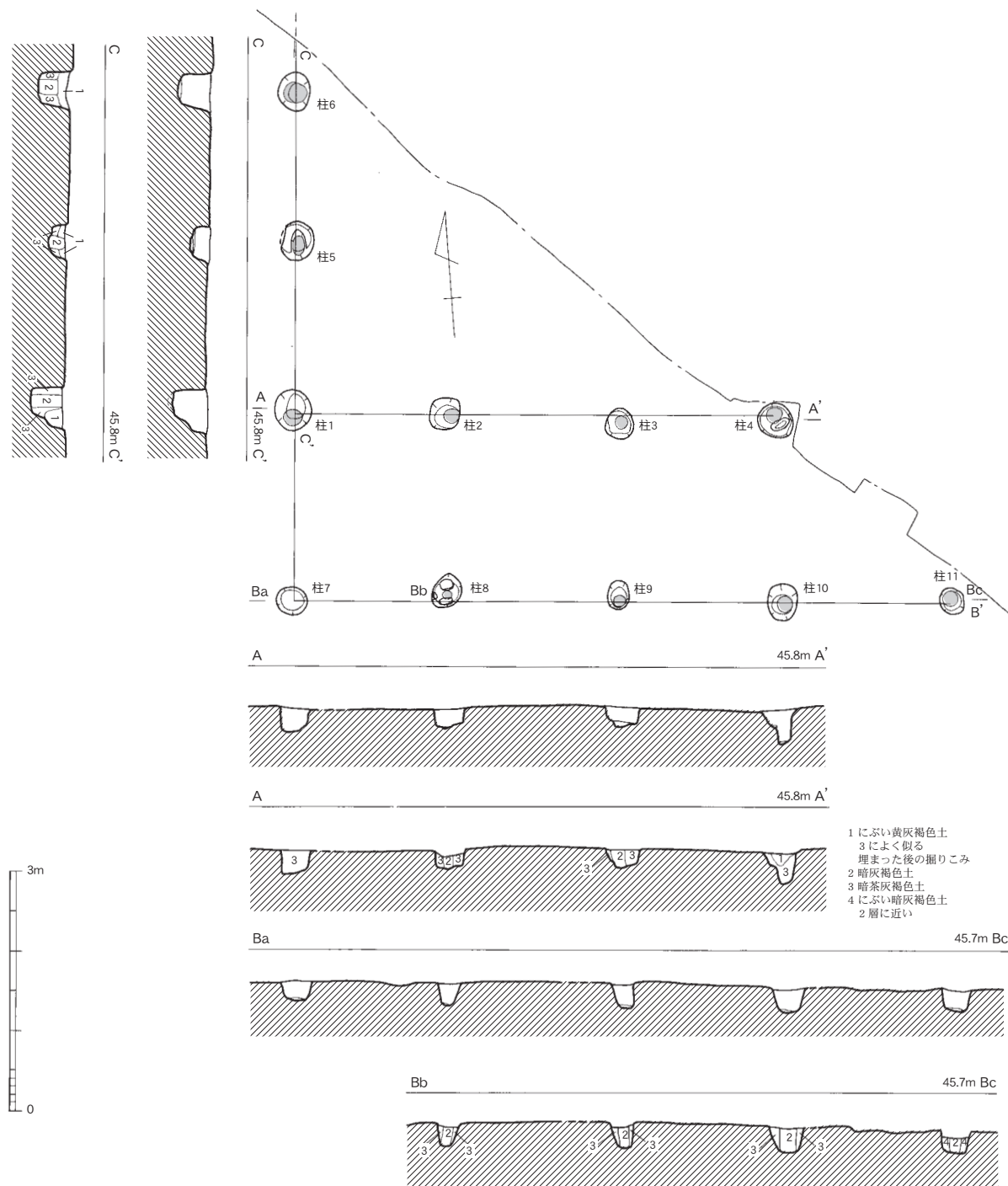
第57図 2区4号掘立柱建物跡実測図(1/80)

第58图 2区5号掘立柱建物跡実測図(1/80)

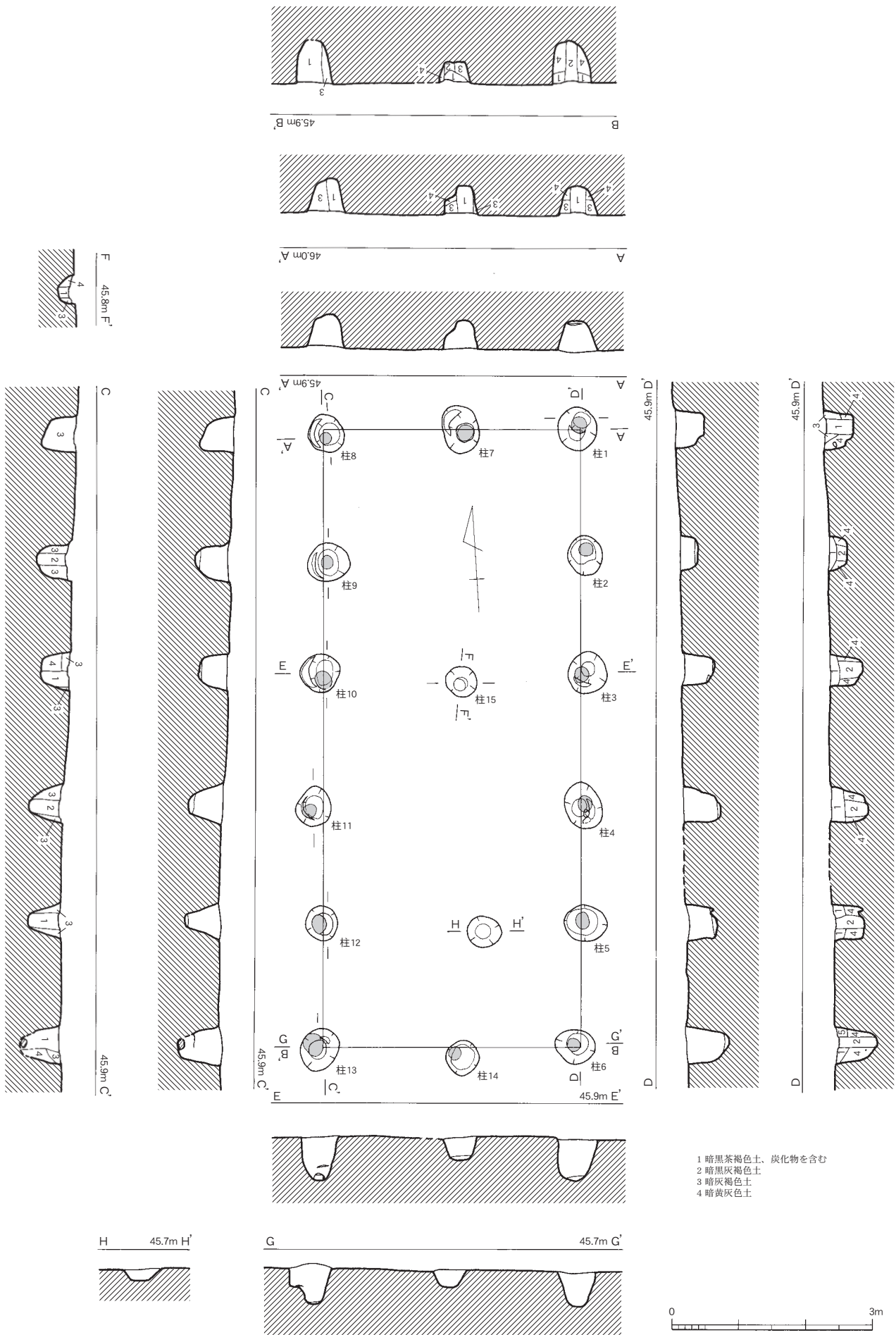


380cm、桁行330cm。柱間は梁行170~210cm、桁行180~200cmばらつきがある。径60cm前後、深さ45~60cm前後の大型の柱穴である。建物中央部には中心軸上にある柱穴15があり、床柱になるものと思われる。柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。

主軸方向はN-3°40'-Eであり、7号掘立柱建物跡とほぼ一致する。柱13・15は7号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。これらのことと、柱8・9の間にも柱があることを考え合わせると、7号掘立柱建物は9号掘立柱建物跡の建て替えでなく、建て増しにより連結したものと考えられる。柱5・12間の柱が中心軸からずれているのは、9号掘立柱建物跡の柱8が残っていたため、この



第59図 2区6号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第60图 2区7号掘立柱建物跡実测图(1/80)

2つの柱の中央に中心軸が通っている。また、柱6・14も掘り形は切り合っているが、柱痕は隣接したまま残っているため、柱を共存させた可能性がある。柱13は底面に石を敷いている。

このほか、5・6号掘立柱建物跡と直交する。19号掘立柱建物跡、9・10号柵跡と重複するが、柱穴は切り合わない。

出土遺物には時期差があるが、図化できないものに、柱6出土の回転ヘラ切りによりできる螺旋状の沈線の痕跡が残る土師器小片や、柱2出土の外面にナデの凹凸を残す灰褐色の土師器杯の口縁部や胴下位と底部の接合部の丸みのある鉢があることから、9～10世紀の所産であろう。

出土遺物(第73図)

9は柱7から出土した土師器碗で、傾きが小さく外面に工具の段をもつ胴部に、湾曲して開く高い高台をもつので、9世紀から10世紀のものである。10は柱6から出土した土師器碗で、短く薄い高台が底に開くことから、10世紀代だろう。11は柱5から出土した高台付皿片で、12は柱2出土の平底の土師器杯で、器面剥落のため器壁が薄くなっている。13は柱4から出土した須恵器の高台部で、底面がほぼ水平で、径が大きく、高台の器壁が薄いことから盤であろう。14は柱6から出土した耳の付く須恵器壺で、把手から上位には灰被りが見られ、下位はヘラ削りが施されている。8世紀後半から見られるものだが、M字形の耳の下端の接合部が胴中位まで下がっているため9世紀前半のものだろう。15は柱11から出土した土師器鉢で、器面が摩滅しており調整不明。外面は変色が見られないが、内面はやや暗く変色している。ピット17出土の鉢に形態が近いので9世紀代だろう。

8号掘立柱建物跡(第61図)

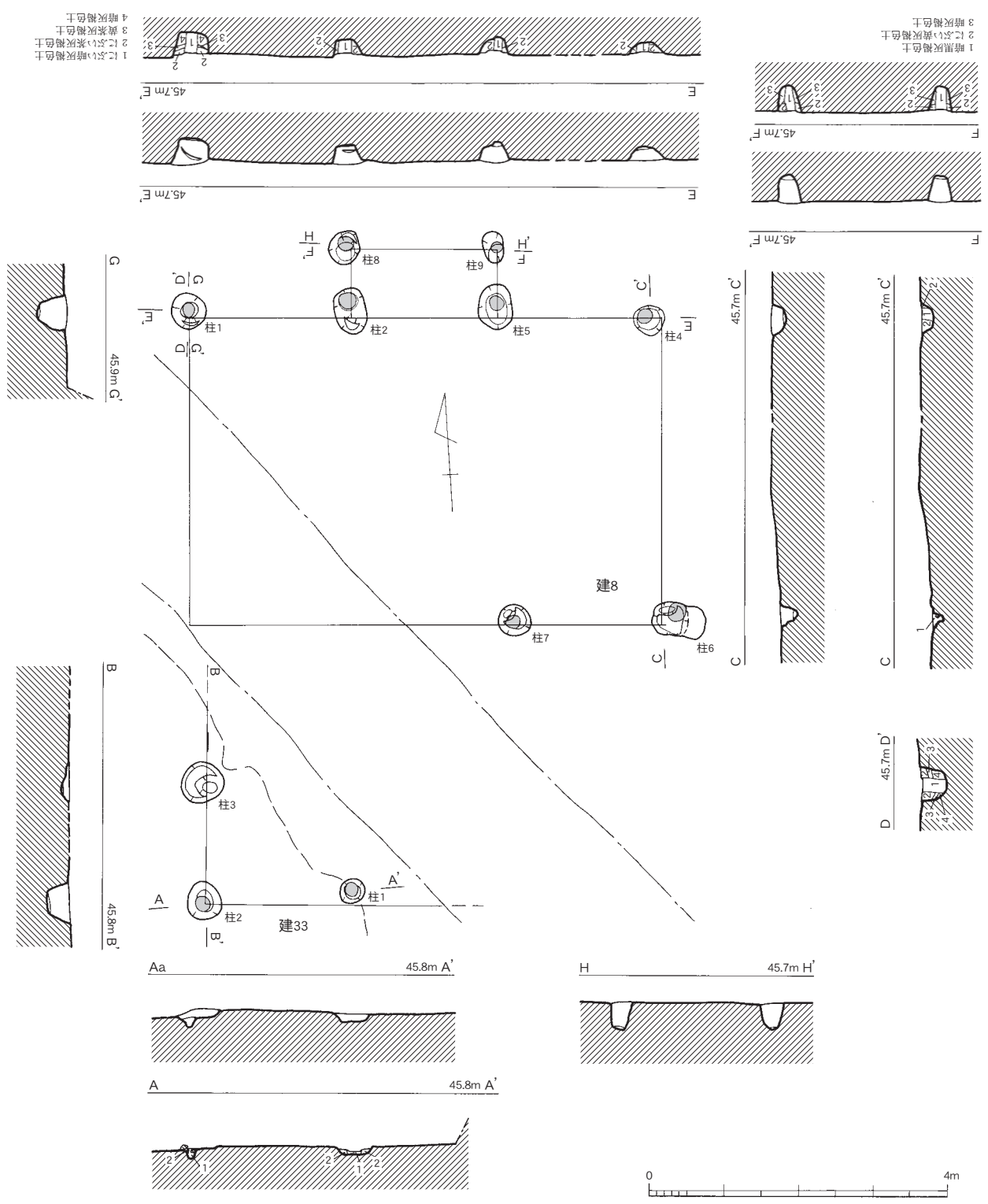
調査区南西部から検出され、9号掘立柱建物跡の南に位置する。南西部は現代の水路とその前身である近世の溝に切られて検出されず、南に33号掘立柱建物跡があるため、建物規模は不確定である。柱7があることと東辺が柱6から南に延びないことから、33号掘立柱建物跡は別遺構と考えられ、1×3間の建物として。北側に張り出し部をもつ。柱径40～60cmで、後述する底部と組み合う柱2本が他より大きい。深さは10～35cmで北に行くほど残りがよい。柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。

張り出す庇の柱は周囲のピットと隔絶した柱2本で構成されている。芯々で200cmを測り、柱痕はいずれからも検出された。当初は東に存在するもう1基のピットを含めて8号柵としていたが、柱穴の大きさと柱間が合わないことと、他の2基が8号掘立柱建物跡の柱穴との柱筋と揃うので、2つの柱で構成する8号掘立柱建物跡の底部と考えた。

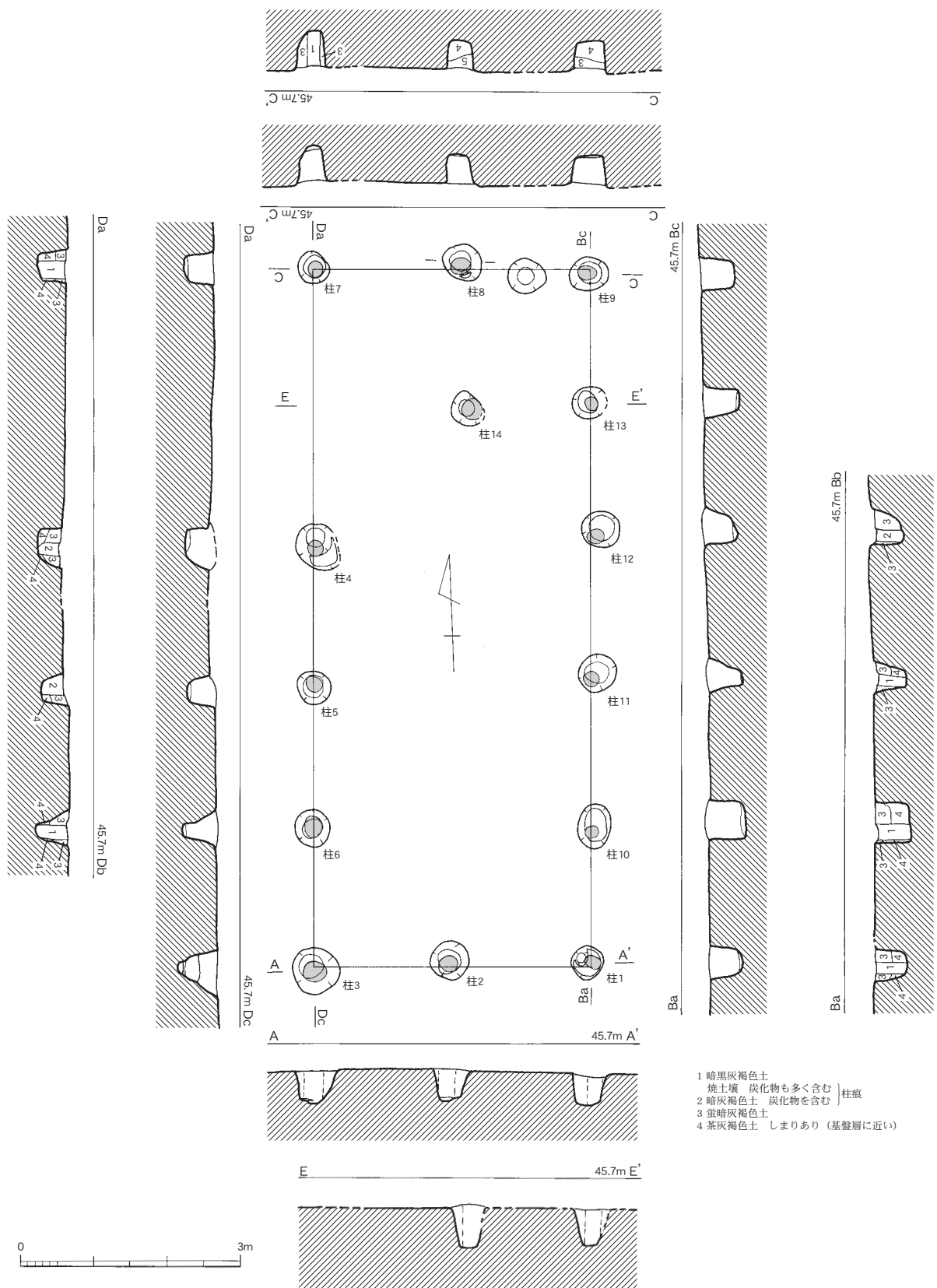
主軸方向はN-86°30'-Wで、8号柵跡と一致するので、8号柵跡は8号掘立柱建物跡に付随するものであろう。11・33号掘立柱建物跡、9・10号柵跡と重複するが、柱穴は切り合わない。出土遺物がなく、時期が特定できないが、5・6号掘立柱建物跡と主軸方向がほぼ同じで、7号掘立柱建物跡と直交することから、これらと同時期で、9～10世紀の可能性が高い。

9号掘立柱建物跡(図版32・33、第62図)

調査区西部から検出された。2×5間の建物で、5号掘立柱建物跡の南に位置する。芯々で梁行370cm、桁行940cm。柱間は梁行は北辺は中央にないので南辺のみを測定し185cm、桁行は180～220cmとばらつきがある。径45～60cm、深さ380～450cm前後を測る。建物北部に中心軸上に乗る柱穴13があり、床柱になるものと思われる。柱8・9の間にも柱がある一方で、柱4・7間には柱



第61图 2区8・33号掘立柱建物跡実測図(1/80)



- 1 暗黒灰褐色土
 - 2 暗灰褐色土 炭化物を含む
 - 3 黄暗灰褐色土
 - 4 茶灰褐色土 しまりあり (基盤層に近い)
- 柱痕

第62図 2区9号掘立柱建物跡実測図(1/80)

がない。

柱痕はほとんど残っており、抜き取られているのは7号掘立柱建物跡と重複する柱5・8のみである。主軸方向は $N-1^{\circ}40'-E$ で、7号掘立柱建物跡とほぼ一致し、柱13・15は7号掘立柱建物跡の柱穴に明らかに切られていた。7号掘立柱建物跡で説明したように、7号掘立柱建物は9号掘立柱建物跡の建て替えでなく、建て増しと考えられ、柱4・7間の柱のない位置に同じ柱間で7号掘立柱建物跡の柱13が入る。25号柵跡は9号建物南辺に付く庇柱穴の可能性はある。

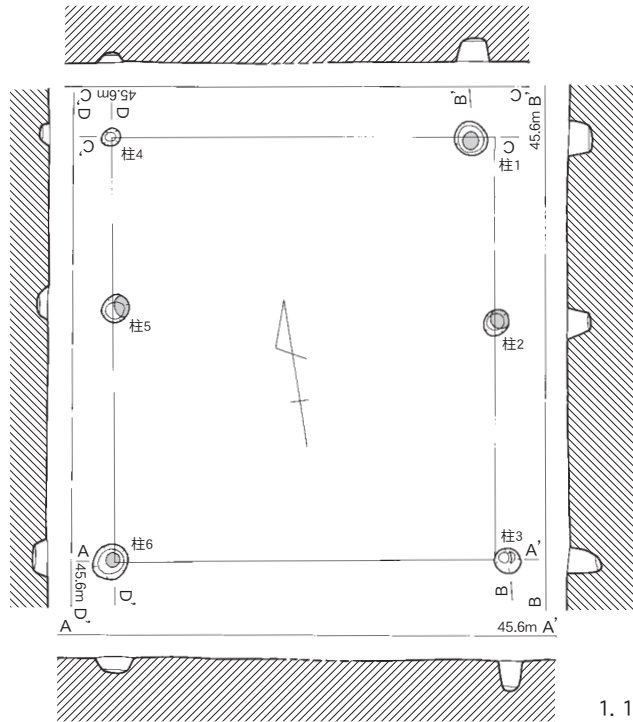
出土遺物からは9世紀から12世紀の時期幅を推定できるのだが、7号掘立柱建物跡と共存すると考えているので、9～10世紀であろう。

出土遺物(第73図)

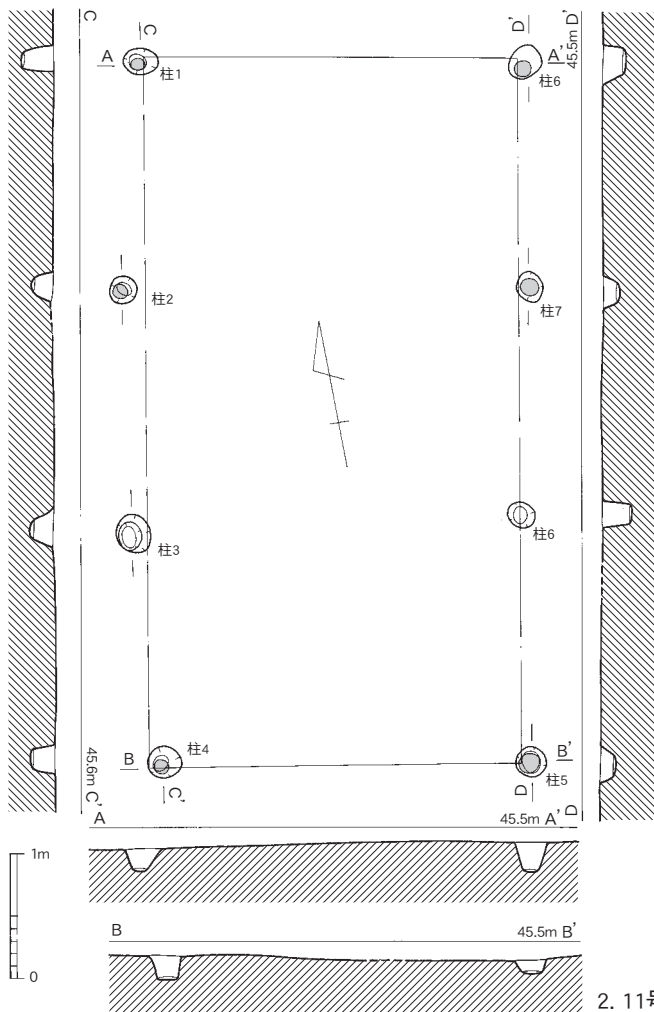
16・17は柱8から出土した土師器碗で、16は摩滅のため器壁が薄くなっている。17は高台部分が剥落した底部片である。

10号掘立柱建物跡(図版32、第63図)

調査区西部から検出された。1×2間の建物で、5号掘立柱建物跡の南に位置する。芯々で梁行300cm、桁行330cm。径20～30cm、深さ20cm前後の小型の柱穴で、残りが悪い。主軸方向は $N-6^{\circ}30'-E$ であり、5号掘立柱建物跡と直交する。7号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴は切り合わない。



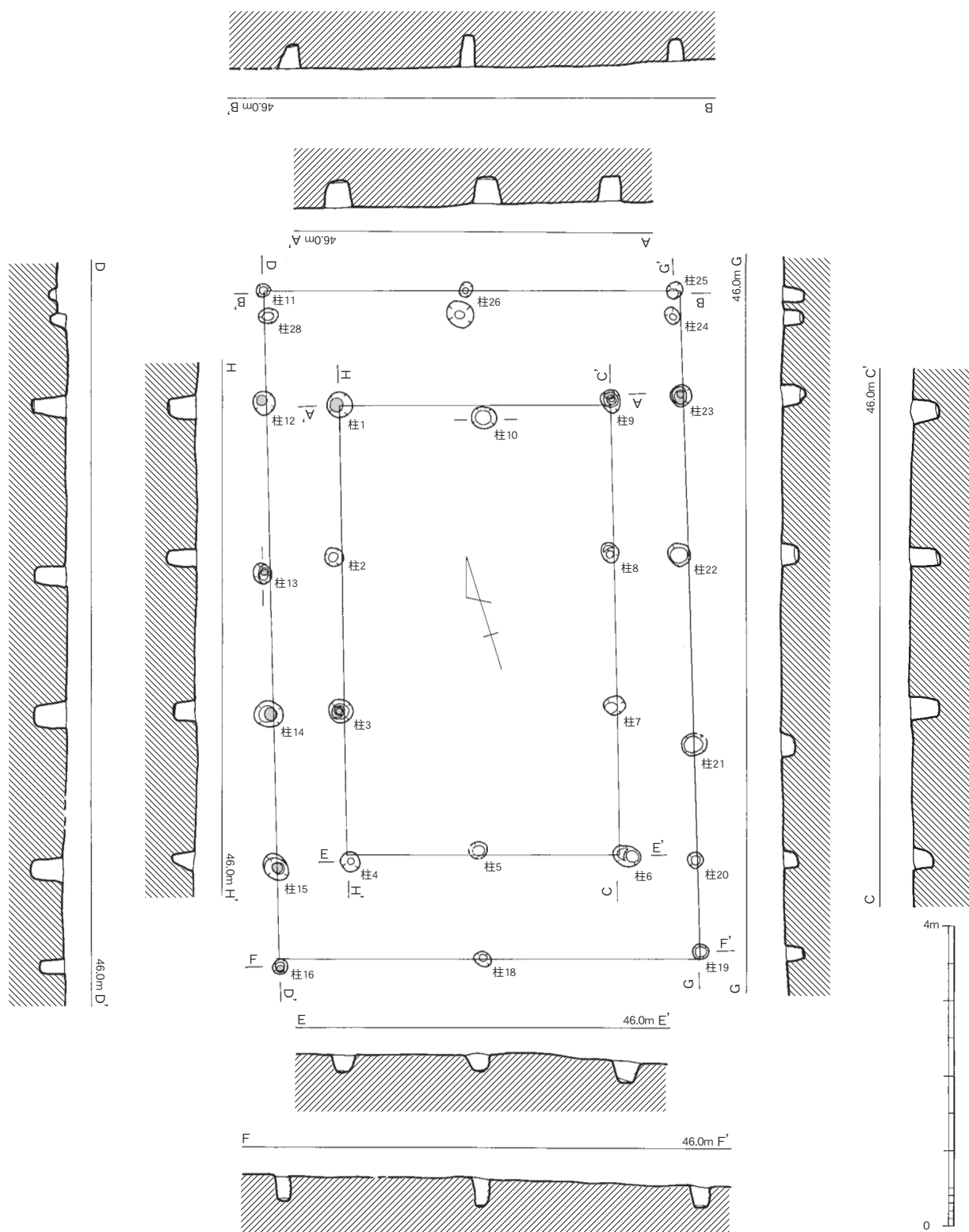
1. 10号掘立柱建物跡



2. 11号掘立柱建物跡

第63図 2区10・11号掘立柱建物跡実測図(1/60)

出土遺物は図化できないが、柱2から土師器小皿の小片が出土しており、外面が黄灰白色で、内面が黄橙色で、底部に向かって器壁が薄くなる。底部は回転ヘラ切りと思われる平底なので9世紀から10世紀であろう。



第64図 2区12号掘立柱建物跡実測図(1/80)

11号掘立柱建物跡(図版32、第63図)

調査区西部から検出された。1×3間の建物で、9号掘立柱建物跡の南に位置する。芯々で梁行295~310cmで、桁行560cm。柱間は梁行180~185cmを測る。径18~25cm、深さ18cm前後の柱穴で、残りが悪い。主軸方向はN-10°40'-Eであり、5号掘立柱建物跡と直交する。9a号柵はほぼ一致しており、10号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。7号掘立柱建物跡・10号柵跡と重複するが、柱穴は切り合わない。

出土遺物に瓦器碗があり、図化できないが柱6から器壁が薄く、口縁部が肥厚しない初期の東播系須恵器鉢片があるので、12世紀初頭だろう。

出土遺物(第73図)

18は柱6から出土した小型の瓦器碗で、口縁部は灰黒色、口縁下は灰白色を呈する。器面は摩滅しており、調整は不明。

12号掘立柱建物跡(図版33、第64図)

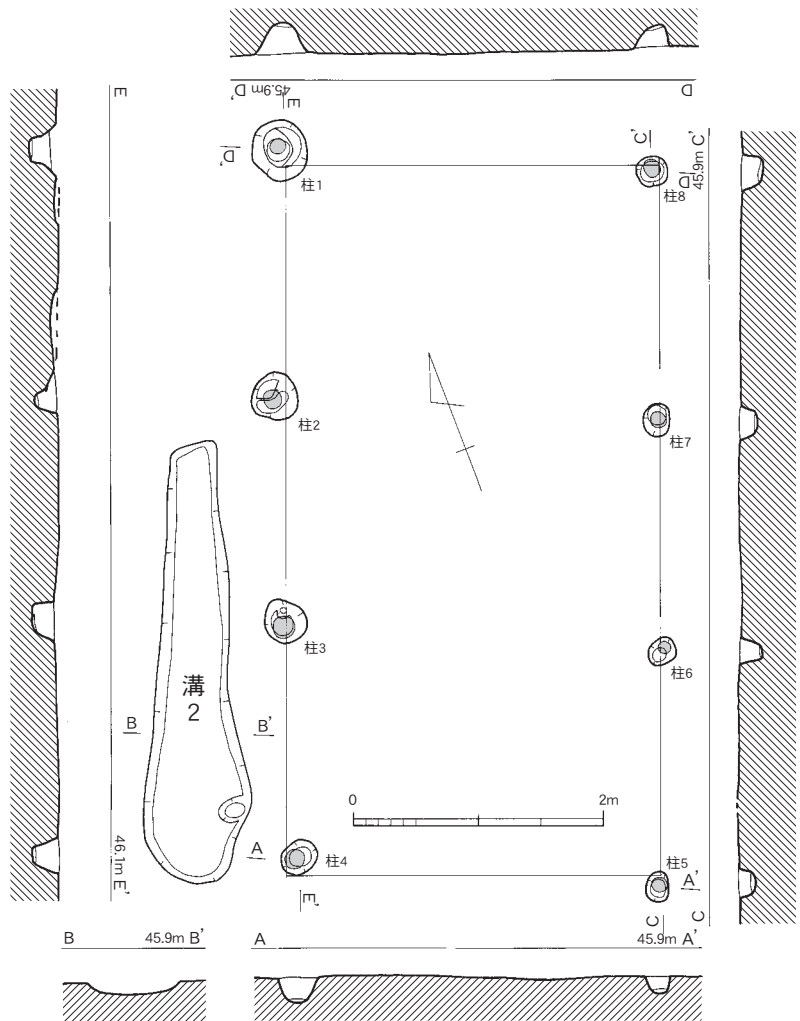
調査区北西部から検出された。4面庇付きの2×3間の建物で、庇は2×5間である。7号掘立柱建物跡の西に位置する。身舎部は、芯々で梁行360cm、桁行580cm、柱間は梁行185cm、桁行200~210cmでばらつきがある。径30cm前後だが、南辺は小さい。深さ20~40cm前後の柱穴で、残りが良い。

底部は芯々で梁行550cm、桁行880cmで、柱間は梁行275cm、桁行130~250cmでばらつきがある。柱穴はやや小さい。底部の北辺は建て替えているものと思われ、近接する柱穴がある。

主軸方向はN-15°40'-Eであり、11号掘立柱建物跡に近い。13号掘立柱建物跡と重複し、2号溝状遺構に切られる。柱1・2は礎が入っており、高さを調節した石敷であろう。出土遺物の21の瓦器碗の高台径が小さく高いことから12世紀後半だろう。

出土遺物(第73図)

19は柱15から出土した土師器の小皿で口縁部は残っており、器高が低い。板状圧痕があるものの、糸切り痕は残っていない。20は柱2出土の土師器小皿で、内外黄橙色で変色なし。21は柱9から出土した瓦器碗で、高台



第65図 2区13号掘立柱建物跡実測図(1/60)

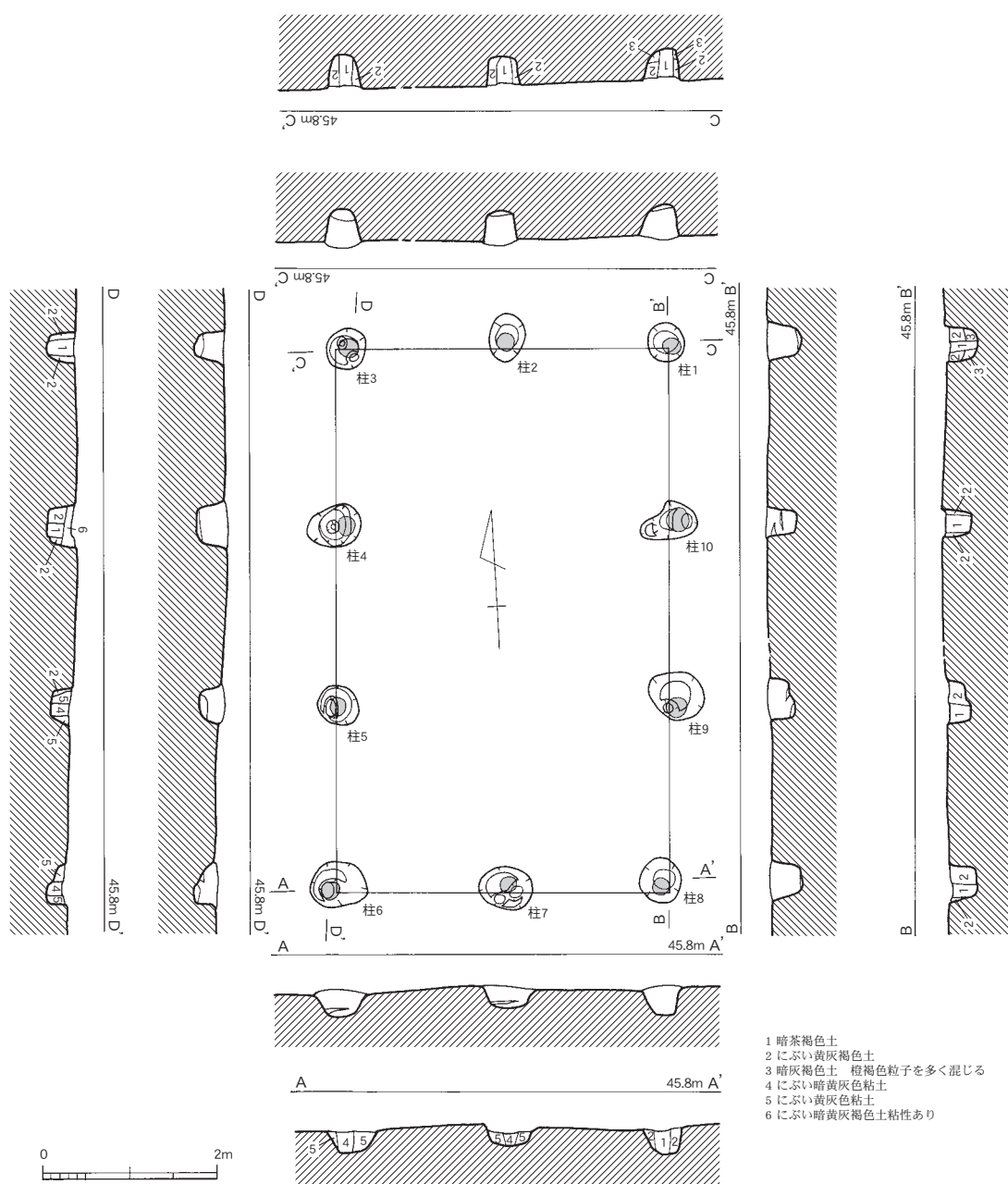
の幅は不均一で広いところも狭いところもある。器面が摩滅しているため調整は不明だが、胴下位はオサエ痕。外面はにぶい黄灰白色、内面は黒灰～黄灰白色である。22は柱1出土で、弥生土器の広口壺の口縁部片と考えられる。

13号掘立柱建物跡(図版33、第65図)

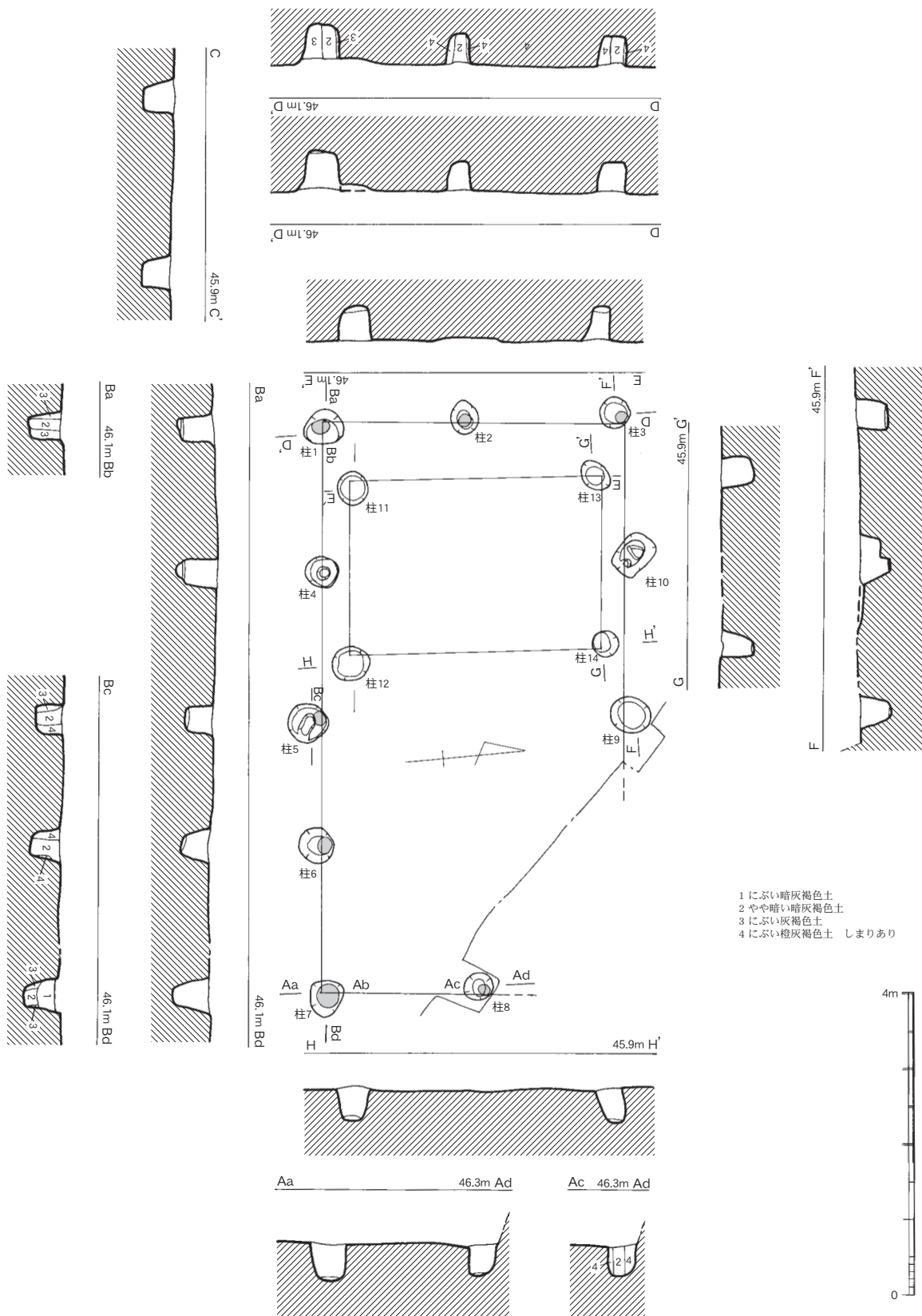
調査区北西部から検出された。1×3間の建物で、12号掘立柱建物跡の北に位置する。西部には雨落ち溝と思われる2号溝状遺構が検出された。

芯々で梁行300cm、桁行575cm。柱間は桁行185cmを測り、比較的均一である。径25～35cm、深さ35～40cm前後の柱穴で、柱痕は確認できなかった。

主軸方向はN-4°20'-Eである。12号掘立柱建物跡と重複する。出土遺物は図化できない小片だが、柱7から小さい段面三角形の高台と、低い扁平な高台の瓦器碗の底部片が出土している



第66図 2区14号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第67図 2区15号掘立柱建物跡実測図(1/80)

13世紀代と見られ、雨落ち溝である2号溝状遺構の時期と矛盾しない。

14号掘立柱建物跡(図版34、第66図)

調査区西部から検出された2×3間の建物で、12号掘立柱建物跡の南に位置する。芯々で梁行370cm、桁行610cm。柱間梁行180~200cm、桁行210cm。径45~65cm、深さ25~35cm前後の柱穴で、柱痕は残っている。柱3は底面に柱根が接していた変色範囲があるので、壁際の小穴は基盤層内の礫が抜けたものだろう。同様のものが柱7にも見られる。

出土遺物がなく時期が特定できないが、主軸方向はN-3°30'-Eであり、9号掘立柱建物跡と一致し、12世紀後半の8号土坑とは重複するので、9号掘立柱建物跡と同時期の9~10世紀であろう。

15号掘立柱建物跡(図版33・34、第67図)

調査区北西端から検出され、調査区北側に延びる建物である。2×4間の建物の内部に1×1間の身舎のあるもので、13号掘立柱建物跡の北に位置する。芯々で梁行400cmで、桁行は750cmか、まだ調査区外に延びるとすれば960cm以上である。柱間は梁行が約200cm、桁行が約190cmである。内側の区画は梁行225cm、桁行330cm。柱穴は径35~55cmで、柱1~4・7は柱が沈み込んで窪んだ部分がある。

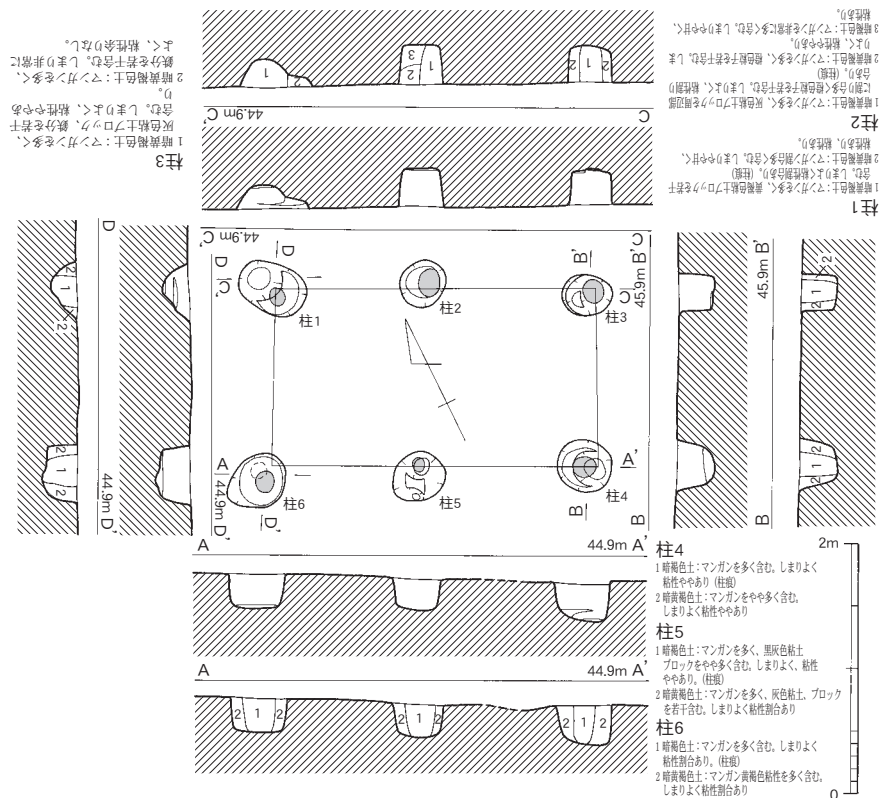
主軸方向はN-84°12'-Wであり、14号掘立柱建物跡と一致する。出土遺物から9世紀前半と見られ、11~12世紀の1a号溝状遺構に切られることに符合する。

出土遺物(第73図)

23は柱12から出土した土師器の杯で、径と胴部と底部の境の段が小さいことから9世紀前半であろう。24の須恵器壺は柱4から出土しており、外面には自然釉がかかる。

16号掘立柱建物跡(図版34・39、第68図)

調査区東部から検出された1×2間の非常に小さい建物で、1号掘立柱建物跡の南東に位置する。芯々で梁行150cm、桁行250cm。径37~55cm、深さ30~35cm前後の柱穴で、柱痕は柱1を除いて残っている。四隅の柱穴は柱痕部が外側の壁側に寄っている。



第68図 2区16号掘立柱建物跡実測図(1/60)

出土した土鍋の口縁部の傾きから12世紀後半から13世紀前半代であろう。主軸方向はN-64°30'-Wであり、28号掘立柱建物跡と一致し、時期的にも矛盾がないので、28号掘立柱建物跡に付随するものだろう。17号掘立柱建物跡と重複する。

出土遺物(第73図)

25は柱5から出土した土師質の土鍋で外面は煤が付着し、内面は使用によりにぶい暗橙褐色を呈する。

17a・b号掘立柱建物跡(図版34・35、第69図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部の西端から検出された。他の遺構の柱穴との埋土の差異が小さかったが、明瞭に検出された。非常に細長い特異な建物が2棟重複しているので、建て替えと考えてよい。17a号掘立柱建物跡は2×8間以上の建物であり、17b号掘立柱建物跡は梁行にピットが存在し、柱穴の有無は確認できなかった。同じ建物の建て替えなので、おそらく梁行2間で桁行6間以上となる。

17a号掘立柱建物跡は芯々で梁行220cm、桁行1,528cm以上で、柱間は210cm。17b号掘立柱建物跡は梁行240cm、桁行1,570cm以上で、柱間は260cmで17a号より長く、梁行もこの柱間1間分の長さである。柱穴規模は両者ともほぼ同じで、径35~45cm、深さ25~35cm前後の柱穴で、柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。

遺物は図化できないが、17a号掘立柱建物跡の柱5から、回転ヘラケズリ後ナデ仕上げし、端部に稜をもたない須恵器の杯蓋片があり、橙褐色系の器種不明土師器片があることから、8世紀代だろう。主軸方向は17a号掘立柱建物跡がN-7°30'-Eで、21号掘立柱建物跡と一致し、17b号掘立柱建物跡はN-9°50'-Eで22号掘立柱建物跡と一致する。21号掘立柱建物跡と22号掘立柱建物跡は重複しているので、連動した建て替えの可能性が高い。21号掘立柱建物跡は8世紀末から9世紀初頭で、22号掘立柱建物跡は9世紀前半と見られるので、17a号から17b号に建て替わり、柱間や梁行が大型化している。このほか、17a号掘立柱建物跡は16号掘立柱建物跡と重複し、17b号掘立柱建物跡は20・31号掘立柱建物跡と重複する。

18号掘立柱建物跡(図版33・34、第70図)

調査区西端から検出された2×5間の建物で、32号掘立柱建物跡の南に位置する。芯々で梁行450cm、桁行185cmで、柱間は梁行225cm、桁行215cm。柱穴は径35~60cm前後、深さ50cm前後で、柱痕はほとんどのものが残っていた。柱2・7・12は床面に複数の礫を敷いており、柱3・4・9・11・13は基盤層内の礫が底面に露出して敷石の役目を果たしていた。

出土遺物は9世紀前半であり、主軸方向はN-9°40'-Eであり、14号掘立柱建物跡と一致しており時期的な矛盾はない。

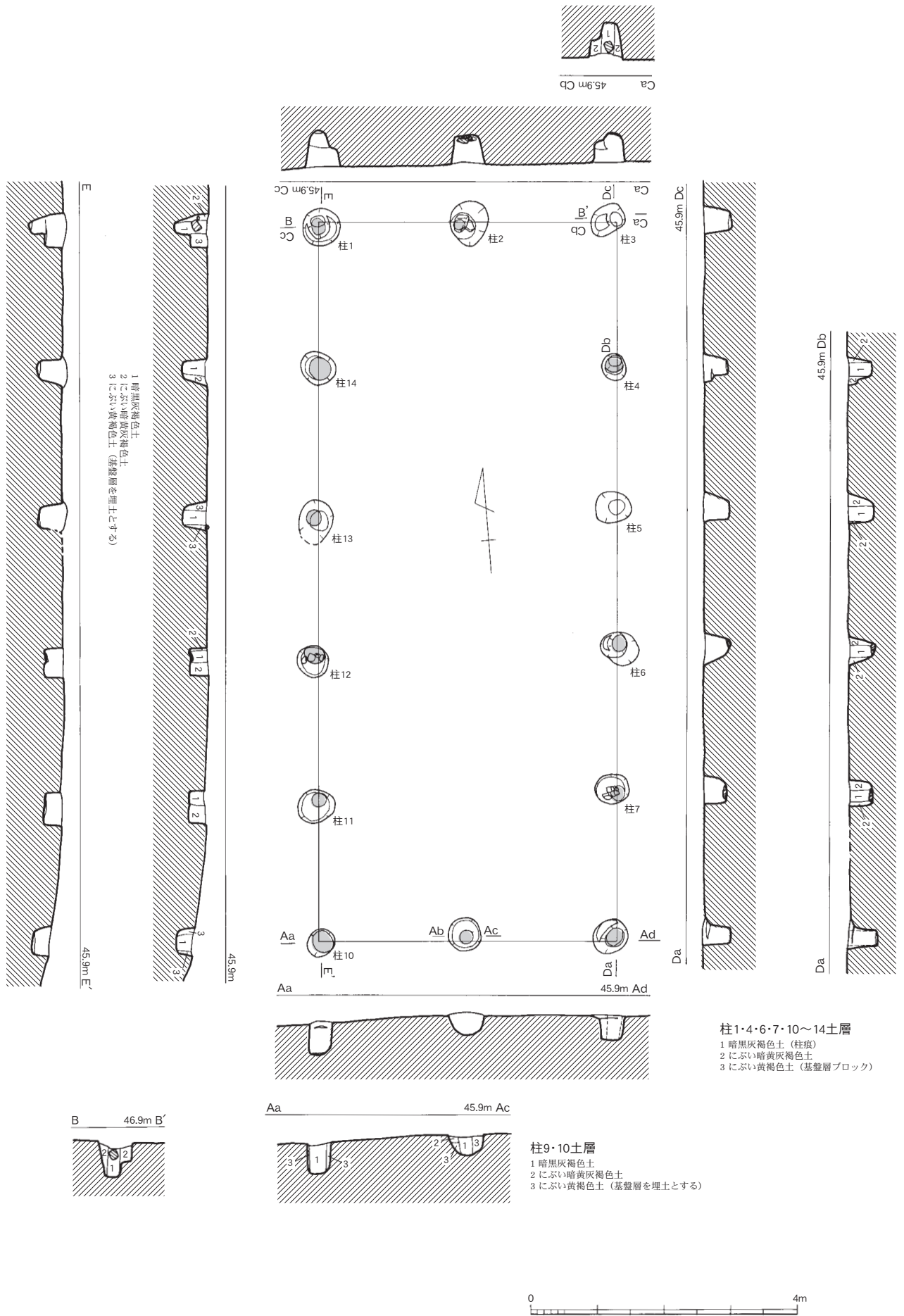
出土遺物(第73・96図)

第73図26は柱1から出土した須恵器で、器壁が薄いことから甕ではなく鉢の胴下部であろう。27は柱1から出土した土師器の杯で、外面に工具による段がある。

第96図10は柱1出土の鉄鎌の先端部である。

19号掘立柱建物跡(図版35、第71図)

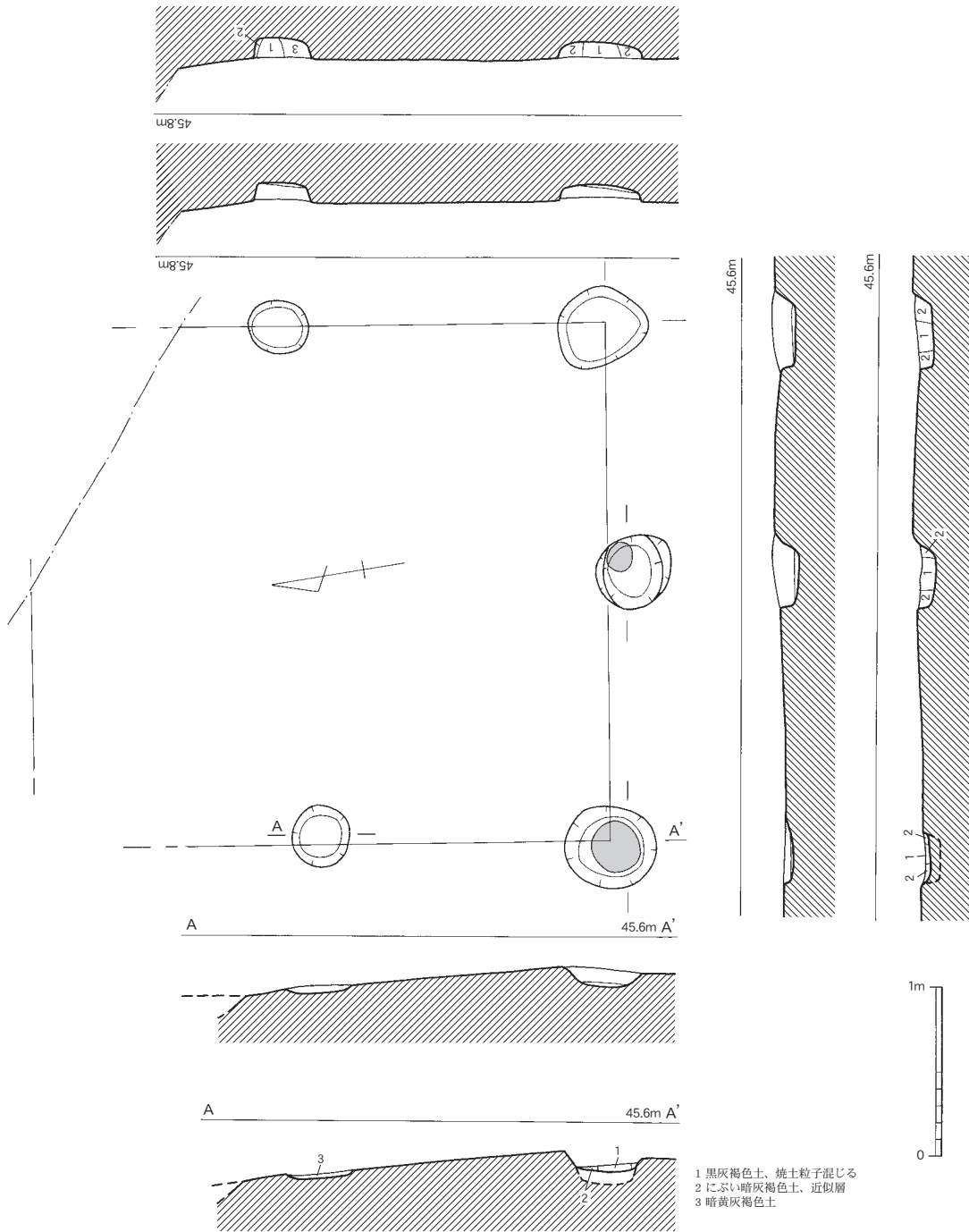
調査区西端の現代の水路に北東部を切られて検出された。2×2間以上の建物であろう。水路の



第70図 2区18号掘立柱建物跡実測図(1/80)

北側では柱穴が検出されていないので、最大でも3間であろう。芯々で梁行300cm、桁行180cm以上で柱間は梁行140から160cm、柱穴は径35~55cmで北側の柱穴は近世溝の掘形に削られて小さくなっている。深さ5~70cm前後である。柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。柱3は柱根が接地していた部分の変色がある。

図化できない小片だが、柱2からカクセン石を含むざらつく胎土の黄橙灰色系土師器片が出土しており、鉢の胴上半部の可能性があり、9~10世紀代であろう。主軸方向はN-9°10'-Eで、9号掘立柱建物跡と一致しており、時期的にも整合している。



第71図 2区19号掘立柱建物跡実測図(1/40)

20号掘立柱建物跡(図版35、第72図)

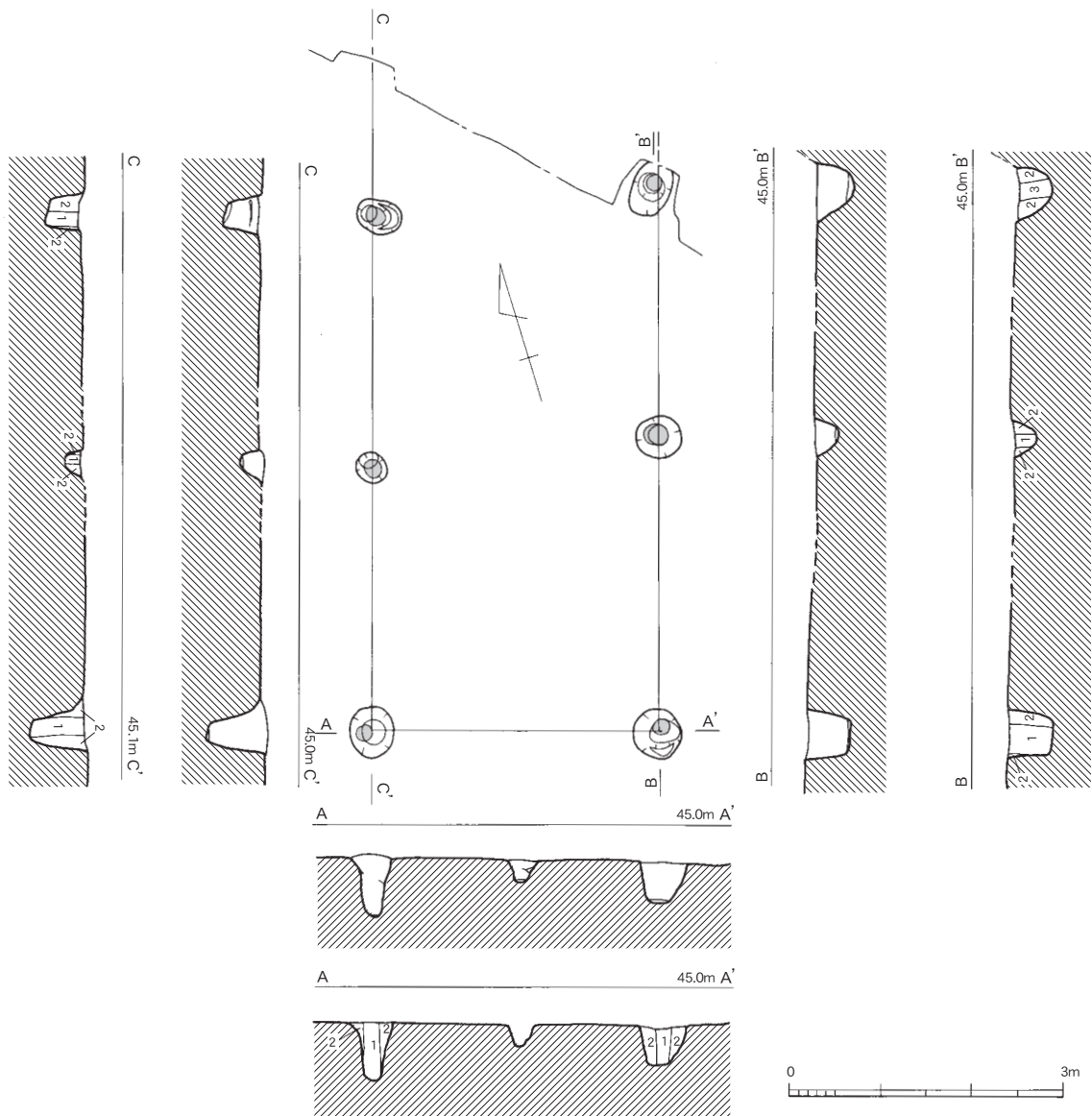
調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。北側には梁行中央の柱穴がないので、調査区北端から外に延びることが想定されることから、2×3間以上の建物である。芯々で梁行325cm、桁行655cm以上。柱2・4・6は他より径が小さいもので、径55cm、深さ60cm前後の柱穴の間に径35cm、深さ20cm前後の柱がある。柱痕はいずれも残っており、抜き取りはない。

柱1の底には基盤層中の石が露出しており、これをよけて南側が深くなっている。柱5・6・7は底面に柱が接地していた部分の変色がある。

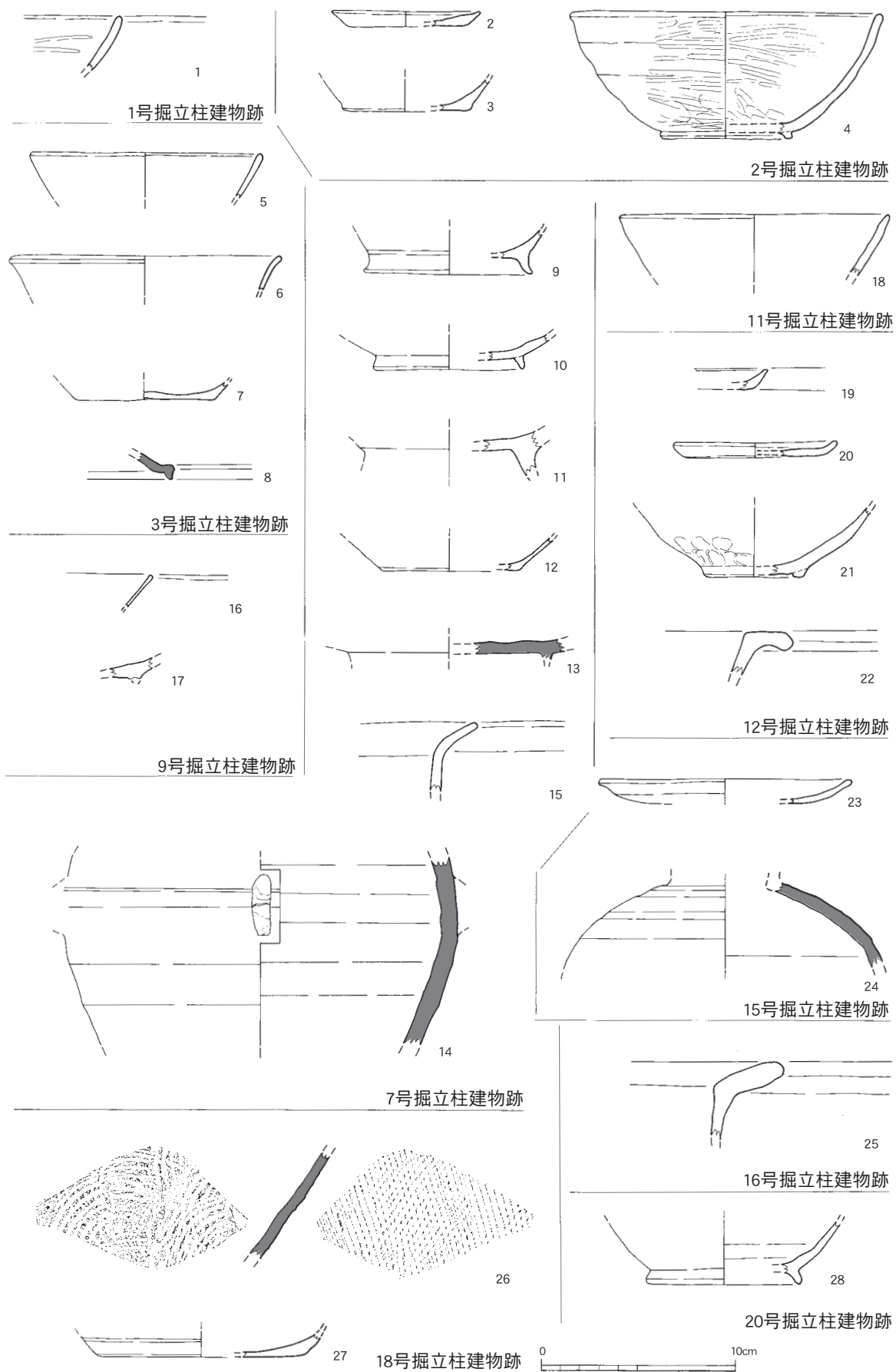
3の高台形態と内面胴下位の屈曲から、9世紀後半から10世紀の可能性が高い。17b・23・31号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴は切り合わない。主軸方向はN-17°10'-Eである。

出土遺物(第73図)

28は柱5から出土した土師器椀で、器面は摩滅しており調整不明。色調は、外面が胴中位が橙色、下位から高台が黄白色であり、重ね焼きによる色調差と考えられる。



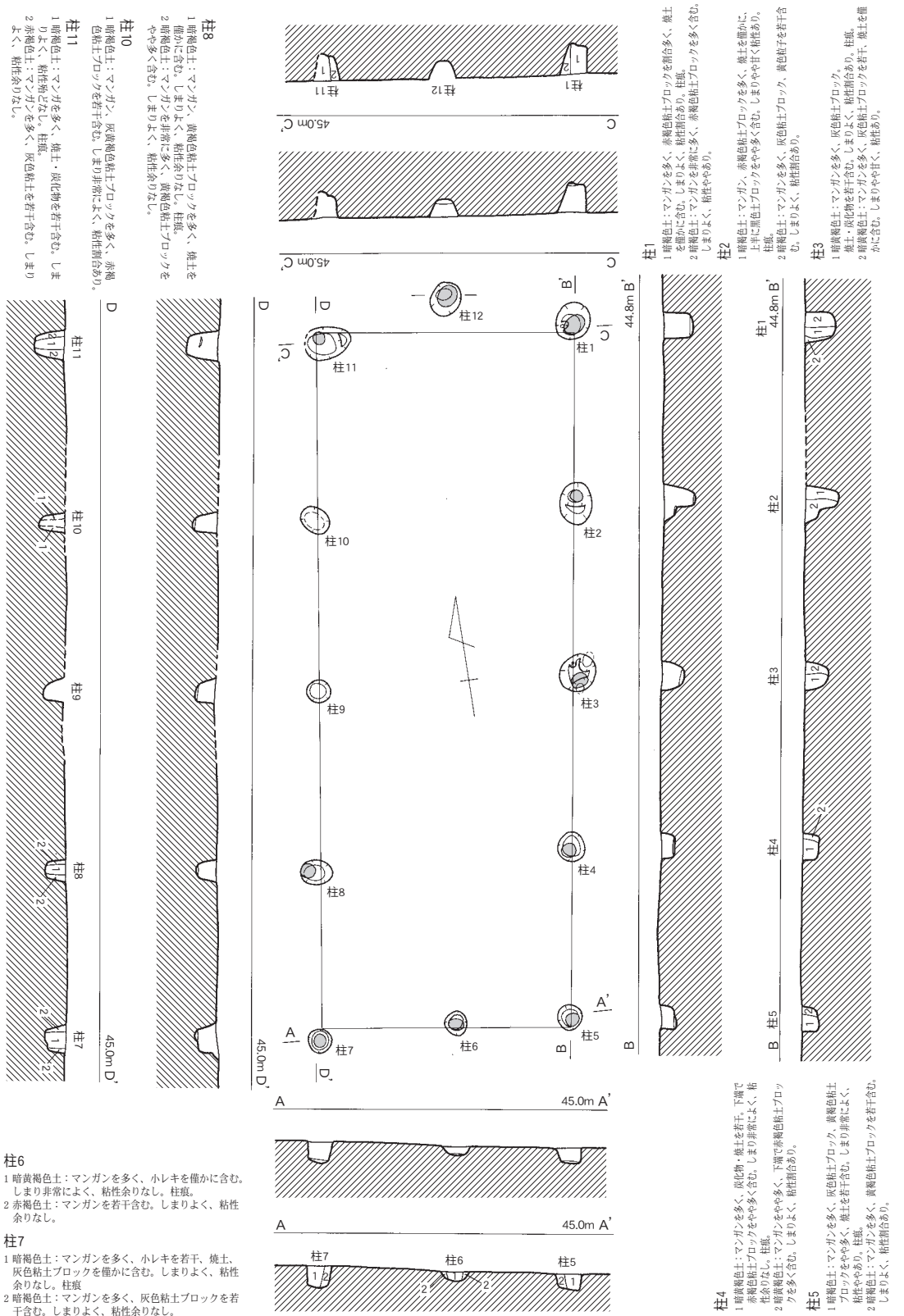
第72図 2区20号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第73图 2区1~3·7·9·11·12·15·16·18·20号掘立柱建物跡出土土器·陶磁器实测图(1/3)

21号掘立柱建物跡(図版35、第74図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。2×4間の建物で、芯々で梁行330cm、桁



第74図 2区21号掘立柱建物跡実測図(1/80)

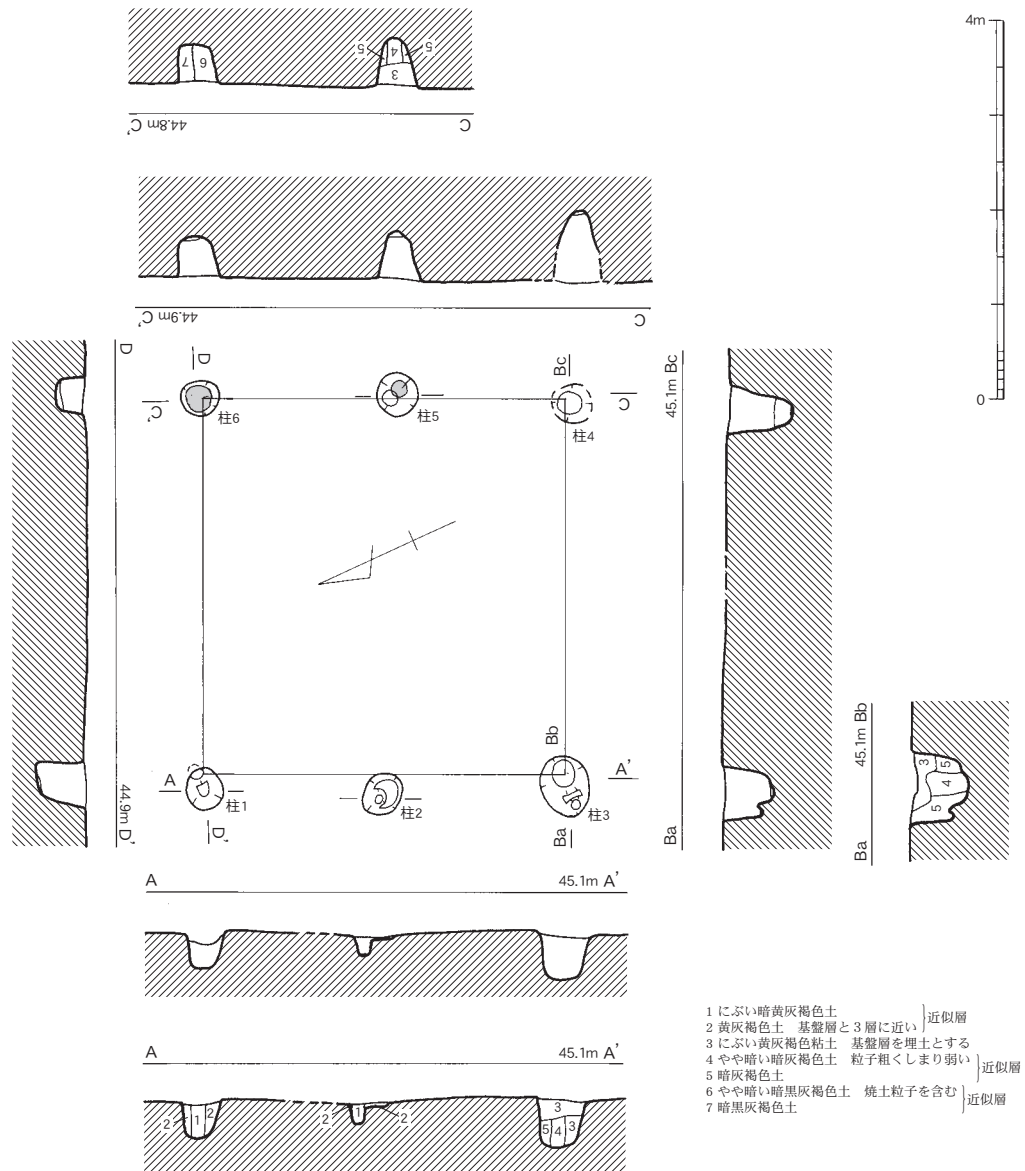
行890cm、柱間は220cm前後である。柱穴は径30~50cmで、南に行くほど削平のため径が小さくなる。深さ30~35cm前後の柱穴で、柱3は実測前に掘削したため、図化できていないが柱痕はいずれも残っており、抜き取りはなく、柱1と切り合うピットは浅く、建て替えではない。柱2の底面には柱が接した部分に変色が見られた。

主軸方向はN-8°40'-Eである。柱9・10は24号掘立柱建物跡柱3・4と24号掘立柱建物跡柱3を切り、柱10・11は25号掘立柱建物跡柱1・6を切る。22号掘立柱建物跡・3号土坑とも重複するが、柱穴は切り合わない。

出土遺物は時期の特定が難しいが、重複する22号掘立柱建物跡が9世紀前半なので、8世紀末から9世紀初頭のものであろう。

出土遺物(第90・96図)

1は柱1から出土した土師器杯で内外黄橙色を呈する。2は柱9から出土した土師器杯で、外底は回転ヘラケズリ。内外に使用変色がある。3は須恵器の高台付杯で欠損が底部の縁に沿っているが、打ち欠きではなく、粘土の積み上げ部分であろう。高台内は回転ヘラ切り。



第76図 2区23号掘立柱建物跡実測図(1/80)

第96図3は柱1出土の土壁片で、裏面は欠損面で、藁状の植物の痕跡がある。

22号掘立柱建物跡(図版36、第75図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。1×5間の建物で、芯々で梁行450cm、桁行110・115cmで、柱間は梁行21.5cmで比較的均一である。柱穴は径45～90cm、深さ20～45cm前後。柱痕はほとんど残っており、抜き取りはないが、柱7は抜き取られて礫が入っていた。主軸方向はN-77°30'-Wで、17b号掘立柱建物跡と一致し、21号掘立柱建物跡は重複する。

出土遺物から9世紀前半である。

出土遺物(第90図)

4は柱2から出土した土師器で、口縁部の傾きから椀だろう。内外明黄橙色を呈する。器面は摩滅により観察不能。5は柱1から出土した杯で、内面が灰白色なのは外面が黄橙色なので使用変色であろう。胴下半は回転ヘラケズリ。6は柱4出土の土師器杯で、器面摩滅のため調整不明。7は柱1出土の須恵器蓋で、天井部は回転ヘラケズリの後ナデ。欠損部につまみ部との接合痕が残る。色調は青灰色を基調とし、外面口縁部のみ暗青灰色なのは重ね焼きのためであろう。

23号掘立柱建物跡(図版35、第76図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。1×2間の建物で、芯々で梁行390cm、桁行382cmを測る。柱間は梁行195cmで、径40～65cm、深さ40～60cm前後の大型の柱穴で、北側の柱1と6は柱痕は残っていたが、それ以外には抜き取り痕跡が見られた。

遺物が出土しておらず、時期を特定できないが、柱4は8世紀後半の24号掘立柱建物跡柱6に切られており、主軸方向はN-24°0'-Eであり、一致するものがない。26号掘立柱建物跡とも重複するが、柱穴は切り合わない。

24号掘立柱建物跡(図版35、第77図)

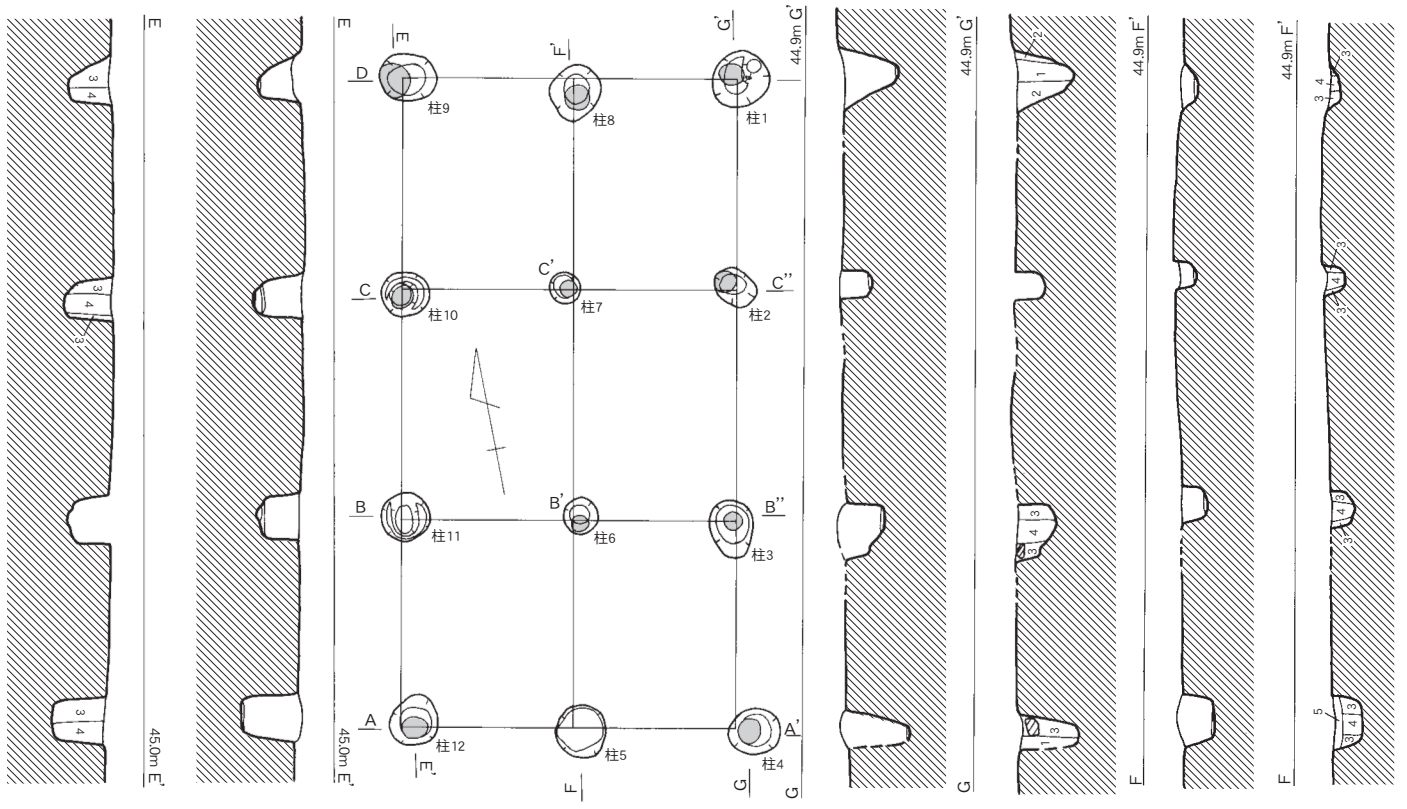
調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。2×3間の総柱建物で、芯々で梁行350cm、桁行680cm。柱間は220～230cmで、径50cm前後で、深さ30～60cm前後の柱穴で、周囲の建物に比べるとやや大きい。柱4には柱痕部に礫が落ち込んでいた。柱10底面には柱の沈み込みがあり、柱11の床面には柱が接触していた部分に鉄分が多く見られた。北片の隅である柱1・9の底面はそれぞれ北東と北西部に柱痕部があり、掘形の壁に寄せて柱が立っていたことがわかる。

23・25・26号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴は切り合わない。25号掘立柱建物跡に近い規模であることから建て替えの可能性が高い。東に東辺中央部と平行に2本柱の26号柵跡があり、これが東辺の中央に位置することから、24号掘立柱建物跡に付随するものと考えられる。張り出す庇の柱になる可能性もあるが、柱筋が合わないことから確実性に欠け、2本柱なので柵よりも門か小型の鳥居と考えた。

出土遺物から8世紀後半と考えられ、柱3が8世紀末から9世紀初頭の21号掘立柱建物跡柱10に切られる。主軸方向はN-11°40'-Eで、17b・25号掘立柱建物跡と一致しているので矛盾はない。

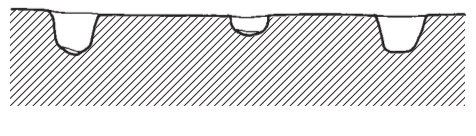
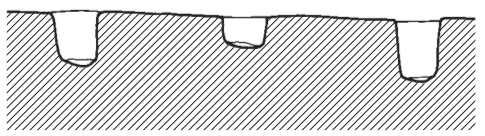
出土遺物(第90図)

8・9は柱5から出土した須恵器で、8は高台付杯で、下端の欠損部には高台との接合痕が見られる。9は蓋で、色調は青灰色を基調とし、外面口縁部のみ暗青灰色なのは重ね焼きのためであろう。



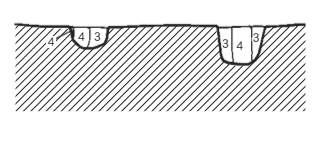
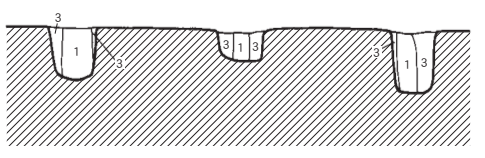
A 45.0m A'

B 45.0m B''



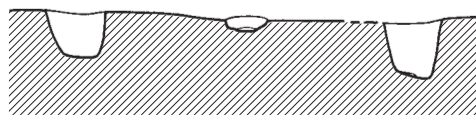
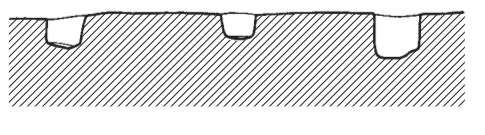
A 45.0m A'

B' 45.0m B''



C' 44.9m C''

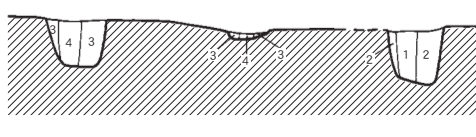
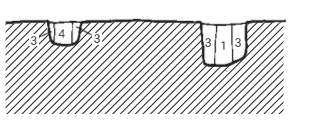
D 44.9m D'



C' 44.9m C''

D 44.9m D'

- 1 にぶい暗黒灰褐色土
しまりあり
- 2 にぶい暗灰褐色土
しまりあり
- 3 にぶい暗茶灰褐色土
基盤層の土に近い
- 4 にぶい暗灰褐色土
しまりなし、バサバサ
- 5 緑がかったにぶい暗灰褐色土

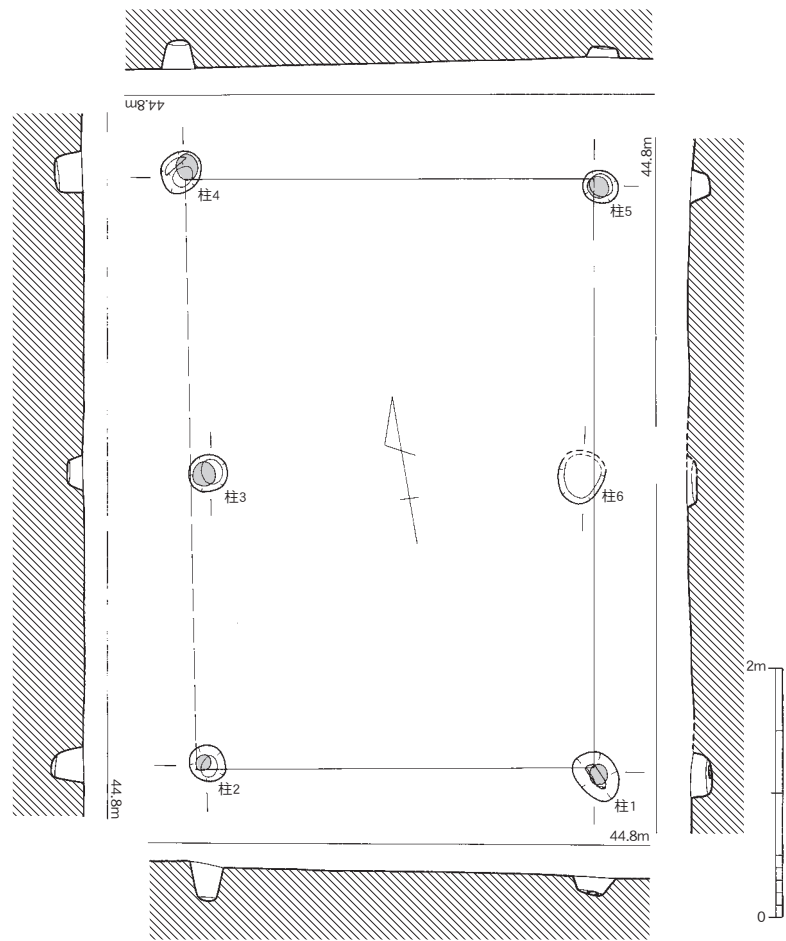


第77図 2区24号掘立柱建物跡実測図(1/80)

25号掘立柱建物跡(図版35、第78図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。1×2間の建物で、芯々で梁行333cm、桁行470cm。桁行の柱間は約240cmを測る。径30~35cm、深さ5~40cm前後の柱穴で、周囲の建物に比べるとやや浅い。柱痕は確認できなかったが、抜き取り穴がつくものはない。

出土遺物がなく時期を特定できないが、8世紀末から9世紀初頭の21号掘立柱建物跡柱10・11に切られるのでそれ以前である。主軸方向はN-9°0'-Eで、8世紀後半の24号掘立柱建物跡に近く、規模もほぼ等しいことから、建て替えの可能性が高く、柱穴が小さいことから24号掘立柱建物跡の建て替え前の建物と考えられる。23・24・26号掘立柱建物跡とは重複するが、柱穴は切り合わない。



第78図 2区25号掘立柱建物跡実測図(1/80)

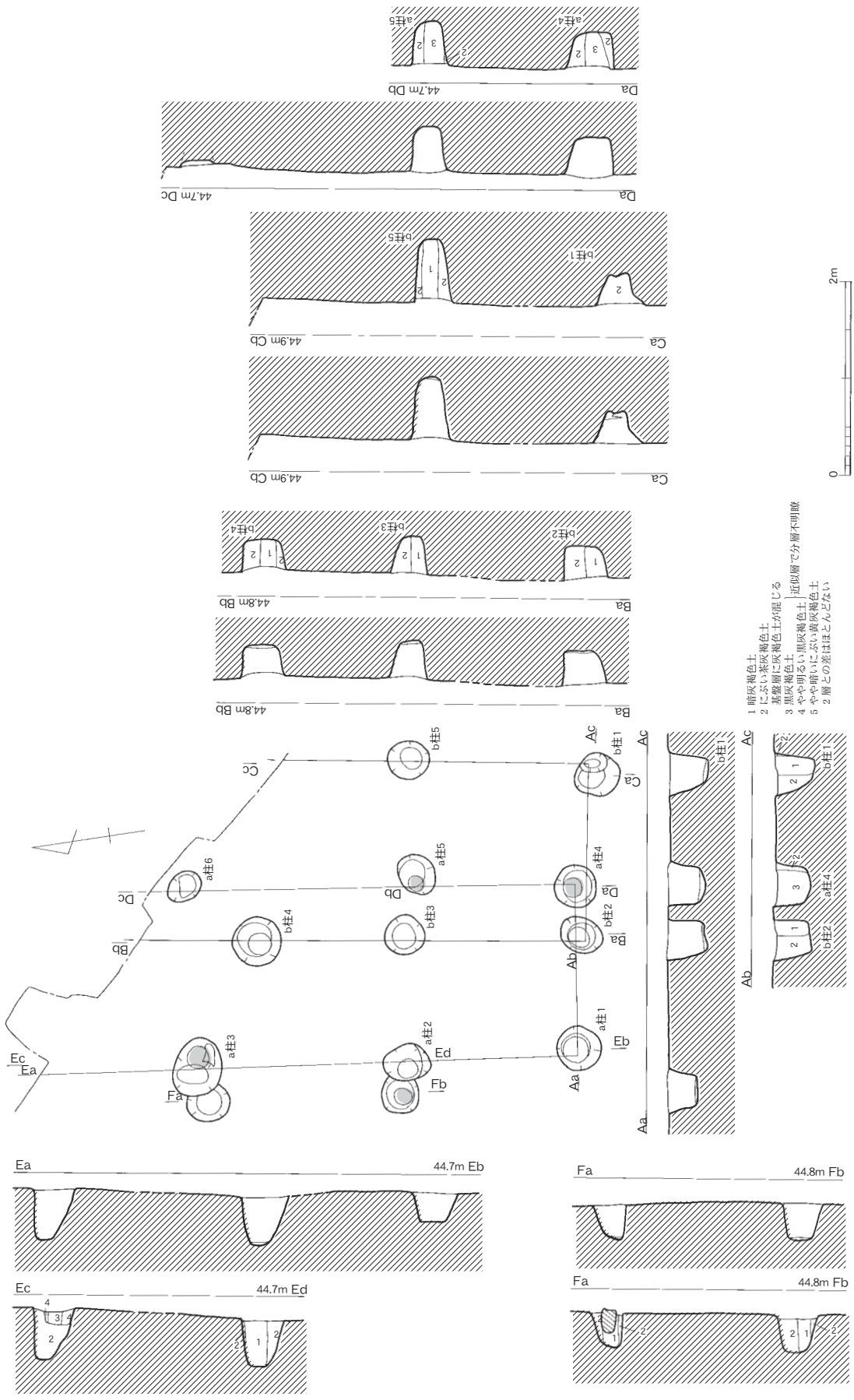
26a・b号掘立柱建物跡(図版35・37、第79図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。調査区外の延びる部分が多いことと、柱穴数が多いため、明確に検出されたものではない。26a号掘立柱建物跡の柱6は掘り足りない可能性をもつものの、浅いことから確実性に欠ける。26a・b号とも梁行が1間なので、桁行が調査区外に延びる可能性を残すため、両者とも1×2間あるいはそれ以上の建物となる。両者とも芯々で梁行150cm、26a号掘立柱建物跡は桁行570cm、26b号掘立柱建物跡は460cmまで検出された。径45cm前後で、深さ40cm前後の柱穴が多いが、柱6は浅く30cmほどしかなく、逆に柱7は深く63cmあるので、不均一である。柱間も160~220cmと幅があるので、確実性に欠ける。

両者の梁の長さがほぼ等しく、主軸方向も26a号掘立柱建物跡はN-7°20'-E、26b号はN-7°30'-Eとほぼ同じなので建て替えであろうが、26a号掘立柱建物跡は西側に庇がつくと想定した。

この庇については当初15号柵跡としていたが、26a号掘立柱建物跡と主軸方向が同じで、柱穴が近接していることから、西に張り出す庇と考えた。柱痕はほとんどの柱穴から確認された。柱4底面には柱根が接して変色した範囲がある。

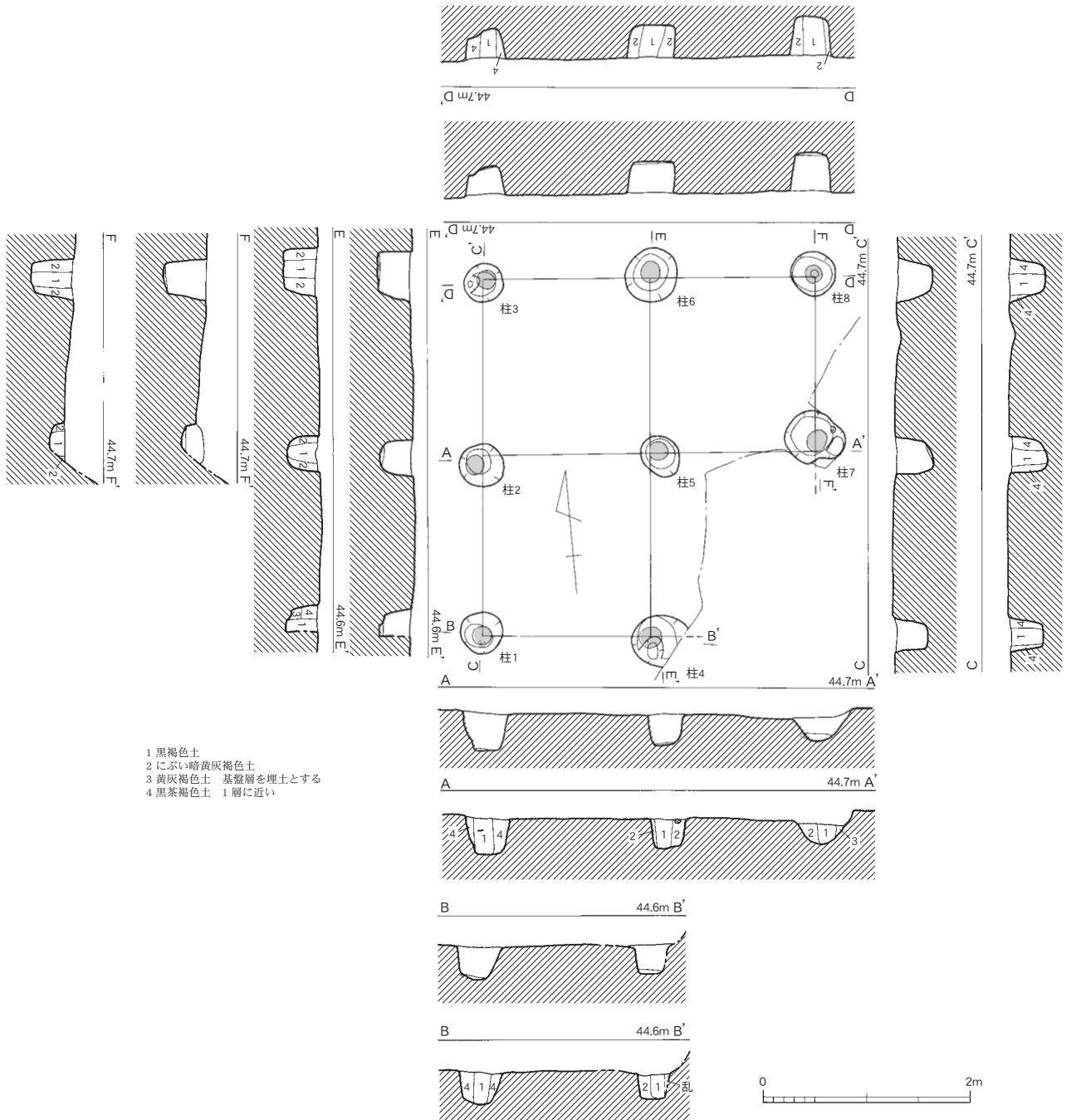
出土遺物がなく、時期を特定できない。20・25・31号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴は切り合わない。建て替えの幅が17a・b号掘立柱建物跡に近く、同時期の可能性がある。



第79図 2区26号a・b号掘立柱建物跡実測図(1/60)

27号掘立柱建物跡(図版36、第80図)

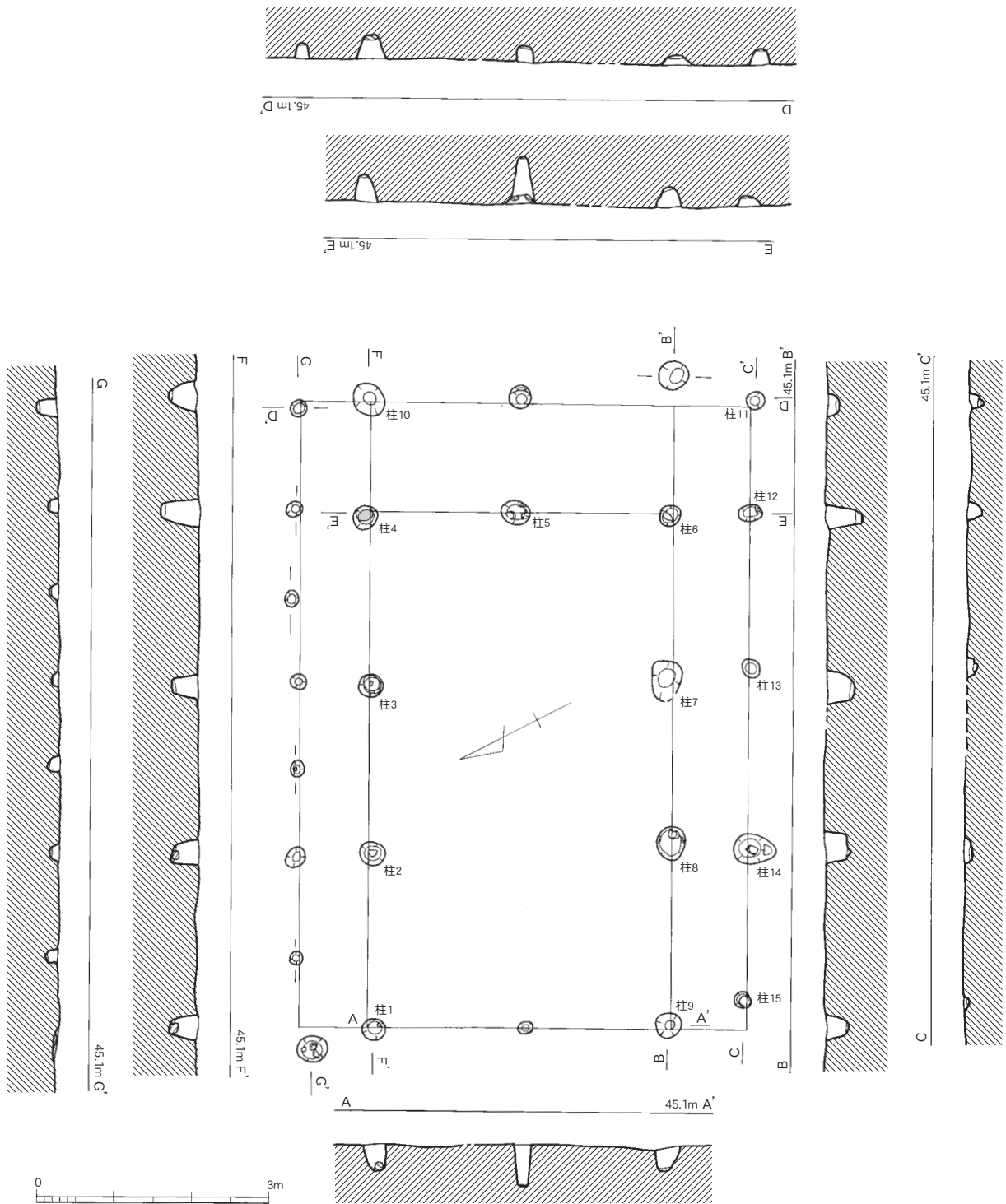
調査区東端部から検出された。2×2間の総柱建物で、柱の1つが調査区外の削平で失われている。芯々で梁行315cm、桁行350cm。柱間梁行155~170cm、桁行175cm。径38~60cm、深さ40cm前後の柱穴で、柱痕は残っていた。柱5・6は床面に柱根が接地していた部分の変色があり、柱1は基盤層内の石が露出していた。主軸方向はN-4°0'-Eで、2号掘立柱建物跡と一致する。出土遺物に8世紀後半の土師器杯もあるが、柱7の土師器小皿片から12世紀後半から13世紀代であろう。



第80図 2区27号掘立柱建物跡実測図(1/60)

出土遺物(第90図)

10・11は柱7出土の土師器小杯で、器面が摩滅しているので観察できない。12は柱9出土の土師器杯で外面胴下位はケズリ。黄橙色を呈する。



第81図 2区28号掘立柱建物跡実測図(1/80)

28号掘立柱建物跡(図版37、第81図)

調査区南東部の基盤層内に礫が集中する範囲から検出された。2×4間の建物で、南北2辺に庇がつく。芯々で梁行400cm、桁行655cm、柱間は桁行220cmを測る。

径28~43cm、深さ10~50cm前後のぼらつきのある柱穴で、北側の柱1と2の底面には敷石が残っていた。基盤層内に礫を多く含む範囲であることから、柱穴の壁面にも石が入っている。東端部は柱間が狭いことから、間仕切りと見られ、この間仕切りに区画された範囲は土間であろう。北側の庇は柵跡の可能性もあるが、南辺の庇との柱間がほぼ同じであることから庇とした。主軸方向はN-63°20'-Wであり、やや異なるが、位置関係から柵16・17はこの建物に付随する可能性が高い。

出土遺物の同安窯系青磁碗のモチーフは内面全体に劃花文が充填されたものなので、12世紀中葉であり、瓦器碗の年代はやや下がるのが考えられるので12世紀後半代であろう。

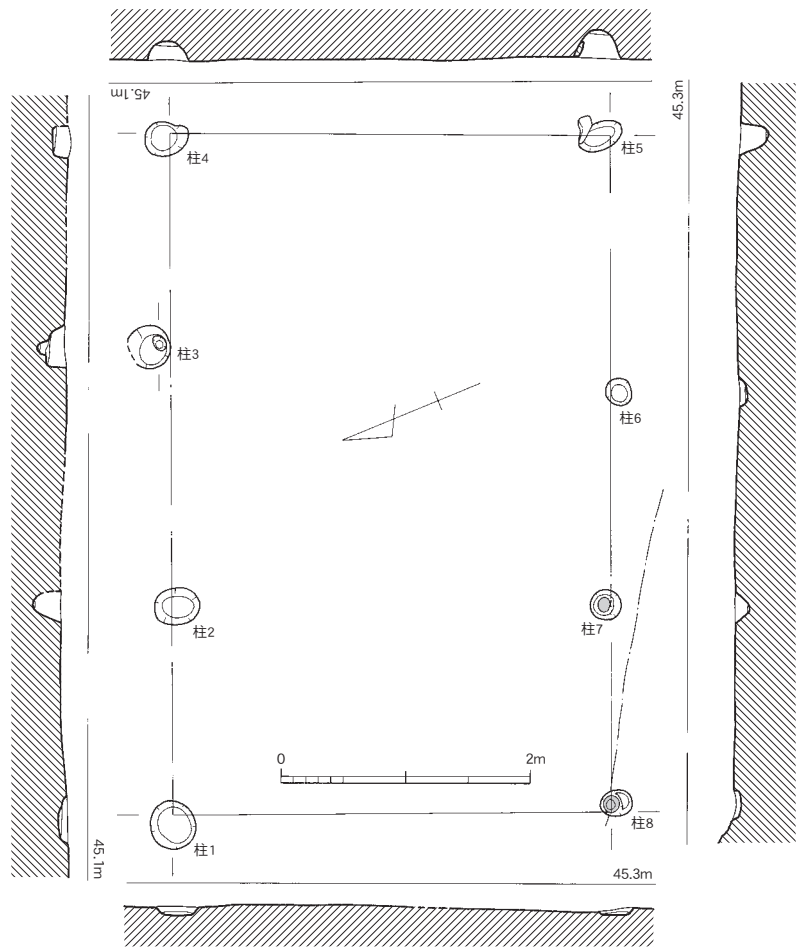
出土遺物(図版43、第90図)

14は28号掘立柱建物跡柱3出土で、摩滅しているものの糸切りと板状圧痕が残る。内外灰白色だが中央は黒色の胎土である。口縁部の一部に付く黒色は油膜だろうか。15・16は瓦器碗で、器面摩滅のため調整不明。15は柱6出土で外面が淡灰色、内面が灰白色を呈する。16は柱4出土で、内外灰白色を呈する。17は柱6出土の瓦器碗で、外面胴下位はオサエ、外底にはハケが見られる。18は柱4出土の同安窯系青磁碗で、内面には劃花文が施され、淡緑灰色を呈する。

29号掘立柱建物跡(図版37、第82図)

調査区南部の基盤層内に礫を多く含む地帯に立地する1×3間の建物で、芯々で梁行340cm、桁行505cm、柱間は桁行160~170cmでややぼらつきがある。柱穴は径25~40cmで、南辺の残りが悪く、柱径が小さいく、深さも北辺で25cmほど残っていたが、南辺では10cm前後であった。北辺の東延長上には同じ柱間をもつピットが2基あるが、南辺の柱穴が失われているため確実でない。

梁行の柱間が広いので、浅い小型の柱穴が存在した可能性はある。出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-67°0'-Wで、28号掘立柱建物跡に近く、同時期の可能性が高いが、3・4・30号掘立柱建物跡とも梁行長が近いので、4号掘立柱建物跡南



第82図 2区29号掘立柱建物跡実測図(1/80)

端で鋭角に屈曲する建物列の可能性もある。

30号掘立柱建物跡(図版37、第83図)

当初は、西辺を4号柵跡、東辺を13号柵跡の北部としていたが、4号柵とは柱穴の大きさが異なり、13号柵跡とは柱間が異なるので建物とした。1×3間以上の建物で、芯々で梁行145cm、桁行695cm以上で、柱間は桁行200~230cmを測る。柱穴は径40cm前後、深さ30~50cm前後。柱3・4の底面には柱根が接して変色した範囲が見られた。

主軸方向がN-1°30'-Eで、3号掘立柱建物跡と同一直線上にある。3号掘立柱建物跡との間には桁行の同一直上に柱穴が2基ずつあるが、柱間が揃わず、西側のものは極端に柱穴が小さいことから、1つの長大な建物ではなく、建物を結ぶ中間的な柱と考え、3号掘立柱建物跡とは別の建物と考えた。

出土遺物から9世紀前半であろう。

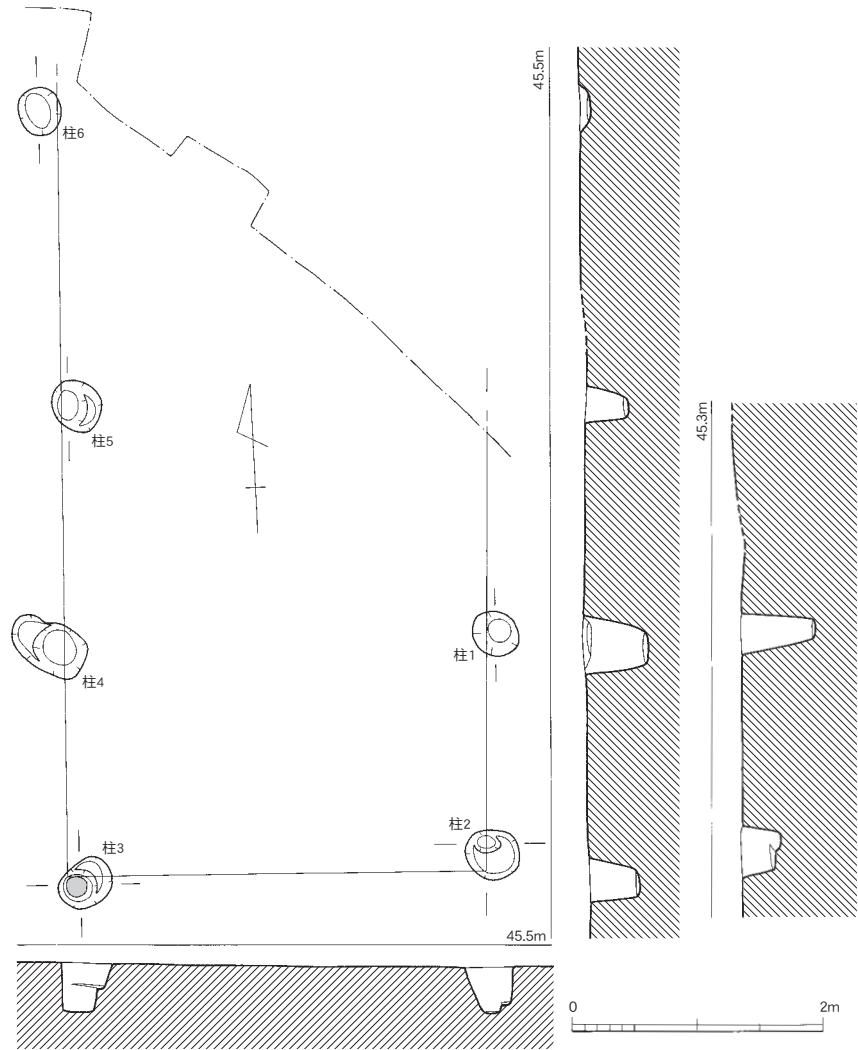
出土遺物(第90図)

19は柱4出土の杯で、底部が残っていないが、欠損部付近で屈曲していることから12と同じタイプと考えられる。20は柱5から出土した須恵器杯蓋のつまみ部である。

31号掘立柱建物跡(図版35、第84図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部から検出された。2×2間以上の建物で、芯々で梁行385cm、桁行510cm。径70cm前後、深さ60cm前後で、周囲の柱穴より大きい。柱5は確認できなかったが他の柱穴には柱痕が残っていた。柱5・6と切り合うピットは何らかの掘立柱建物跡の柱穴になる可能性があるが、この柱穴を用いて建物を復元できなかった。また、建物を構成しない柱穴が東西軸上にあるため、東に延びる可能性があるが、対応する柱穴が調査区外にあたるため根拠が弱く、柱穴の大きさが異なるので、ここでは梁行2間の建物として報告する。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、柱5は26号掘立柱建物跡柱7に切られ、20号掘立柱



第83図 2区30号掘立柱建物跡実測図(1/60)

建物跡・15号柵跡とも重複するが、柱穴は切り合わない。主軸方向はN-17°50'-Eであり、20号掘立柱建物跡と近く、柱の大きさや規模も近いことから建て替えであろう。9世紀後半から10世紀の可能性が高い。

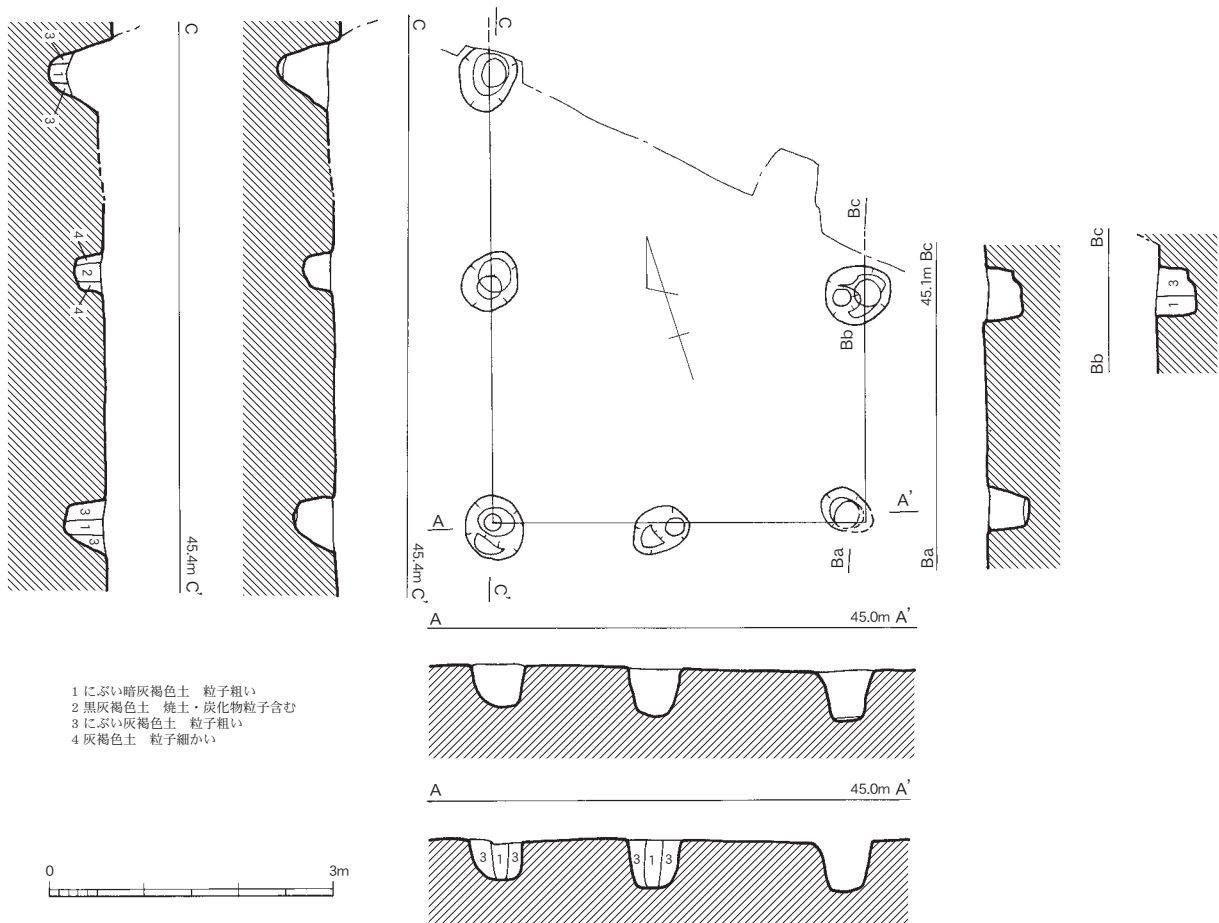
32号掘立柱建物跡(図版33、第85図)

調査区北西部から検出された。2×3間の建物で、芯々で梁行390cm、桁行740cm。柱間は梁行190~220cm、桁行220~280cmとばらつきがある。径30cm前後、深さ40cm前後の柱穴。柱痕の有無が確認できたのは柱6と9だったが、検出ができなかっただけで、抜き取り穴がないので存在していただろう。柱1は床面に敷いており、柱7は石を入れて敷石の高さを調節していた。柱8・9は床面に柱根の接地部分に変色がある。

出土遺物がなく時期を特定できないが、主軸方向はN-10°3'-Eで、14号掘立柱建物跡と一致するので9~10世紀であろう。柱3は11世紀代の1a号溝状遺構に切られていることも符合する。また、10号土坑を切る。

33号掘立柱建物跡(第61図)

調査区南西部から検出され、8号掘立柱建物跡の南に位置する。現代の水路とその前身である近世の溝に切れ、南西隅だけが検出されたため建物規模は不確実である。水路の北側に対応する柱がないことから、最大でも2×2間であろう。



第84図 2区31号掘立柱建物跡実測図(1/80)

梁行は2間として復元すると400cm、桁行2間とすると310cm。径35～50cm、深さ10～40cm前後の柱穴で柱痕は残りが悪いためほとんどみられなかった。

主軸方向はN-4°20'-Eで、8号掘立柱建物跡と一致するので、8号掘立柱建物跡に付随する可能性もある。出土遺物がなく、時期が特定できないが、8号掘立柱建物跡と主軸方向がほぼ同じなので、9～10世紀の可能性が高い。

② 柵跡

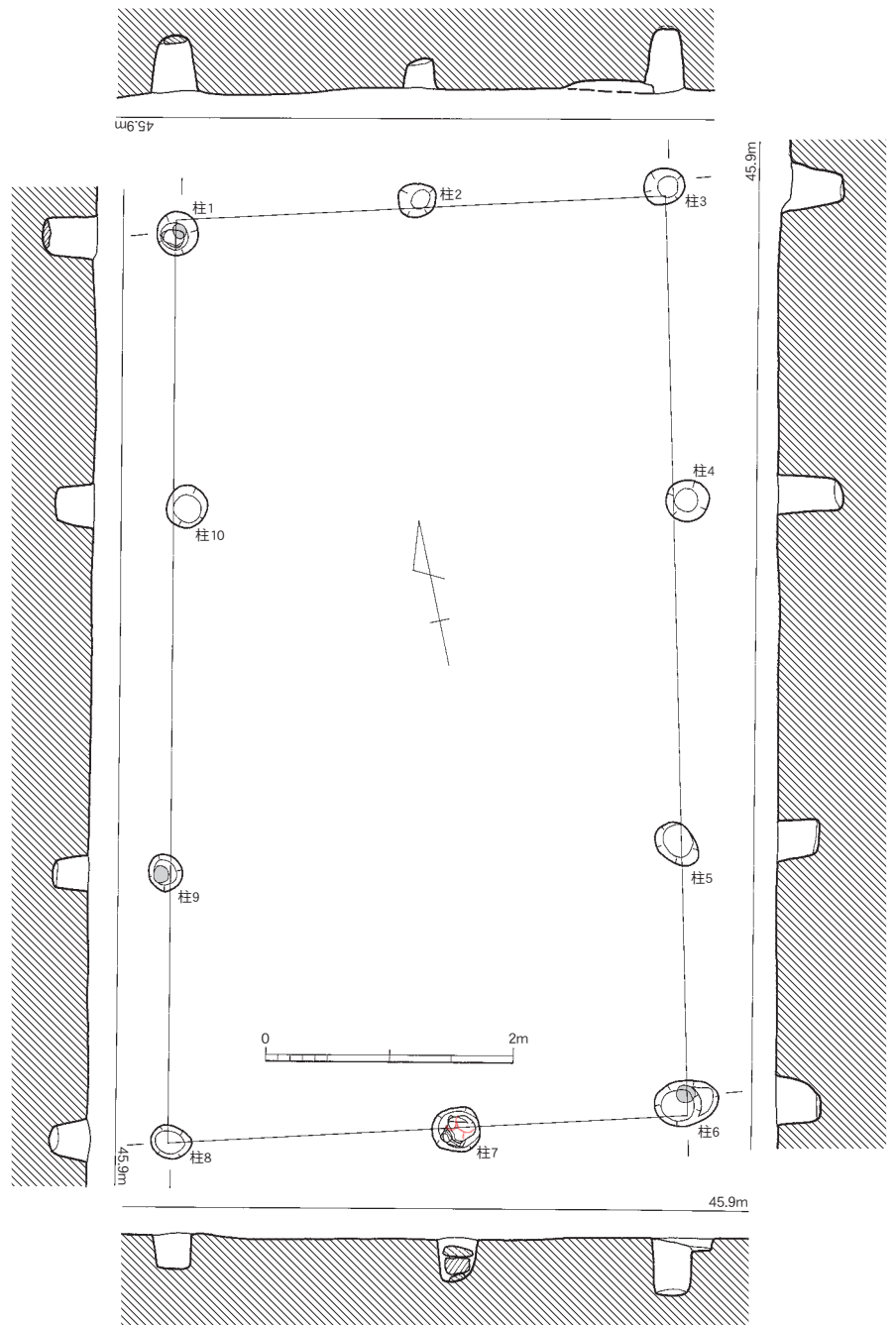
2脚のみの遺構を鳥居・門と想定しているものもあるが、遺構名は柵としている。

調査時に復元したものを整理時に再検討した結果、6・7・13・15・20号柵は欠番とし、23基検出された。2脚門の認定には慎重さが求められるが、掘立柱建物跡よりも太い柱が使われており、柱間も広い特徴がある。

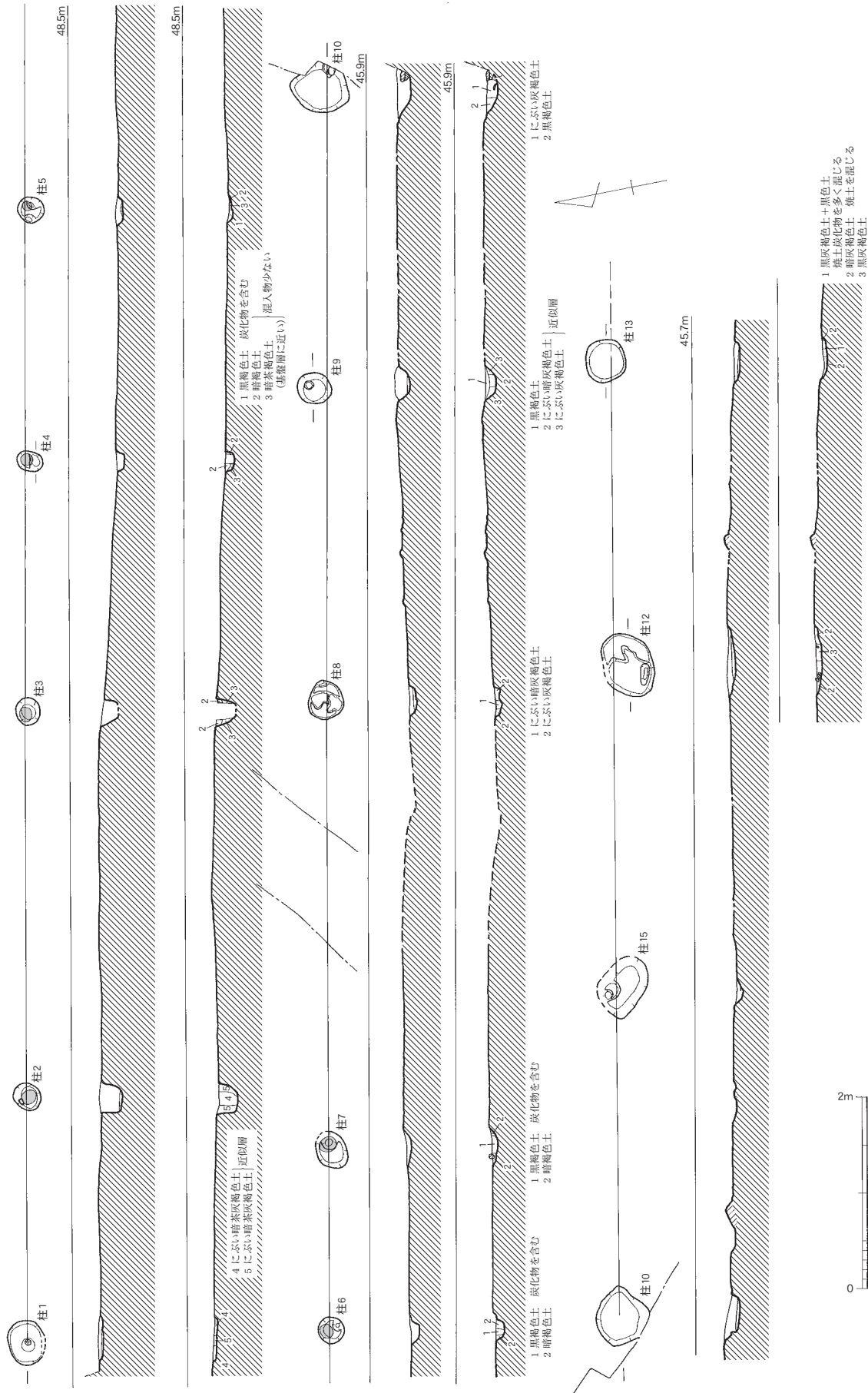
16号柵の下にも2基の規模の大きい柱穴が並ぶように見えるが、1基は攪乱穴だったので、2脚門として成立しない。

1号柵跡(図版38、第86図)

調査区中央部から検出された。南北はN-1°0'-Eを、東西はN-80°20'-Wを主軸方向としており、94°曲がっている。南北軸は柱14本で構成されており、北の調査区外にどの程度延びる不明である。南角である柱10を基点として南北に1,130cm以上、東西850cm以上を測る。柱間は不均一で、東西軸は650cm前後でまとまるが、南北軸は400～800cmとばらつきがあり、柱4・5、6・7



第85図 2区32号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第86図 2区1号柵跡実測図(1/60)

間が他より短い。柱間が長いことから、間に小さく浅い柱があったのが失われているのであろう。最東端の柱15の中央床面には平坦面をもつ礫が入っており、敷石であった可能性がある。

隅丸方形で1辺75～120cm、深さ25cm前後の大型の柱穴で、柱痕は残りが悪いためほとんどみられなかった。柱の深さは1号掘立柱建物跡に近い。

出土遺物がないため時期が特定できないが、主軸方向は1号掘立柱建物跡と一致しており、柱10の調査区壁に龍泉窯青磁片が見られたので、1号掘立柱建物跡と併存する可能性が高い。

2号柵跡(図版37、第87図)

調査区中央部北部から検出された。柱径は55・100cmと1号柵跡の柱穴と同規模で周囲のピットと隔絶した大きさで、主軸方向がN-34°0'-Eで、1号柵と一致することから、調査区外に延びる柵の柱2本と考えた。芯々で430cmを測る。柱1は床面に焼土が広がっており、埋土は炭化物を多く含む黒色なので、ほかにも多く検出している焼土坑の可能性もある。

出土遺物がなく時期不明だが、6・30号掘立柱建物跡と重複するので、それとは異なる時期であろう。

3号柵跡(図版30・39、第87図)

調査区中央部北部から検出された。2号掘立柱建物跡と主軸方向を合わせて東に隣接する。径55cm前後、深さ17・22cmの柱穴で掘立柱建物跡の柱穴と規模が近く、周囲のピットと隔絶した柱2本だけで構成されており、芯々で185cmを測る。柱痕は2基とも検出された。

出土遺物がなく時期不明だが、主軸方向がN-7°30'-Eで、3・30号掘立柱建物跡と一致し、2号掘立柱建物跡とはややずれているが、位置関係的には2号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。北の調査区外に延びる可能性もあるが、2号掘立柱建物跡に伴う鳥居と考えた。

4号柵跡(図版30・37、第56図)

調査区中央部北部から検出された。主軸方向はN-5°50'-Eで、30号掘立柱建物跡と一致しており、建物西辺の同一直線上の南に隣接する。柱径30cm前後、深さ10・30cmで掘立柱建物跡の柱穴より規模が小さい3基の柱穴で構成される。芯々で310cmあり、13号柵跡とは柱穴の規模が異なるので掘立柱建物を構成しないと考えた。

30号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡との柱間が広く、長大な1つの建物ではなく、両者を繋ぐ柱と考えられる。対面にあって同じように建物を繋ぐ機能の13号柵跡と柱穴の規模が異なるのは斜面のためではないだろうか。3・30号掘立柱建物跡は建物なので、その内部は平坦に造成されるはずだが、4・13号柵間は建物ではないので、造成する必要がなく、自然地形の斜面に同規模の柱穴が掘られた。その後、水平に削られたため、斜面の高い方であった4号柵跡の方が大きく削られて柱穴が小さくなったのである。

5号柵跡(図版31・32・38、第87図)

調査区中央部北部の7号掘立柱建物跡の東から検出された。芯々で375cmを測り、柱間180cm。柱径45～60cm、深さ25～30cmで周囲のピットと隔絶した柱3本で構成されている。主軸方向は7号掘立柱建物跡と主軸方向を合わせて東に隣接する。柱痕は、柱2については検出前に掘削してしまったが、残りの2基からは検出された。主軸方向はN-0°30'-Wで、9号掘立柱建物跡と一致

する。9号掘立柱建物跡は7号掘立柱建物跡と連結する建物であるが、柱筋が揃わないので、7・9号掘立柱建物跡から派生する底ではない。むしろ、7・9号掘立柱建物跡の連結部分に位置していることから、連結部を隠した目隠し扉であろう。

出土遺物から10世紀代と想定され、7号掘立柱建物跡を増築した9号掘立柱建物跡の設置時のものとすれば、9～10世紀段階の建物群の新しい段階のものと解釈できる。

出土遺物(第90図)

21は柱1から出土した土師器碗で、高台と胴部の間に抉り状のナデが入る。

9a・b号柵跡(第87図)

調査区中央部南部の11号掘立柱建物跡の南から検出された。9a号は芯々で260cm、柱径20cm前後、深さ15cm前後で、9b号は芯々で380cm、柱径30～38cm、深さ10・14cmで、交差しているが組み合わせは柱の大きさで判別した。双方とも周囲のピットと隔絶した柱2本で構成されている。

主軸方向は9a号はN-78°20'-Wで11号掘立柱建物跡の主軸方向と直交しており、11号掘立柱建物跡に付随する可能性が高いものの、突出する底にしては離れすぎているので門の可能性もある。9b号はN-87°20'-Wで、8号掘立柱建物跡と一致するので、8号掘立柱建物跡内の柱の可能性もある。双方とも出土遺物がなく時期を特定できない。

10号柵跡(図版38、第87図)

調査区中央部南部の11号掘立柱建物跡の南から検出された。芯々で540cm、柱径90cm前後、深さ45～50cmで周囲のピットと隔絶した柱2本で構成されている。主軸方向はN-0°30'-Eで、1号掘立柱建物跡の主軸方向と直交しており、1号掘立柱建物跡・1号柵跡に付随する可能性が高い。柱間と柱穴の大きさ、主軸方向が11号柵跡と一致しており、建物を構成するとは考えにくいので、柱痕径で柱径は35cmほどあり、掘立柱建物跡の柱穴よりも大きいので、鳥居跡と考えた。柱痕部分の埋土には炭化物や焼土塊が入っており、焼失した可能性が高い。

出土遺物がなく時期を特定できないが、11号柵跡と同時期ならば13世紀代で、9～10世紀の8・11号掘立柱建物跡や9号柵跡とは重複する。

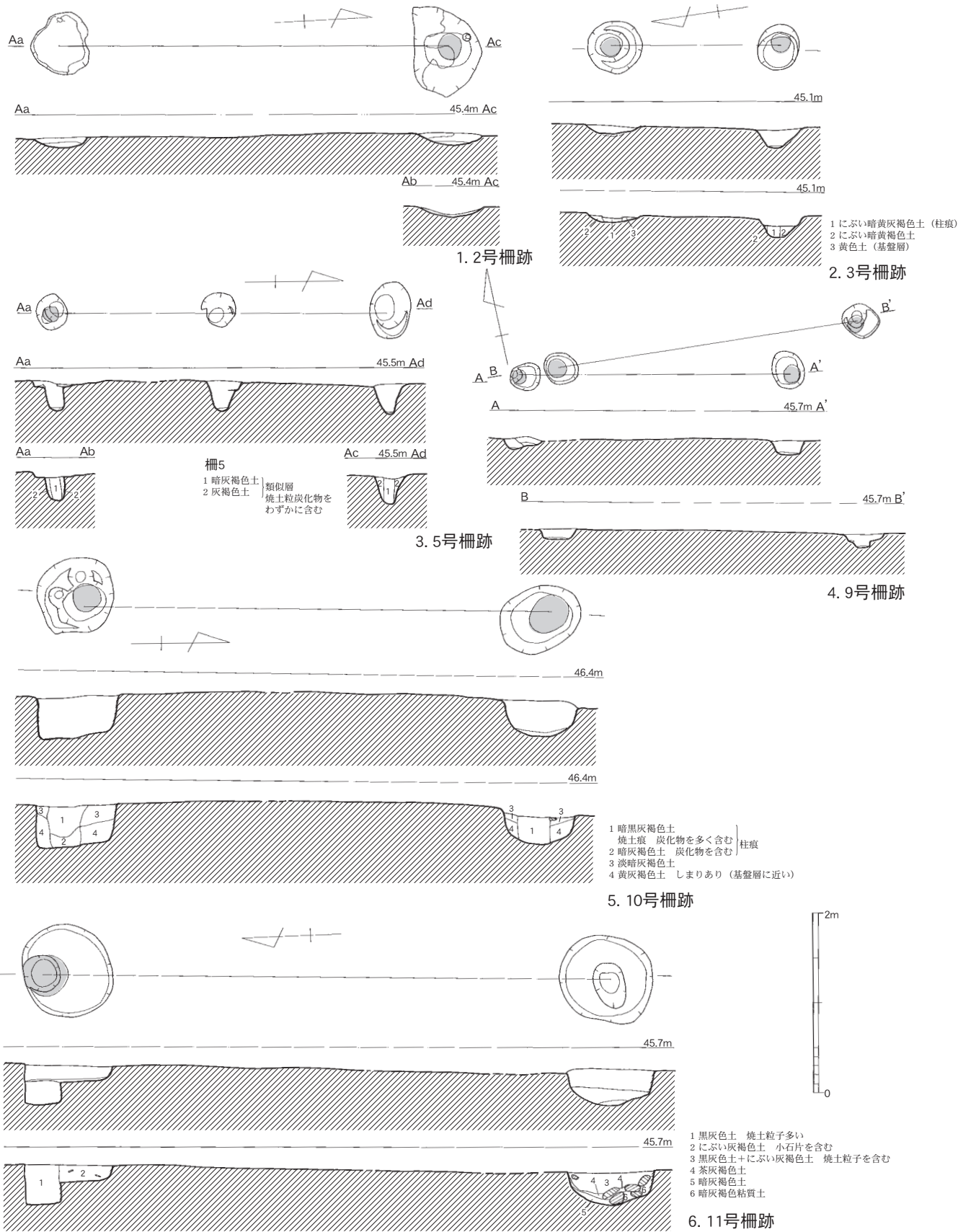
11号柵跡(図版38、第87図)

調査区南西部の14号掘立柱建物跡の南から検出された。芯々で640cm、柱径105cm、深さ45～50cmで周囲のピットと隔絶した柱2本で構成されている。柱1は片側に寄せて柱根を深く掘り込んでおり、柱2は柱根を抜き取られており、抜き取り穴で崩されているが、根締石が入っていた。主軸方向は1号掘立柱建物跡の主軸方向と直交しており、1号掘立柱建物跡・1号柵跡に付随する可能性が高い。柱間と柱穴の大きさ、主軸方向がN-2°40'-Eで、10号柵跡と一致しており、柱痕径で柱径は38cmほどあり、掘立柱建物跡の柱穴よりも大きいので、特殊な遺構である。建物を構成するとは考えにくいので、鳥居跡と考えた。

出土遺物の龍泉窯系の花文をもつ青磁碗から13世紀代の可能性が高い。

出土遺物(第87図)

22は柱1出土の土師器の小型碗か杯で、口縁部は外反する。内外にぶい暗橙褐色を呈する。23は柱1出土の土師器小皿で、欠損部の器壁が薄いことから器高が低い皿であろう。外底は摩滅のため調整不明。内外黄橙色を呈する。24は柱2出土の龍泉窯系青磁碗で、内面には片切彫りによる花



第87図 2区2・3・5・9～11号柵跡実測図(1/60)

文と櫛書文が施され、淡緑灰色を呈する。

12号柵跡(図版32、第88図)

調査区西端部の18号掘立柱建物跡の西から検出された。芯々で998cm測り、柱径30cm前後、深さ25cmで、周囲にピットが少ないので明瞭に検出された。南端の柱穴は現代水路の掘形に切られてほとんど失われており、水路以南からは検出できなかった。北端は17号掘立柱建物跡の南まで検出されたが、それ以北については同一軸線上の柱穴の配置を検討したが、北西端の調査区を拡張しても柱穴が続かなかったことから、柱5本までとした。

主軸方向はN-2°40'-Eで18号掘立柱建物跡とはややずれるが、12号柵跡の長さが18号掘立柱建物跡の桁行に合わせた長さであることから、9世紀前半の18号掘立柱建物跡に付随する柵と考えた。出土遺物がなく、時期は特定できない。

13号柵跡(図版30・37、第56図)

調査区中央部北部から検出された。主軸方向はN-5°30'-Eで、3・30号掘立柱建物跡とほぼ一致しており、建物東辺の南に隣接する。柱径45~55、深さ40cmで掘立柱建物跡の柱穴と規模が等しい3基の柱穴で構成されており、芯々で335cmを測る。

3・30号掘立柱建物跡とは柱間も柱穴の規模も主軸方向も等しいが、4号柵跡とは異なるので掘立柱建物を構成せず、一連の長大な建物でもなく、30号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡を繋ぐ柱と考えた。

14号柵跡(図版38、第88図)

調査区中央南部の29号掘立柱建物跡の南から検出された。柱径85・95cm、深さ37・48cmで周囲のピットと隔絶した柱2本で構成されている。芯々で220cmを測る。柱1は片側に寄せて柱根を深く掘り込んでおり、柱2は柱1とは反対側に寄せており、基盤層内の礫を根締石代わりにしていた。主軸方向は1号掘立柱建物跡の主軸方向と直交しており、1号掘立柱建物跡・1号柵跡に付随する可能性が高い。

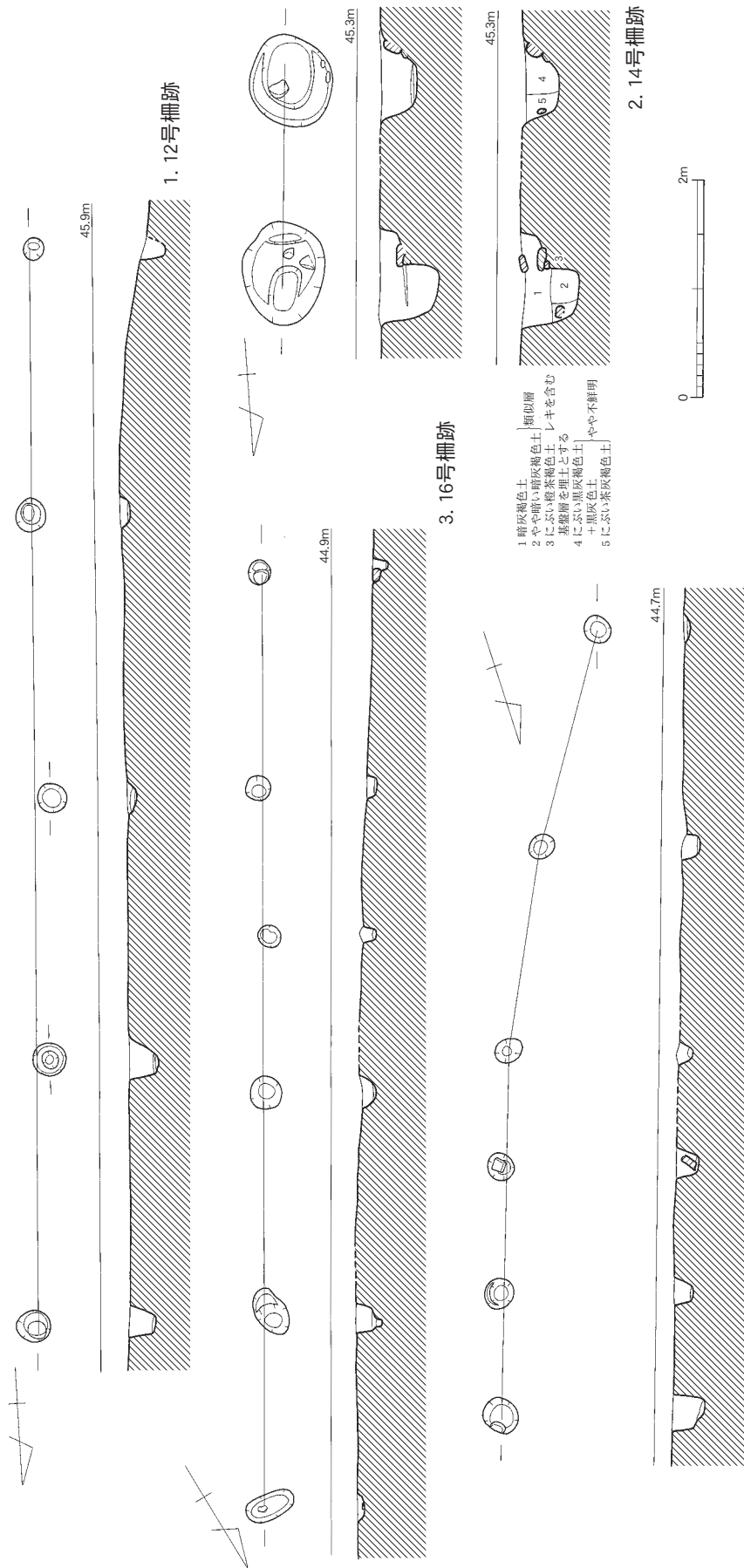
柱間と柱穴の大きさ、主軸方向がN-6°0'-Eで、10号柵跡と一致しており、柱痕径で柱径は35cmほどあり、柱間の規模は3号柵跡に近い。掘立柱建物跡の柱穴よりも大きいので、特殊な遺構であり、建物を構成するとは考えにくいので、鳥居跡と考えた。削平のため失われた建物の前面に位置していたのではないだろうか。

出土遺物や切り合い関係のある遺構がないため時期が特定できないが、主軸方向から1号掘立柱建物跡と同時期の可能性が高い。

16号柵跡(図版37、第88図)

調査区東部の28号掘立柱建物跡の南から検出された。柱径20~45cm、深さ10cm前後の6基の柱穴で構成され、周囲の柱穴と同規模だが直線的に並ぶことから検出できた。柱間80~130cmとばらつきがあり、芯々で920cmを測る。軸線上の柱穴も建て替えに使用した可能性がある。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-59°10'-Wで、28号掘立柱建物跡の主軸方向とはずれているが、位置関係的に28号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。21号柵跡とは一致しており、21号柵跡は28号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくする22号柵跡の建て替えであ



1. 12号柵跡

3. 16号柵跡

2. 14号柵跡

4. 17号柵跡

- 1 暗灰褐色土
 - 2 やや暗い暗灰褐色土
 - 3 に近い橙茶褐色土
 - 4 に近い黒灰褐色土
 - 5 に近い茶灰褐色土
- 類似層
レキを含む
基礎層を埋土とする
やや不鮮明

第88図 2区12・14・16・17号柵跡実測図(1/60)

ることから、21号柵跡が建て替えられた時に、作られたものではないだろうか。17号柵跡は湾曲しており、南端部は16号柵跡に垂直に接することから、共存していたと考えられる。

17号柵跡(図版37、第88図)

調査区東部の28号掘立柱建物跡の東から検出された。柱径25～35cm、深さ10～35cm前後で周囲の柱穴と同規模だがほぼ直線的に並ぶことから検出できた。6基の柱穴で構成されているが、軸線は途中で角度が変えながら芯々で700cmを測る。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-17°20'-EからN-32°0'-Eで、北半は28号掘立柱建物跡の主軸方向と一致しており28号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い、南端部は16号柵跡に垂直に接することから、共存していたと考えられる。

18号柵跡(図版30・39、第89図)

調査区中央部の1号掘立柱建物跡の南から検出された。柱径25～30cm、深さ20～30cmで周囲の柱穴と同規模だがほぼ直線的に並ぶことから検出できた。7基の柱穴で構成されており、芯々で480cmを測る。

出土遺物がなく、時期を特定できない。主軸方向はN-83°20'-Wで異なるが、19号柵跡の建て替えと考えられ、19号柵跡は1号掘立柱建物跡に付随することから、1号掘立柱建物跡と共存していたと考えられる。

19号柵跡(図版30、第89図)

調査区中央部の1号掘立柱建物跡の南から検出された。柱径約25cm、深さ約20cmで周囲の柱穴と同規模だがほぼ直線的に並ぶことから検出できた。7基の柱穴で構成されており、芯々で800cmを測る。

出土遺物がなく、時期を特定できない。主軸方向がN-87°40'-Wで、1号掘立柱建物跡に一致することから、1号掘立柱建物跡の目隠し塀と考えられる。

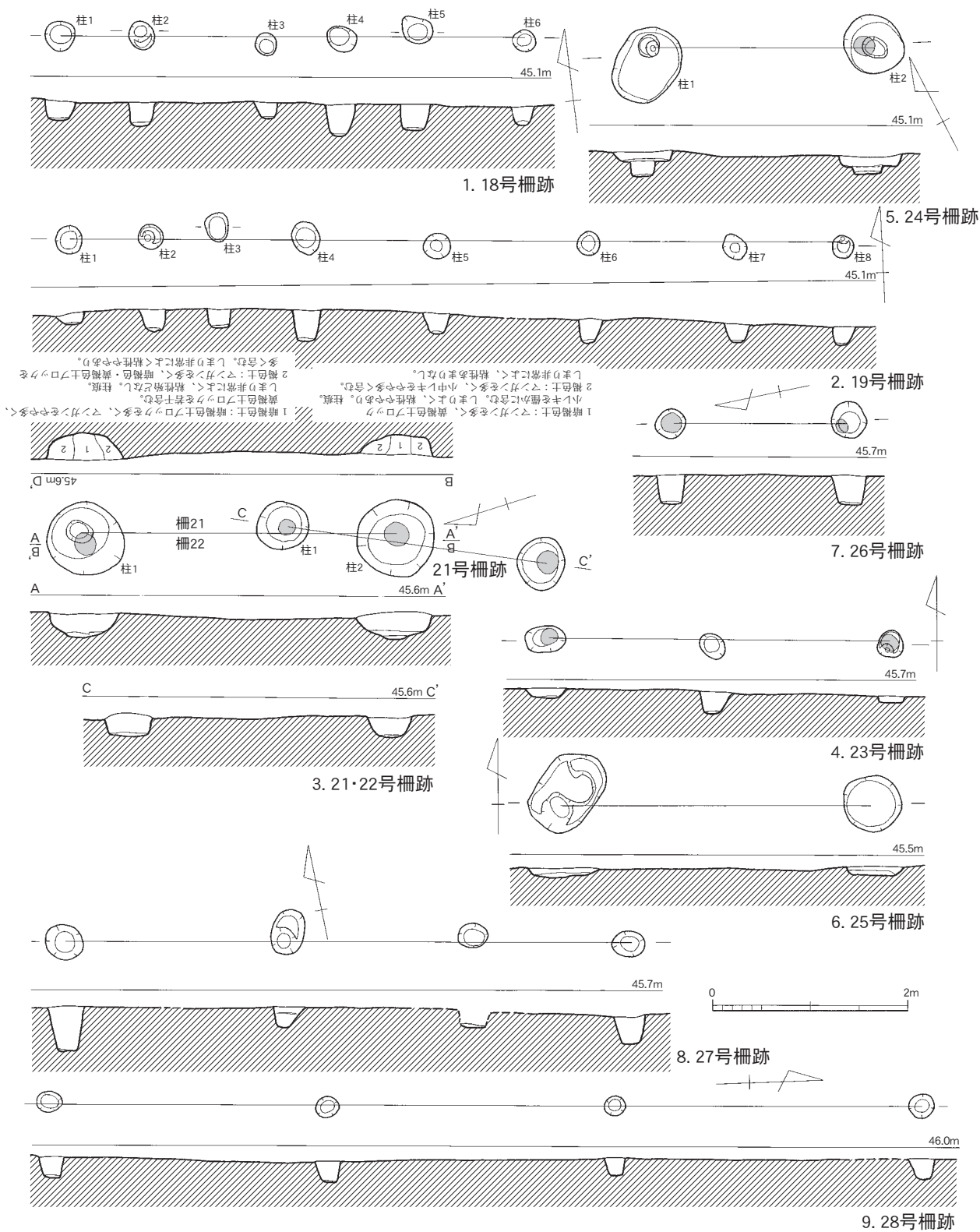
21号柵跡(図版36・39、第89図)

調査区東部の28号掘立柱建物跡の東から検出された。柱径55cm、深さ110・250cmで周囲の柱穴と隔絶した規模であることから検出できた。芯々で270cmを測り、22号柵跡も同様な柱穴だが、大きさが異なることから判別できた。柱痕から径15～20cmほどの柱で、掘立柱建物跡の柱より太い特殊な遺構なので、鳥居の可能性はある。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-26°30'-Eで、28号掘立柱建物跡と一致しており、21号柵跡に付随する可能性が高い。また、前後関係はわからないが、重複する22号柵跡は建て替えと考えられる。

22号柵跡(図版36・39、第89図)

調査区東部の28号掘立柱建物跡の東から検出された2基で構成される。柱径80cm、深さ20・27cmで周囲の柱穴と隔絶した規模であることから検出できた。芯々で330cmを測り、21号柵跡も同様な柱穴だが、大きさが異なることから判別できた。柱痕から径20cmほどの柱で、掘立柱建物跡の柱より太い特殊な遺構なので、鳥居の可能性はある。



第89図 2区18・19・21～28号柵跡実測図(1/60)

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向がN-18° 30'-Eで、28号掘立柱建物跡と一致しており、28号掘立柱建物跡に付随する可能性が高い。また、前後関係はわからないが、重複する21号柵跡は建て替えと考えられる。

23号柵跡(図版33・39、第89図)

調査区中央西部の12号掘立柱建物跡の南から検出された。芯々で350cmを測り、径30~40cm前後、深さ25cm程で周囲のピットとよりやや大きい柱3本で構成されている。付随する掘立柱建物跡が存在しないので確実性に欠ける。また、出土遺物がなく時期を特定できず、機能不明の柵跡である。主軸方向はN-89° 40'-Eである。

24号柵跡(図版39、第89図)

調査区中央部の1号掘立柱建物跡の南から検出された2基で構成される。芯々で220cmを測り、柱径60・80cm、深さ20~30cmで周囲の柱穴と隔絶した規模であることから検出できた。柱痕は検出できなかったが、床面から柱部分だけさらに深く掘り込んでいることから、径20cmほどの柱であったようだ。掘立柱建物跡の柱より太い特殊な遺構なので、鳥居の可能性もある。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-63° 0'-Eで、29号掘立柱建物跡と一致することから、共存していた可能性が高い。

25号柵跡(第89図)

調査区南東部の段落ち部から検出された2基で構成される。芯々で165cmを測り、柱径60・88cm、深さ13cm前後で残りが悪いものの、周囲の柱穴と隔絶した規模であることから検出できた。柱痕は検出できなかったが、床面から柱部分だけさらに深く掘り込んでいる部分から、径20cmほどの柱根とわかる。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向はN-89° 20'-Eで、9号掘立柱建物跡の南に軸を同じくすることから、9号建物の南辺の庇の可能性もある。

26号柵跡(図版35、第89図)

調査区北東部の掘立柱建物跡の集中部で、24号掘立柱建物跡の東辺中央部に検出された2基で構成される。芯々で175cmを測り、柱径30・35cm、深さ25・30cmで、隔絶する規模ではないが、周囲に同規模の柱がほかに存在しないことと、主軸方向がN-12° 60'-Eで、24号掘立柱建物跡東辺の中央に併走することから、24号掘立柱建物跡に付随するものと考えられる。2本柱なので柵よりも門か小型の鳥居と考えた。

27号柵跡(図版35、第89図)

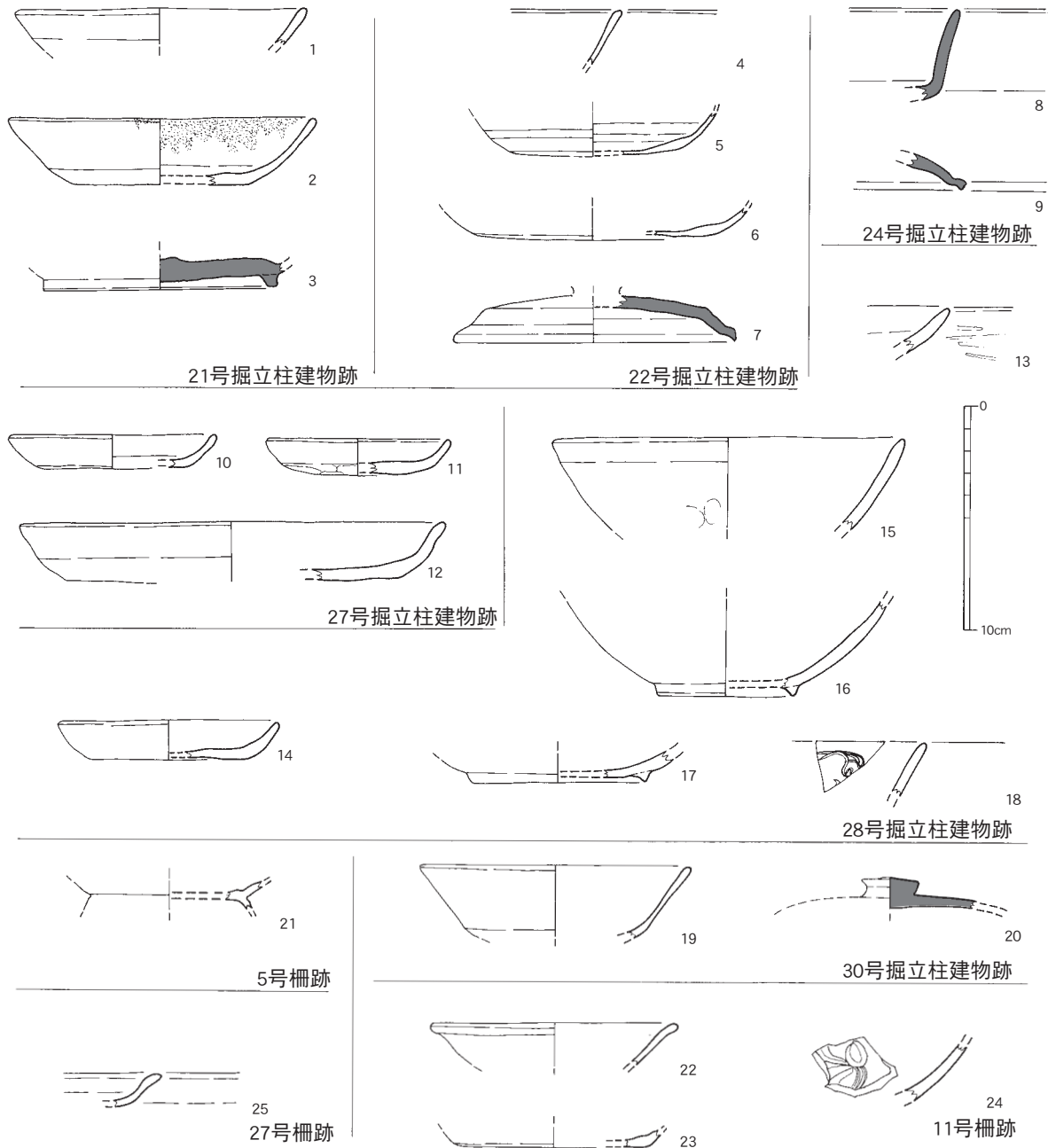
調査区北東部の掘立柱建物跡の集中部で、24号掘立柱建物跡の北に検出された。4基の柱穴で構成され、芯々で580cmを測り、柱径40~50cmで他の掘立柱建物跡の柱穴に近く、深さ15~50cmとばらつきがあるので、確実性にかける。主軸方向はN-77° 30'-Wで、24号掘立柱建物跡に近いが、近接しすぎることから、25号掘立柱建物跡に伴うと見られる。出土遺物から8世紀後半。

出土遺物(第90図)

25は柱1出土の土師器皿で、胴部と底部との接合部が丸みを帯びている。

28号柵跡(図版39、第89図)

調査区中央北部の1号掘立柱建物跡の西で検出された。4基の柱穴で構成され、芯々で900cmを測る。柱径35cm前後で、柱間は280~325cm他の掘立柱建物跡の柱穴に近く、深さ20cm前後である。出土遺物がなく時期が特定できないが、主軸方向はN-2°30'-Eで、1号掘立柱建物跡と一致し、1号掘立柱建物跡の西辺に沿う長さであることから、1号掘立柱建物跡に伴うと見られる。



第90図 2区21・22・24・27・28・30号掘立柱建物跡、5・11・27号柵跡出土土器・陶磁器実測図(1/3)

③土坑

小型でも焼土や炭化物を含むものも土坑として取り扱っている。9号土坑は欠番となったために、土坑は14基検出された。

1号土坑(図版40、第91図)

調査区中央部の1号掘立柱建物跡の南から検出された平面楕円形の土坑で、南端部を攪乱穴に、中央部を別のピットに切られていた。長軸102、短軸67cm、深さ17cmで、埋土に炭化物を多く含んでおり、床面はほぼ全面焼けていた。

出土遺物は図化できないが、底部と胴部の間に丸みがある土師器杯片があるので、9世紀代だろうか。

2号土坑(図版41、第91図)

調査区中央部の1号掘立柱建物跡の南から検出された平面方形の土坑で、長軸110cm、短軸103cm、深さ14cm、床面から焼土が検出された。

出土遺物がなく、時期を特定できないが、主軸方向が1号掘立柱建物跡と一致し、1号掘立柱建物跡南辺のほぼ中央部に位置することから、1号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。

3号土坑(図版41、第91図)

調査区東部の21号掘立柱建物跡中央部から検出された、平面楕円形の土坑で、長軸199、短軸136cm、深さ7cmと浅く、床面はほぼ扁平である。埋土は黒色土で焼土はない。出土遺物の瓦器碗から12世紀後半代だろう。

出土遺物(第92図)

1は瓦器碗で、外底に板状圧痕あり。外面はオサエ痕が残るが、器面調整は摩滅のため不明。内外灰白色を呈する。

4号土坑(図版41、第91図)

調査区中央部北部から検出された平面不整形の土坑で、長軸127cm、短軸72cm、深さ7cmと浅く、床面はほぼ扁平である。2号掘立柱建物跡の南東に隣接し、柱7との切り合い関係は不明確だが、2号掘立柱建物跡とは共存しえない。

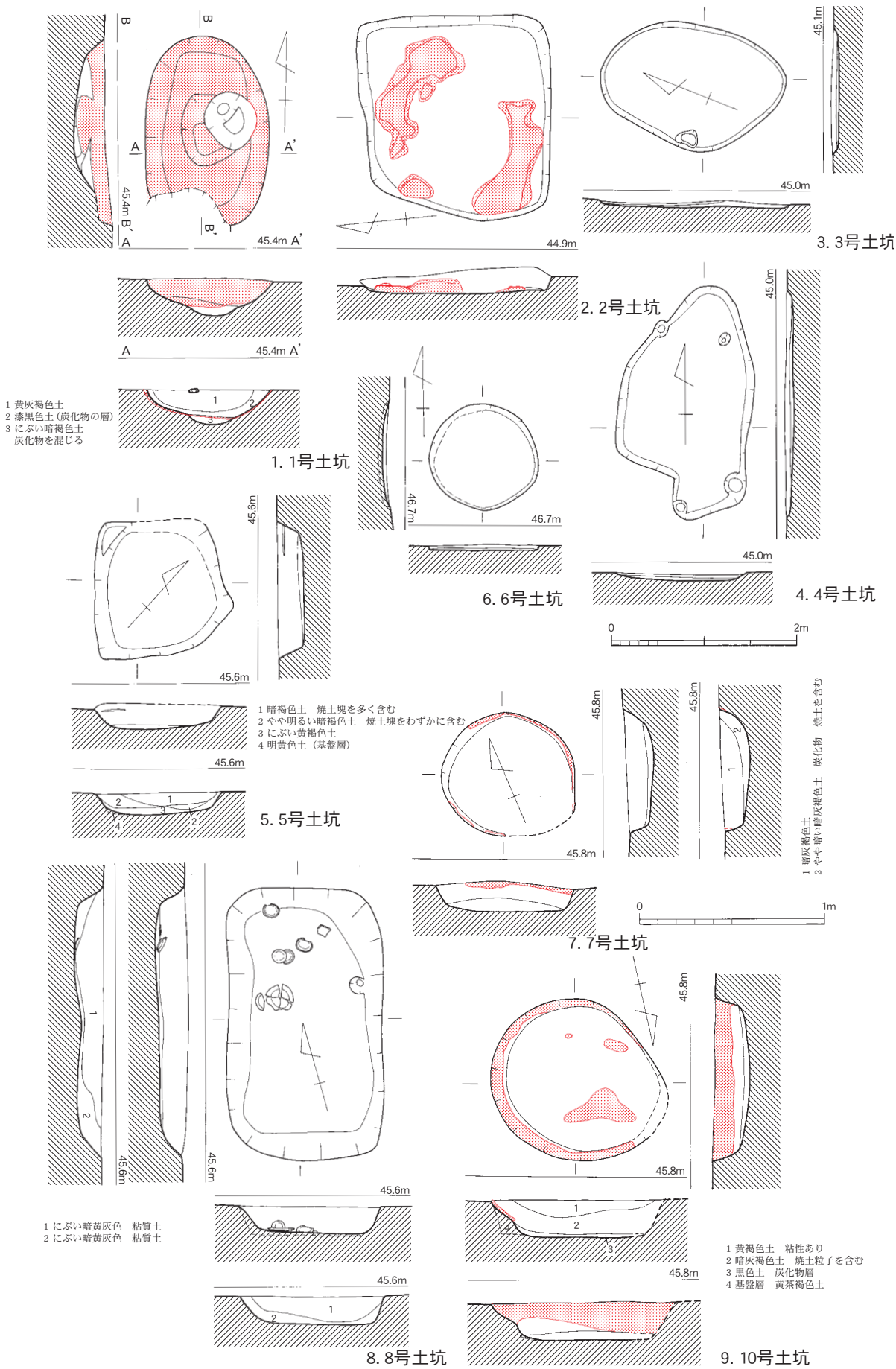
出土遺物は図化できないが、糸切りらしい底部の土師器小皿の小片があるので10世紀代以降だろう。

5号土坑(図版32、第91図)

調査区中央部の7号掘立柱建物跡の東から検出された平面方形の土坑で、長軸150cm、短軸148cm、深さ25cm、床面からは焼土が検出されていないが、埋土上位には焼土塊が入っていた。

主軸方向がN-42°20'-Wで、一致する掘立柱建物跡がない。出土遺物は土師器のピット17出土の鉢(第95図6・7)に類似する鉢の口縁部と図化できないが黒色土器片があることと、9～10世紀の7号掘立柱建物跡の柱4に切られるので、9世紀前半のものだろう。

出土遺物(第92図)



第91図 2区1~8・10号土坑実測図(3・4は1/60、他は1/30)

2は土師器小型甕で、反転復元できない小片だが20cmほどであろう。内外ナデで、黄白色を呈する。

6号土坑(図版40、第91図)

調査区西部の18号掘立柱建物跡東部から検出された、平面円形の土坑で、径57cm、深さ3cmと浅く、床面はほぼ扁平である。床面は焼けていないが炭化物を多く含む。出土遺物は図化できないが、瓦器碗片があるので12～13世紀代だろう。

7号土坑(図版41、第91図)

調査区北西部の15号掘立柱建物跡の南から検出された平面略円形の土坑で、径72cm、深さ18cm、床面は焼けていないが、壁上半が焼けていた。出土遺物がなく、時期を特定できないが、7号掘立柱建物跡南辺のほぼ中央部に位置することから、7号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。

8号土坑(図版41、第91図)

調査区西部の14号掘立柱建物跡の内部から検出された平面長方形の土坑である。長軸147、短軸82cm、深さ20cmで、箱棺の板痕や板を敷いた痕跡はなく、完形の土師器小皿が床面北部にまとまって出土しているので土塚墓と考えられる。壁際に青磁碗片などの破片も入るが、埋め戻し土内に混入したものだろうか。主軸方向はN-14°40'-Eで、12・13号掘立柱建物跡と一致する。出土遺物の同安窯系青磁碗が無文だが、口縁部の傾きの小さいことから12世紀後半代であろう。

出土遺物(図版43、第92図)

3～6は土師器小皿でいずれもほぼ同じ法量で、糸切り痕と板状圧痕が見られ、外底の端部に指先大の窪みがある。この窪みは糸切り痕の同心円の最も広い部分に位置していることから、糸を通す際に指で底を持ち上げた痕跡の可能性が高く、製作者の癖であろう。黄白色から黄灰白色で変色はない。7は土師器皿で、器面摩滅が著しいが、底面には板状圧痕と糸切り痕が残る。内外橙～橙白色で変色なし。8は同安窯系青磁碗で、内面には文様が見られないが、小片であることから文様のない部分であろう。淡緑灰色を呈する。

10号土坑(図版41、第91図)

調査区北西部の32号掘立柱建物跡の北東隅から検出された平面略円形の土坑である。長軸95、短軸82cm、深さ20cmで、床面の一部と壁上半が焼けていた。

出土遺物がなく時期を特定できないが、9～10世紀と考えられる32号掘立柱建物跡柱3に切られているので、それより古い段階で近接する15号掘立柱建物跡に付随する可能性がある。

11号土坑(図版41、第93図)

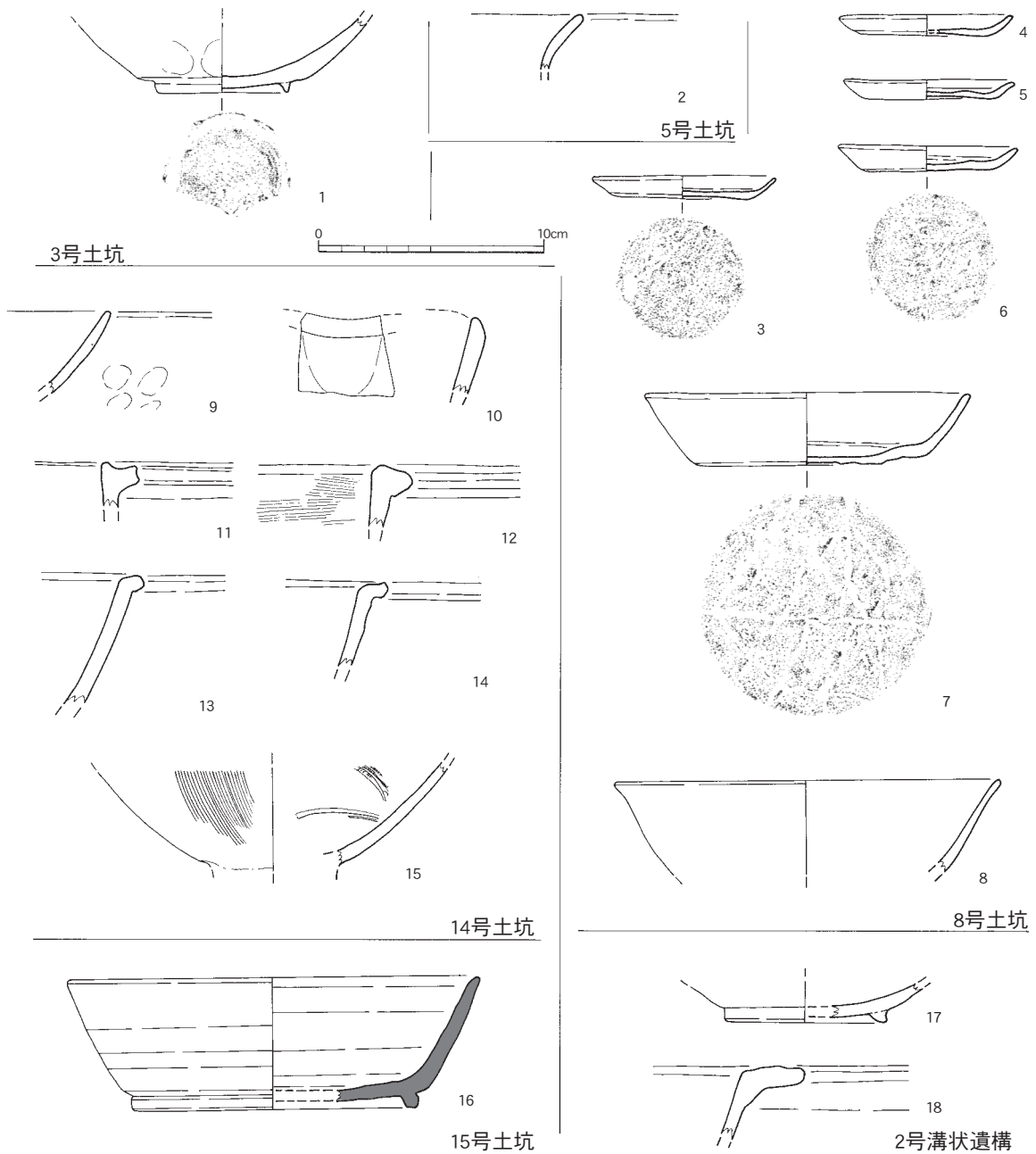
調査区北西端部の15号掘立柱建物跡の内部から検出された平面略円形の土坑である。長軸73、短軸56cm、深さ15cmで、埋土に炭化物を多く含んでいたため焼土坑と見られたが、焼けた面はなかった。

出土遺物がなく時期を特定できない。

12号土坑(図版41、第93図)

調査区西部の9号掘立柱建物跡の内部から検出された平面略円形の小型土坑である。長軸63、短軸50cm、深さ10cmで、埋土に炭化物と焼土を多く含んでいたため焼土坑と見られたが、焼けた面はなかった。

出土遺物がなく時期を特定できない。9号掘立柱建物跡柱13に切られているので、それ以前であろう。



第92図 2区3・5・8・14・15号土坑、2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

13号土坑(第93図)

調査区中央南部の14号柵跡の西から検出された平面略円形の小型土坑である。長軸60cm、短軸50cm、深さ13cmで、埋土に炭化物を多く含んでいたため焼土坑と見られたが、焼けた面はなかった。出土遺物がなく時期を特定できない。

14号土坑(図版42、第93図)

調査区中央南部の14号柵跡の南から検出された平面略方形の土坑である。長軸190cm、短軸135cm、深さ10cmで、竪穴遺構の可能性はあるが、床面には柱穴がなく、小ピットが壁面には見られるが巡る状態ではないので、土坑とした。基盤層に礫を多く含む範囲なので、埋土には小礫が多く含まれる。1号柵跡柱11を避けるように掘られているので、1号柵跡と共存しており、1号柵跡の隅に作られた廃棄土坑だろう。

出土遺物の13・14の土鍋の口縁部が水平に小さく張り出す形態、15の同安窯系青磁碗の胴部の傾きが小さいことから12世紀後葉である。

出土遺物(第92・96図)

9は瓦器碗で器面摩滅のため調整不明だが、胴下位にはオサエがある。口縁部は灰色、口縁下位は灰白色、胴部は黒色を呈する。10は瓦質土器の摺鉢で、片口部片で、摺目は残っていない。黄灰白色を呈し、変色なし。11～14は土師質の土鍋で、11は鏝から上は茶灰褐色、下は使用変色のため暗茶灰褐色を呈する。12は内面にヨコハケ、外面ナデで、口縁肥厚部の接合部下は調整していない。胎は表面が橙褐色、中央が灰黒色を呈する。13・14は土師質の土鍋で、内外ナデ調整で胎土は精良。13は内面の橙色が基調色だが、外面は煤が付着して茶灰褐色を呈する。14は外面淡灰褐色、内面黄灰白色を呈する。15は同安窯系青磁碗で、外面には櫛書文、内面には片切彫りによる花文と櫛書文が施され、淡緑灰色を呈する。

第96図5は滑石製石鍋片で、再利用のために加工した残欠ではないだろうか。28.5gを測る。

15号土坑(図版42、第93図)

調査区中央南部の1号掘立柱建物跡内部から検出した小型の略円形の土坑で、径70cm、深さ13cmを測る。埋土は堆積層ではなく、埋め戻された埋土であった。出土遺物から8世紀後葉の所産であろう。

出土遺物(第92図)

16は須恵器高台付杯で、高台と胴部の接合部の外面側は抉り込むようなナデが見られる。外底は回転ヘラケズリ。内外青灰色を呈する。

④溝状遺構

4・5号溝状遺構については現代の水路の湾曲に沿っていることから、近世以降の水路跡と考え、掲載しない。

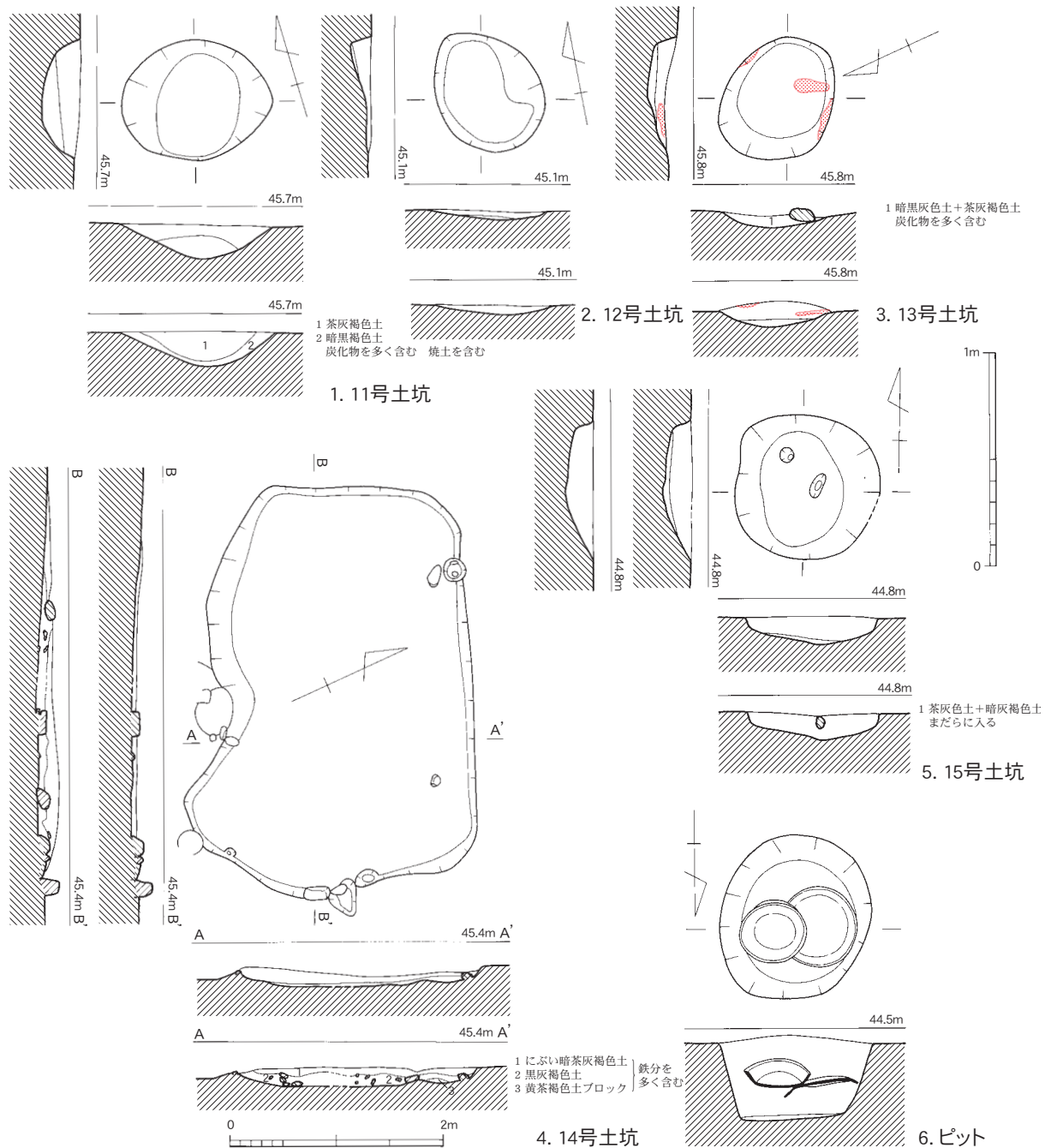
1号溝状遺構(図版39、第53図)

調査区北西端で検出された溝状遺構で、南西から北東へ走る方向のものと、それに直角に走るものが間を空けて、3つに分かれて検出された。埋土・幅・深さがほぼ同じだったので1つのL字

状の溝状遺構であったものと考え、a～c号に分けた。北ほど深く、南ほど広くなっており、1c号で最大幅90cm、1a号の最深部で18cmを測る。

1a号溝状遺構と1b号溝状遺構の間は陸橋部らしい空間があり、1b号と1c号の間はコーナー部分に空間がある。分断されているので、排水目的ではなく区画溝であろう。区画内部には遺構が見られず、調査区より北西部の現道の下に遺構があるものと思われる。

出土遺物に図化できないが、外に開く高台のある土師器碗から11～12世紀代の可能性があり、15号掘立柱建物跡の柱1・10と32号掘立柱建物跡柱3と切り合い関係にあり、不明瞭ながら切っていたと見られる。



第93図 2区11～15号土坑・ピット1実測図(4は1/60、他は1/30)

2号溝状遺構(図版33、第53図)

調査区北西部から検出された。13号掘立柱建物跡の西に位置する。最大幅88cm、深さ8cm程である。主軸方向はN-4°20'-Eで、13号掘立柱建物跡と一致しており、位置関係から13号掘立柱建物跡の雨落ち溝と考えられる。18の土鍋の口縁の傾き、長さから12世紀末から13世紀初頭であろう。

出土遺物(第92図)

17は土師器碗で、器面摩滅で調整不明。内外灰白色を呈する。18は土師質の土鍋で、外面は暗灰褐色、内面はにぶい茶灰褐色を呈する。

3号溝状遺構(図版29、第53図)

調査区中央部北部から検出された。1号掘立柱建物跡の東に位置する。両端部が立ち上がっている。幅50cm、深さ70cm程で、出土遺物がなく時期は特定できないが、位置関係から1号掘立柱建物跡底部の雨落ち溝と考えられる。主軸方向はN-2°40'-Wである。

⑤その他の遺構と遺物

ピット1(図版42、93図)

調査区北東部の掘立柱建物跡集中部で、26号掘立柱建物跡柱3・9の北側から検出された。長軸36cm、短軸29cm、深さ40cmのピットで、周辺の掘立柱建物跡の柱穴より小さい。中位から完形の土師器の皿と杯が出土した。出土遺物から9世紀前半代と考えられる。周囲に掘立柱建物跡が集中するため、どの建物に対する地鎮遺構なのか特定できない。

出土遺物(第94図)

5・7は本来完形品であったが、半分程度までしか復元できていない。5は土師器皿で、外底は回転ヘラ切りで、底部の歪みが著しい。内外橙色で白色粘土を含む精良な胎土である。7は土師器杯で、外底は回転ヘラ切りで、胴下位は回転ヘラケズリ。内外橙色で白色粘土を含む精良な胎土である。

ピット17(図版42)

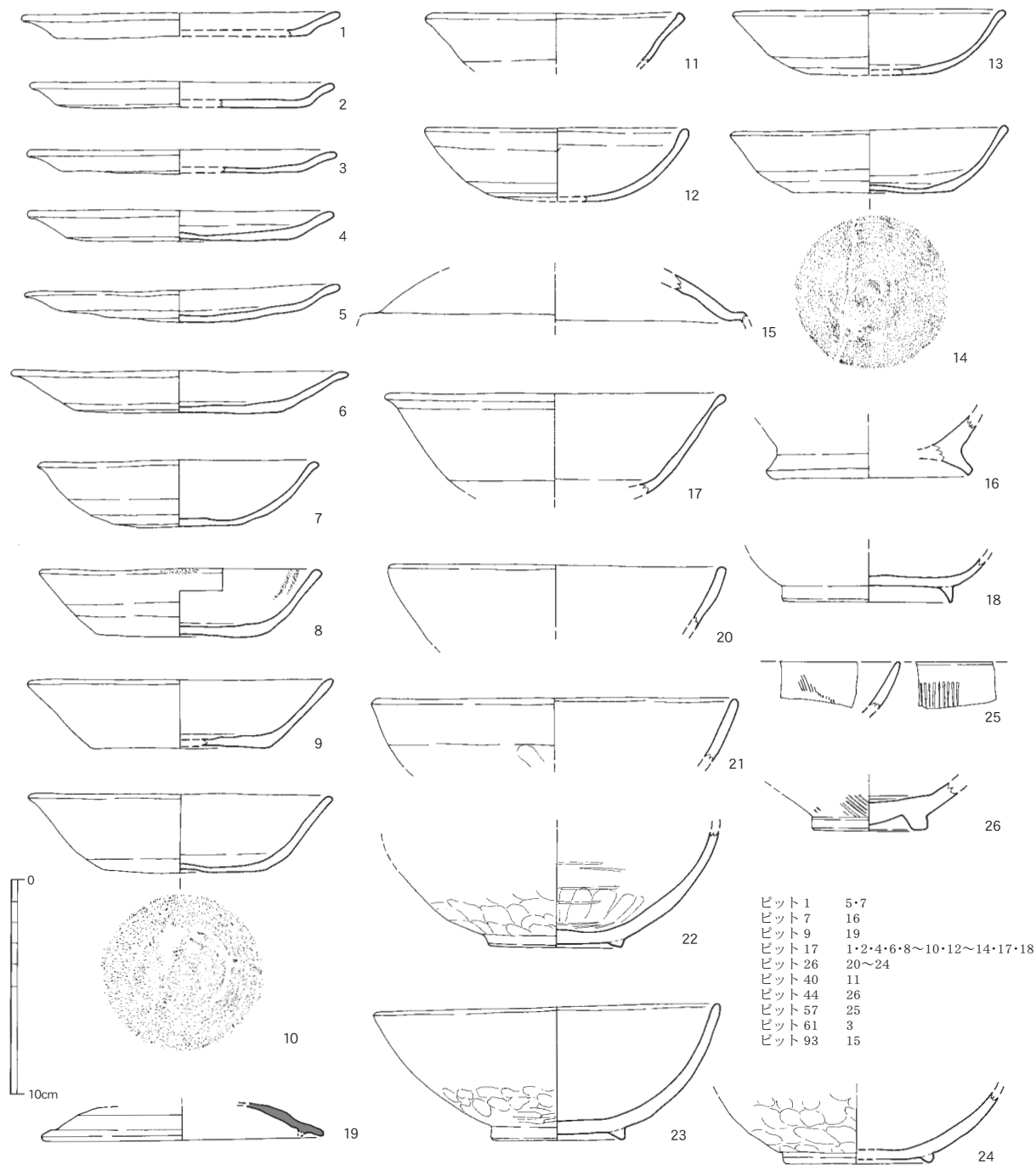
調査区北東部の掘立柱建物跡集中部で、26号掘立柱建物跡柱5の東側から検出された。長軸60cm、短軸42cm、深さ105cmのピットである。完形にはならないが、土師器のみが集中して出土した。周囲に掘立柱建物跡が集中するため、小さな穴を深く掘っているのが、廃棄行為にしては不自然であり、地鎮遺構の可能性はあるが、どの建物に対するものなのか特定できない。出土遺物から10世紀代と考えられる。

出土遺物(図版43、第94・95図)

第94図1・2・4・6・8は小皿で、外底は回転ヘラケズリで、胴部はヨコナデで窪んだ結果、口縁部が肥厚して外反している。6は口縁部のヨコナデが上下2段に施されている。いずれも内外黄橙色で変色なし。10・12~14は杯で、10は丸底杯と同じ肥厚した口縁部で、底部が平底である。内面口縁部には3箇所油煙が残っており、灯明皿に使用されたことがわかる。芯の形が残るものもある。内外黄橙色だが、内面は使用のため変色している。12から14は口縁部が丸く肥厚し、小さく外反する丸底杯で、胴部の中位よりやや下から回転ヘラケズリで、底部は回転ヘラ切りである。

いずれも黄灰白色を基調としており、薄手の均一なつくりである。17・18は椀で、17は口縁部が丸く肥厚し、小さく外反する。いずれも黄灰白色を基調としており、薄手の均一なつくりである。18は内外赤橙色で器面は摩滅しており観察できなかった。

第95図4～7は鉢で、4・5と6・7はそれぞれ酷似するが別個体である。丸底杯と同じ胎の特徴を持ち、鍋よりも土師器に近い胎土をもつ。4・5は内外黄灰白色を基調としており、内外ケズリ状のナデ。煮沸の痕跡がないので鍋ではなく鉢というべきかもしれない。6は外面ケズリ状のナデ。

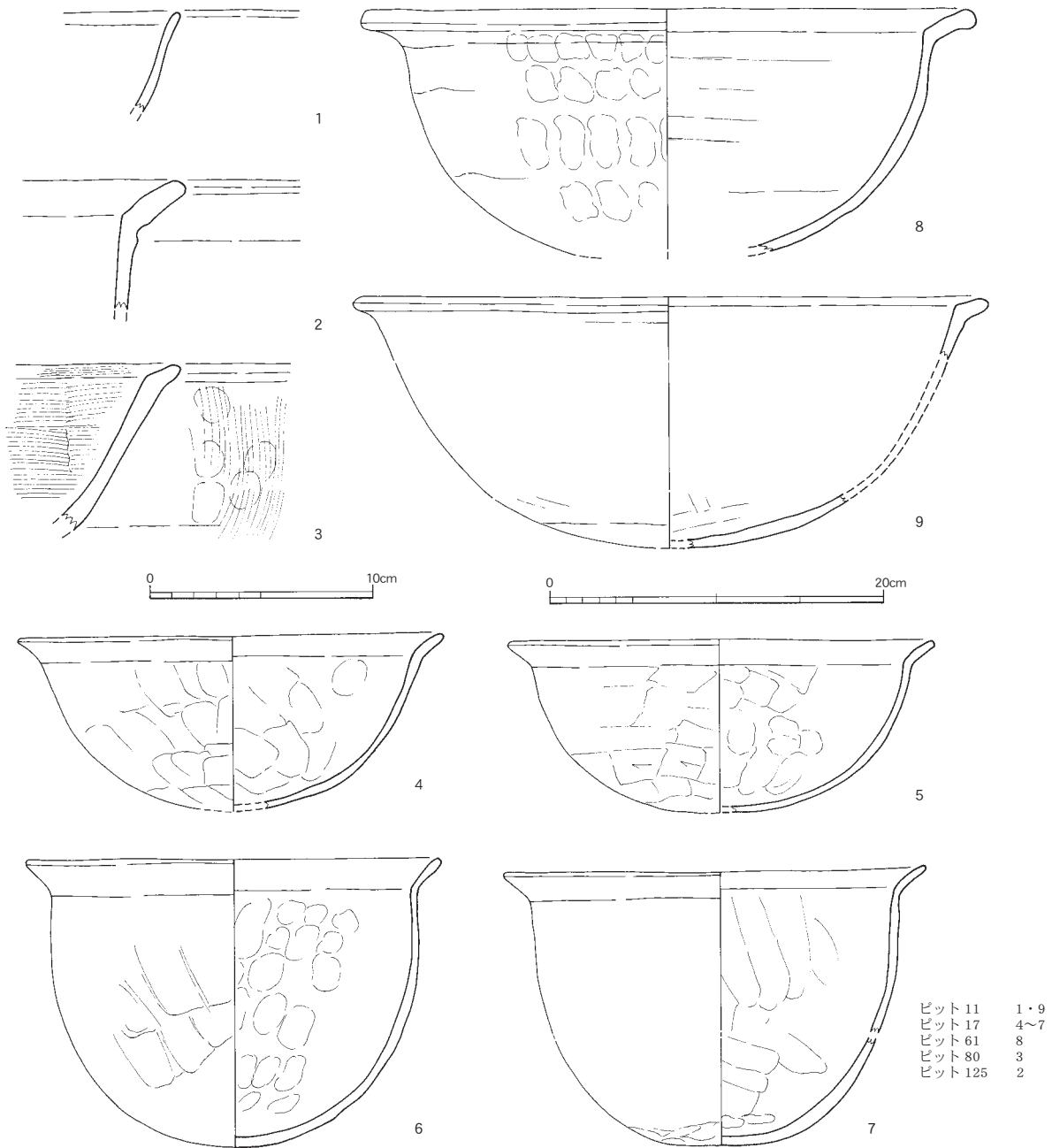


第94図 2区ピット出土土器・陶磁器実測図1(1/3)

デ、内面オサエ。7は外面器面摩滅のため観察不能で、内面はケズリ状のナデ。外面胴部は使用変色のため赤橙色や黒橙褐色で、口縁部は本来の色調である赤橙褐色である。内面も暗灰褐色に変色が見られる。

その他のピットの出土遺物(図版43、第94～96図)

第94図3はピット61出土の土師器小皿で、外底は回転ヘラケズリで、胴部はヨコナデで窪んだ結果、口縁部が肥厚して外反している。11はピット40出土の杯で、8に近いものと思われる。15はピット93出土の土師器の蓋で、器面摩滅のため調整観察不能。17はピット7出土の土師器碗で、



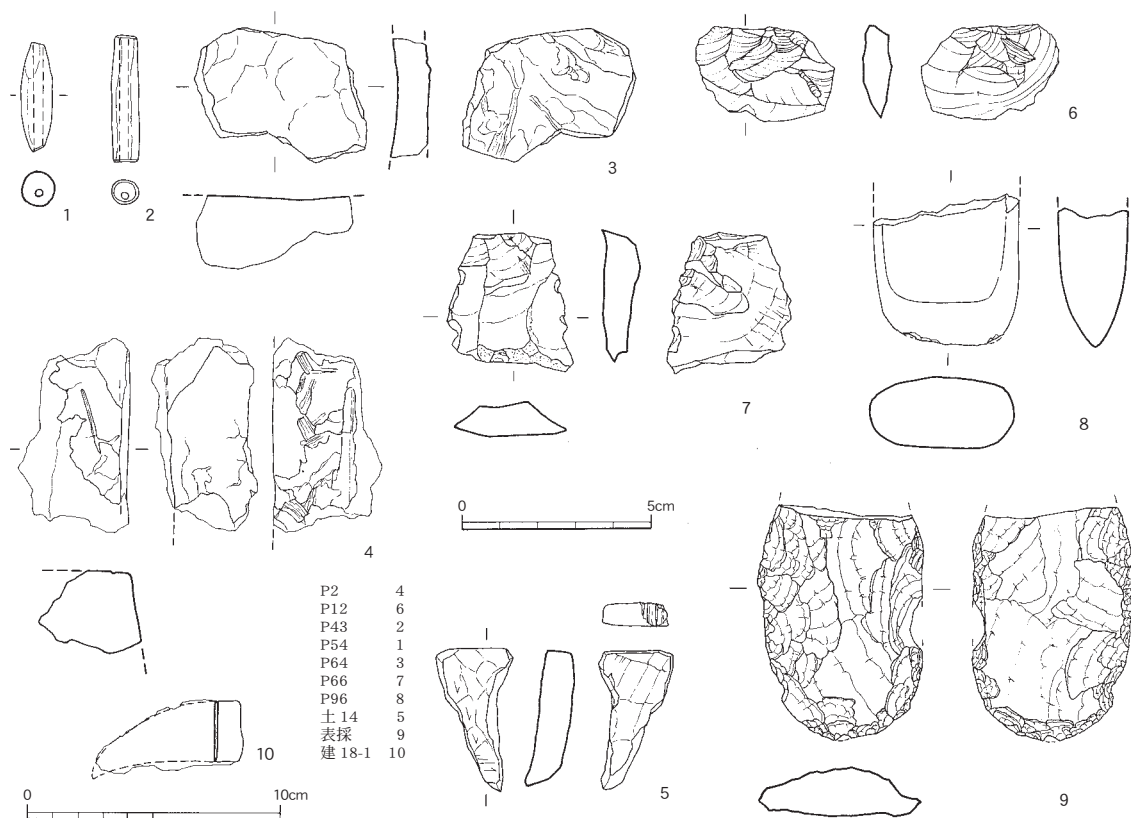
第95図 2区ピット出土土器・陶磁器実測図2(8・9は1/4、他は1/3)

内外ナデ。19はピット9から出土した須恵器蓋で、返り部分の端部は欠損している。天井部は回転ヘラケズリ。外面淡青灰色、内面暗青灰色を呈する。小片からの反転復元なので径は不正確。20～24はピット26から出土した瓦器碗で、22・23は器面摩滅のため調整不明。

20は外面口縁が灰黒色、口縁下と内面は灰白色を呈する。21は口唇部が灰色、口縁部は灰白色、口縁下は黒灰色を呈する。22の内面はミガキが残っている。23は器面摩滅のため調整不明だが、外面胴下位はオサエ、内面はミガキの痕跡が見られる。口縁部は灰色、外面口縁部から内面は灰黒色、外面胴部は灰白色を呈する。23・24は外面胴下位にオサエが見られるもので、高台内側の底部との接合部はナデにより窪んでいる。24は淡青灰色を呈する。

25・26は同安窯系青磁碗で、25は内外に櫛書文が施され、暗緑灰色を呈する。ピット57出土である。口縁部の傾きが小さいことから12世紀中葉。26は欠損が底部縁に廻っているが、打ち欠きではない。外面に櫛書文が施され、暗緑灰色を呈する。高台はケズリ出し成形で、ピット44出土である。高台の形態から12世紀中葉。

第95図1はピット11出土の青磁碗で、小片のため文様のない部分であろう。濃緑灰色を呈する。12世紀中葉。2～7は土師質の土鍋で、2はピット125出土で、外面に煤が付着し、暗黒灰褐色を呈する。内面は使用変色のためにぶい暗黄灰褐色。12世紀中葉。3はピット80出土で外面がオサエの上にタテハケ、内面は丁寧なヨコハケが施されており、外面は煤が付着し、暗茶灰褐色を呈する。内面はスリップがかかっているように明黄灰白色で変色がない。12世紀初頭か。8・9は土師質の土鍋で、8はピット61出土で、外面オサエ、内面ナデ。内面底部は黒色のシミが帯状に入る。外面もこのシミの帯の位置でぶい黄灰白色から黒褐色に変色している。12世紀中葉。9は口縁部



第96図 2区出土土・石・鉄製品実測図(5・6は1/2、他は1/3)

片と底部片を図上接合したもので、底部は内外ケズリ状のナデが入る。口縁部外面には煤が付着する。ピット11出土で、口縁部は外面が暗茶灰褐色、内面は橙色を呈する。12世紀初頭か。

第96図1は管状土錘で、1はピット12出土で、にぶい黄灰白色を呈する。22gを測る。第96図2はピット43出土の土錘で、瓦器椀に近い灰黒色を呈する。7.4gを測る。第96図3・4は土壁片で、3はピット64、4はピット2出土である。4は平坦面が2面あるので、角部分であろう。欠損面に藁状の植物の痕跡がある。

第96図6はピット12出土の姫島産黒曜石製の2次加工剥片である。横長剥片の基部を微細剥離しているが下辺には刃がついておらず、刃こぼれの痕跡もない。6.9gを測る。

第96図7はピット66出土の頁岩製の剥片石器で、風化の度合いから旧石器の可能性が高い。縦長剥片の基部で側縁には微細剥離は見られない。下端の欠損部に刃部があった可能性が高い。11.8gを測る。第96図8はピット96出土の磨製石斧の刃部で、千枚岩製である。132.0gを測る。

表採石器(図版43、第96図9)

凝灰岩質安山岩製の扁平打製石斧である。板状に近い素材の両側縁から表裏両面に整形加工を施し、器体中央部に素材面を大きく残したまま短冊形に近い形状に仕上げたものと考えられる。裏面刃部付近や器体の稜線上などに擦痕が観察され使用痕であろう。器体部中央部付近で折れた後廃棄されている。現存長9.2cm、厚さ6.7cm、幅2.1cm、重さ126.2gである。(宮田)

(3)まとめ

遺構の変遷

ハカノ本遺跡2次調査では掘立柱建物跡52棟、柵跡31基、土坑41基、井戸5基、溝状遺構10条が検出された。1区の西半は大きく削平されて遺構がほとんど残っておらず、本来2区に向かって緩やかな斜面があったものと思われる。2区もまた、西に向かって緩斜面があったようだが、現在はほぼ水平に削られている。しかし、削平が著しいながら、土坑墓が残っているので、本来掘立柱建物跡で構成される遺跡であったといえよう。

遺物としては、石匙や打製石器が出土しており、縄文時代の狩猟の場であったことを伺わせるが、陥し穴は存在しない。また、1・2区共に弥生中期後半の土器が出土しており、近くに当該期の集落が存在していたようだが、廃棄土坑などがなく生活の痕跡はない。その後も、竪穴住居跡は検出されず、奈良時代に入って多くの掘立柱建物跡が造られるようになる。

1区については中世的な集落跡の建物群であったが、2区の建物群は直線的な配置が見られ、中には異常に細長い建物があり、通常の集落遺跡とは考えられなかった。

こうした郡衙より小規模な官衙的な配置の建物群には、郷衙や有力者の居館、村の寺院などさまざまなものがあるが、機能を特定しうる遺物が出土しない状態では官衙的な配置の建物群としかいえない。本遺跡に隣接する下尻高遺跡からは丸軋が出土しており、官衙的な性格の可能性も指摘できるが、その性格を決定つける遺物が出土しておらず、遺跡の性格については建物群の時期別の配置状況から推察するほかない。

そこで、2区の17・26号掘立柱建物跡のような細長い掘立柱建物跡と、柱間が長く柱穴径の大きい特異な1号柵跡の存在、さらにほぼ円形の焼土坑の多さに加えて、1区で斎串や絵馬、形代が出土したことを勘案し、大型の2本柱で構成される建物を積極的に評価して鳥居とし、焼土坑を神域で行う祭祀に用いたものと考え、本遺跡は神社遺跡であるという仮説のもとに、以下のように遺構の変遷と配置を復元した。

7世紀末から8世紀後半

1区には15号土坑に8世紀後半の須恵器杯が出土しているが、混入品であろう。2区では7世紀末の須恵器蓋が出土するピットがあるのみで、7世紀末の掘立柱建物跡は確認できないが、調査区の北側にはこの時期の遺構が存在していると見られ、本遺跡の掘立柱建物跡群の初現はこの時期まで遡ることができる。

8世紀後半代の掘立柱建物跡は24・25号掘立柱建物跡であり、ほぼ同じ位置での建て替えである。さらに主軸方向が一致しない23号掘立柱建物跡も同じ位置で重複しているので、これが柱穴の切り合い関係上最も古く位置付けられ、23号→25号→24号という変遷をたどることができる。

8世紀末から9世紀前半

2区では調査区中央に3・4・30号掘立柱建物跡が、4・13号柵で連結され屋根でつながって1つの長大な建物を形成している。南側は柱穴自体が失われている可能性もあり、どこまで延びていたか不明であるが、1号柵跡のような柵的な機能もあったのではないだろうか。この建物列より東には掘立柱建物跡の集中する地帯がある。大型の建物である21・22号掘立柱建物跡は重複して



1. 7世紀半から8世紀前半



2. 8世紀半から9世紀前半

■ 8世紀後半
 ▨ 9世紀前半



3. 9世紀後半から10世紀

第97図 ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図1 (1/2,000)

いるので同じような機能を有した施設の建て替えであろう。主軸方向から2時期に分かれる建物群があったことが想定される。17a号と21号、26号が古段階、17b号・24号・22号が新段階で、併行する建物群からL字形の建物配置に変わっている。

この建物群の中心は調査区外の北東部にあることから、現段階では何の施設かはわからないが、小型ながら細長い17号掘立柱建物跡の存在から、後の社殿の前身の可能性を想定したい。

細長い掘立柱建物跡は官衙的な施設で検出されることが多いが、上毛町上唐原遺跡や田川市下伊田遺跡のように単独で存在することもある。(第98図)本遺跡の3・4・30号掘立柱建物列も1つの建物と見れば、同様に単独で存在するように見えるが、東に20m離れた建物群とセットになると考えれば、周囲に空地があることに意味があるのではないだろうか。

17号掘立柱建物跡は特に梁行が狭く、17a号で220cm、17b号でも240cmしかない。これだけ幅が狭くても成り立つ機能として考えるのが、『年中行事絵巻』「推定今宮祭図」に見られる神事の観覧席である。この建物に座る人物との比較から建物幅は250cmほどであろうから規模的には一致する。神事は後に1号掘立柱建物跡が作られる空地で行われるため、遺構が存在せず同じ場所で繰り返し建て替えが行われたのだろう。現段階では全体像がわからないが、社殿の南西隅のみが検出されたのではないだろうか。

9世紀後半から10世紀

1区にこの時期の遺構はないが、緑釉陶器が出土している。

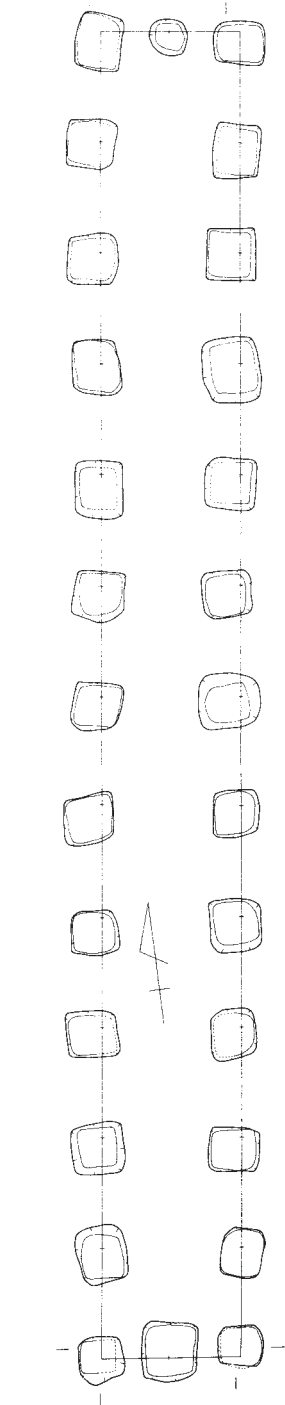
2区では6号掘立柱建物跡が大きく、その後背に5号掘立柱建物跡がある。この2つが拝殿と本殿であろう。この並びに垂直に細長い9号掘立柱建物跡が配置され、7号掘立柱建物跡は5号掘立柱建物跡と9号掘立柱建物跡を繋ぐように9号掘立柱建物跡と連結して建て増しされている。その連結部を5号柵跡の目隠扉で、東から隠している。さらに南に8・33号掘立柱建物跡と続いている。この建物列は前段階の3・4・30号掘立柱建物跡の建物列を継承するものだろう。建物列の西側には規模の近い14・19・32号掘立柱建物跡があり、社殿に付随したものであろう。20・31号掘立柱建物跡は主軸方向が異なるが、全面の施設かもしれない。

12世紀中葉から12世紀後半

11世紀代の遺構が見られないが、2区1号溝状遺構は主軸方向が一致しないこともあり、この時期に属する可能性がある。

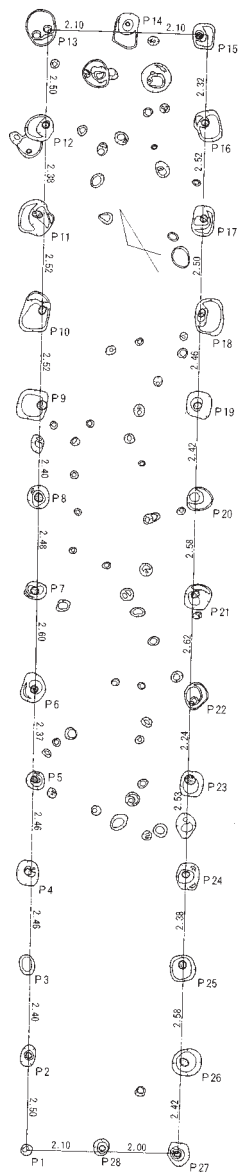
1区では12世紀中葉から本格的な遺構が見られるようになる。2号掘立柱建物跡がこの時期の最も大型の建物であり、主屋になると考えられる。1区1号掘立柱建物跡の前身となる建物で、主軸方向が対応する可能性のあるものは15号掘立柱建物跡のみで、調査区東部は地形に沿った主軸方向をとるものと思われ、同時期と見られるほかの建物は主軸方向が異なる。一方、13号掘立柱建物跡と、これと規模の近い11・12号掘立柱建物跡は主屋になりうる規模の建物であることから、2号掘立柱建物跡と11～13号掘立柱建物跡の間に位置する建物はどちらの副屋になるのかわからない。

1区の西側の遺構のない範囲も、井戸が存在することから、本来は建物が存在していただろう。2区では1号掘立柱建物跡が建てられ、それに付随して2・7号の総柱建物跡が造られ、その周囲に地形に沿った柱数の多い住居的な掘立柱建物跡が間隔を置いて存在している。18・19・26号柵は1号掘立柱建物跡の周囲の柵であり、同時期と見られる大型2本柱の10・11号柵は1号掘立柱建物跡の中心軸線上に位置しており、鳥居であろう。この10・11号柵の間隔と同じ距離に1号柵



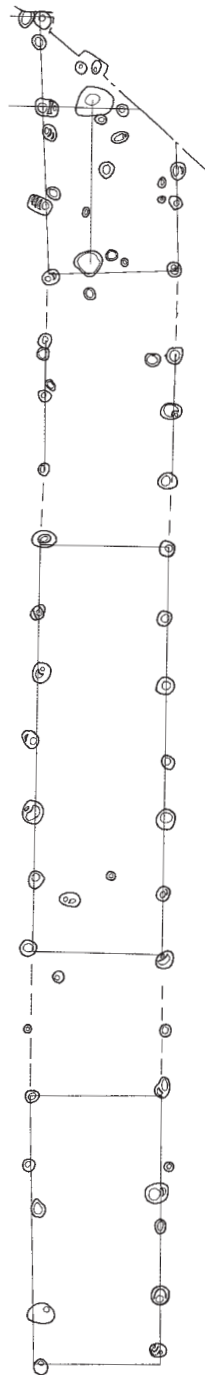
1. 田川市下伊田遺跡・掘立柱遺構

田川市教育委員会 1988
 『下伊田遺跡群』
 田川市文化財調査報告書 第4集

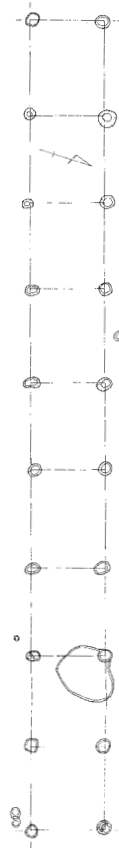


2. 上毛町下唐原伊柳遺跡SB12

大平村教育委員会 2003
 『下唐原伊柳遺跡』
 大平村文化財調査報告書 第14集

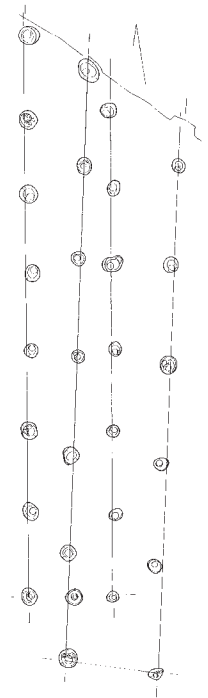


3. 上毛町ハカノ本遺跡
 3・4・30号掘立柱建物跡
 4・13号柵跡



4. 上毛町上唐原遺跡
 9号掘立柱建物跡

福岡県教育委員会 1995
 『一般国道 豊前バイパス関係
 埋蔵文化財調査報告 第2集
 上唐原遺跡1』

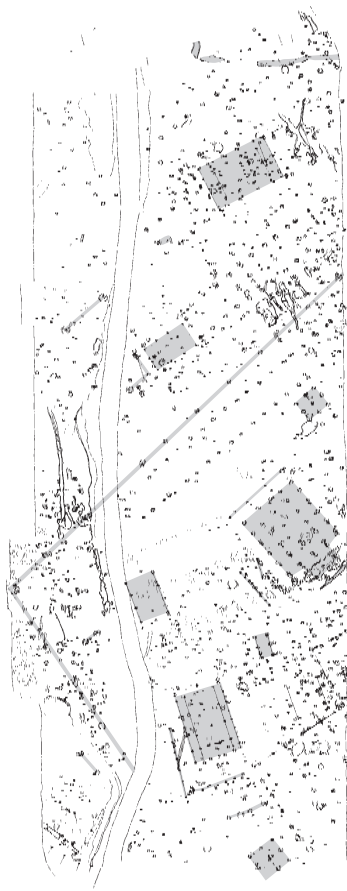


5. 上毛町
 ハカノ本遺跡
 17号掘立柱建物跡

第98図 豊前の長大な掘立柱建物跡(1/200)

跡があり、1号掘立柱建物跡を囲っていたものと考えられる。

1号柵跡は残りが悪いものの柱間が広く、通常の柵とは構造が異なっていたことが想定される。南北辺と東西辺は鈍角に屈曲しているが、これは地形に沿わせたものであろう。この1号柵に囲まれた範囲の中に、居住用の建物である28号掘立柱建物跡があるが、それに付随する21・22号柵は10・11号柵とよく似た構造であることから、これも鳥居と考えられる。神域に存在する建物には、



12世紀前半
 12世紀後半

1. 12世紀前半～後半

2. 13世紀前半～後半

第99図 ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図2 (1/2,000)

居住用であっても鳥居がつくものと見られ、2号掘立柱建物跡にも付随するのだろう。

鳥居や1号掘立柱建物跡の庇が東につくことから、正面は東であり、西の鳥居は裏門となる。調査区東側は斜面であったことから、斜面を登った先に社殿があり、奥に末社である2号掘立柱建物跡があり、極端に小さい16号掘立柱建物跡もこうした末社だろう。南側には宮司の居住する28号掘立柱建物跡と倉庫である27号掘立柱建物跡があり、北側での社殿への通路上の鳥居に24号柵が、西側の1号柵跡側への通路上の鳥居に14号柵跡があっただろう。14号柵跡の鳥居を出たところに廃棄土坑である14号土坑を設けている。南側へは段落ち部に25号柵があり、28・29号掘立柱建物跡の東西南北に鳥居が設置されている。この時期に現在の社殿でよく見られる建物の配置が成立している。

この時期の建物はほかの柱穴より浅いのが特徴だが、東ほど深くなっていることから、自然地形に合わせていたと考えられるので基壇のような盛土面はなかっただろう。

1号柵跡から西にある12・13号掘立柱建物跡には鳥居が付随せず、8号土坑のようにどちらかの建物に付随する屋敷墓があることから、これらは通常の民家と見られる。

13世紀前半から13世紀後半

1区では1号掘立柱建物跡を主屋とし、4号溝状遺構の雨落ち溝を伴う16号掘立柱建物跡を副屋とするL字状配置の屋敷地が成立する。3号井戸もこの時期に伴っており、中央は遺構がないので、作業場として使用し、4号柵跡が主屋の目隠し扉であったものと思われる。この農家の屋敷地の後には掘立柱建物跡がないので、3号井戸から出土したえぶりや唐鋤などの木製品はこの農家で使われたものと考えられ、唐鋤は家畜の存在を示している。東側の4号掘立柱建物跡は柱間が広いので、倉庫や家畜小屋として使われたものだろう。2本柱の2号柵は、位置的に門とは考えにくく、4号掘立柱建物跡に近接することと、空地の隅にあることから、家畜を繋いだものかもしれない。したがって、4号掘立柱建物跡は家畜小屋の可能性が高い。9号掘立柱建物跡は小型の建物でこの時期に付随する倉庫であろう。北・東は調査区外になり、西は削られているので不明確だが、1軒の農家を構成する施設群を検出することができた。

この時期以降、2区には遺構が見られない。

13世紀後半から14世紀前半

1区の1号掘立柱建物跡を壊して造られたのが13世紀後半の1号溝状遺構である。1区1号溝状遺構は、水の流れない構造になっており、規模から堀とみることができる。この溝状遺構は、北に隣接する下尻高遺跡では同規模の溝状遺構が「コ」字形に検出されており、その南辺に平行している。1区では1号溝状遺構に伴う時期の遺構がほとんどないので、1号溝状遺構は北側の下尻高遺跡の南端と考えられる。

下尻高遺跡は上毛町教育委員会により整理中なので時期など詳細は不明だが、南北80m、東西60mほどの「コ」の字形区画内部に大型の掘立柱建物跡のほか多くの建物群が見られ、居館としての性格が考えられる。区画の周囲にも建物群が存在することから、区画周辺まで取り込んだ居館であったようだ。2区の社殿は東の下尻高遺跡側を正面としていることから、社殿を後背に備えるように構築したものと考えられる。あるいは、神職の開発領主であったかもしれない。12世紀末頃、上毛郡司宗成・俊忠と田部太子との間に吉富名をめぐる相論が記録されており、田部氏は宇佐宮祠官であり上毛郡司でもあり当地の開発領主であったと考えられているので、ありえないことではない。



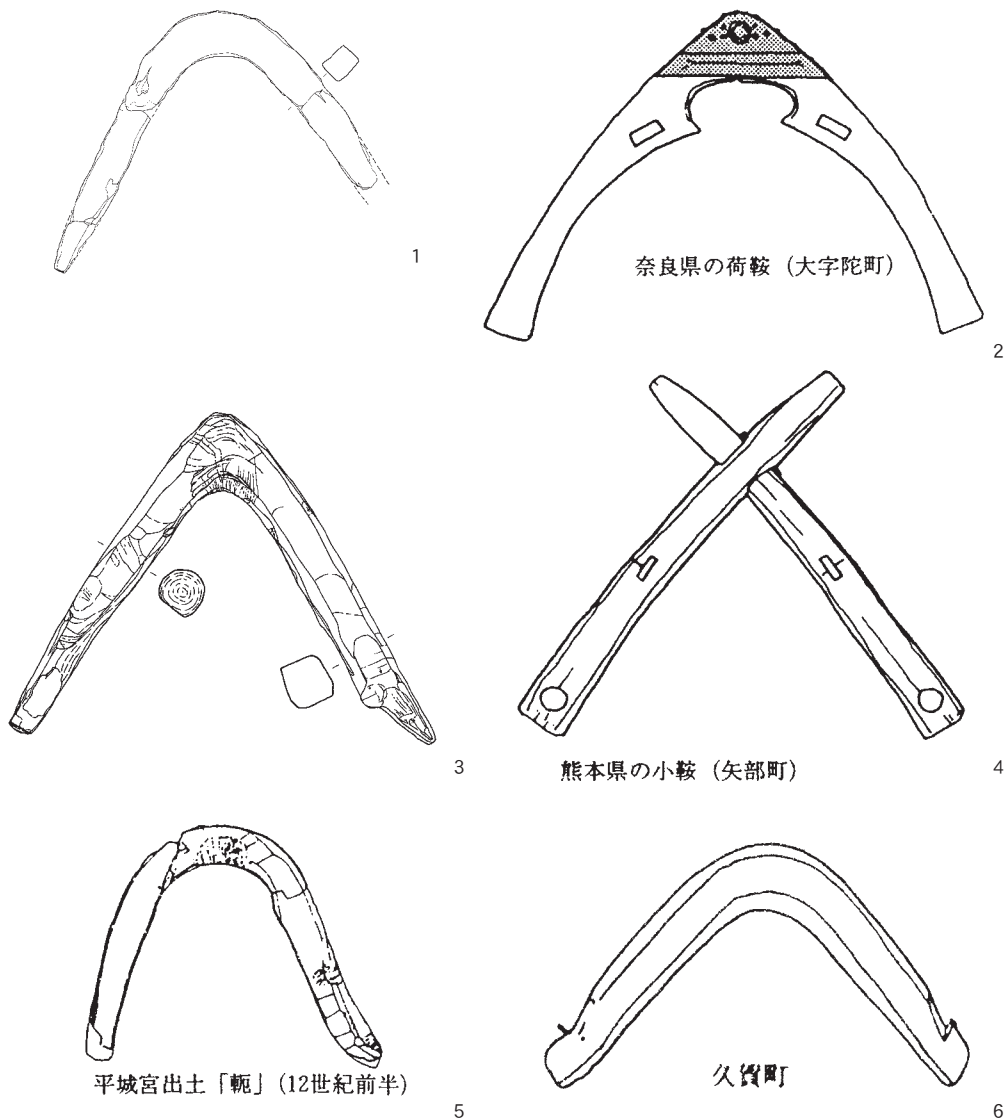
13世紀後半から14世紀前半

写真2 下尻高遺跡空中写真(上毛町教育委員会提供)

第100図 ハカノ本遺跡2次調査遺構変遷図3(1/2,000)

1号溝状遺構から出土した鞍や唐鋤などの木製農具の存在から、牛を所有していたことがわかるので、有力者であることはまちがいない、小字名が「下尻高」であることは、尻高氏に關係していることを示している。

尻高氏の名前が文献上に登場する最も古いものは、『下毛郡宮永久恒文書』中、正平7・觀応三(1352)年三月、河依小太郎範房の軍忠状で、安雲七郎、尻高次郎四郎、安崎孫三郎以下の敵が上毛郡屋形村に城を築き立て籠ったので、攻め落とすと書かれている。安雲七郎は遺跡北西部の安雲地区の有力者であることが想像できることから、尻高次郎四郎も尻高地区の土豪と考えられ、南北朝の動乱期に何らかの理由で、上毛町南西部の土豪が連合して遺跡西方の矢方地区の山城に籠って敗北したということだろう。1号溝状遺構の埋没が始まるのが14世紀前半と見られるので、時期的に符号する。また、1号溝状遺構は多量の遺物が出土したにもかかわらず、石塔がない。武士階



第101図 荷鞍と首木の比較資料(1/10) (1は本書、2は引用文献1、3・4は引用文献2、5・6は引用文献3)

級であれば五輪塔を用いた屋敷墓があるだろうが、「ハカノ本」という小字名でありながら、1区には墓がないので、近隣の別の場所に集団墓があったものと思われる。

この時の戦いで居館が廃絶し、2区の社殿とともに本遺跡の南西に位置する尻高城の麓に居館を移転させたことが想像できるが、廃絶年代などは居館の本体である下尻高遺跡の成果を待たなければならぬ。

なお、1号溝状遺構からは農具・建築部材など豊富な木製品が出土したが、その中でも注目されるのに付いて説明を加えたい。

最も注目されるのは絵馬である。(写真3～6)絵馬自体の出土例が少ないが、通常絵馬に牛が描かれることはない。しかし、馬が1面に描かれていることから、馬の描き方と比較することで牛であることは明らかである。牛の頭部にある触覚のような線は角であり、その下にある2つの三角形の突起は耳だろう。馬は尻尾が背に近い高い位置から始まるが、牛は尻位置から始まっている。脚は前脚が大きく異なり、馬は膝の屈曲部が異なる。このように、馬の裏に牛が描かれていることについては、単に再利用と考えることもできるが、馬は釘穴列のちょうど中央に位置するが。牛の面を使用する際には、牛を避けて釘を打つことができない。これは再利用ではなく、意図的に牛の面を見えないようにして打ち付けたまじないの意味のあるものかもしれない。

馬は画面の中央に描かれているが、牛は左に偏っており、右側にもなんらかの絵がある。線が断片すぎるため赤外線カメラを用いても何を描いたものかわからない。そこで、以下のように復元し、もう1頭の牛か馬を想定した。当初は牛が牽引するものと考えたが、牛車・荷車・唐鋤のいずれも牛との距離が長すぎる。また、牛から左端に引き綱が出ており、右端に引き綱のようなラインがある。また、牛と同じような角と脚のラインが見られるが牛よりも小さいことから、子牛や馬を想定した。

絵画としては稚拙なものだが、主題の周囲の背景が描かれていることは注目に値する。馬の面でも馬に引き綱らしいラインがあり、その先に柵となんらかの絵がある。牛の面には地面に草の絵が描かれており、珍しい例である。

この絵馬は1号溝状遺構の木製品が集中してした位置から出土しているが、周辺には齋串や人形、形代など祭祀具が出土しており、これらとともに取り上げることができなかったが、厚さ1mmほどの薄い板が数枚出土した。おそらく高価であった紙の代わりに幣に使用したものだろう。こうした祭祀具は2区の社殿に関連するものと思われ、神域から離れた場所に廃棄したのではないだろうか。

1区1号溝状遺構出土の荷鞍は、民俗資料で見られる2つの部材を臍穴で交差させる千木杵でなく1木で作った山杵にあたる。前輪と後輪を横木でつなぐ臍穴がないので、綱でつないだものと思われる。断面方形で、厚みがないことから牽引具の首木ではない。(第101図)北九州市潤崎遺跡第8地点では12世紀前半の「く」の字形の首木が出土しており、同じ山形だがその差は明白である。(注1)第49図5は全体像がわかる鳴子の資料である。高札板のような形態であり、側面に木釘はないので箱や曲げ物の部材ではない。江戸時代後期の『四季耕作図屏風』の絵画資料で見られるように、鳥追いのために紐を引いて音を出す鳥威しである。絵画資料のように広い範囲に大きな音を出すため、複数の鳴子が綱に提げられており、1号溝状遺構から複数出土したのはそのためであろう。第50図7の竹で作られたものは、鳴子に緊縛するには太すぎるので、竹だけで構成される異なる形態の鳥威しであろう。

1号溝状遺構と3号井戸からは、唐鋤と踏鋤が出土している。唐鋤は、梨身に梨柱の挿入される

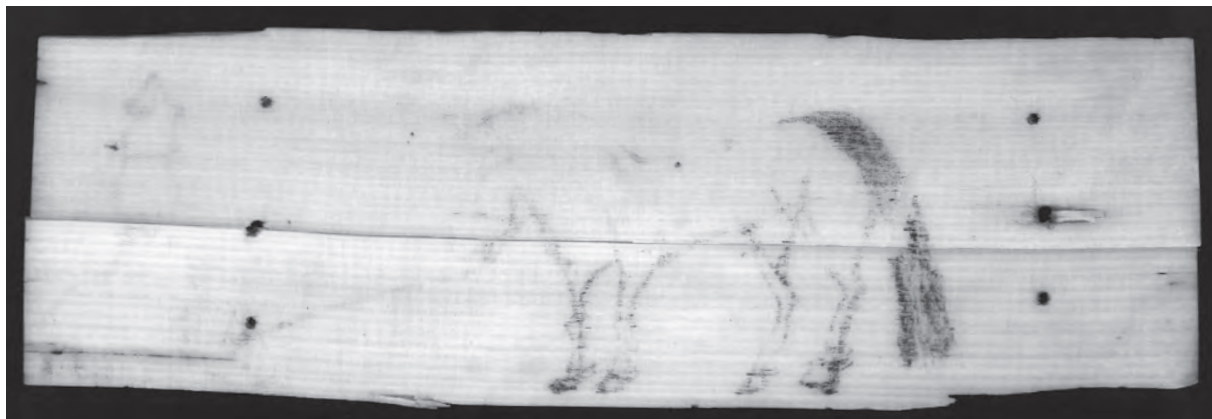


写真3 絵馬 表面の赤外線写真

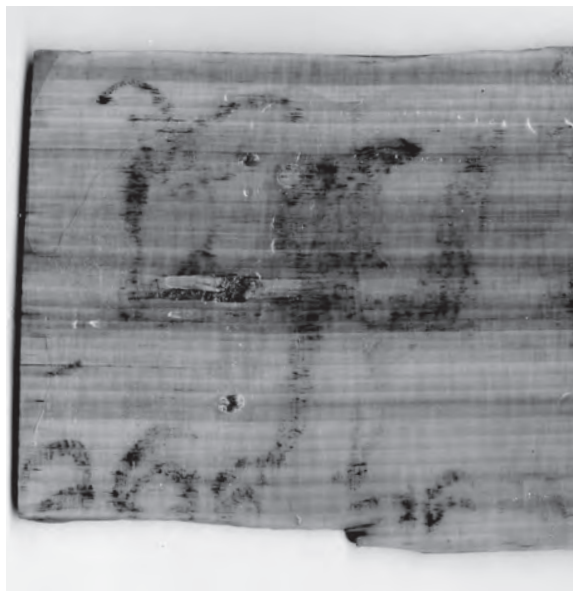


写真4 絵馬 裏面の拡大写真 牛頭部

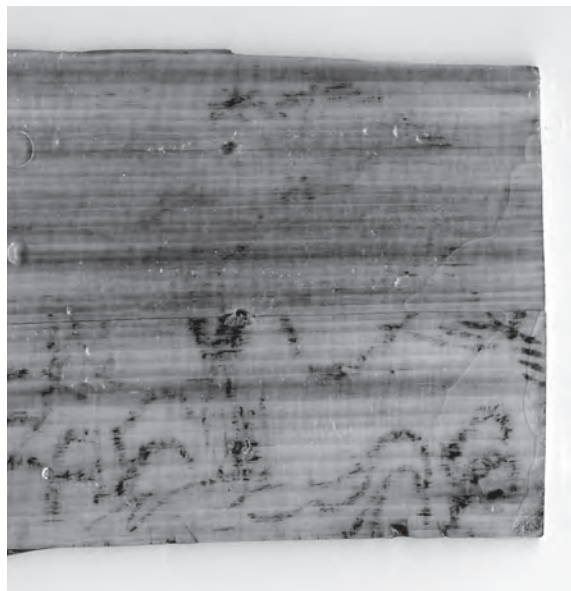


写真5 絵馬 裏面の拡大写真 牛脚部

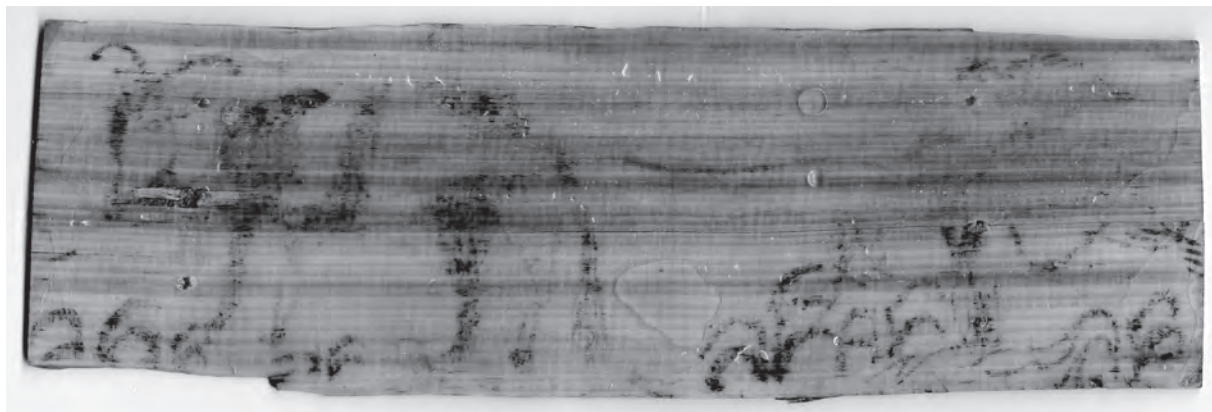


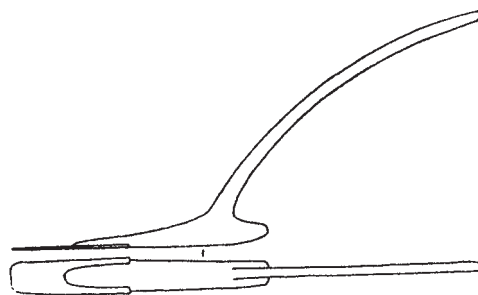
写真6 絵馬 裏面の赤外線写真

臍穴が身の後部にあり、柄の傾きが小さいことから初現期の抱持立犁であろう。(第103図)

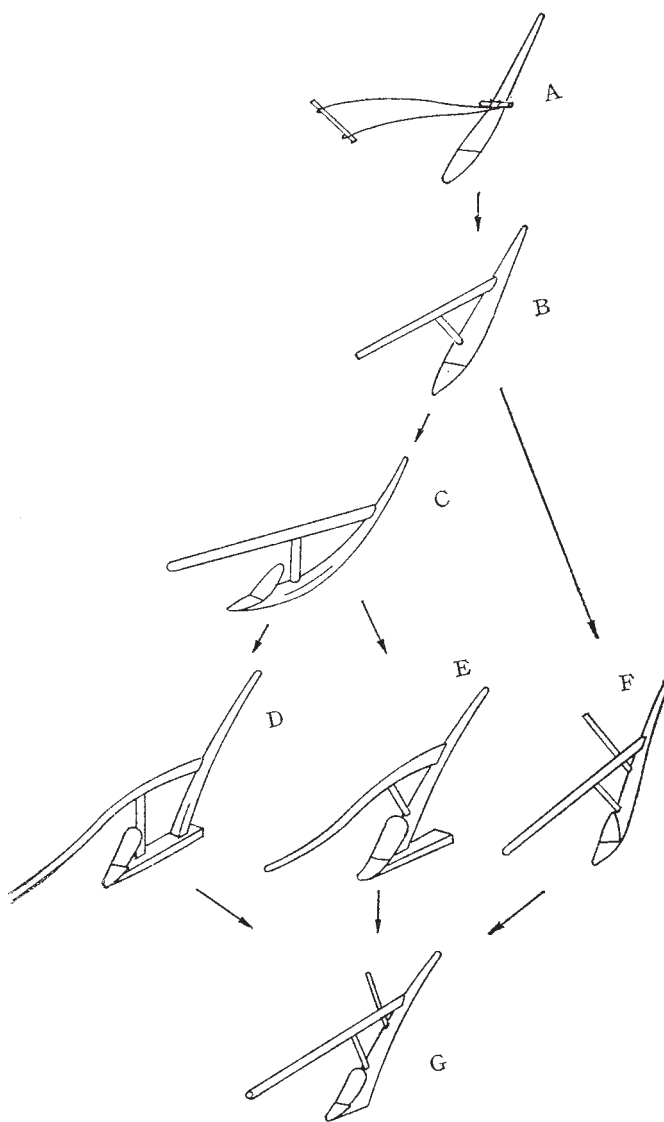
踏鋤は唐鋤に似た形態だが、犁柱を挿入する臍穴がなく、一木作りで、先端が方形であることから、唐鋤のように牽引させる形態ではない。(第102図)

以上のように、調査区内での遺跡の変遷を見てきたが、神社遺跡の調査事例が少ないなかで、遺構の配置から遺跡の性格を特定するのは難しいが、本遺跡については縦長の掘立柱建物跡の配置と空地の関係や、鳥居と見られる明らかに2基で構成される2脚門など、通常の官衙的な配置の遺跡とは異なる様相から想定した。

物証としての齋串・形代は、まじないに使うものとして水の祭祀を行った遺跡などで発見されることが多いが、1区の1号溝状遺構は堀であり、水の祭祀の跡とは考えにくい。絵馬は、古くは長屋王邸跡での出土例があるように、有力者の屋敷地で使用されたようだが、年中行事絵巻の絵画資料には社殿の扉に絵馬が掛けられていることから、中世には現在のように神社に奉納するようになったと考えられる。祭祀具がまとまって出土したことは、恒常的に使用されていたことを示すので、神社がそばに存在したといえよう。また、祭祀具とともに農具が一式出土したのも偶然ではないだろう。「田打ち・代掻き・牛追い」に使う荷鞍と踏鋤、「代かき」に使うえぶり、「鳥追い」に使う鳴子、他にも用途のわからない棒状の木製品も含めて、一連の農作業を模倣する田遊び(御田植祭)の神事に使用されたものではないだろうか。前述の大鋸の形代もこの神事の奉納品であった可能性が高い。



第102図 岩手県の踏鋤の事例(引用文献4)



第103図 犁の発展過程(引用文献5)

今回、神社遺跡の社殿配置の変遷を捉え、少なくとも8世紀代まで遡ることができた。調査区北側には、2区の建物群と主軸方向を同じくする水田区画が残っており、小さな条里区画が少なくとも3回改変されながら存続していた可能性がある。2区の遺構の初現時期から考えて、最初の条里施工後に計画的に配置された可能性が高い。(第104図)

『令集解儀制令』の春時祭田の条には、村毎に私に社官を置き、祭田の日に、郷飲酒礼が行われていたことが記されていることから、地方行政の末端施設として、郷村毎に置かれた社殿が、次第に社殿として拡張・整備されていったものだが、そこには宇佐宮の影響があったものと思われる。隣接地の将来の調査に期待したい。

注

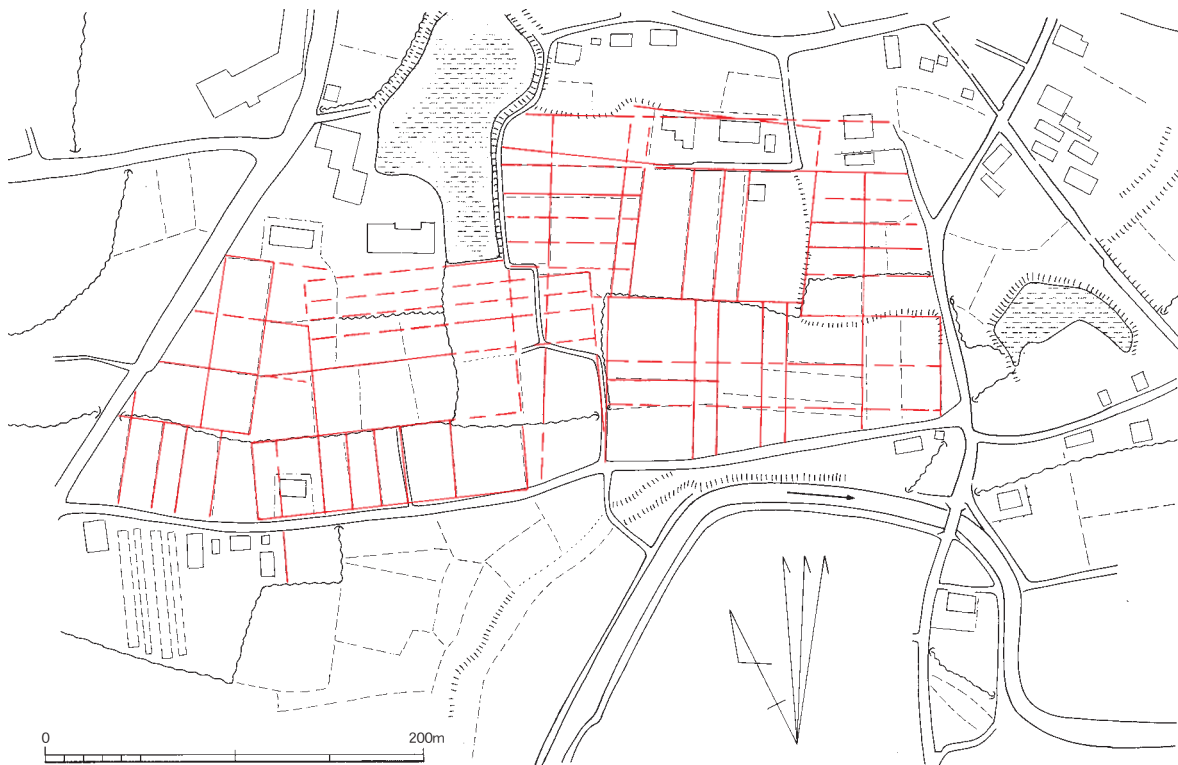
- 1 潤崎遺跡では自在鉤と報告しているが、河野通明の研究(文献2)によると、周防地方に「く」の字形の首木が多いらしく、渡来人の影響を想定している。同じく渡来人の多い豊前地方でも同様の状況があった可能性がある。

引用文献

- 1 財団法人北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室1998『潤崎遺跡6(第8地点)』北九州市文化財調査報告書第214集
- 2 河野通明1994「第四章 周防のウナグラ」『日本史研究叢書4 日本農耕具史の基礎的研究』
- 3 河野通明1994「第五章 小鞍の開発」『日本史研究叢書4 日本農耕具史の基礎的研究』
- 4 河野通明1994「第七章 正倉院子日手辛鋤の農具史上の位置」『日本史研究叢書4 日本農耕具史の基礎的研究』
- 5 清水浩1979「第3部 梨 VI 和梨の形成過程と役割」『日本の鎌・鋤・梨』(財)農政調査委員会

参考文献

福山敏男1942『神社古圖集』臨川書店



第104図 奈良・平安時代の建物主軸方向と条里推定図(1/3,000)

(4)自然科学系の分析

ハカノ本遺跡から出土した獣骨の同定

中村 賢太郎(パレオ・ラボ)

1. はじめに

福岡県上毛町に所在するハカノ本遺跡の発掘調査では、中世の溝やピットから獣骨が出土した。ここではハカノ本遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。なお、現生標本の閲覧にあたっては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生にご協力をいただいた。

2. 試料と方法

試料は、13世紀の溝1から出土した獣骨2点、13～14世紀のピット165から出土した獣骨1点、計3点である。

同定は肉眼で現生標本との比較により行った。

3. 結果と考察

溝1から出土した獣骨はイヌ(*Canis familiaris*)とウマ(*Equus caballus*)、ピット165から出土した獣骨はニホンジカ(*Cervus nippon*)であった。

溝1のイヌは、左下顎骨である。下顎体の破片で、歯は脱落していた。歯槽は第3前臼歯～第3後臼歯が見られ、成獣と考えられる。表面が摩耗しており、切創など表面の傷を観察することはできなかった。現生の和犬(紀州犬)や中世の遺跡から出土したイヌ(北海道上ノ国町勝山館)と比較したところ、ほぼ同じサイズであり、中世の和犬としては標準的なサイズと思われる。イヌの利用法としては、狩猟用、愛玩用のほか犬追物や食用などの可能性が考えられる。

溝1のウマは、基節骨である。近位端は欠け、表面が摩耗しており、前肢と後肢、左右の区別はできなかった。ウマの利用法としては、軍用、運搬用、農耕用などの可能性が考えられる。

ピット165のニホンジカは、右距骨である。表面は摩耗している。おそらくは狩猟の獲物としてハカノ本遺跡に持ち込まれ、食用にされたと思われる。

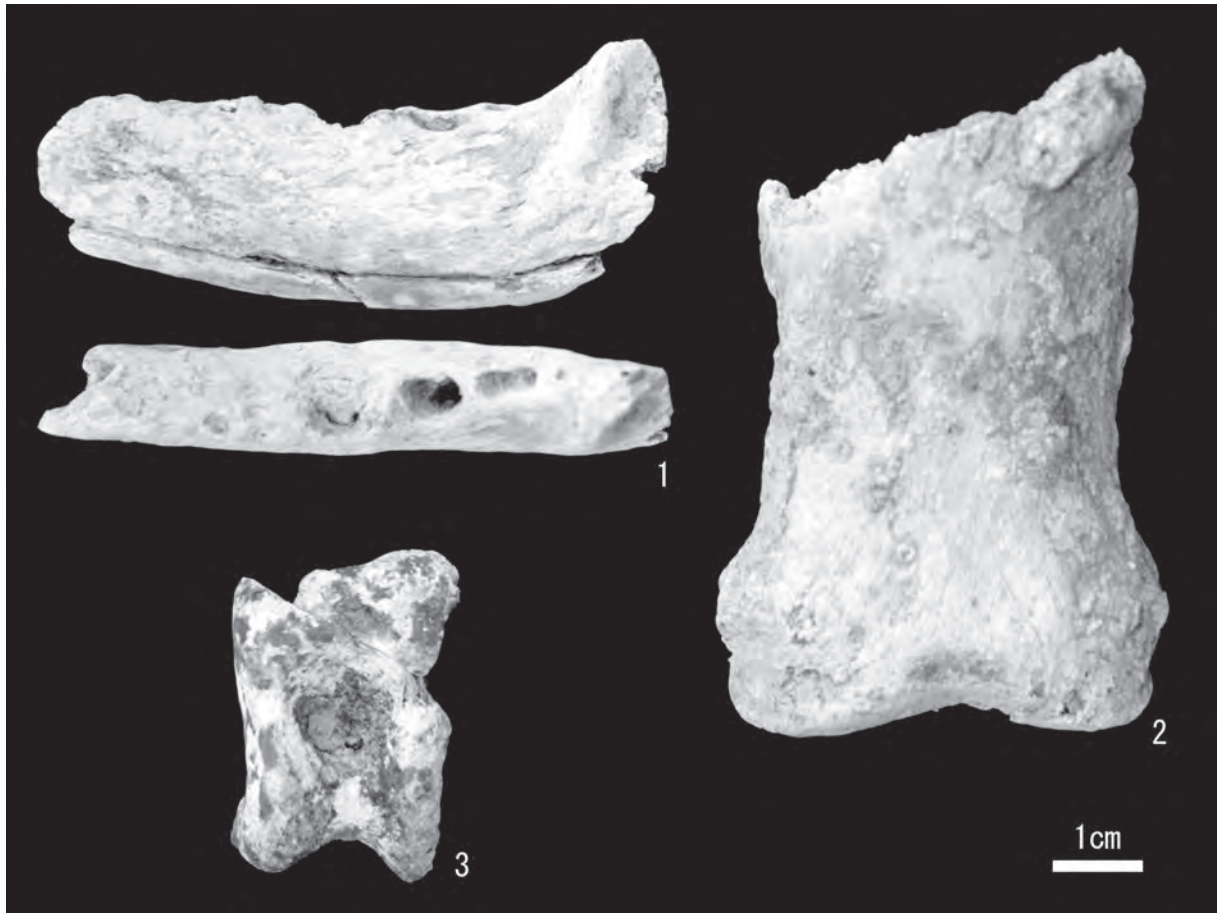


写真7 ハカノ本遺跡出土獣骨

1. イヌ左下顎骨(溝1) 2. ウマ基節骨(溝1) 3. ニホンジカ右距骨(ピット165)



1. ハカノ本遺跡 2次調査遠景(東から)



2. 同 1 区全景(上空から)



1. 1～3号掘立柱建物跡、2・4・7号柵跡、9・22号土坑(上空から)



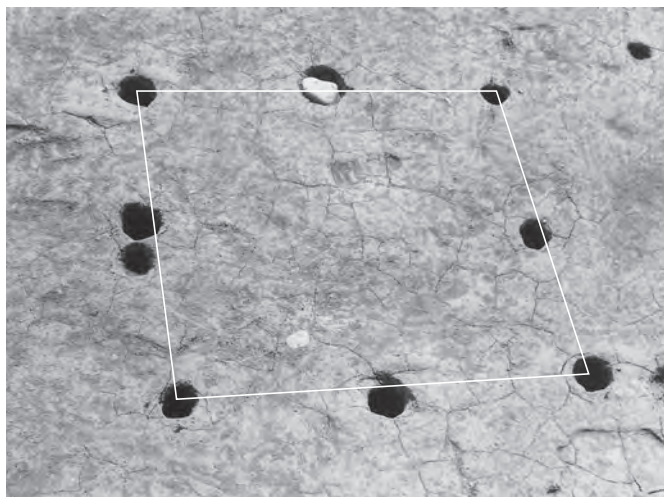
2. 8号掘立柱建物跡(南西から)



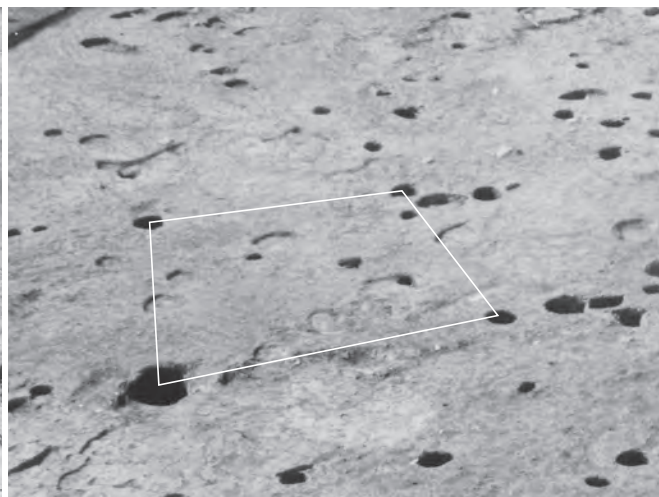
1. 4・5・9・14号掘立柱建物跡(西から)



2. 9・11~14号掘立柱建物跡、1号柵跡(南上空から)



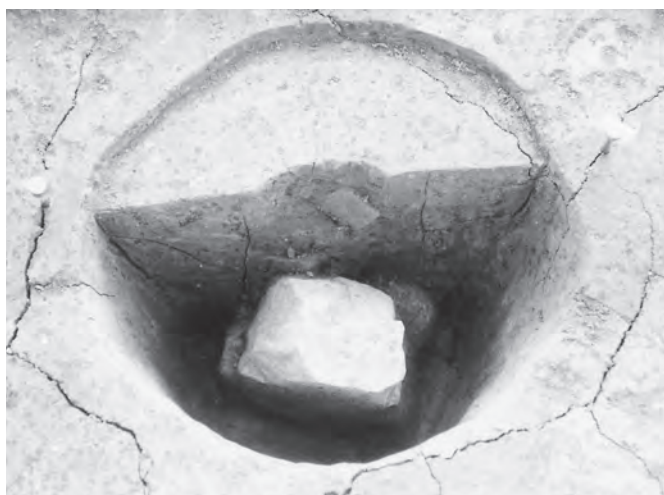
1. 10号掘立柱建物跡(北東から)



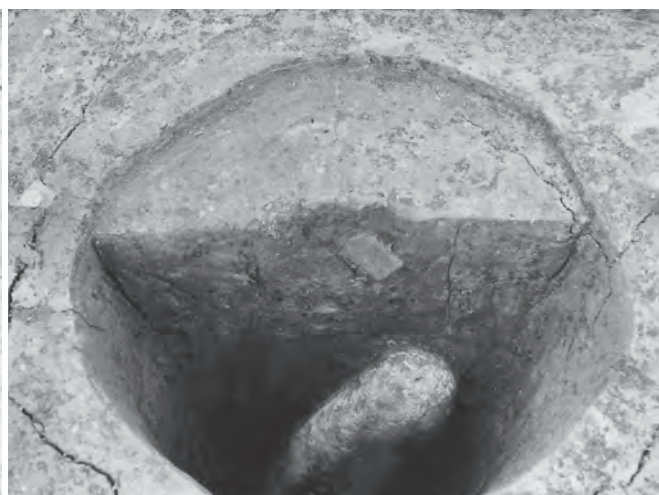
2. 17号掘立柱建物跡(東から)



3. 16・18号掘立柱建物跡、
3a・3b号柵跡、4・5号
溝状遺構(南上空から)



4. 1号掘立柱建物跡柱3土層(北から)



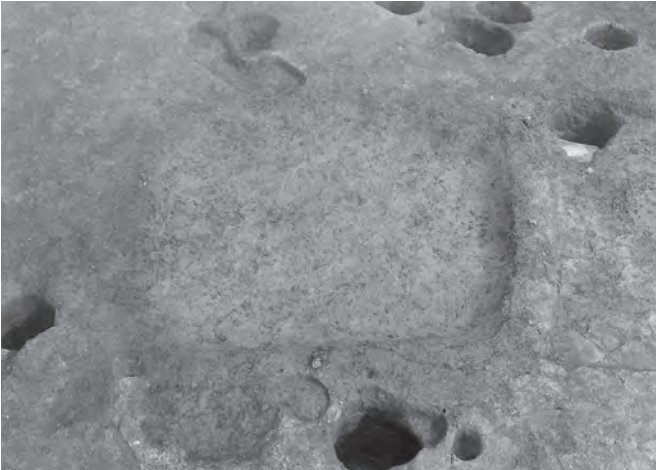
5. 2号掘立柱建物跡柱2土層(北から)



1. 1号土坑(南西から)



2. 2号土坑(西から)



3. 3号土坑(西から)



4. 同左遺物出土状況(北西から)



5. 同上土層1(南西から)



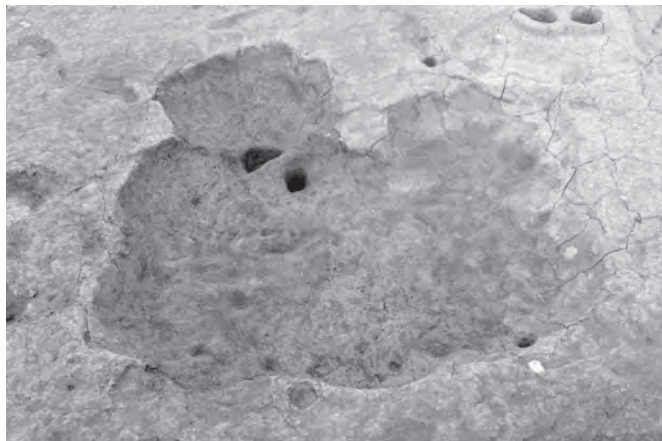
6. 同左2(北東から)



7. 4号土坑(北から)



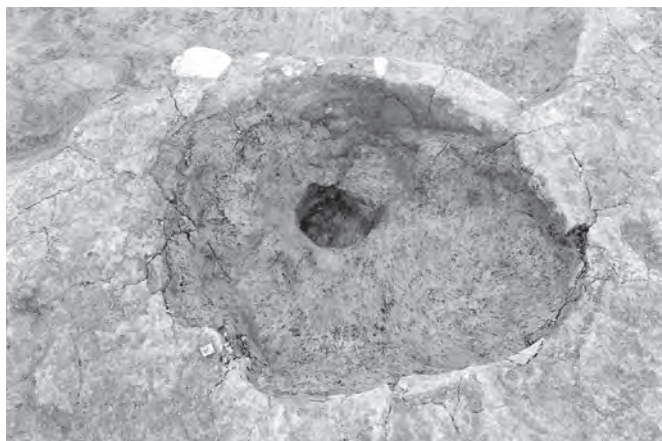
8. 同左土層(北から)



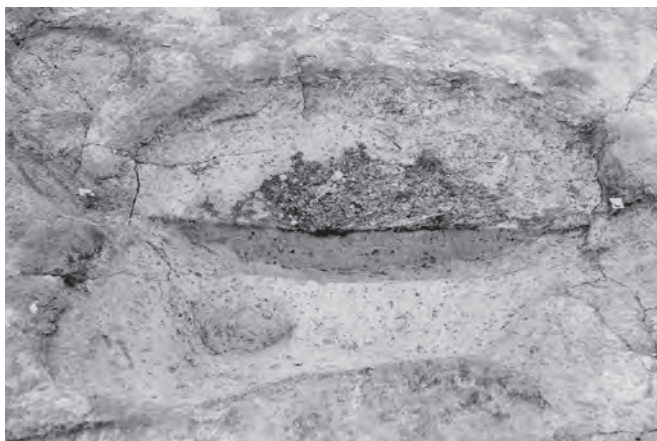
1. 5号土坑(北東から)



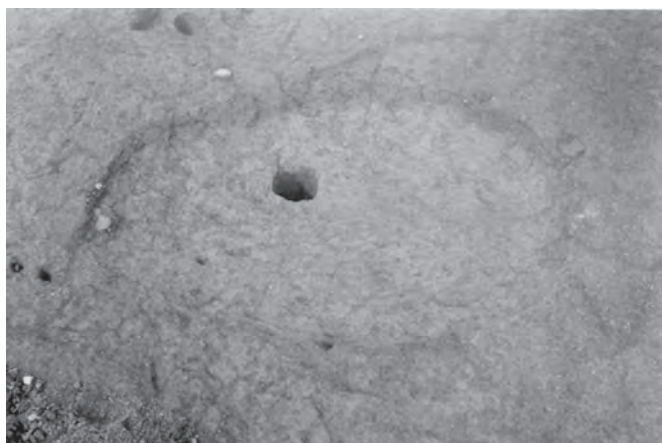
2. 同左土層(北から)



3. 6号土坑(南から)



4. 7号土坑(北西から)



5. 8号土坑(南西から)



6. 同左土層(西から)



7. 10号土坑(北西から)



8. 同左土層(南から)



1. 11号土坑(北西から)



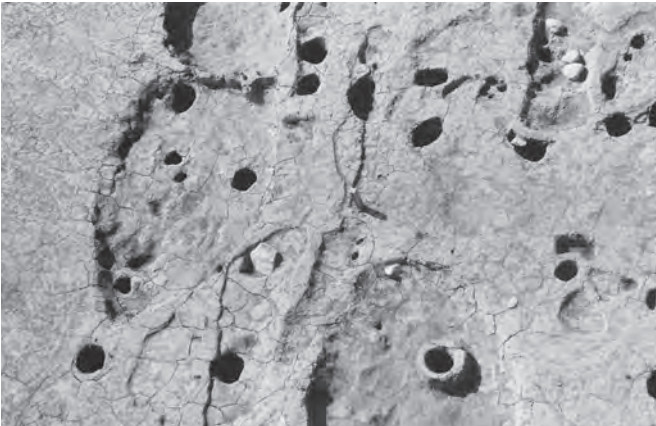
2. 12号土坑(南から)



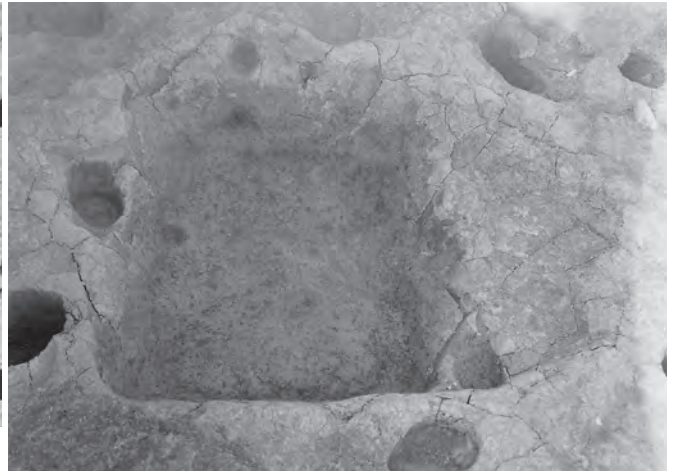
3. 13号土坑(南西から)



4. 同左土層(北東から)



5. 14号土坑(上空から)



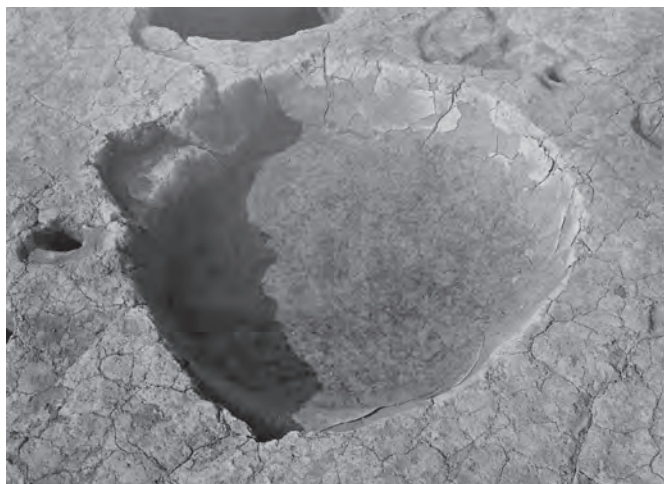
6. 15号土坑(南から)



7. 15号土坑遺物出土状況(東から)



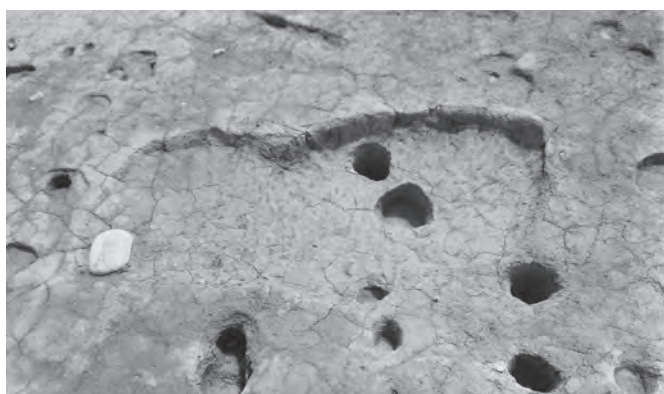
8. 同上土層(北東から)



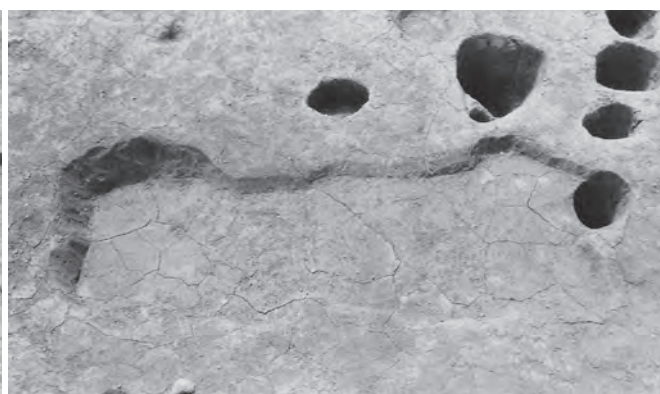
1. 16号土坑(南東から)



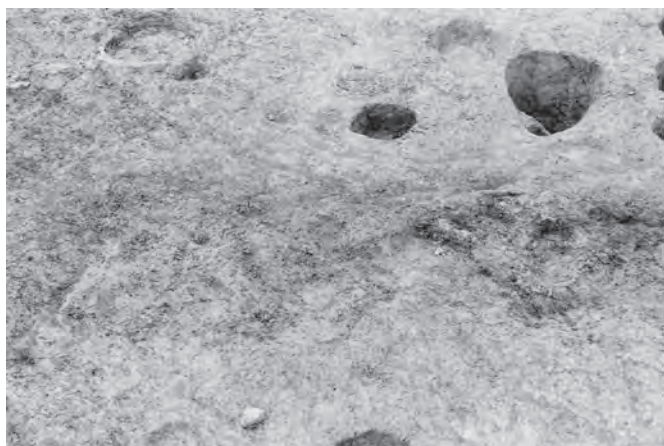
2. 17・27号土坑(北から)



3. 19・20号土坑(北から)



4. 21号土坑(北東から)



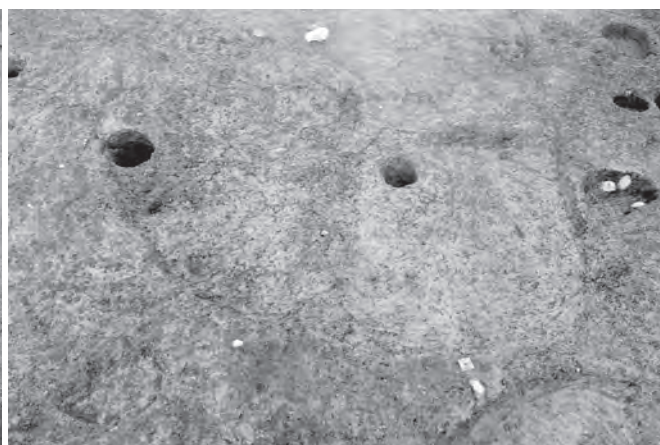
5. 21号土坑焼土・炭化物出土状況(東から)



6. 23号土坑(南から)



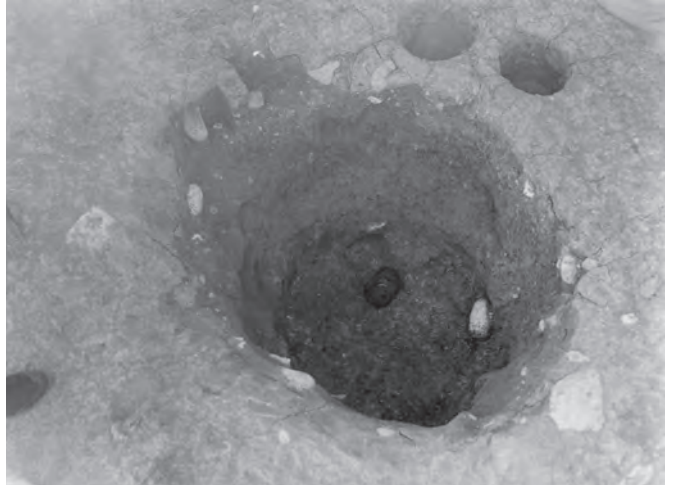
7. 24号土坑(南西から)



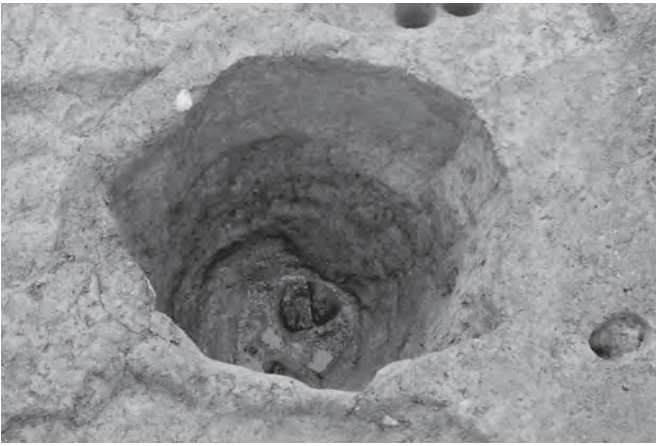
8. 25・26号土坑(北西から)



1. 1号井戸貼石検出状況(南西から)



2. 同左貼石除去状況(南から)



3. 2号井戸(西から)



4. 同左土層(西から)



5. 3号井戸(南東から)



6. 同左土層(西から)



7. 同上遺物出土状況(東から)



1. 4号井戸(北東から)



2. 同左遺物出土状況(北西から)



3. 5号井戸(北から)



4. 1号溝状遺構東端遺物出土状況(東から)



5. 1号溝状遺構西端集石検出状況(西から)



6. 1号溝状遺構土層(東から)

1. 1号溝状遺構集石
下の曲げ物等木製品
出土状況
(南東から)



2. 同人形・カヤ・曲げ
物底板等木製品出
土状況(北西から)



3. 同漆碗・杭・板材
等木製品出土状況
(南東から)

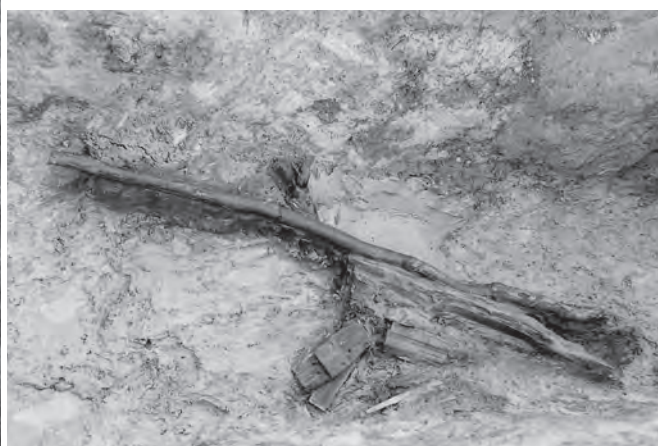




1. 1号溝状遺構西半部木製品出土状況(西から)



2. 同箱部材出土状況(北から)



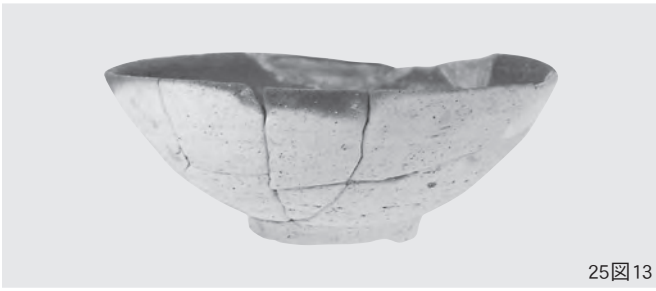
3. 同下駄・棒状部材出土状況(南東から)



4. 同絵馬・形代・しゃもじ等木製品出土状況(南東から)



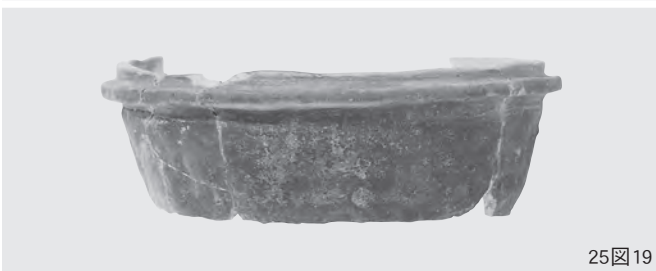
25图10



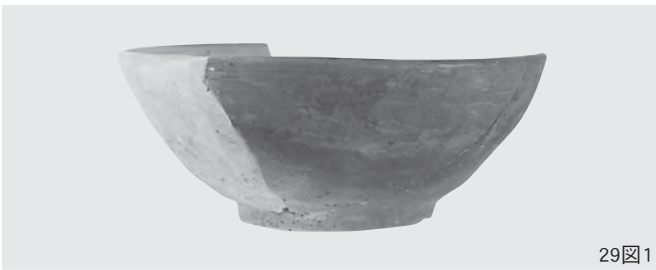
25图13



25图18



25图19



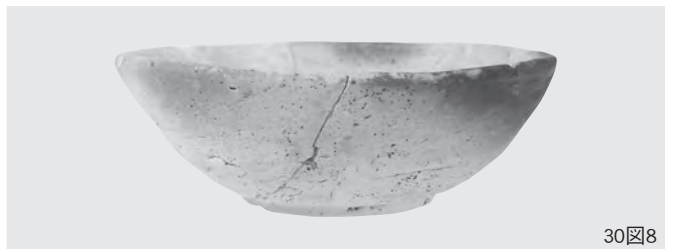
29图1



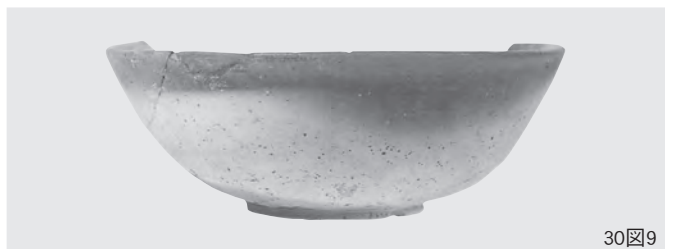
29图7



30图7



30图8



30图9



30图13



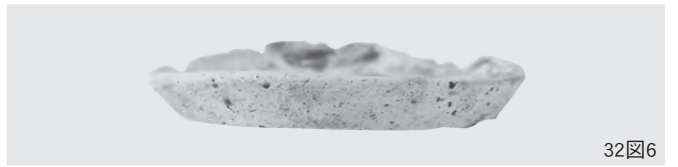
32图3



32图4



32图5



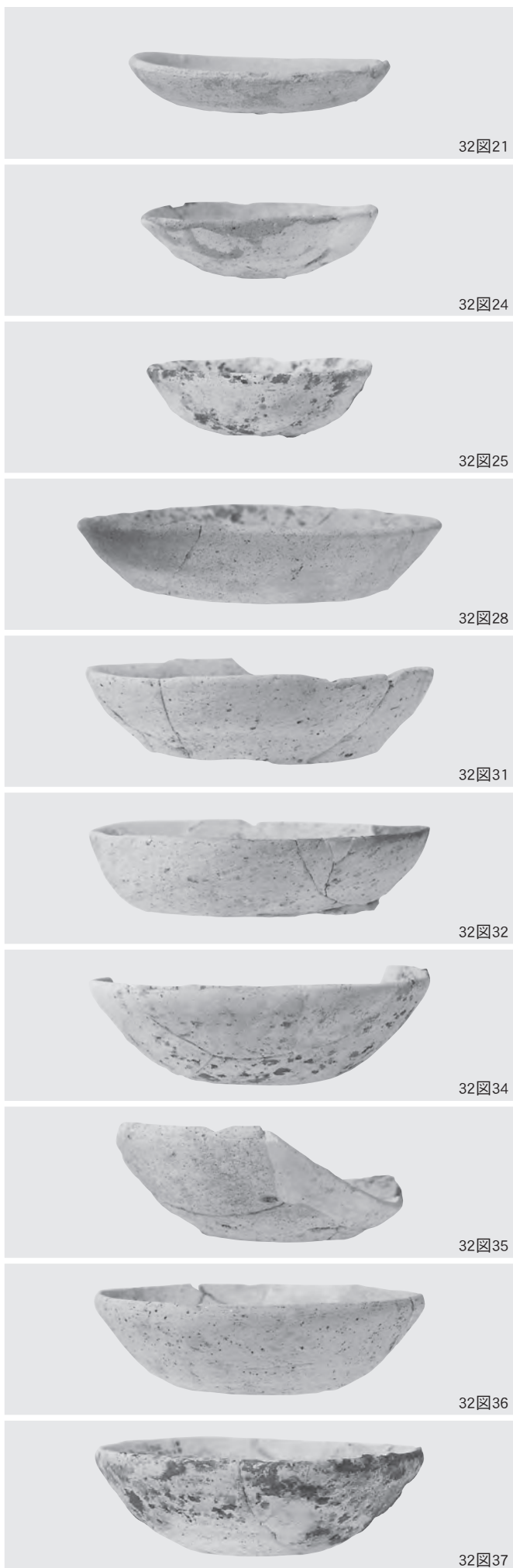
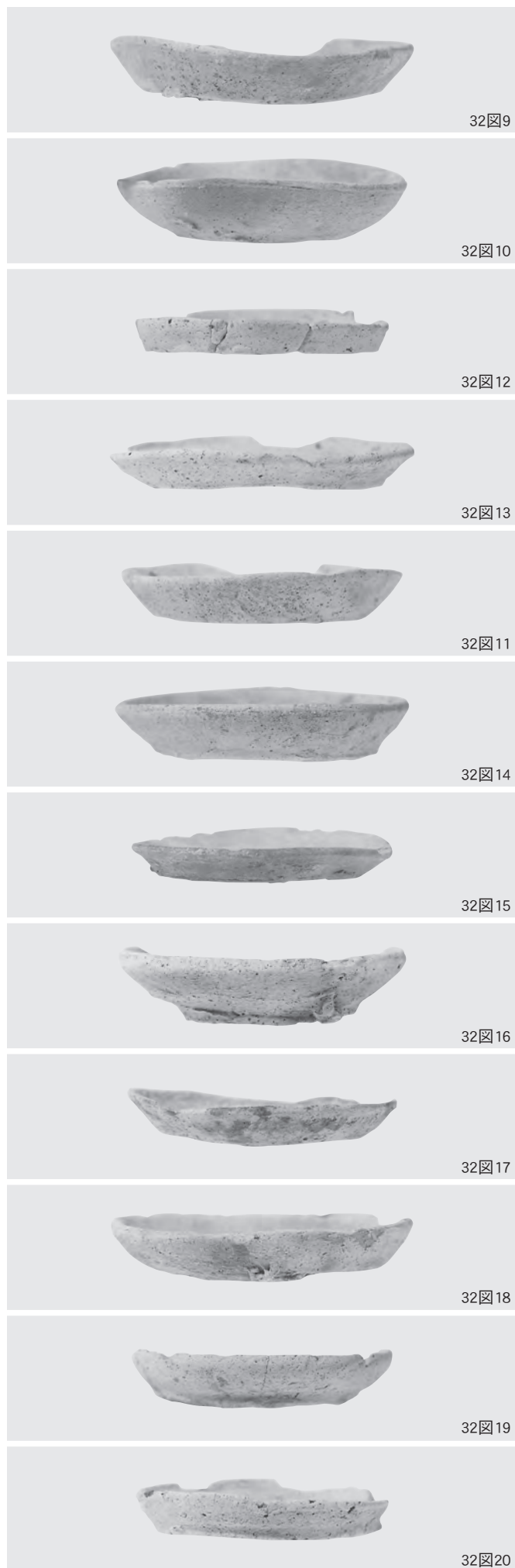
32图6



32图7



32图8





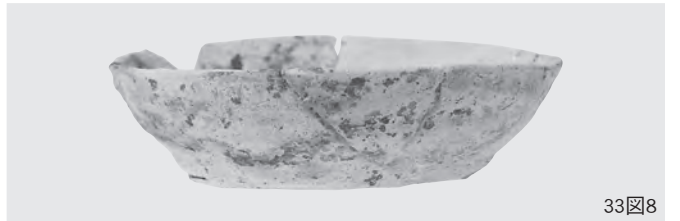
32图38



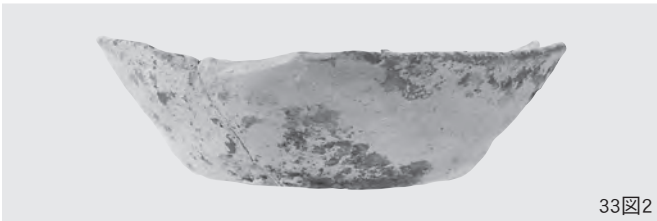
33图12



33图1



33图8



33图2



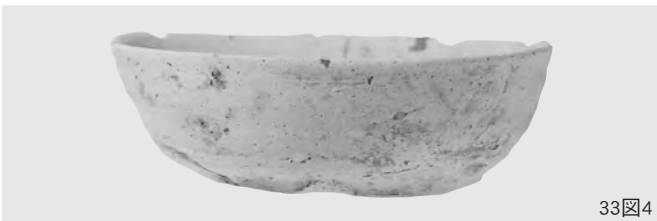
33图11



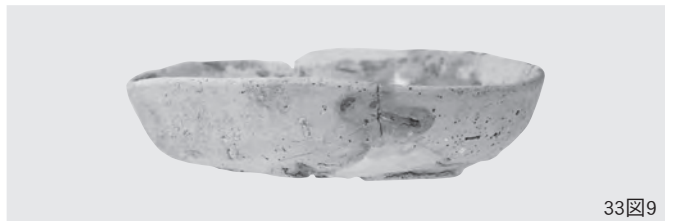
33图3



33图16



33图4



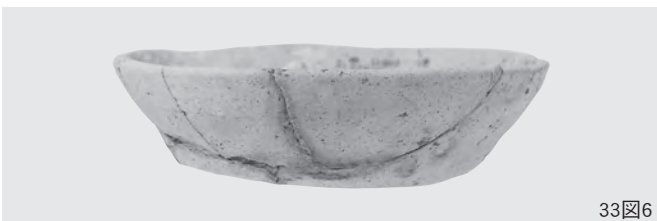
33图9



33图5



33图13



33图6



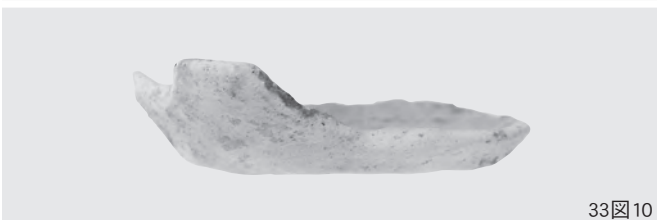
34图1



33图7



34图4



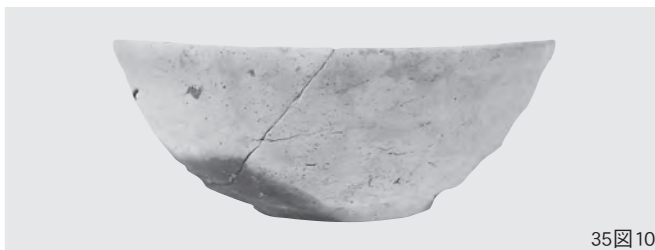
33图10



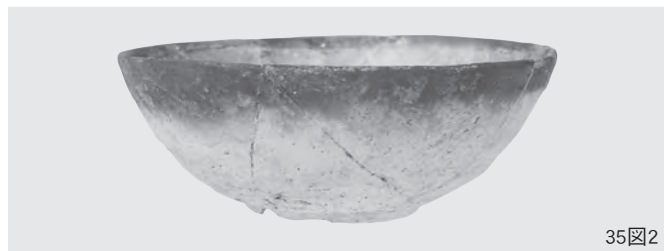
34图2



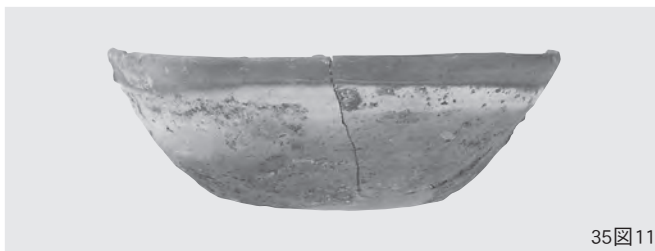
35图1



35图10



35图2



35图11



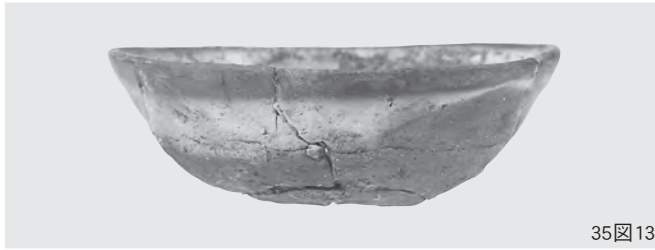
35图4



35图12



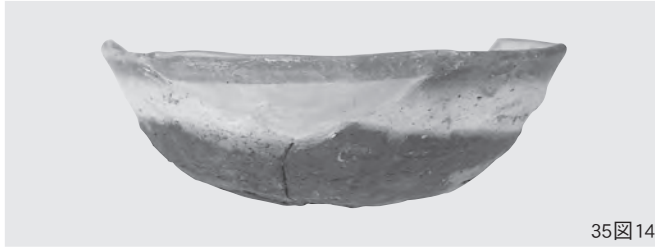
35图5



35图13



35图6



35图14



35图7



35图15



35图8



35图16



35图9



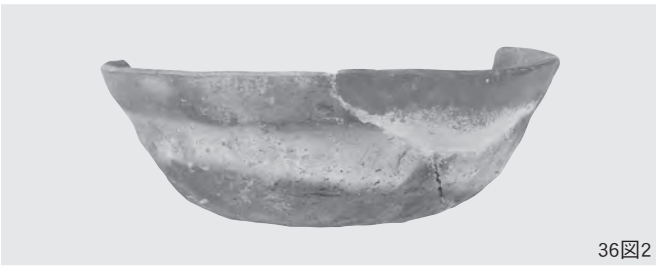
35图18



36图1



38图11



36图2



38图15



36图10



39图9



36图14



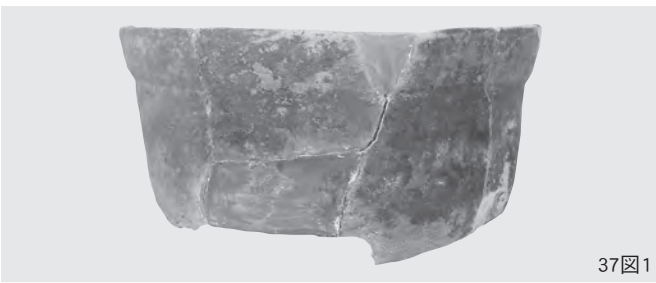
40图4



36图17



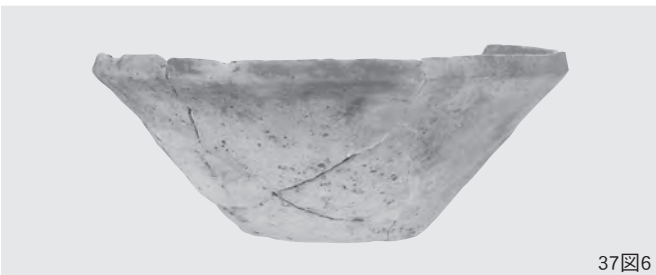
40图13



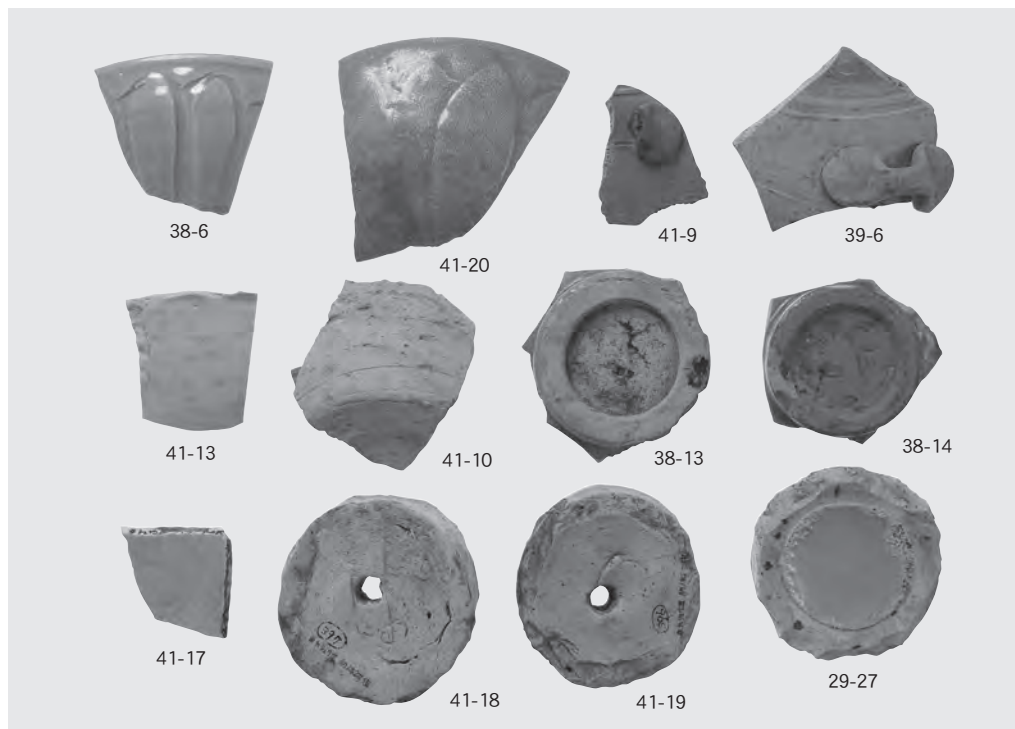
37图1



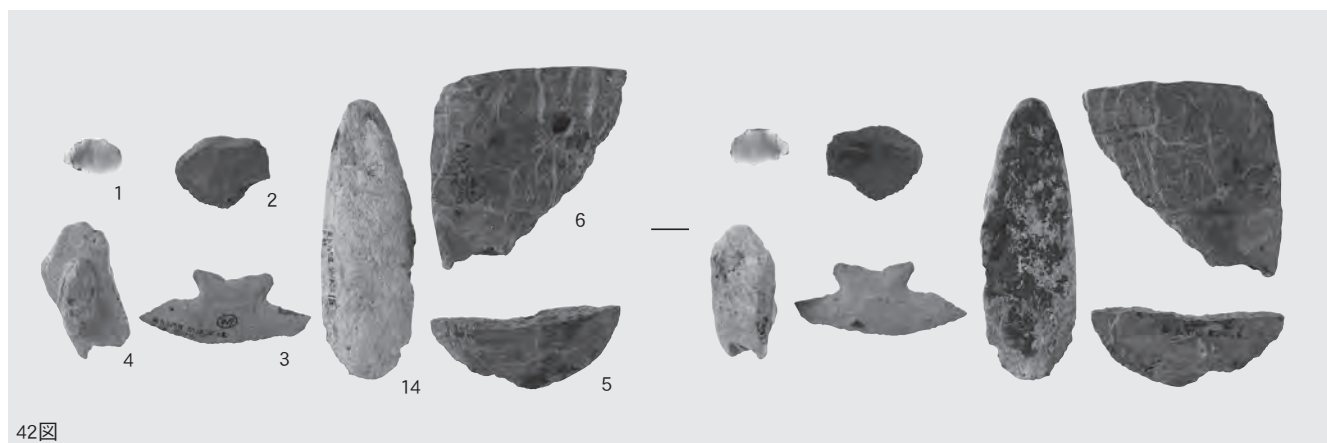
38图19



37图6



1. 1区出土陶磁器・土製品

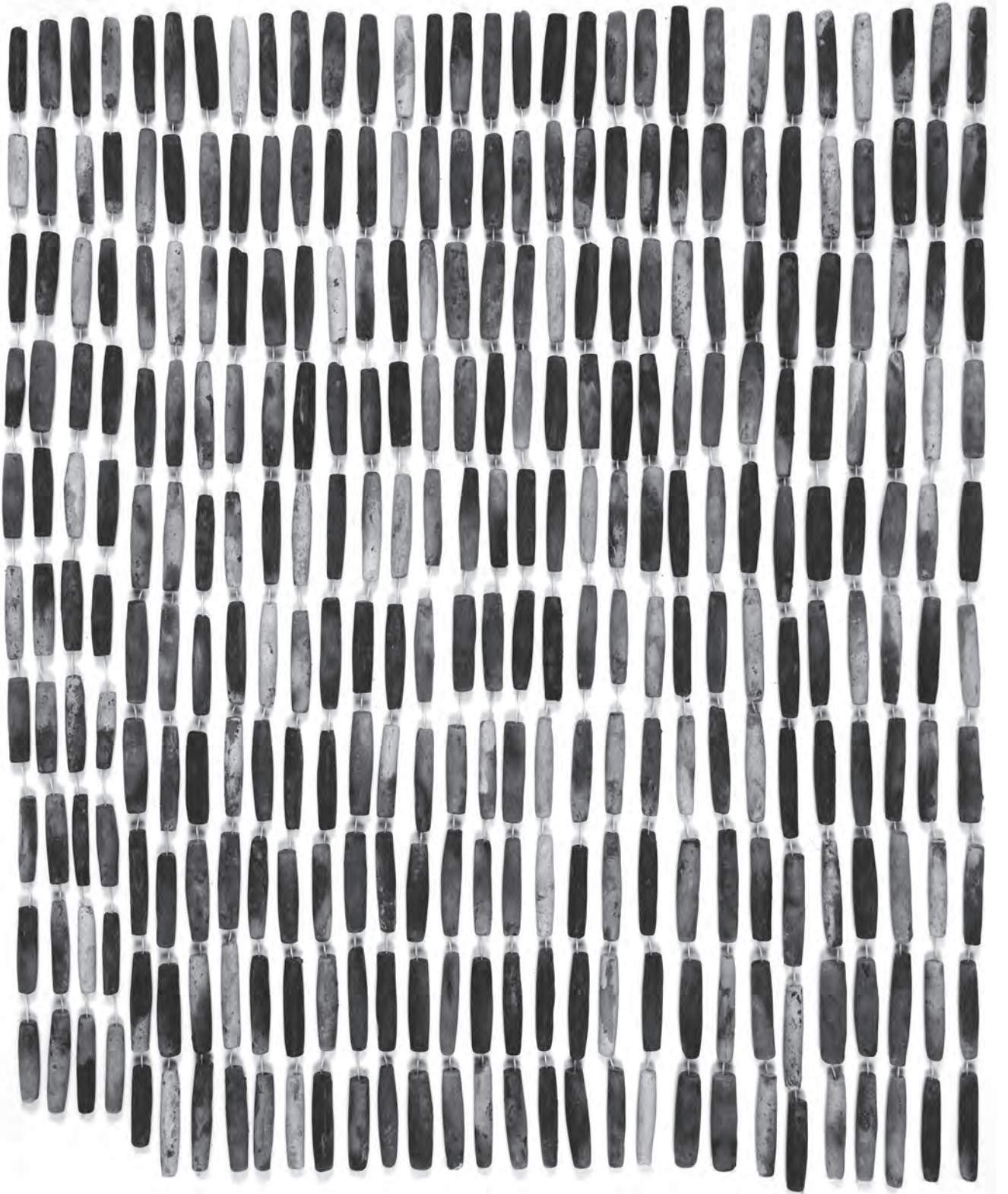


42图



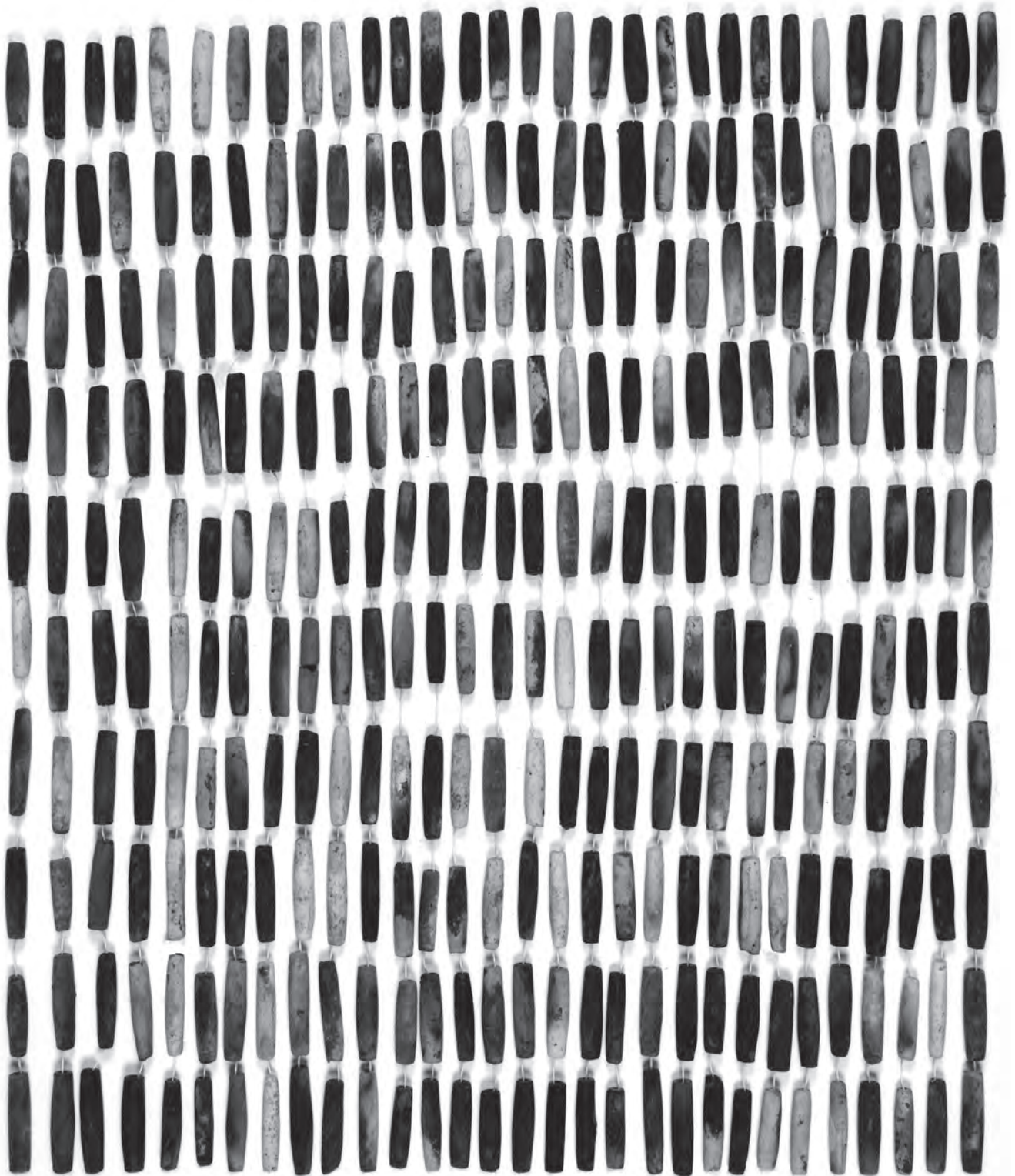
42图

2. 同石製品



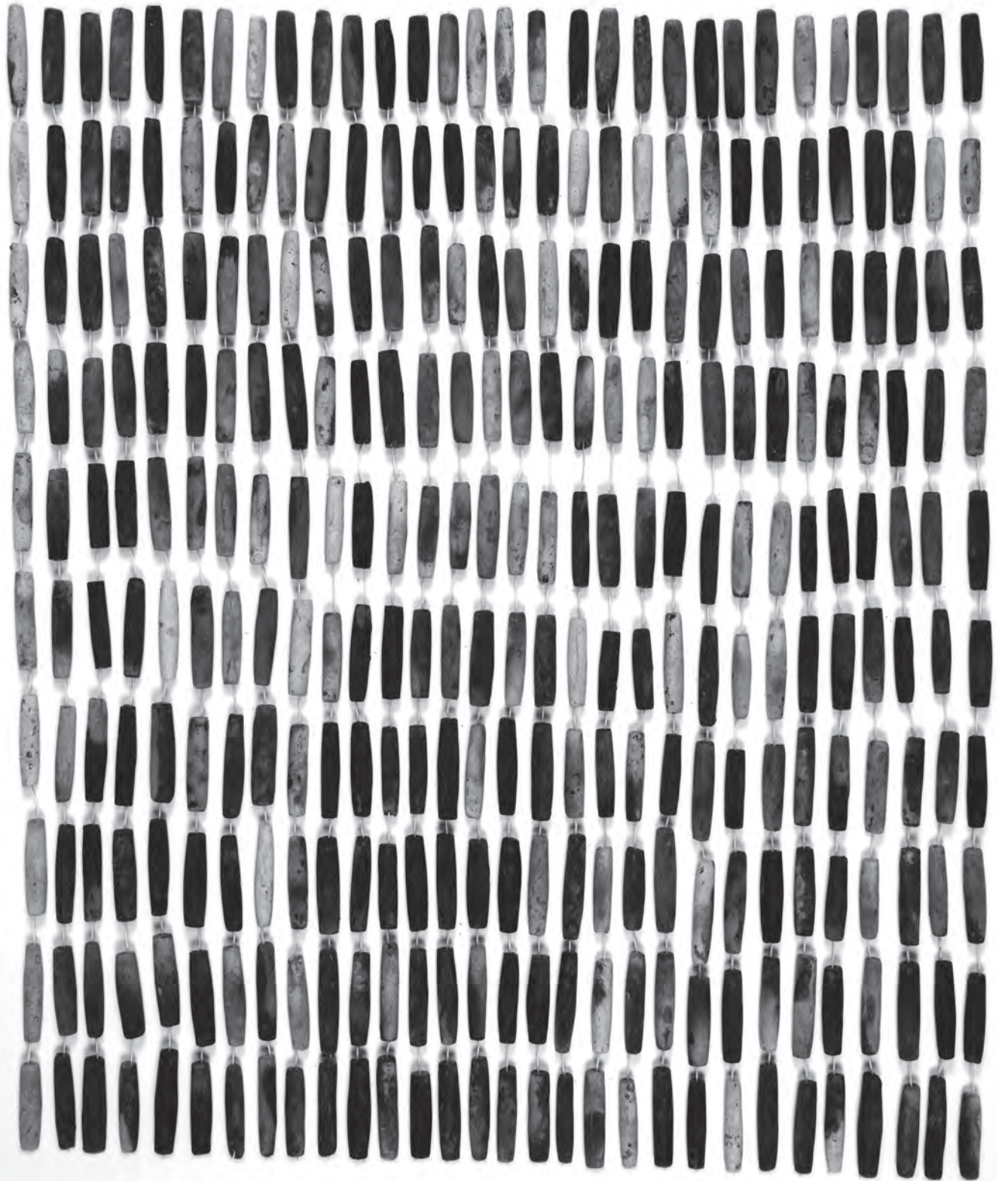
291	281	271	261	251	241	231	221	211	201	191	181	171	161	151	141	131	121	111	101	91	81	71	61	51	41	31	21	11	1	
∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
300	290	280	270	260	250	240	230	220	210	200	190	180	170	160	150	140	130	120	110	100	90	80	70	60	50	40	30	20	10	

I 区出土土製品 I



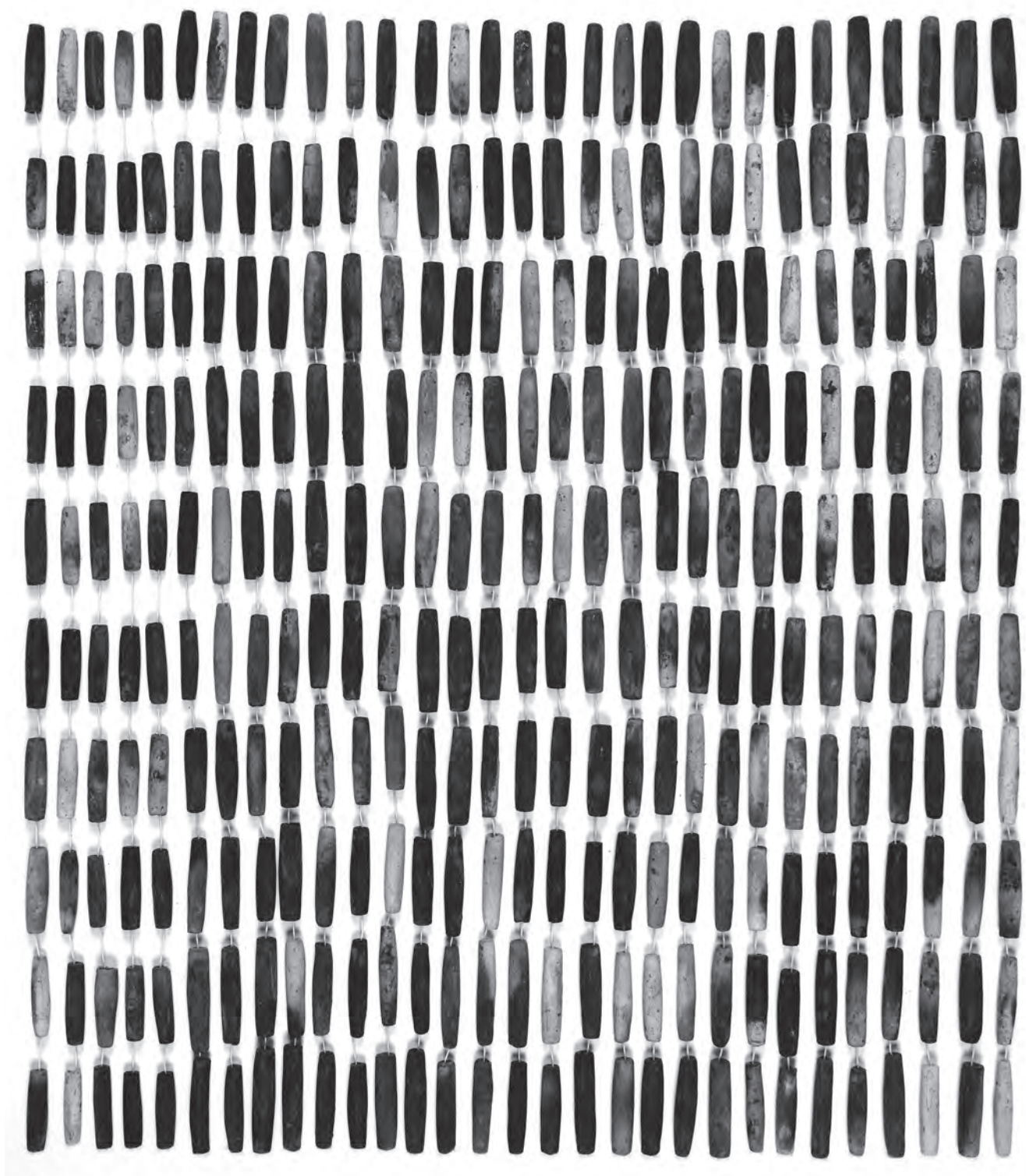
591 581 571 561 551 541 531 521 511 501 491 481 471 461 451 441 431 421 411 401 391 381 371 361 351 341 331 321 311 301
600 590 580 570 560 550 540 530 520 510 500 490 480 470 460 450 440 430 420 410 400 380 380 370 360 350 340 330 320 310

1 区出土土製品 2



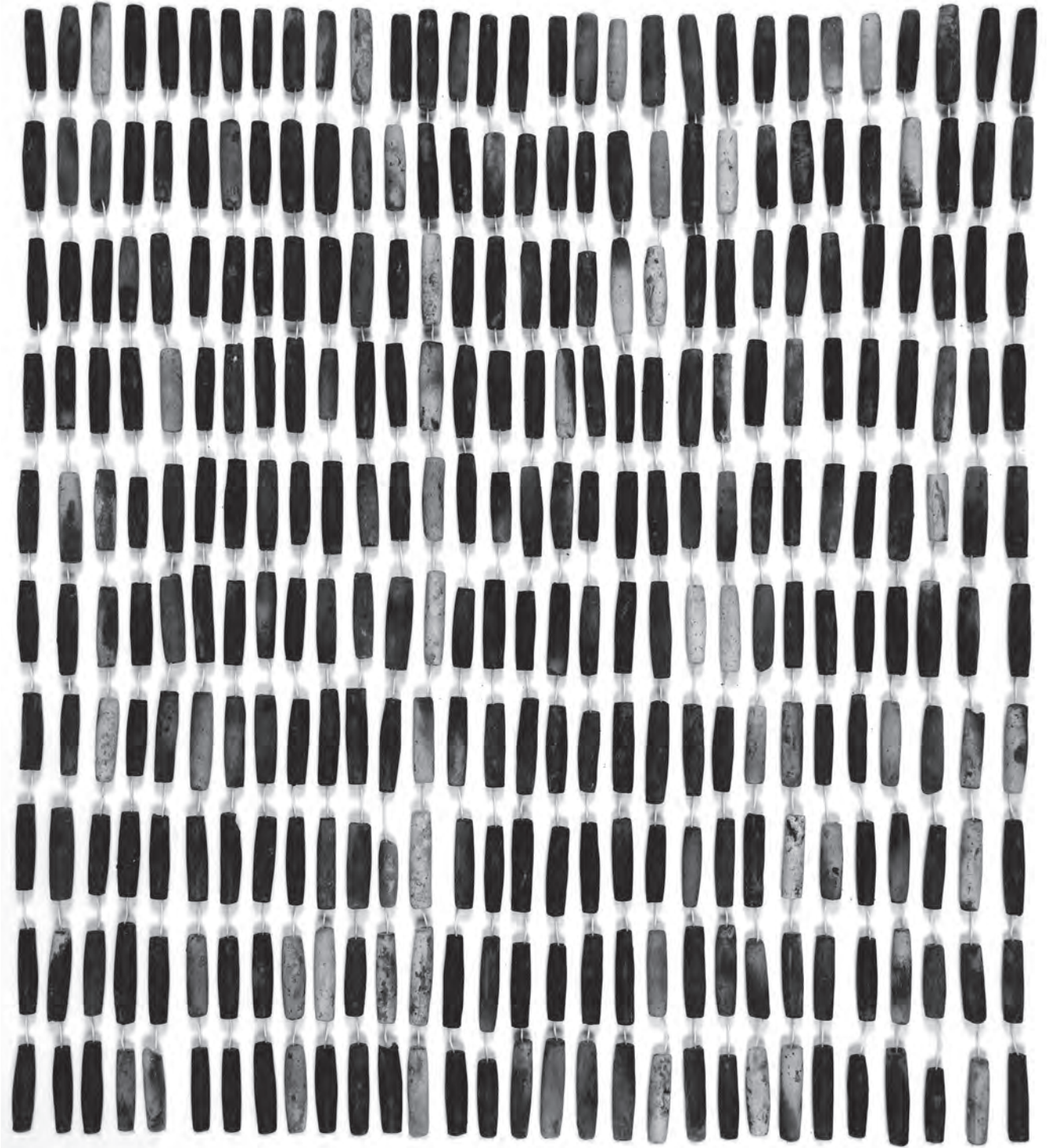
891 881 871 861 851 841 831 821 811 801 791 781 771 761 751 741 731 721 711 701 691 681 671 661 651 641 631 621 611 601
 900 890 880 870 860 850 840 830 820 810 800 790 780 770 760 750 740 730 720 710 700 690 680 670 660 650 640 630 620 610

1 区出土土製品 3



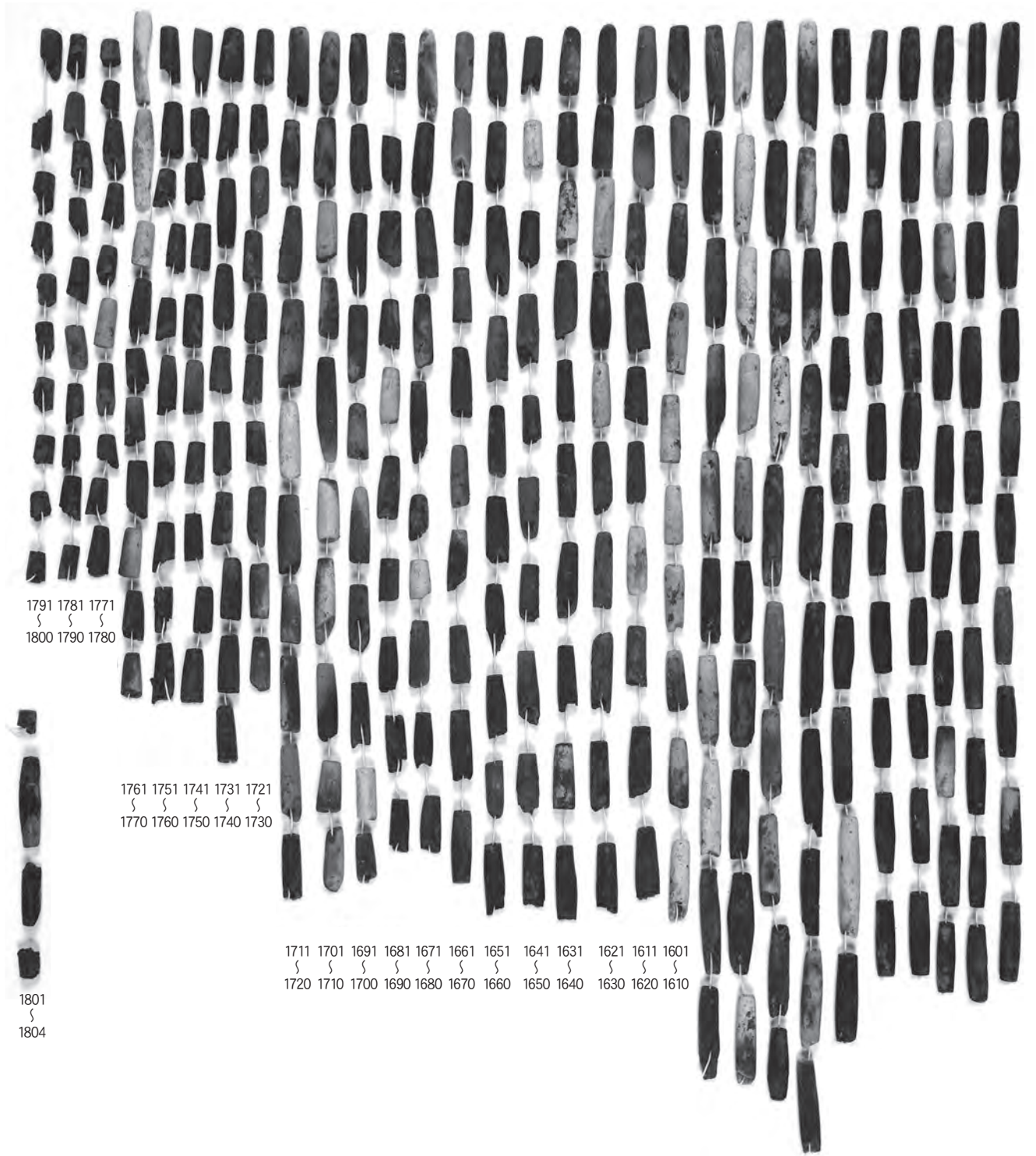
1191	1181	1171	1161	1151	1141	1131	1121	1111	1101	1091	1081	1071	1061	1051	1041	1031	1021	1011	1001	991	981	971	961	951	941	931	921	911	901
1200	1190	1180	1170	1160	1150	1140	1130	1120	1110	1100	1090	1080	1070	1060	1050	1040	1030	1020	1010	1000	990	980	970	960	950	940	930	920	910

1 区出土土製品 4



1491 1481 1471 1461 1451 1441 1431 1421 1411 1401 1391 1381 1371 1361 1351 1341 1331 1321 1311 1301 1291 1281 1271 1261 1251 1241 1231 1221 1211 1201
1500 1490 1480 1470 1460 1450 1440 1430 1420 1410 1400 1390 1380 1370 1360 1350 1340 1330 1320 1310 1300 1290 1280 1270 1260 1250 1240 1230 1220 1210

I 区出土土製品 5



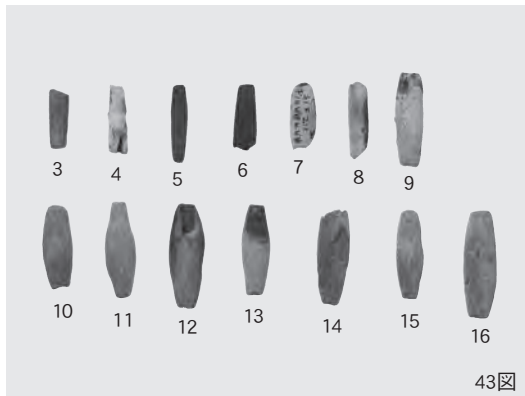
1791 1781 1771
 } } }
 1800 1790 1780

1761 1751 1741 1731 1721
 } } } } }
 1770 1760 1750 1740 1730

1711 1701 1691 1681 1671 1661 1651 1641 1631 1621 1611 1601
 } } } } } } } } } } } } }
 1720 1710 1700 1690 1680 1670 1660 1650 1640 1630 1620 1610

1801
 }
 1804

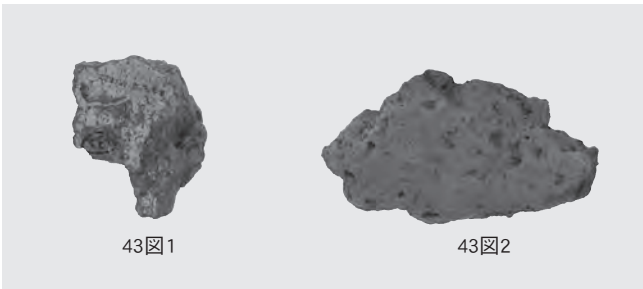
1591 1581 1571 1561 1551 1541 1531 1521 1511 1501
 } } } } } } } } } }
 1600 1590 1580 1570 1560 1550 1540 1530 1520 1510



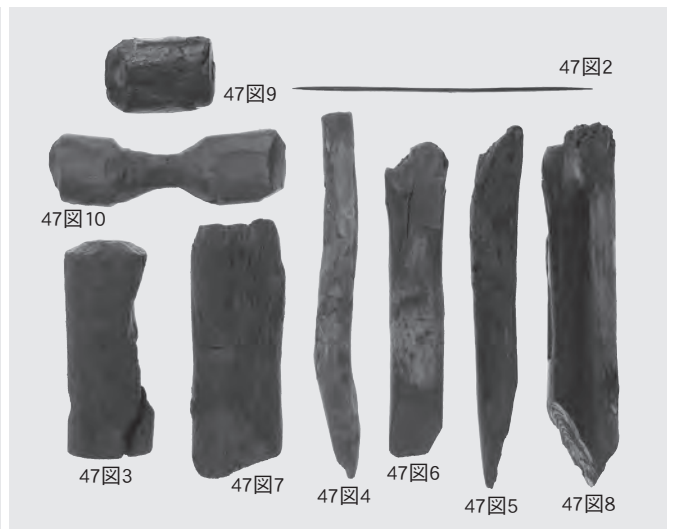
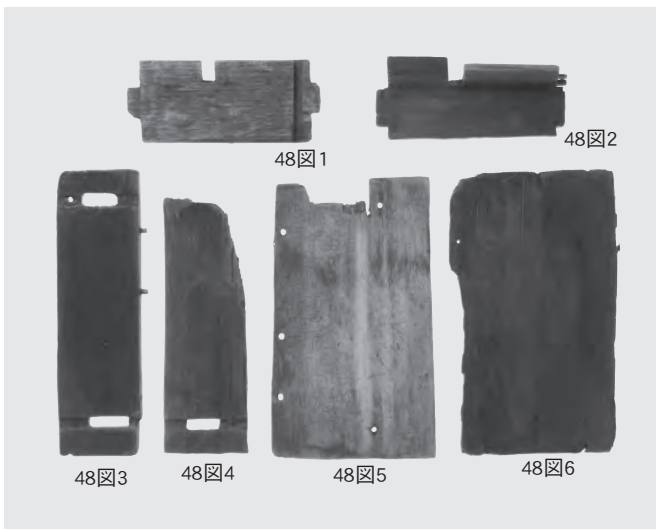
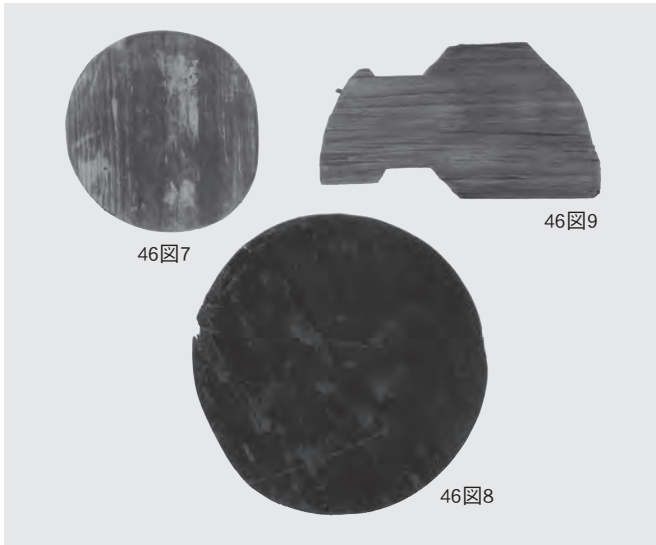
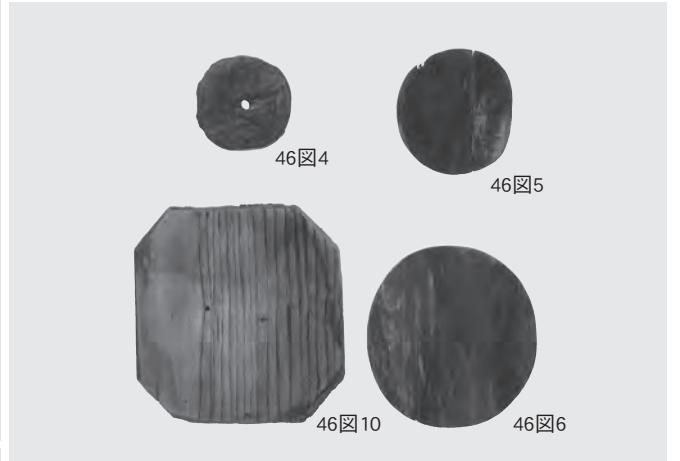
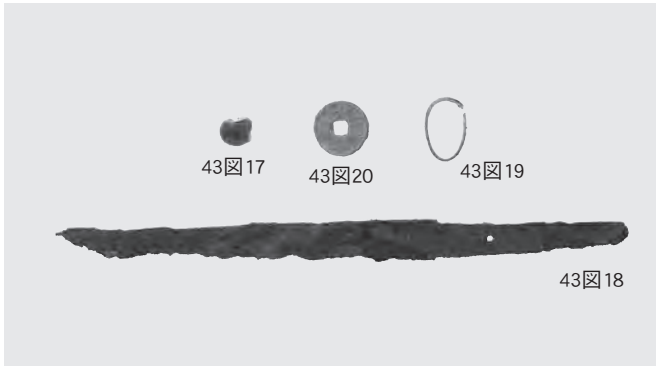
1805~1812

1813~1819

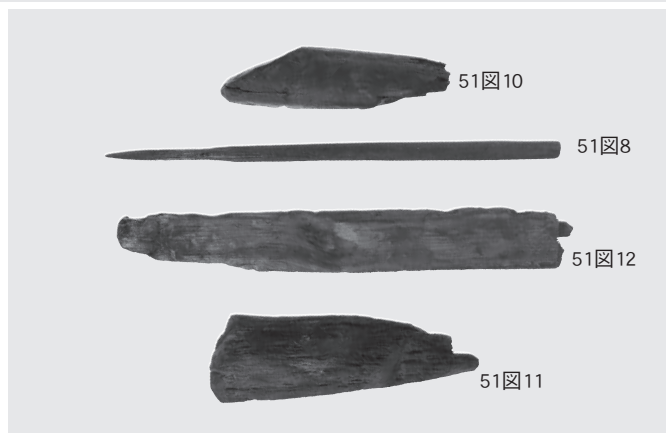
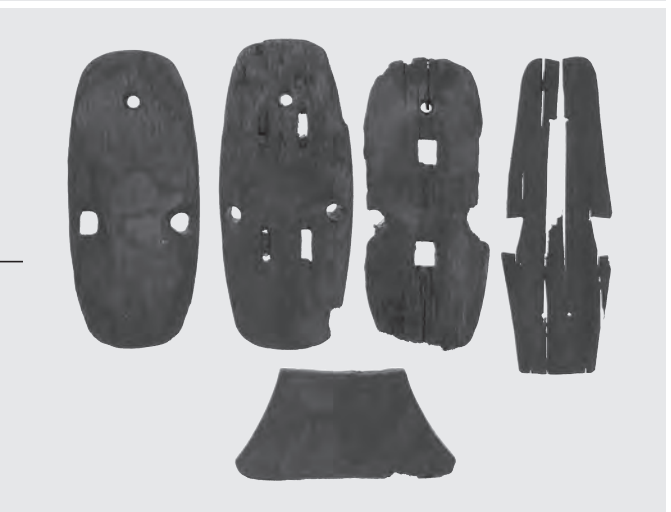
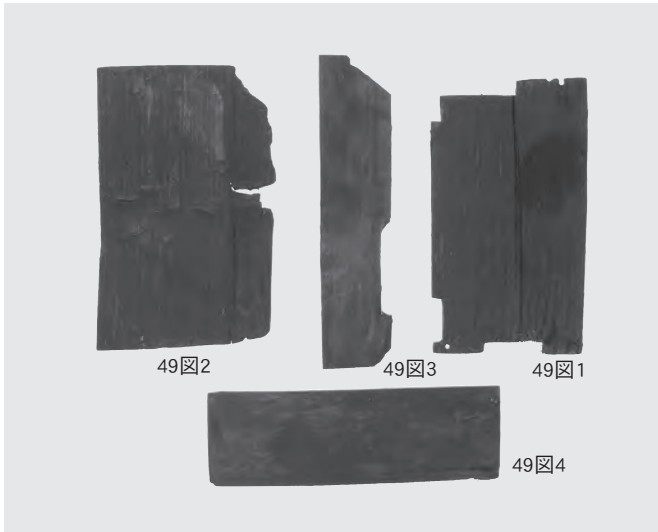
43図



1区出土土製品6



1区出土金属・ガラス・木製品





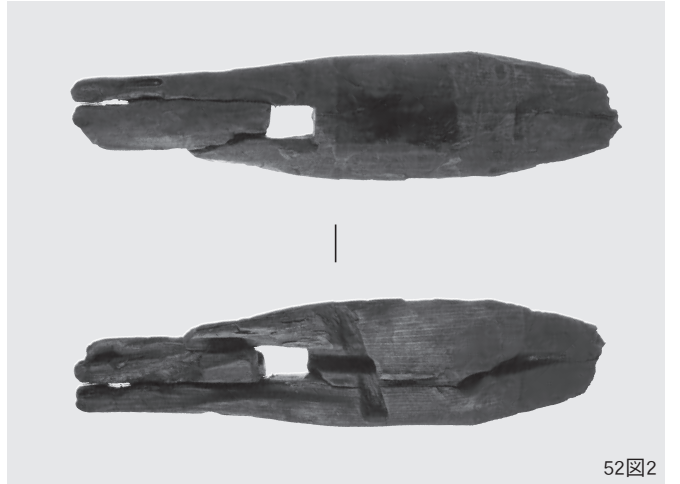
51图6



51图13



52图1

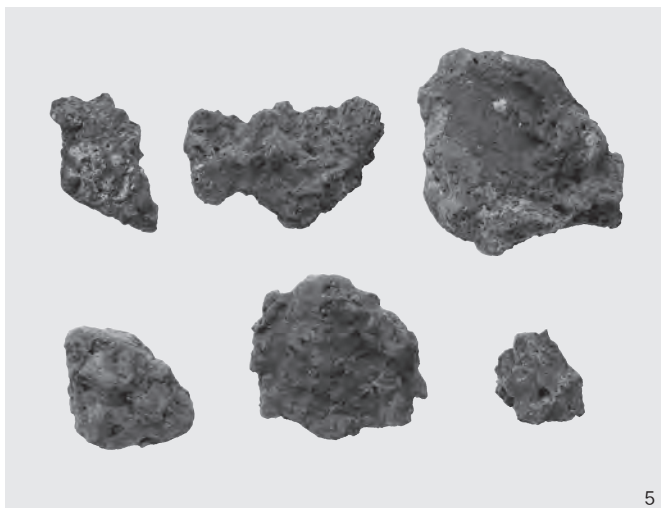
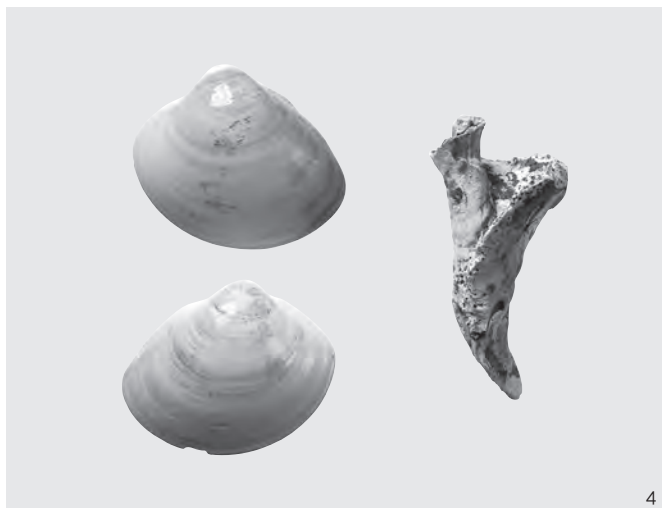


52图2



52图3

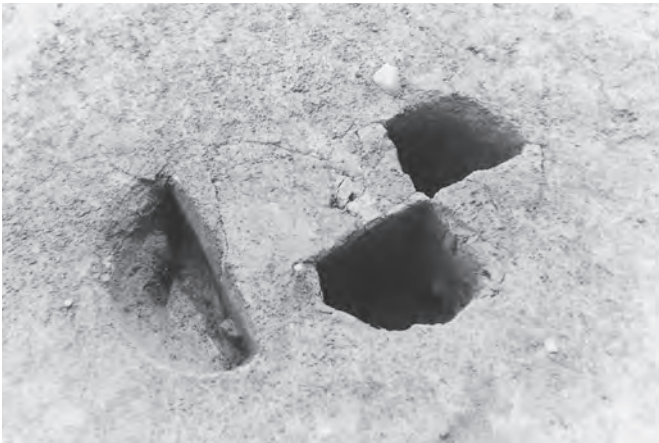
53图9



1区出土植物遺体・貝殻・鉄滓



1. 2区1号掘立柱建物跡・3号溝状遺構(上空から)



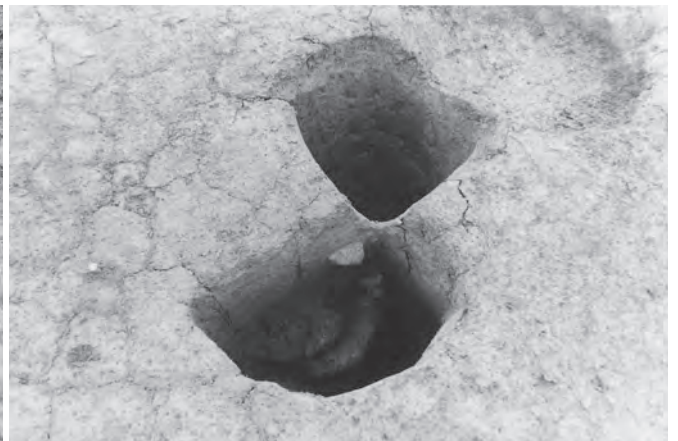
2. 1号掘立柱建物跡柱1土層(北東から)



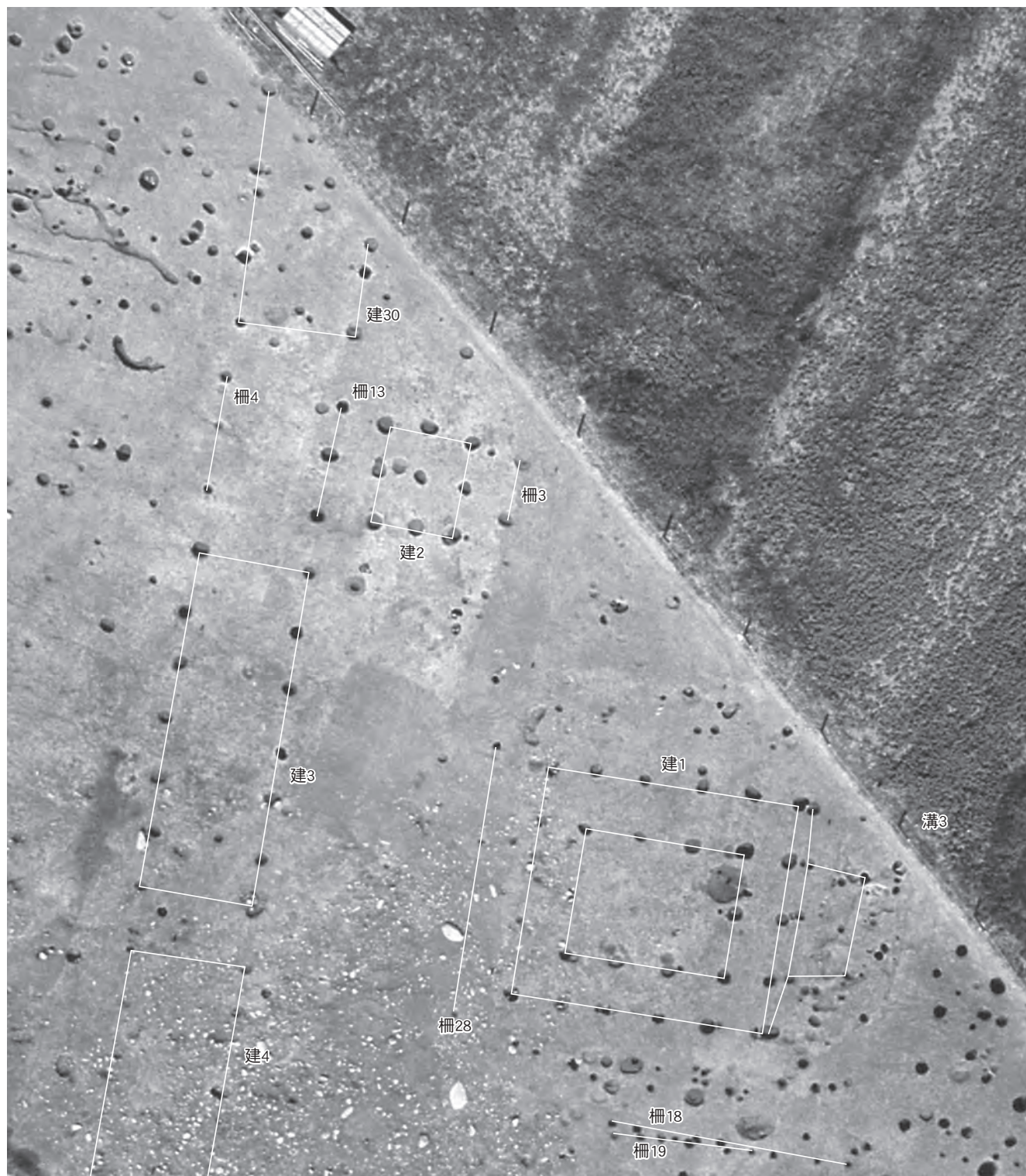
3. 同柱5土層(北東から)



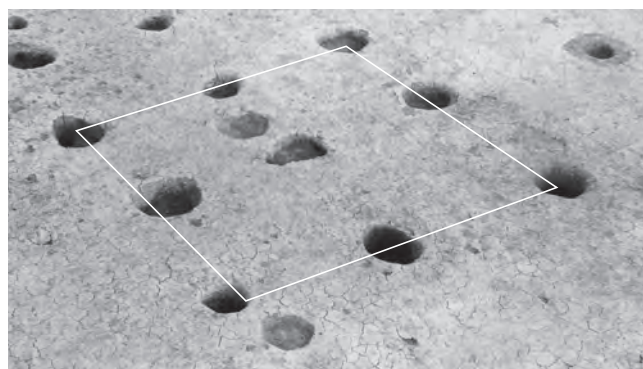
4. 同柱19(西から)



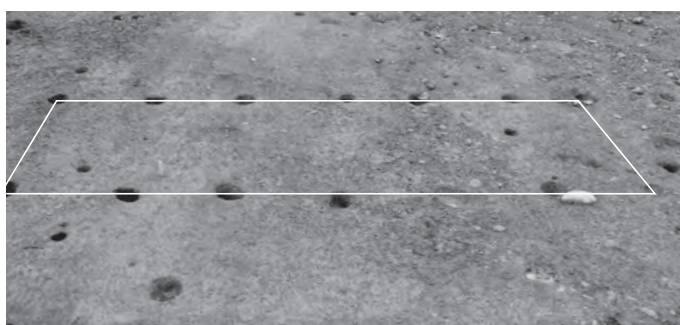
5. 同柱24土層(北東から)



1. 1～4・30号掘立柱建物跡、3・7・13・18・19号柵跡(上空から)



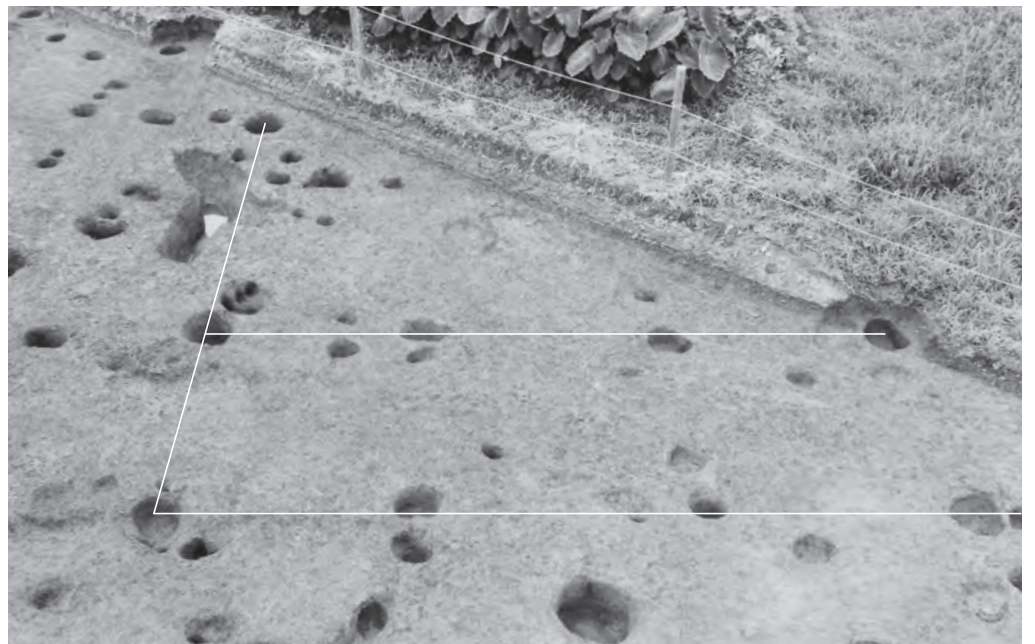
2. 2号掘立柱建物跡(北西から)



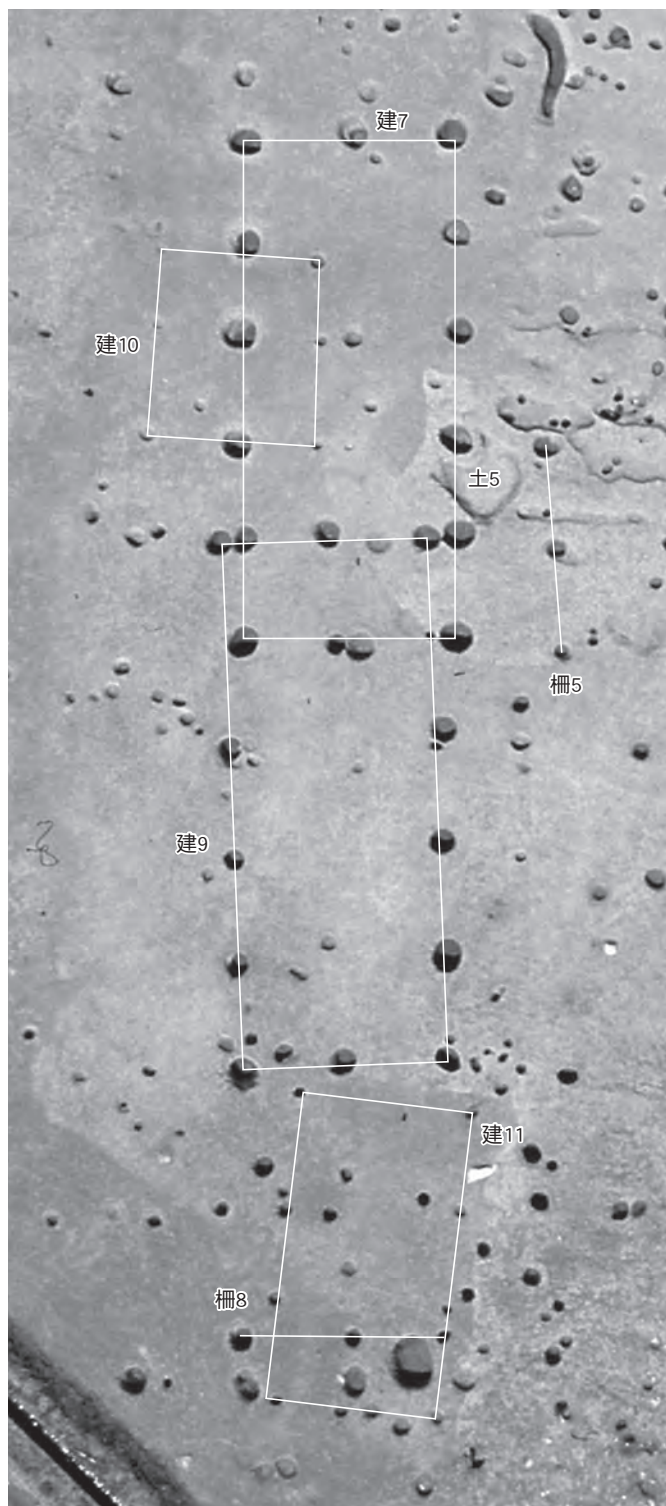
3. 3号掘立柱建物跡(東から)



1. 5～7・10号掘立柱建物跡、5号柵跡(上空から)



2. 6号掘立柱建物跡
(南から)



1. 7・9・10・11号掘立柱建物跡、5号柵跡、5号土坑(上空から)



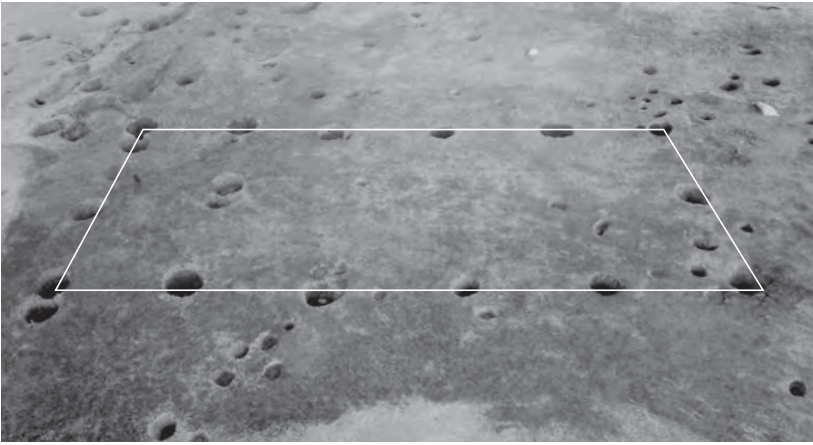
2. 7・10号掘立柱建物跡(南から)



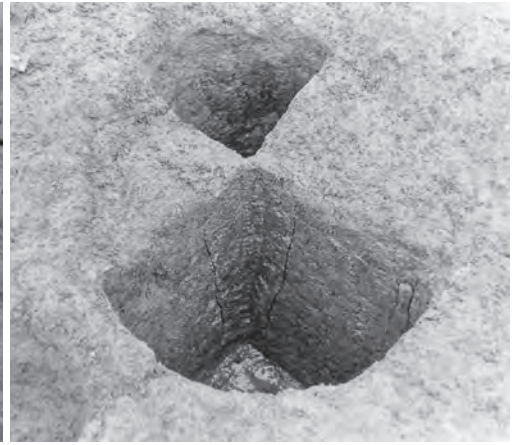
3. 7号掘立柱建物跡柱4土層(東から)



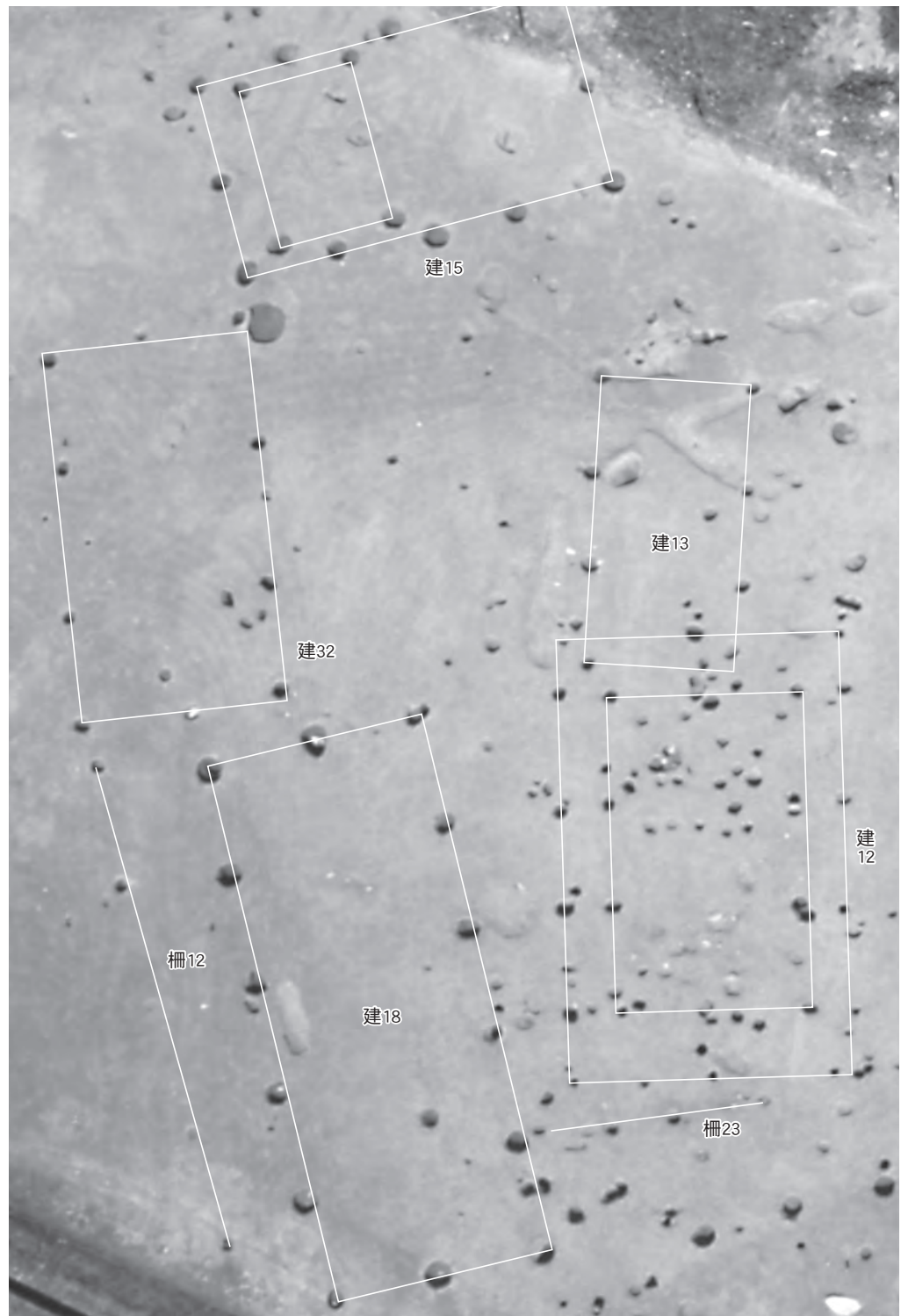
4. 7号掘立柱建物跡(東から)



1. 9号掘立柱建物跡(東から)



2. 同左柱1土層(西から)



3. 12・13・15・18・32号掘立柱建物跡、12・23号柵跡・2号溝状遺構(上空から)



1. 14号掘立柱建物跡(東から)



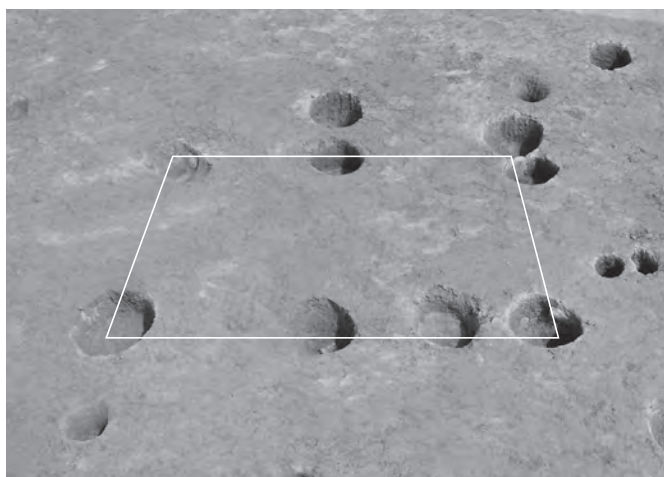
2. 同左柱2土層(北から)



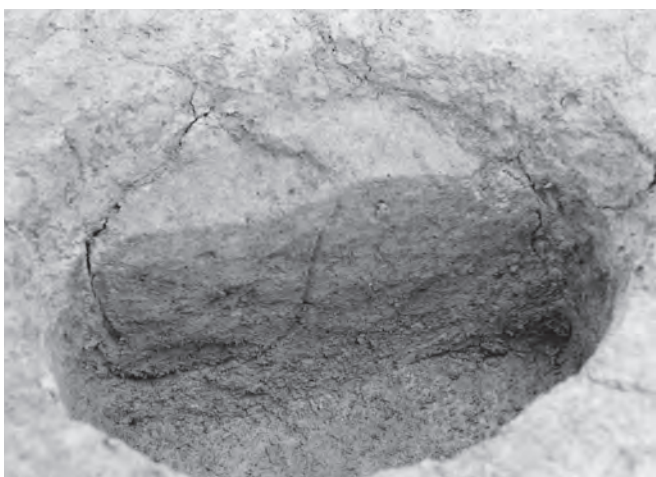
3. 15号掘立柱建物跡(南東から)



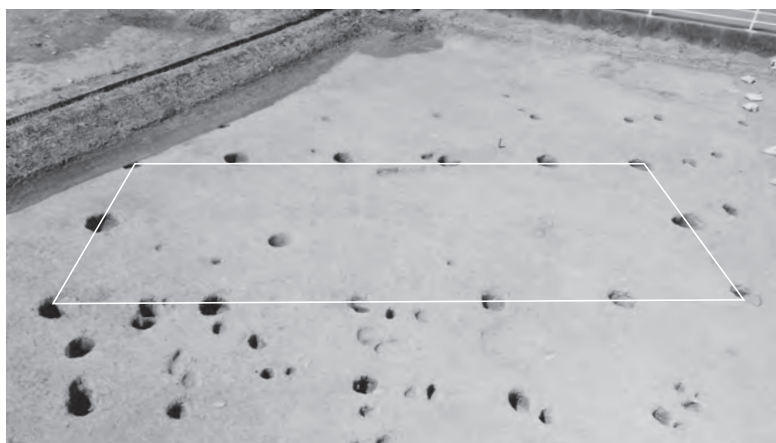
4. 同左柱1土層(北東から)



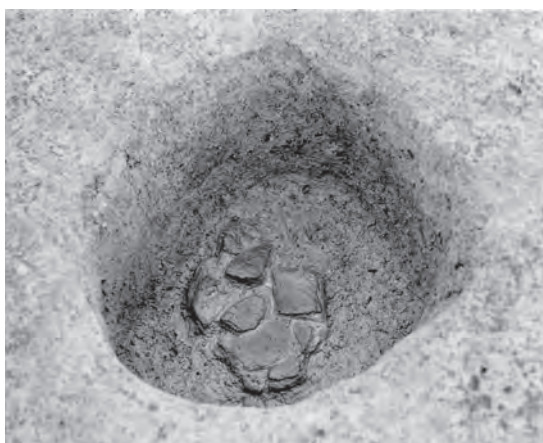
5. 16号掘立柱建物跡(南から)



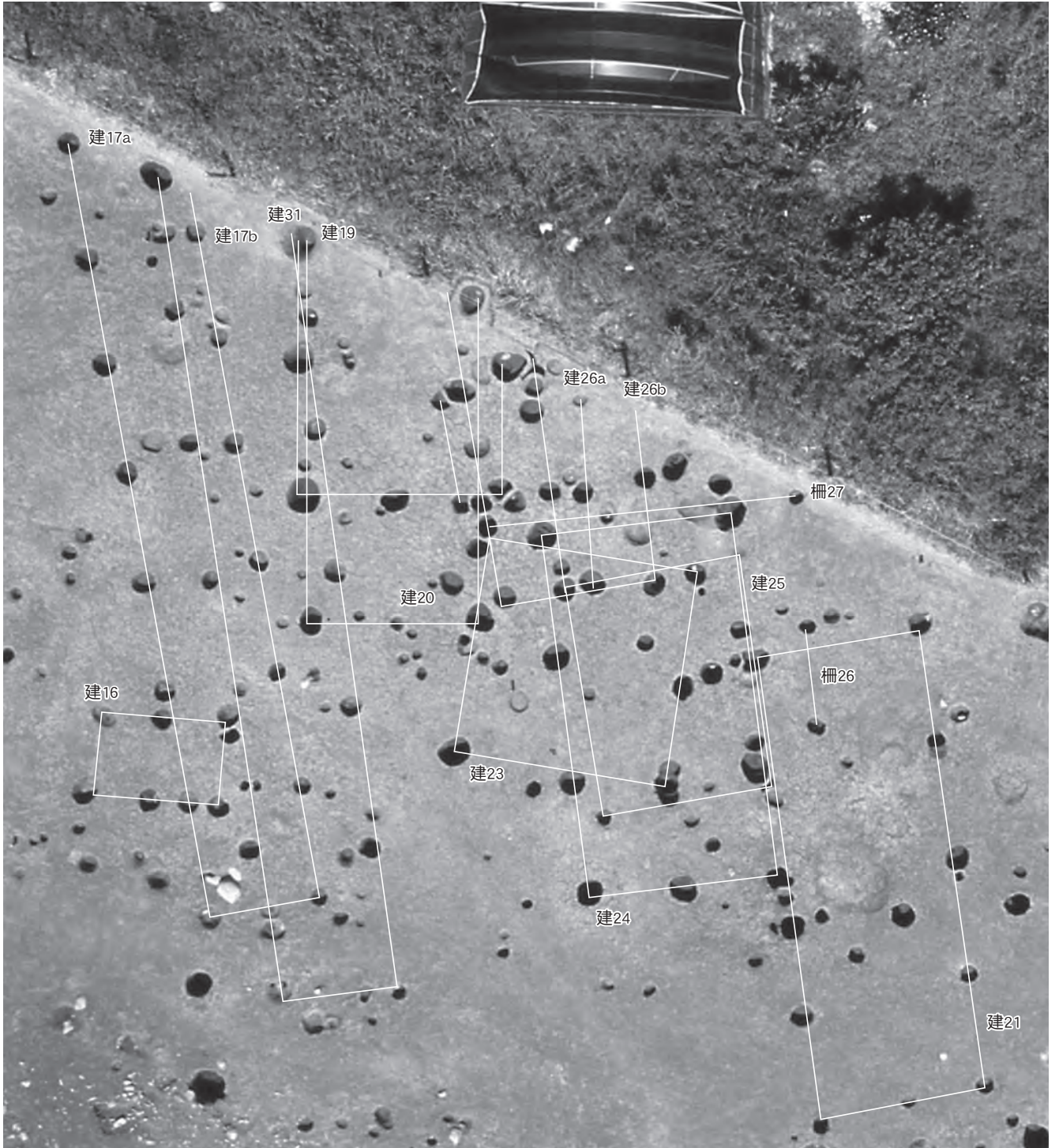
6. 17a号掘立柱建物跡柱4土層(西から)



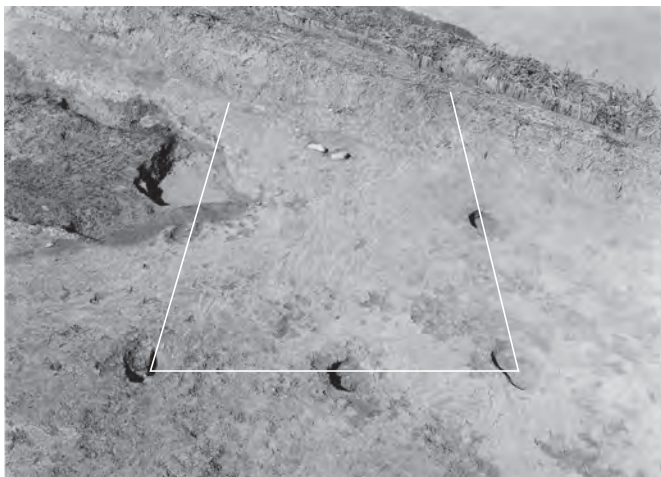
7. 18号掘立柱建物跡(東から)



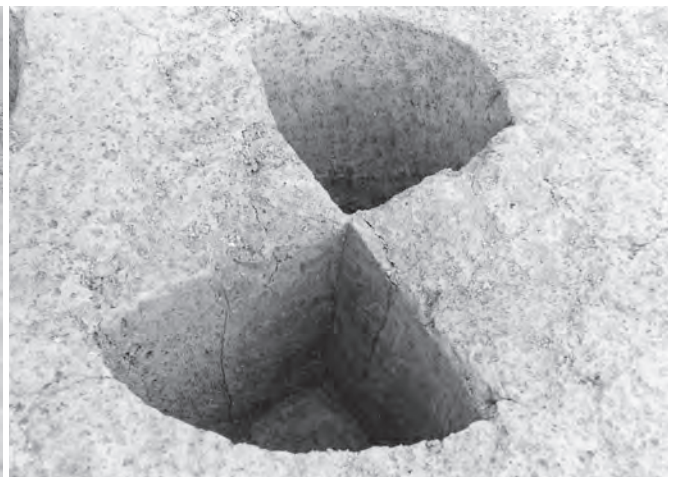
8. 同左柱7(東から)



1. 17・20～26号掘立柱建物跡、26・27号柵跡(上空から)



2. 19号掘立柱建物跡(南から)



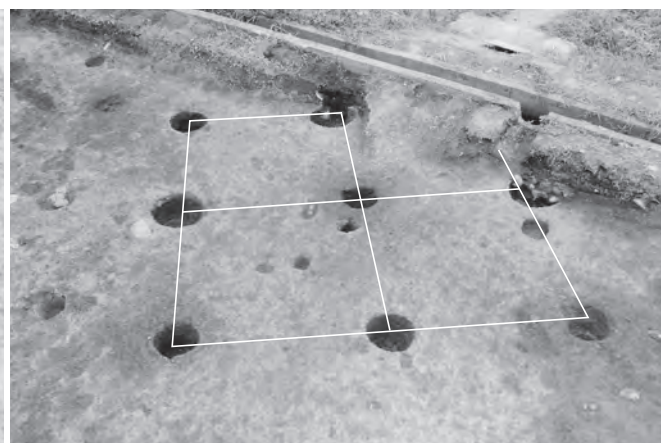
3. 20号掘立柱建物跡柱5土層(北東から)



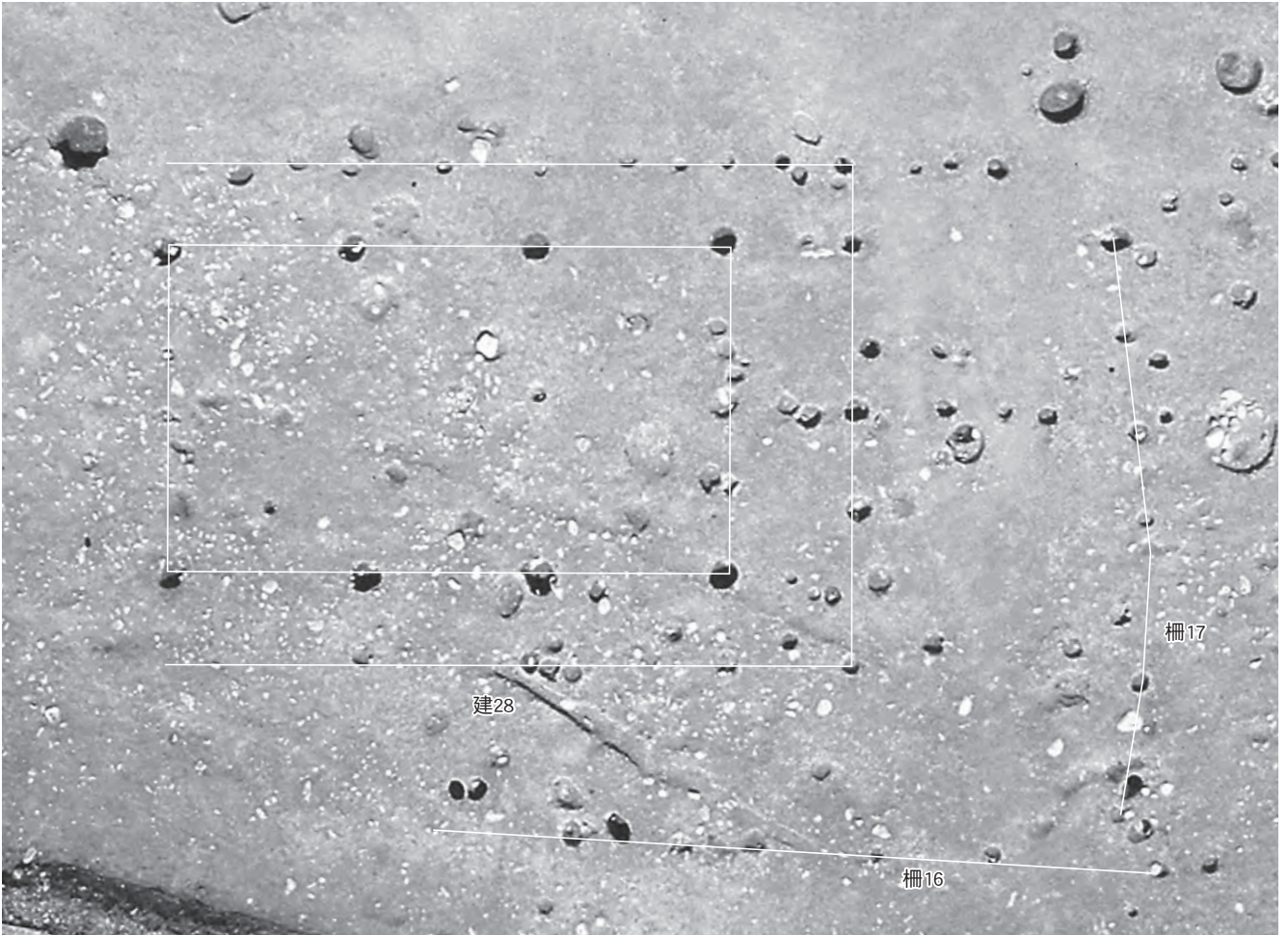
1. 22・27号掘立柱建物跡、21・22号柵跡(上空から)



2. 22号掘立柱建物跡柱10土層(南から)



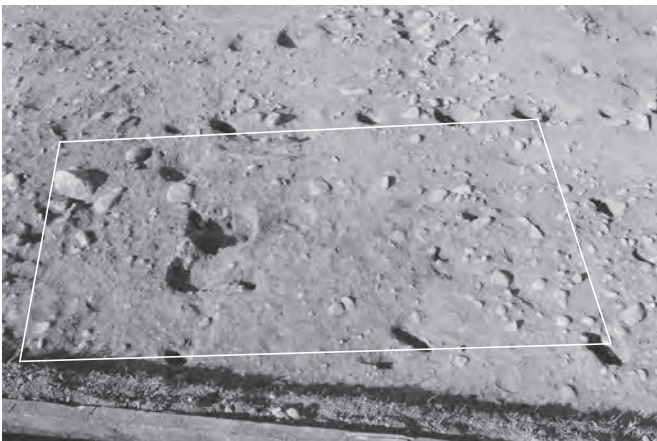
3. 27号掘立柱建物跡(南から)



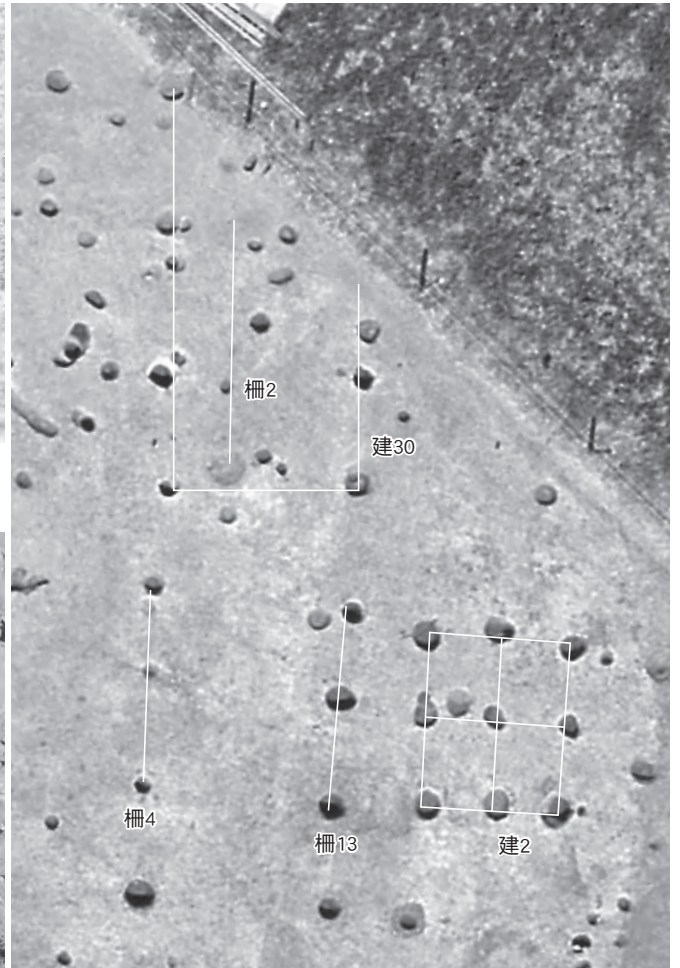
1. 28号掘立柱建物跡、16・17号柵跡(上空から)



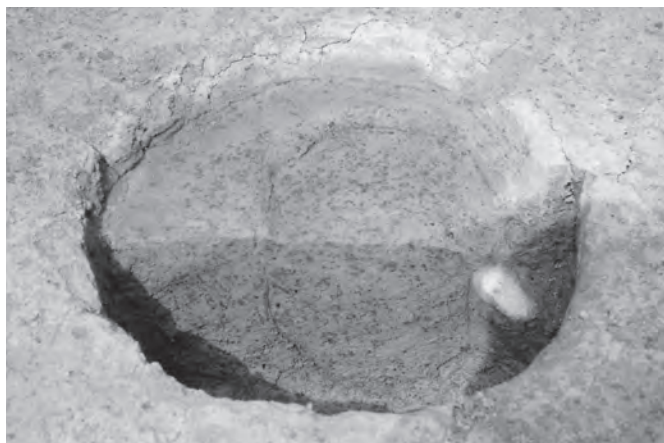
2. 26号掘立柱建物跡柱4土層(南西から)



3. 29号掘立柱建物跡(南から)



4. 2・30号掘立柱建物跡、2・4・13号柵跡



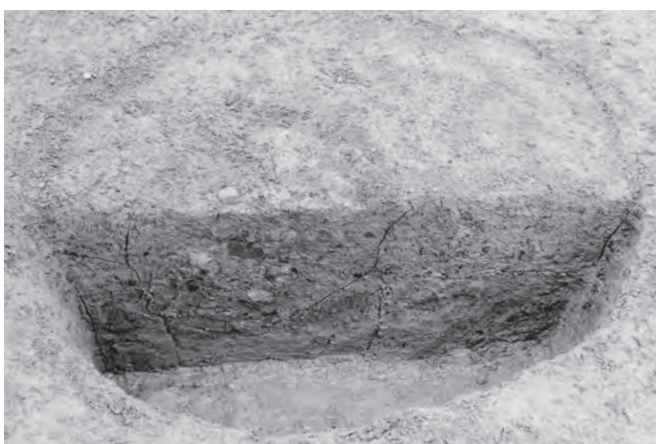
1. 1号柵跡柱4土層(西から)



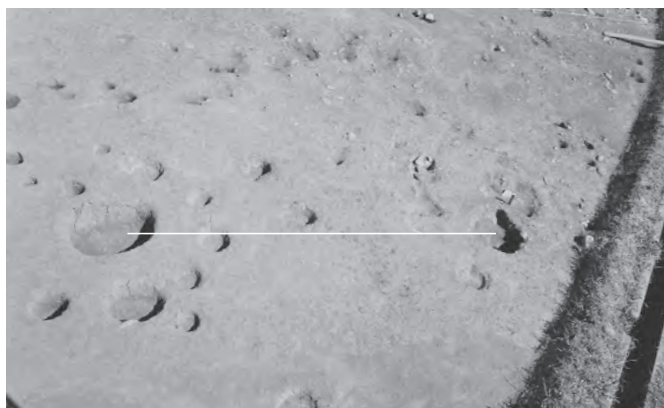
2. 同左柱2土層(西から)



3. 5号柵跡柱1土層(西から)



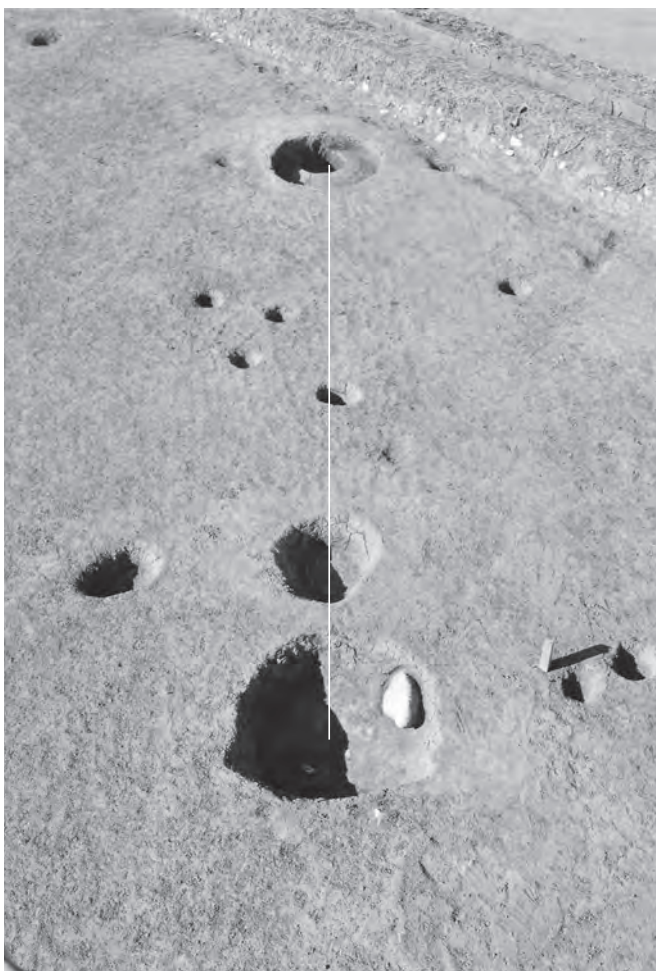
4. 10号柵跡柱1土層(西から)



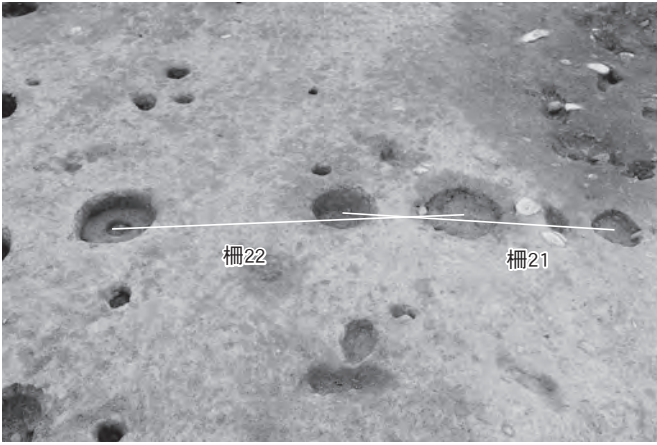
5. 10号柵跡(西から)



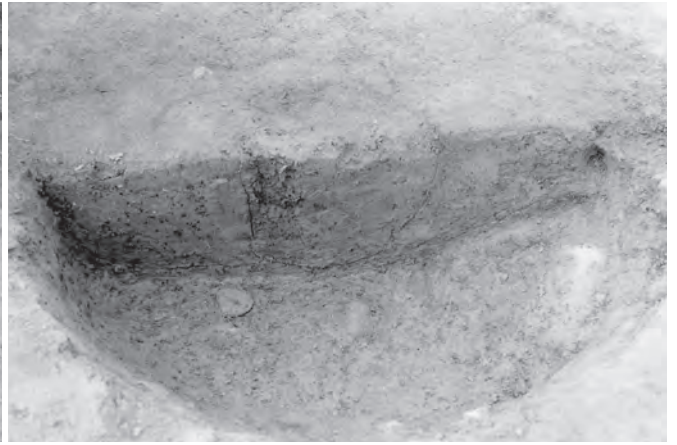
7. 14号柵跡(西から)



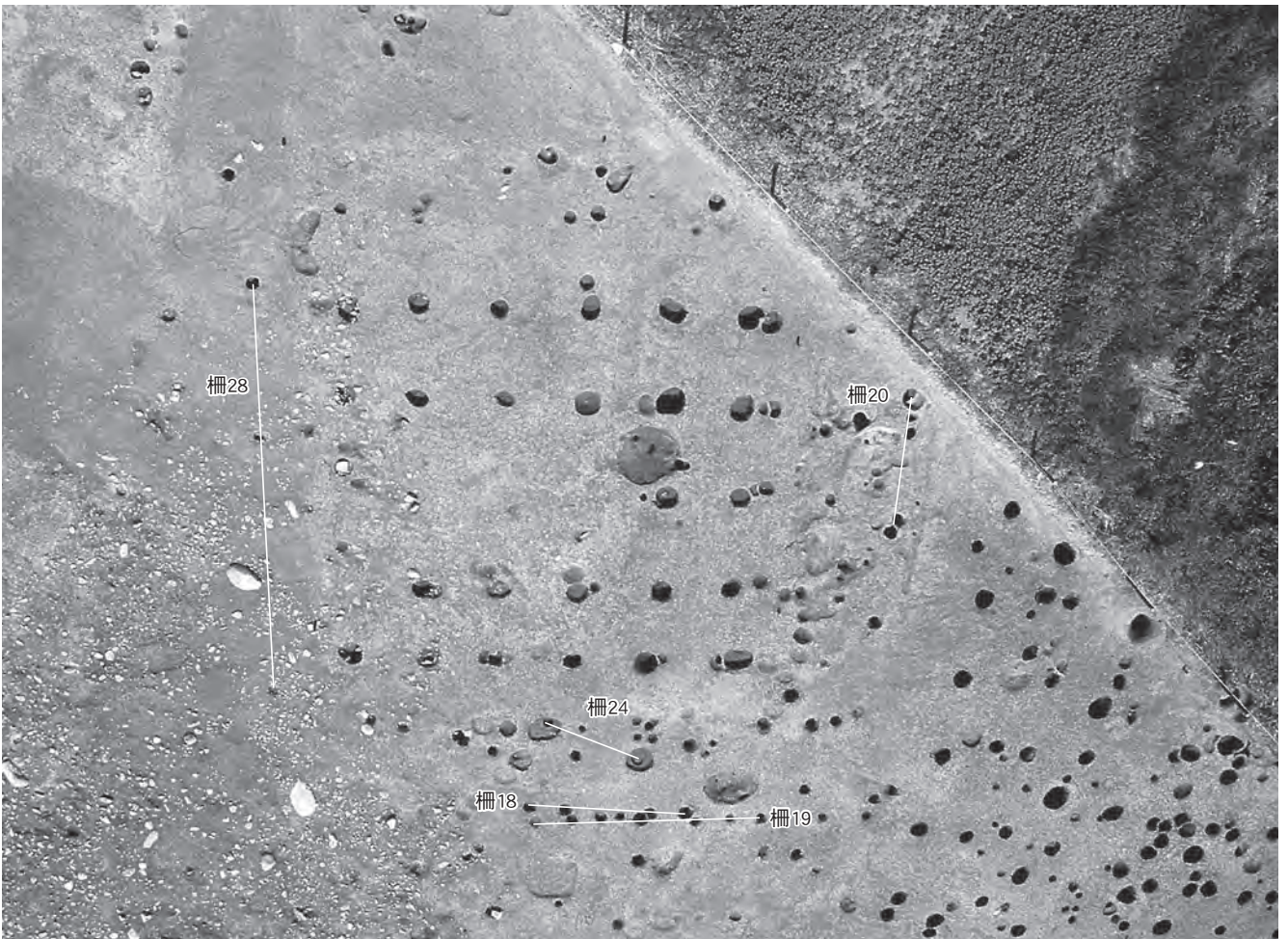
6. 11号柵跡(南から)



1. 21・22号柵跡(北西から)



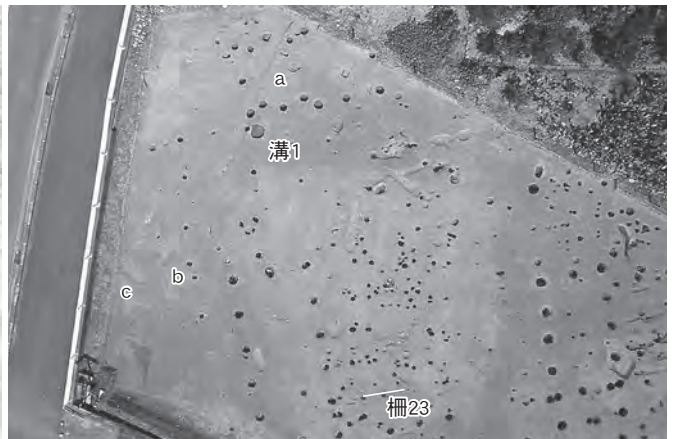
2. 22号柵跡柱2土層(東から)



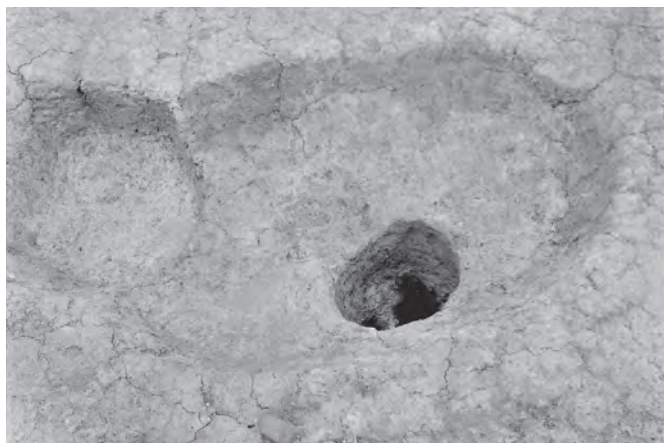
3. 18・19・20・24・28号柵跡(上空から)



4. 22号柵跡柱1土層(東から)



5. 23号柵跡・1号溝状遺構(上空から)



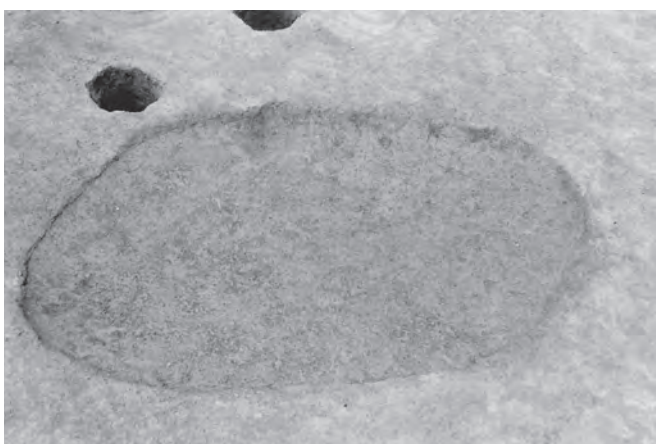
1. 1号土坑(西から)



2. 1号土坑土層(南から)



3. 2号土坑(南から)



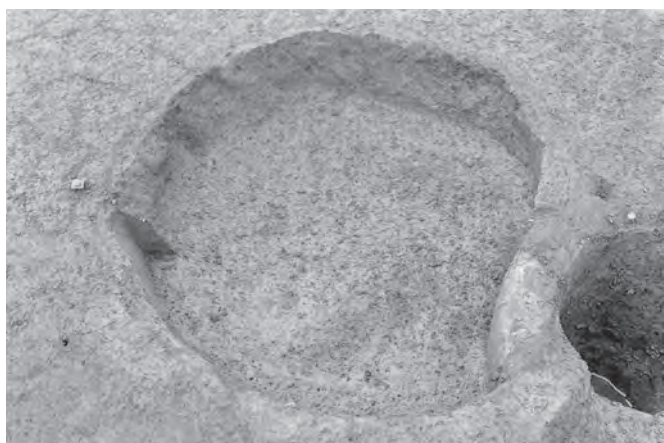
4. 3号土坑(東から)



5. 4号土坑(東から)



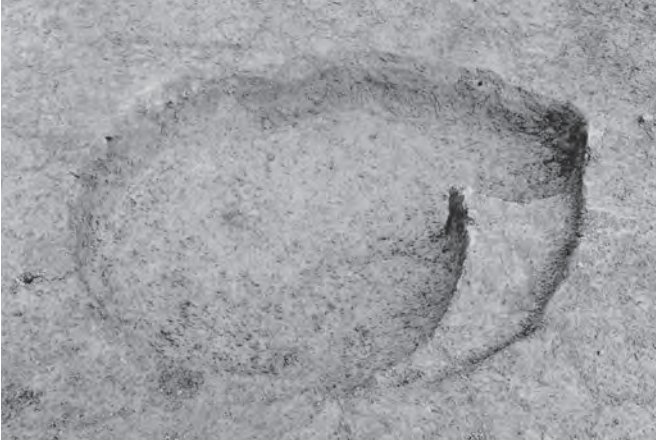
6. 同左土層(東から)



7. 6号土坑(西から)



8. 同左土層(西から)



1. 7号土坑(北西から)



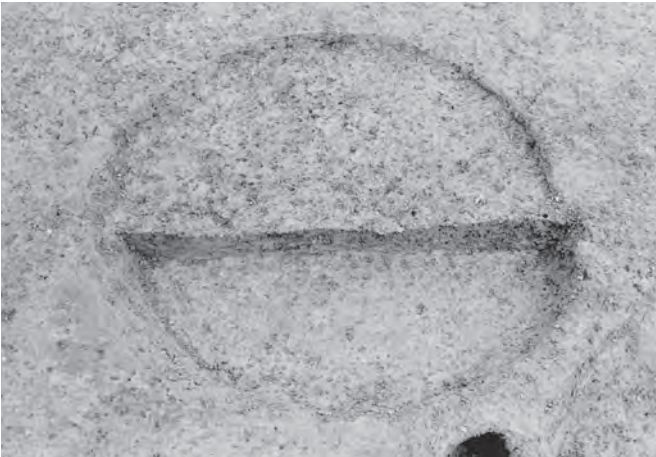
2. 同左土層(東から)



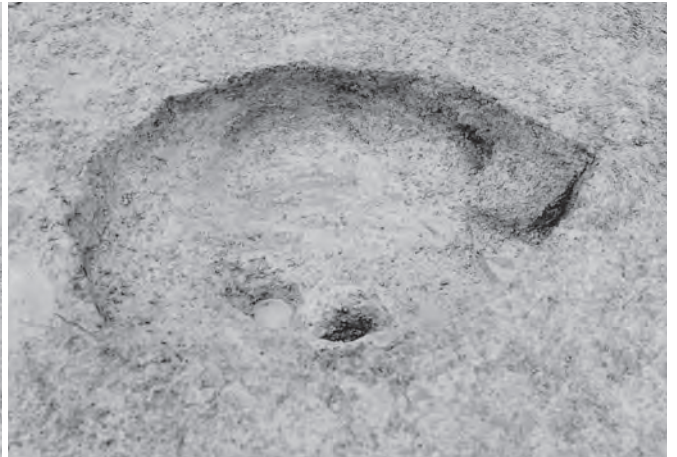
3. 8号土坑(西から)



4. 同左土層(北東から)



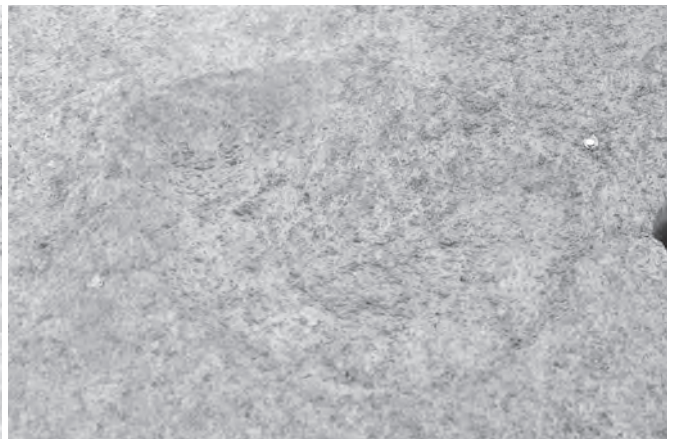
5. 10号土坑(西から)



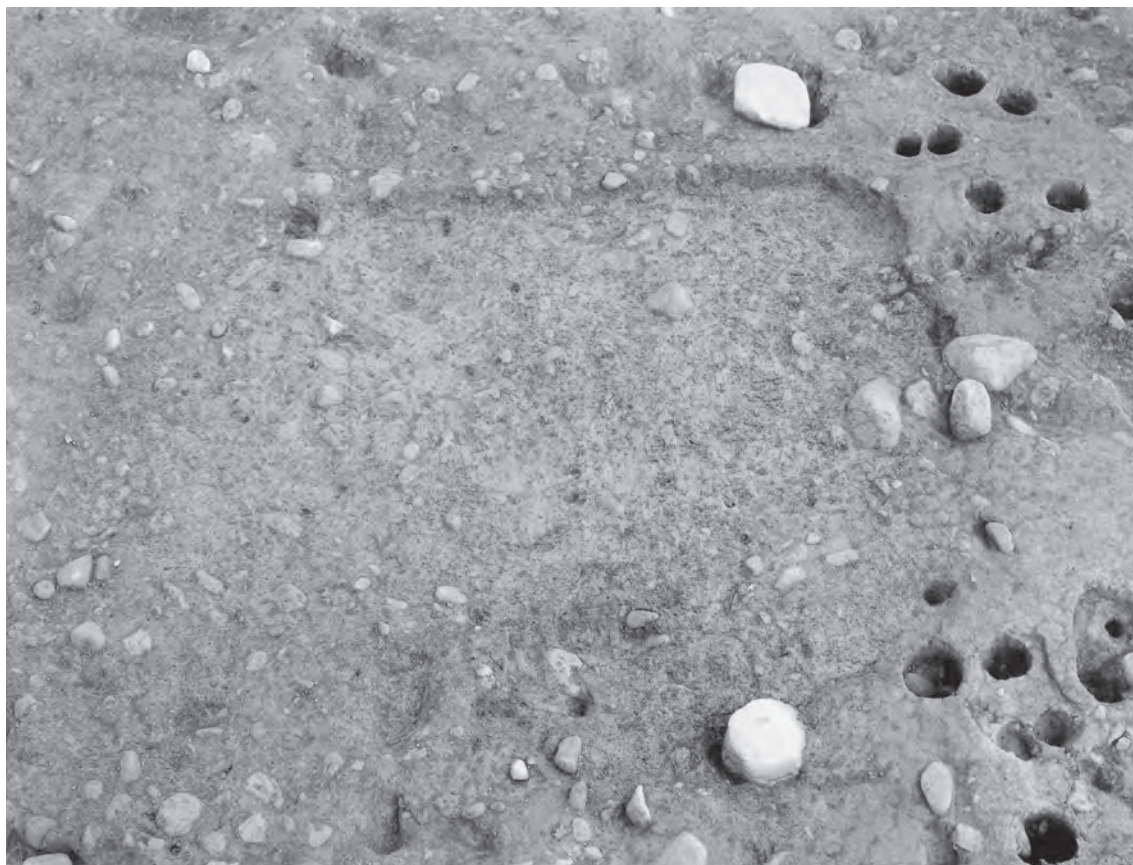
6. 11号土坑(南から)



7. 7・11号土坑土層(南から)



8. 12号土坑(南西から)



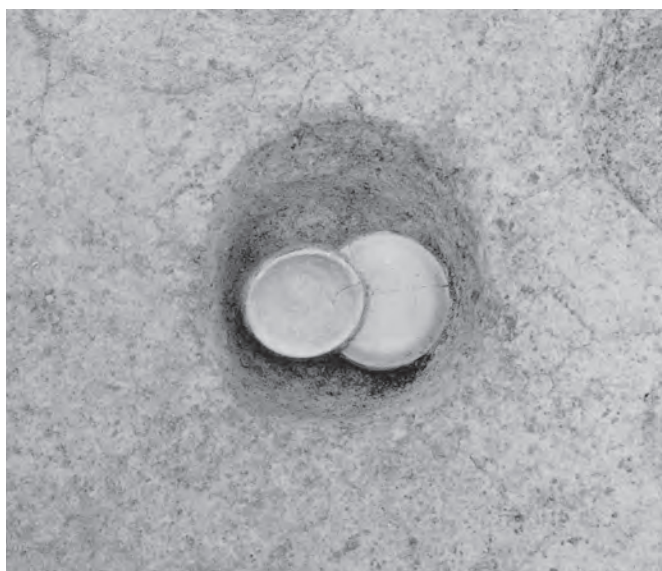
1. 14号土坑
(南から)



2. 同上土層(南から)



3. 15号土坑土層(南東から)



4. ピット1遺物出土状況(北東から)



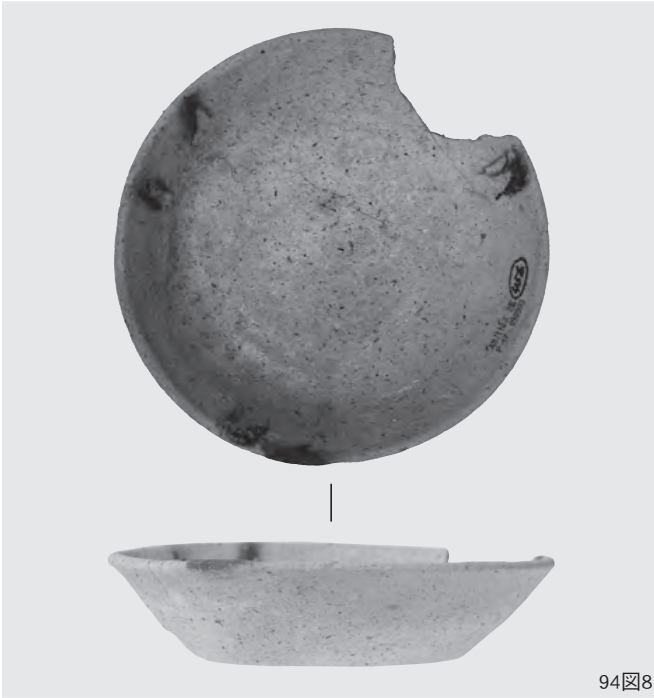
5. ピット17遺物出土状況(北から)



92图7



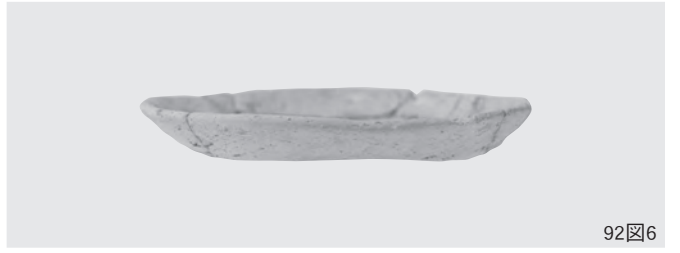
92图3



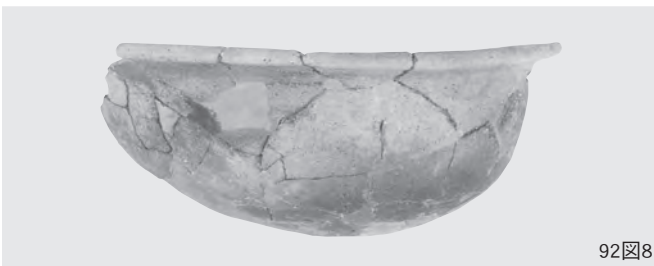
94图8



92图4



92图6



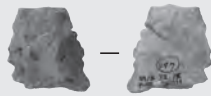
92图8



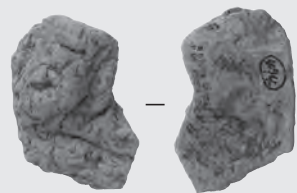
95图6



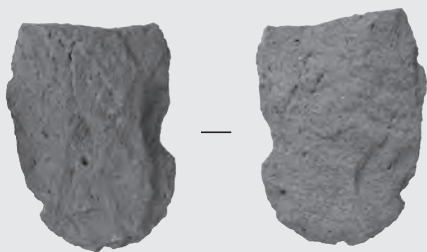
95图6



95图7



95图3



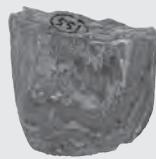
95图9



95图1

95图2

95图10



95图8



95图5

ハカノ本遺跡

3次調査

2. ハカノ本遺跡3次調査

(1) 調査の経過

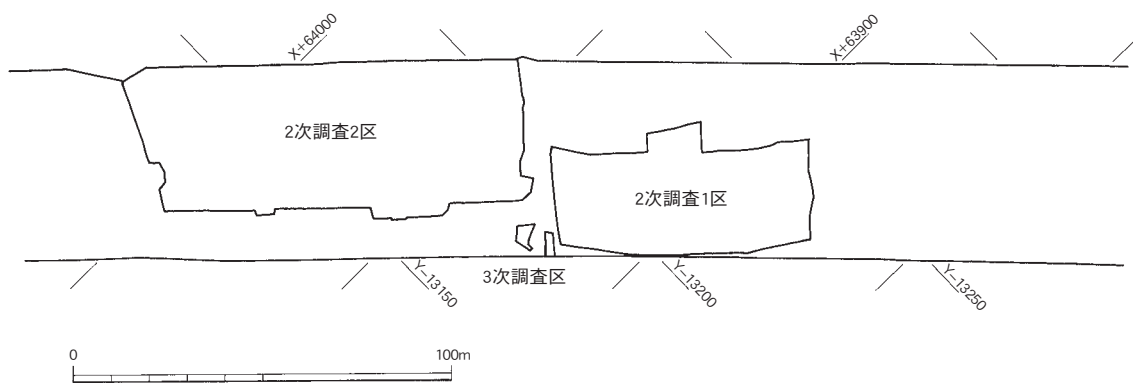
平成23年度の調査は、平成21年度に調査されたハカノ本遺跡2次調査2区の南西隅付近にあたる(第105図)。コンクリート水路の付け替え工事に伴って、削平される箇所に調査を行った。4月27日に現地打ち合わせ及び調査区の設定を行い、5月10日に仮設トイレや機材の搬入を行い、12・13日にバックホーによる表土掘削を行った。16・17日には作業員による遺構検出及び遺構掘削を行い、のち写真撮影と図化を行った。17日に埋め戻しをし、18・19日に機材などを撤去し調査を終了した。調査面積は約57㎡である。

調査対象地は水路を挟んで北側が高く、南側が低くなっていて、南側はすでに削平されている可能性が考えられた。また、既調査区を中心からみて西南側の水田に向けて落ちる緩い傾斜面であり、いずれも遺跡の中心からは外れるものと考えられた。

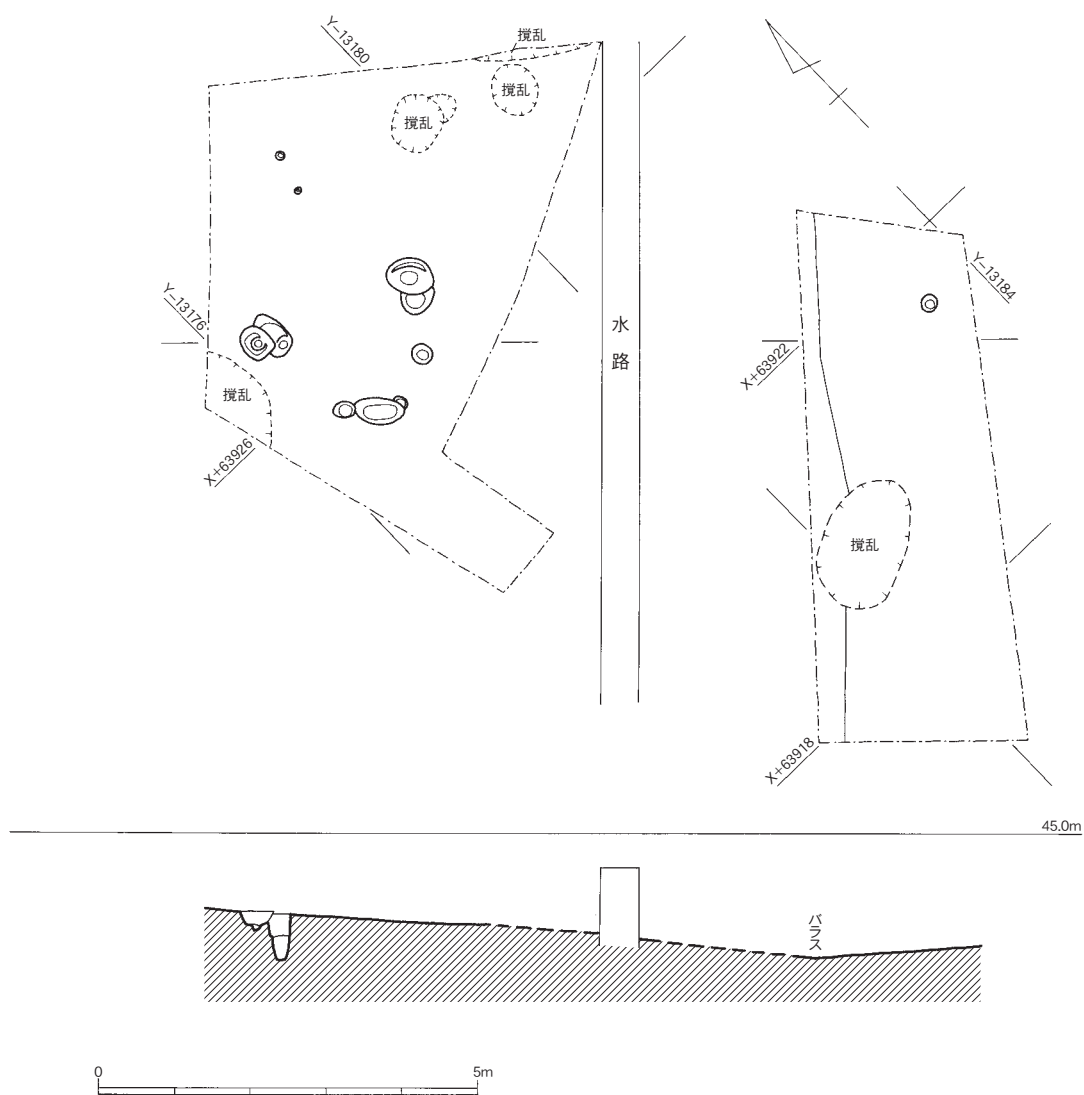
(2) 調査の結果

北西側と南東側はかなりの削平を受けていて、遺構の残りは悪く、また現代の攪乱も多数認められた。標高は約44mである。北西側調査区の遺構は、現代の攪乱の他には柱穴、杭跡が数基のみであった(第106図、図版44-2)。遺物は出土しなかった。南東側調査区では攪乱の他には小柱穴1基のみ検出した(図版44-1)。

本調査区内で検出された遺構からは掘立柱建物などは復元できず、性格が不明である。また遺物が出土せず正確な時期も不明である。平成21年度に調査された2次調査2区の周辺に散在する何らかの施設の一部である可能性が想定される。後世の削平にもよるが、南に傾斜する緩斜面の端の方にあたり、遺構密度も低いことから遺跡の南限に近いものであろう。



第105図 ハカノ本遺跡 3次調査区位置図(1/4,000)



第106図 3次調査区遺構配置図(1/100)

1. 3次調査南
東側調査区
(北西から)



2. 同北西側調
査区
(北から)



安雲山田遺跡

3. 安雲山田遺跡

(1) 調査の経過

安雲山田遺跡は、築上郡上毛町安雲571、572-1、594、596、597、599、619-1に所在し、築上郡上毛町の南西部、松尾山から北西に派生する丘陵の先端部付近にあたる低丘陵および他に部分からなり、標高38～40mの範囲に立地する。

西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所からの依頼を受け、平成20年7月22～25に実施した試掘調査の結果に基づいて、文化財の確認できた約5,100㎡の範囲に調査区を設定して発掘調査を実施した。調査区が広範囲にわたるため、現在の道路および水路によって区画された部分ごとに北西側から便宜的に1～5区とし、このうち1～3区について、平成20年8月22日からバックホーによる表土除去作業を北西の1区側から実施した。遺構面は1区東端部付近から落ちており、埋土も黒色あるいは黒灰色の粘質土で湿地の様相を呈していた。2区は全面がこの湿地状であり、埋土から若干の木材が出土する以外は遺物もほとんど出土しなかったため、重機で底面までの掘削をおこなった。3区に到って湿地部分の両岸を溝状に検出し、また埋土中から大量の木材に混じって土器等の遺物も検出されたため、この部分は手作業で掘削することとした。10月21日から作業員に参加してもらい、本格的な発掘作業を開始した。翌平成21年3月19日にラジコンヘリによる全体写真撮影をおこなって、26日にこの部分の調査を終了した。

4・5区については、年度が変わって同年4月13日から表土除去作業を開始し、5月7日から手作業での掘削、9月14日に空中写真撮影、15日にはすべての作業を終了し、その後重機による埋め戻し作業を行った。

(2) 遺構と遺物

遺跡は中央の低地(谷部)とその両側の微高地よりなるが、出土した遺物の大半は中央の溝状遺構から出土した。微高地部分については遺構密度が決して高くはなく、検出した主な遺構は掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、土坑多数などである。

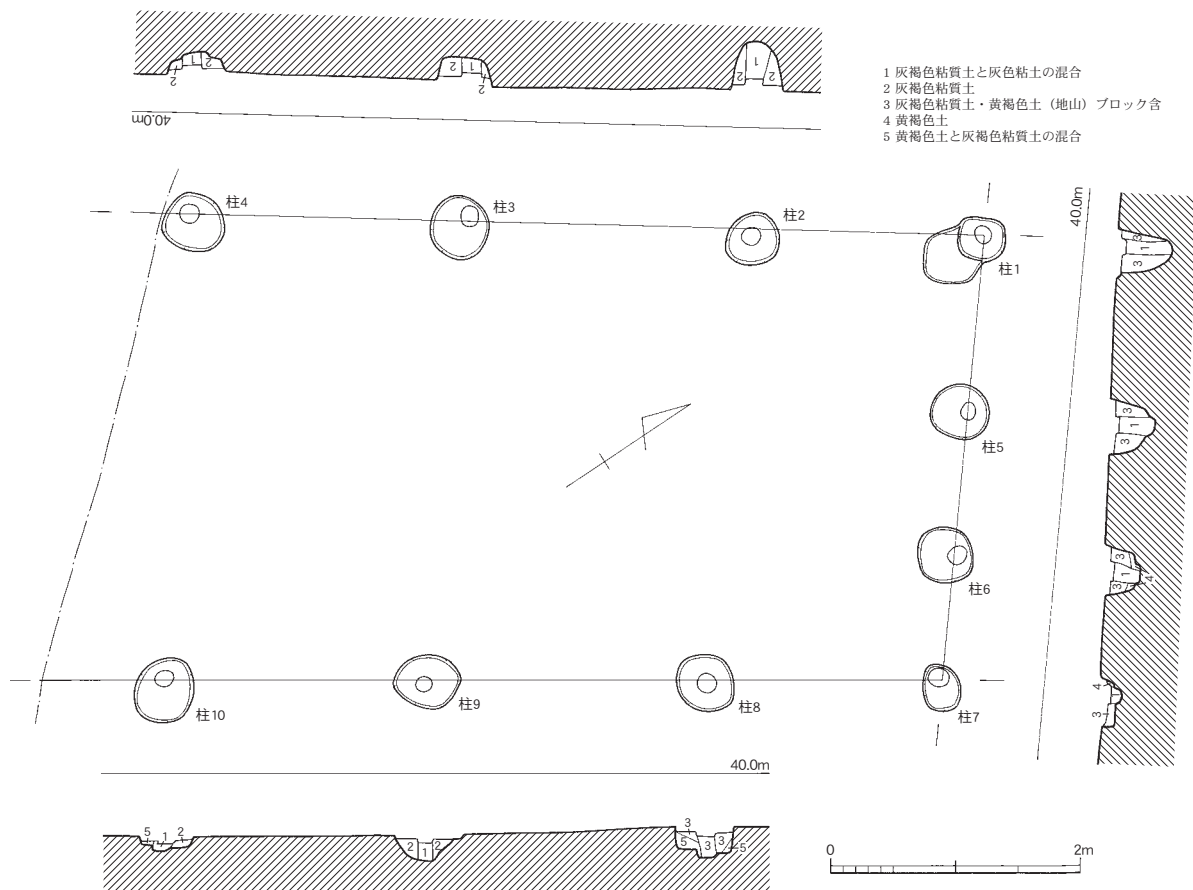
① 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(図版47・48、第108図)

調査区のほぼ中央部、1号溝状遺構の西岸上にあり、遺構の南西側の一部は調査区外に延びる。桁行4間以上、梁行3間の規模で、柱掘形は径30～50cm程度の不整形円で、深さ10～45cm程度が残存する。埋土は灰褐色粘質土またはこれと黄褐色土(地山)の混合土である。柱痕跡から復元できる柱の径は15cm程と考えられる。柱間は梁方向では1.0～1.45mと不揃いである。桁方向でも1.85～2.25mでばらつきがあるが、北東側の隅柱からの1間分を狭く配置したように見受けられる。建物全体の規模は、桁行6.4m以上、梁行3.6mで、主軸方向は概ねN-35°-Eである。

出土遺物(第109図)

柱掘形埋土から少量の土師器・須恵器片が出土したが、図示できるものはわずかである。2点とも土師器の甕口縁部破片か。1は短く、2はやや長めに外反する。器面は風化しているがヨコナデ調整であろう。胎土は精良で砂粒を含み、黄橙色を呈する。

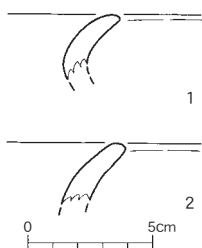


第108図 1号掘立柱建物跡実測図(1/60)

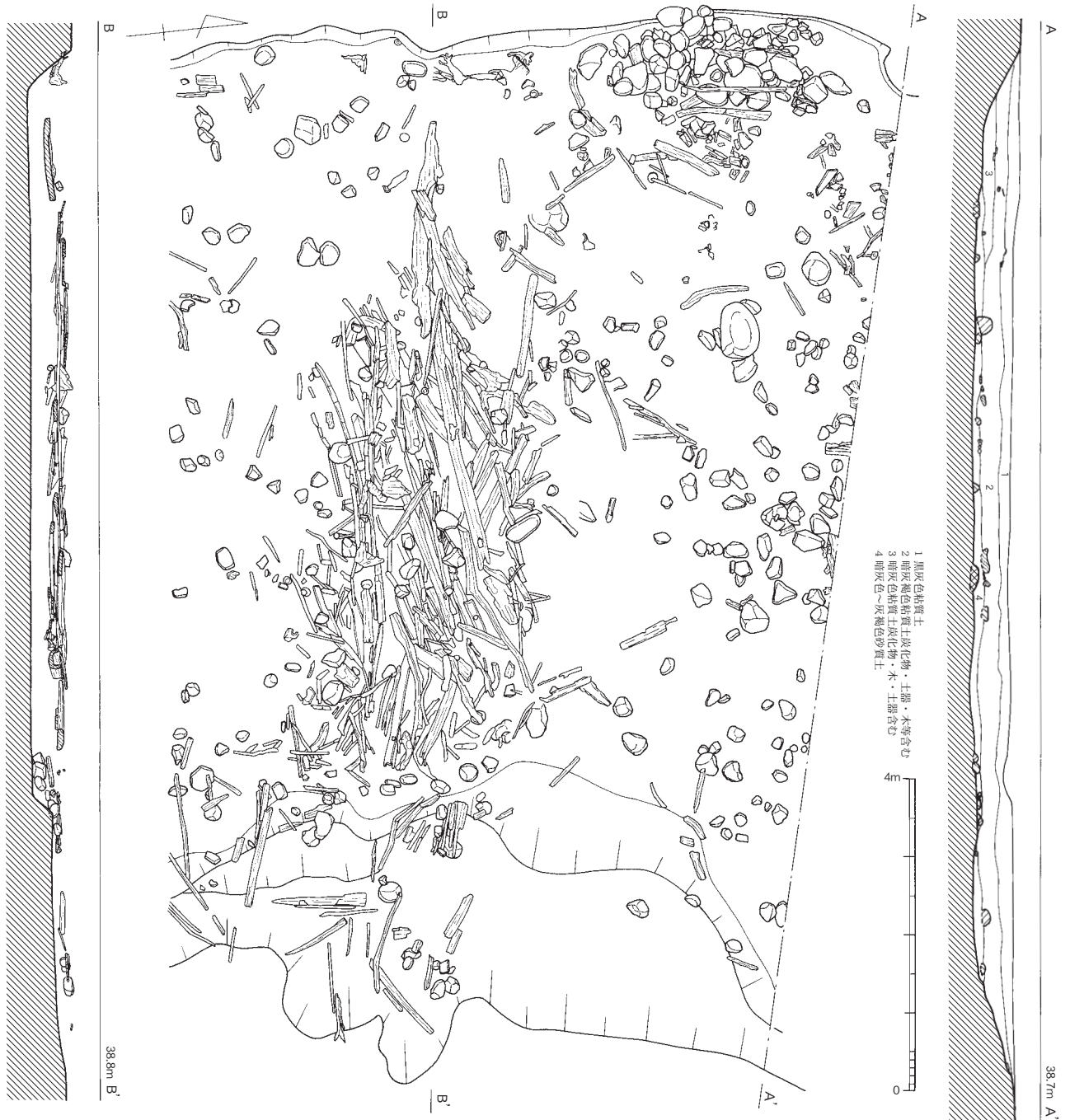
②溝状遺構

1号溝状遺構(図版45・46、48～51、第107・110図)

遺跡中央の低地部分のほぼ全面に位置し、1～4区にかけて大きく蛇行しながら南北方向に延びており、遺跡を東西に分断している。先述したとおり、当初は湿地状のものを想定していたが、3・4区で遺構の両岸を検出した結果、形状として溝状になっていると判明した。調査区内では直線距離で約110m分を検出したが、周辺の地形から判断すれば、この溝状遺構は遺跡の南側にある丘陵の谷部の、現在百畝町池がある辺りから派生して、遺跡内を大きく蛇行しながら1区の更に北側へと延びていくものと考えられる。幅は3区部分で12～15m程度、4区の湾曲した箇所的大部分で24.5m、深さは0.5～0.6m分が残存している。規模からいえば溝というよりも河川に近いと思われるが、埋土は最下層にわずかに砂質土を含むものの、黒灰色粘質土または暗灰褐色粘質土等の粘質土あるいは粘土が大半であり、やはり水の流れのほとん



第109図 1号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)



第110図 1号溝状遺構実測図(1/80)

どない湿地状を呈していたものと考えられる。

3・4区の遺構内からは相当量の木材が出土し、その大半はほとんど加工痕の認められない自然木であるが、3区の遺構内では建築材・木製品を含む大量の木材が一箇所に集中した状態で検出された。この部分の埋土は上層から黒灰色粘質土、暗灰褐色粘質土、黒色粘質土、暗灰色砂質土の順であるが、木材類は暗灰褐色粘質土の上層に集中している。溝に直行する東西方向に長い9×3m程の範囲にほぼ溝幅一杯に分布し、木材自体もほとんどが東西方向に長軸を向ける。あたかも水の流れを遮るかのようであるが、たとえば堰のような土木作業を伴う施設である痕跡は観察できなかった。現状では人為的に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物(図版54～60、第111～121図)

弥生土器

1～7は広口壺。1～5は鋤形口縁を持つもので、1・2は口縁部を比較的厚く仕上げ、3～5は薄く外方に長くのびる。2～4は口縁部上面に円形の浮文を貼付け、4・5は口縁端部に連続した刺突文を付す。6・7は素口縁で、端部を上方にわずかに突出させる。8は短頸壺で、端部を上方に突出させる特徴は同じ。9～11は壺胴部で、肩部に2条あるいは3条の断面台形の突帯をめぐらせる。また、10・11は外面に丹塗が認められ、ミガキ調整で仕上げる。12も壺胴部であるが、小型のもの。肩部にM字形突帯を付し、ミガキ調整。13～14は長頸壺である。13は口縁部下を肥厚させて稜をつくり頸部との境とし、頸部外面は縦方向のハケメを丁寧に巡らせて文様状にする。また、頸部と胴部の境には1条の沈線が巡る。14は袋状口縁を持つもので、口縁部下に1条の断面三角形突帯を付す。15も袋状口縁であるが頸部は短く、2条の断面三角形突帯で飾る。

16～31は甕である。16・17は鋤形口縁で、薄く外方に長くのびる。また、16は外面に丹塗が認められる。18～29は「く」字形の口縁部で、跳上口縁の特徴が見受けられる。口縁部下に断面三角形突帯を付すもの(22～24・28・29)と無いものがある。30・31は底部で、30は内面に工具痕が残る。

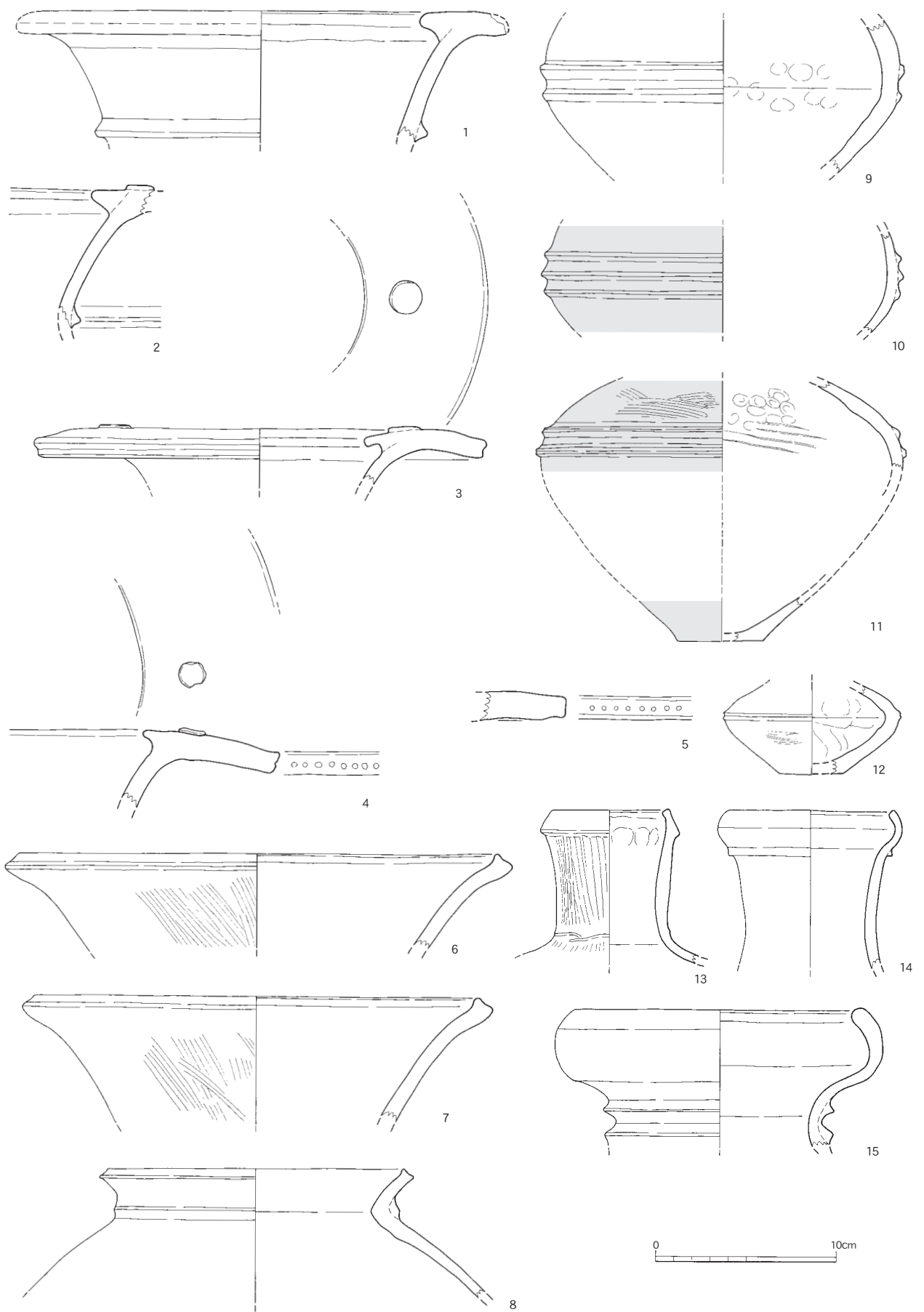
32～40は高坏。32は鋤形口縁で、端部は薄く外方にのびる。33～37は湾曲して立ち上がり、口縁部下で微妙に屈曲する。口縁端部は35は丸くおさめ、それ以外は角をもち内面をやや鋭角に仕上げる。33は丹塗のものであるが、器面の風化が激しく、ことに外面はほとんど剥落している。36も丹塗で、また36・37は口縁部下に断面三角形突帯を付す。35～37などは、あるいは鉢形となるものかもしれない。38～40は高坏脚部だが、40のみは胎土が精良で焼成も堅緻であり、搬入品かと思われる。

土師器

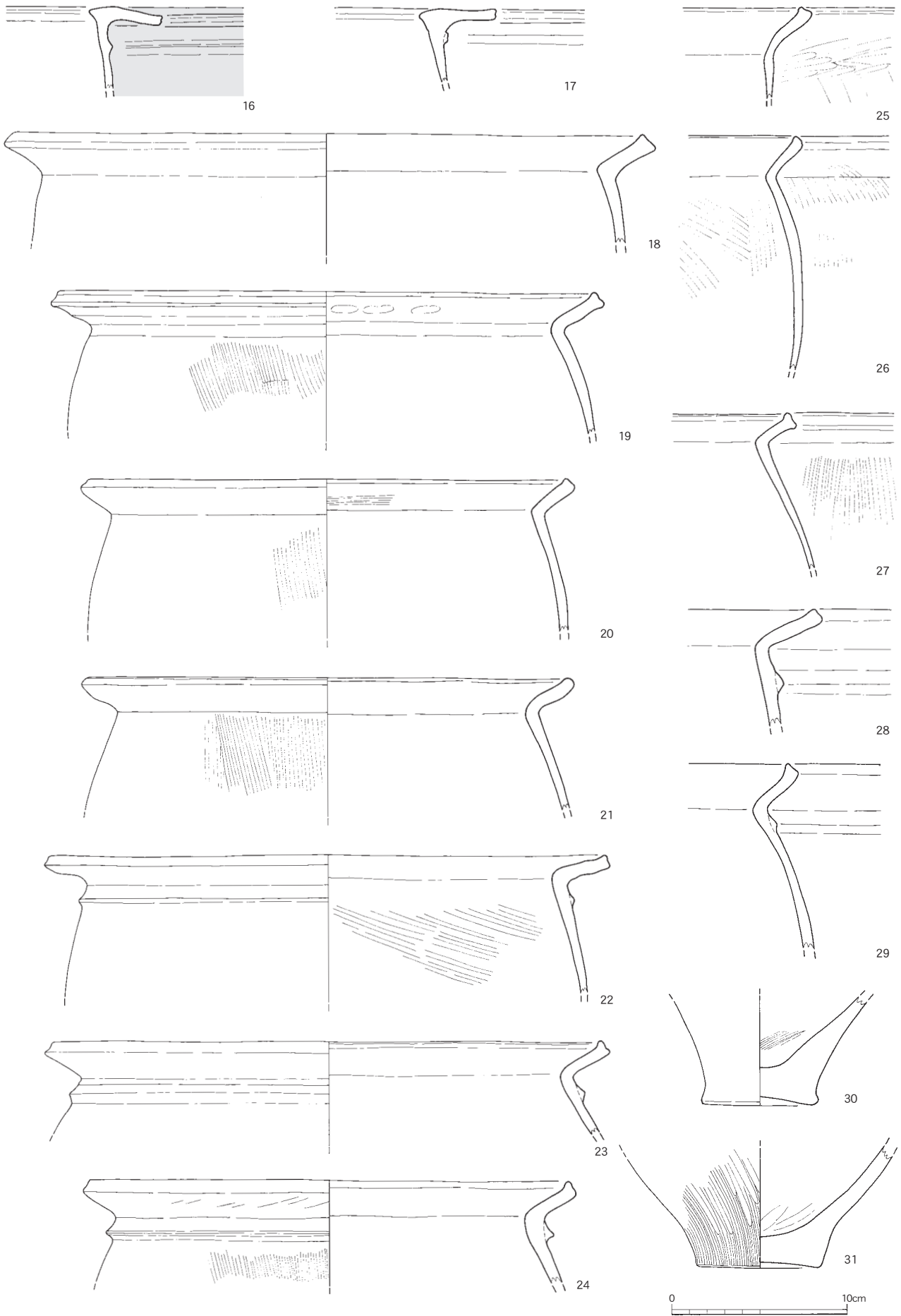
41～48は甕。41～43はゆるく屈曲して口縁部が外反する。44～46は胴部が垂直に近く立ち上がって口縁部でわずかに開く。47は頸部が締まり口頸部が直線的に開く。胴部は球形に近い形状を呈し、内面は横方向のケズリ調整、外面は下半部は斜め上方への粗いケズリ調整で、上半部はカキメ状の横方向のハケメ調整で仕上げる。胴部の外面下位と内面は黒変している。48は胴部下半部で、平底になる。外面底部周辺はケズリ後粗いハケメ調整、胴部はナデ後縦および横方向の粗いハケメ調整で格子状を呈する。

49は高坏。脚部は短く、屈曲して開いて底部をつくり、端部をわずかに下方に折り曲げる。脚部内外面には整形段階の工具痕が多く残る。

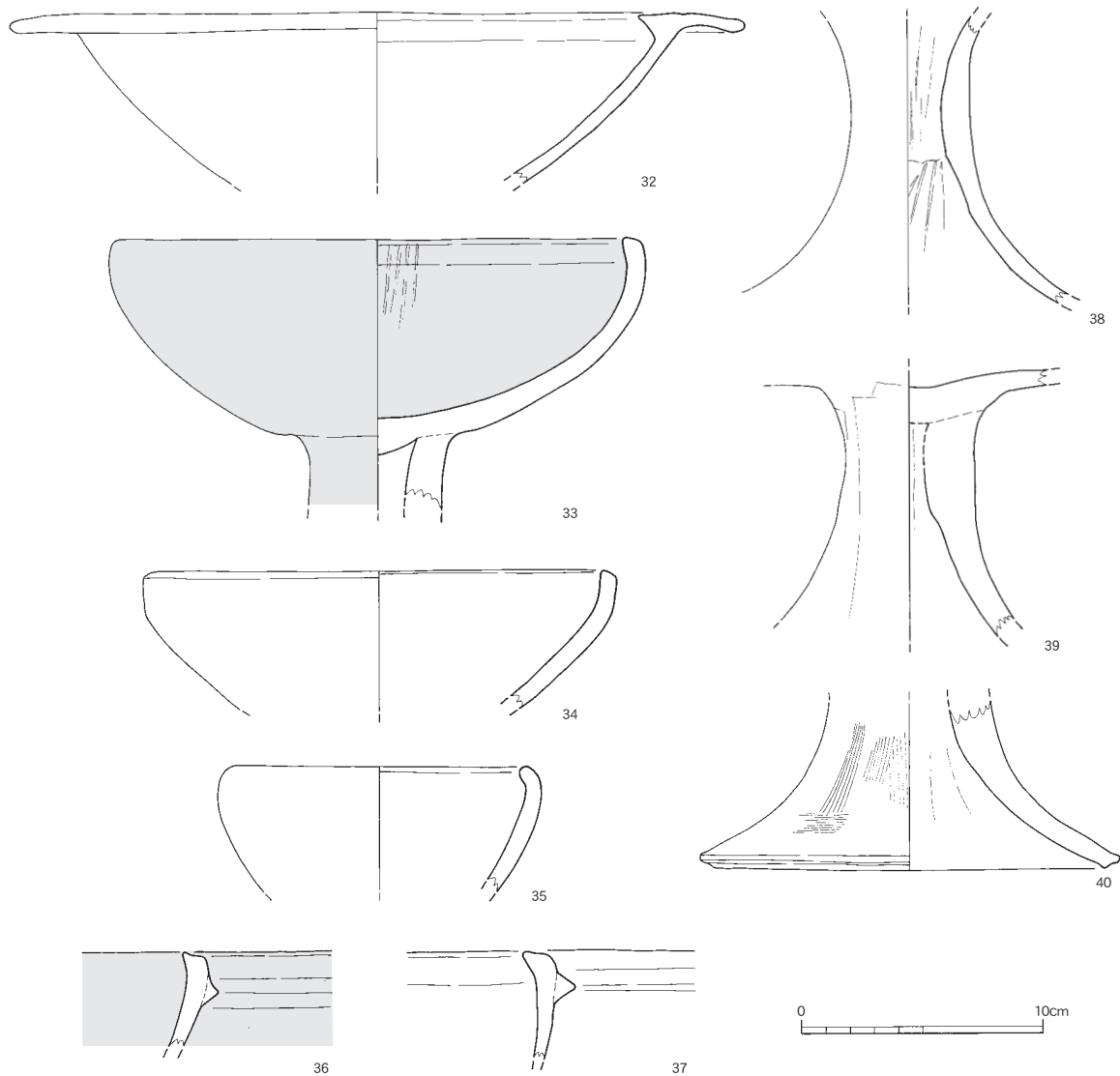
50～55は椀で、口径が小さく深いタイプ(50・51)と、口径の大きなタイプ(52～55)がある。52は内外面ミガキ調整を施すが、全体的に粗い仕上がりである。51・52・53～55は体部外面下位を



第111图 1号沟状遺構出土土器実測図1 (1/3)



第112图 1号沟状遺構出土土器実測図2 (1/3)



第113図 1号溝状遺構出土土器実測図3 (1/3)

ヘラケズリ調整、その他の部分をナデ調整。

56は平瓶の口頸部。須恵器の形状であるが、焼成が土師質で黄橙色を呈しており、また器壁も若干厚いように思われる。ここでは土師器として報告しておく。

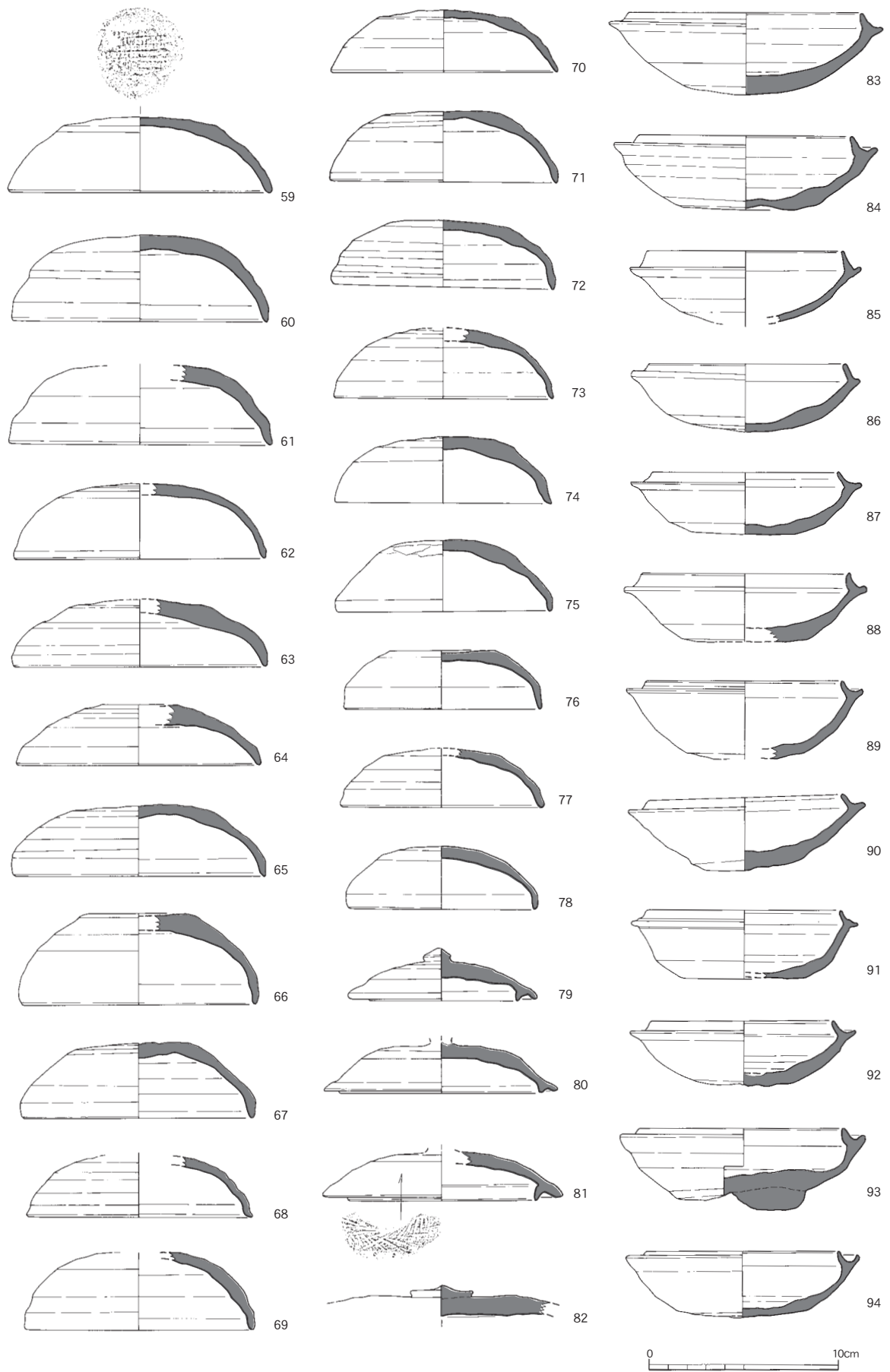
57・58は甑。57の把手は先端の尖る三角形の扁平な形状である。58は直線的な体部をもち、外面中位にわずかに縦方向のハケメ痕が認められる以外は横方向のハケメ調整、内面はヘラケズリ調整であろう。

須恵器

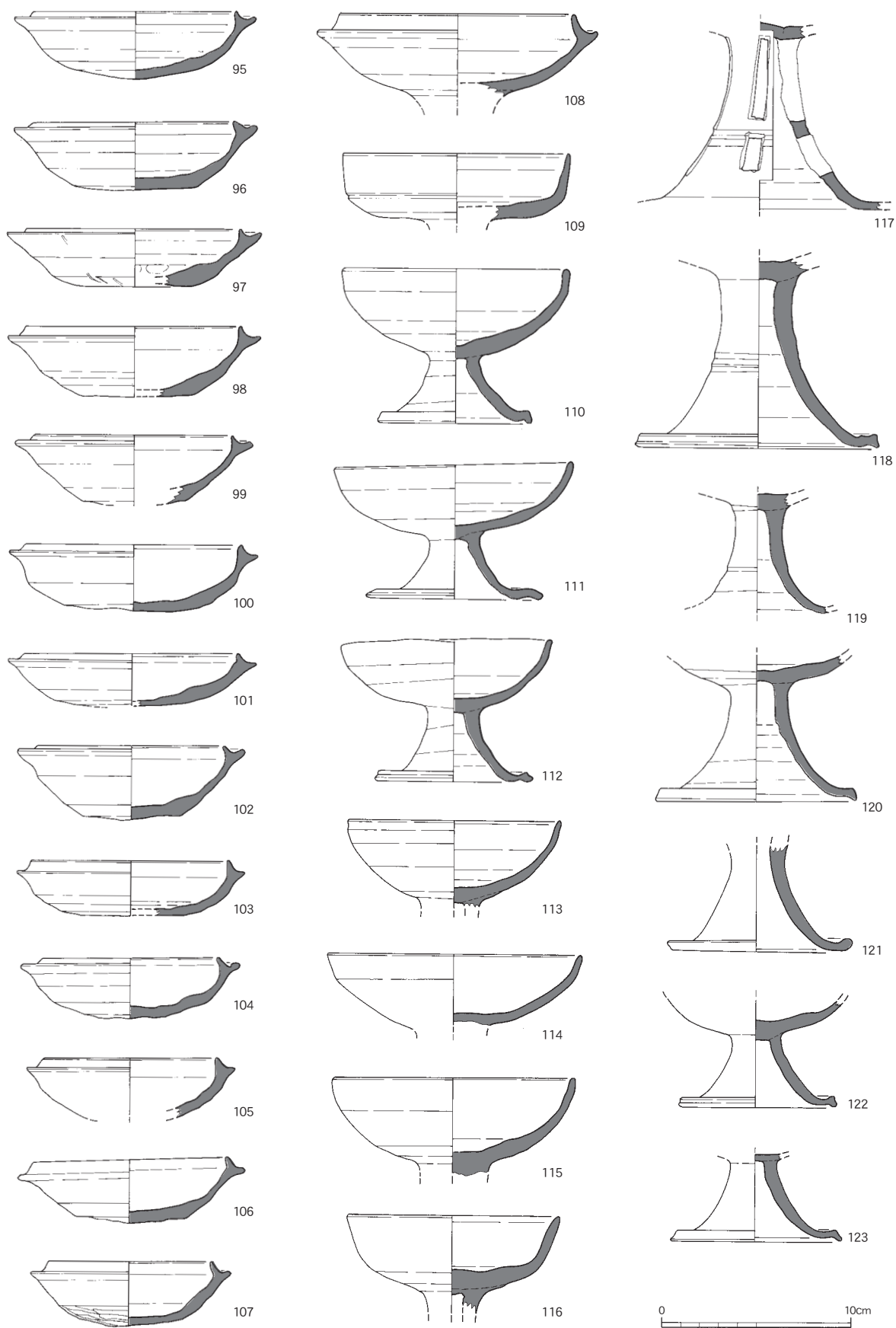
59～82は坏蓋。59～78は口径10.1cm～14.0cm、器高3.1～4.7cmと幅があるが、いずれも天井部と口縁部の境の不明瞭な丸味のある形状で口縁端部は丸い。60～62・69・71・74は天井部を回転ヘラケズリ調整しており、それ以外のはヘラ切りの後ナデ調整。59の天井部には板状圧痕が残る。また59は焼成の不十分な軟質、62・69は土師質である。79～81は天井部に擬宝珠つまみと口縁部にかえりを持つタイプで、口径10.0～12.6cm。81の天井部のつまみの周囲には木口状の工具



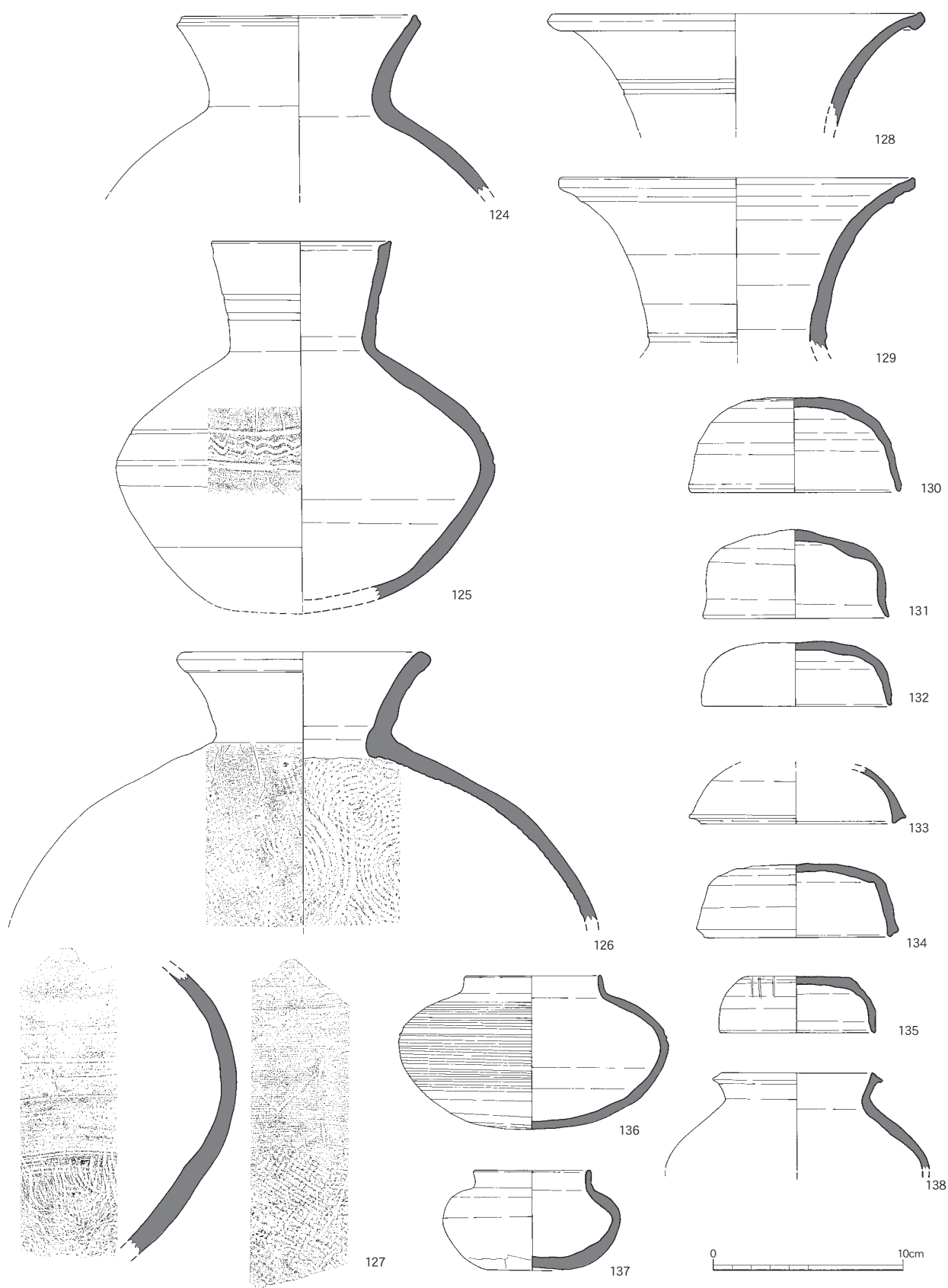
第114图 1号沟状遺構出土土器実測図4 (1/3)



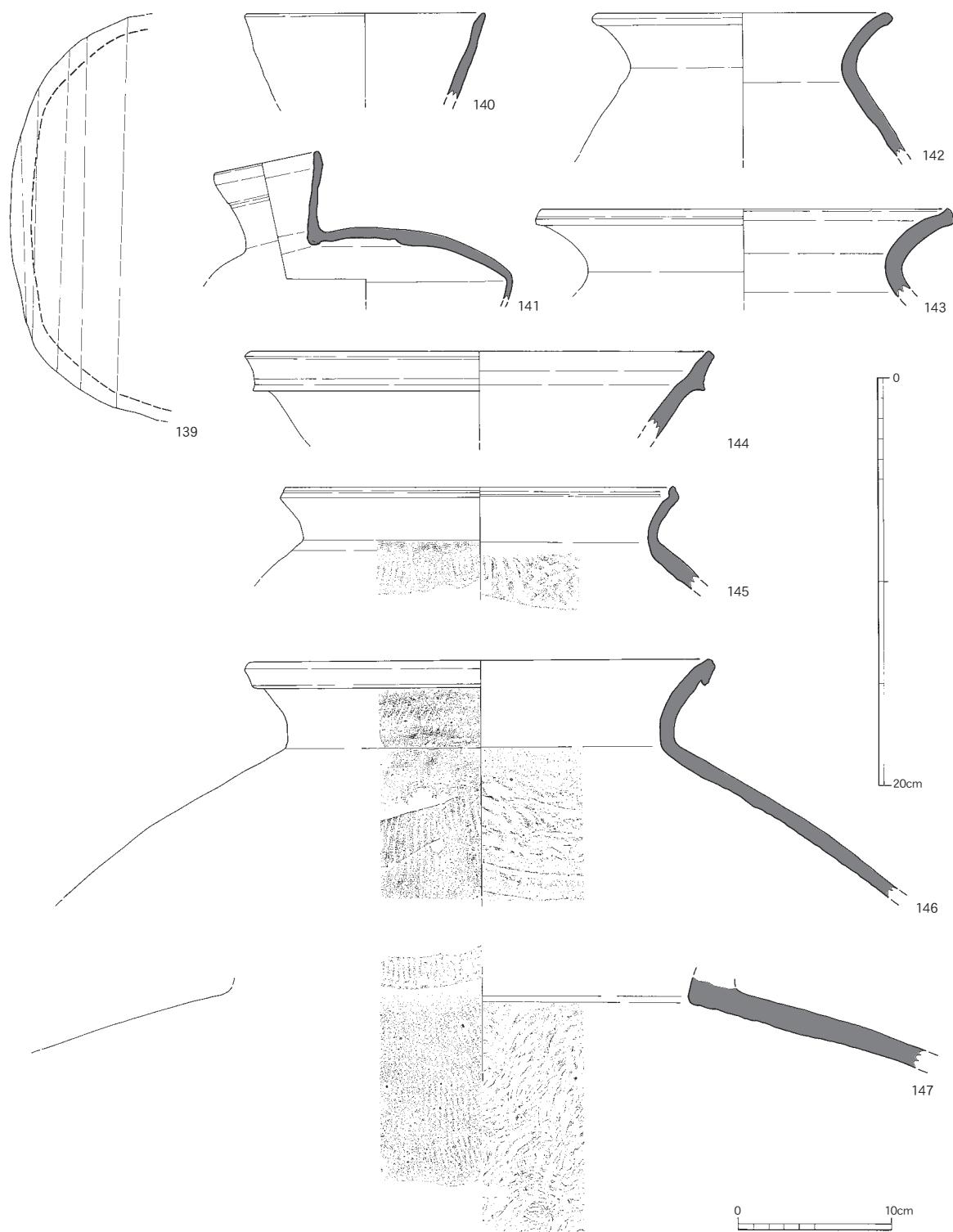
第115图 1号溝状遺構出土土器実測図5(1/3)



第116图 1号溝状遺構出土土器実測図6 (1/3)



第117图 1号沟状遺構出土土器実測図7(1/3)



第118図 1号溝状遺構出土土器実測図8 (1/3、147は1/4)

による綾杉文で飾る。82は扁平なつまみをもつ蓋で、器壁が厚く大形品のものと思われる。

83～107は坏。受部径10.6～14.5cm、器高3.0～4.7cm。蓋と同様に丸味のある器形で、内傾する短いちあがり部をもつ。底部外面は83・85は回転ヘラケズリ調整、それ以外はヘラ切り後ナデ調整。93は焼成時の歪みと融着の残る粗悪品、86・90・91・98～102は焼成不良の軟質である。

108～123は高坏。108は受部をもつタイプで、坏部の底には脚部と接合するためのカキメ状の工具痕が残る。109は坏部の底と口縁部の境に沈線をもち口縁部が垂直に近く立ち上がる古相を呈するもの。110～115の坏部は丸くなだらかで、116は底部と口縁部の境にわずかに稜を有する。脚部は110～112・122・123は短脚のタイプ、117～121は比較的長脚で117は2個所に2段の透し孔がある。脚部は床に接する部分で屈曲して平らに広がり、端部を下方に折り曲げるが、121のみは逆に上方に跳ね上げる。121は焼成が土師質で、114・123は軟質で灰白色を呈する。

124～129は壺。124は口頸部が直線的で、口縁端を上方に摘み上げる。125は体部中位に最大径があり屈曲し、直上に2条の沈線を巡らせその間に櫛状工具による波状文を配置する。126は比較的大形品で、体部はタタキ調整。127は壺の体部と思われる。下位はタタキ調整、上半部外面はカキメ調整で仕上げる。128・129は湾曲して大きく開く口頸部で、先端部に向かって器壁が薄くなる。130～135は短頸壺等の蓋であろう。口縁端部は丸く納めるものが多いが、133・134は端部に鋭い稜線をもつ。130は軟質、小型の135は土師質である。136～138は短頸壺。136・137は扁平な体部に短い口縁部が垂直に立ち上がる。136は体部外面はカキメ調整で肩部に2条の沈線が巡り、底部は回転ヘラケズリ調整。焼成は土師質で灰褐色～赤灰色を呈し胎土は極めて精良。138は短く開く口縁部の先端は鋭い稜をもつ。焼成はやや軟質で灰褐色を呈し、一部に黒斑状の黒変が認められる。

139は提瓶であろう。外面は回転ヘラケズリ調整で仕上げる。

140・141は平瓶。140は大型であり、125のような壺である可能性もあるが、形状からここでは平瓶としておく。141は体部の上位で稜線をもって屈曲して肩部をつくる。

142～147は甕で、小型のものから大甕と呼べるものまでである。142・145は体部に対して口頸部の器壁が薄く繊細な印象を受ける。144・146は焼成が堅緻で黒色から黒灰色を呈する。147は大型品で、器壁が厚く、焼成は堅緻で茶灰色を呈する。

黒色土器

2点とも椀であろうか。142は薄く垂直に近い高台をもち、内面のみ燻してミガキ調整で仕上げる。149の高台は断面三角形で低く、内外面とも黒化している。

瓦器

150・151は椀で、体部下半部に微妙な稜線があり、下部には指頭痕が残る。151はごく低い高台を付す。2点とも灰白色を呈し、口縁部は重ね焼きの際の黒化が見られる。

土師質土器

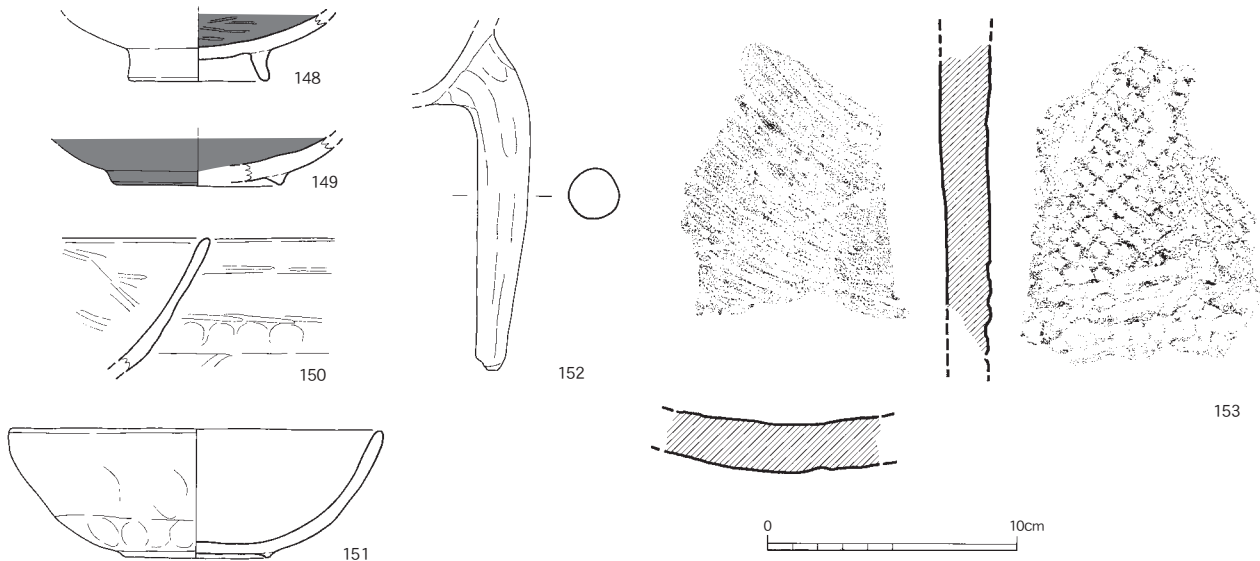
152は鍋等の脚であろう。断面は円形で、焼成は土師質で堅緻である。

瓦

153は平瓦で、凹面は布目痕後ナデ調整、凸面は格子目文タタキ痕が残る。焼成は堅緻で、茶褐色から灰白色を呈する。

木製品

1は平鋏。頭部には方形の柄孔があり、この部分で折れて欠損している。木材の繊維方向は刃部に対して縦方向であるが、製品の表面には繊維横方向の木質が縞状に付着しているのが観察できた。



第119図 1号溝状遺構出土土器実測図9・瓦実測図(1/3)

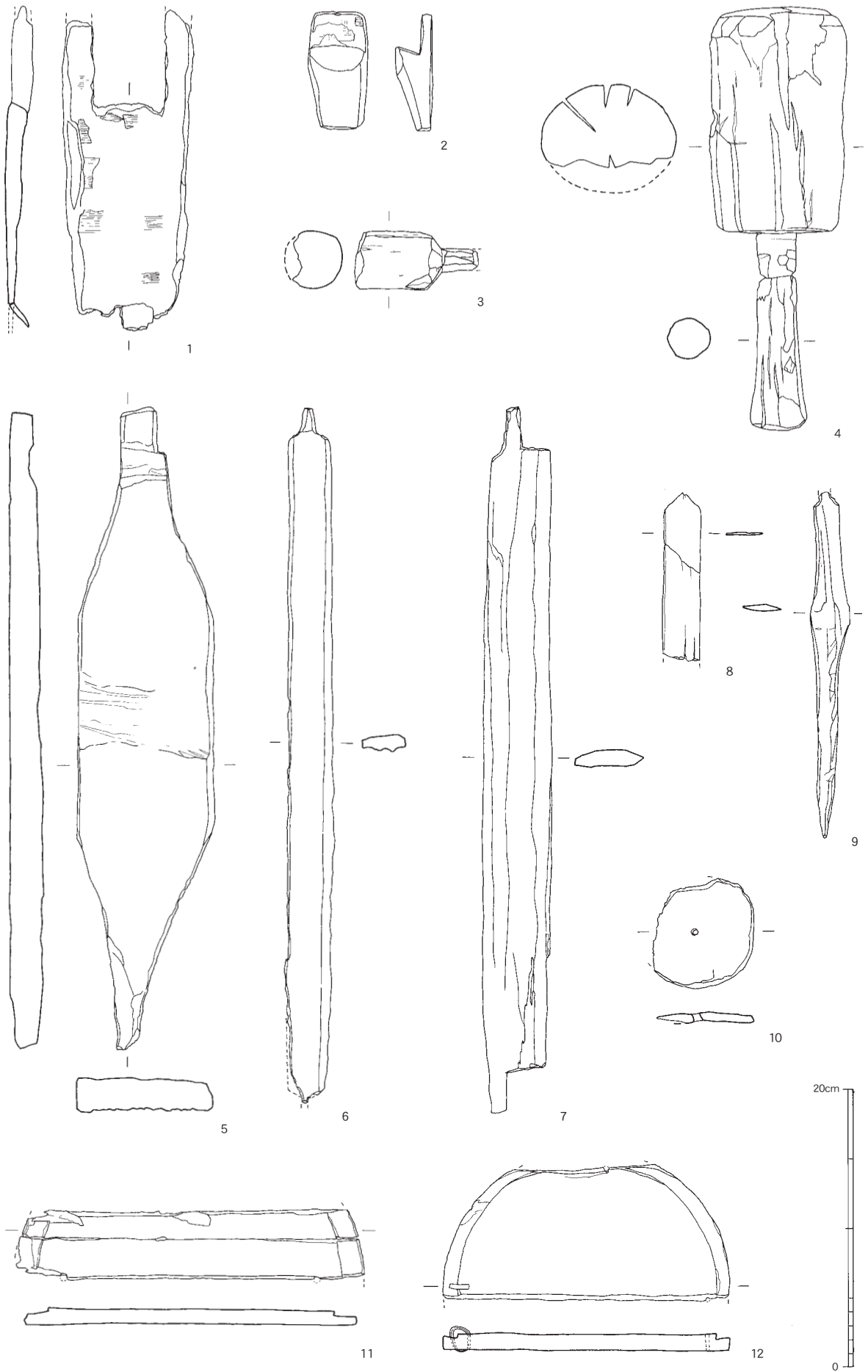
残存長23.1cm、幅9.2cm。2は鋏着装具。鋏を受ける部分に、1と同様に繊維横方向の木質が付着している。3は木錘であろう。編繩等を巻き取る芯部分を中心に左右対称の形状になるものとおもわれる。残存長8.7cm、幅4.2cm。4は横槌。身は一部を欠失しているが、断面形はやや楕円形であったものと思われる。握りは基部が若干太くなる形状で、全長に対する身と握りの比率は1:1に近い。全長30.5cm、身長16.3cm、身幅9.7cm。5は田下駄の足板部分。両端部が細くなり、この部分で横棧等と結束したのであろう。裏面には横棧との接触痕と考えられる凹みがある。全長46.3cm、幅9.8cm、厚さ2.4cm。6は田下駄の横棧部分ではないか。細長い形状で、現状では片面は木質が痩せているが、本来は断面長方形に近かったものと思われる。両端部には柄があり、縦杵と結合したものか。柄の先端部分をわずかに欠失しているが、長さ50.2cm、幅3.3cm、厚さ1.2cm。

7は経巻具あるいは布巻具の織機部材であろう。6と同様に細長い形状であるが、一辺を刃状に薄く削り、柄は反対の背側に偏る。長さ50.9cm、幅5.0cm、厚さ1.2cm。

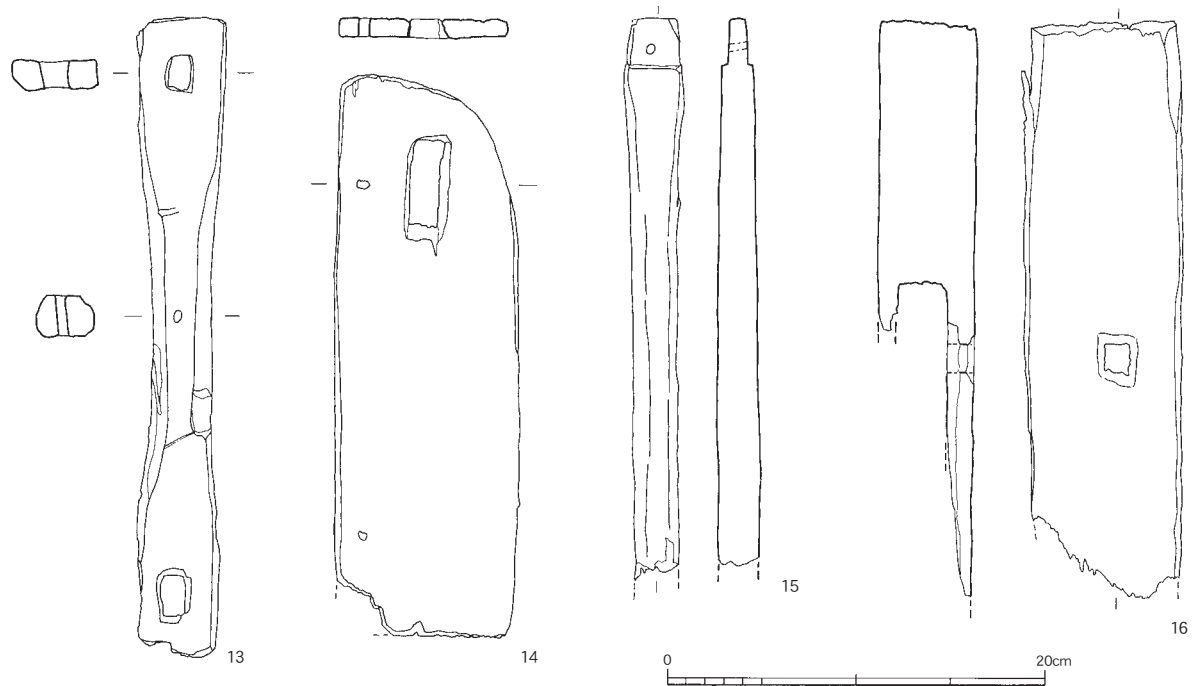
8は不明品。全体が薄く丁寧な作りで、先端が三角形状になり、下半部は欠失する。斎串の類の祭祀具の可能性が高いものか。残存長12.1cm、幅2.6cm、厚さ1.0~1.5mm。9も不明品。やはり薄く、一端は細く尖り、全体の2/3のあたりで幅が広くなり、もう一端は先端部を欠失しているが柄状になるものと思われる。形状からはやはり祭祀具を想像するが、何らかの部材である可能性もある。残存長24.8cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm。10は円盤状木製品であるが、用途は不明。やや歪な円形で、中央部に径5mm程の穿孔がある。径8.6cm、厚さ0.7cm。

11・12は曲物底板。2点とも周縁部に段を設けて、ここに側板をあてたものであろう。12は周縁部の段に沿って側板と結合するための穿孔が3箇所認められ、そのうち1箇所には樺皮が二重に巻いた状態で残存している。約半分を欠失しているが、本来は4箇所結合していたものであろう。11も同様の穿孔が2箇所に認められ、製品はこの部分で割れているが、結束するには側板を当てる段部分から離れすぎている印象を受ける。11は残存部分で径25.2cm、厚さ1.2cm。12は径20.6cm、厚さ1.2cm。

13~15は不明部材。13は中央部に径5~6mmの穿孔があり、これを中心に両端部が対称に近く作られている。端部は扁平で薄くなり、この部分に長方形の柄穴を開ける。長さ34.0cm、幅は最大



第120図 1号溝状遺構出土木製品実測図1 (1/4)



第121図 1号溝状遺構出土木製品実測図2 (1/4)

部分で4.5cm、厚さは中央部で2.2cm、柄部分で1.6cm。14は板材の一端に長方形の柄穴を設け、また長辺に沿って2箇所には穿孔がある。さらに柄側の一角は削って丸味を持たせている。柄と穿孔で他の二つの部材と結合していたものと考えられる。長さ29.7cm、幅9.7cm、厚さ1.0cm。15は棒状の部材であるが、一端部は欠失する。端部は段を設けて柄とし、この中央部付近に径5mm程の穿孔がある。他の部材と柄で結合し、さらに穿孔部分で固定したものであろう。

16は建築部材の先端部分。断面長方形の部材の短辺部分に大きく柄穴を開け、さらにこの部分の側面に小さな柄穴状の方形の孔を開ける。この部分で3本の部材が組み合わさったものか、あるいは2本を組んで側面の孔で固定したものか。残存長30.5cm、幅8.3cm、厚さ5.1cm。

石器

1～9は打製石鏃。全て凹基式である。1は調整が丁寧で、他と比較してやや大形である。材質は1・3は伊万里湾岸系の黒曜石、2はサヌカイト、その他は姫島産黒曜石である。

10～14は石庖丁。半月形が基本であろうが、13は端部が丸く、楕円形に近い形状かもしれない。最も残存状態の良い10で、残存長10.6cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm。石材は、10・11は輝緑凝灰岩、12は砂岩か、13は粘板岩、14は頁岩。

15は打製石斧。刃部が摩耗しているのは、研磨というよりも使用によるものか。緑泥片岩製で長さ11.8cm、幅5.7cm、厚さ1.4cm。

16～19は磨製石斧。16は薄く、全体を研磨するが磨き残した部分が各所にある。蛇紋岩製。17は刃部破片で、緑泥片岩製。18は刃部を欠くが厚みが強く、太型蛤刃石斧であろう。角閃石斑レイ岩または角閃石玢岩。19は扁平片刃石斧でほぼ完形品である。長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ1.5cm、玢岩製。



第122図 1号溝状遺構出土石器・石製品・土製品実測図(1～9は1/2、その他は2/3)

他に石戈が出土しているが(図版51-2)、整理段階で現在のところ所在不明になっている。

石製品

20は滑石製石鍋の鏝部分の破片。鏝は台形で、ここから下位には煤が付着する。

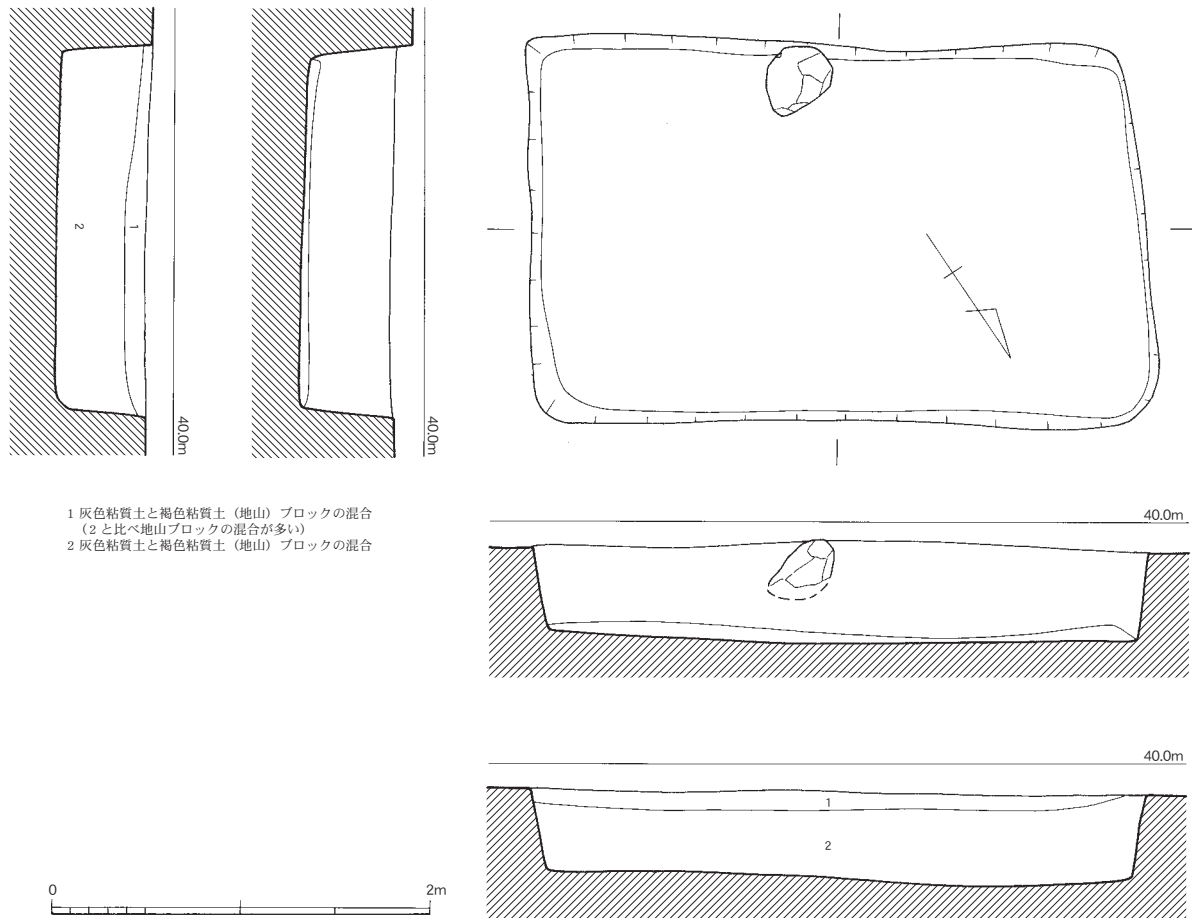
土製品

21～27は端部に孔をもつ棒状土錘で、短く一端にだけ穿孔のあるもの(21～23・25)と、長く両端部に穿孔のあるもの(27)がある。形状は円柱形で、孔は径5mm程度、胎土には細砂粒を含み、焼成は土師質で淡灰褐色を呈する。重量は、完存している21、23、25、27で計測して、順に13.4g、9.3g、14.6g、21.0g。

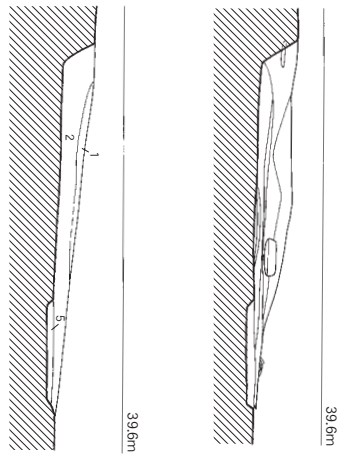
③ 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構(図版51、第123図)

1区の南東寄りで検出した。長軸長3.3m、短軸長2.1m、深さ0.5mの平面長方形で、主軸方位はN-56°-W。遺構の各辺が直線的であり、整然とした形状である。埋土は灰色粘質土と地山ブロックの混合土であり、一応2層に分かれるが差異はほとんどなく、人為的に埋められたものと考えられる。遺構の時期を判別する遺物の出土はない。

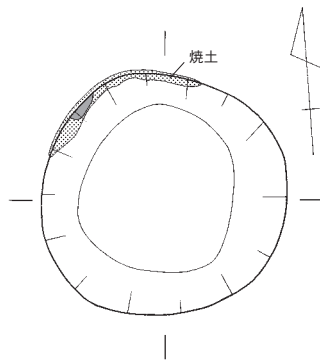
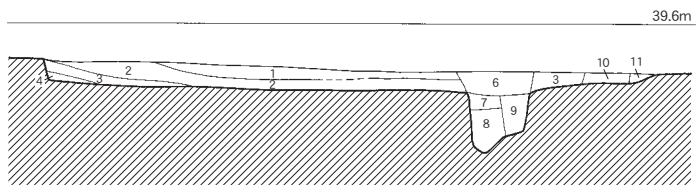
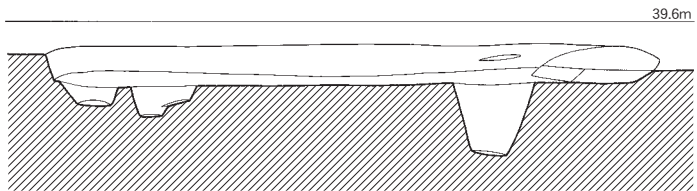
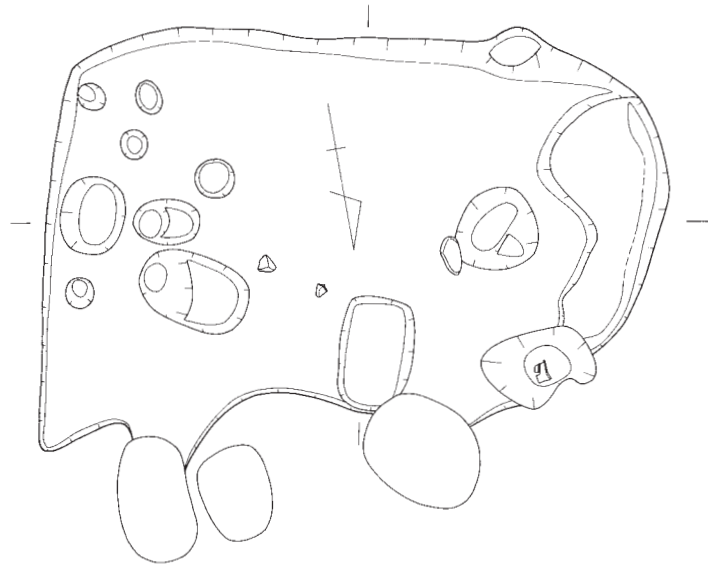


第123図 1号竪穴状遺構実測図(1/40)

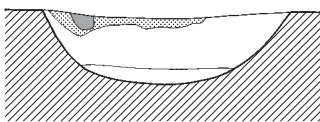


- 1 灰褐色粘質土 炭化物粒をわずかに含む
- 2 暗灰褐色粘質土 炭化物粒をわずかに含む
- 3 2と黄灰色粘土の混合土
- 4 2と茶灰色土(地山)の混合土
- 5 暗灰褐色土 炭化物粒 焼土粒含む
- 6 暗灰褐色粘質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 灰色粘質土 炭化物粒を含む
- 9 灰褐色粘質土
- 10 黄灰色粘土 暗灰褐色土 褐色粘質土(地山)を含む
- 11 暗灰褐色土

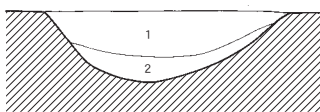
1. 2号竖穴状遺構



39.3m

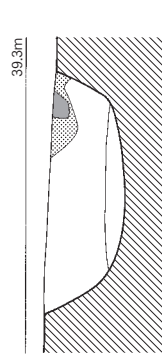


39.3m

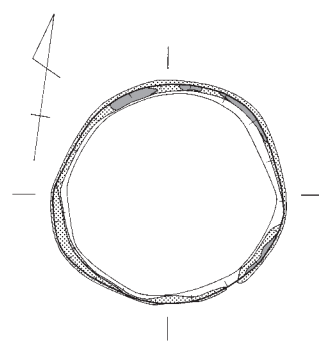


- 1 灰褐色土 焼土粒・炭化物を若干含む
- 2 灰褐色土と炭化物(黒色土)の混合土 焼土粒・炭化物を多く含む

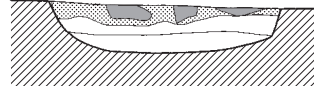
2. 1号土坑



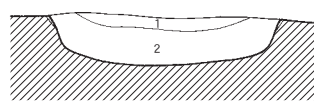
39.5m



39.5m



3. 2号土坑



- 1 暗灰褐色土 焼土粒・炭化物、灰色土粒(環元壁片)を含む
- 2 灰褐色土 焼土片・焼土粒・炭化物粒、灰色土粒(環元壁片)を含む



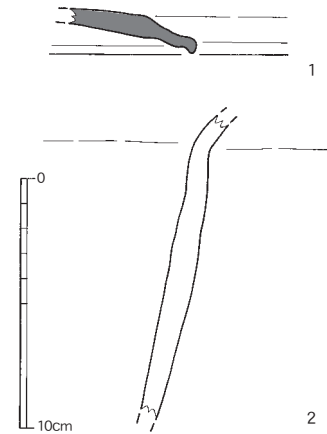
第124図 2号竖穴状遺構、1・2号土坑実測図(1は1/60、他は1/30)

2号竪穴状遺構(図版52、第124図)

5区の南側で検出した。竪穴状住居跡の可能性が高いものと思われるが、遺構の残存状況が悪く、また柱穴と判断できる穴も見当たらない。そのためここでは竪穴状遺構として報告する。遺構の平面形は隅丸長方形に近い形状で長軸長4.9m、短軸長3.0mの規模であるが、不整形を呈する北辺は現状で深さがわずかに1~2cm程度しか残存していないため、本来の形状は北側に広がる可能性が高いものと考えられる。遺構の西壁に沿って1.9m×0.9mの範囲に黄灰色粘土が存在する。カマド等が崩れたものと思われたが、平面的にも、また断ち割った結果でも特定できなかった。

出土遺物(第125図)

1は須恵器坏蓋。口縁端部を下方に折り曲げ、断面三角形を呈する。内外面ともケズリ調整で、周縁部はヨコナデ調整。2は破片であり、体部の傾きに自信が持てないが、土師器鉢であろうか。口縁部は緩く屈曲して開き、体部に比べて薄くなる。内面はナデ調整、外面は風化が激しく不明。



第125図 2号竪穴状遺構出土土器実測図(1/3)

④土坑

今回の調査では多数の土坑状の穴を検出したが、形状が不整形のものがほとんどで、遺物の出土もなく、人為的な遺構は少ないものと考えられる。

1号土坑(図版53、第124図)

5区南東側で、2号土坑と2.5mの間隔を開けて並ぶ。遺構壁面の一部が焼けて変色した、焼土坑である。平面円形で径1.0m、深さは0.3m、壁面は底面との境が不明瞭でなだらかに立ち上がる。土坑の北から北東側壁面の上縁部が熱のため赤変しているが、一部は淡黄色に変色しており、還元状態にあったものと思われる。埋土下位には焼土粒を含む炭化物が堆積していた。遺物の出土はない。

2号土坑(図版53、第124図)

1号土坑の南西側にあり、同じく焼土坑である。平面形は径0.9mの円形で、深さ0.2m。壁面は直線的に急傾斜で立ち上がる。壁面の上半部は全周赤変しており、一部は1号土坑と同様に黄灰色に還元している。出土遺物はない。

(3)小結

今回の調査で検出した主な遺構は、調査区中央の低地部分に大きく横たわる湿地状の溝状遺構と、両側の微高地に位置する掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、土坑2基以上などである。

このうち溝状遺構については、建築部材、木製品を含む大量の木材が集中して出土する部分があり、出土状況から廃棄されたものと判断した。木材と共伴して出土した遺物は、一部は縄文時代の

石器から中世にまで至るが、ある程度の纏まりを持って出土した遺物の中心は、弥生時代中期後半から末頃と、古墳時代後期の6世紀末～7世紀初頭頃の二時期である。須恵器等古墳時代遺物が、木材が集中する暗灰褐色粘質土中から相当量出土していること、逆に弥生土器はより下層の砂層からも出土することなどから、出土土器の量的にも最も多い6世紀末～7世紀初頭頃の時期が、木材廃棄の中心的な時期と考えたい。これは木製品のうち概ね古墳時代から出現すると考えられている曲物の出土などとも矛盾しない。

さて、この時期の他の遺構としては、溝状遺構の西側に近接する1号掘立柱建物跡が、出土土器が少量でいずれも小片であり時期の判断に悩むところであるが、大きくは外れていないように思われる。さらに10m離れて立地する1号竪穴状遺構も、方位が建物跡と概ね揃っており、あるいは関連するのかもしれない。しかしながら、これらの遺構は密度も低く、また出土遺物も極端に少ない。これから人々の活動を復元するには、あまりにも情報が少なく、困難と言わざるを得ない。

いずれにしても、この地域から古墳時代木製品がある程度のまとまりを持って出土したのは初めてのことである。そういう意味では、今回の調査は一定の成果を出し得たものとする。

1. 安雲山田遺跡全景
(北西上空から)



2. 1～3区全景
(上空から)



3. 3区全景
(上空から)





1. 4区全景
(上空から)



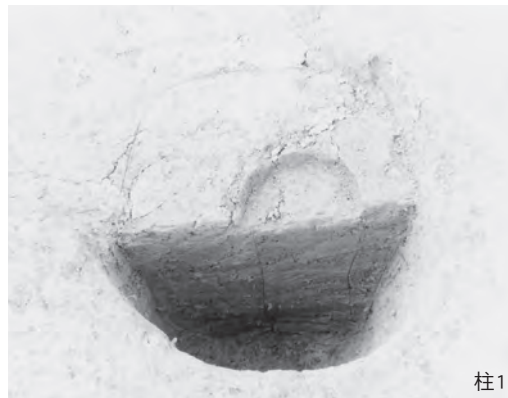
2. 3～5区全景
(上空から)



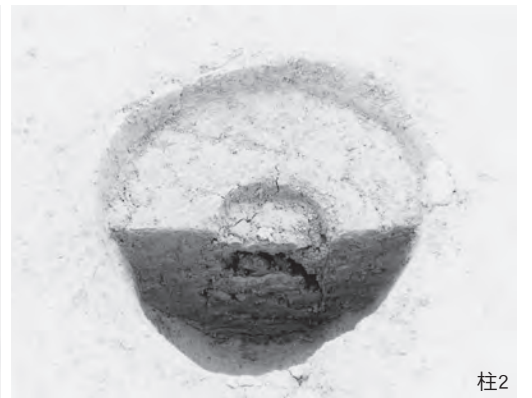
3. 安雲山田遺跡全景
(南東上空から)



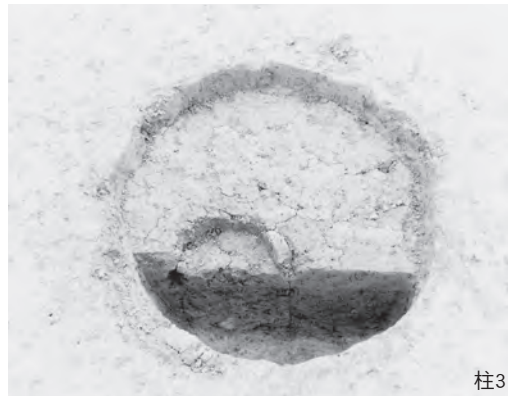
1. 1号掘立柱建物跡
(北東から)



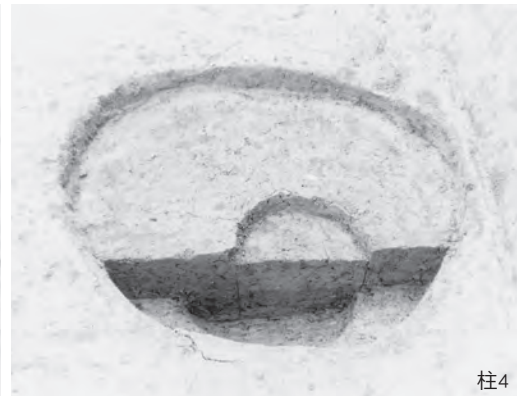
柱1



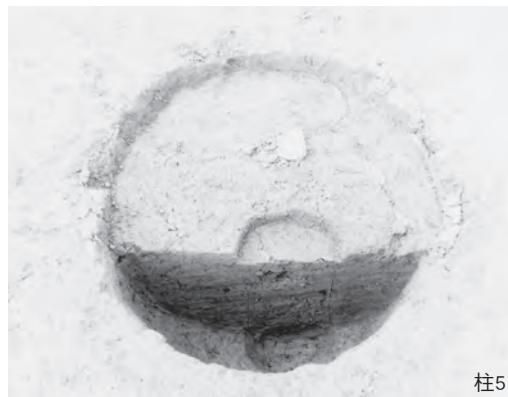
柱2



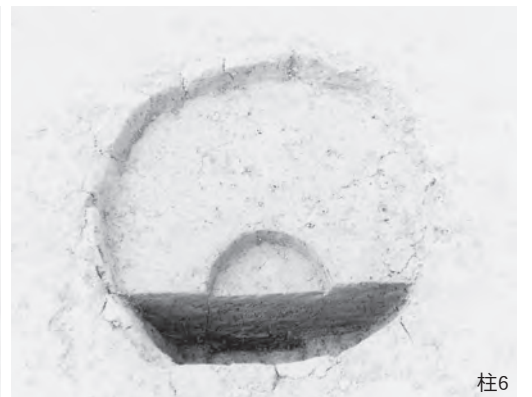
柱3



柱4



柱5

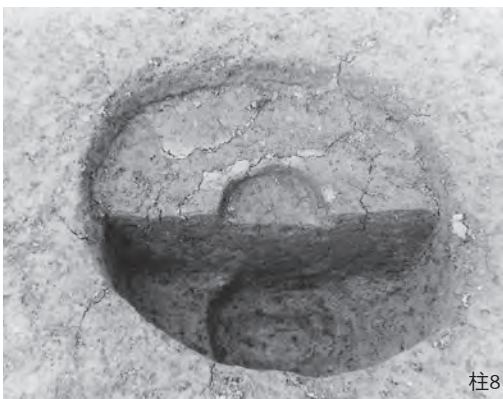


柱6

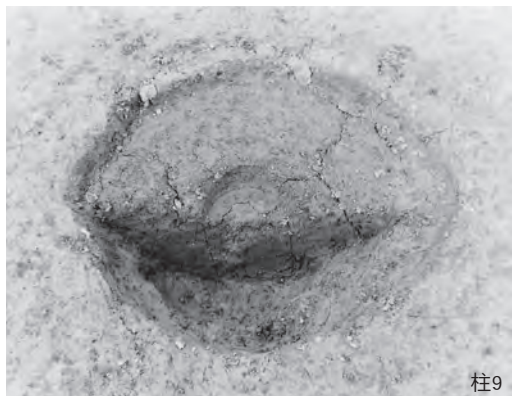
2～7. 同柱掘形断面
土層



柱7



柱8



柱9



柱10

1～4. 1号掘立柱建物跡柱掘形断面土層



5. 3区1号溝状遺構
(南東から)



6. 同断面土層
(南東から)



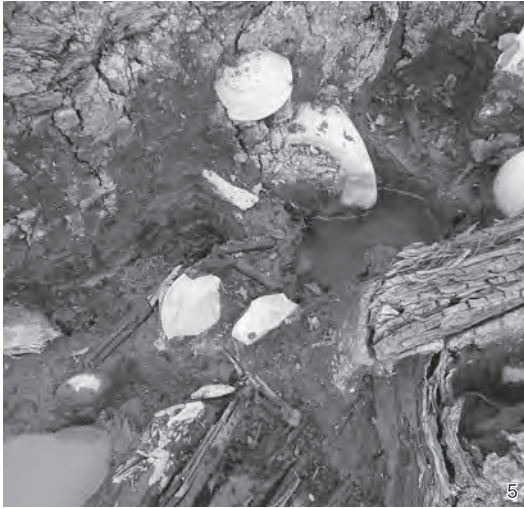
1. 1号溝状遺構木材
出土状況(西から)



2. 同4区断面土層
(南東から)

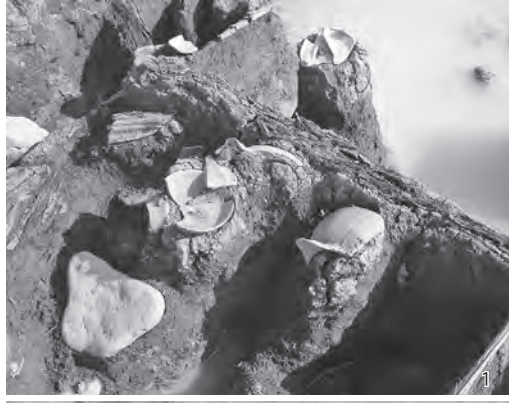


3～6. 同遺物出土
状況



1~8. 1号溝状遺構
遺物出土狀況

1・2. 1号溝状遺構
遺物出土状況



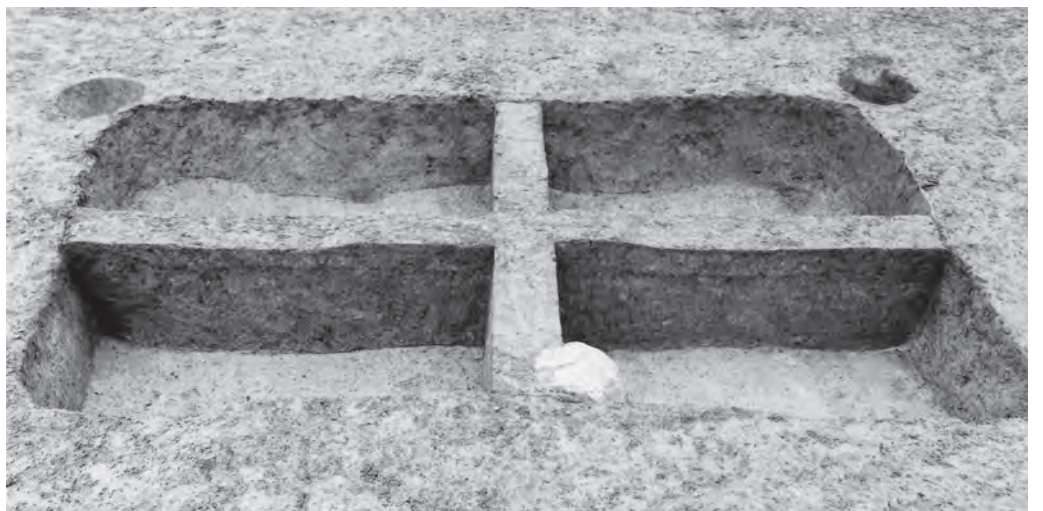
3. 1号竪穴状遺構
(南西から)



4. 同断面土層
(北西から)



5. 同断面土層
(南西から)





1. 2号竪穴状遺構
(東から)



2. 同断面土層
(北西から)

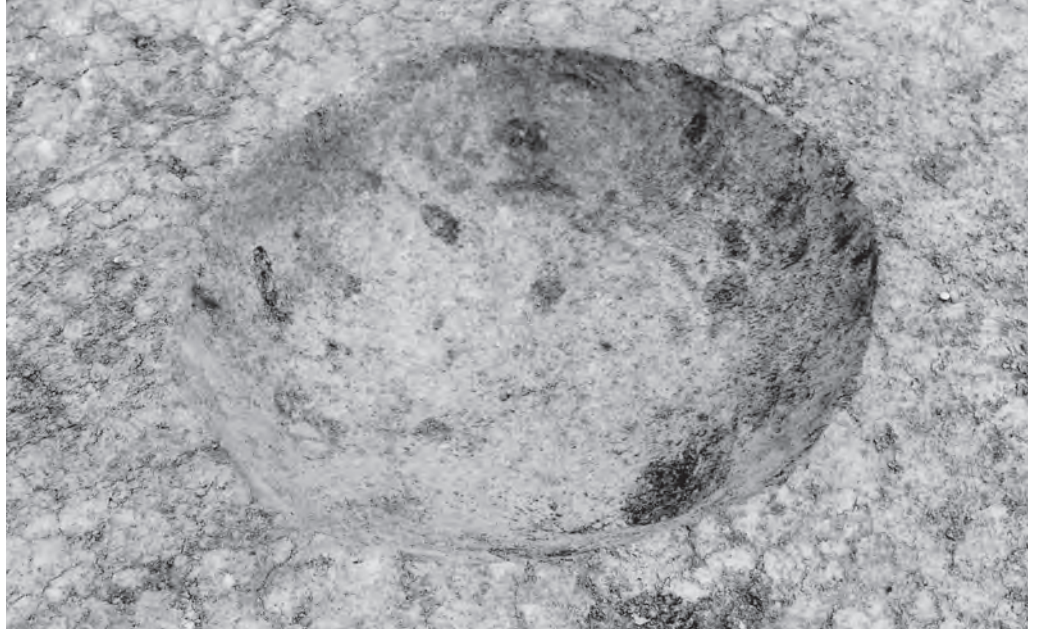


3. 同断面土層
(西から)

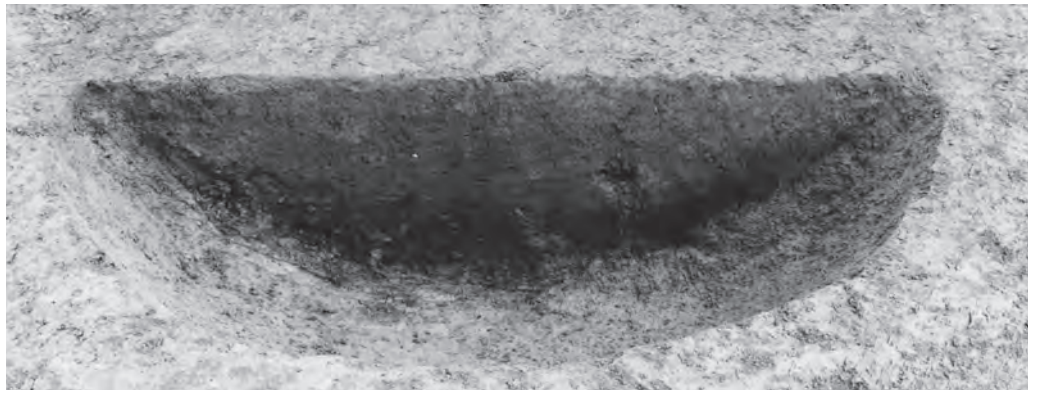


4. 同断面土層
(北から)

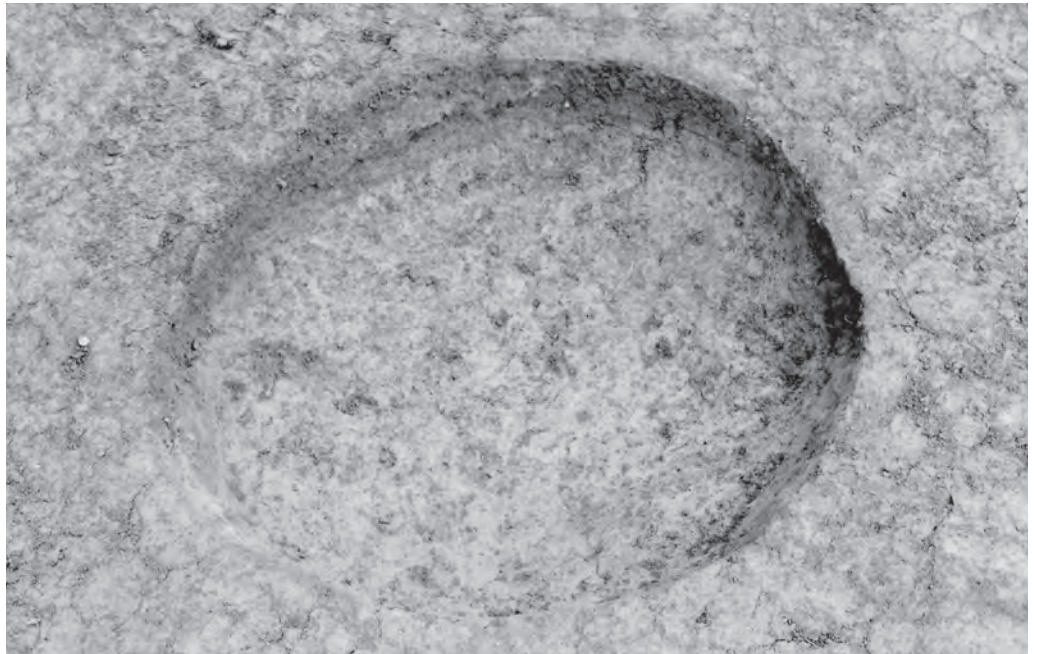
1. 1号土坑(南から)



2. 同断面土層
(南から)

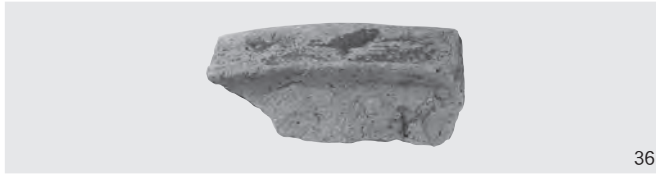
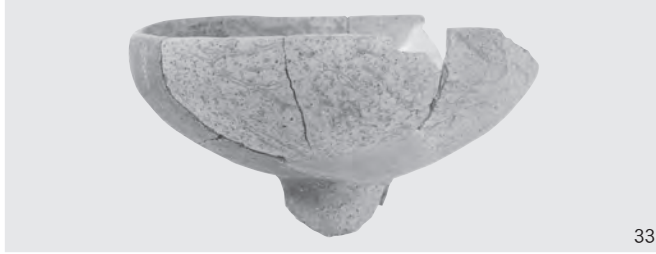
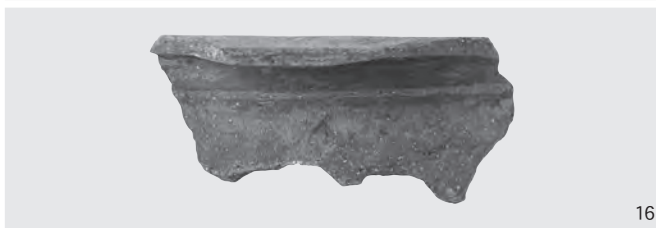
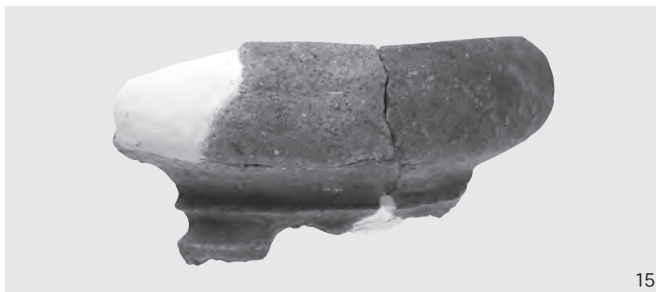
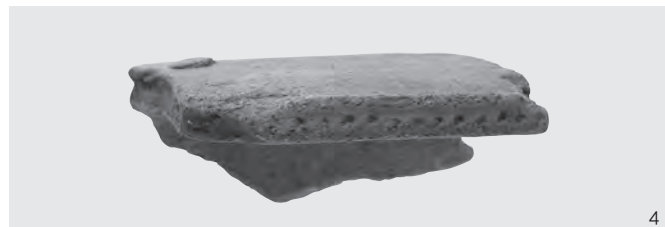


3. 2号土坑(南から)



4. 同断面土層
(南から)







46



47



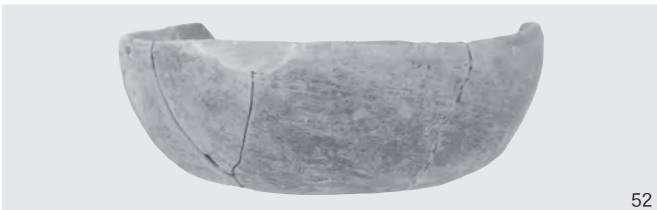
48



49



50



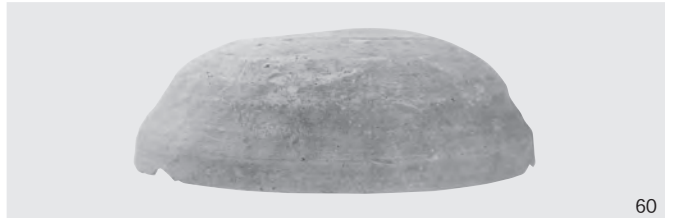
52



55



59



60



62



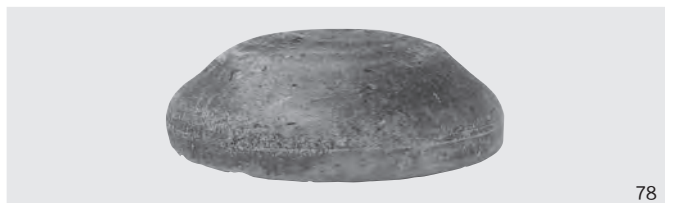
65



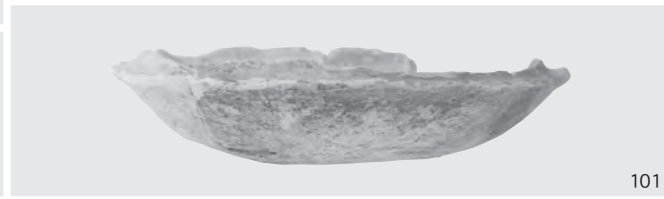
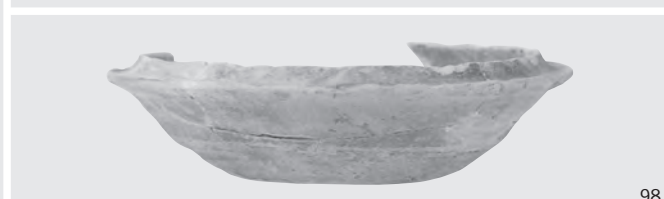
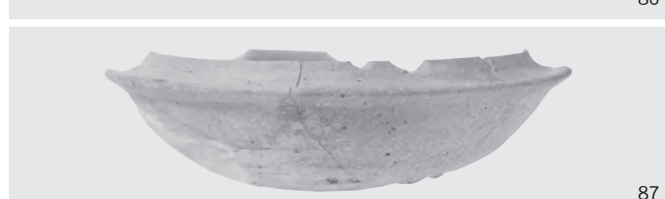
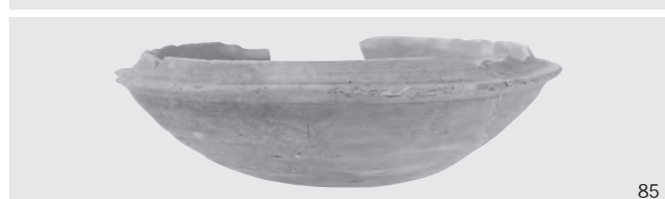
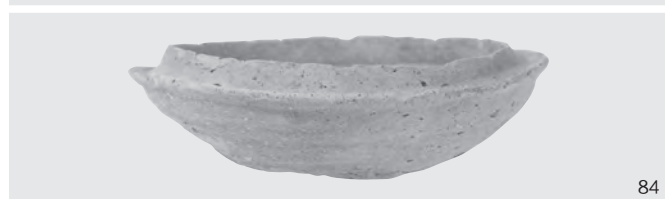
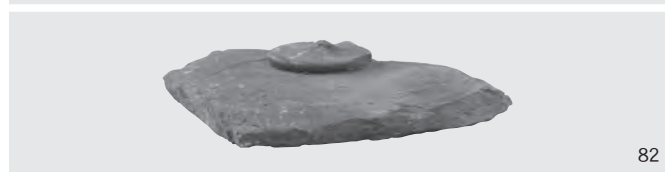
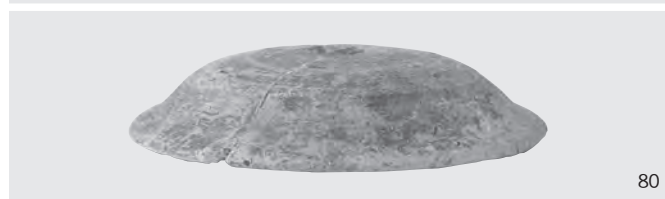
67



74



78





111



121



112



122



113



125



116



126



117



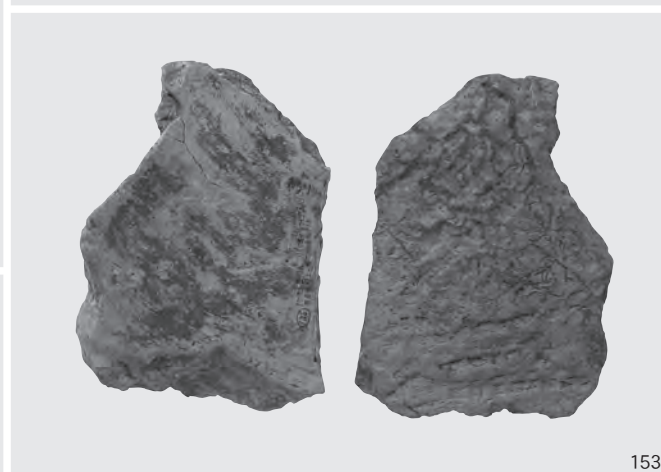
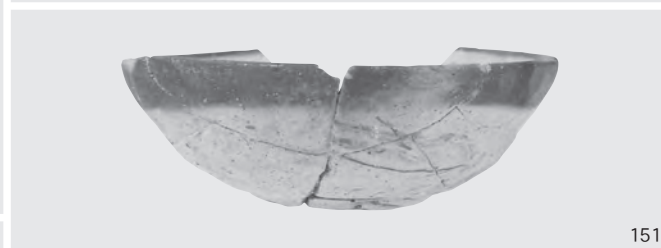
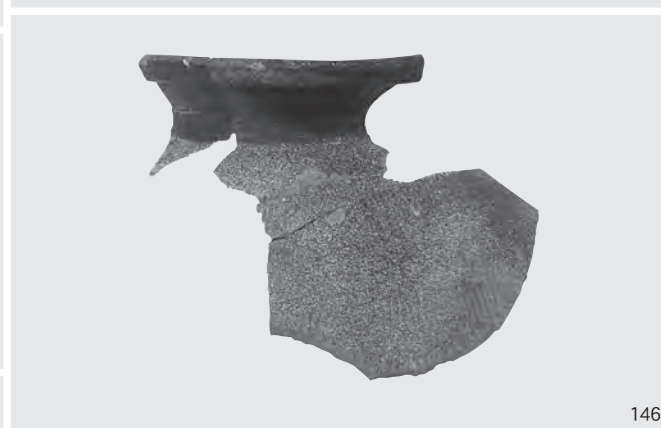
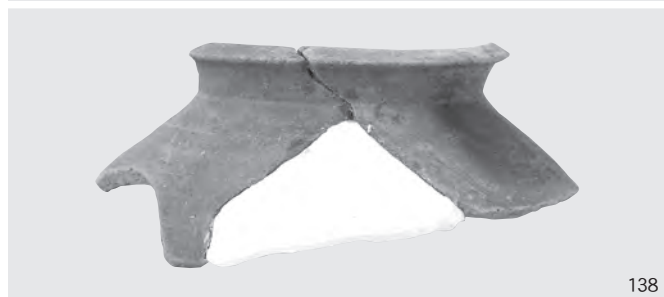
130



118

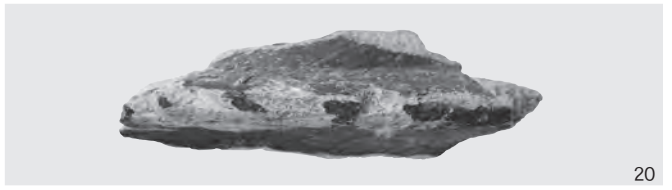
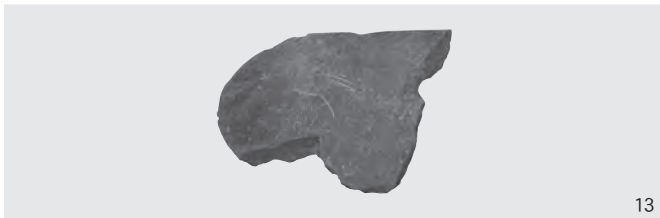
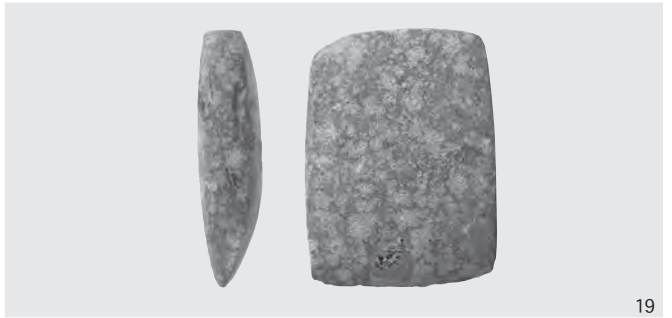
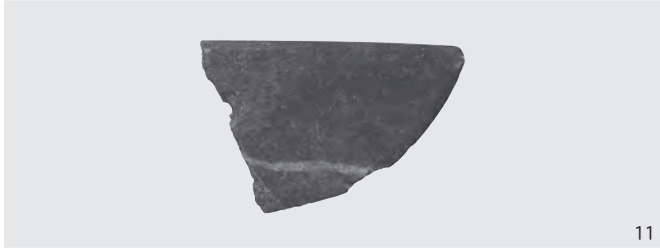
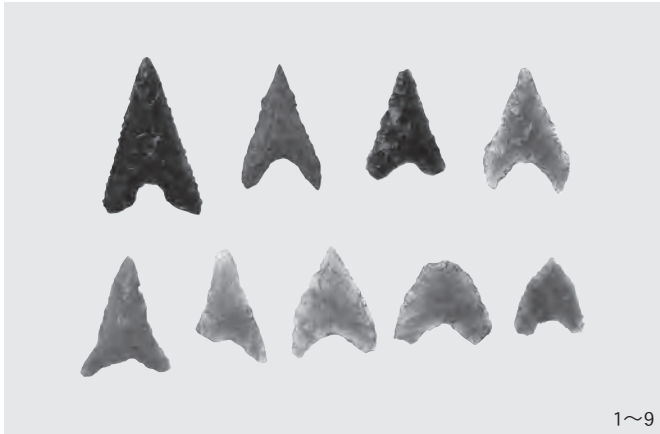


131





出土木製品



報告書抄録

ふりがな	はかのもといせきに・さんじちょうさ あくもやまだいせきいちてん
書名	ハカノ本遺跡2・3次調査 安雲山田遺跡1地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第7集
編著者名	秦 憲二(編) 小川泰樹 宮田 剛
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836-0106 福岡県小郡市三沢5208-3
発行年月日	平成25(2013)年3月31日

所収遺跡名	ふりがな所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
はかのもといせき ハカノ本遺跡 2次調査	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 こうげまちおおあざおがた 上毛町大字緒方		40646	970125	33° 34' 35"	131° 8' 30"	2008.12.15 ~2009.3.31 2009.4.11 ~2009.9.30	7,200m ²	東九州自動車建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
ハカノ本遺跡 2次調査	集落	奈良 平安 鎌倉	掘立柱建物跡 52 柵 31 井戸 5 土坑 41 溝状遺構 10		弥生土器 土師器 須恵器	木製品 石製品 金属製品 ガラス製品 獣骨	絵馬 形代		

遺跡の概要

本遺跡は奈良時代から鎌倉時代の神社遺跡と考えられ、多くの規模の大きい掘立柱建物跡が検出されている。また、鎌倉時代には東北端に下尻高遺跡につながる居館に伴う堀も発見された。

所収遺跡名	ふりがな所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
はかのもといせき ハカノ本遺跡 3次調査	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 こうげまちおおあざおがた 上毛町大字緒方		40646	970125	33° 34' 35"	131° 8' 31"	2011.5.10 ~2011.5.19	57m ²	東九州自動車建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
ハカノ本遺跡 3次調査	集落		ピット						

遺跡の概要

本遺跡は2次調査の続きと考えられる柱六が検出されたが、後世の削平が激しく詳細は不明である。

所収遺跡名	ふりがな所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
あくもやまだいせき 安雲山田遺跡 1地点	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 こうげまちおおあざあくも 上毛町大字安雲		40646		33° 34' 28"	130° 8' 22"	2008.8.22 ~2009.3.31 2009.4.13 ~2009.9.15	5,100m ²	東九州自動車建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
安雲山田遺跡 1地点	集落	弥生 飛鳥	竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 1 土坑 10 溝状遺構 1		弥生土器 土師器 須恵器 瓦	木製品 石器 石製品 土錘			

遺跡の概要

本遺跡は飛鳥時代の集落遺跡の端部で、調査区の半分は谷部にあたる。谷部の上層は6世紀末から7世紀初頭で、下層は弥生中期である。どちらの層からも自然木が大量に出土したが、一部には加工した建築材や木製品もあった。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 6

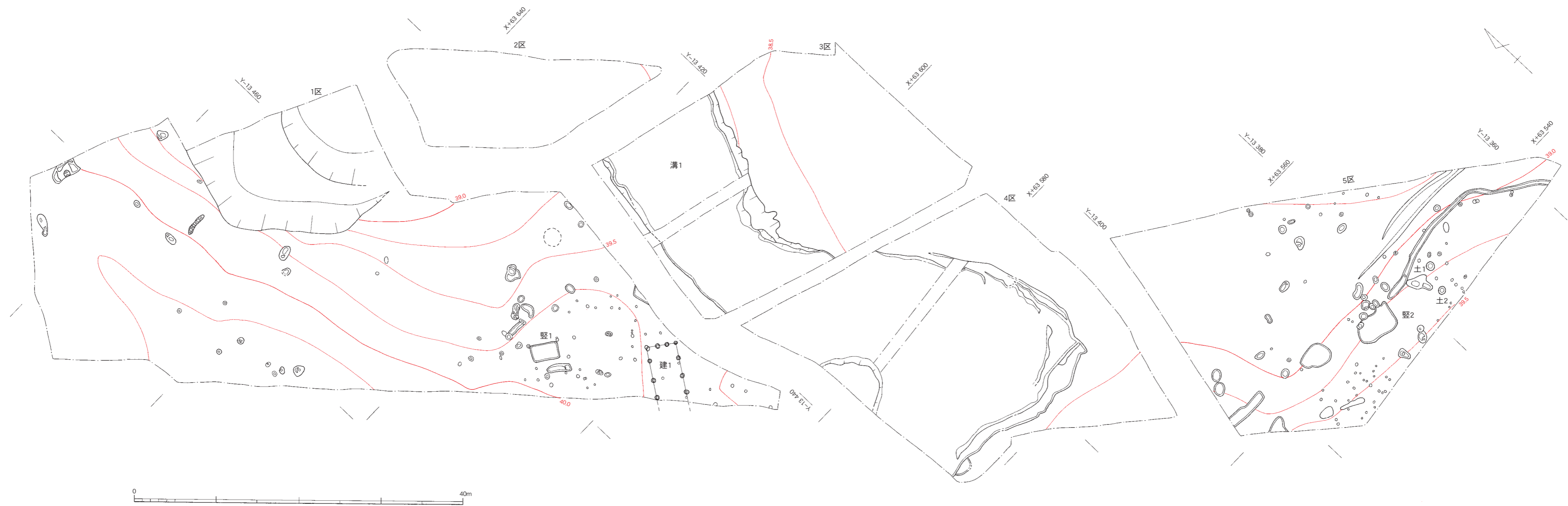
東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第7集

ハカノ本遺跡2・3次調査 安雲山田遺跡1地点

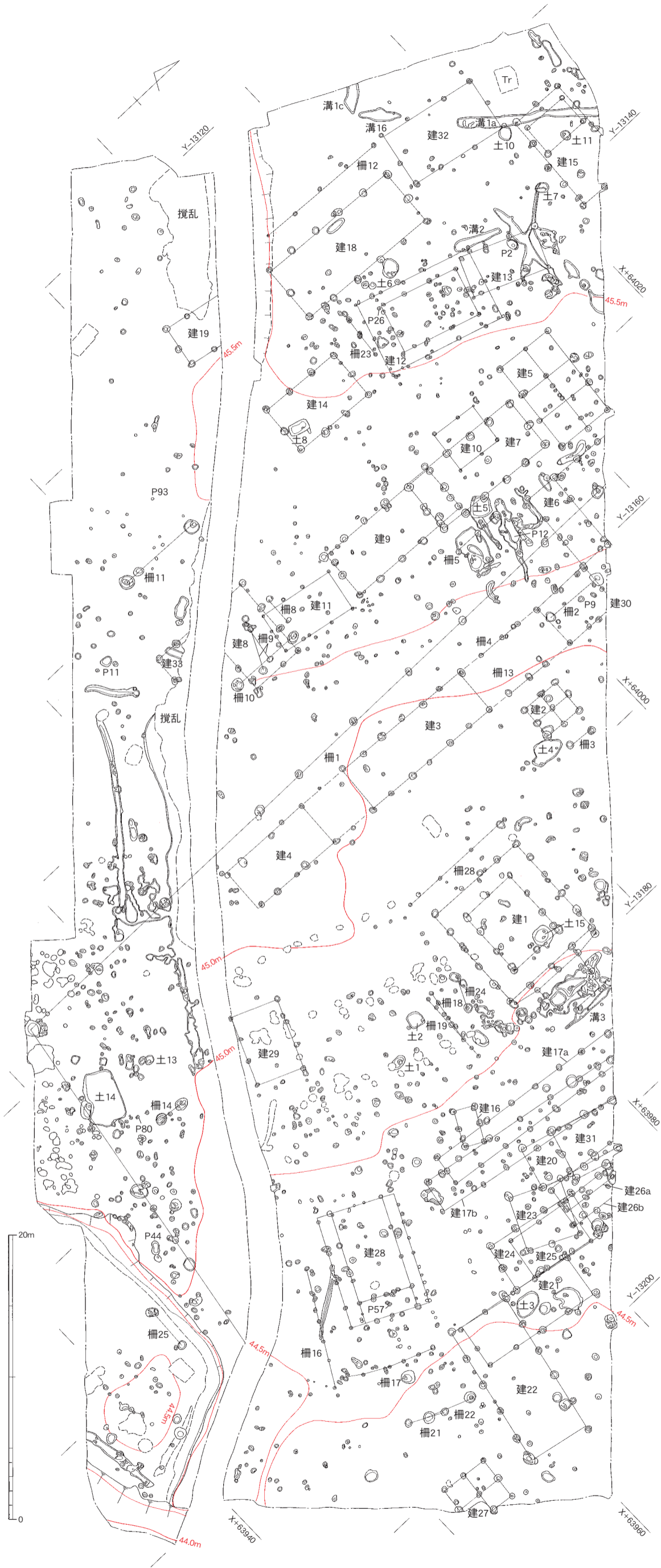
平成25年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

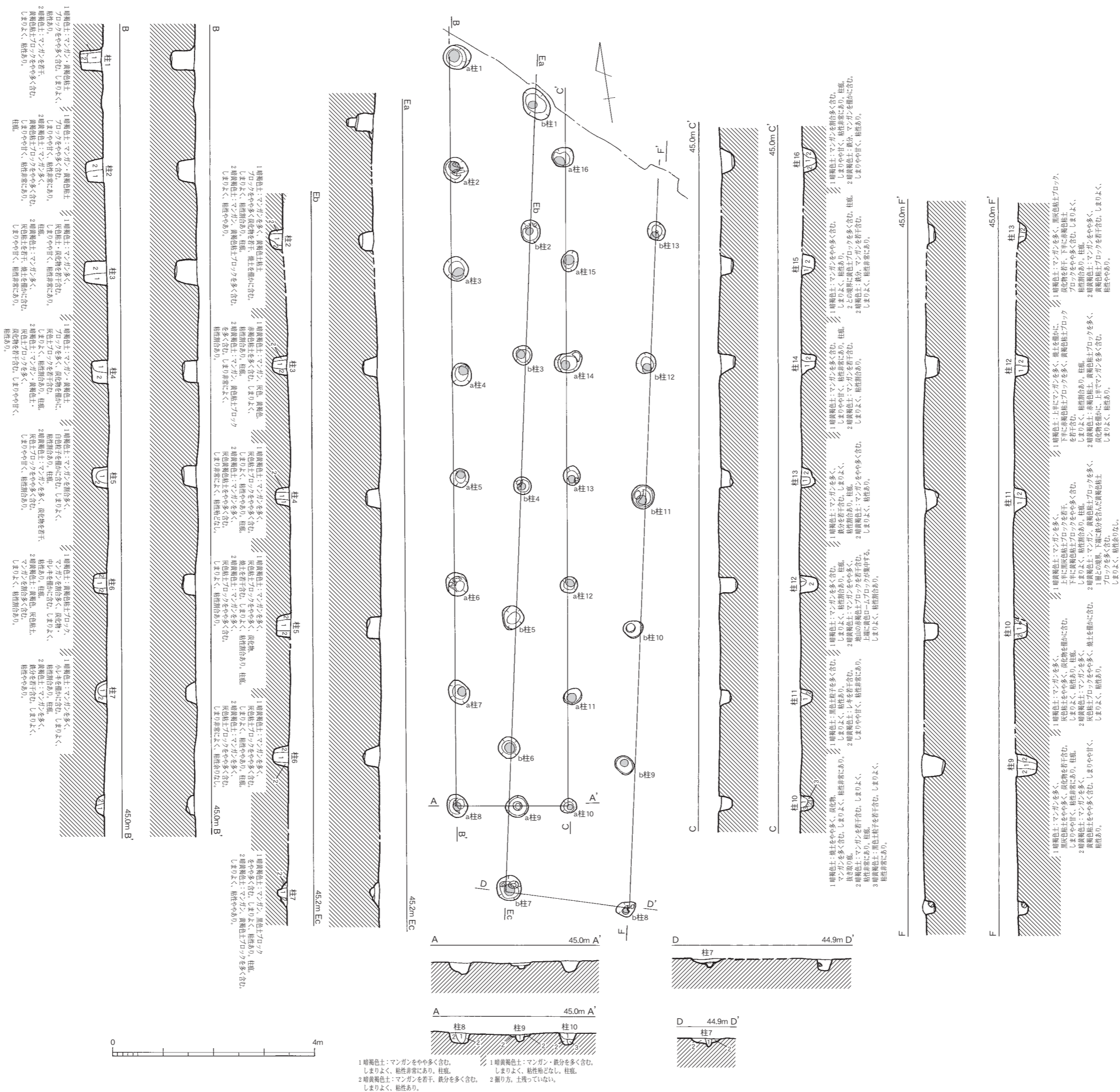
印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2-13-29



第107図 安雲山田遺跡遺構配置図(1/400)



第53图 2区遺構配置図(1/300)



第69図 2区17a・b号掘立柱建物跡実測図(1/80)